

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 640 集

まぎと まぎと
間木戸Ⅱ遺跡・間木戸Ⅴ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

2015

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
(公財)岩手県文化振興事業団

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 640 集

間木戸Ⅱ遺跡・間木戸Ⅴ遺跡発掘調査報告書

2015

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
(公財)岩手県文化振興事業団

間木戸Ⅱ遺跡・間木戸Ⅴ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、この地に住み生きてきた人々の痕跡であり、県民のみならず、国民的な遺産であることから、将来にわたって保存され、広く理解と活用がなされることが望まれます。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団は、埋蔵文化財センター設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その記録を残し保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、三陸沿岸道路建設事業に関連して平成25年度に発掘調査された山田町間木戸Ⅱ遺跡・間木戸Ⅴ遺跡の調査成果をまとめたものです。間木戸Ⅱ遺跡では、縄文時代前期から中期の竪穴建物跡が密集して見つかったことや、多量に出土した同時期の遺物から当時の集落の一端が判明いたしました。また、7世紀末から8世紀初頭の竪穴建物跡からは、まとまった資料が出土しており該期資料を比較検討するうえで欠くことのできない一括資料を提示することができました。そして、間木戸Ⅴ遺跡では、製鉄関連遺構が見つかり、本県沿岸部の製鉄史に関連する調査成果が得られました。

調査によって見つかった地域の宝は、東日本大震災で被災された山田町の皆さんによって発掘されたものです。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究など未来に希望を感じる拠り所として役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、調査を委託された国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、ご助言を賜りました山田町教育委員会、ならびに調査にご協力いただいた山田地区の方々をはじめとする関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成27年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 菅野洋樹

例 言

- 1 本書は岩手県下閉伊郡山田町に所在する間木戸Ⅱ遺跡および間木戸Ⅴ遺跡の発掘調査を記録した報告書である。
- 2 本遺跡の発掘調査は、三陸沿岸道路建設事業に伴い、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。本調査は、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の協議を経て、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所の委託を受けた公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが行った。
- 3 岩手県遺跡台帳における各遺跡の遺跡コード・調査略号は以下のとおりである。
【間木戸Ⅱ遺跡】 LG94-0007・MGDⅡ-13
【間木戸Ⅴ遺跡】 LG84-2098・MGDⅤ-13
- 4 各遺跡の野外調査実施期間・調査面積・室内整理期間、各担当者は以下のとおりである。
【間木戸Ⅱ遺跡】
〔野外調査〕平成25年4月9日～同7月31日／1,510㎡／佐藤あゆみ・佐藤剛・北村忠昭・阿部勝則
〔室内整理〕平成25年6月17日～12月13日／金子昭彦 平成25年12月16日～平成26年3月28日／佐藤あゆみ・佐藤剛・金子昭彦・阿部勝則
【間木戸Ⅴ遺跡】
〔野外調査〕平成25年4月9日～同6月30日／1,200㎡／北村忠昭・佐藤あゆみ・佐藤剛
〔室内整理〕平成25年12月16日～平成26年3月28日／佐藤あゆみ・佐藤剛・北村忠昭
- 5 本文の執筆は、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所…Ⅰ「調査に至る経過」、金子昭彦…縄文～弥生土器、佐藤剛…土師器・須恵器、佐藤あゆみ…その他遺物・間木戸Ⅱ遺跡、北村忠昭…間木戸Ⅴ遺跡といったように主分担した。文責は文末に（ ）で示している。
- 6 本書中の平面座標値には、平面直角座標第Ⅹ系（世界測地系）を用いた。
- 7 基準点測量は平成25年4月に実施し、これを元に設定した区画杭を調査時に使用した。
- 8 基準点測量業務は釜石測量設計株式会社に委託した。
- 9 空中写真撮影は、東邦航空株式会社に委託した。
- 10 石器図化業務の一部（剥片石器実測図作成）は株式会社ラングに委託した。
- 11 各種試料の分析・鑑定等は下記の機関・個人に委託した。
花崗岩研究会（石質鑑定）、株式会社加速器分析研究所（放射性炭素年代測定）、株式会社パリノ・サーヴェイ（黒曜石産地同定）、JFEテクノロジー株式会社（鉄滓等分析）、斉藤慶史氏（動物遺存体同定）。
- 12 野外調査では下記の機関・個人の協力を得た。（敬称略）
岩手県教育委員会生涯学習文化課、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、山田町教育委員会生涯学習課、宮古市教育委員会、釜石市教育委員会、公益財団法人北海道埋蔵文化財センター、斉藤慶史（青森県教育庁文化財保護課）。
- 13 これまでに、調査成果の一部を現地説明会資料、発掘調査概報などで公表しているが、本書と記載事項が異なる場合はすべて本書が優先する。
- 14 調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の立地と環境	1
	1 遺跡の位置とその環境	1
	2 遺跡周辺の地形	2
	3 周辺の遺跡	4
III	野外調査と室内整理	7
	1 野外調査	7
	(1) グリッド設定	7
	(2) 試掘・表土除去	7
	(3) 遺構検出・精査	7
	(4) 実 測	8
	(5) 写 真 撮 影	8
	2 室内調査	9
	(1) 作業手順	9
	(2) 遺 構	9
	(3) 遺 物	9
	3 凡 例	9
	(1) 遺 構	9
	(2) 遺 物	10
	(3) 凡 例 図	10
IV	間木戸Ⅱ遺跡の調査	11
	1 概 要	11
	(1) 遺構数・遺物数	11
	(2) 遺 構 名 称	11
	(3) 層 序	11
	2 遺 構	15
	(1) 竪穴建物跡	15
	(2) 土 坑	57
	(3) 焼土・炉跡	60
	(4) 集石遺構	65
	(5) 柱 穴	70
	(6) 沢 跡	70

3 遺 物	73
(1) 縄文～弥生土器	73
(2) 土師器・須恵器	138
(3) 土 製 品	140
(4) 石器・石製品	140
(5) 鉄 製 品	160
(6) 鉄 滓 類	160
(7) 錢 貨	160
(8) 動物遺存体	160
V 間木戸V遺跡の調査	175
1 概 要	175
(1) 遺構数・遺物数	175
(2) 遺 構 名 称	175
(3) 層 序	175
2 遺 構	177
(1) 竪穴建物跡	177
(2) 土 坑	179
(3) 焼土遺構	183
(4) 埋設土器	183
(5) 工房跡	183
(6) 炭置き場跡	190
(7) 廃滓場	191
(8) 不明遺構	194
(9) 柱 穴	194
(10) 包含層	194
3 遺 物	197
(1) 縄文～弥生土器	197
(2) 土師器・須恵器	197
(3) 土 製 品	198
(4) 石 器	198
(5) 鉄 製 品	204
(6) 羽 口	204
(7) 炉 壁	204
(8) 鉄 滓 類	205

VI 分析・鑑定	218
1 間木戸V遺跡、間木戸II遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）	218
2 間木戸II・V遺跡出土黒曜石の産地同定	224
3 間木戸II・V遺跡出土鉄滓類の成分分析	229
4 間木戸II遺跡出土動物遺存体の同定	301
VII 総括	304
1 縄文時代	304
2 古代	306
（1）土師器	306
（2）鉄製品	307
（3）竪穴建物跡について（26号竪穴建物跡を中心に）	310
（4）製鉄関連遺構群について	312
3 近隣遺跡の中における間木戸II・V遺跡	314
報告書抄録	433

表目次

第1表 周辺遺跡一覧	6	第12表 新旧遺構名対応表	176
間木戸II遺跡		第13表 縄文～弥生土器観察表	199
第2表 新旧遺構名対応表	14	第14表 鉄滓出土量一覧(1)(2)	210
第3表 縄文～弥生土器観察表	74	第15表 土師器観察表	214
第4表 竪穴建物跡別縄文土器出土一覧表	162	第16表 土製品観察表	216
第5表 土師器・須恵器観察表	162	第17表 石器観察表	216
第6表 土製品観察表	163	第18表 鉄製品観察表	217
第7表 石器観察表	163	第19表 羽口観察表	217
第8表 石製品観察表	172	第20表 炉壁観察表	217
表9表 鉄製品観察表	172	総括	
第10表 銭貨観察表	172	第21表 縄文時代竪穴建物跡一覧表	305
第11表 鉄滓出土一覧表	173	第22表 古代の製鉄関連遺構検出遺跡一覧表	313
間木戸V遺跡			

図版目次

第1図 遺跡位置図・調査区と周辺の地形	2	間木戸II遺跡	
第2図 地形区分図	3	第6図 間木戸II遺跡調査区全体図・基本層序	12
第3図 周辺の遺跡	5	第7図 遺構配置図・北	13
第4図 グリッド配置図	8	第8図 遺構配置図・中央	13
第5図 凡例	10	第9図 遺構配置図・南	14

第10図	1号竪穴建物跡	15	第48図	7～9号焼土遺構	68
第11図	2号竪穴建物跡	16	第49図	11号焼土遺構、1号集石遺構	69
第12図	3号竪穴建物跡(1)	17	第50図	柱穴	71
第13図	3号竪穴建物跡(2)	18	第51図	沢跡	72
第14図	4号竪穴建物跡(1)	21	第52図～116図	縄文～弥生土器(1)～(65)	74
第15図	4号竪穴建物跡(2)	22	第117図～120図	土師器・須恵器(1)～(4)	141
第16図	5号竪穴建物跡	23	第121図	土師器・須恵器(5)・土製品	145
第17図	6号竪穴建物跡	24	第122図～132図	石器(1)～(11)	149
第18図	7号竪穴建物跡	25	第133図	石製品・鉄製品・銭貨	161
第19図	8号竪穴建物跡	27			
第20図	9号竪穴建物跡	28			
第21図	10号竪穴建物跡	30	間木戸V遺跡		
第22図	11号竪穴建物跡(1)	31	第134図	間木戸V遺跡調査区全体図・基本層序	176
第23図	11号竪穴建物跡(2)	33	第135図	1・2号竪穴建物跡	178
第24図	12号竪穴建物跡	34	第136図	3号竪穴建物跡(1)	180
第25図	13号竪穴建物跡・14号竪穴建物跡(1)	35	第137図	3号竪穴建物跡(2)	181
第26図	14号竪穴建物跡(2)	37	第138図	1～4号土坑	184
第27図	15号竪穴建物跡	38	第139図	5号土坑、1～3号焼土遺構	185
第28図	16号竪穴建物跡	39	第140図	4号焼土遺構、1号埋設土器	186
第29図	17号竪穴建物跡	41	第141図	1号工房跡(1)	188
第30図	18号竪穴建物跡	42	第142図	1号工房跡(2)	189
第31図	19号竪穴建物跡・20号竪穴建物跡	43	第143図	2号工房跡	192
第32図	21号竪穴建物跡	45	第144図	1号不明遺構(1)	193
第33図	22号竪穴建物跡・23号竪穴建物跡	46	第145図	1号不明遺構(2)、柱穴	193
第34図	24号竪穴建物跡	47	第146図	1・2号炭置き場跡	195
第35図	25号竪穴建物跡	48	第147図	廃滓場・包含層	196
第36図	26号竪穴建物跡(1)	50	第148図	縄文～弥生土器(1)	199
第37図	26号竪穴建物跡(2)	51	第149図	縄文～弥生土器(2)	200
第38図	27号竪穴建物跡	52	第150図	土師器(1)	201
第39図	28号竪穴建物跡	53	第151図	土師器(2)	202
第40図	29号竪穴建物跡	55	第152図	土師器(3)	203
第41図	30号竪穴建物跡(1)	56	第153図	石器	206
第42図	30号竪穴建物跡(2)	57	第154図	土製品、鉄製品、羽口、炉壁	207
第43図	1～7号土坑	62	総括		
第44図	8～10・12・13号土坑	63	第155図	土師器	308
第45図	11号土坑	64	第156図	沢田II遺跡出土錫杖鉄製品	309
第46図	1～4号焼土遺構	66	第157図	鉄鍬基礎分類図	310
第47図	5・6・10号焼土遺構	67	第158図	26号竪穴建物跡出土遺物一覧	311
			第159図	遺構の分布範囲	316

写真図版目次

間木戸Ⅱ遺跡（遺構）

写真図版1	航空写真	319
写真図版2	調査区全景・基本層序	320
写真図版3	1号竪穴建物跡・28号竪穴建物跡	321
写真図版4	2号竪穴建物跡	322
写真図版5	3号竪穴建物跡（1）	323
写真図版6	3号竪穴建物跡（2）	324
写真図版7	4号竪穴建物跡（1）	325
写真図版8	4号竪穴建物跡（2）	326
写真図版9	5号竪穴建物跡	327
写真図版10	6号竪穴建物跡	328
写真図版11	7号竪穴建物跡	329
写真図版12	8号竪穴建物跡	330
写真図版13	9号竪穴建物跡	331
写真図版14	10号竪穴建物跡	332
写真図版15	11号竪穴建物跡	333
写真図版16	12号竪穴建物跡	334
写真図版17	13号竪穴建物跡	335
写真図版18	14号竪穴建物跡	336
写真図版19	15号竪穴建物跡	337
写真図版20	16号竪穴建物跡	338
写真図版21	17号竪穴建物跡	339
写真図版22	18号竪穴建物跡	340
写真図版23	19号竪穴建物跡	341
写真図版24	20号竪穴建物跡	342
写真図版25	21号竪穴建物跡	343
写真図版26	22号竪穴建物跡	344
写真図版27	23号竪穴建物跡	345
写真図版28	24号竪穴建物跡	346
写真図版29	25号竪穴建物跡	347
写真図版30	26号竪穴建物跡（1）	348
写真図版31	26号竪穴建物跡（2）	349
写真図版32	27号竪穴建物跡	350
写真図版33	29号竪穴建物跡	351
写真図版34	30号竪穴建物跡	352
写真図版35	1号～4号土坑	353
写真図版36	5号～8号土坑	354
写真図版37	9号～12号土坑	355

写真図版38	1号～4号焼土遺構	356
写真図版39	5号～7号b焼土遺構	357
写真図版40	7号c～9号焼土遺構	358
写真図版41	10号・11号焼土遺構	359
写真図版42	1号集石遺構、沢跡	360

間木戸Ⅴ遺跡（遺構）

写真図版43	調査区全景・基本層序	361
写真図版44	1号竪穴建物跡	362
写真図版45	2号竪穴建物跡、1号焼土遺構	363
写真図版46	3号竪穴建物跡（1）	364
写真図版47	3号竪穴建物跡（2）、 1号・2号土坑	365
写真図版48	3号～5号土坑、2号焼土遺構	366
写真図版49	3号・4号焼土遺構、1号埋設土器、 1号廃滓場、包含層	367
写真図版50	1号工房跡（1）	368
写真図版51	1号工房跡（2）	369
写真図版52	2号工房跡（1）	370
写真図版53	2号工房跡（2）、1号炭置き場跡	371
写真図版54	2号炭置き場跡、1号不明遺構	372

間木戸Ⅱ遺跡（遺物）

写真図版55～95	縄文～弥生土器（1）～（41）	373
写真図版96	縄文～弥生土器（42）、 土師器・須恵器（1）	414
写真図版97～100	土師器・須恵器（2）～（5）	415
写真図版101	土製品、石製品、鉄製品、銭貨	419
写真図版102～108	石器（1）～（7）	420

間木戸Ⅴ遺跡（遺物）

写真図版109	縄文土器	427
写真図版110	土師器（1）	428
写真図版111	土師器（2）	429
写真図版112	石器	430
写真図版113	土製品、鉄製品、羽口（1）	431
写真図版114	羽口（2）、炉壁	432

I 調査に至る経過

間木戸Ⅱ・Ⅴ遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（山田～宮古南）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年11月9日付け国東整陸一調第1005号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成25年1月8日～9日にわたり試掘調査を行い、平成25年2月18日付け教生第1619号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成25年4月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置とその環境（第1図）

間木戸Ⅱ遺跡・間木戸Ⅴ遺跡は、岩手県の沿岸部、岩手県下閉伊郡山田町山田に所在する。山田町は、三陸海岸のほぼ中央に位置し、山田湾と船越湾を有する。遺跡が位置する山田町山田地区は、カキ・ホタテなどの養殖が盛んな山田湾に面しており、湾に注ぐ関口川周辺は、宅地や農地として利用されている。また、関口川河口付近は東日本大震災による大津波で甚大なる被害を受けた地域でもあり、河口からおよそ1km離れたJR山田線は平成26年現在復旧の目処が立っていない状況である。両遺跡は、山田町役場から北へ1.5kmの山林にある。周辺には現在、仮設住宅が建ち並ぶ。緯度・経度は、間木戸Ⅱ遺跡で緯度39度28分57.936秒・経度141度57分13.052秒、間木戸Ⅴ遺跡は緯度39度29分04.977秒・経度141度57分16.670秒付近である。

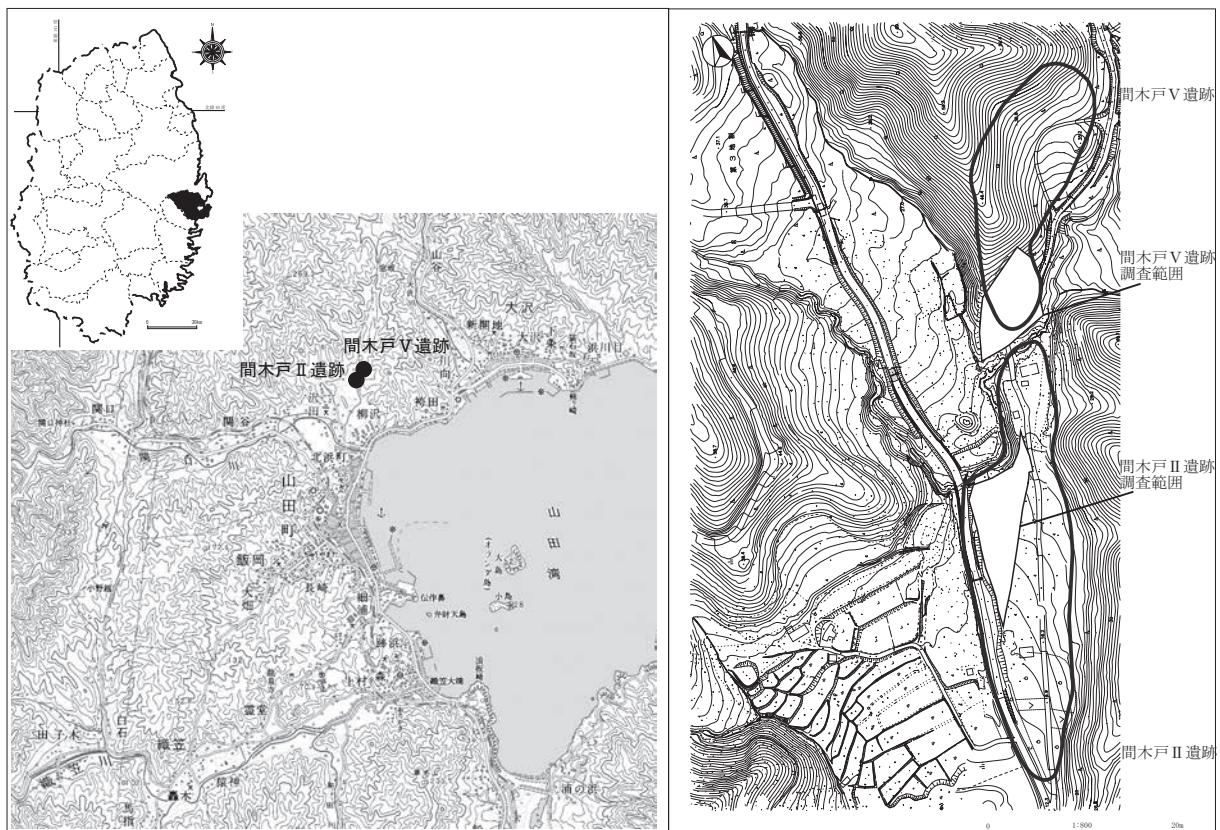
調査前は両遺跡とも山林で、栗園もしくは「椎茸のほだ木」の伏せ込み作業場となっていたが、間木戸Ⅱ遺跡では、植生された杉の根が調査区を埋め尽くしている状況であった。また、遺跡北側には間木戸一里塚が所在し、西側は町道によって削平されていた。

町道は、江戸時代に主要道路として使用されていた部分であり、これに付随する間木戸一里塚は、寛永20年（1643）に、宮古大槌間で完成した9対の一里塚のひとつである。当時も周辺には民家等が少なく、今回の調査では寛永通宝が2枚出土したが江戸時代に該当する遺構は検出していない。

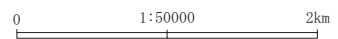
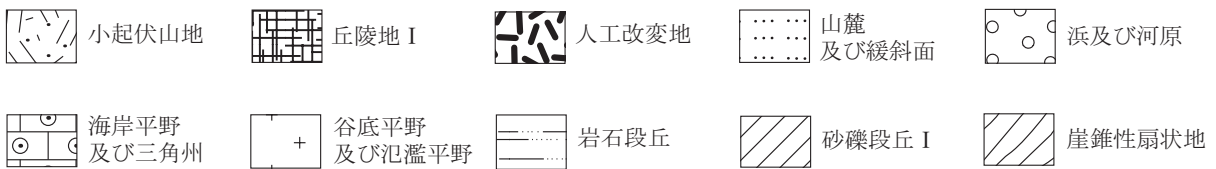
両遺跡とも遺物を地表面で採取でき、間木戸Ⅴ遺跡周辺では、鉄滓が散見されていた。近隣の住民からは、「このあたりでは鉄滓がたくさん落ちている。」と度々耳にした。

2 遺跡周辺の地形 (第2図・写真図版1)

山田町は総面積263.45km²のうち、山林が236.04km²を占める。西側には北上高地、そこからは丘陵地が連なり、リアス式海岸が太平洋に面している。山田湾に面する低地は、北上高地に連なる標高807mの山母森に水源をもつ関口川により形成された沖積平野である。河口付近で合流する間木戸川は、関口川の左支川で、この間木戸川により開析された谷部に両遺跡は所在する。周辺は、風化花崗岩層で構成された標高150m以下の小起伏山地で、関口川周辺の平野部より北側に入り込むため、両遺跡は山田湾を望むことはできない場所にある。両遺跡は、間木戸V遺跡北側の痩せ尾根から南面へ続く斜面に位置し、北側上流より南西へ流下する沢を境に、北が間木戸V遺跡、南が間木戸II遺跡に分けられる。この沢は間木戸II遺跡北西で間木戸川と合流する。間木戸II遺跡は、それらによって形成された扇状地状の緩斜面に立地する。標高は14~18mである。西側は道路により削平を受けていた。間木戸V遺跡は、北側は尾根から続く急斜面、中央付近から南側は沢により形成された段丘状の緩斜面に立地し、中央付近は調査区を横断する作業道によって削平を受けていた。標高は、23~30mである。関口川周辺の平野部よりおよそ12~27m標高が高い。より標高の高い間木戸V遺跡では、尾根の先端部で風化した花崗岩が露頭している部分もあり、表土を数cm掘るとマサ土化した土壌が確認でき表土の発達が少ない。この風化花崗岩には鉄を作るのに良質な砂鉄が多く含まれている。



第1図 遺跡位置図・調査区と周辺の地形



第2図 地形区分図

3 周辺の遺跡（第3図・第1表）

山田町では491の遺跡が岩手県遺跡台帳に登録されている（平成24年12月現在）。町内の遺跡は低地部に確認されることは少なく、小起伏山地もしくはその縁辺に確認されているものが多い。そのうち、本遺跡周辺の遺跡を抜き出した107遺跡について、第3図および、第1表に記した。その中から縄文時代、古代、製鉄関連の遺跡について概要を述べることにする。

縄文時代に該当する遺跡は沢田Ⅰ、大畑Ⅰ遺跡等があげられる。沢田Ⅰ遺跡は、縄文時代早期から平安時代の遺構が重複する複合遺跡である。沢田Ⅰ遺跡から出土した早期の土器片は、現在のところこの時期に人々が山田町へ住み始めた証拠となっている。遺跡の主体となる時期は縄文時代前期と中期で、前期の遺構の埋土に十和田中礫火山灰が堆積する大木2a式以前の竪穴建物跡や、前期に帰属するロングハウスなどの大形建物跡が複数検出され、中期末葉まで竪穴建物跡がみられることから集落の継続が確認されている。大畑Ⅰ遺跡では、大木10式を主体とした集落が確認され、石囲炉・土器埋設炉・複式炉等様々な形態の炉をもつ竪穴建物跡や多数の土坑について報告されている。

古代に該当する遺跡についてであるが、房の沢Ⅳ遺跡、大畑Ⅱ遺跡等があげられる。房の沢Ⅳ遺跡は、間木戸Ⅱ遺跡から直線距離で600mに位置し、平成8・9年度（第1～3次調査）に調査が行われ、7世紀から8世紀にかけて継続して造られた古墳群が検出されている。古墳は山田湾を望める尾根の斜面地に造営され、埋葬主体部からは、鉄鍬・蕨手刀・錫製釧などが出土している。とりわけ土器と一緒に埋葬している例が多い特徴的である。同時期に属する集落が周辺にまだ確認されていないが、今回の間木戸Ⅱ遺跡で検出された竪穴建物跡が該当する可能性がある。大畑Ⅱ遺跡は、重複しない平安時代の竪穴建物跡5棟が検出されている。出土している赤焼き土器の坏の特徴から10世紀前半に位置付けており、近接して検出された鍛冶路炉や工房跡と併せ、10世紀の鉄生産に従事した人々が住んでいた集落として報告されている。

古代製鉄関連の遺跡では、後山Ⅰ、上村遺跡等があげられる。山田町は本県の中でも製鉄関連遺構の検出が特に多い地域である。平安時代後半の製鉄関連遺構が調査された後山Ⅰ遺跡では、時期差が認められる7棟の工房跡、製鉄炉を含む鉄生産炉が29基、15基の炭窯も近接して検出されている。また、鍛冶工房を再利用したと考えられる竪穴建物跡のカマドには、芯材に鉄滓が設置されていた。上村遺跡では、奈良時代に帰属する製鉄炉8基、鍛冶炉2基、竪穴建物跡1棟が検出された。鉗子など鍛冶工程で使われていた道具類のほか、約2.5トンの鉄滓が出土している。両遺跡とも、丘陵地の南向き斜面で鉄生産遺構が検出され、原料である砂鉄を採取できる風化花崗岩層上に立地している。加えて、山林に囲まれており燃料となる木炭の原料である木材を容易に入手できる環境にあった。山田町内で確認されている製鉄関連遺跡は、概ねこのような立地状況にあてはまる。

参考文献

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

1994『上村遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第202集。

1995『大畑Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第218集

1997『沢田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第268集

1998『房の沢Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第287集。

2000『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第318集

2001『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第342集。

山田町教育委員会2002『細浦Ⅳ・後山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』山田町教育委員会埋蔵文化財調査報告書第9集。



第3図 周辺の遺跡

第1表 周辺遺跡一覧

No	遺跡名	ふりがな	種類	時期	遺物ほか	場所
1	間木戸Ⅱ	まきどⅡ	散	縄	縄文土器	山田第3地割
2	間木戸Ⅴ	まきどⅤ	鉄	不	縄文土器、鉄滓、羽口	山田第3地割
3	山谷	やまや	散	縄	縄文土器	山谷
4	山谷Ⅱ	やまやⅡ	散	縄	縄文土器、鉄滓	大沢第13地割
5	川向Ⅰ	かわむかいⅠ	散	縄	縄文土器	大沢川向
6	川向Ⅱ	かわむかいⅡ	散	縄	縄文土器	大沢川向
7	川向Ⅲ	かわむかいⅢ	散	縄	縄文土器	大沢川向
8	新開地	しんかい	散	縄	縄文土器、石鏃	大沢新開地
9	新開地Ⅰ	しんかいⅠ	散	縄	縄文土器	大沢新開地
10	新開地Ⅱ	しんかいⅡ	散	縄	縄文土器	大沢新開地
11	紅山A	べにやま A	散	縄	(前・中・後・晩期)石槍、石鏃、石斧	大沢紅山
12	紅山B	べにやま B	集	縄	縄文土器	大沢紅山
13	梶田Ⅰ	はかまだⅠ	散	縄	縄文土器	大沢梶田
14	梶田Ⅱ	はかまだⅡ	散	縄	縄文土器	大沢梶田
15	天井間木戸	てんじょうまきど	鉄	縄	鉄滓	山田3地割
16	天井間木戸Ⅰ	てんじょうまきどⅠ	散	縄	縄文土器、鉄滓	山田3地割
17	天井間木戸Ⅱ	てんじょうまきどⅡ	散	縄	縄文土器、鉄滓	山田3地割
18	天井間木戸Ⅲ	てんじょうまきどⅢ	散	縄	縄文土器、鉄滓	山田3地割
19	天井間木戸Ⅳ	てんじょうまきどⅣ	散	縄	鉄滓、羽口	山田3地割
20	天井間木戸Ⅴ	てんじょうまきどⅤ	散	縄	縄文土器、フレイク、鉄滓、羽口	山田3地割
21	天井間木戸Ⅵ	てんじょうまきどⅥ	散	縄	鉄滓	山田3地割
22	天井間木戸Ⅶ	てんじょうまきどⅦ	散	縄	鉄滓、羽口	山田3地割
23	天井間木戸Ⅷ	てんじょうまきどⅧ	散	縄	鉄滓	山田3地割
24	天井間木戸Ⅸ	てんじょうまきどⅨ	散	縄	縄文土器、鉄滓、羽口	山田3地割
25	間木戸Ⅰ	まきどⅠ	散	縄	縄文土器	山田第3地割
26	間木戸Ⅲ	まきどⅢ	散	縄	縄文土器、鉄滓	山田第3地割
27	間木戸Ⅳ	まきどⅣ	集	縄	縄文土器、一里塚	山田第3地割
28	間木戸Ⅵ	まきどⅥ	鉄	不	鉄滓	山田3地割
29	山の神	やまのがみ	散	縄	鉄滓	山田3地割
30	山の神Ⅰ	やまのがみⅠ	散	縄	縄文土器	山田3地割
31	柳沢Ⅰ	やなぎさわⅠ	散	縄	縄文土器、鉄滓	山田第1地割
32	柳沢Ⅱ	やなぎさわⅡ	散	縄	縄文土器、フレイク、鉄滓	山田第1地割
33	柳沢Ⅲ	やなぎさわⅢ	散	縄	縄文土器、土師器	山田第1地割
34	柳沢Ⅳ	やなぎさわⅣ	散	縄	縄文土器、フレイク	山田第1地割
35	沢田Ⅰ	さわだⅠ	散	縄	縄文土器、土師器、須恵器	山田第14地割
36	沢田Ⅱ	さわだⅡ	散	縄	縄文土器、主郭、腰郭、空堀、鉄滓	山田第4地割
37	沢田Ⅲ	さわだⅢ	散	縄	縄文土器、フレイク	山田第4地割
38	沢田Ⅳ	さわだⅣ	散	縄	縄文土器、主郭、副郭、砦、帯郭、空堀、鉄滓	山田第4地割
39	沢田Ⅴ	さわだⅤ	散	縄	鉄滓	山田14地割
40	沢田Ⅵ	さわだⅥ	散	縄	縄文土器	山田14地割
41	房の沢Ⅰ	ぼうのさわⅠ	散	縄	縄文土器、鉄滓	山田第14地割
42	房の沢Ⅱ	ぼうのさわⅡ	散	縄	縄文土器、鉄滓	山田第14地割
43	房の沢Ⅲ	ぼうのさわⅢ	散	縄	縄文土器	山田第14地割
44	房の沢Ⅳ	ぼうのさわⅣ	散	縄	古墳群	山田第14地割
45	房の沢Ⅴ	ぼうのさわⅤ	散	縄	縄文土器、フレイク、鉄滓	山田15地割
46	房の沢Ⅵ	ぼうのさわⅥ	散	縄	縄文土器、鉄滓	山田15地割
47	房の沢Ⅶ	ぼうのさわⅦ	散	縄	石鏃、鉄滓	山田15地割
48	房の沢Ⅷ	ぼうのさわⅧ	城	中	主郭、砦、特殊空堀、経石	山田14地割
49	関谷Ⅰ	せきやⅠ	散	縄	縄文土器、石匙、鉄滓	山田第15地割
50	関谷Ⅱ	せきやⅡ	散	縄	縄文土器、鉄滓	山田第17地割
51	関谷Ⅲ	せきやⅢ	散	縄	縄文土器、鉄滓	山田9地割
52	関谷Ⅳ	せきやⅣ	散	縄	縄文土器、鉄滓	山田9地割
53	関谷Ⅴ	せきやⅤ	散	縄	縄文土器、鉄滓	飯岡13地割
54	八幡館	はちまんだて	散	縄	主郭、腰郭、空堀	八幡町7地割
55	長崎Ⅰ	ながさきⅠ	散	縄	主郭、腰郭、縄文土器	飯岡第10地割
56	長崎Ⅱ	ながさきⅡ	散	縄	主郭、腰郭、縄文土器	飯岡第9地割
57	長崎Ⅲ	ながさきⅢ	散	中	主郭、二の郭、空堀、砦	飯岡第8地割
58	長崎Ⅳ	ながさきⅣ	散	中	平場、空堀	飯岡第8地割
59	小沢Ⅰ	こざわⅠ	散	縄	縄文土器、鉄滓	飯岡第7地割
60	小沢Ⅱ	こざわⅡ	散	縄	縄文土器	飯岡第7地割
61	小沢Ⅲ	こざわⅢ	散	縄	縄文土器、鉄滓	飯岡7地割
62	小沢Ⅳ	こざわⅣ	散	縄	鉄滓	飯岡7地割
63	小沢Ⅴ	こざわⅤ	散	縄	鉄滓	飯岡7地割
64	小沢Ⅵ	こざわⅥ	散	縄	鉄滓	飯岡7地割
65	小沢Ⅶ	こざわⅦ	散	縄	鉄滓	飯岡7地割
66	大畑Ⅰ	おおはたⅠ	散	縄	縄文土器	飯岡第6地割
67	大畑Ⅱ	おおはたⅡ	散	古	空堀、縄文土器、須恵器	飯岡第6地割
68	大畑Ⅲ	おおはたⅢ	散	中	鉄滓	飯岡6地割
69	大畑Ⅳ	おおはたⅣ	散	不	鉄滓	飯岡6地割
70	大畑Ⅴ	おおはたⅤ	散	不	鉄滓	飯岡6地割
71	大畑Ⅵ	おおはたⅥ	散	不	鉄滓	飯岡6地割
72	長野Ⅰ	ながのⅠ	散	縄	縄文土器、鉄滓	飯岡第6地割
73	長野Ⅱ	ながのⅡ	散	縄	縄文土器、鉄滓	飯岡第6地割
74	長野Ⅲ	ながのⅢ	散	縄	縄文土器、鉄滓	飯岡2地割
75	長野Ⅳ	ながのⅣ	散	鉄	鉄滓	飯岡2地割
76	長野Ⅴ	ながのⅤ	散	不	鉄滓	飯岡2地割
77	長野Ⅵ	ながのⅥ	散	不	鉄滓	飯岡2地割
78	長野Ⅶ	ながのⅦ	散	不	鉄滓	飯岡2地割
79	長野Ⅷ	ながのⅧ	散	不	鉄滓	飯岡2地割
80	飯岡Ⅰ	いいおかⅠ	城	中	主郭、腰郭	飯岡第6地割
81	飯岡Ⅱ	いいおかⅡ	散	中	主郭、腰郭、空堀、砦	飯岡第6地割
82	飯岡Ⅲ	いいおかⅢ	散	中	不明	飯岡第2地割
83	飯岡Ⅳ	いいおかⅣ	散	中	不明	飯岡第6地割
84	赤松Ⅰ	あかまつⅠ	散	縄	縄文土器、鉄滓、羽口	飯岡第6地割
85	赤松Ⅱ	あかまつⅡ	散	縄	縄文土器、鉄滓	飯岡第6地割
86	赤松Ⅲ	あかまつⅢ	散	縄	鉄滓、羽口	飯岡6地割
87	赤松Ⅳ	あかまつⅣ	散	縄	縄文土器、フレイク、鉄滓、羽口	飯岡6地割
88	赤松Ⅴ	あかまつⅤ	散	縄	縄文土器、鉄滓	飯岡6地割
89	赤松Ⅵ	あかまつⅥ	散	縄	縄文土器、鉄滓	飯岡6地割
90	赤松Ⅶ	あかまつⅦ	散	縄	縄文土器	飯岡6地割
91	細浦Ⅰ	ほそうらⅠ	散	縄	縄文土器、弥生土器、鉄滓	織笠14地割
92	細浦Ⅱ	ほそうらⅡ	散	縄	縄文土器	織笠14地割
93	細浦Ⅲ	ほそうらⅢ	散	縄	縄文土器	織笠14地割
94	細浦Ⅳ	ほそうらⅣ	散	縄	縄文土器	織笠12地割
95	細浦Ⅴ	ほそうらⅤ	散	城	主郭、腰郭、縄文土器	織笠12地割
96	細浦Ⅵ	ほそうらⅥ	散	縄	縄文土器、土師器、鉄滓	織笠12地割
97	細浦Ⅶ	ほそうらⅦ	散	古	鉄滓	織笠14地割
98	上村	かみむら	集	縄	縄文土器、弥生土器	織笠10地割
99	上村	かみむら	散	縄	製鉄炉、縄文土器	織笠9地割
100	跡浜Ⅰ	あとがみⅠ	散	縄	縄文土器	織笠12地割
101	跡浜Ⅱ	あとがみⅡ	散	縄	縄文土器	織笠12地割
102	後山Ⅰ	うしろやまⅠ	散	縄	製鉄炉、縄文土器、石斧、土師器、鉄滓、羽口	織笠14地割
103	後山Ⅱ	うしろやまⅡ	散	縄	縄文土器	織笠15地割
104	後山Ⅲ	うしろやまⅢ	集	縄	縄文土器、フレイク、弥生土器、土師器、鉄滓	織笠14地割
105	礼堂 一里塚	れいどういちりづか	集	近	一里塚	織笠15地割
106	礼堂	れいどう	散	縄	縄文土器、鉄滓	織笠15地割
107	大沢館	おおさわだて	城	中	主郭、腰郭、二重空堀	大沢7地割

種類：散=散布地、鉄=製鉄跡、集=集落跡、城=城館跡
 時期：縄=縄文、弥=弥生、古=古代、中=中世、近=近世、不=不明

Ⅲ 野外調査と室内整理

1 野外調査

(1) グリッド設定(第4図)

検出遺構と出土遺物の詳細な記録に座標値を使用するため、両遺跡を網羅するグリッドを設定した。X=-56600、Y=96300を原点とし、南東に向かい100m×100mの大グリッドを設定した。さらにその正方形の各辺を25等分して、4×4mの小グリッドとした。よって、グリッドの表示は、「ⅡA 25y」のようになっている。

また、便宜上、平面図の作成で小グリッドを4つに分け2×2mのグリッドも使用している。現場調査時には使用していない呼称であるが、本報告書内では「ⅡA 25y-SE」といったような表記にしている。グリッド凡例は4図の通りである。

調査区内には、基準杭とグリッド割付用杭を業務委託により打設した。

(2) 試掘・表土除去

調査開始時、調査区域内は伐採根が密集していたため、土層の堆積状況や遺構の検出面を確認するため任意に試掘トレンチを設定し、人力で掘削を行った。

これにより間木戸Ⅱ遺跡では、当初想定していた遺構の検出面より30～50cmほど上に黒褐色土が(基本層序Ⅲb層)堆積すること、そこから縄文土器が多く出土することがわかった。この黒褐色土は、調査区域全体に厚く堆積していたが、その細分が困難であったため、遺構検出面を再検討することとなった。

バックホーとキャリアダンプを使つての表土除去は、調査区域南部から行った。表土除去中も遺物が多量に出土する状況に反して、それに伴う遺構プランは全く見えてこず、終に調査区域中央付近で、これまでと異なる古代の遺物が伴う方形プランを確認できた。

間木戸Ⅴ遺跡も、バックホーを使い標高の高い北側急斜面地から表土除去を行った。急斜面地は表土直下でマサ土(地山)が検出されたが、中腹からは、マサ土より上位の暗褐色土(基本層序Ⅲ層)で遺構が検出された。

(3) 遺構検出・精査

遺構検出は、表土除去の後、鋤簾(じょれん)等を用いて行った。縄文時代の遺構が存在すると思われる区域は、全て黒褐色土(基本層序Ⅲb層)に覆われていた。真っ黒な土は縄文の遺物包含層であり、平面的に遺構のプランを把握するには時間を要すると判断し、古代の遺構精査に着手すると併行して、設定したグリッドに準じ包含層の掘り下げと検出を進めた。そのため、平面的に検出できた遺構は少なく、平面が壊された状態になったものが多い。

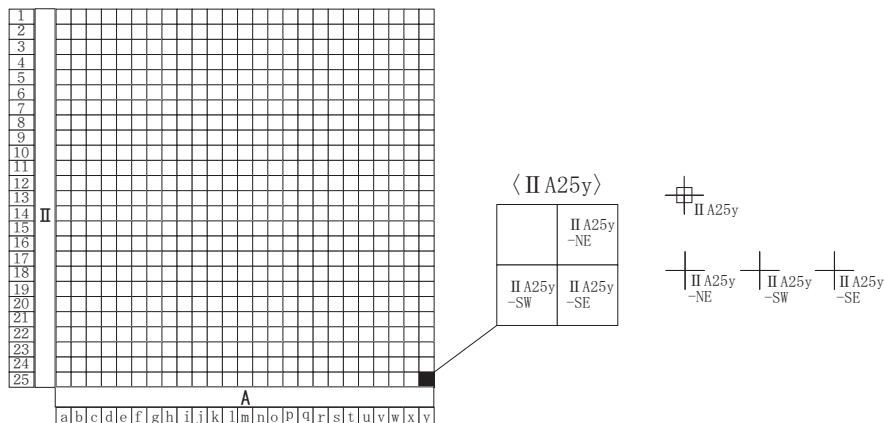
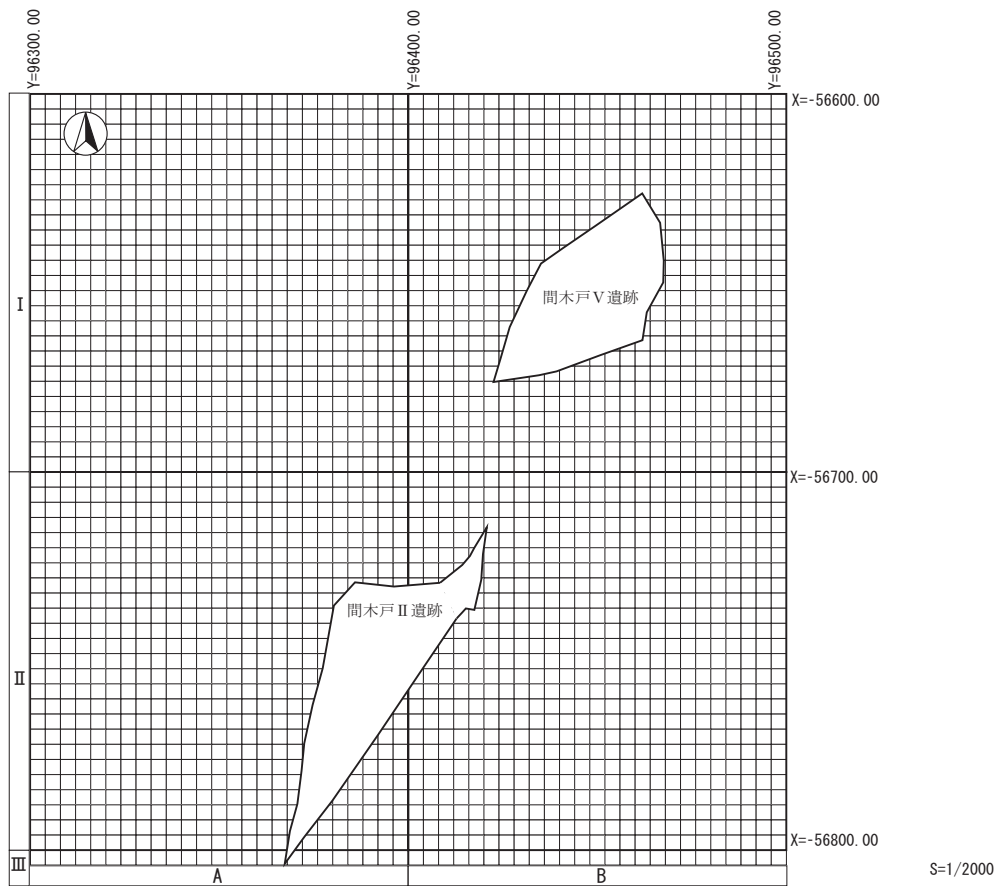
その作業を進めてプランを把握できたものについては、以下のような精査方法をとった。遺構の規模に応じて2分法・4分法を使い分け、土層断面を観察しながら埋土を掘り進めた。遺構の重複が認められた場合、平面観察やサブトレンチで新旧関係の把握に努めた。遺物は、包含層掘り下げ時にはグリッド名、遺構と判断した時点で遺構名を付しそれぞれ出土層位を記録し取り上げた。

(4) 実 測

遺構の平面図は、電子平板を使用し、デジタルデータとして記録した。断面図は水平に設定した水糸を基準に遺構の種類や規模などを考慮し20分の1、10分の1などの縮尺で手実測・作図した。遺物出土状況等の微細図は、写真撮影後、画像補正を行いデジタル作図した。

(5) 写 真 撮 影

遺跡・遺構の記録写真には、デジタル一眼レフカメラを基本に、6×7cm判カメラ（モノクロ）と、6×9判カメラ（モノクロ）も併用し撮影した。その際に、所定の撮影カードを用い記入と写し込み



第4図 グリッド配置図

を行い、写真整理に利用した。調査終了時には小型飛行機による空中写真の撮影を行った。

2 室内調査

(1) 作業手順

出土遺物は、野外作業と並行して調査事務所内と間木戸V遺跡内で洗浄を行い、それ以外については、6月より室内において遺物洗浄を始めた。その後、接合・復元作業・実測を行い、拓影作成・トレースの作業と併行して遺物撮影・観察表作成・図版作成を行っている。遺構は、デジタルトレースをした断面図と、現場時に電子平板を用いデータ化した平面図を用い遺構図版を作成した。それらをふまえて、原稿執筆・遺構図版作成・遺構写真図版作成を行った。

(2) 遺構

電子平板で作図した遺構平面図と、デジタルトレースを行った遺構断面図は、デジタルデータとして描画ツールソフトを使用し編集と割付を行った。写真はデジタル一眼レフで撮影したRAWデータをビットマップ画像編集ソフトでレンズ補正後、JPEGに変換し写真図版として掲載している。なお、レンズ補正は、カメラレンズの特性で生じる歪みに対して行っている。

(3) 遺物

出土土器は縄文土器と土師器、須恵器に選別し、袋番号で管理し重量計算ののち選別したものに注記を行った。実測は器形の復元が可能なものから順次行い、拓本も併用している。また貼り付け等で拓本が困難なものについては、平面的な実測も行った。石器については、分類を行い遺構内出土を中心に図化の選別を行った。なお、剥片石器の図化は、(株)ラングに業務委託をした。鉄製品については、おおまかな錆を除去した後、X線撮影を行い実測した。鉄製品の一部は、岩手県立博物館へ保存処理に委託した。羽口・炉壁・鉄滓は、分類を行い、それぞれ袋番号で管理し重量計測を行った。羽口と炉壁は、器形の特徴が把握できるもののみ実測し、それ以外は重量表や観察表への記載にとどめた。

3 凡例

(1) 遺構

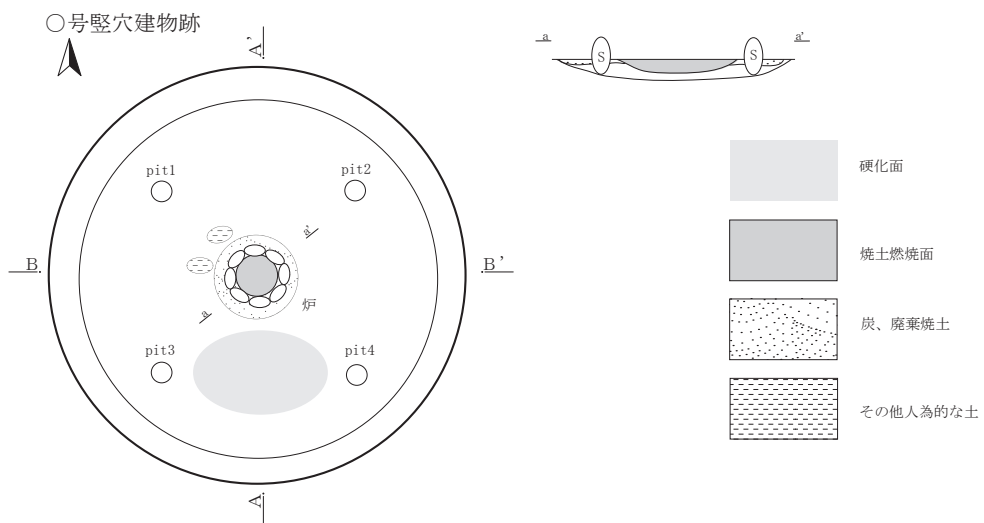
- い. 遺構実測図の縮尺は、竪穴建物跡、土坑が1：50、炉跡断面、焼土遺構が1：20を基本とした。図版ごとにスケール及び縮尺を付した。
- ろ. 平面図の推定は破片線で示し、重複する遺構については切り合っているものを表示し、不透明度を下げて示した。
- は. 土層の色調観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を使用した。
- に. 図中の「P」は土器、「S」は石、「I」は鉄製品、「T」はトレンチ、「BT」岩手県教育委員会生涯学習文化課が行った試掘トレンチを略号で示した。
- ほ. 図中で表現している網掛けやスクリーントーンの類別は、下記の凡例図を参照していただきたい。

(2) 遺物

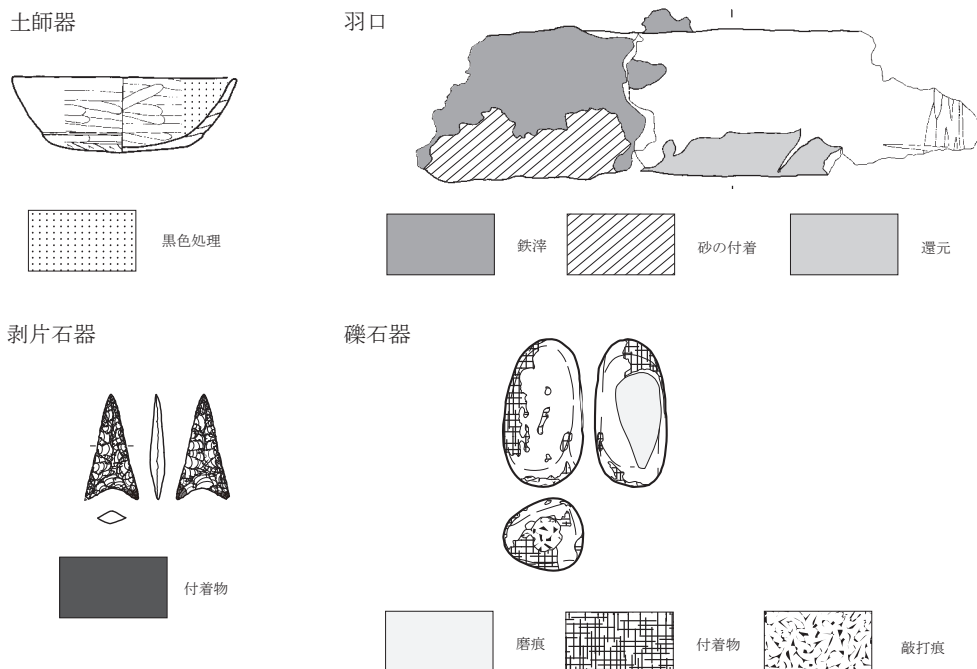
- い. 遺物実測図の縮尺は、縄文土器・土師器・須恵器、礫石器、羽口、炉壁が1：3、剥片石器が2：3、土製品・石製品・鉄製品は1：2を基本とした。大きさにより異なる縮尺にしているものもあり、各図にスケールおよび縮尺を付した。
- ろ. 遺物の計測位置および、スクリーントーンの使用は凡例図のとおりである。観察表の計測値は、残存値の場合（ ）・推定値の場合〔 〕で表記した。
- は. 本書で記載されているコンテナのサイズは、大コンテナ42×32×30cm、中コンテナ42×32×20cm、小コンテナ42×32×10cmである。

(3) 凡例図

- 遺構図 -



- 遺物図 -



第5図 凡例

IV 間木戸Ⅱ遺跡の調査

1 概 要

(1) 遺構数・遺物数

検出遺構は、竪穴建物跡30棟(縄文25、古代5)、焼土・炉跡11基(縄文・古代)、土坑13基(縄文)、柱穴19個(縄文・古代)、集石遺構1基(縄文)、遺物包含層1,000㎡(縄文)、出土遺物は、土器(縄文・古代)大コンテナ54箱、石器(縄文・古代)大コンテナ4箱、土製品・石製品などである。遺構の位置は第6～9図の通りである。

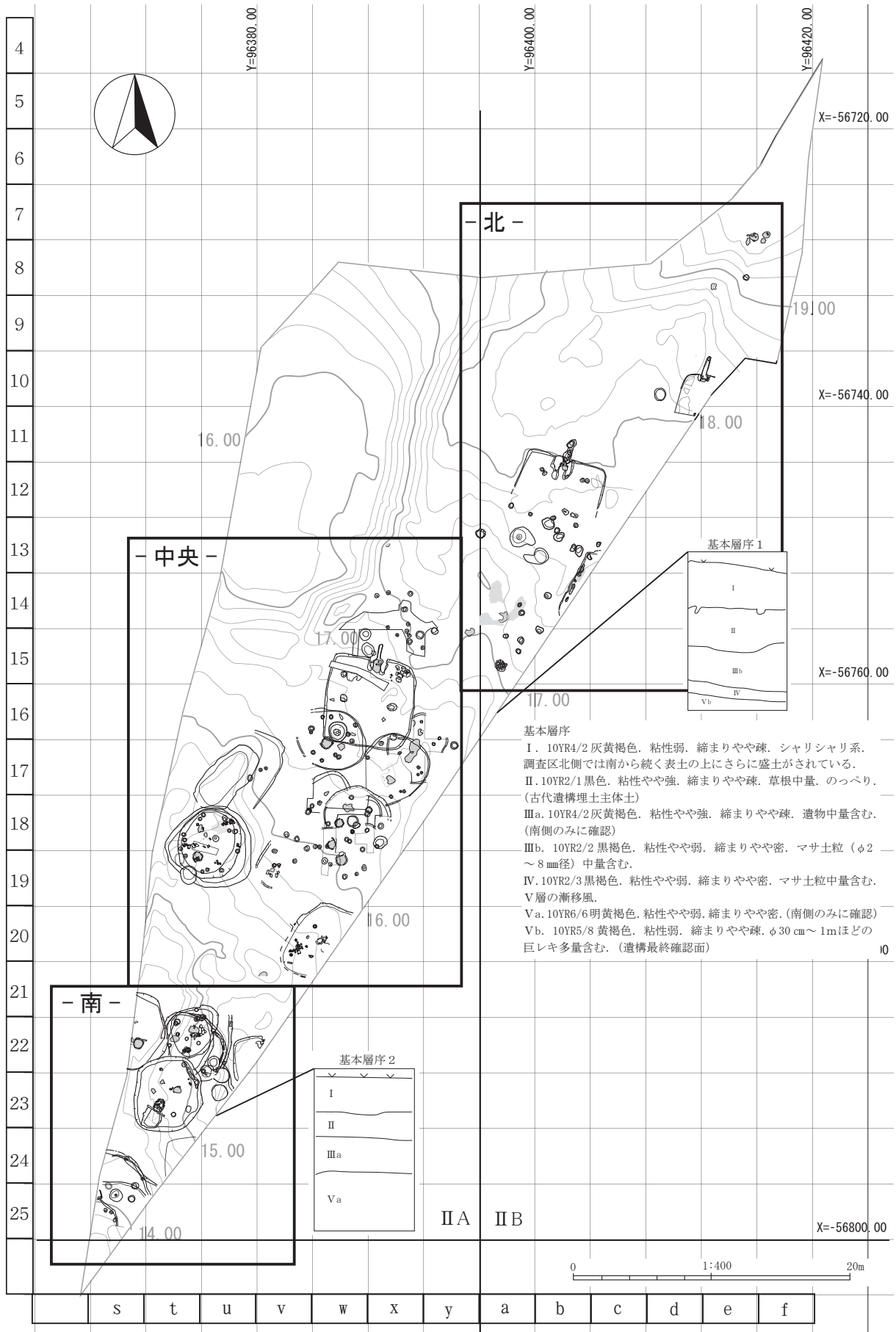
(2) 遺 構 名 称

野外調査で使用した仮名称は、報告書掲載にあたり、S I○を○号竪穴建物跡、S K△を△号土坑といったように変更している。詳細は、第2表で対比していただきたい。

(3) 層 序

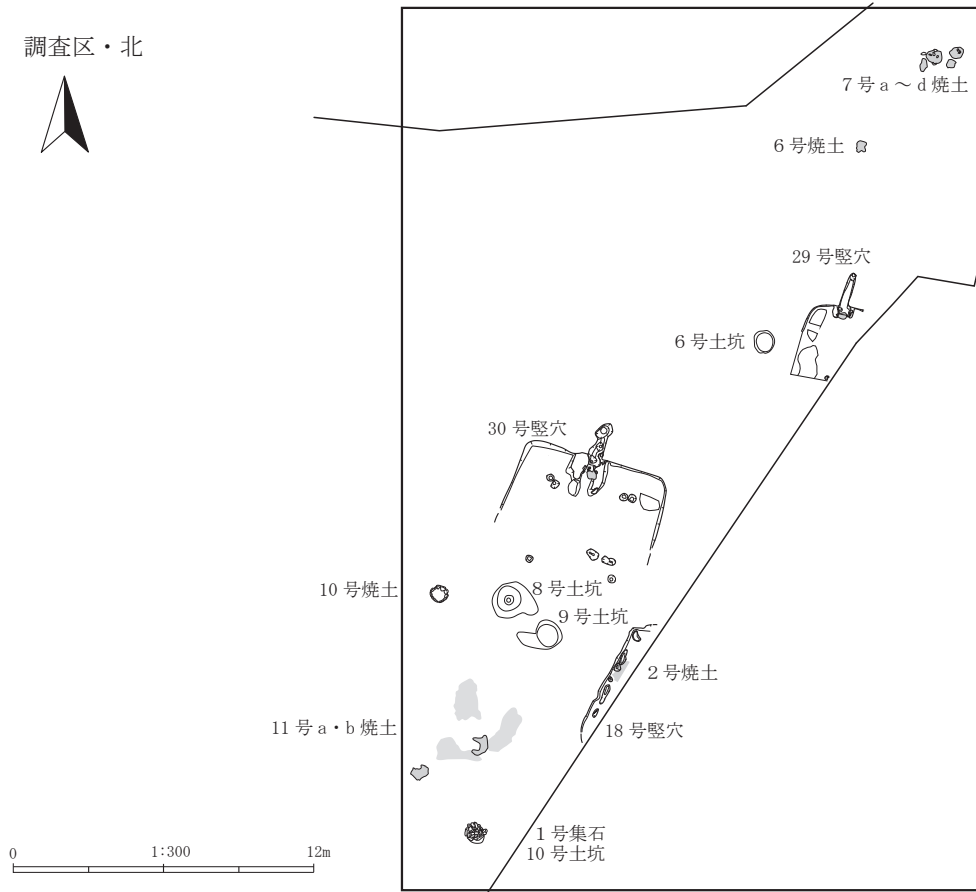
調査区域の中央部・北部と、南部では土層堆積に違いが確認できた。中央部と北部では基本層序1が該当し、南部は基本層序2が該当する。基本層序の観察図は第6図の通りである。なお、調査区を横断するように中央部で土層観察を行っているが、後述する沢跡の項目で提示する。

- I. 10YR4/2 灰黄褐色. 粘性弱. 締まりやや疎. シャリシャリ. 調査区域北部では南から続く表土の上に盛土がされている.
- II. 10YR2/1 黒色. 粘性やや強. 締まりやや疎. 草根中量. のっぺり. (古代遺構埋土主体)
- III a. 10YR4/2 灰黄褐色. 粘性やや強. 締まりやや疎. 遺物中量含む. (南部のみに確認)
- III b. 10YR2/2 黒褐色. 粘性やや弱. 締まりやや密. マサ土粒(φ2～8mm径)中量含む.
- IV. 10YR2/3 黒褐色. 粘性やや弱. 締まりやや密. マサ土粒中量含む. V層の漸移層.
- V a. 10YR6/6 明黄褐色. 粘性やや弱. 締まりやや密. (南部のみに確認)
- V b. 10YR5/8 黄褐色. 粘性弱. 締まりやや疎. φ30cm～1mほどの巨礫を多量含む. (遺構最終検出面)



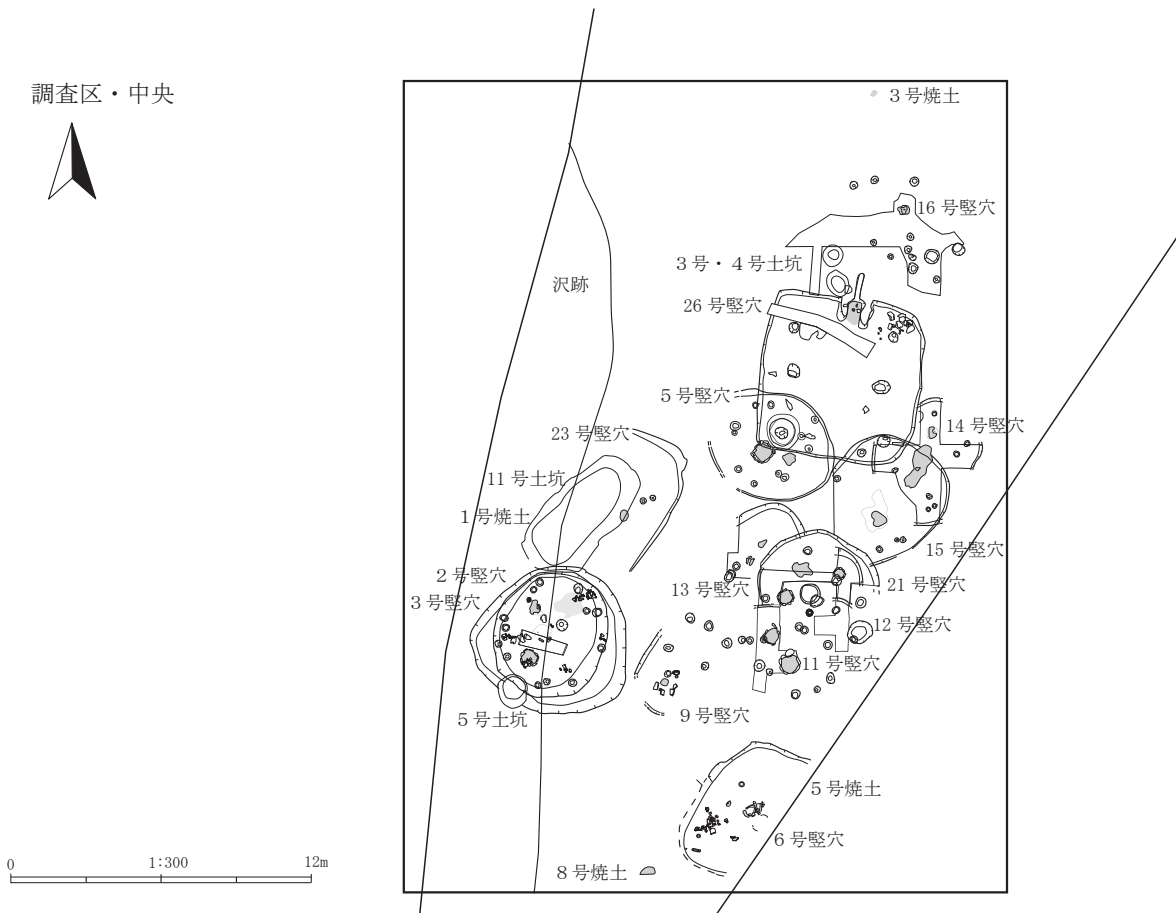
第6図 間木戸Ⅱ遺跡調査区全体図・基本層序

調査区・北



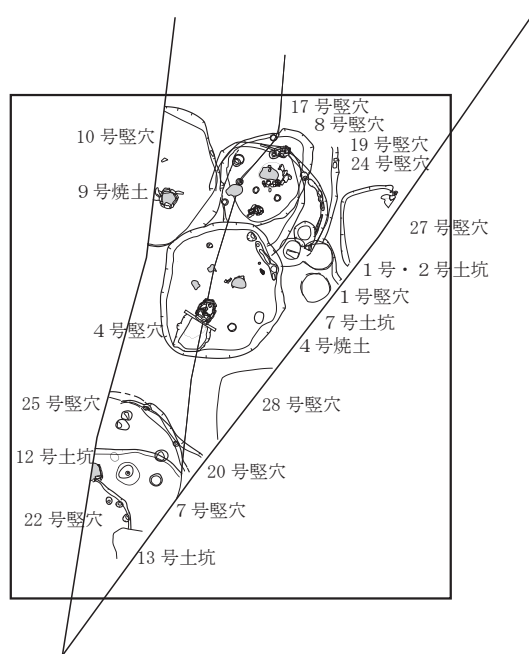
第7図 遺構配置図・北

調査区・中央



第8図 遺構配置図・中央

調査区・南



第9図 遺構配置図・南

第2表 新旧遺構名対応表

報告書掲載名	現場使用名	報告書掲載名	現場使用名	報告書掲載名	現場使用名
1号堅穴建物跡	SI03	1号土坑	SK01	1号焼土遺構・炉跡	SN01
2号堅穴建物跡	SI05	2号土坑	SK02	2号焼土遺構・炉跡	SN02
3号堅穴建物跡	SI07	3号土坑	SK03	3号焼土遺構・炉跡	SN03
4号堅穴建物跡	SI08	4号土坑	SK04	4号焼土遺構・炉跡	SN04
5号堅穴建物跡	SI09	5号土坑	SK05	5号焼土遺構・炉跡	SN05
6号堅穴建物跡	SI10	6号土坑	SK06	6号焼土遺構・炉跡	SN06
7号堅穴建物跡	SI11	7号土坑	SK07	7号a焼土遺構・炉跡	SN07
8号堅穴建物跡	SI12	8号土坑	SK08	7号b焼土遺構・炉跡	SN08
9号堅穴建物跡	SI13	9号土坑	SK09	7号c焼土遺構・炉跡	SN09
10号堅穴建物跡	SI14	10号土坑	SK10	7号d焼土遺構・炉跡	SN10
11号堅穴建物跡	SI16	11号土坑	SK11	8号焼土遺構・炉跡	SN11
12号堅穴建物跡	SI17	12号土坑	SK13	9号焼土遺構・炉跡	SN12
13号堅穴建物跡	SI18			10号焼土遺構・炉跡	SI25
14号堅穴建物跡	SI19			11号焼土遺構・炉跡	SI26
15号堅穴建物跡	SI20			1号集石遺構	SX01
16号堅穴建物跡	SI21				
17号堅穴建物跡	SI23				
18号堅穴建物跡	SI27				
19号堅穴建物跡	SI28				
20号堅穴建物跡	SI29				
21号堅穴建物跡	SI30				
22号堅穴建物跡	SI31				
23号堅穴建物跡	SI32				
24号堅穴建物跡	SI33				
25号堅穴建物跡	SI34				
26号堅穴建物跡	SI01				
27号堅穴建物跡	SI02				
28号堅穴建物跡	SI04				
29号堅穴建物跡	SI15				
30号堅穴建物跡	SI22				

2 遺 構

(1) 竪穴建物跡

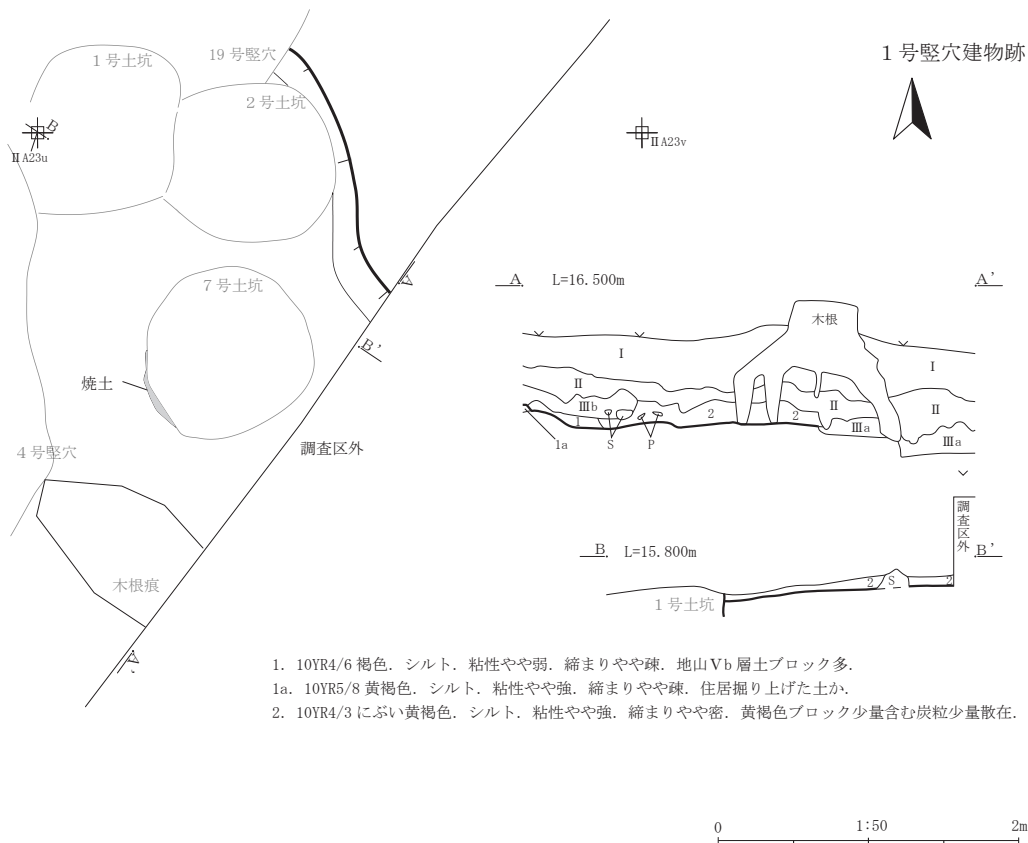
1号竪穴建物跡（第10図、写真図版3）

〔位置・検出状況〕調査区南、ⅡA22u付近に位置する。遺構検出作業時に木根と絡んで、大形の縄文土器片が検出された。この付近には、褐色の不整形プランが広がっており、この時点で遺構が重複していることが想定できた。そのため、掘り下げを行いながら観察したところ、重複する竪穴建物として検出した。〔規模・形状〕重複する遺構や木根により消失している部分が多く全容は不明である。〔埋土・堆積状況〕Vb層を掘り込んで作られている。〔壁・床面〕緩やかに外傾する。床面は若干凹凸があるが概ね平坦である。〔炉〕7号土坑に切られる形で、焼土範囲を検出している。〔柱穴・付属施設〕検出されなかった。〔重複遺構〕4号、20号竪穴、1号・2号・7号土坑に切られる。〔出土遺物〕床面から石鏃S003が出土している。その他、石斧S217、敲磨器S351。〔帰属時期〕遺構の重複関係から、縄文時代中期中葉以前に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

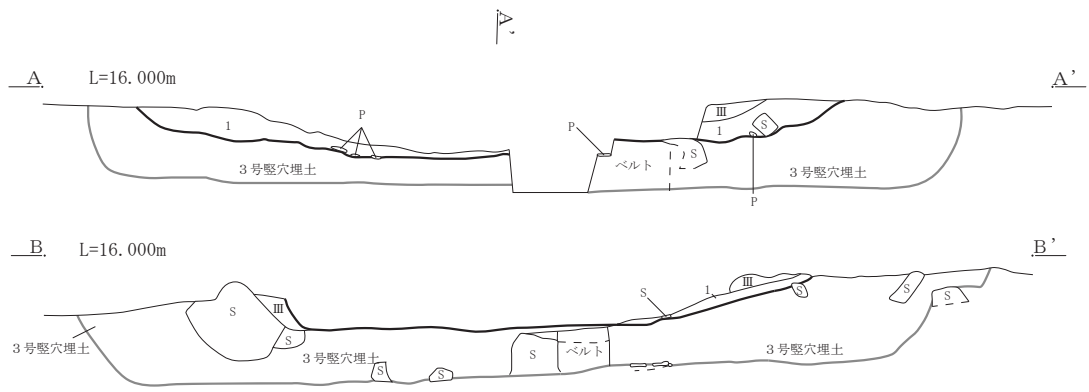
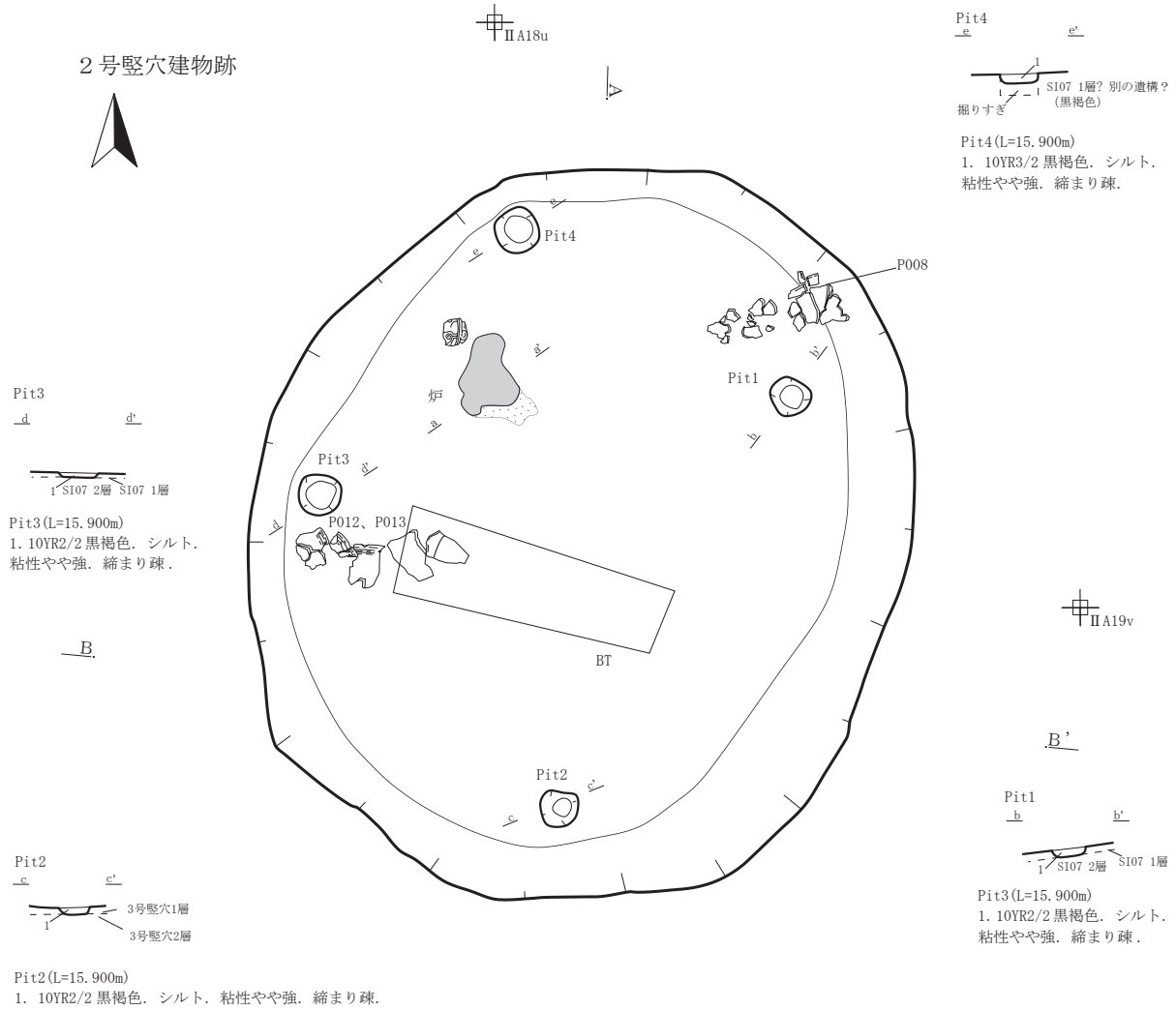
2号竪穴建物跡（第11図、写真図版4）

〔位置・検出状況〕調査区中央、ⅡA19u付近に位置する。Ⅲ層下位の3号竪穴を精査中に暗褐色シルトの広がりを検出した。掘り下げたところ、3号竪穴の1層上面で、浅く落ち込む床面と炉、柱穴、遺物の広がりを確認した。〔規模・形状〕5.0×4.4mで、楕円形である。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする。中央部分の埋土は重機による木根の抜取りの際に欠

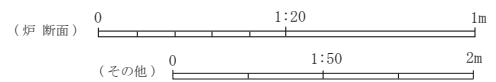
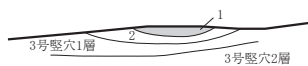
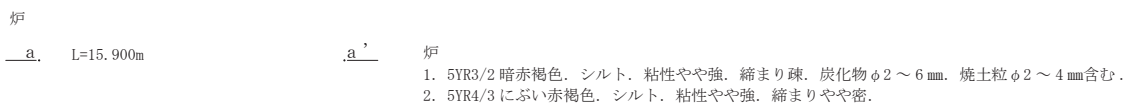


第10図 1号竪穴建物跡

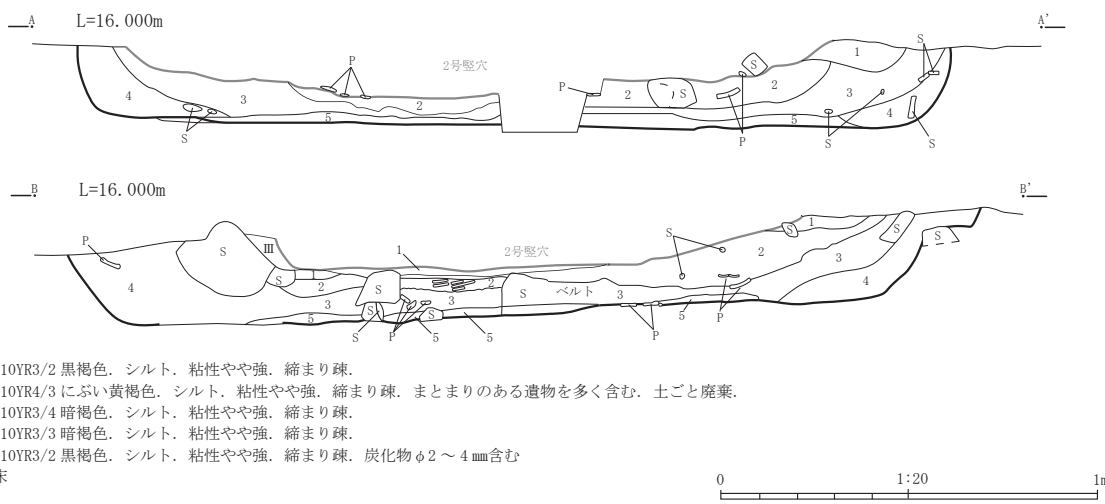
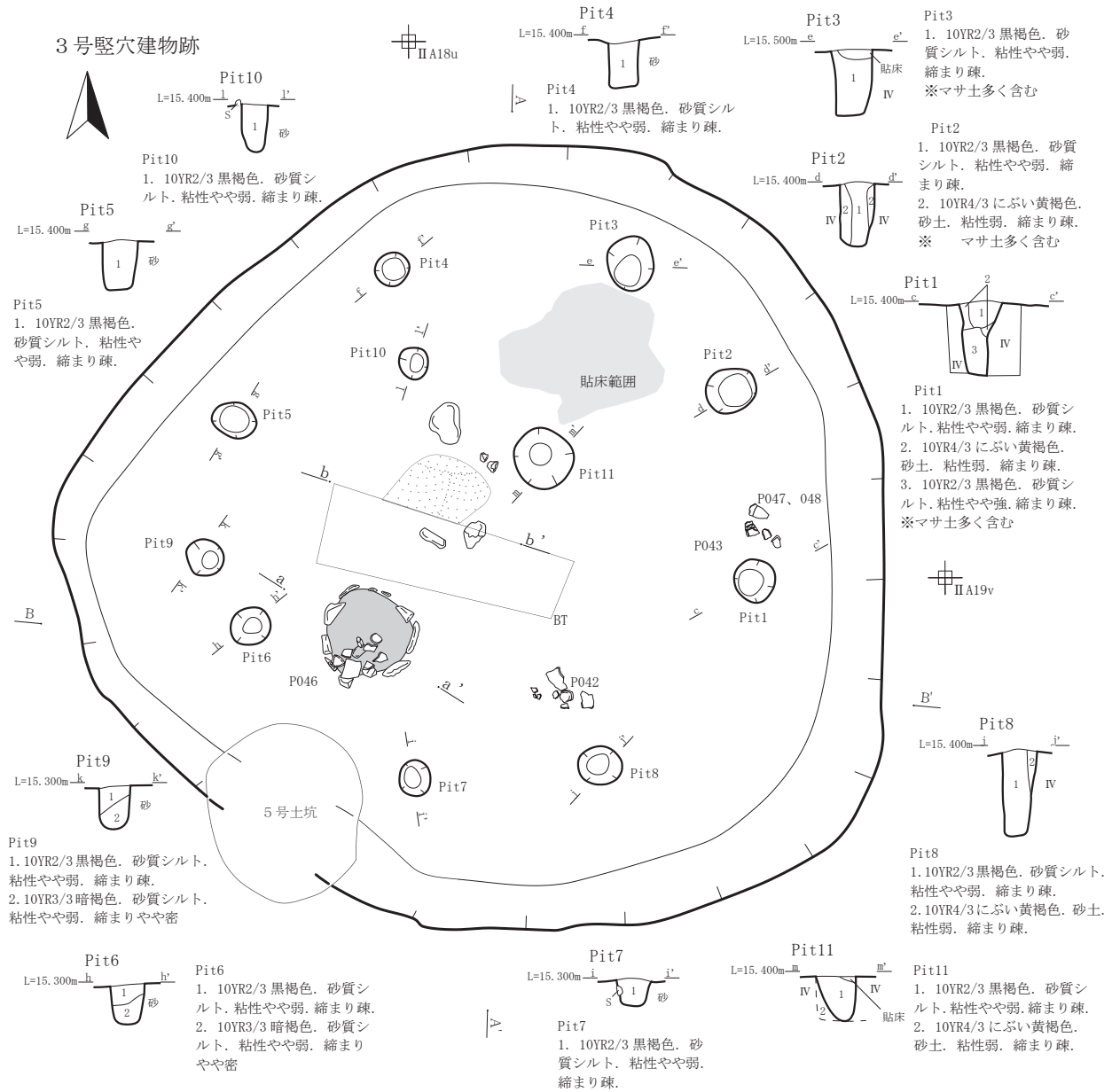
2 遺構



1. 10YR2/3 黒褐色. シルト. 粘性やや強. 縮まり疎.



第 11 図 2号竪穴建物跡



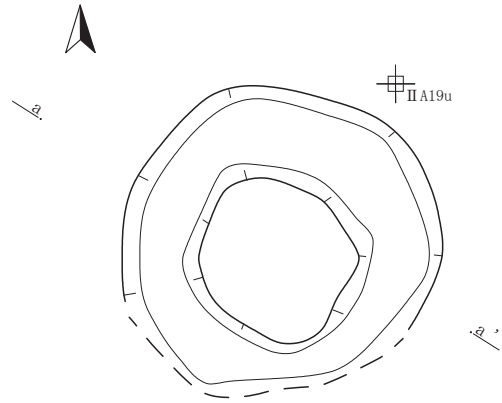
第12図 3号堅穴建物跡(1)

2 遺構

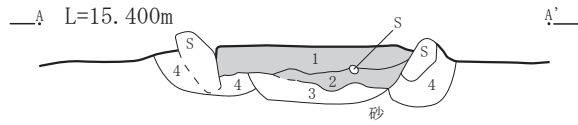
3号竪穴建物跡
炉 1



炉 1 掘りかた

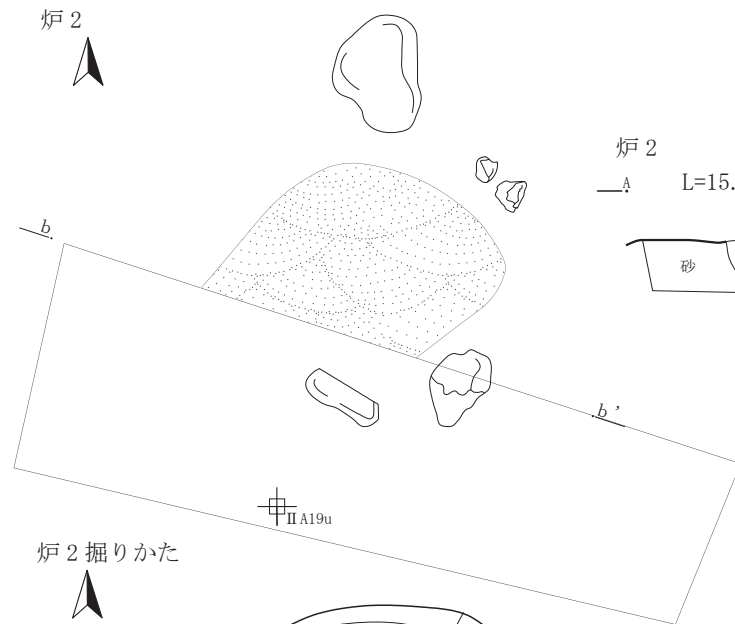


炉 1

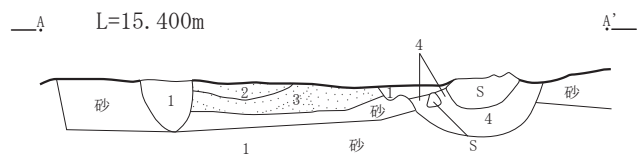


1. 5YR2/3 極暗赤褐色. 砂質シルト. 粘性やや弱. 縮まり疎. 炭化物φ5~8mm 焼土粒φ1~5mm含む
2. 5YR3/6 暗赤褐色. 砂質シルト. 粘性やや弱. 縮まり疎. 炭化物φ2~4mm 少量含む. 焼土粒φ1~5mm 多く含む
3. 5YR4/8 赤褐色. 砂質シルト. 粘性やや弱. 縮まり疎.
4. 10YR3/3 暗褐色. 砂質シルト. 粘性やや弱. 縮まり疎.

炉 2

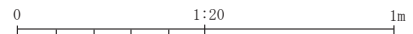
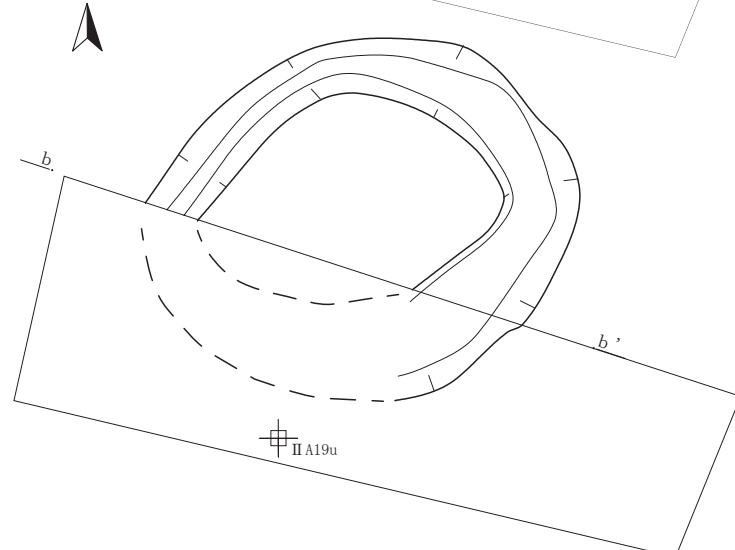


炉 2



1. 10YR3/3 暗褐色. 砂質シルト. 粘性やや弱. 縮まり疎. 縮まりは4より弱い.
2. 5YR2/4 極暗赤褐色. 砂質シルト. 粘性やや弱. 縮まり疎.
3. 5YR4/6 赤褐色. 砂質シルト. 粘性やや弱. 縮まり疎.
4. 10YR3/4 暗褐色. 砂質シルト. 粘性. やや弱. 縮まり疎.

炉 2 掘りかた



第 13 図 3号竪穴建物跡 (2)

失した。床面は3号竪穴の1層上面となっており、浅く落ち込んでいることから、3号竪穴の窪みを利用した住居跡である。〔壁・床面〕壁はなだらかに立ち上がり、床面はボウル状に浅く落ち込む。

〔炉〕炉1は不整形な地床炉である。中央からやや北西側に片寄っている。〔柱穴〕Pit1～4の4本柱である。Pit1～3は3号竪穴の2層を底面とし、Pit4は3号竪穴の3層を底面とする。すべて浅いものである。〔付属施設〕検出しなかった。〔重複関係〕5号土坑、3号竪穴より新しい。〔出土遺物〕床面から縄文土器P008～013、敲磨器S235が出土した。埋土下位からボタン状土製品G002、その他石匙S140、石籠S176、石核S208、石斧S227、敲磨器S236等。〔帰属時期〕床面から出土した遺物と遺構の重複関係から縄文時代中期中葉に帰属する。

(佐藤 剛)

3号竪穴建物跡（第12図・13図、写真図版5・6）

〔位置・検出状況〕調査区中央、ⅡA19u付近に位置する。生文課の試掘の際に、トレンチにより暗褐色土を主体とする落ち込みと焼土（石囲炉2）を検出しており、住居跡を想定し着手した。周囲のⅢ層下位を精査したところ、暗褐色シルトの広がりを検出した。掘り下げたところ、平坦な床面と石囲炉、柱穴、遺物の広がりを確認した。〔規模・形状〕6.3×5.9mで、やや潰れた六角形である。形状は、柱穴の配置に対して南西側と北東側が張り出している。南西側の壁は砂質土のため、北東側は砂状の風化花崗岩のため、使用時または廃棄時に崩落があった可能性がある。このことから本来の形状は楕円形であった可能性がある。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする。西側の半分は砂を主体とする河川堆積層を掘り込んで壁と床面を構築しているため、埋土はやや砂質が強い。〔壁・床面〕壁はやや急角度に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。北側の一部では、暗褐色土に褐色土がブロック状に混じる貼床を検出した。〔炉〕石囲炉1と2は両者とも円形の石囲炉である。石囲炉2は石組が抜き取られていることから、石囲炉2が古く、石囲炉1が新しいと考える。石囲炉1の石組みは円形に溝を掘り込んだ部分に礫の長辺を下にして縦に9個配置し構築している。石組みは南側の一部で途切れているように見えるが、今回の調査におけるトレンチ調査の際に、礫を一部破損させてしまったためであり、本来は一周していた。礫はすべて扁平な中角礫で、石質は風化花崗岩が8点である。石囲炉2の石組みも同様に円形の溝状に掘り込んだ部分に礫を配置し構築している。石組みは南側の1点のみ構築時の状態で残され、それ以外に残っているものは破損しており、その他は抜き取っていると考える。北側の礫は溝の中にはなく、掘り込みも見られないことから、自然の状態と考えるが、石組みの一部として利用していた可能性がある。礫はすべて扁平な中角礫で、石質はすべて風化花崗岩である。〔柱穴〕主柱穴はPit1～8・11で、Pit1～8を周囲に配置し、中央にPit11を配置する。Pit9・10は支柱穴または建替えと考える。〔付属施設〕Pit11〔重複関係〕23号竪穴と11号土坑より新しく、2号竪穴と5号土坑より古い。〔出土遺物〕床面から縄文土器P042・043・045～048、石鏃S006、石斧S218・219、敲磨器S238～240等が出土している。その他石鏃S007～009、石匙S119、スクレイパーS152、石籠S177、敲磨器S241～250、砥石S353、台石S368、棒状の石製品G020等。〔帰属時期〕遺構の重複関係と床面から出土した遺物から縄文時代中期中葉に帰属する。

(佐藤 剛)

4号竪穴建物跡（第14図・15図、写真図版7・8）

〔位置・検出状況〕調査区南、ⅡA23tに位置する。1号竪穴建物跡同様に、褐色シルトの広がりを確認し掘り下げを行い、石組みの炉跡を検出した。〔規模・形状〕5.9×5.2mの楕円形を呈する。床面までの残存深度は59cm前後である。〔埋土・堆積状況〕床面直上にはマサ土を含んだ灰黄褐色シル

トが厚く堆積する。東側ではこの堆積土より黒味が強くなる。炉付近では焼土粒を含むのが確認できる。東壁際には、崩落土として褐色シルトが堆積するが、北側は、重複する遺構の埋土が混じり黒褐色シルトの堆積が認められる。埋土中位～上位には多量の縄文土器を包含している。埋土中位に認められる褐色シルトは調査区南側にのみ確認できるⅢa層に類似する。〔壁・床面〕外傾気味に立ち上がる。西壁は、地山と堆積土が近似しており、床面の締まりをたよりに掘り広げ締まりの無くなった部分をその範囲としている。床面は、Vb層に似るマサ土が硬く締まり、概ね平坦である。〔炉〕検出時に確認された石組みは当初石囲炉を想定していたが、南側に広がる不明瞭なシミにサブトレンチを入れたところ、炭や焼土粒が広がる締まりのある面を確認し前庭部をもつ複式炉と判明した。複式炉は南壁際に設けられる。床面中央側に石囲部が検出され、これに付属して南壁際に掘り窪められた前庭部を検出した。石囲部は、95×75cmのカマボコ形で、磨り石や、同様の規模の花崗岩を用い、二重の石組みが配されている。前庭部に面する部分には、30cm前後の巨礫が間仕切りとなっている。燃焼面は床面より8cm低くなり、カリカリに焼成された焼土が石組部内全体に厚く堆積していた。石組み内燃焼面の前庭部よりには、略完形の縄文土器深鉢が潰れて検出された。前庭部は床面から深さ23cmに掘り窪められ、底面には焼土や炭が散在していた。掘りかたは、石組み部全体を対象としている。複式炉のほかにも、床面で焼土範囲を2カ所検出している。いずれも掘りかたはない。〔柱穴〕壁際に4基検出した。形状から、pit1に対応する柱穴が存在した可能性があるが検出できていない。〔付属遺構〕なし。〔重複遺構〕1号・8号・10号・25号竪穴建物跡、1号土坑を切る。〔出土遺物〕床面及び炉から縄文土器P131～141、石鏃S010・011、敲磨器S251・252等が出土している。その他、石鏃S012～015、スクレイパーS153・168、敲磨器S253～255、砥石S354、軽石製の浮子G031等。〔帰属時期〕遺構の重複関係や竪穴の構造、床面の出土遺物から縄文時代中期中葉～後葉に帰属する。

(佐藤 あゆみ)

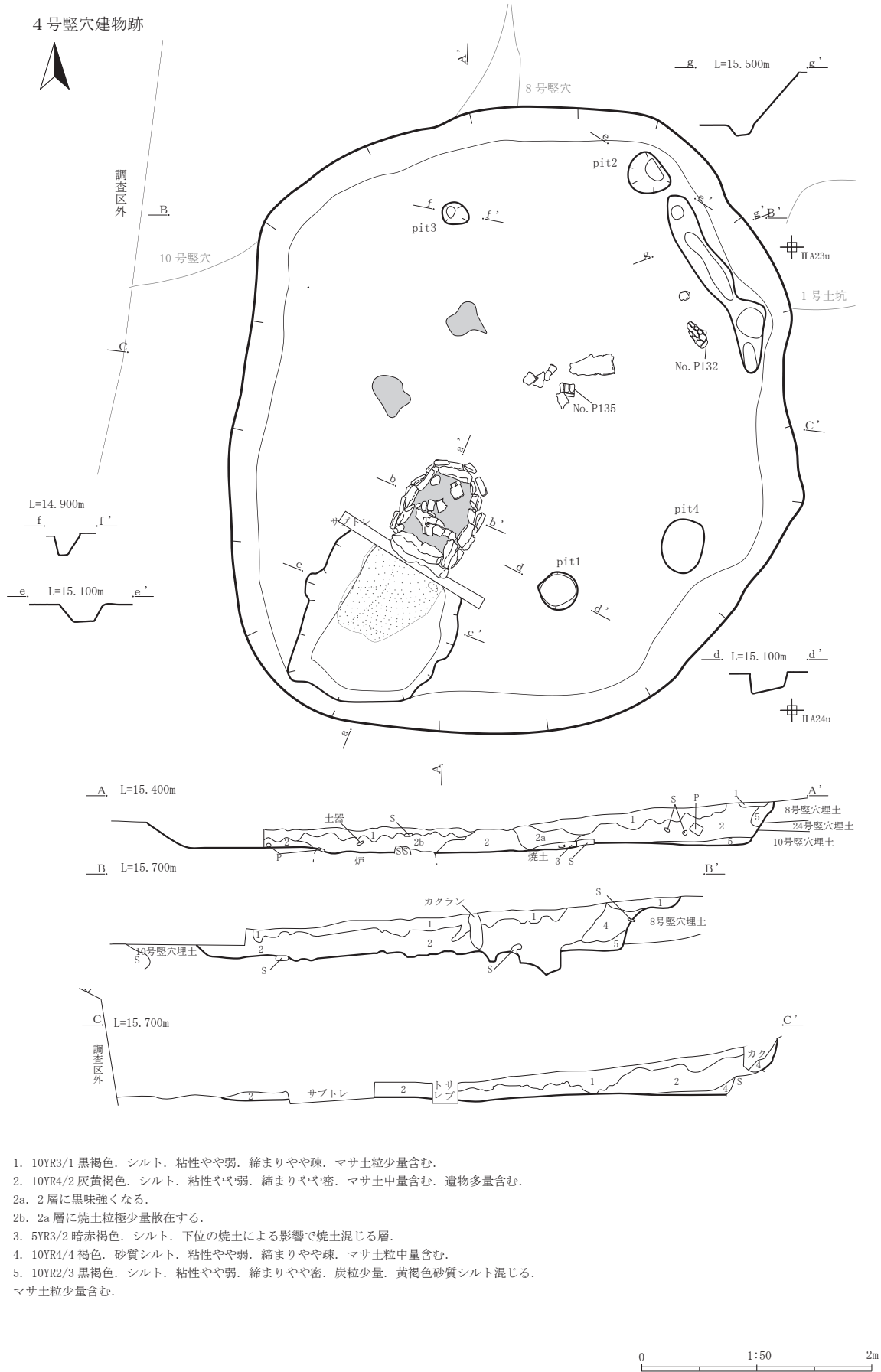
5号竪穴建物跡（第16図、写真図版9）

〔位置・検出状況〕調査区中央、ⅡA17w付近に位置する。Ⅲ層下位を精査中に暗褐色シルトの落ち込みを検出した。掘り下げたところ、平坦な床面と複式炉、炉を確認した。柱穴は床面では検出できず、すべてⅣ層上面まで掘り下げて検出した。〔規模・形状〕5.0×4.3mで、円形である。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする〔壁・床面〕壁はやや急角度に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。〔炉〕複式炉1は長方形の石囲炉と円形の浅い皿状の前庭部が組み合うものである。中央からやや南に片寄っている。石組みは隅丸長方形に溝を掘り込んだ部分に礫を13個配置し構築している。礫はすべて扁平な中角礫で、石質は風化花崗岩が11点、砂岩が2点である。炉1は不整形な地床炉である。複式炉1の南東側に位置する。〔柱穴〕主柱穴はPit2・4～6・11の5本柱である。Pit3・12は支柱穴である。Pit1・7～10は建替えと考える。〔付属施設〕検出しなかった。〔重複関係〕なし。〔出土遺物〕炉から縄文土器P164～166・168、石鏃S016・017、敲磨器S256・257等が出土している。その他、石鏃S018等。〔帰属時期〕出土遺物から縄文時代中期中葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 剛)

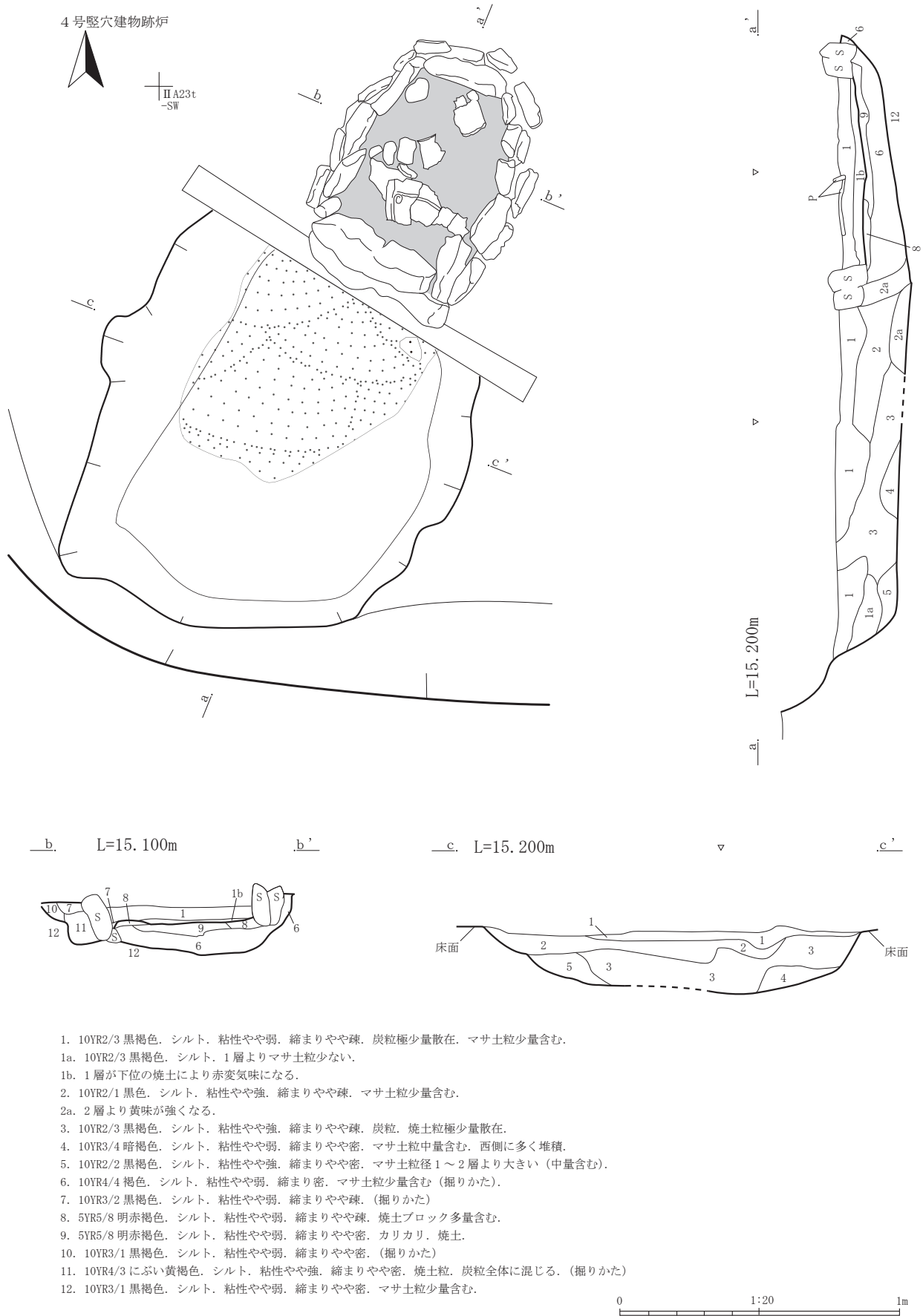
6号竪穴建物跡（第17図、写真図版10）

〔位置・検出状況〕調査区中央、ⅡA20w付近に位置する。Ⅲ層下位を精査中に暗褐色シルトの落ち込みを検出した。調査区の境の壁面を精査したところ、Ⅲ層上面からの掘り込みと炉、平坦な床面を検出した。掘り下げたところ、平坦な床面と柱穴、遺物の広がりを確認した。南西側の壁は先に掘り

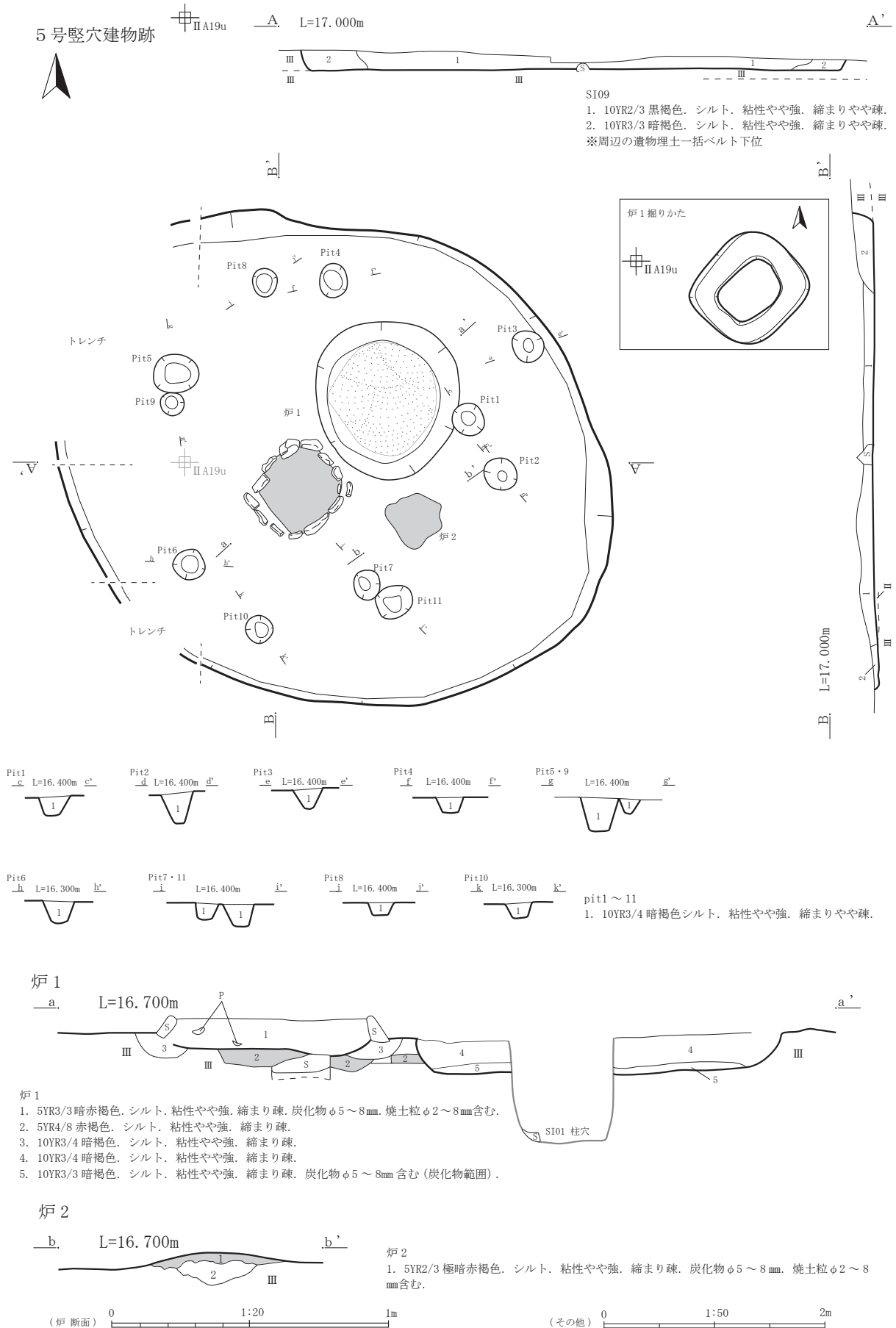


1. 10YR3/1 黒褐色。シルト。粘性やや弱。締まりやや疎。マサ土粒少量含む。
2. 10YR4/2 灰黄褐色。シルト。粘性やや弱。締まりやや密。マサ土中量含む。遺物多量含む。
- 2a. 2層に黒味強くなる。
- 2b. 2a層に焼土粒極少量散在する。
3. 5YR3/2 暗赤褐色。シルト。下位の焼土による影響で焼土混じる層。
4. 10YR4/4 褐色。砂質シルト。粘性やや弱。締まりやや疎。マサ土粒中量含む。
5. 10YR2/3 黒褐色。シルト。粘性やや弱。締まりやや密。炭粒少量。黄褐色砂質シルト混じる。マサ土粒少量含む。

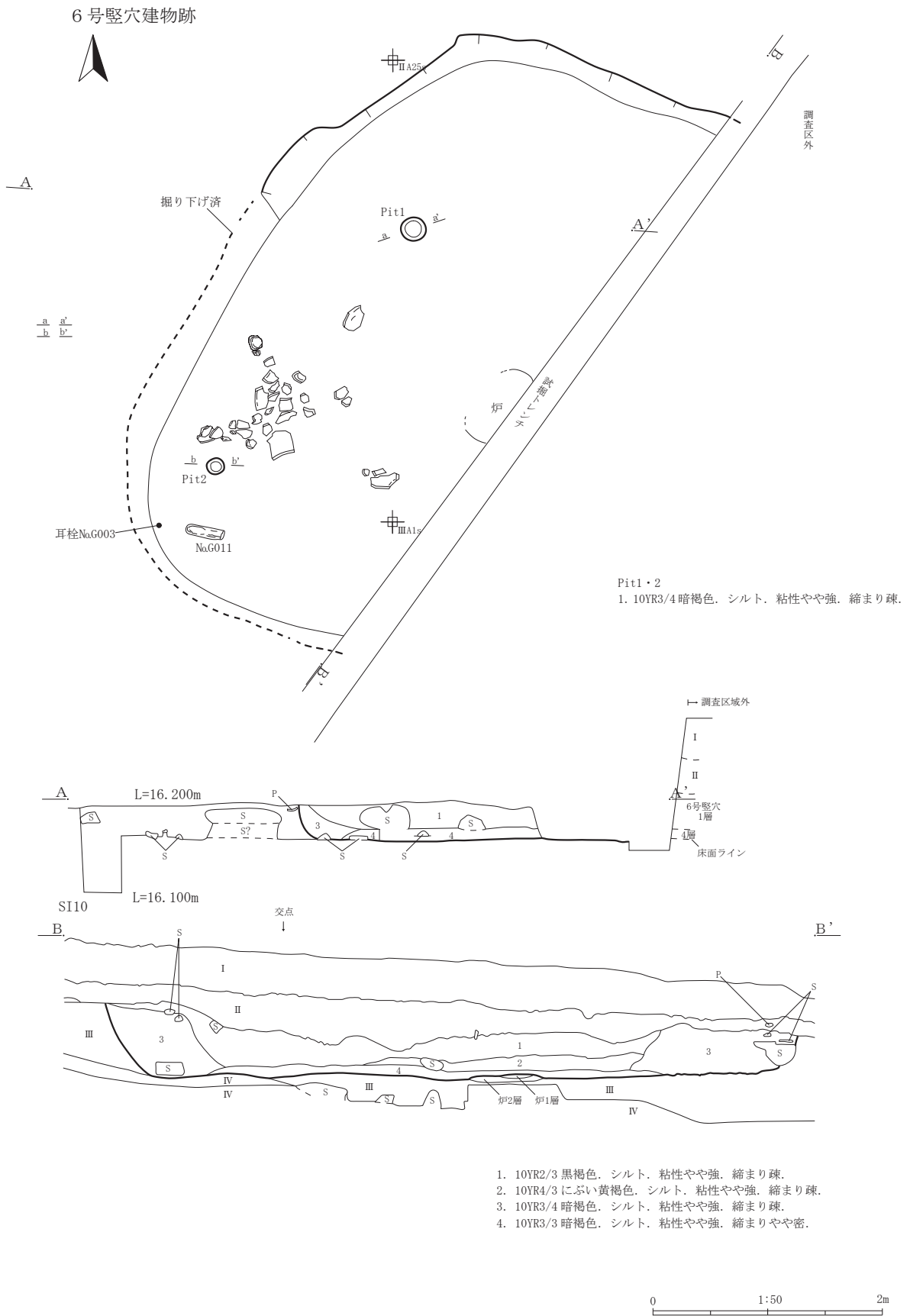
第14図 4号竪穴建物跡(1)



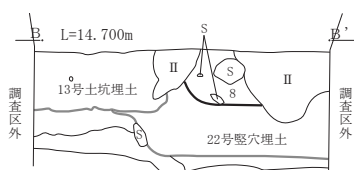
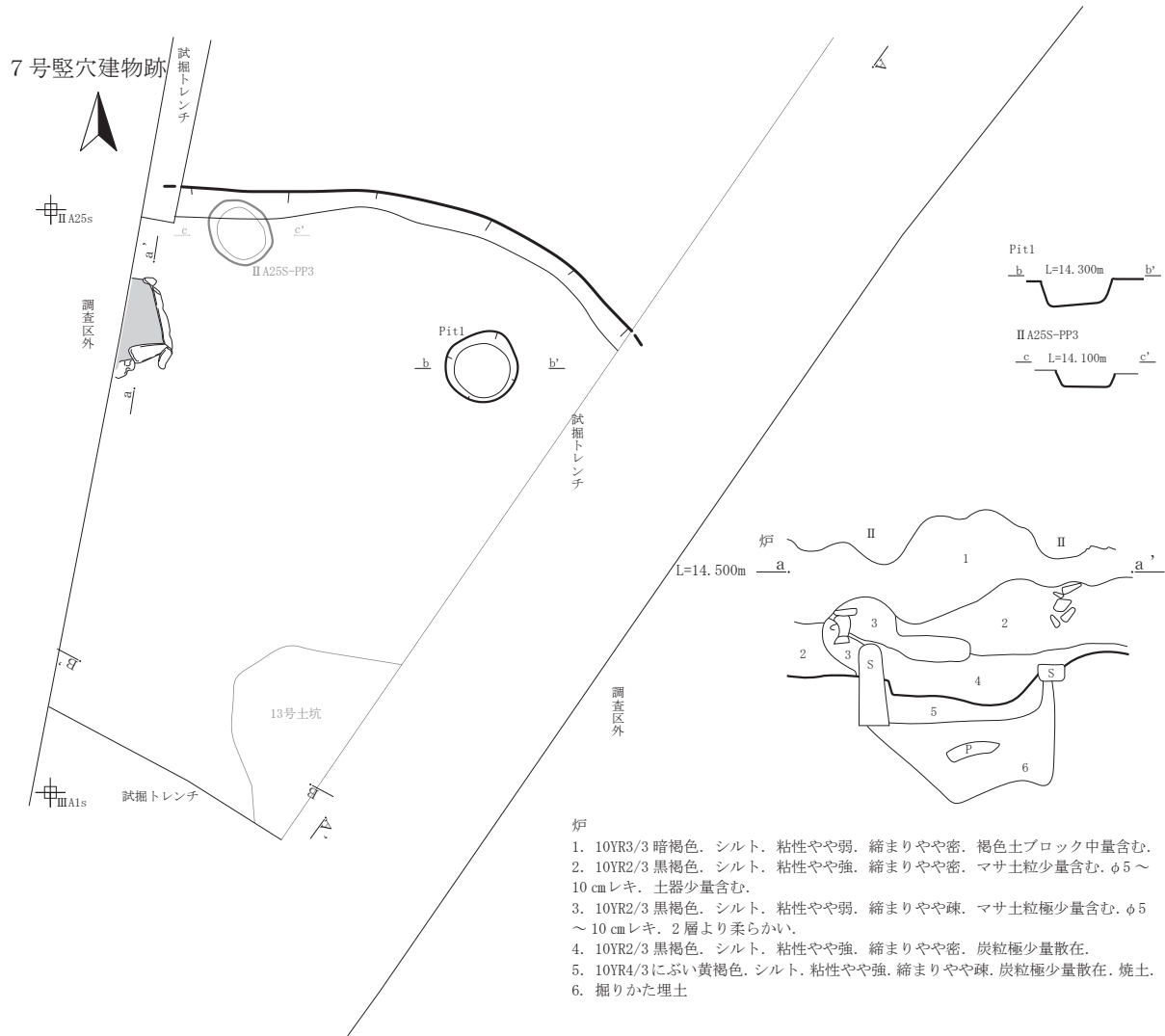
第15図 4号竪穴建物跡(2)



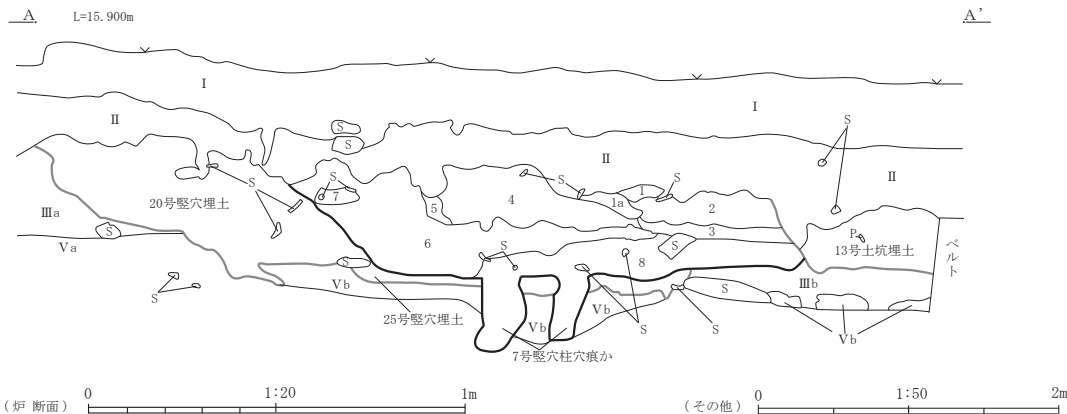
第16図 5号竪穴建物跡



第 17 図 6号竪穴建物跡



1. 10YR2/3 黒褐色. シルト. 粘性やや強. 締まりやや密.
 - 1a. 10YR2/3 黒褐色シルト. 3層に黄褐色土ブロック ($\phi 1$ cm) 含む.
 2. 10YR4/2 灰黄褐色. シルト. 粘性やや強. 締まりやや密. 黄褐色土ブロック中量含む.
 3. 10YR3/3 黒褐色. シルト. 粘性やや強. 締まりやや密. 炭粒極少量散在
 4. 10YR3/4 暗褐色. シルト. 粘性やや強. 締まりやや密. 黄褐色ブロック. にぶい黄橙色砂質土ブロック含む.
 5. 10YR2/2 黒褐色. シルト. 粘性やや強. 締まりやや密.
 6. 10YR2/3 黒褐色. シルト. 粘性やや強. 締まりやや密. 炭粒少量含む.
 7. 10YR3/3 暗褐色. シルト. 粘性やや強. 締まりやや疎. 炭粒少量含む. 焼土ブロック多量含む.
 8. 10YR2/3 黒褐色. シルト. 粘性やや強. 締まりやや密. マサ土粒極少量含む.
- (1. 1a. 4層人為的)



第18図 7号竪穴建物跡

下げてしまったため、欠失してしまった。また、南西側の床面は、上部の堆積と遺物の広がりをもとに確認した。〔規模・形状〕調査区外に広がるため部分的な検出であるが、5.7mの幅をもつ方形基調の遺構である。〔埋土と堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする〔壁・床面〕壁はやや急角度に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。〔炉〕炉1は地床炉である。断面のみの検出のため形状は不明である。〔柱穴〕支柱穴はPit 1・2の2本柱である。〔付属施設〕検出しなかった。〔重複関係〕なし。〔出土遺物〕床面の土器集中範囲から縄文土器P176・177、石鏃S019、敲磨器S258、耳飾り土製品G003、石棒G011等が出土している。その他、石鏃S020～022、石篋S178、敲磨器S259～261等。〔帰属時期〕床面から出土した遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。

(佐藤 剛)

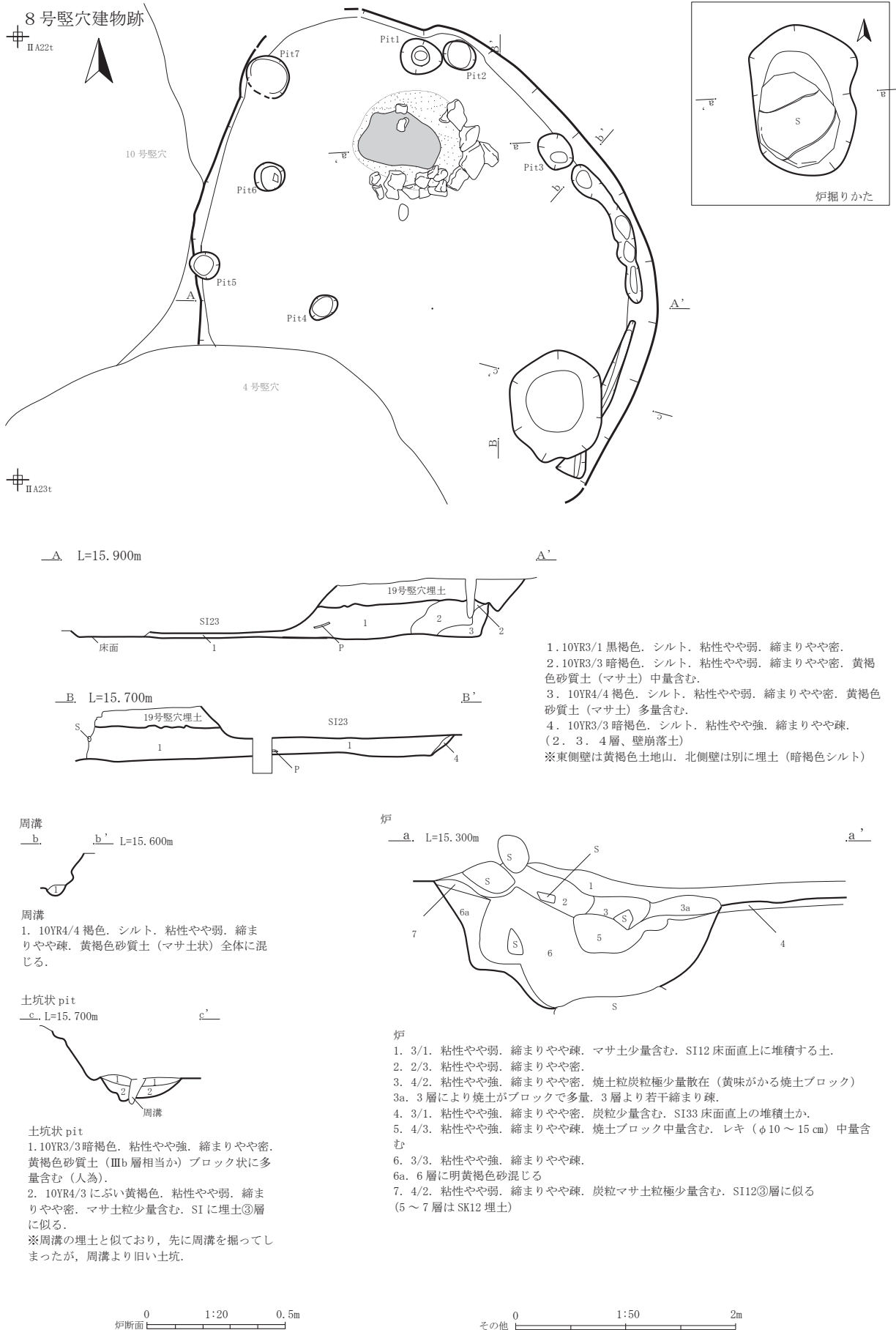
7号竪穴建物跡（第18図、写真図版11）

〔位置・検出状況〕調査区南、ⅡA25s付近に位置する。調査区南端部では、中央部とは違う様相の堆積土が広がり、大量に縄文土器が包含されているのを表土掘削時に確認しており、調査区際をVb層まで掘り込み、調査区壁での土層断面において遺構の検出を行った。〔規模・形状〕東西を調査区外にかかり、南側は試掘トレンチで消失しているため形状は不明である。床面までの残存深度は27cm前後である。〔埋土・堆積状況〕床面直上に堆積する黒褐色シルトは、壁際で炭粒を含む。埋土上位には、黄褐色土がブロックで含まれ人為的な様相を示す。〔壁・床面〕外傾気味に立ち上がる。床面は、重複する23号・26号竪穴建物跡の埋土とVb層が硬く締まり、平坦である。〔炉〕壁際に石囲炉が設けられているが調査区外にかかるため全体像が不明である。直線的な石組みの配置がなされており、方形になると考えられる。土坑状の掘りかたを確認している。〔柱穴〕深さ20cm、直径45cmほどの柱穴が1基検出された。その他、A断面で柱穴状の掘りこみを2カ所確認している。〔付属施設〕なし。〔重複遺構〕21号・23号・26号竪穴建物跡を切り、14号土坑に切られる。〔出土遺物〕埋土下位から縄文土器P216～234、敲磨器S262～264等が出土している。その他、斧状土製品G004、石鏃S023～028、スクレイパーS156～158、半円形石製品G015。〔帰属時期〕出土遺物から縄文時代中期中葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

8号竪穴建物跡（第19図、写真図版12）

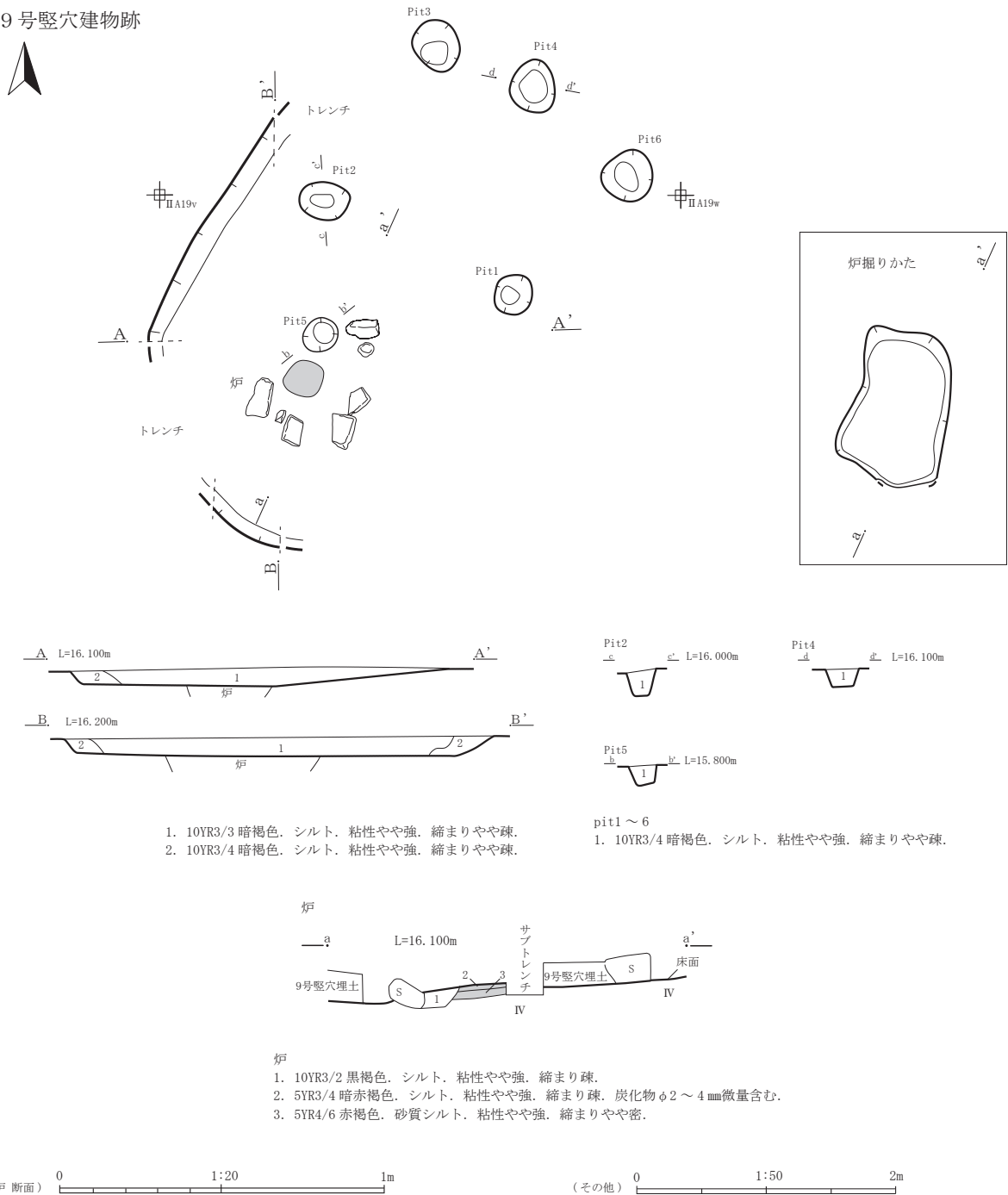
〔位置・検出状況〕調査区南、ⅡA23t付近に位置する。1号竪穴建物跡同様に、褐色シルトの広がりを確認し掘り下げを行い、17号・20号竪穴建物跡精査時検出にいたった。〔規模・形状〕4.3×4.1mの楕円形を呈する。床面までの残存深度は34cm前後である。〔埋土・堆積状況〕床面直上には、黒褐色シルトが厚く堆積する。壁際には、Vb層を起源とするマサ土を多量に含む黄褐色砂質シルトが堆積し崩落土の様相を示す。上部は、17号・20号竪穴建物跡により消失している。〔壁・床面〕直立気味に外傾する。床面は、Vb層が硬く締まり、概ね平坦である。〔炉〕北側に石組みを検出した。石組みは円形であったと考えられるが、一部の礫が雑然と散らばるように検出された。焼土は燃焼面としてではなく、炭粒と混じり石組みの内外で広範囲に散在していた。このことは、炉が破壊されたことが想定される。掘りかたは、135×89cmの大形で床面からの深さは、およそ50cmを測る。底面に径90cm程の礫が露出しているが人為的なものか、Vb層に含まれる巨礫なのかは不明である。〔柱穴〕柱穴が7基検出された。〔付属施設〕西壁際に周溝状の溝を検出しているが、南・東壁際には検出できていない。この周溝には、崩落土と考えられるマサ土が堆積土全体に混じっている。これを切るように、規模が100×81cmの土坑も付属していた。床面からの深さは32cm程、埋土上位が黄褐色砂質土をブロックで含み人為的な様相である。〔重複遺構〕4号・17号・20号竪穴建物



第19図 8号竪穴建物跡

2 遺構

9号竪穴建物跡



第20図 9号竪穴建物跡

跡に切られる。〔出土遺物〕床面から縄文土器P259~261、石鏃S029~033、敲磨器S267等が出土している。その他、石鏃S034~042、石匙S120・121・141、スクレイパーS154・169、石錐S173、石篋S180・181、敲磨器S268~271等。〔帰属時期〕遺構の重複関係や出土遺物から縄文時代前期後葉から中期前葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

9号竪穴建物跡 (第20図、写真図版13)

〔位置・検出状況〕調査区中央、II A19v付近に位置する。IV層上面を精査中に石囲炉と柱穴を検出した。周囲に残っていた土層観察用のベルトを精査したところ、III層下位からの掘り込みと暗褐色シ

ルトの落ち込み、平坦な床面を検出した。さらに、ベルト部分のみで平坦な床面と壁面を確認した。柱穴は床面では検出できず、すべてⅣ層上面まで掘り下げて検出した。〔規模・形状〕一部の検出のみで不明であるが、楕円形または隅丸長方形の可能性がある。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする。〔壁・床面〕壁はなだらかに立ち上がり、床面はほぼ平坦である。〔炉〕石囲炉1は長方形の石囲炉である。柱穴の位置から推定すると長軸側に片寄っている可能性がある。また、Pit5と重複していることから、別の場所から移設してきた可能性がある。しかし、周辺では、他の炉は検出しなかった。石組みは隅丸長方形に掘り込んだ部分に礫を配置し構築している。石組みの礫は南西側の立位の1点のみ構築時の状態で残されているものの、それ以外に残っているものは外側に横倒しになっているか、破損している。掘り方も北西側では形状が広がっているところがあり、北側は抜き取っていると考ええる。これらのことから、石組みを抜き取り後に住居を廃棄したと考える。礫はすべて扁平な中角礫で、石質は風化花崗岩が3点、砂岩が3点である。〔柱穴〕主柱穴はPit1～5またはPit1～4・6の5本柱である。Pit5は石囲炉1を完掘した後に検出したもので、石囲炉1よりも古い。石囲炉と重複しているため、建替えのあった可能性がある。〔付属施設〕検出しなかった。〔重複関係〕柱穴の配置から11号竪穴と重複関係にあった可能性が高いが、周囲を掘り下げてしまったため、不明である。〔出土遺物〕床面および炉から縄文土器P278～280、石鏃S043、台石S369等が出土している。〔帰属時期〕出土遺物から縄文時代中期中葉中葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 剛)

10号竪穴建物跡（第21図、写真図版14）

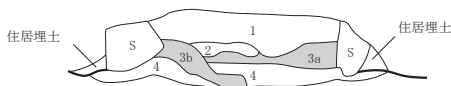
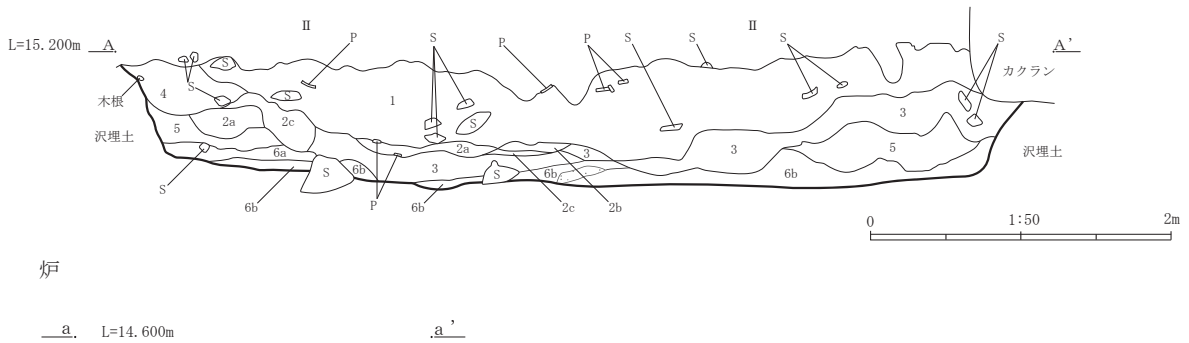
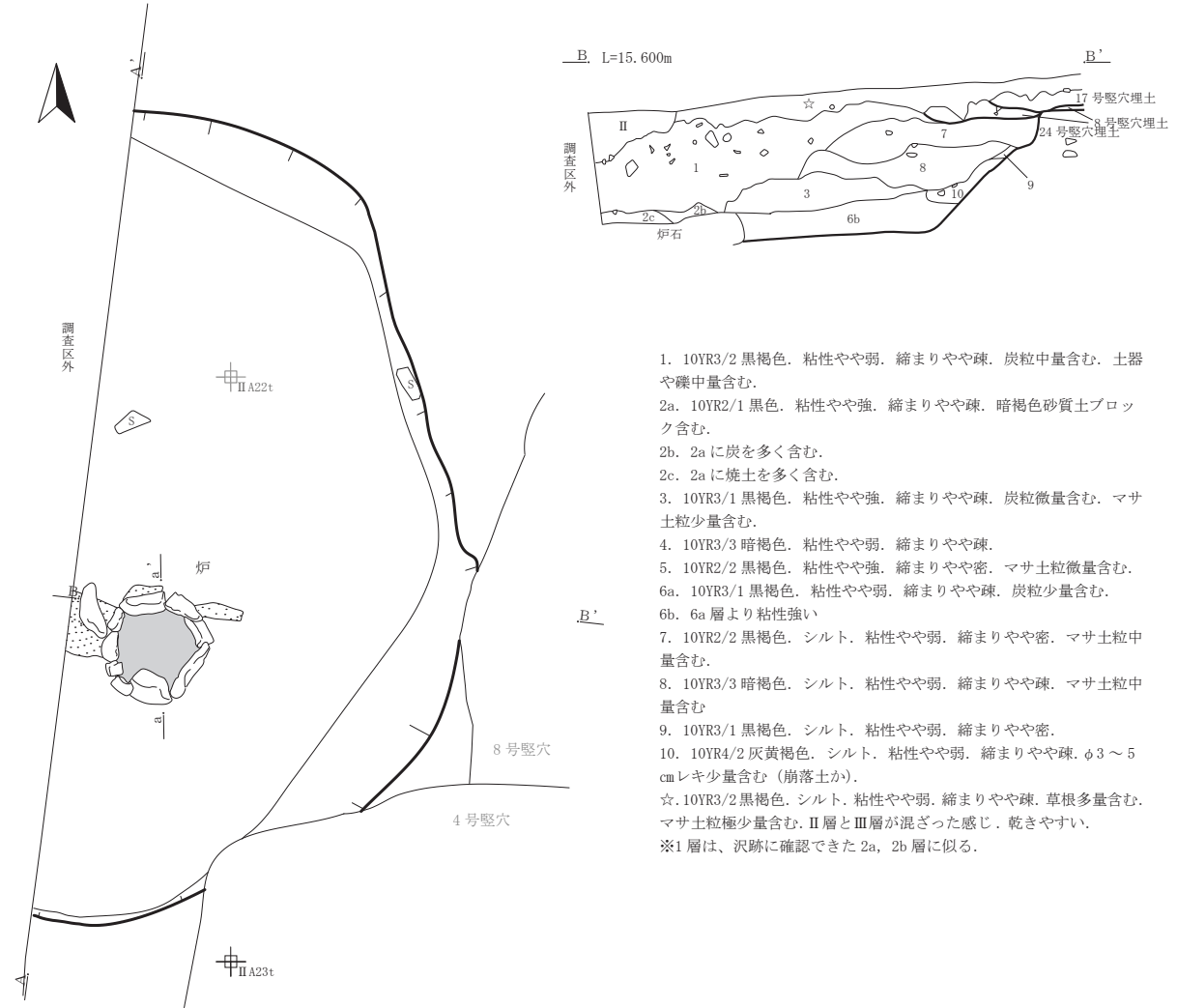
〔位置・検出状況〕調査区南、ⅡA22tに位置する。1号竪穴建物跡同様に、褐色シルトの広がりを確認し掘り下げを行い、8号・17号・25号竪穴建物跡精査時沢跡の埋土とともに検出にいたった。〔規模・形状〕およそ半部を調査区外にかかるが、径5.5mの円形を呈すると考えられる。床面までの残存深度は78cm前後である。〔埋土・堆積状況〕床面直上には、炭粒を含む黒褐色シルトが堆積する。全体的に炭粒を含み、マサ土の混入は少ない。埋土中位には、焼土や炭が廃棄されたような様相で堆積する。埋土上位1層は、沢跡の埋土にも確認ができ、多量の縄文土器を包含している。〔壁・床面〕直立気味に外傾する。本遺構は、沢跡埋土を掘り込んでおり、床面は、粘性のある暗褐色シルトが硬く締まり平坦である。〔炉〕ほぼ中央に石囲炉を検出した。風化した花崗岩を用いた石組みは、円形に配置される。燃焼面は床面とほぼ同じ高さで、モソモソとした焼土が検出された。焼土は石組みの東側にも広がりをみせている。掘りかたは、浅く石組みの重鎮が弱い。〔柱穴〕検出されなかった。〔付属施設〕なし。〔重複遺構〕8号・17号・19号竪穴建物跡、沢跡切る。〔出土遺物〕床面および炉から縄文土器P284～286等が出土している。その他石鏃S044～051、石匙S122、スクレイパーS155・159、石鏃S171、楔形石器S183、石斧S228、敲磨器S272～276等。〔帰属時期〕遺構の重複関係と出土遺物、AMS測定の結果から縄文時代中期前葉から中期中葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

11号竪穴建物跡（第22・23図、写真図版15）

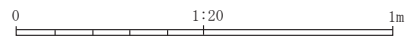
〔位置・検出状況〕調査区中央、ⅡA18w付近に位置する。Ⅲ層下位を精査中に石囲炉を検出した。周囲に残っていた土層観察用のベルトを精査したところ、Ⅲ層下位からの掘り込みと暗褐色シルトの落ち込み、平坦な床面を検出した。掘り下げたところ、ベルト部分のみで平坦な床面と壁面を確認した。柱穴は床面では検出できず、すべてⅣ層上面まで掘り下げて検出した。〔規模・形状〕一部の検出のみで不明である。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする。〔壁・

10号竪穴建物跡

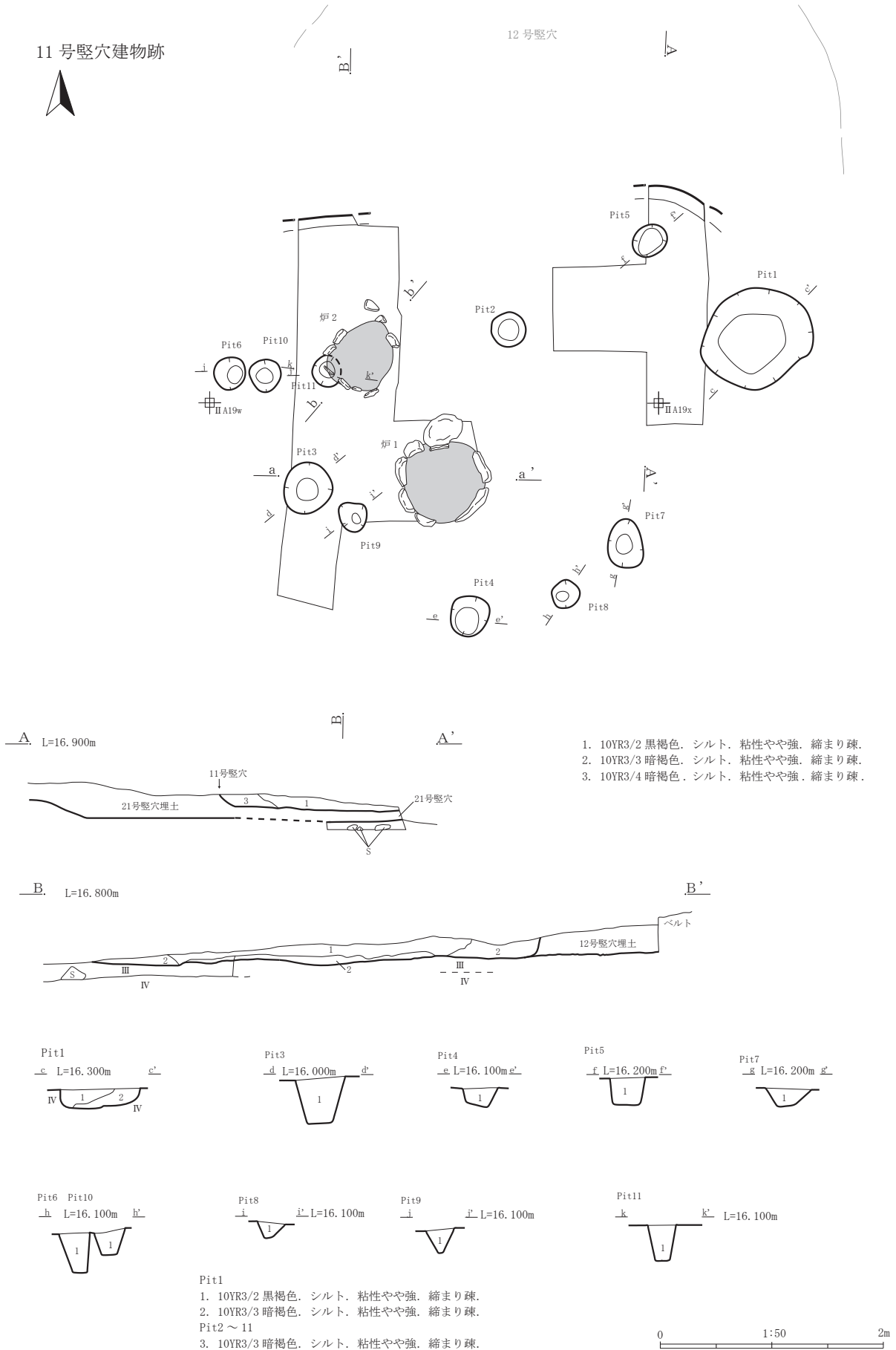


炉

1. 10YR3/1 黒褐色. シルト. 粘性やや弱. 締まりやや疎. 黄褐色砂質土ブロック状に少量含む.
2. 10YR2/3 黒褐色. シルト. 粘性やや強. 締まりやや疎. 焼土ブロック少量含む.
- 3a. 5YR3/2 暗赤褐色. シルト. 粘性やや強. 締まりやや疎. 焼土. モソモソ系.
- 3b. 5YR2/3 極暗赤褐色. シルト. 粘性やや強. 締まりやや疎. 焼土ブロック中量含む. (草木根等で動かされた?)
4. 10YR2/1 黒色. シルト. 粘性やや強. 締まりやや密. 炭粒少量含む.



第21図 10号竪穴建物跡



第22図 11号竪穴建物跡(1)

床面] 壁は急角度に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。〔炉〕石囲炉1は円形で、石囲炉2は方形の石囲炉である。石囲炉2は石組みの多くが抜き取られていることから、石囲炉2が古く、石囲炉1が新しい。石囲炉1の石組みは円形に溝を掘り込んだ部分に礫を7個配置し構築している。石組みは北東側の一部で途切れており、抜き取られた可能性がある。礫はすべて扁平な中角礫で、石質は風化花崗岩が6点、砂岩が1点である。石囲炉2の石組みは長方形に溝を掘り込んだ部分に礫を配置し構築している。石組みは南西側と北西側、南東側と北東側の1点が構築時の状態で残され、その他は抜き取っていると考える。〔柱穴〕支柱穴はPit 2～4・7の4本柱である。Pit 5・6・8～10は支柱穴または建替えと考える。〔付属施設〕Pit 1は円形で浅い皿状の土坑である。埋土は自然堆積と考える。〔重複関係〕12号堅穴、13号堅穴より新しい。柱穴の配置から9号堅穴と重複関係にあった可能性が高いが、周囲を掘り下げてしまったため不明である。〔出土遺物〕床面から縄文土器P319～322・424、石鏃S052、敲磨器S277等が出土している。その他石鏃S053等。〔帰属時期〕床面の出土遺物から縄文時代中期中葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 剛)

12号堅穴建物跡 (第24図、写真図版16)

〔位置・検出状況〕調査区中央、II A18w付近に位置する。III層下位を精査中に石囲炉を検出した。周囲に残っていた土層観察用のベルトを精査したところ、III層下位からの掘り込みと暗褐色シルトの落ち込み、平坦な床面を検出した。掘り下げたところ、ベルト部分と北側に掘り残していた場所で平坦な床面と壁面を確認した。柱穴は床面では検出できず、すべてIV層上面まで掘り下げて検出した。〔規模・形状〕一部のみの検出で不明であるが、5m前後の幅を持つ楕円形の可能性が考えられる。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする。〔壁・床面〕壁は急角度に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。〔炉〕石囲炉1は円形の石囲炉である。中央から南西側に片寄っている。石組みは円形に溝を掘り込んだ部分に礫を12個配置し構築している。礫はすべて扁平な中角礫で、石質はすべて風化花崗岩である。〔柱穴〕支柱穴はPit 2～7の6本柱である。Pit 8は支柱穴と考える。〔付属施設〕Pit 11は円形で浅い皿状の土坑である。埋土は自然堆積と考える。〔重複関係〕11号堅穴より古く、13号堅穴より新しい。〔出土遺物〕床面から縄文土器P329・330、台石S367等が出土している。その他、石鏃S054・055、石匙S142、敲磨器S278等。〔帰属時期〕床面の出土遺物から縄文時代中期中葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 剛)

13号堅穴建物跡 (第25図、写真図版17)

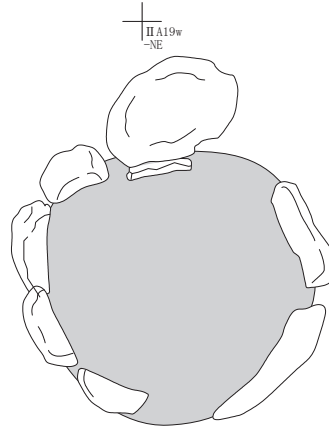
〔位置・検出状況〕調査区中央、II A17w付近に位置する。III層下位を精査中に地床炉を検出した。周囲に残っていた土層観察用のベルトを精査したところ、III層下位からの掘り込みと暗褐色シルトの落ち込み、平坦な床面を検出した。掘り下げたところ、ベルト部分と北側に掘り残していた場所で平坦な床面と壁面を確認した。柱穴は床面では検出できず、すべてIV層上面まで掘り下げて検出した。〔規模・形状〕一部の検出のみで不明であるが、楕円形または隅丸長方形の可能性が高い。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする。地床炉に近接する床面には、細かい炭化物と焼土粒が混じって堆積していた。焼成(燃焼?)面が見られないことから、地床炉からの灰を掻き出したものの可能性がある。〔壁・床面〕壁はやや急角度に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。〔炉〕炉1は不整形な地床炉である。〔柱穴〕支柱穴はPit 1またはPit 2である。1本柱と考えるが、長軸上に組み合う2本柱を検出できなかった可能性もある。Pit 1は埋土と形状から抜き取られたと考えられるため、Pit 2は建替えである。〔付属施設〕検出しなかった。〔重複関係〕12号堅

11号竪穴建物跡

炉 1



a.

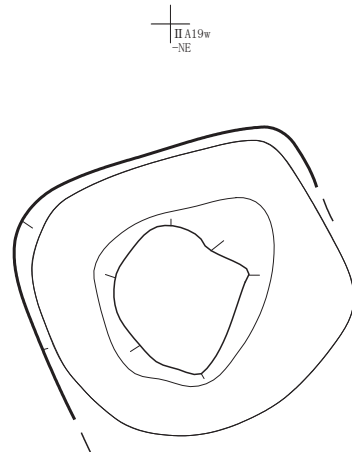


a'

炉 1 掘りかた



a.



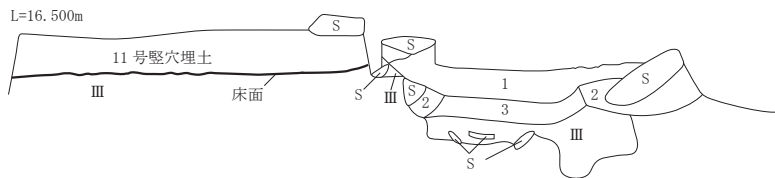
a'

炉 1

1. 5YR3/3 暗赤褐色. シルト. 粘性やや強. 締まり疎. 炭化物 2~4mm 少量含.
2. 10YR3/3 暗褐色. シルト. 粘性やや強. 締まり疎.
3. 5YR4/6 赤褐色. シルト. 粘性やや強. 締まり疎.

炉 1

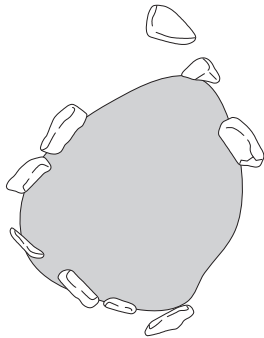
a.



炉 2

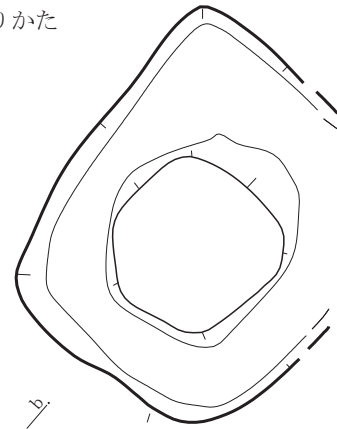


b.



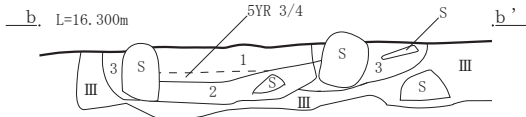
IIA19w -NE

炉 2 掘りかた



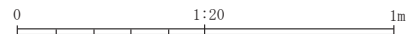
IIA19w -NE

炉 2



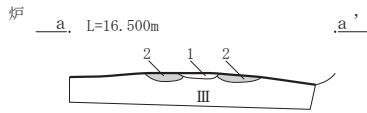
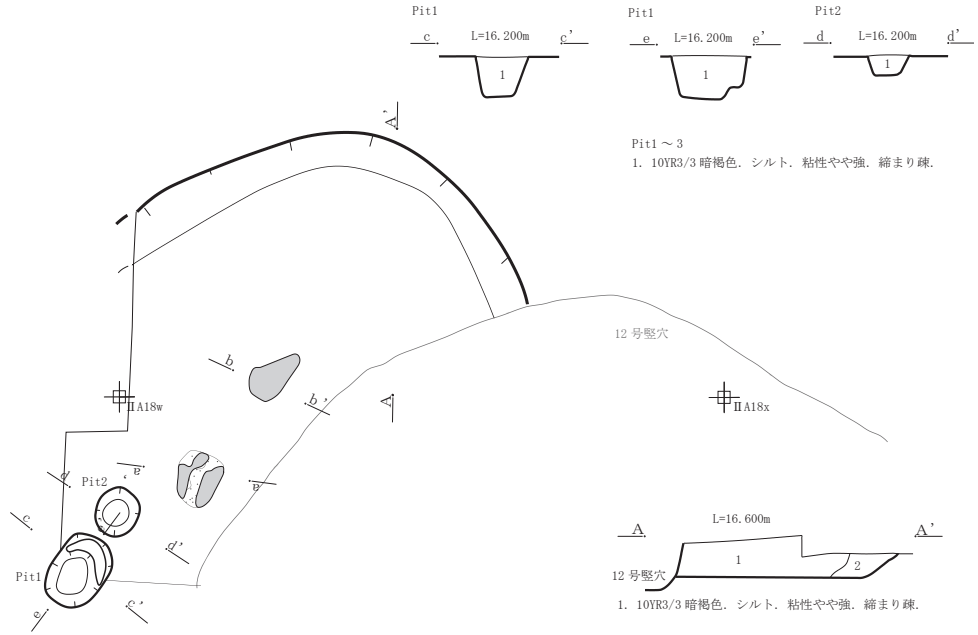
炉 2

1. 5YR3/3 暗赤褐色. シルト. 粘性やや強. 締まり疎. 炭化物 2~4mm 少量含.
2. 5YR4/6 赤褐色. シルト. 粘性やや強. 締まり疎.
3. 10YR3/3 暗褐色. シルト. 粘性やや強. 締まり疎.

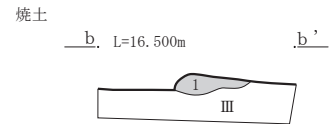


第 23 図 11号竪穴建物跡 (2)

13号竪穴建物跡

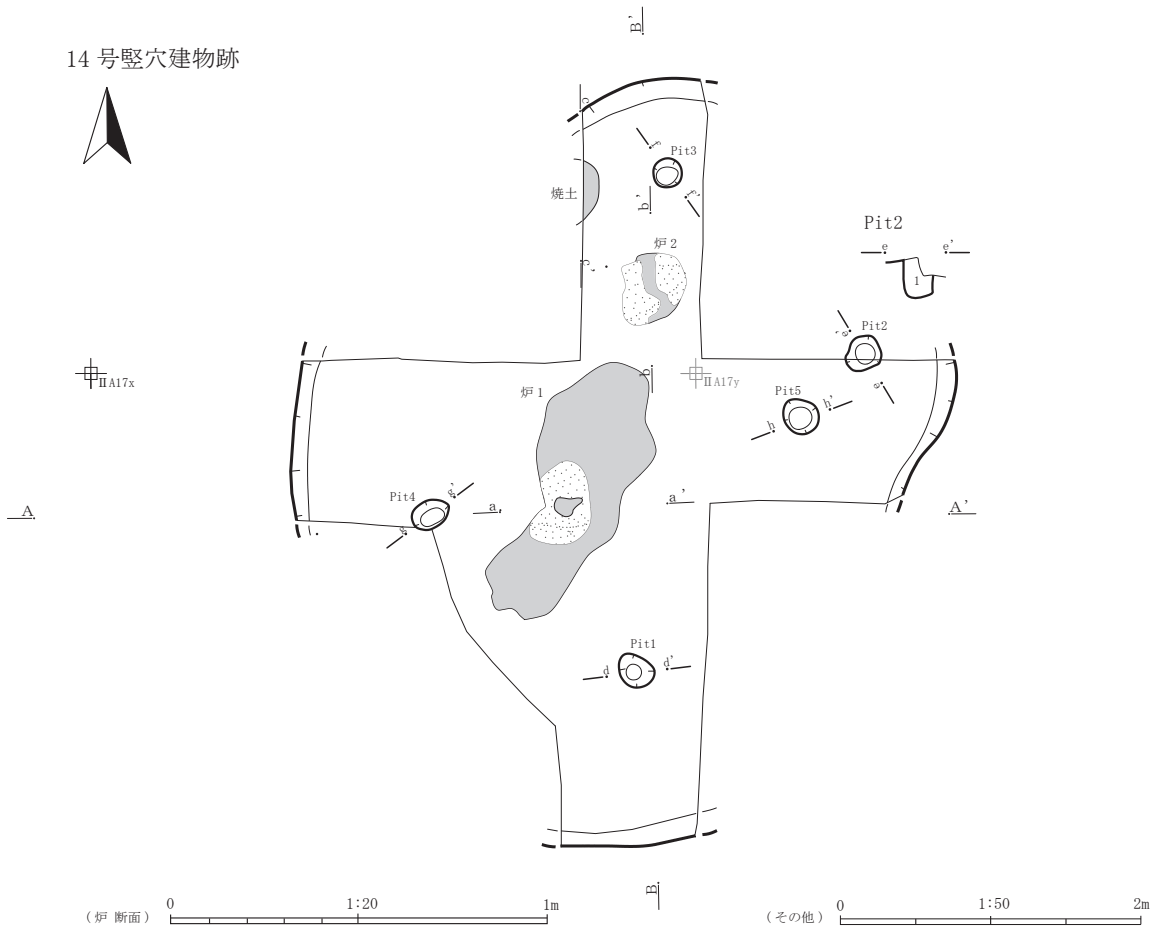


- 炉
- 5YR2/4 極暗赤褐色. シルト. 粘性やや強. 縮まり疎. 炭化物 5 ~ 6mm. 焼土粒 φ2 ~ 8mm 含.
 - 5YR3/4 暗赤褐色. シルト. 粘性やや強. 縮まり疎.



- 焼土
- 5YR2/4 極暗赤褐色. シルト. 粘性やや強. 縮まり疎.

14号竪穴建物跡



第 25 図 13号竪穴建物跡・14号竪穴建物跡 (1)

穴より古い(11号竪穴B-B'参照)。「出土遺物」床面から縄文土器P332等が出土している。「帰属時期」遺構の重複関係と床面の出土遺物から縄文時代前期に帰属すると考えられる。

(佐藤 剛)

14号竪穴建物跡(第25・26図、写真図版18)

〔位置・検出状況〕調査区中央、II A17y付近に位置する。III層下位を精査中に地床炉(炉1)を検出した。周囲に残っていた土層観察用のベルトを精査したところ、III層下位からの掘り込みと暗褐色シルトの落ち込み、平坦な床面を検出した。掘り下げたところ、ベルト部分と南西側の一部で床面を確認し、ベルト部分のみで壁面を確認した。さらに、床面で地床炉(炉2)と柱穴を検出した。〔規模・形状〕5m×4.3mで、一部の検出のみであるが、楕円形の可能性が高い。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする。炉2に近接する床面には、細かい炭化物と焼土粒が混じって堆積していた。焼成(燃焼?)面が見られないことから、地床炉からの灰を掻き出したものの可能性がある。〔壁・床面〕壁はやや急角度に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。〔炉〕炉1と炉2は両者とも不整形な地床炉である。炉1は中央に位置し、炉2は北側に片寄っている。〔柱穴〕主柱穴はPit1～4の4本柱である。Pit5は支柱穴または建替えと考える。〔付属施設〕検出なかった。〔重複関係〕平面での観察から、15号竪穴より新しい。〔出土遺物〕床面から縄文土器P334、石鏃S056等が出土している。その他、敲磨器S279等。〔帰属時期〕遺構の重複関係と床面の出土遺物から縄文時代前期中葉から後葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 剛)

15号竪穴建物跡(第27図、写真図版19)

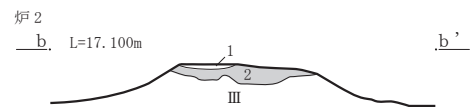
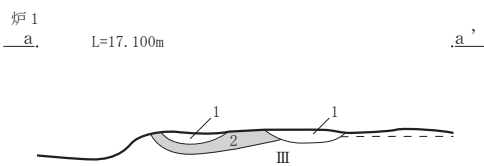
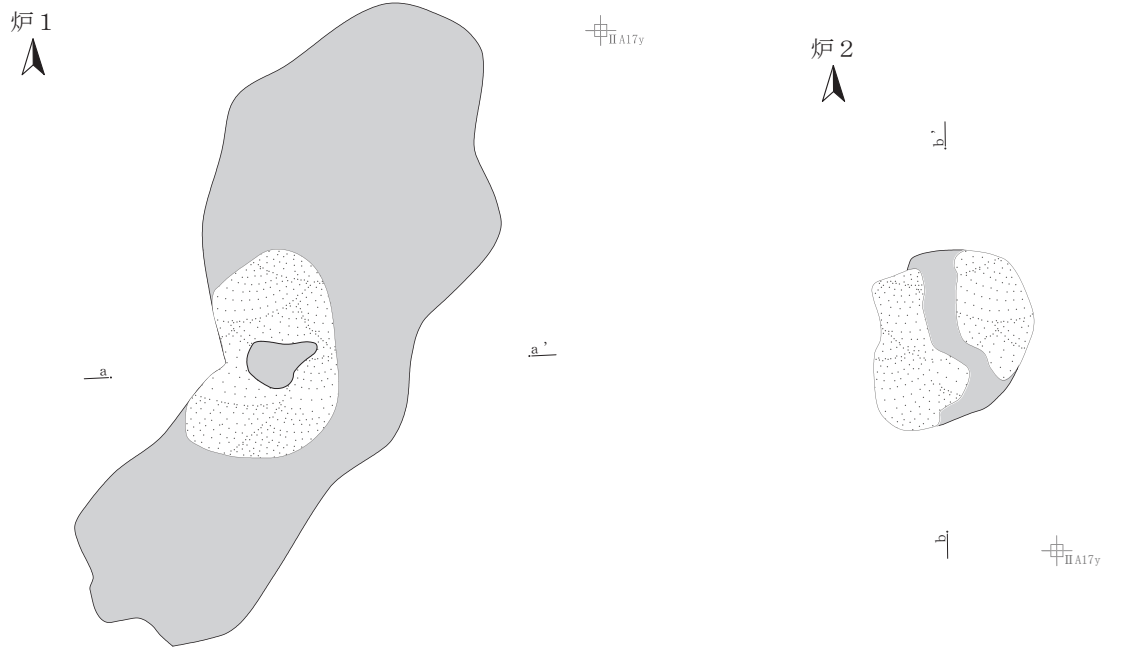
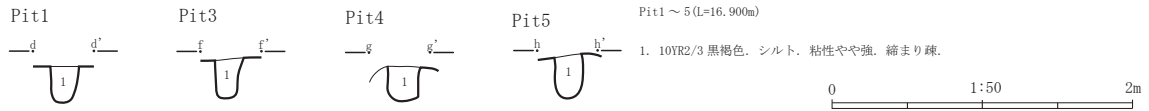
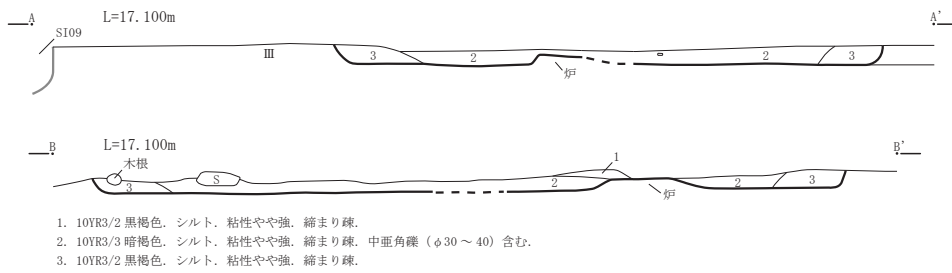
〔位置・検出状況〕調査区中央、II A17x付近に位置する。III層下位を精査中に地床炉を検出した。周囲に残っていた土層観察用のベルトを精査したところ、III層下位からの掘り込みと暗褐色シルトの落ち込み、平坦な床面を検出した。掘り下げたところ、ベルト部分と南西側の一部で床面を確認し、壁面を確認した。柱穴は床面では検出できず、すべてIV層上面まで掘り下げて検出した。〔規模・形状〕5.2m×4.6mで、一部の検出のみであるが、楕円形の可能性が高い。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする。〔壁・床面〕壁はやや急角度に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。〔炉〕炉は不整形な地床炉である。炉は中央からやや前側に片寄っている。〔柱穴〕主柱穴はPit1・4～6の4本柱である。Pit2・3・7は支柱穴または建替えと考える。〔付属施設〕検出なかった。〔重複関係〕平面での観察から14号竪穴より古い。位置から9号竪穴と重複関係にあった可能性が高いが、周囲の西側を掘り下げてしまったため不明である。〔出土遺物〕縄文土器P335～337等が出土している。〔帰属時期〕遺構の重複関係と出土遺物から縄文時代前期中葉から中期前葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 剛)

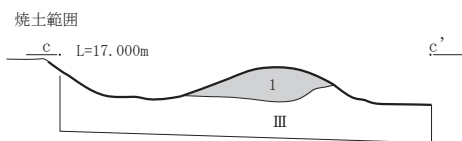
16号竪穴建物跡(第28図、写真図版20)

〔位置・検出状況〕II A15x付近に位置する。III層下位を精査中に地床炉(炉1)を検出した。周囲に残っていた土層観察用のベルトを精査したところ、III層下位からの暗褐色シルトの落ち込みと平坦な床面を検出した。掘り下げたところ、ベルト部分と北側で床面を確認した。床面では土坑(Pit1)を検出した。柱穴は床面では検出できず、すべてIV層上面まで掘り下げて検出した。先に周囲を掘り下げてしまっていたことと、巨礫が点在していたため、壁は確認できなかった。〔規模・形状〕一部の検出のみで不明である。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする。〔壁・床面〕床面はほぼ平坦である。〔炉〕炉1は不整形な地床炉である。炉1は主柱穴の配置

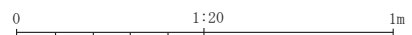
14号竪穴建物跡



- 炉1・2
- 5YR2/4 極暗赤褐色. シルト. 粘性やや強. 縮まり疎. 炭化物φ5~8mm. 焼土粒φ2~8mm含む
 - 5YR3/4 暗赤褐色. シルト. 粘性やや強. 縮まり疎.

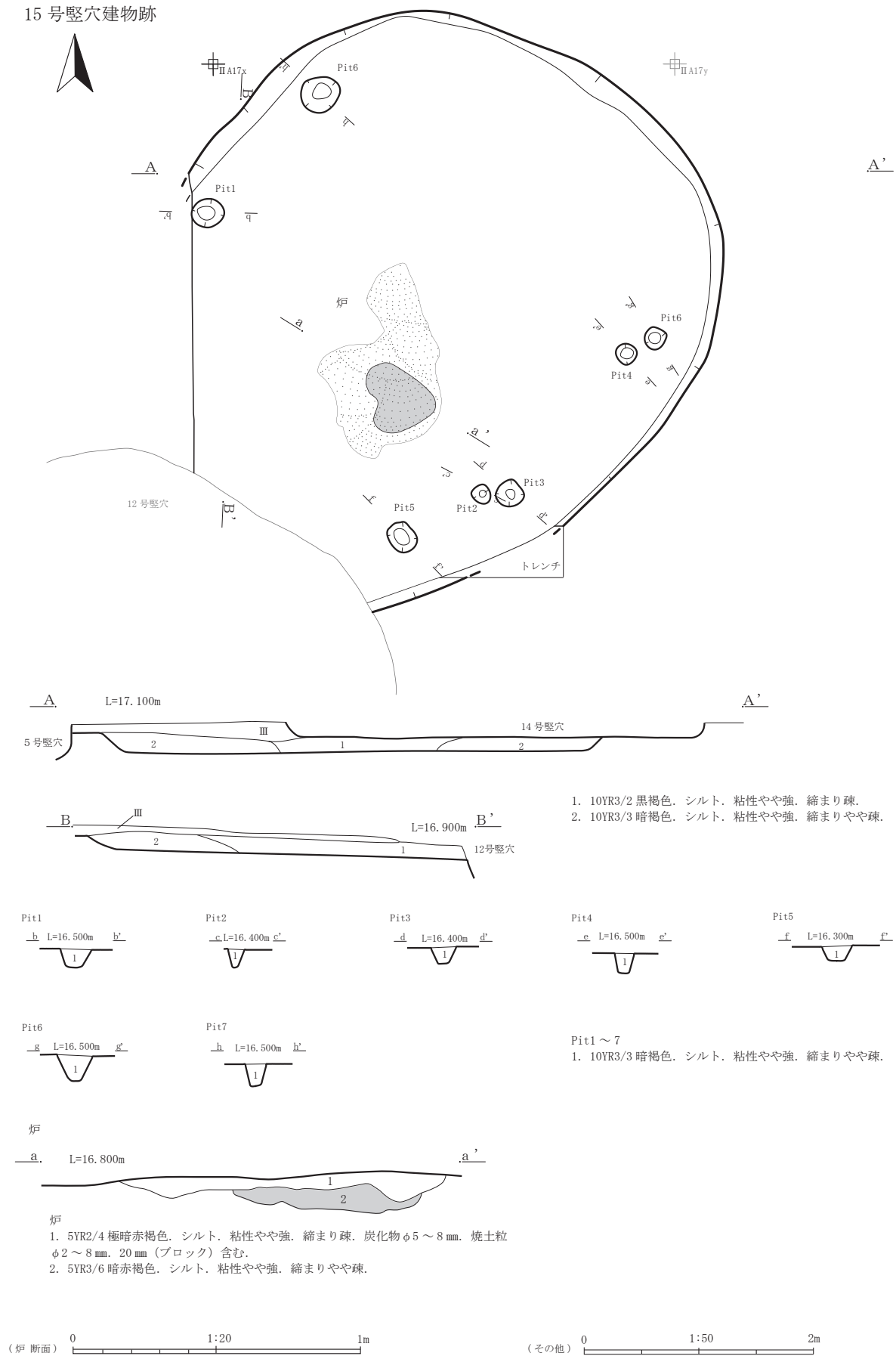


- 焼土
- 5YR3/3 暗赤褐色. シルト. 粘性やや強. 縮まり疎. 炭化物φ5~8mm含む. 焼土ブロック状 (φ10~30mm)

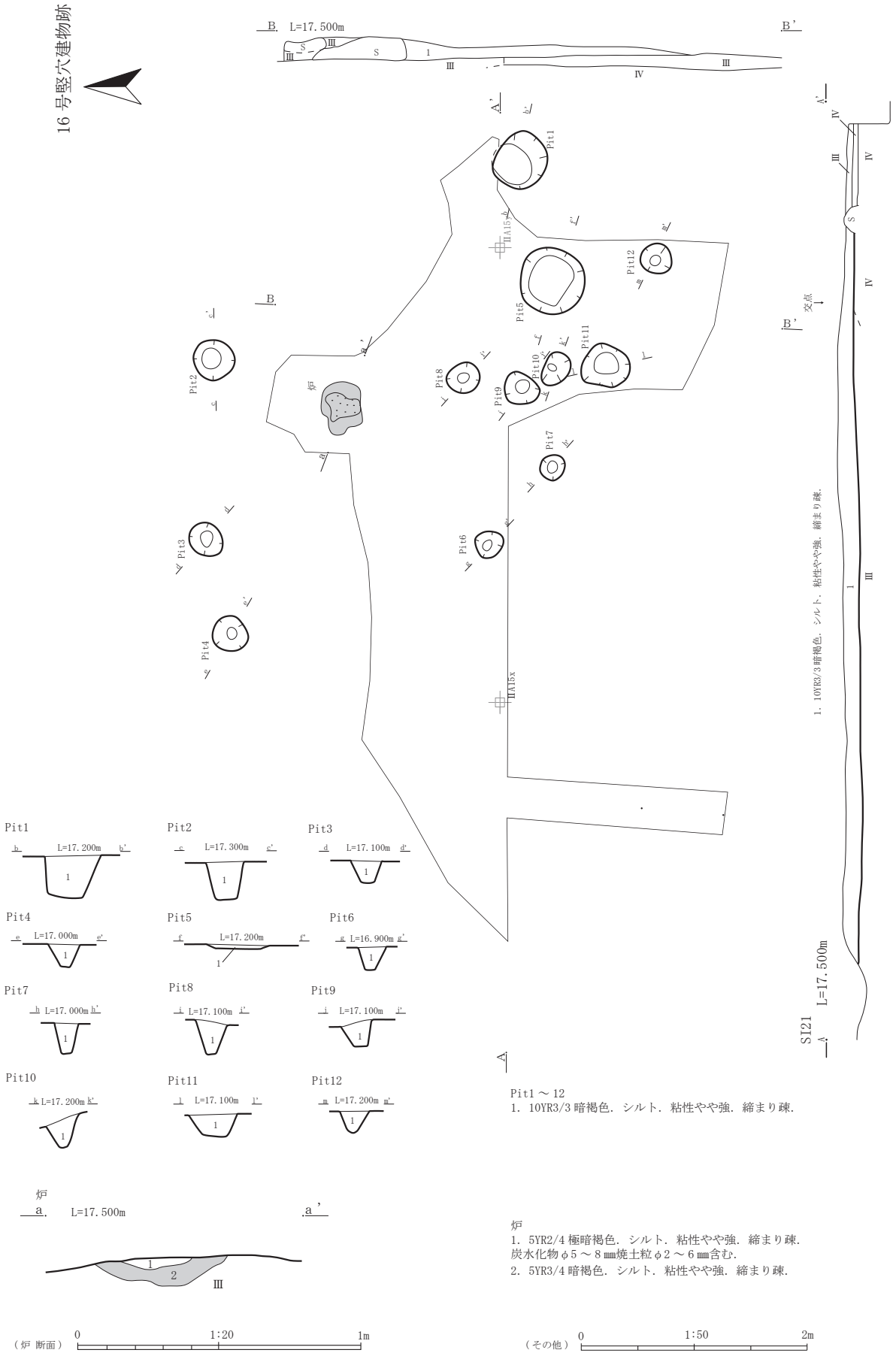


第26図 14号竪穴建物跡(2)

2 遺構



第27図 15号竪穴建物跡



第28図 16号竪穴建物跡

に対して南東側に片寄っている。〔柱穴〕支柱穴はPit 1～4・11の5本である。Pit11の南西側は、先にIV層まで掘り下げてしまったことと、微地形で南側に傾斜していることから、1本を検出できなかった6本柱と考える。Pit 1・11は他と比較して大型のもので、周囲が微地形で傾斜していることから低い側に大型の柱を立てた可能性がある。南東側のPit 5の周囲にPit 6～10・12が不規則にまとまって分布する。Pit10・12は先端がやや尖るものである。〔付属施設〕Pit 5は円形で浅い皿状の土坑である。埋土は自然堆積と考える。〔重複関係〕なし。〔出土遺物〕縄文土器P338・339・562等が出土している。〔帰属時期〕出土遺物から縄文時代前期中葉から後葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 剛)

17号竪穴建物跡 (第29図、写真図版21)

〔位置・検出状況〕調査区南、II A22tに位置する。8号竪穴建物跡精査時に、重複する遺構の広がりを確認しサブトレンチを設定し土層断面で検出を行った。〔規模・形状〕およそ3.9×3.5mの円形を呈する。床面までの残存深度は59cm前後である。〔埋土・堆積状況〕埋土下位に厚く堆積するのは、土器を大量に包含するⅢa層に似る灰褐色シルトである。埋土上位の黒褐色シルトは草根を多量に残し、乾きやすい。〔壁・床面〕直立気味に外傾する。床面は、25号竪穴の埋土である黒褐色シルトが硬く締まり平坦である。〔炉〕北東よりに石囲炉を検出した。70×40cmほどの規模で石組は横長に配置される。石組は風化した花崗岩等を用いているが、一部抜けている部分が認められた。燃焼面は床面とほぼ同じ高さで、焼成の良い焼土が石組内に堆積していた。燃焼面上では、縄文土器深鉢の底部が出土している。掘りかたは、石組の規模とほぼ同じで、床面からの深さは12cmほどの浅鉢状のため石組みの重鎮が弱い。〔柱穴〕2個検出されたが、南側でこれらに対応する柱穴は検出されなかった。〔付属施設〕なし。〔重複遺構〕8号・10号・20号竪穴建物跡、沢跡を切る。4号竪穴建物跡に切られる。〔出土遺物〕石斧S220等が出土している。〔帰属時期〕遺構の重複関係から、縄文時代中葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

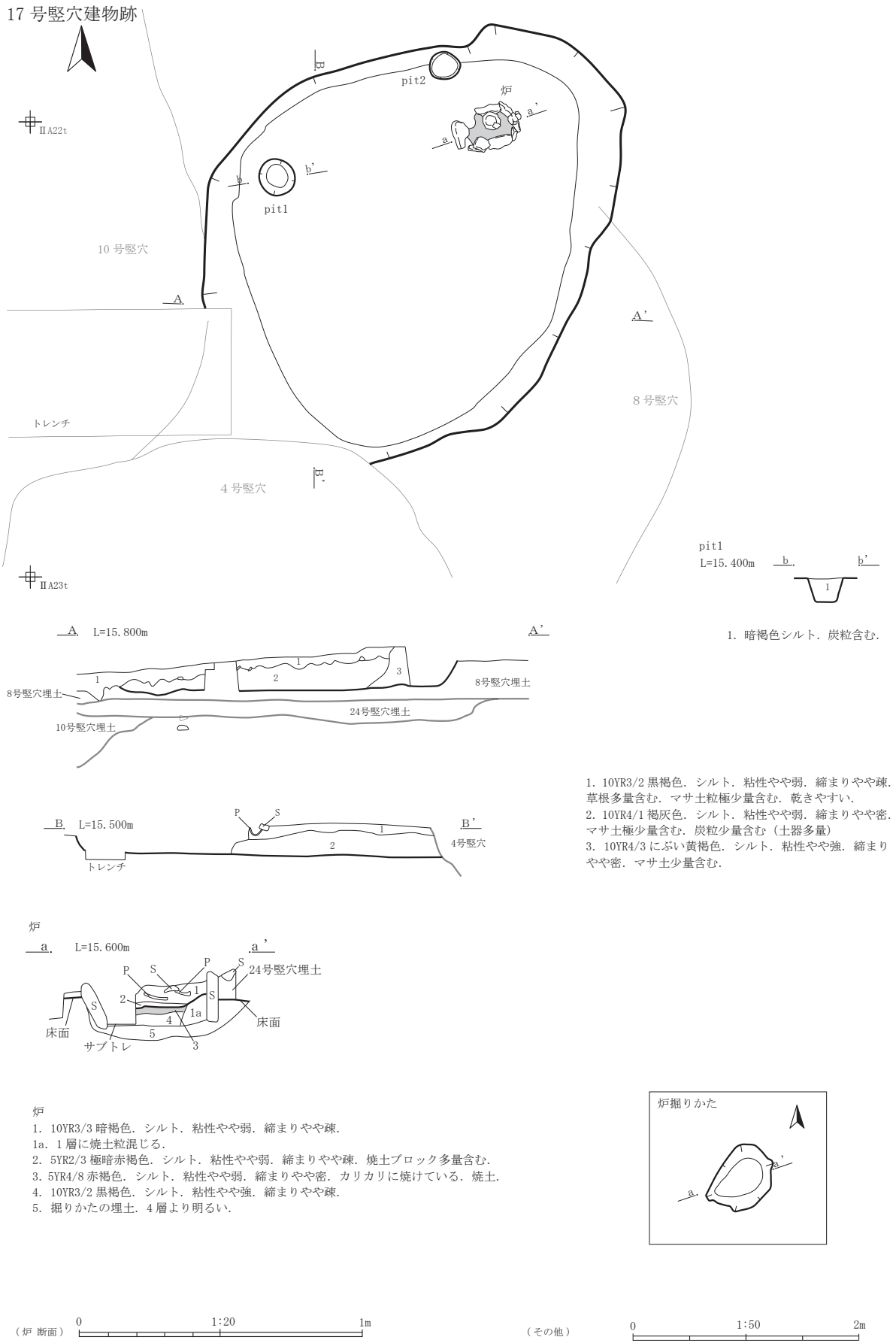
18号竪穴建物跡 (第30図、写真図版22)

〔位置・検出状況〕調査区北、II B13c～II B14cグリッドで、Ⅲ層下位からⅣ層を掘り下げ中、V層面で黒褐色土の広がりとして検出した。東側が調査区域外にかかる。遺構の多くの部分は、調査区域外の東側にあると推測される。竪穴建物跡全体の西端部のみを確認したにすぎない。〔規模・形状〕検出した範囲で、開口部4.6×0.6m以上、床面4.4×0.4m以上と推定される。確認された一辺は直線的であり、平面形は方形または長方形と推測される。残存する壁高は30cmである。〔埋土・堆積状況〕主に黒褐色土で構成される。〔壁・床面〕壁は直立して立ち上がる。床面はV層の黄褐色土層面を掘り込んでつくられており、ほぼ平坦である。西壁際の床面に不規則ながら周溝が巡るようである。周溝は上幅20～15cm、下幅10～8cm、深さ10～15cmである。〔炉〕検出した範囲では確認されなかった。〔柱穴〕確認されていない。配置は不明である。調査区域外にあるものと推測される。〔付属施設〕なし。〔重複遺構〕埋土中に2号焼土遺構が形成されていた。18号竪穴建物跡の埋没後に形成された焼土である。18号竪穴建物跡(旧)→2号焼土遺構(新)の関係がある。〔出土遺物〕西壁際の埋土中より敲磨器S280～282が出土した。なお、当該遺構の検出面で周辺から縄文時代前期の土器が出土した。〔帰属時期〕遺構の形状と出土遺物から、縄文時代前期前葉から中葉と推測される。

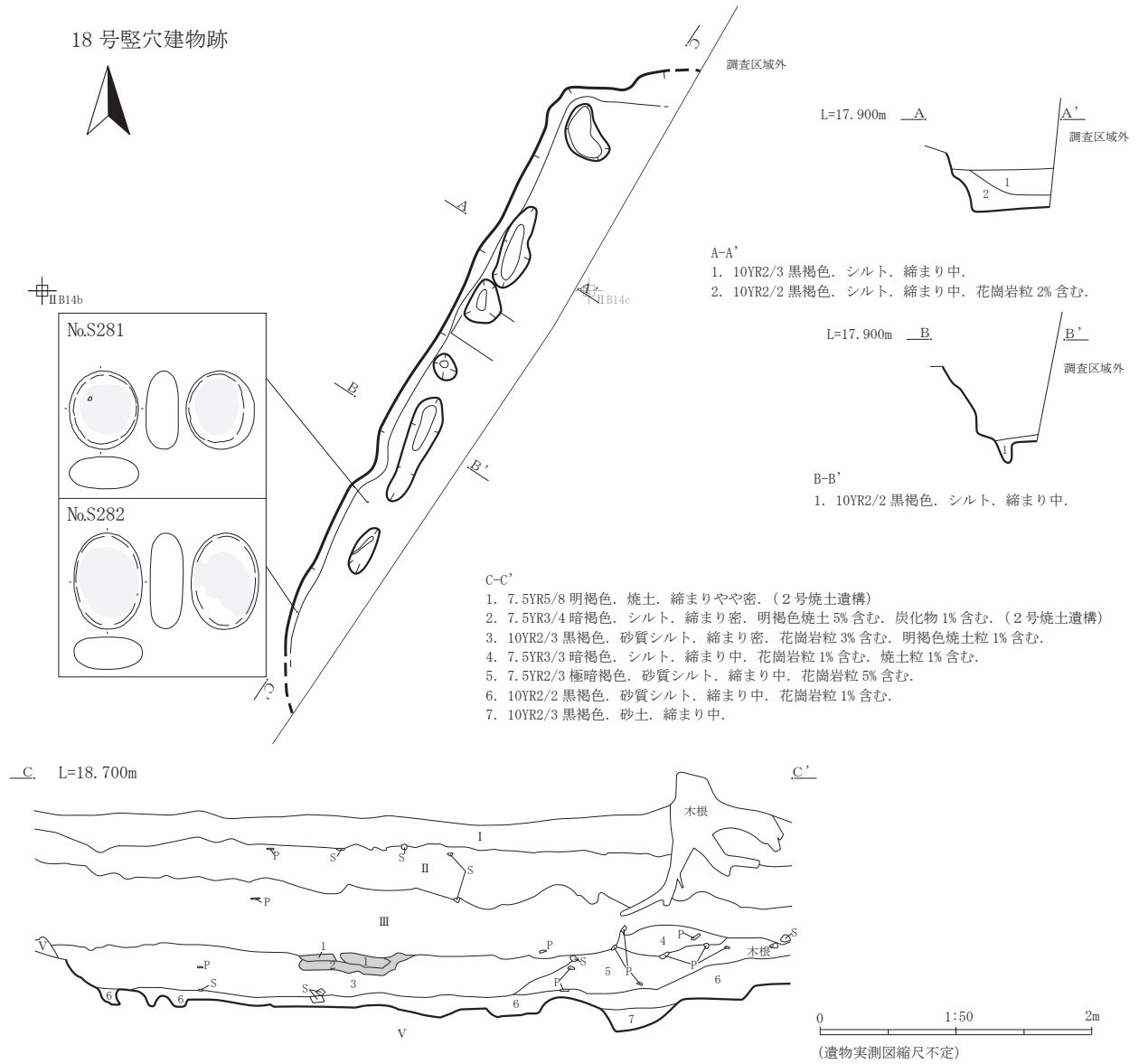
(阿部 勝則)

19号竪穴建物跡 (第31図、写真図版23)

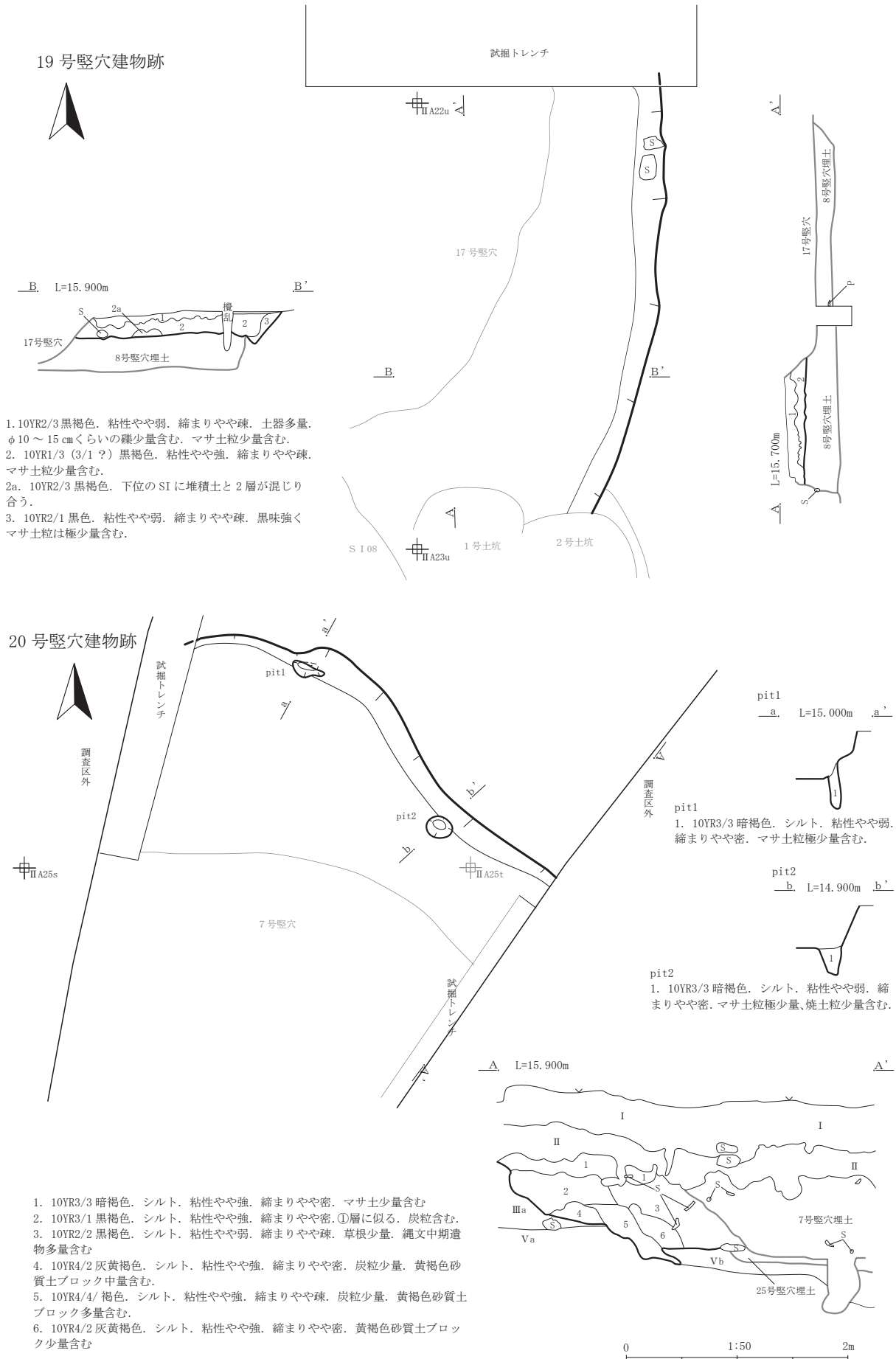
〔位置・検出状況〕調査区南、II A22uに位置する。8号竪穴建物跡精査時に、硬く締まる範囲を広



第29図 17号竪穴建物跡



第 30 図 18号竪穴建物跡



第 31 図 19号竪穴建物跡・20号竪穴建物跡

げたところ、床面の土色が大きく変化する部分を確認した。8号竪穴の埋土が硬く締まる範囲と水平に、地山のVb層に近い黄褐色シルトがしまる範囲を検出し、重複する遺構として検出した。〔規模・形状〕大半を、竪穴が重複しており全容は不明である。床面までの残存深度は33cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土下位に堆積するのは、黒褐色シルトである。一部床面下の8号竪穴の埋土と混じる様相を示す。壁際の堆積土はより黒味を増す。埋土上位の黒褐色シルトには土器を多量に包含している。〔壁・床面〕外傾する。北側の壁から張り付くように礫が2個並んで出土している。床面は、硬く締まり平坦である。〔炉〕検出されなかった。重複する竪穴によって消失していると考えられる。〔柱穴〕検出されなかった。〔付属施設〕B断面において、壁際に落ち込みを確認している。しかし、平面的に床面から周溝のようなものは検出されなかった。〔重複遺構〕4号・20号竪穴建物跡、1号・2号土坑に切られる。1号竪穴建物跡を切る。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕遺構の重複関係から縄文時代中期中葉以前に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

20号竪穴建物跡（第31図、写真図版24）

〔位置・検出状況〕調査区南、II A24sに位置する。7号竪穴同様に、調査区南端部では、中央部とは違う様相の堆積土が広がり、大量に縄文土器が包含されているのを表土掘削時に確認しており、調査区際をVb層まで掘り込み、調査区壁での土層断面において遺構の検出を行った。〔規模・形状〕大半を、7号竪穴に切られ全容は不明である。床面までの残存深度は49cm前後である。〔埋土・堆積状況〕埋土の主体となるのは、縄文時代中期の土器片を多量に包含する黒褐色シルトである。壁際には、明るい褐色シルトが堆積し、黄褐色砂質土がブロック状に含まれ、壁の崩落土の様相を示す。

〔壁・床面〕外傾する。床面は、一部地山のVb層が硬く締まり平坦である。〔炉〕検出されなかった。重複する7号竪穴によって消失していると考えられる。〔柱穴〕壁際に2個検出した。土層断面上でも、壁際に柱穴状の掘り込みを確認している。〔付属施設〕なし。〔重複遺構〕7号竪穴建物跡に切られる。25号竪穴建物跡を切る。〔出土遺物〕床面から、敲磨器S285・286等が出土している。

〔帰属時期〕遺構の重複関係から、縄文時代中期前葉から中葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

21号竪穴建物跡（第32図、写真図版25）

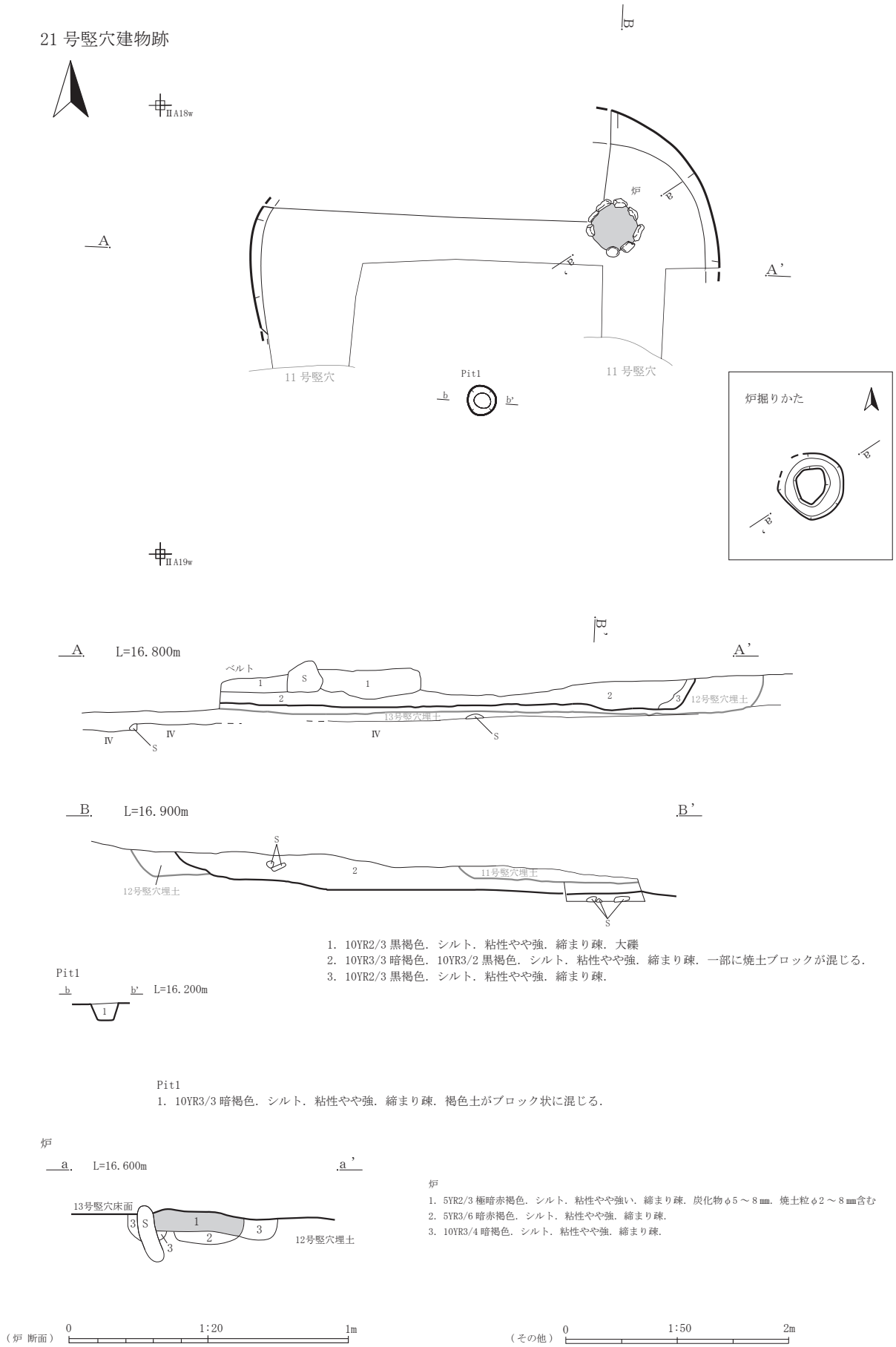
〔位置・検出状況〕調査区中央、II A18w付近に位置する。12号竪穴の東側を精査中に石囲炉を検出した。周囲に残っていた土層観察用のベルトを精査したところ、Ⅲ層下位からの掘り込みと暗褐色シルトの落ち込み、平坦な床面を検出した。北西側は12号竪穴を先行して調査したため、床面を掘り抜き消失させてしまった。柱穴は床面では検出できず、すべてⅣ層上面まで掘り下げて検出した。〔規模・形状〕一部の検出のみで全体像は不明であるが4.2mの幅をもつ円形もしくは楕円形の遺構と考えられる。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする。〔壁・床面〕床面はほぼ平坦である。〔炉〕石囲炉1は円形の石囲炉である。北東側の壁際に片寄っている。石組みは円形に溝を掘り込んだ部分に礫を8個配置し構築している。礫はすべて扁平な中角礫で、石質は風化花崗岩6点、砂岩1点等である。〔柱穴〕支柱穴はPit1の1本柱である。〔付属施設〕検出しなかった。〔重複関係〕12号竪穴より新しい。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕遺構の重複関係から縄文時代中期前葉から中葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 剛)

22号竪穴建物跡（第33図、写真図版26）

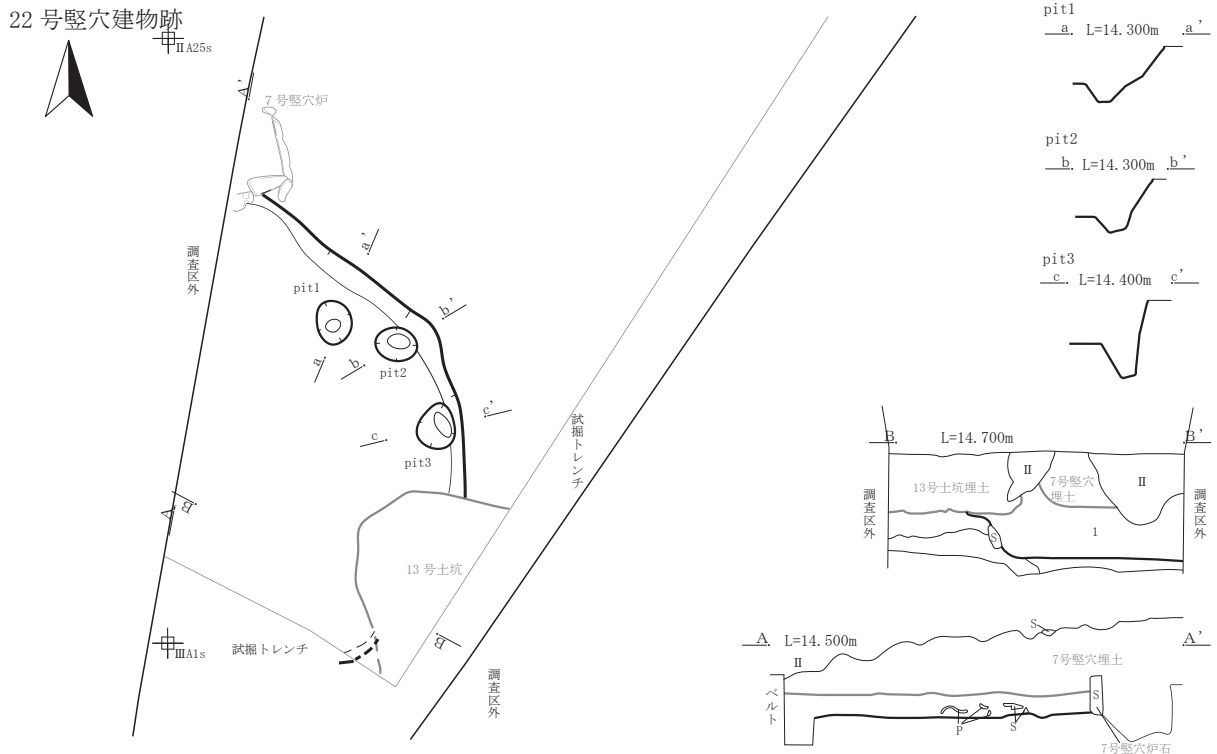
〔位置・検出状況〕調査区南、II A25sに位置する。7号竪穴の床面精査時に、暗褐色の弧状プラン

21号竪穴建物跡



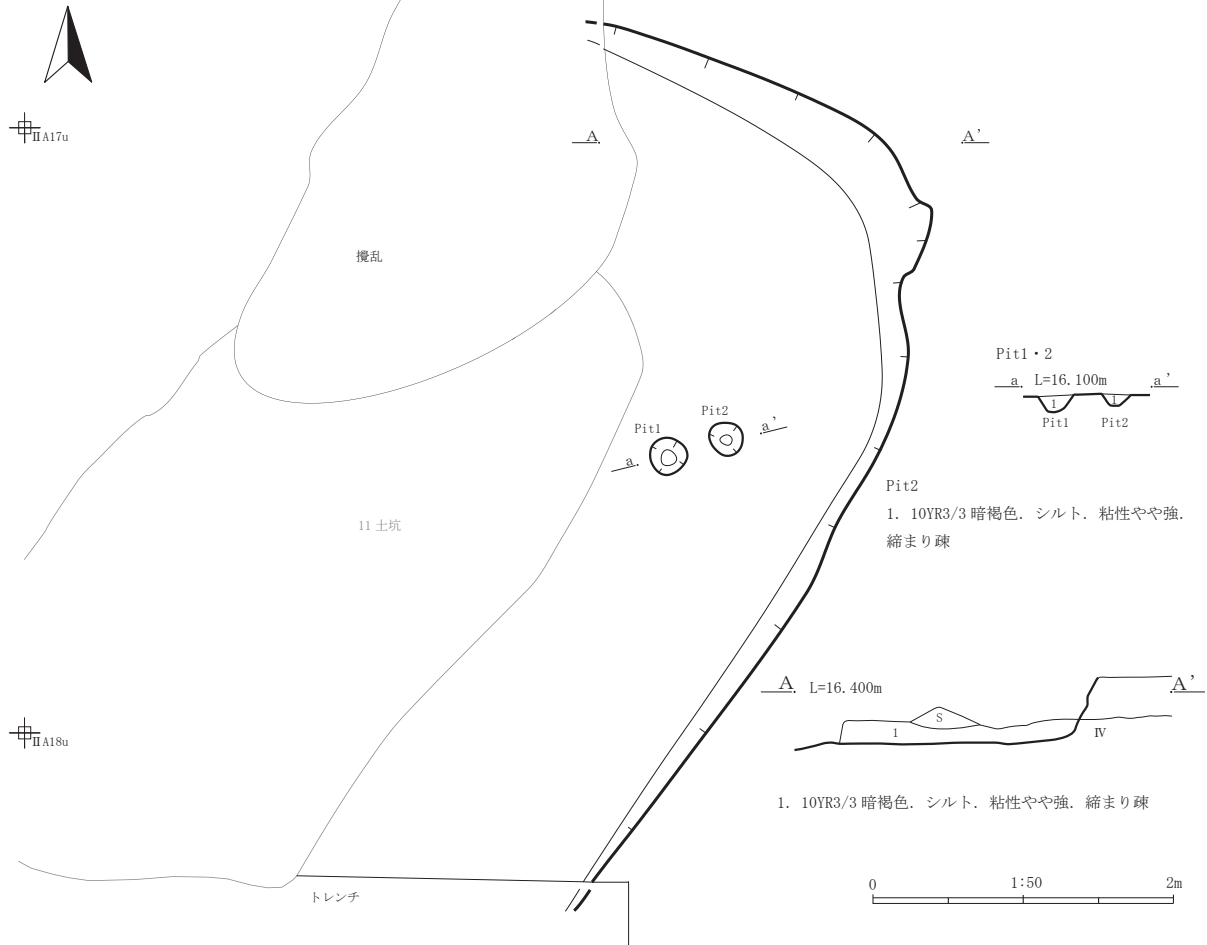
第32図 21号竪穴建物跡

2 遺構



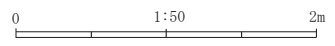
1. 10YR3/4 暗褐色. シルト. 粘性やや強. 縮まりやや疎. 調査区西壁際に土器・礫中量含む. 砂混じり.

23 号竪穴建物跡

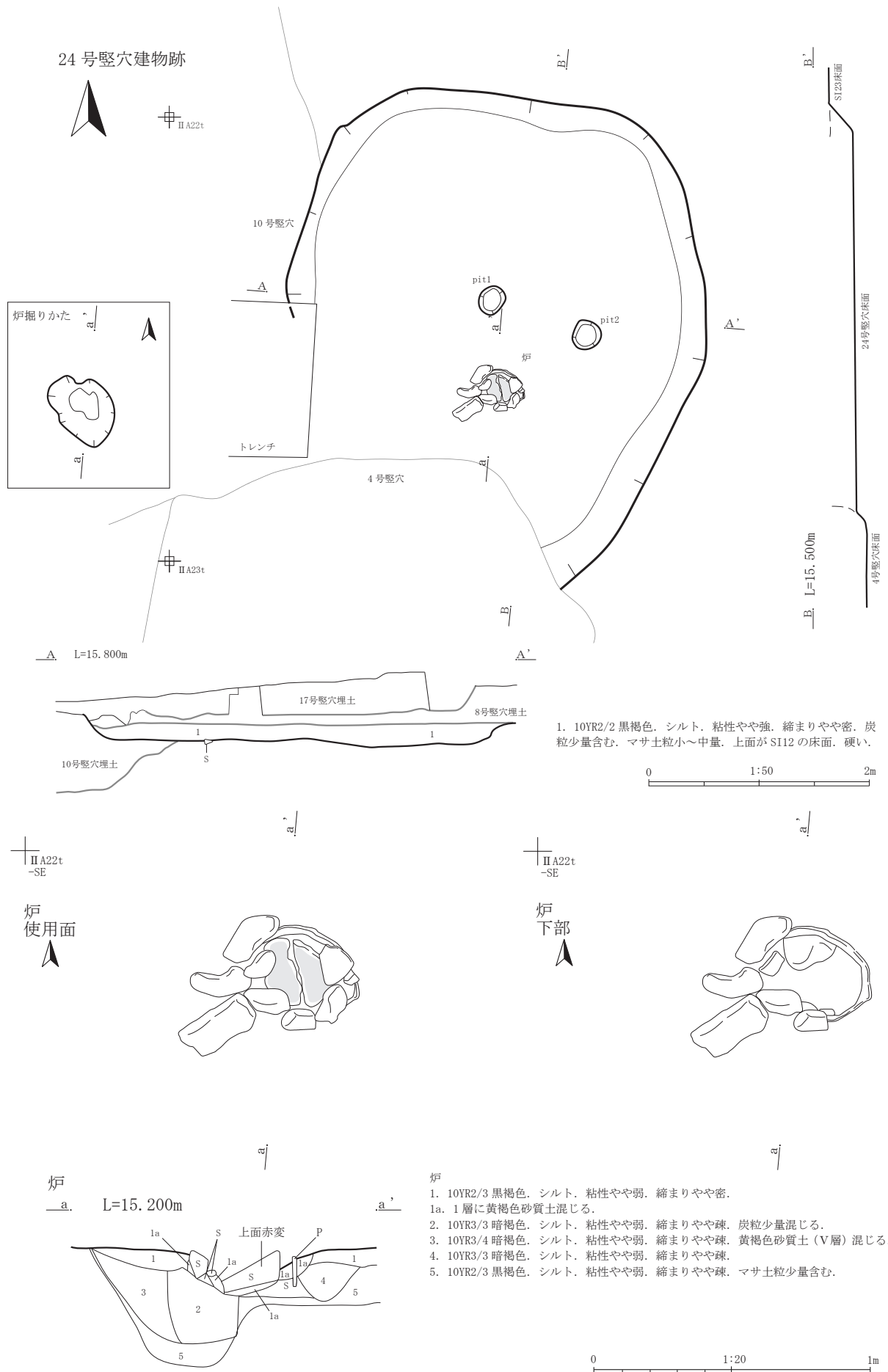


Pit2
1. 10YR3/3 暗褐色. シルト. 粘性やや強. 縮まり疎

1. 10YR3/3 暗褐色. シルト. 粘性やや強. 縮まり疎

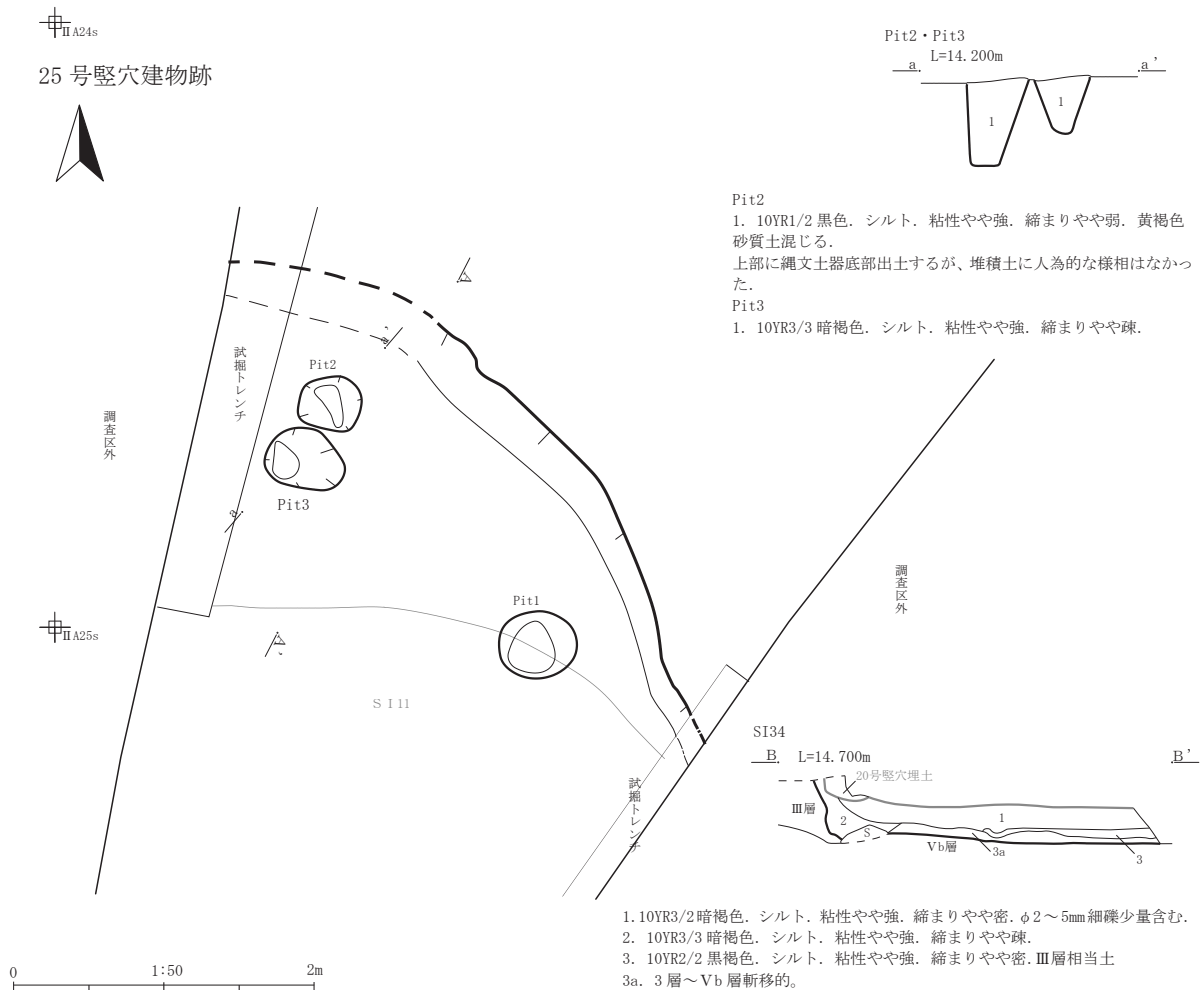


第 33 図 22 号竪穴建物跡・23 号竪穴建物跡



第34図 24号竪穴建物跡

2 遺構



第35図 25号竪穴建物跡

として検出した。〔規模・形状〕大半が調査区外にかかり全容は不明である。床面までの残存深度は28cm前後である。〔埋土・堆積状況〕埋土の主体となるのは、縄文時代の前期の土器片が含まれる暗褐色シルトである。〔壁・床面〕外傾する。床面は、地山のVb層が平坦となる。〔炉〕検出されなかった。〔柱穴〕壁際に小柱穴を3個検出した。〔付属施設〕なし。〔重複遺構〕7号竪穴建物跡、14号土坑に切られる。〔出土遺物〕埋土から有孔石製品G014が出土している。〔帰属時期〕遺構の重複関係と出土遺物から縄文時代前期後葉から中期前葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

23号竪穴建物跡 (第33図、写真図版27)

〔位置・検出状況〕調査区中央、II A 17v 付近に位置する。III層下位を精査中に暗褐色シルトの落ち込みを検出した。掘り下げたところ、平坦な床面と壁を確認した。さらに床面で柱穴を検出した。〔規模・形状〕一部の検出のみで不明であるが、11号土坑と攪乱の西側には拡がっていないため、楕円形または隅丸長方形の可能性がある。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする。〔壁・床面〕壁はやや急角度に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。〔炉〕検出しなかったが、先に調査した1号焼土遺構は、位置とレベルを考慮し、本遺構に期属する可能性がある。〔柱穴〕主柱穴はPit 1またはPit 2で、他の一方は支柱穴または建替えと考える。周囲の11号土坑と攪乱の掘り込みのため、他の柱穴は消失している可能性がある。〔付属施設〕検出しなかった〔重複関係〕

平面での観察から3号竪穴と11号土坑より古い。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕重複関係から縄文時代中期中葉以前と考えられる。

(佐藤 剛)

24号竪穴建物跡 (第34図、写真図版28)

〔位置・検出状況〕南部、ⅡA22tに位置する。17号竪穴同様に、8号竪穴精査時、重複する遺構の広がりを確認しサブトレンチを設定し土層断面で検出を行った。〔規模・形状〕4.4×3.8の円形を呈する。床面までの残存深度は34cm前後である。〔埋土・堆積状況〕埋土の主体となるのは、上面を8号竪穴によって削平されているため、床面直上に堆積する黒褐色シルトのみ確認できた。〔壁・床面〕緩やかに外傾する。床面は、地山のVb層が硬く締まり概ね平坦である。〔炉〕中央付近で土器埋設炉を検出した。床面精査時、不規則な配置の石組みを確認したが焼土は認められなかった為、掘り下げを行った所、綾線文が施された深鉢の体部が輪切りされたような状態で埋められていた。土器内には20~30cmほどの礫2個がすっぽりと収まり、平坦面が揃えられていた。平坦面の上に焼土の堆積は認められなかったが、赤く被熱していた。周囲の礫を抜き取り掘り下げる際には、焼土ブロックが少量堆積しているのを確認している。掘りかたは、70×48cmの不整形な平面形で、深さも南側が深くなる不均一な坑である。〔柱穴〕中央付近に2個検出している。〔付属施設〕なし。〔重複遺構〕4号・8号竪穴建物跡に切られ、10号竪穴建物跡を切る。〔出土遺物〕炉からP272、P274。埋土下位から石鏃S058・059等が出土している。その他、石匙S123、スクレイパー-S160等。P274は、埋設炉となっていた土器である。〔帰属時期〕遺構の重複関係と埋設炉の土器から縄文時代中期前葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

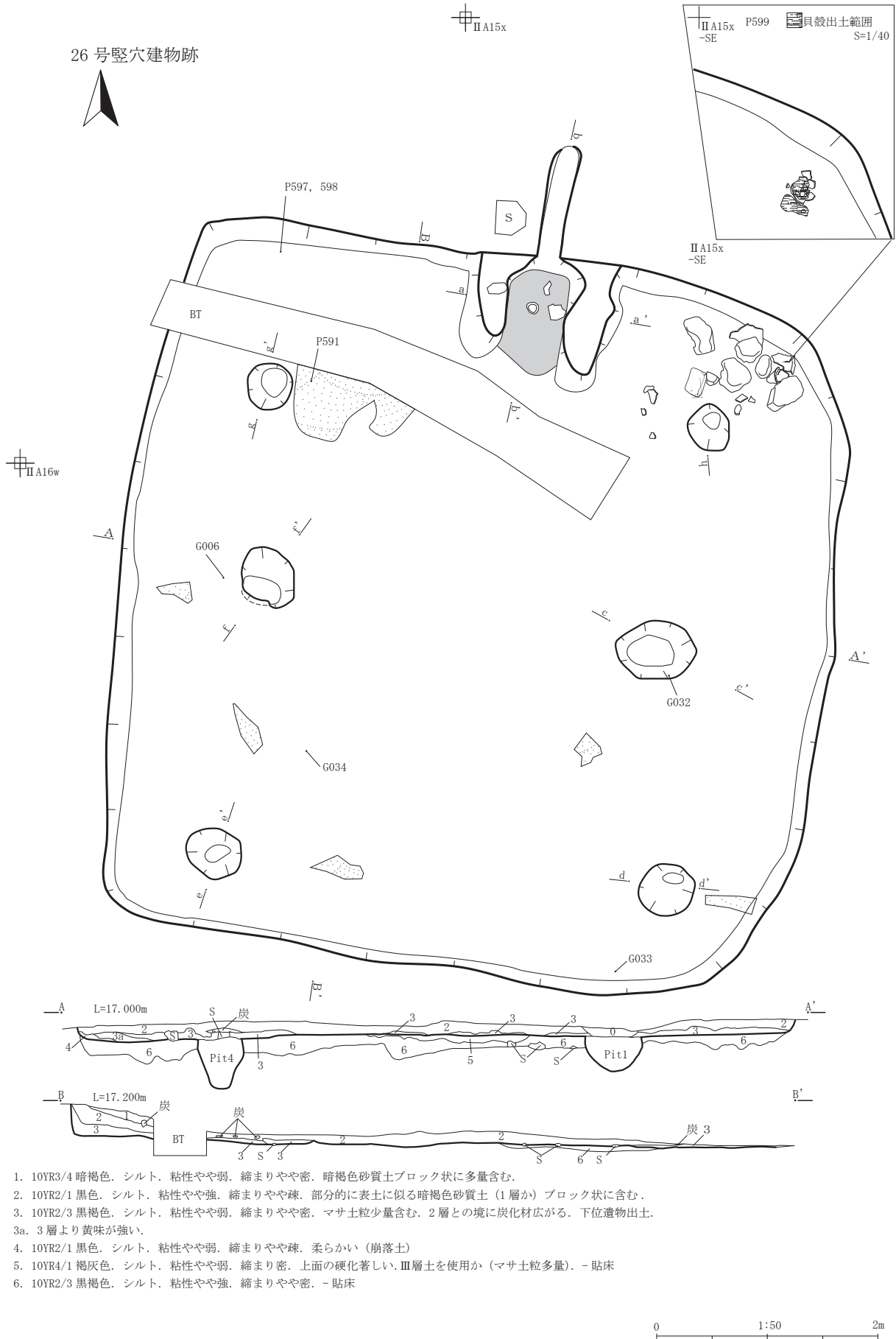
25号竪穴建物跡 SI34 (第35図、写真図版29)

〔位置・検出状況〕調査区南、ⅡA25sに位置する。7号竪穴同様、調査区南端部では、中央部とは違う様相の堆積土が広がり、大量に縄文土器が包含されているのを表土掘削時に確認しており、調査区際をVb層まで掘り込み、調査区壁での土層断面において遺構の検出を行った。〔規模・形状〕東西を調査区外にかかり、南側は7号竪穴で消失しているため形状は不明である。床面までの残存深度は49cm前後である。〔埋土・堆積状況〕床面直上に堆積するのは、Vb層に似る黄褐色シルトが混じった黒褐色シルトである。壁際には、締まりがやや疎い暗褐色シルトが堆積する。〔壁・床面〕壁は、直立気味に立ち上がる。床面は、Vb層が硬く締まり、平坦である。〔炉〕検出されなかった。重複する7号竪穴により消失していると考えられる。〔柱穴〕北側に2個並んで検出している。〔付属遺構〕なし。〔重複遺構〕7号・20号竪穴建物跡に切られる。〔出土遺物〕石鏃S060、敲磨器S287等。〔帰属時期〕遺構の重複関係から縄文時代中期中葉以前に帰属すると考えられる。

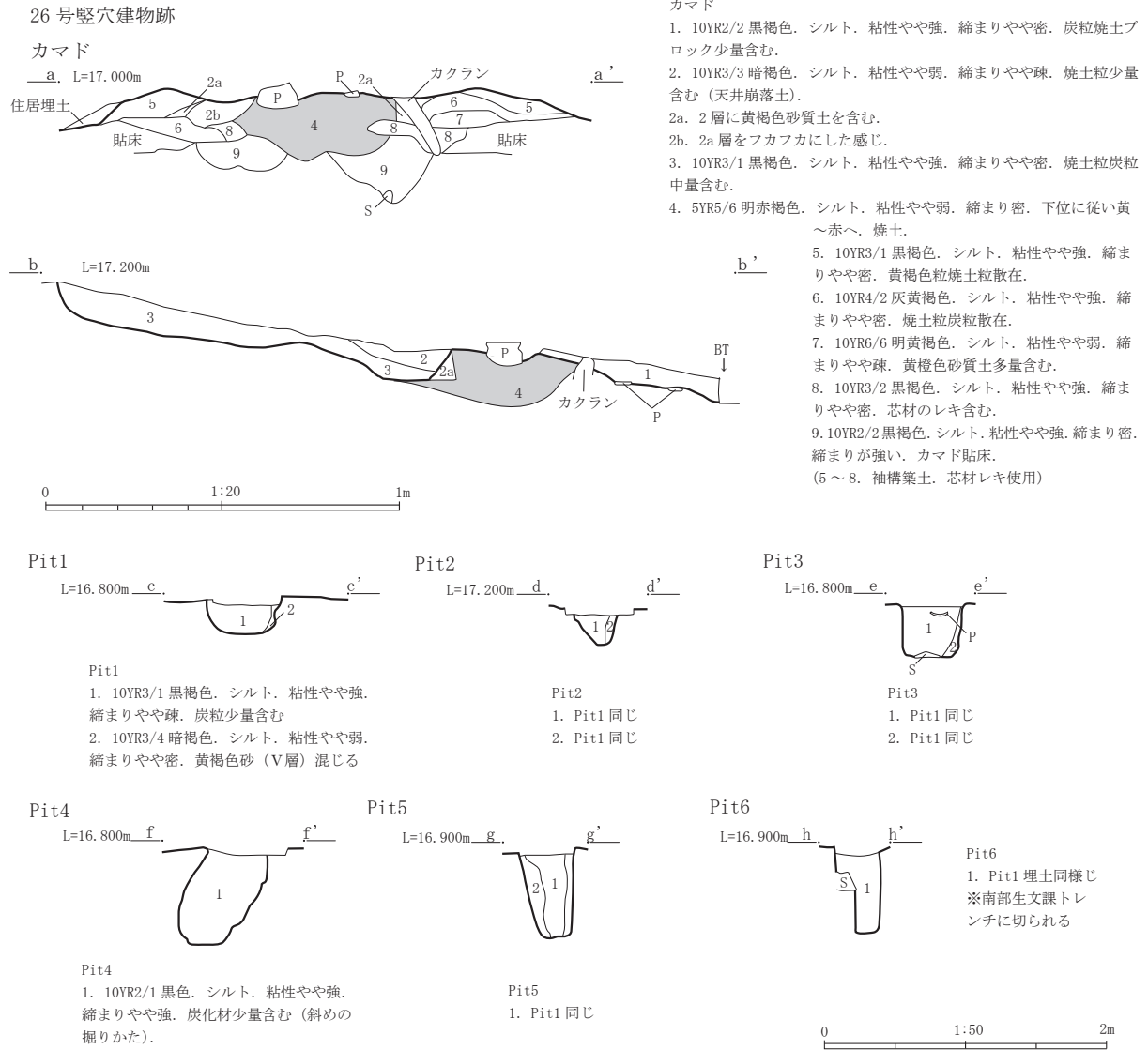
(佐藤 あゆみ)

26号竪穴建物跡 (第36図・37図、写真図版30・31)

〔位置・検出状況〕調査区中央、ⅡA16xに位置する。Ⅲ層上位で、Ⅲ層とは違う様相の黒色土の広がりを確認し、検出作業で方形のプランと、北側に黄褐色土ブロックを確認した。また、その際に土師器が出土している。〔埋土・堆積状況〕北側の床面直上には、粘性がやや弱い黒褐色シルトが薄く堆積する。その上に炭化材が一定の塊となって検出されたが、脆い炭で材の種類は特定できていない。埋土の主体となる黒色シルトはⅡ層土である。〔規模・形状〕6.5×6.4mの隅丸方形を呈する。〔壁・床面〕壁は、南側が消失しているが、北側で深さ約55cmを測る。床面は貼り床の黒褐色シルトの硬化が顕著で平坦である。〔カマド〕北側の壁、中央付近に検出した。カマド内には、非常に良く

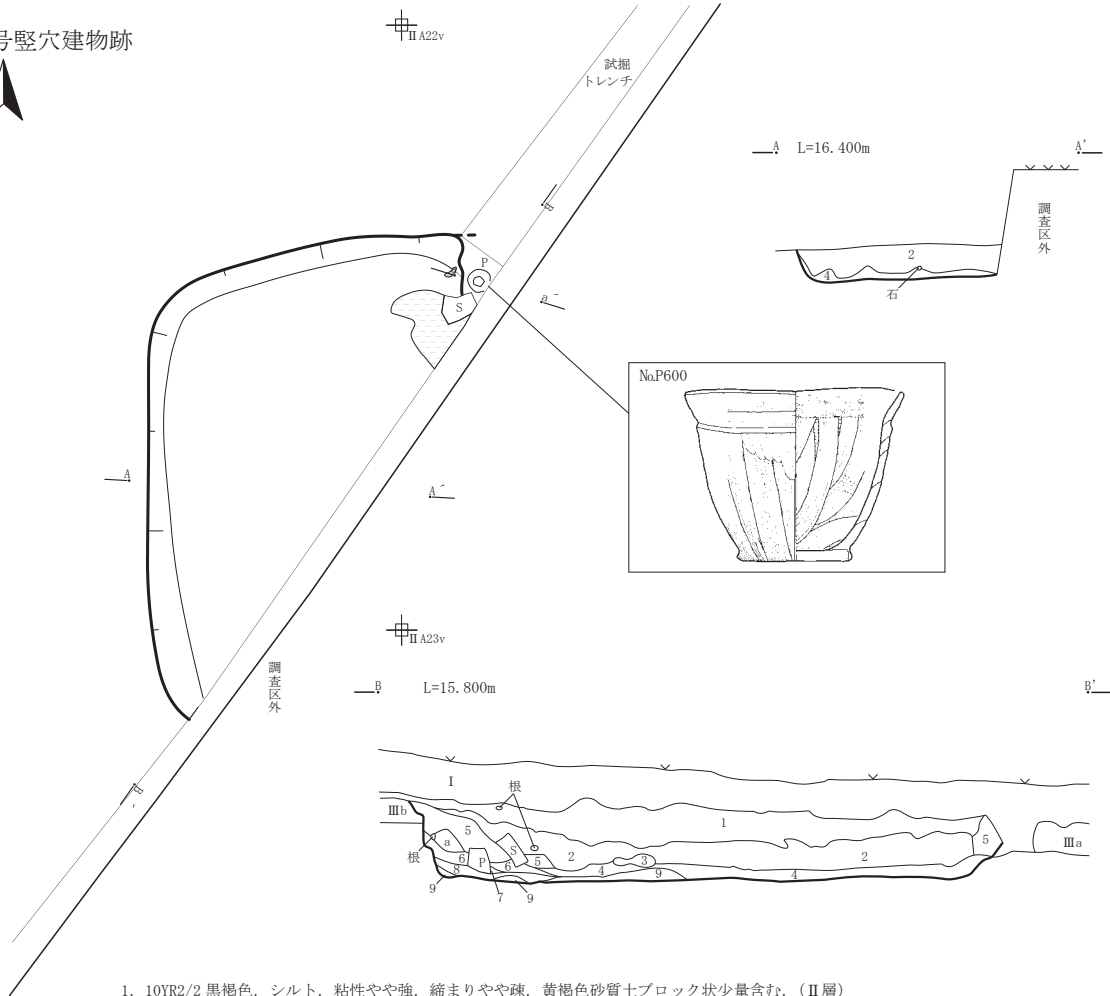


第36図 26号竪穴建物跡 (1)



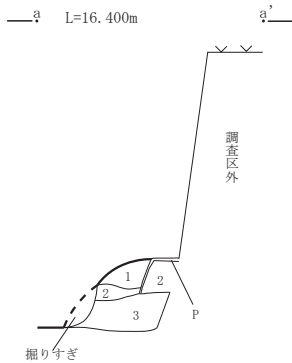
焼成された焼土が厚く堆積し、上位から下位に従い、黄色から赤色と変化する。焼成面中央には、甕の底部が支脚として設置される。カマド袖は表面が黒褐色であるが、内部は黄褐色～灰黄褐色シルトで、Vb層と考えられる黄褐色砂質シルトを多く含む。袖の芯材には10～15cmほどの礫が複数使用される。表土除去中にカマド構築土と思われる黄褐色土ブロックや、焼土がすでに見られており、カマドの上部はほとんど削平されている。そのため、カマド袖は床面に近い部分しか残っていないため、カマドの全容は不明であり、これは、煙道部も同様で煙出し部の様相も不明である。〔柱穴〕床面精査時に支柱穴 (PIT1～6) を検出し、PIT1～3・6、PIT4・5それぞれ堆積土が同じであった。直径は40～70cmほどで、深さ30～65cmを測る。〔付属施設〕北角壁際に、20～30cm大の礫が多数出土しその下に土師器甕が潰れた状態で複数出土している。その中から貝殻やウニの棘が出土している。これらの礫、土師器、貝殻はすべて混じりあって堆積しているというよりも、床面直上に土師器、その中に貝殻、その上に堆積土と共に礫が入り込んでいる状況であった。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕床面から土師器P591・597・598敲磨器S233、紡錘車G006・008、鉄鍬G032～034、カマドからP585～590等が出土している。その他石鍬S001・002、敲磨器S232・234・349、砥石S352、紡

27号竪穴建物跡



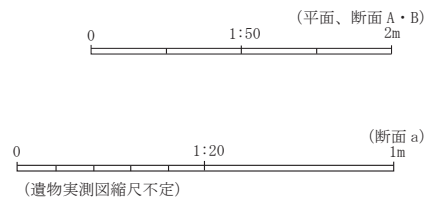
1. 10YR2/2 黒褐色. シルト. 粘性やや強. 締まりやや疎. 黄褐色砂質土ブロック状少量含む. (II層)
2. 10YR3/1 黒褐色. シルト. 粘性やや強. 締まりやや疎. 黄褐色粒状に散在 (地山粒?).
3. 10YR3/3 暗褐色. シルト. 粘性やや強. 締まりやや疎. 焼土ブロック中量含む.
4. 10YR3/1 黒褐色. シルト. 粘性やや強. 締まりやや疎. 黄褐色土ブロック多量含む.
5. 10YR3/1 黒褐色. シルト. 粘性やや強. 締まりやや密. 黄褐色粒状に中量含む (地山粒).
6. 10YR2/2 黒褐色. シルト. 粘性やや強. 締まりやや疎. 焼土粒〜ブロック状に少量含む (袖構築土か天井崩落土の可能性).
7. 5YR5/8 明赤褐色. シルト. 粘性やや強. 締まりやや疎. 焼土.
8. 10YR3/1. 黒褐色. シルト. 粘性やや強. 締まりやや密. 黄褐色砂質土混じる.
9. 4層より黄褐色土に砂質土混じる (貼床か)
- a. カマド1層 (袖構築土)

カマド (袖の一部)



カマド

1. 10YR3/3 暗褐色. シルト. 粘性やや強. 締まりやや密. 焼土粒少量含む. (粘性ある黄褐色土と黒色土が混ざる (袖構築土). 土師器 (小型甕) を芯材に使用している→中にφ15cm大の礫あり.) 住居埋土a層.
2. 10YR2/2 黒褐色. シルト. 粘性やや弱. 締まりやや疎.
3. 地山 10YR6/6 明黄褐色. シルト. (Va層)



第38図 27号竪穴建物跡

錘車G007、棒状の石製品G018・019、刀子G035等。〔帰属時期〕床面の出土遺物から7世紀末～8世紀前半に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

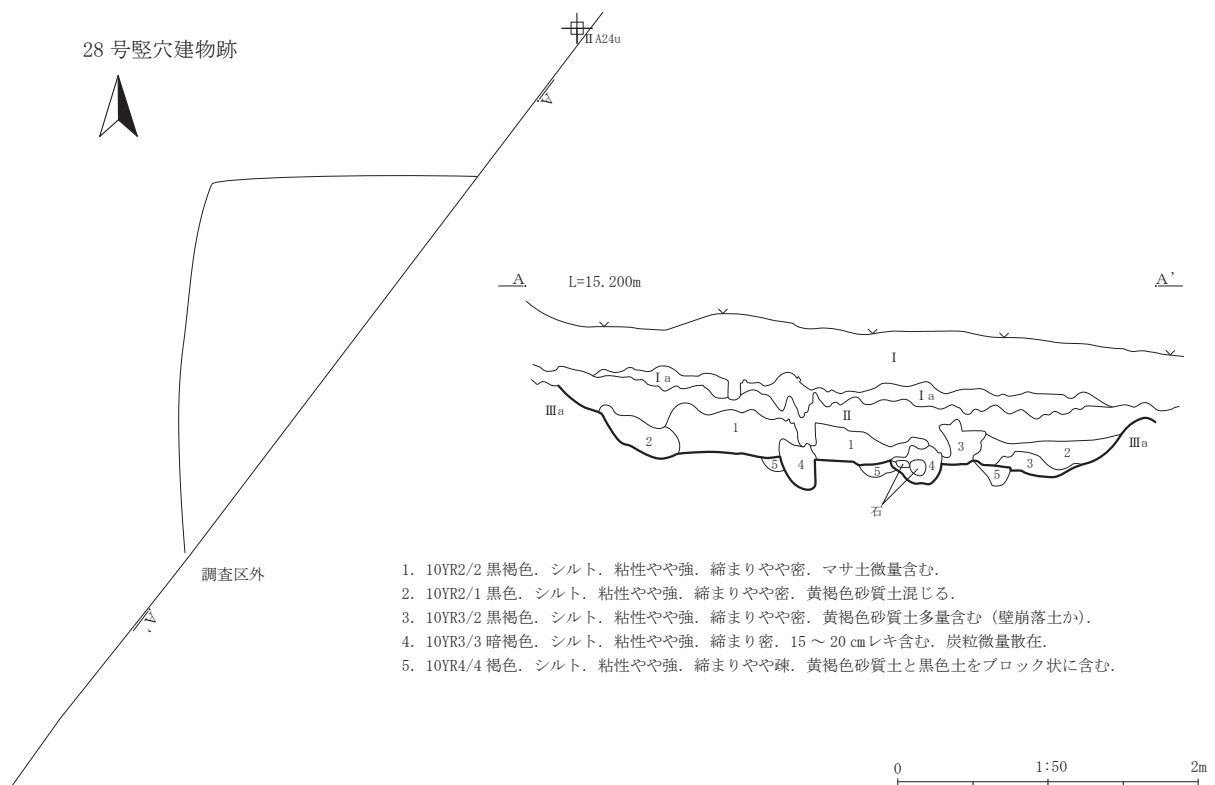
27号竪穴建物跡 (第38図、写真図版32)

〔位置・検出状況〕調査区南、ⅡA22v調査区際に位置する。当初、Ⅲa層下位で黒褐色の広がりを縄文の竪穴と認識したが、検出作業で方形の角を確認し、堆積土の様相から古代の竪穴として精査に着手した。〔埋土・堆積状況〕床面直上に堆積するのは、しまりがやや疎い黒褐色シルトであり、北側は黄褐色砂質土が混じる。主体となるのは、Ⅱ層土でVa層を少量含む。人為的な堆積は認められない。〔規模・形状〕遺構東側は調査区の外にかかり、全容は不明であるが、カマドの位置を壁の中心として考えた場合、4×4mの方形を呈すると考えられる。残存深度は、30cm前後である。〔壁・床面〕壁は外傾気味に直立する。床面はVa層が締まり概ね平坦である。〔カマド〕北側の壁で検出した。カマド東側および燃烧面、煙道は調査区外にかかり、左袖のみの検出である。袖内には、土師器の小甕が伏せて設置され芯材となっている。地山のVa層の上に、暗褐色～黒褐色土で構築されている。〔柱穴〕検出されなかった。〔付属施設〕なし。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕カマド袖芯材としてP600が出土している。〔帰属時期〕カマド芯材の土師器から7世紀末～8世紀前半に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

28号竪穴建物跡 (第39図、写真図版3)

〔位置・検出状況〕調査区南、ⅡA24t調査区際に位置する。Va層まで掘り下げを行った際に調査区壁で遺構の存在を確認した。〔埋土・堆積状況〕床面直上に堆積する黒褐色シルトは、一部で黄褐色土を含む。主体となるのは、Ⅱ層土であり、この堆積状況で古代の遺構と認識した。〔規模・形状〕調査区外にかかるため全容は不明であるが、方形を呈すると考えられる。27号竪穴と角度が類似する。〔壁・床面〕断面からの観察で、壁は、外傾気味、床面は壁際が若干低くなるが概ね平坦と考え



第39図 28号竪穴建物跡

られる。〔カマド〕検出されなかった。調査区外に存在する可能性がある。〔柱穴〕検出されなかったが、土層断面で柱穴状に落ち込む4層を確認している。〔付属施設〕なし。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕堆積土の様相から古代に属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

29号竪穴建物跡(第40図、写真図版33)

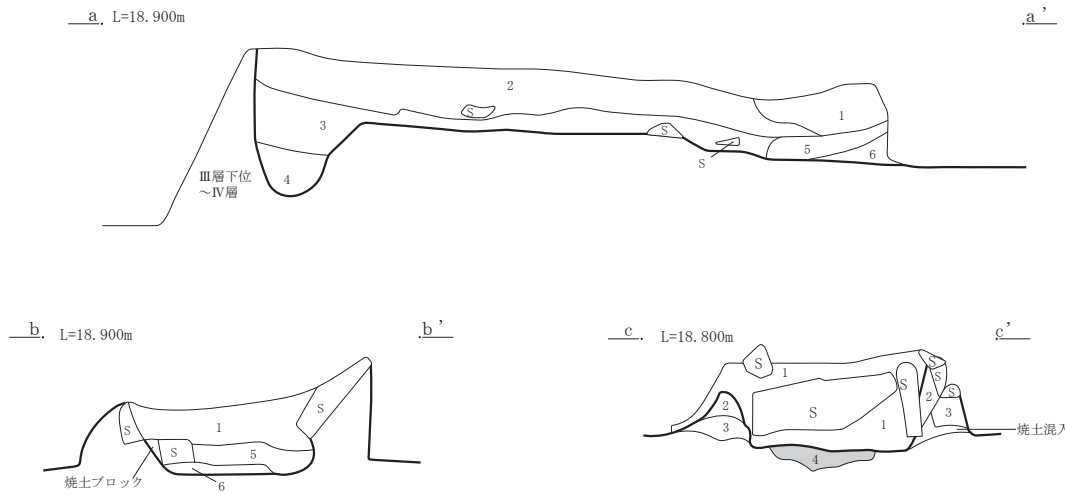
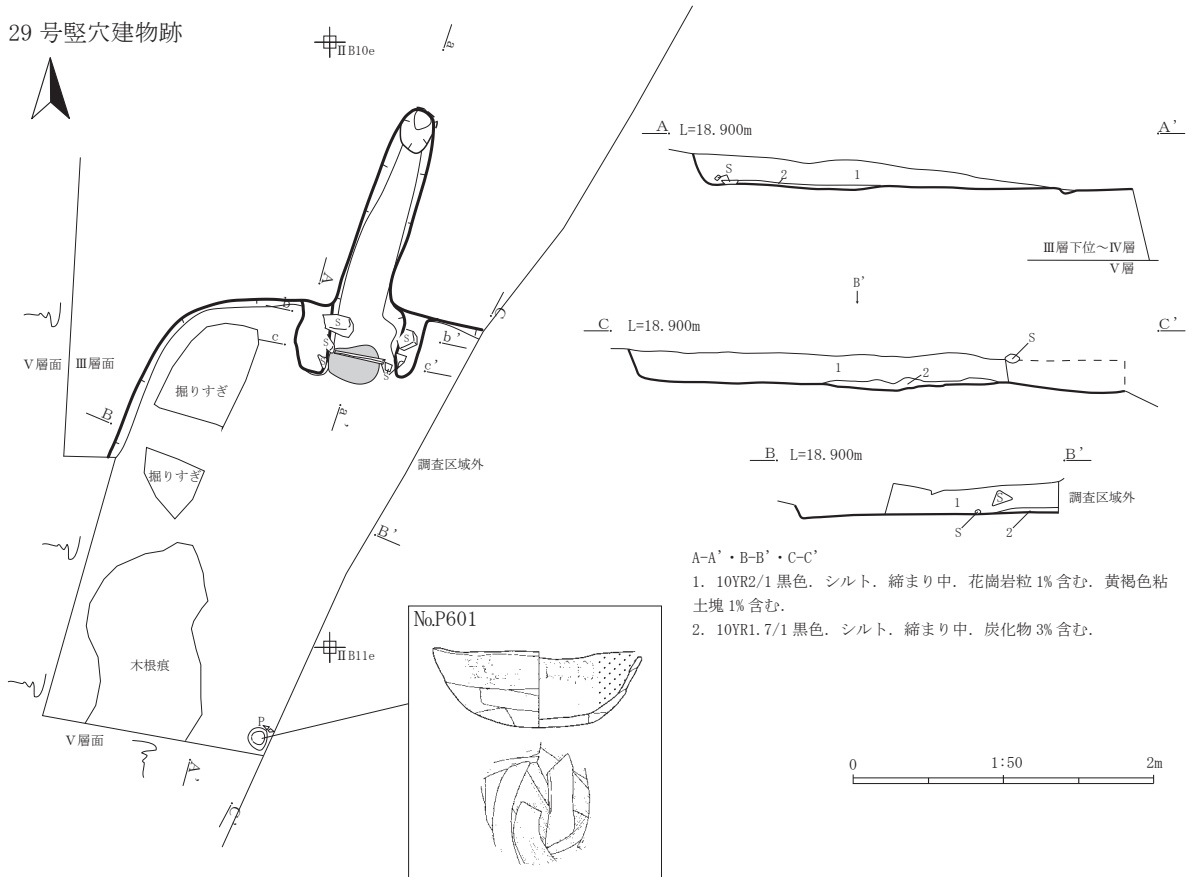
〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡB10d・10eグリッドを中心とした範囲で、花崗岩粒を含み締まりの強い黒褐色土のⅢ層中で、黒色土の方形基調の広がりとして検出した。東側は調査区域外にかかる。検出した範囲は、竪穴建物跡の西側と北壁に設けられたカマド及び北側にのびる煙道部分である。南西側は木根による攪乱を受けている。〔埋土・堆積状況〕主にⅡ層の締まりの弱い黒色土で構成され、下位に炭化物を含む層が薄く堆積する。煙道部分の埋土も同じである。〔規模・形状〕開口部3.2×1.9m以上、床面3.1×1.8m以上と推定される。残存する壁高は20cmである。平面形は隅丸方形を基調とするものと推測される。〔壁・床面〕壁はほぼ直立する。床はほぼ平坦である。いずれも花崗岩粒を含み、硬く締まる黒褐色土層のⅢ層を掘り込んでいる。貼床は施されていない。〔カマド〕建物の北側に設けられている。検出時点で、北側に延びる煙道と北壁に設けられたカマドの存在が推測される位置に並ぶ礫の存在と明黄褐色土の広がりを確認した。カマドは、両袖と天井部に石が組み、明黄褐色土と黒色土の混土を加えて構築されていた。袖部は、両袖に各3個の垂角礫が芯材として組み込まれていた。それらの礫が全体に東側に傾いているのは、重機により西側から東側に表土掘削作業を行った際に傾いたものである。天井部の石組は、燃焼部に落下した状態で検出されたと推測される。カマドの規模は80×40cm。燃焼部の規模は30×26cmを測る。燈色の焼土の厚さは最大で6cmである。煙道部の規模は、長さ140cm、幅30cm、深さ17cmである。煙道の構造は不明であるが、煙道部先端の煙出し部に向かって傾斜するように掘り込まれている。煙出し部の規模は、径30cm、深さ40cmである。〔柱穴〕検出した範囲では確認されていない。〔付属施設〕なし。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕床面から土師器・坏P601が伏せられた状態で出土した。〔帰属時期〕遺構の形状と出土遺物から、7世紀末～8世紀前半と推測される。

(阿部 勝則)

30号竪穴建物跡(第41図・42図、写真図版34)

〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡB12bグリッドを中心とした範囲で、Ⅲ層下位からⅣ層を掘り下げ中に土師器片などが出土したことから、遺構の存在に留意して検出作業を行ったところ、Ⅴ層面で黒褐色土の方形基調の広がりを確認し、竪穴建物跡として調査した。〔規模・形状〕開口部6.0×3.0m以上、床面5.6×2.8m以上である。残存する北側の壁高は10cmである。南側の壁などは確認されていない。平面形は隅丸方形を基調とするものと推測される。〔埋土・堆積状況〕主に黒褐色土で構成される。〔壁・床面〕検出できた北壁及び東壁・西壁はほぼ直立する。床面はⅤ層の黄褐色土層面を掘り込んでつくられている。貼床は確認されていない。〔カマド〕北壁のほぼ中央に設置されている。上部は削られているが、燃焼部の両側に粘土を貼りつけて構築されたカマドの袖部が確認された。一部に礫を芯材として使用している。カマドの規模は、160×150cmである。燃焼部の範囲は、40×30cmで、燈色の焼土の厚さは5cmで、Ⅴ層面に形成されている。燃焼部の西側と東側に20cmほど間を空けて甕が伏せられて置かれおり、西側には甕1個(P603)、東側には甕2個(P602・604)があり、P604にP602が重ねられて伏せられた状態であった。支脚として使用されたものと推測される。他に燃焼部の直上からも土師器片が出土している。煙道部の規模は、長さ140cm、幅40～55cm、深さ10～15cmで、構造の詳細は不明である。残存する煙出部の規模は、径50cm、深さ20cmである。〔柱穴〕

29号竪穴建物跡

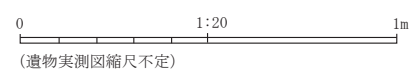


カマド a-a'・b-b'

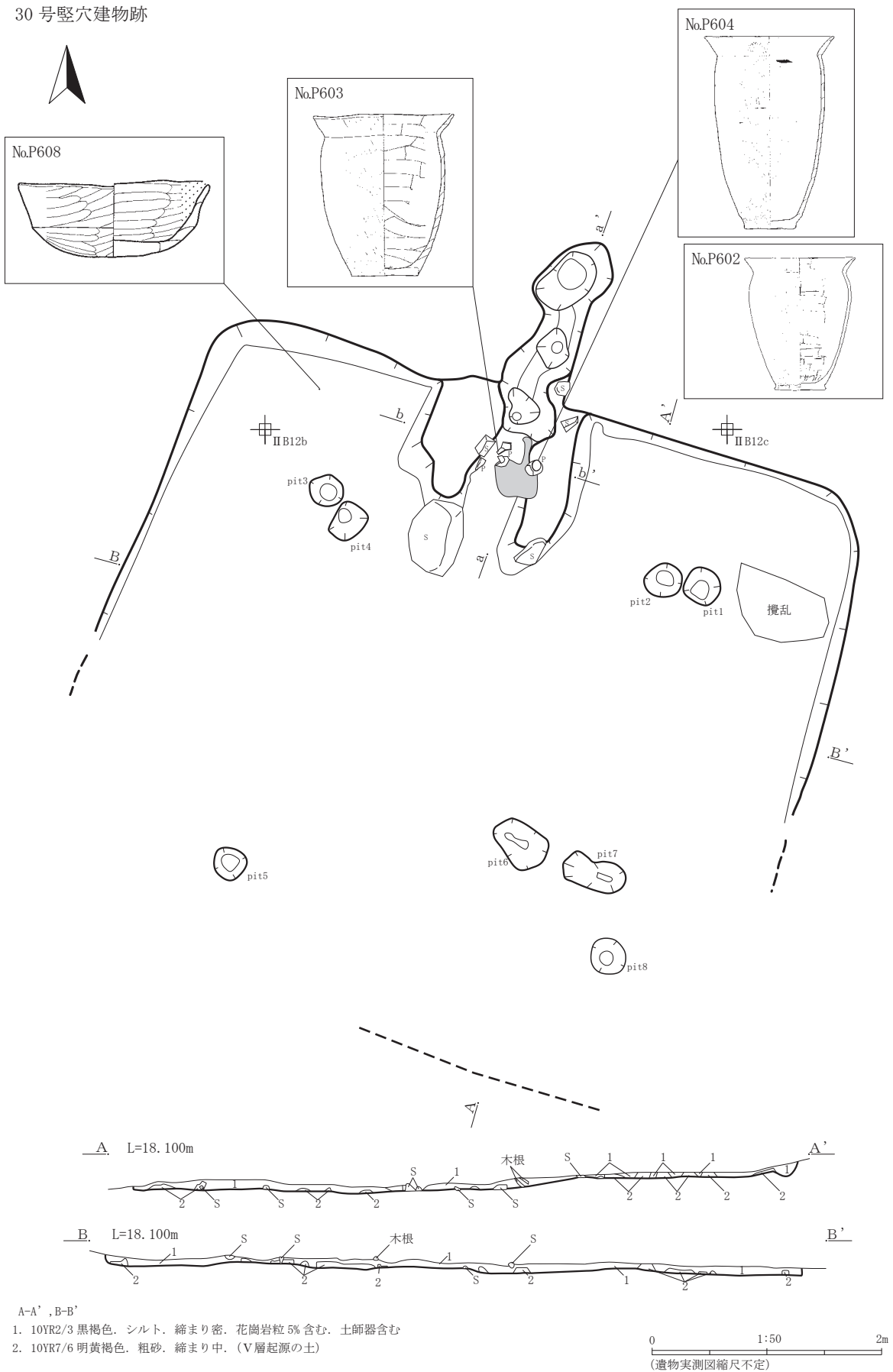
1. 10YR2/2 黒褐色, 砂質シルト, 縮まり中, 褐色土粒 1% 含む, 花崗岩粒 3% 含む.
2. 10YR1.7/1 黒色, シルト, 縮まりやや疎.
3. 10YR2/2 黒褐色, 砂質シルト (砂 5%), 縮まり中, 径 5 cm 大の花崗岩粒 3% 含む.
4. 10YR2/3 黒褐色, シルト, 縮まりやや疎.
5. 10YR5/8 黄褐色, 粘土, 縮まり密, 黒褐色土 20% 含む, 焼土ブロック 5% 含む.
6. 10YR2/2 黒褐色, シルト, 縮まり中, 炭化物 1% 含む, 花崗岩粒 1% 含む.

カマド c-c'

1. 10YR2/2 黒褐色, 砂質シルト, 縮まり中, 褐色土粒 1% 含む, 花崗岩粒 3% 含む.
2. 10YR6/6 明黄褐色, 粘土, 縮まり中.
3. 10YR1.7/1 黒色, シルト, 縮まり中.
4. 5YR6/6 橙色, 焼土, 縮まりやや密, 黒褐色土 10% 含む.



第 40 図 29号竪穴建物跡



第 41 図 30号竪穴建物跡 (1)

30号竪穴建物跡

カマド

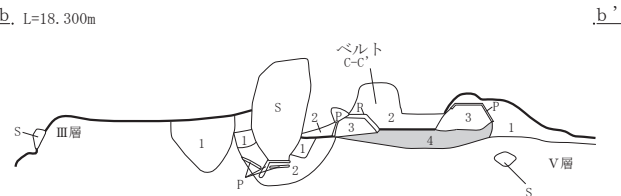
a, L=18.200m



カマド a-a'

1. 10YR3/4 暗褐色. シルト. 締まり密.
2. 10YR2/2 黒褐色. シルト. 締まり中. 土師器混入. 花崗岩粒 3% 含む. 下位に焼土混じりの暗褐色土混入.
3. 10YR2/2 黒褐色. シルト. 締まり中. 花崗岩粒 3% 含む.
4. 10YR2/2 黒褐色. 砂質シルト. 締まり中. 花崗岩粒 5% 含む

b, L=18.300m



b'

カマド b-b'

1. 10YR1.7/1 黒色. シルト. 締まり中. 黄色土粒 5% 含む.
2. 10YR2/3 黒褐色. 砂質シルト. 締まり中. 土器片混入.
3. 10YR4/4 褐色. 砂質シルト. 締まり中.
4. 5YR6/8 橙色. 焼土. V層が焼土化したもの.

0 1:20 1m

第 42 図 30号竪穴建物跡 (2)

Pit 1～8の8個を確認した。各柱穴の埋土は竪穴建物跡と同様に黒褐色土で構成される。規模・配置から、Pit 1・3・5・8が主柱穴の可能性があるものと推測される。Pit 6・7の埋土からは土師器片が出土している。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕床面から土師器P608・609、カマドから土師器P602～607等出土している。埋土下位から紡錘車G010が出土している。〔帰属時期〕遺構の形状と出土遺物から、7世紀末～8世紀前半と推測される。

(阿部 勝則)

(2) 土 坑

1号土坑 (第43図、写真図版35)

〔位置・検出状況〕調査区南、ⅡA23u付近に位置する。重複する4号竪穴建物跡の精査時に4号竪穴建物跡の壁を切る遺構として検出した。〔規模・形状〕63.4×77.7cmの円形で、残存深度は41cmである。〔埋土・堆積状況〕底面直上には地山(Vb層)が混じる褐色シルトが堆積する。人為的な堆積は認められない。〔壁・底面〕壁は、外傾する。底面には、径40～50cmの巨礫が置かれている。〔重複遺構〕4号竪穴建物跡を切る。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕遺構の重複関係から縄文時代中期後葉以降と考えられる。

(佐藤 あゆみ)

2号土坑 (第43図、写真図版35)

〔位置・検出状況〕調査区南、ⅡA23u付近に位置する。重複する4号竪穴建物跡の精査時に4号竪穴建物跡の壁を切る遺構として検出した。〔規模・形状〕113×107cmの円形で、残存深度は38cmである。〔埋土・堆積状況〕底面直上には黒褐色シルトが堆積し、全体的に粘性が弱い。2層はIVb層に似る。〔壁・底面〕壁は、北側が若干抉れて内湾気味に立ち上がる。底面は概ね平坦である。〔重複遺構〕1号竪穴建物跡、4号竪穴建物跡に切られる。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕遺構の重複関係から縄文時代中期に属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

3号土坑 (第43図、写真図版35)

〔位置・検出状況〕ⅡA14yに位置する。Ⅲ層下位を精査中に暗褐色シルトの広がりを見出した。半

裁したところ、埋土中から礫が出土し、底面と壁を確認した。4号土坑と近接する。〔規模・形状〕85×80cmで、円形である。〔埋土・堆積状況〕堆積土は埋戻しで、1層は暗褐色土、2・3層は黒褐色土である。3層中の中角礫と石棒? (No) は埋め戻しの際に同時に埋めたものと考えられる。堆積状況と礫類の出土状況は4号土坑に類似する。〔壁・底面〕壁は急角度に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕埋土から台石? 片1点(石器No.1)、石棒G012、すり石1点、中角礫5点? が出土した。〔帰属時期〕埋土中から出土した遺物(土器片)から縄文時代中期中葉から後葉と考えられる。

(佐藤 剛)

4号土坑(第43図、写真図版35)

〔位置・検出状況〕調査区中央、II A14xに位置する。III層下位を精査中に暗褐色シルトの広がりを出した。半裁したところ坑底から礫が出土し、底面と壁を確認した。3号土坑と近接する。〔規模・形状〕105×85cmで、円形である。〔埋土・堆積状況〕堆積土は埋戻しで、1層は暗褐色土、2層は黒褐色土である。坑底の礫は埋め戻しの際に同時に埋めたものと考えられる。堆積状況と礫類の出土状況は3号土坑に類似する。〔壁・底面〕壁は急角度に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕埋土中から出土した遺物(土器片)から縄文時代中期中葉から後葉と考えられる。

(佐藤 剛)

5号土坑(第43図、写真図版36)

〔位置・検出状況〕調査区中央、II A19tに位置する。3号竪穴建物跡の2層を精査中に暗褐色シルトの広がりを検出した。検出の際に半分ほど掘り過ぎてしまった。半裁したところ土器1個体が斜めに横倒しの状態で出土し、底面と壁を確認した。〔規模・形状〕130×125cmで、半分を掘り過ぎているが、堆積状況から楕円形である。〔埋土・堆積状況〕堆積土は埋戻しで、1層は、2層はである。坑底に遺物を置き、埋め戻している。〔壁・底面〕壁はやや急角度に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。〔重複遺構〕2号竪穴建物跡より古く、3号竪穴建物跡より新しい。〔出土遺物〕坑底から大型の深鉢形P097等が出土した。大型の深鉢形土器は正立して置かれていたものが土圧により歪んだものと考えられる。〔帰属時期〕坑底から出土した遺物から縄文時代中期中葉から後葉と考えられる。

(佐藤 剛)

6号土坑(第43図、写真図版36)

〔位置・検出状況〕調査区北、II B10dグリッド。III層下位からIV層面を掘り下げ中、東側をIII層下位からIV層面、西側をV層面で、黒色土の円形の広がりとして検出した。〔規模・形状〕規模は、開口部径90×80cm、底部径75×62cm、深さ60cmである。平面形は円形を呈する。〔埋土・堆積状況〕黒色土層である。〔壁・底面〕壁は、IIIからIV層下位を掘り込んで、ほぼ直立する。底面は、V層を掘り込んで平坦につくられている。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕時期を決定できる出土遺物はない。検出面から縄文時代の可能性がある。

(阿部 勝則)

7号土坑(第43図、写真図版36)

〔位置・検出状況〕調査区南、II A23u付近に位置する。重複する1号竪穴建物跡の床面精査時に検出した。〔規模・形状〕107×110cmの円形で、残存深度は40cmである。〔埋土・堆積状況〕主体となるのは粘性がやや強い黒褐色シルトで、壁際には、崩落土と考えられる明黄褐色土が薄く堆積する。〔壁・底面〕壁は北側が若干抉れて直立気味に立ち上がる。底面は、概ね平坦で硬く締まる。〔重複

遺構〕1号竪穴建物跡を切る。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕遺構の重複関係から縄文時代中期以降に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

8号土坑 (第44図、写真図版36)

〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡB13aグリッド。Ⅲ層下位からⅣ層面を掘り下げ中、Ⅴ層面で黒色土の円形の広がりとして検出した。〔規模・形状〕規模は、開口部径150×140cm、底部径95×90cm、深さ60cm、平面形は円形を呈する。〔埋土・堆積状況〕黒色土・暗褐色土・黒褐色土で構成される。黒褐色土が主体である。当土坑の上には検出時に木根があり、埋土上位が木根による攪乱を受けている。〔壁・底面〕壁は、Ⅴを掘り込んでほぼ直立する。底面は、Ⅴ層を掘り込んでほぼ平坦につくられている。底面のほぼ中央に開口部径35cm、底部径10cm、深さ10cmの小穴を伴う。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕出土遺物と検出面などから、縄文時代と推測される。

(阿部 勝則)

9号土坑 (第44図、写真図版37)

〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡB13bグリッド。Ⅲ層下位からⅣ層面を掘り下げ中、Ⅴ層面で黒褐色土の円形の広がりとして検出した。〔規模・形状〕規模は、開口部径110×110cm、底部径90×80cm、深さ42cm、平面形は円形を呈する。西側に張り出した部分は木根などにより攪乱を受けた痕跡である。〔埋土・堆積状況〕黒褐色土主体で構成される。〔壁・底面〕壁は、Ⅴ層を掘り込んでほぼ直立する。底面は、Ⅴ層を掘り込んで平坦につくられている。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕出土遺物と検出面などから、縄文時代と推測される。

(阿部 勝則)

10号土坑 (第44図、写真図版37)

〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡB15aグリッド。1号集石遺構の精査の段階で、Ⅲ層下位からⅣ層面を掘り下げ中、Ⅴ層面で黒褐色土の円形の広がりとして検出した。〔規模・形状〕規模は、開口部径65×60cm、底部径40×35cm、深さ70cm、平面形は円形を呈する。〔埋土・堆積状況〕締まりの弱い黒褐色土と黄褐色土混じりの黒褐色土で構成される。黒褐色土上位に径30cm大の垂角礫1個が含まれていた。1号集石遺構を構成する礫群と当該礫との間に黒褐色土層を挟むことから、1号集石遺構と当該礫とに関連性はないものと考えられる。当該遺構の埋土の堆積状況は、全体として、柱当たりと掘り方と推測される堆積状況を呈している。〔壁・底面〕壁はⅤ層を掘り込んでほぼ直立する。底面はⅤ層下位の粘土層を掘り込んでほぼ平坦につくられている。〔重複遺構〕1号集石遺構の下位に位置する。10号土坑(旧)→1号集石遺構(新)の関係があるが、両者の間には黒色土の間層があり、機能した時期には隔たりがあると考えられ、直接の関連性はないと推測される。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕出土遺物と検出面から縄文時代以降と推測される。柱穴としての性格が考えられるが、周囲に対応する柱穴は確認されていない。調査区域外に関連する遺構が続く可能性がある。

(阿部 勝則)

11号土坑 (第45図、写真図版37)

〔位置・検出状況〕調査区中央、ⅡA17uに位置する。Ⅲ層下位を精査中に暗褐色シルトの広がりを検出した。半裁したところ底面と壁を確認した。〔規模・形状〕5.4m×4.0mで、隅丸長方形である。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、1層は黒褐色土、2層は暗褐色土である。〔壁・底

面] 壁は北西側ではやや急角度に立ち上がり、それ以外はなだらかに立ち上がる。底面はやや丸みがある。〔重複遺構〕3号竪穴建物跡より古く、23号竪穴建物跡より新しい。〔出土遺物〕出土しなかった。〔帰属時期〕重複関係から縄文時代中期中葉以前である。

(佐藤 剛)

12号土坑 (第44図、写真図版37)

〔位置・検出状況〕調査区南、II A25s付近に位置する。重複する7号竪穴建物跡床面精査時に検出した。〔規模・形状〕85×90cmの円形で、残存深度は底面まで43cmである。〔埋土・堆積状況〕埋土下位は、地山(Vb層)が混じるシルトや、締まりの疎いサクサクした褐色シルトが堆積し人為的な様相を示す。埋土上位は、径1cm以下の細礫が混じる。〔壁・底面〕壁は直立気味に立ち上がる。底面は平坦で中央に副穴をもつ。副穴は径15cm、深さ20cmの規模である。〔重複遺構〕7号竪穴建物跡と重複するが新旧関係は不明である。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕遺構の形状から縄文時代の陥し穴状土坑と考えられる。

(佐藤 あゆみ)

13号土坑 (第44図)

〔位置・検出状況〕調査区南、III A1s付近に位置する。重複する7号竪穴建物跡精査時に土層観察用の調査区壁で検出した。調査区外に広がる遺構であり、遺構の種類を判断するのに困難であるが、ここでは土坑として報告する。〔規模・形状〕調査区外に広がるため全容は不明。〔埋土・堆積状況〕埋土下位は、黄褐色土を含む暗褐色土が堆積し、上位は、II層に似る黒色土が堆積する。〔壁・底面〕壁は直立気味に外傾する。底面は平坦でVb層があらわれる。〔重複遺構〕7号竪穴建物跡・22号竪穴建物跡と重複し新しい。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕遺構の重複関係や埋土の様相から古代に帰属する可能性もあるが不明である。

(佐藤 あゆみ)

(3) 焼土・炉跡

1号焼土遺構 (第46図、写真図版38)

〔位置・検出状況〕調査区中央、II A17vに位置する。III層上位で焼土の広がりを検出した。〔規模・形状〕40×34cmの不整円形を呈する。〔被熱・堆積土状況〕燃焼面は良く焼けて硬い。掘りかたは認められない。〔重複遺構〕23号竪穴と重複するが、位置とレベルを考慮し本遺構が23号竪穴の炉として使用されていた可能性が考えられる。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕検出状況から縄文時代に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

2号焼土遺構 (第46図、写真図版38)

〔位置・検出状況〕調査区北、II B14bグリッド。III層下位からIV層中で明黄褐色の焼土の広がりとして検出した。東側が調査区域にかかるため、西側のみの検出である。〔規模・形状〕検出した範囲は、90×25cm以上で、調査区域外に続く。不整であるが概ね円形基調と推測される。〔被熱・堆積土状況〕明黄褐色と褐色の焼土で、厚さ10cmほどである。被熱した面はほぼ平坦である。〔重複遺構〕下位に27号竪穴建物跡が位置する。2号焼土遺構は、27号竪穴建物跡の埋没後に形成された焼土遺構である。27号竪穴建物跡(旧)→2号焼土遺構(新)の関係がある。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕時期を決定できる出土遺物はないが、検出面から縄文時代の可能性がある。

(阿部 勝則)

3号焼土遺構 (第46図、写真図版38)

〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡA13xグリッド。Ⅲ層下位からⅣ層中で明褐色の焼土の広がりとして検出した。西側が後世の切土で切られている。周辺から縄文土器片が出土している。〔規模・形状〕検出した範囲は、径30×20cmである。不整であるが概ね円形基調と推測される。〔被熱・堆積土状況〕明褐色の焼土で、厚さ6cmほどである。被熱した面はほぼ平坦である。Ⅲ層下位からⅣ層面に形成されている。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕時期を決定できる出土遺物はない。検出面から縄文時代の可能性がある。

(阿部 勝則)

4号焼土遺構 (第46図、写真図版38)

〔位置・検出状況〕調査区南、ⅡA23tに位置する。4号竪穴精査終了後掘り下げを行い検出された。〔規模・形状〕57×41cmの不整円形を呈する。〔被熱・堆積土状況〕赤褐色の焼土は、硬さが弱い。掘りかたは認められない。〔重複遺構〕4号竪穴に切られる。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕遺構の重複関係から縄文時代中期以前に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

5号焼土遺構 (炉跡) (第47図、写真図版39)

〔位置・検出状況〕調査区中央、ⅡA20wグリッド。Ⅳ層を掘り下げているなかで、Ⅳ層中で石組及び褐色の焼土の広がりを検出した。周辺から縄文土器片が出土している。〔規模・形状〕北側に垂角礫で組まれた石組があり、南側に焼土が広がる。石組部の範囲は、40×40cmである。径30～15cm大の花崗岩の垂角礫5個が内側に斜位に埋め込まれている。石組内部に不明瞭ながら焼土が確認されており、石囲炉と推測される。〔被熱・堆積土状況〕焼土範囲は径10×28cmで、石組の南側に褐色の焼土が広がる。厚さ6cmである。被熱した面はほぼ平坦で、Ⅳ層面に形成されている。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕焼土上位や周辺から出土した土器片P563等が出土している。焼土中からは焼骨片が出土した。〔帰属時期〕遺構の形状と出土遺物から、縄文時代中期後葉と推測される。

(阿部 勝則)

6号焼土遺構 (第47図、写真図版39)

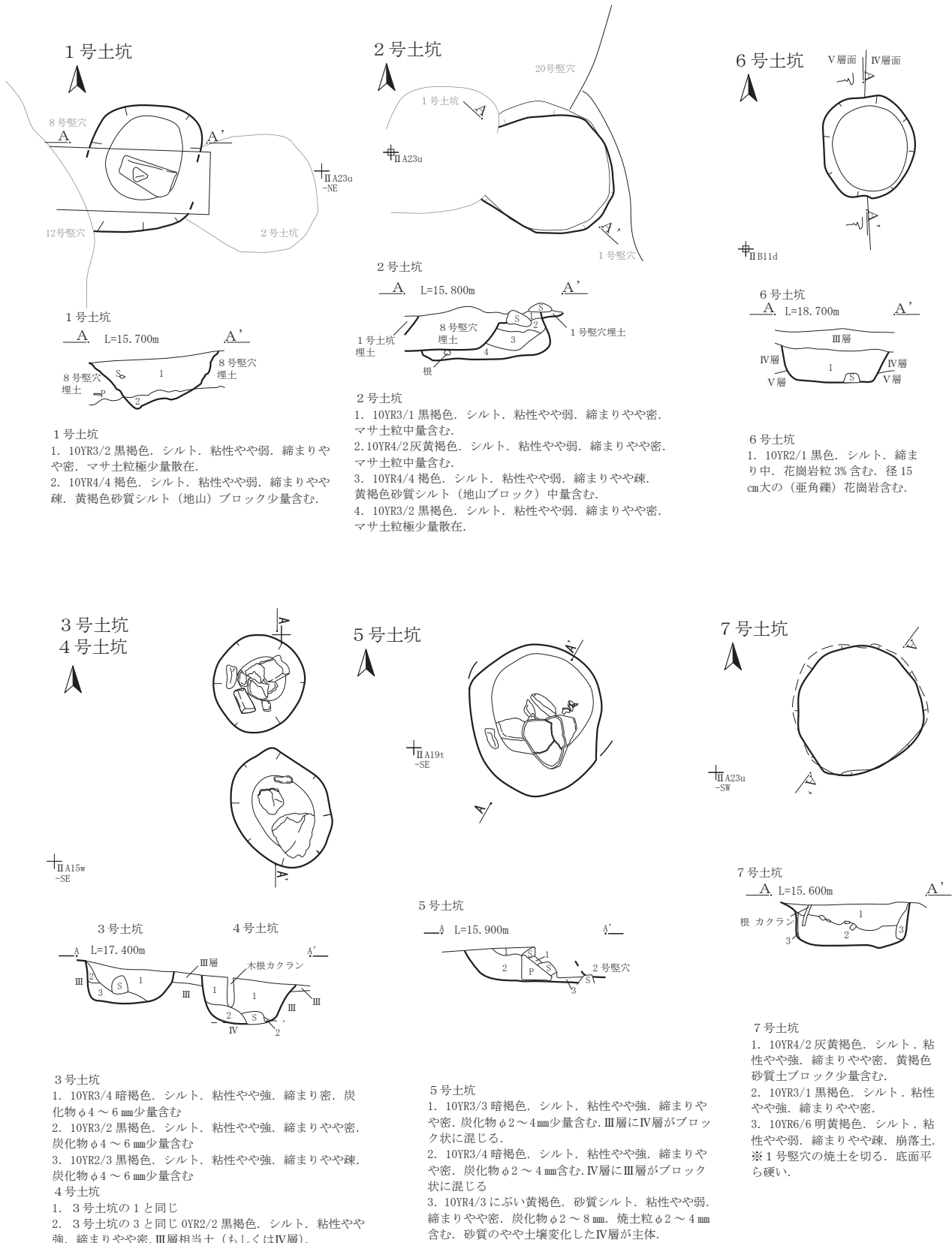
〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡB8fグリッド。Ⅲ層下位からⅣ層を掘り下げているなかで、Ⅲ層下位からⅣ層中で橙色の焼土の広がりを検出した。〔規模・形状〕径46～37cmの不整な形状を呈する。〔被熱・堆積土状況〕橙色の焼土で赤色の焼土ブロックが入る。厚さ5cmである。端部より中央部が厚くなっている。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕遺構の検出状況から、古代の可能性がある。

(阿部 勝則)

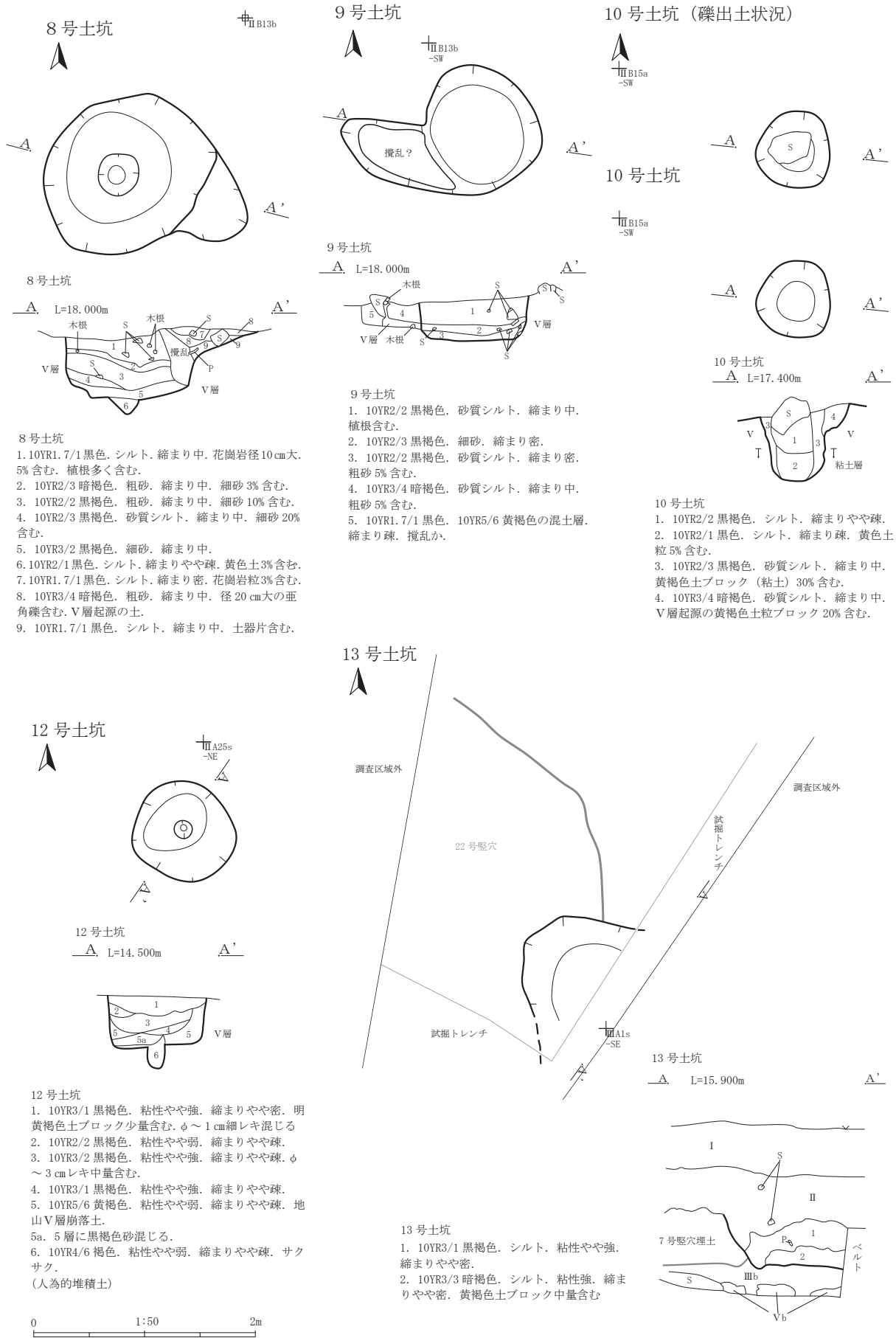
7号a・b・c・d焼土遺構 (第48図、写真図版39)

〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡB7e・7fグリッドで、Ⅲ層面で褐色～橙色の焼土群を検出した。径2×1.5mの範囲に4つの焼土遺構(a・b・c・d)が分布する。〔規模・形状〕a焼土遺構は径50×28cmの不整な長楕円形である。b焼土遺構は径63×50cmの不整な円形で、褐灰色のブロックが焼土中及び周辺に散在する。c焼土遺構は径35×33cmの不整な円形である。d焼土遺構は径50×47cmの不整な円形で、焼土直上に径10cmほどの礫が2個含まれていた。〔被熱・堆積土状況〕a焼土遺構は橙色の焼土で、厚さは最大で5cmである。b焼土遺構は褐色の焼土で、灰白色土が混じる。焼土の厚さは最大で8cmである。c焼土遺構は褐色の焼土で、厚さは最大で7cmである。d焼土遺構は褐色の焼

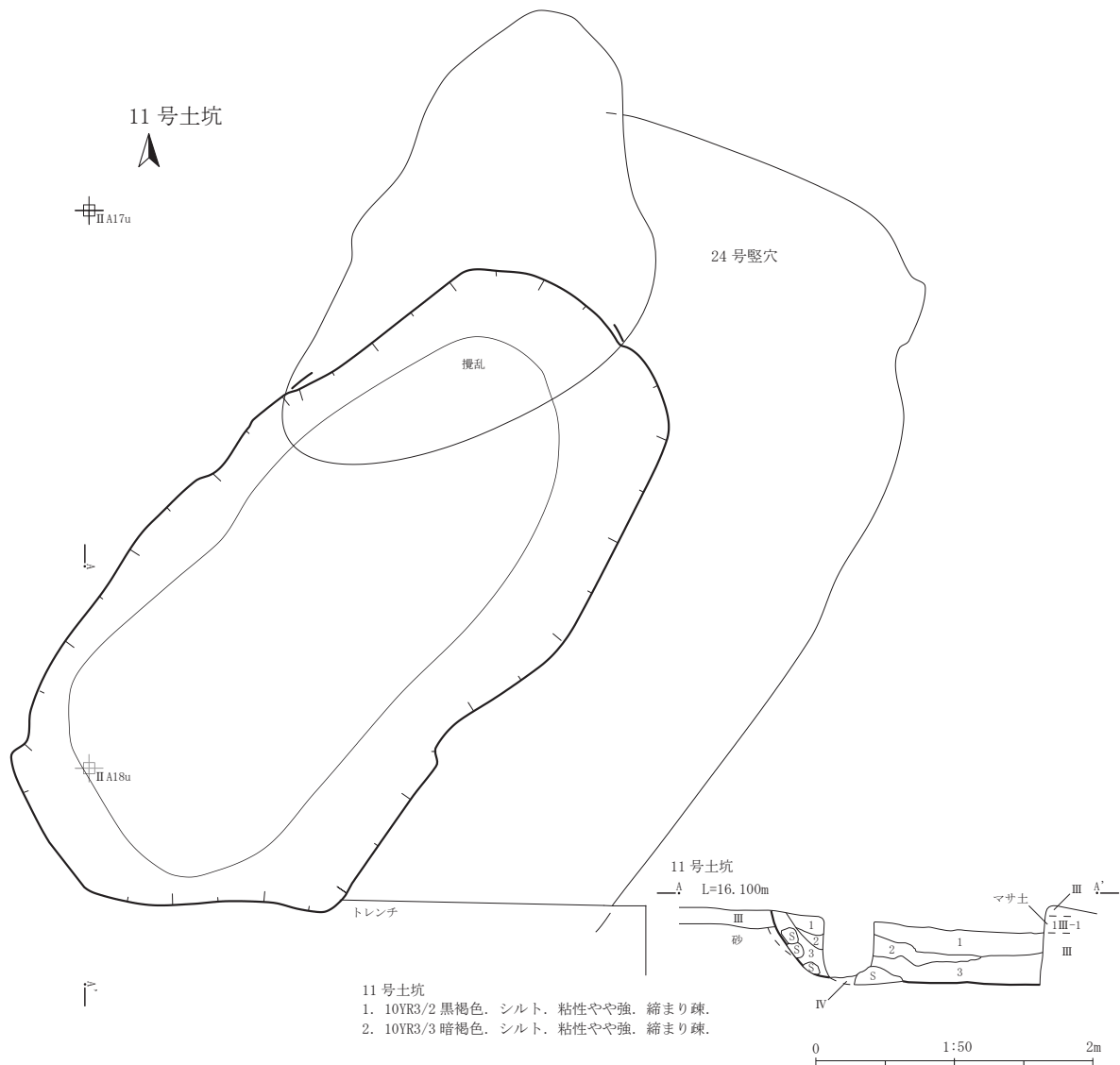
2 遺構



第43図 1~7号土坑



第44図 8~10・12・13号土坑



第45図 11号土坑

土で、厚さは最大で7cmである。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕d焼土遺構の焼土直上から土師器P611が出土した。〔帰属時期〕遺構の検出状況と出土遺物から、古代の可能性がある。

(阿部 勝則)

8号焼土遺構 (第48図、写真図版40)

〔位置・検出状況〕調査区中央、II A21vに位置する。中央部の遺物包含層(III層下位~IV層)掘り下げ時に検出した。〔規模・形状〕一部を掘り下げにより消失しているため全容は不明である。〔被熱・堆積土状況〕明赤褐色の焼土は、硬さの確認できる面はない。掘りかたは認められない。被熱により黒色土が還元しているのが確認できる。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕検出状況から縄文時代に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

9号焼土遺構 (第48図、写真図版40)

〔位置・検出状況〕調査区南、II A22tに位置する。24号堅穴精査終了後掘り下げを行い検出した。〔規模・形状〕64×46cmの不整円形を呈する。〔被熱・堆積土状況〕明赤褐色の焼土は、キメが細かく、きれいに焼成されている。2層は掘りかたの埋土と考えられ、径0.5~1cmの細礫が含まれる。

〔重複遺構〕24号竪穴に切られる。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕遺構の重複関係から縄文時代中期以前に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

10号焼土遺構(炉跡)(第47図、写真図版41)

〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡA13aグリッドを中心とした範囲で、Ⅲ層面で石囲炉と縄文土器片を確認したことから、竪穴建物跡の可能性のあるものとして調査を行ったが、検出した段階で炉跡の周辺はすでに掘り下がっており、床面は確認できなかった。検出時、炉内に径30×20×7cmの扁平な花崗岩の礫が置かれていたが、これは、炉内が黒褐色土で埋った後に置かれたものである。〔規模・形状〕石囲炉である。径70cmの円形基調で、11個の垂角礫を縦位にして、内側に向かって埋め込んで組まれている。石材は花崗岩である。〔被熱・堆積土状況〕石組内は、花崗岩粒を含む黒褐色土が堆積し、明瞭な焼土は確認できていない。〔出土遺物〕炉の埋土上位からP359や炉の周辺の北側からP356・361等が出土している。〔重複遺構〕なし。〔帰属時期〕出土遺物と遺構の検出面から、縄文時代中期後葉と推測される。

(阿部 勝則)

11号a・b焼土遺構(第49図、写真図版41)

〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡB14a～ⅡB15aグリッドで、Ⅲ層下位からⅣ層で焼土の広がりを検出した。炉跡となる可能性を考え、調査を進めたところ、焼土遺構の周辺に硬化した床面と思われる範囲の広がりを確認したが、壁は確認できていない。掘り下げたⅤ層面で確認された柱穴(ⅡA14z-Pit2)から縄文時代前期の土器片が出土しており、焼土遺構周辺の柱穴が当該焼土遺構に伴い、竪穴建物跡を構成していた可能性がある。〔規模・形状〕a・b焼土遺構が確認された。平面形はいずれも不整形である。a焼土遺構の規模は径60×50cmを測る。b焼土遺構の規模は径70×60cmを測る。〔重複遺構〕なし。〔被熱・堆積土状況〕a焼土遺構の明赤褐色の焼土の厚さは最大で4cm。b焼土遺構の明赤褐色の焼土の厚さは最大で8cmである。〔出土遺物〕焼土の検出面と同じ層から、P364・365が出土している。〔帰属時期〕周辺から出土した遺物と遺構の検出状況から、縄文時代前期の可能性があると推測される。

(阿部 勝則)

(4) 集石遺構

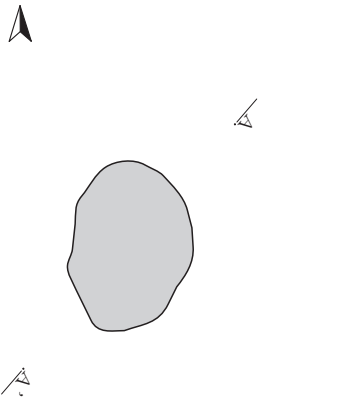
1号集石遺構(第49図、写真図版42)

〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡB15aグリッド。Ⅲ層下位からⅣ層面の黒色土層を掘り下げ中に礫が集合した状態で検出された。周辺において同様の礫が集石された状態は確認されておらず、意図的に集められたものと推測された。〔規模・形状〕集石は、上下2段で確認された。上段の集石の規模は、径85×75cmの範囲に径30～40cm大の花崗岩の垂角礫20個ほどで構成される。下段の集石の規模は、径60×40cmの範囲に径20～30cm大の花崗岩の垂角礫4個ほどで構成される。〔埋土・堆積土状況〕礫中及び礫の下位は主にⅣ層を起源とする黒褐色土が堆積する。〔その他の付属施設〕なし。〔重複遺構〕1号集石遺構の下位に10号土坑が位置する。〔出土状況〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕出土遺物と検出面などから、縄文時代と推測される。

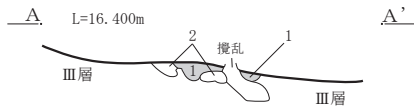
(阿部 勝則)

2 遺構

1号焼土遺構



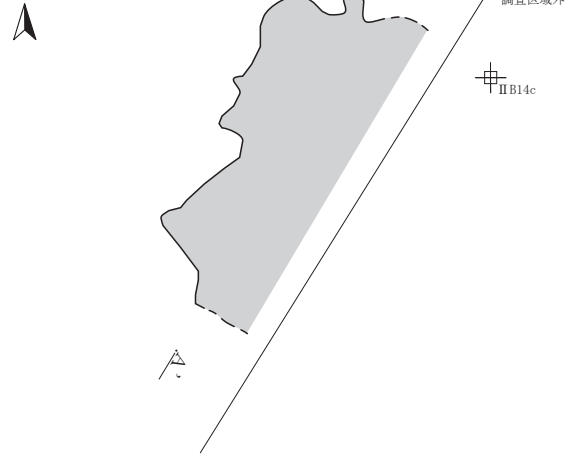
1号焼土遺構



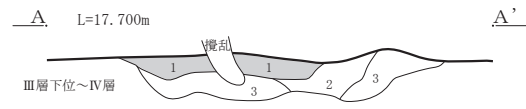
1号焼土遺構

1. 5YR4/8 赤褐色. シルト (焼土). 粘性やや弱. 締まりやや密. 硬い燃焼面.
2. 5YR3/4 暗赤褐色. シルト. 粘性やや弱. 締まりやや疎. 1層に黒色土少量含む.

2号焼土遺構



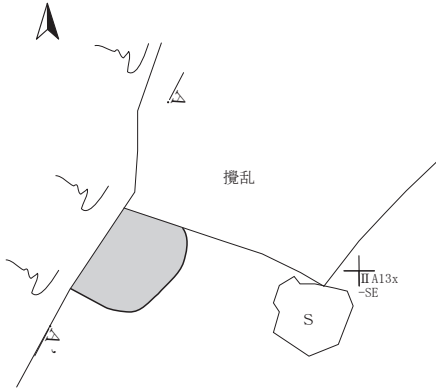
2号焼土遺構



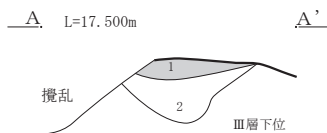
2号焼土遺構

1. 5YR5/3 にぶい赤褐色. 焼土. 締まり密. 黒色土3%含む.
2. 10YR4/6 褐色. 焼土. 締まり密. 混土层. 花崗岩粒3%含む.
3. 10YR2/3 黒褐色. 粘土質シルト. 締まりやや疎. 植根含む.

3号焼土遺構



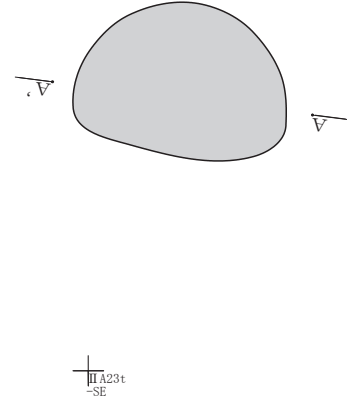
3号焼土遺構



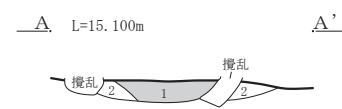
3号焼土遺構

1. 7.5YR5/8 明褐色. 焼土. 締まり中.
2. 7.5YR3/4 暗褐色. シルト. 締まり中.

4号焼土遺構

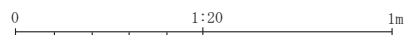


4号焼土遺構



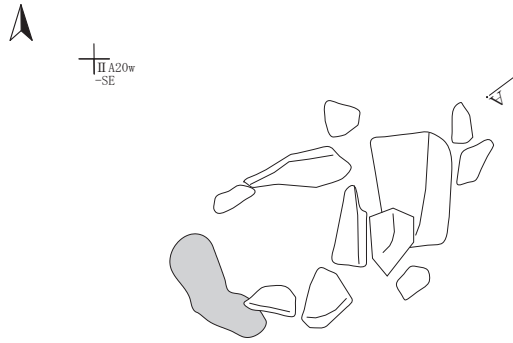
4号焼土遺構

1. 5YR4/8 赤褐色. 粘性やや弱. 締まりやや密. 焼土.
2. 5YR2/3 極暗赤褐色. 粘性やや弱. 締まりやや疎.

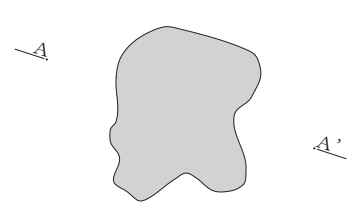


第46図 1~4号焼土遺構

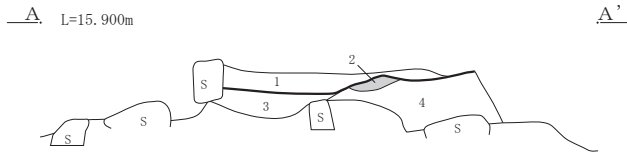
5号焼土遺構 (炉跡)



6号焼土遺構



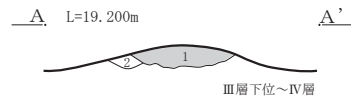
5号焼土遺構



5号焼土遺構

1. 10YR2/1 黒色. 砂質シルト. 締まり中. 花崗岩粒 3% 含む.
 2. 7.5YR4/6 褐色. 焼土. 締まり中. 黒色土ブロック 3% 含む.
 3. 10YR2/2 黒褐色. 砂質シルト. 締まり中. 花崗岩粒 1% 含む.
 4. 10YR1.7/1 黒色. 砂質シルト. 締まり中.
- ※礫の内側が赤変しているように見える.

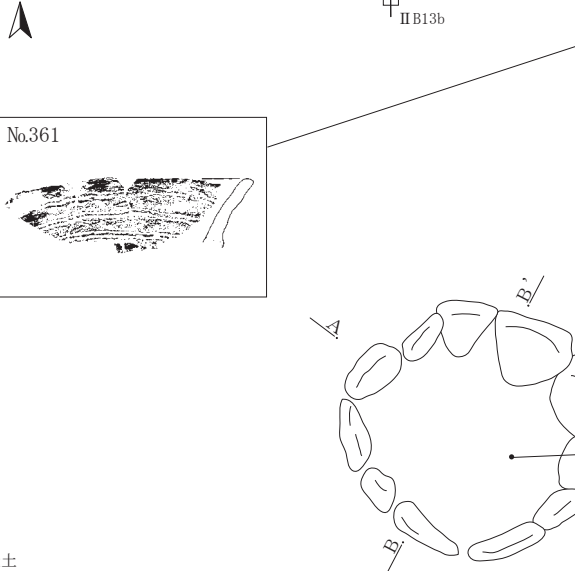
6号焼土遺構



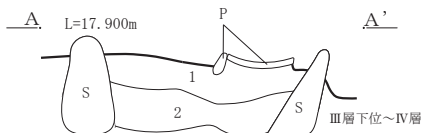
6号焼土遺構

1. 7.5YR6/6 橙色. 焼土. 締まり中. 7.5YR5/6 黄褐色 30%. 5YR6/8 橙色焼土ブロック 5% 含む.
2. 10YR2/3. 黒褐色. シルト. 締まり中. 炭化物 5% 含む.

10号焼土遺構 (炉跡)

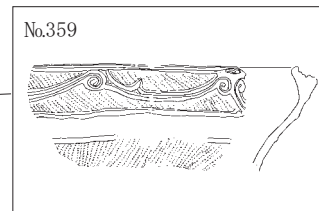
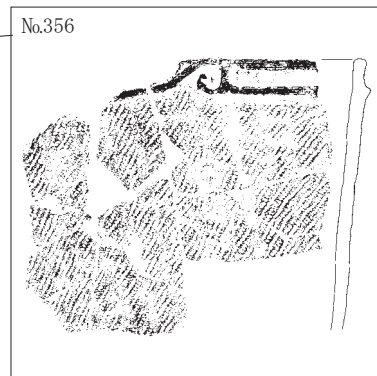


10号焼土

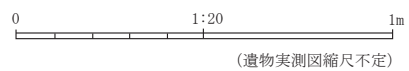
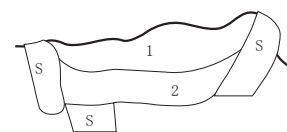


10号焼土遺構 (炉跡) A-A'・B-B'

1. 10YR2/3 黒褐色. シルト. 締まり中. 花崗岩粒 1% 含む.
2. 10YR2/2 黒褐色. シルト. 締まりやや密. 木根含む.



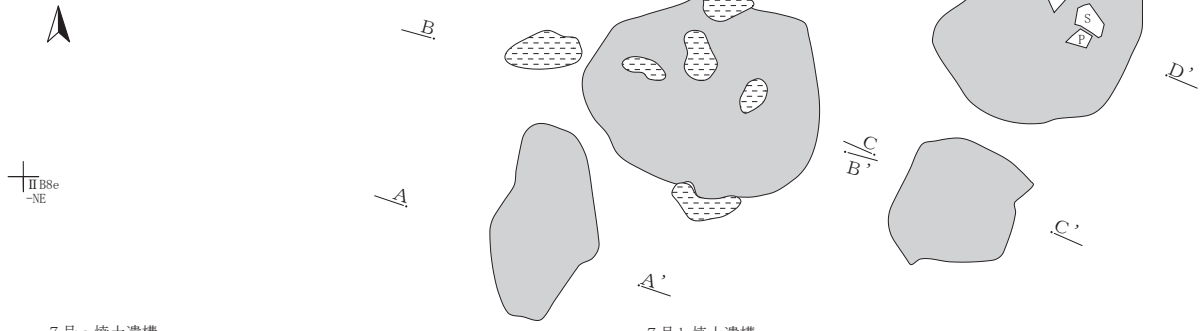
B. L=17.900m B'



第 47 図 5・6・10号焼土遺構

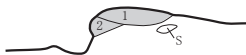
2 遺構

7号 a～d 焼土遺構



7号 a 焼土遺構

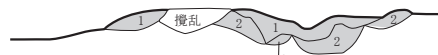
A. L=19.900m A'



1. 7.5YR6/6 橙色. 焼土. 縮まり中. 花崗岩粒含む 3% 含む (汚れた焼土).
2. 10YR4/6 褐色. 焼土. 縮まり中. 花崗岩粒含む 3% 含む.

7号 b 焼土遺構

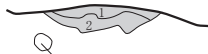
B. L=19.200m B'



1. 10YR4/6 褐色. 焼土. 縮まり中. 花崗岩粒 1% 含む. (汚れた焼土)
2. 7.5YR6/8 橙色. 焼土. 縮まり中. 花崗岩粒 1% 含む.

7号 c 焼土遺構

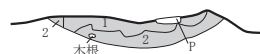
C. L=19.900m C'



1. 10YR4/6 褐色. 焼土. 縮まり中. 花崗岩粒 1% 含む. (汚れた焼土)
2. 7.5YR6/8 橙色. 焼土. 縮まり中.

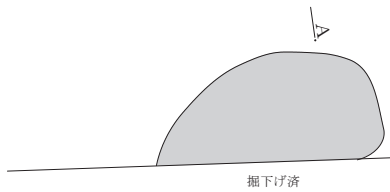
7号 d 焼土遺構

D. L=19.900m D'



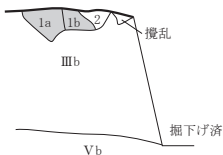
1. 10YR4/6 褐色. 焼土. 縮まり中. 花崗岩粒 1% 含む. (汚れた焼土)
2. 7.5YR6/8 橙色. 焼土. 縮まり中.

8号焼土遺構



8号焼土遺構

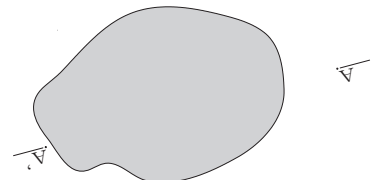
A. L=15.800m A'



8号焼土遺構

- 1a. 5YR5/8 明赤褐色. シルト. 粘性やや弱. 縮まりやや密. キメ細かな焼土. きれいに焼けている.
- 1b. 1a層がにごったような土.
2. 10Y2/3 黒褐色. シルト. 粘性やや強. 縮まりやや疎. 被熱気味.

9号焼土遺構



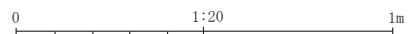
9号焼土遺構

A. L=15.000m A'



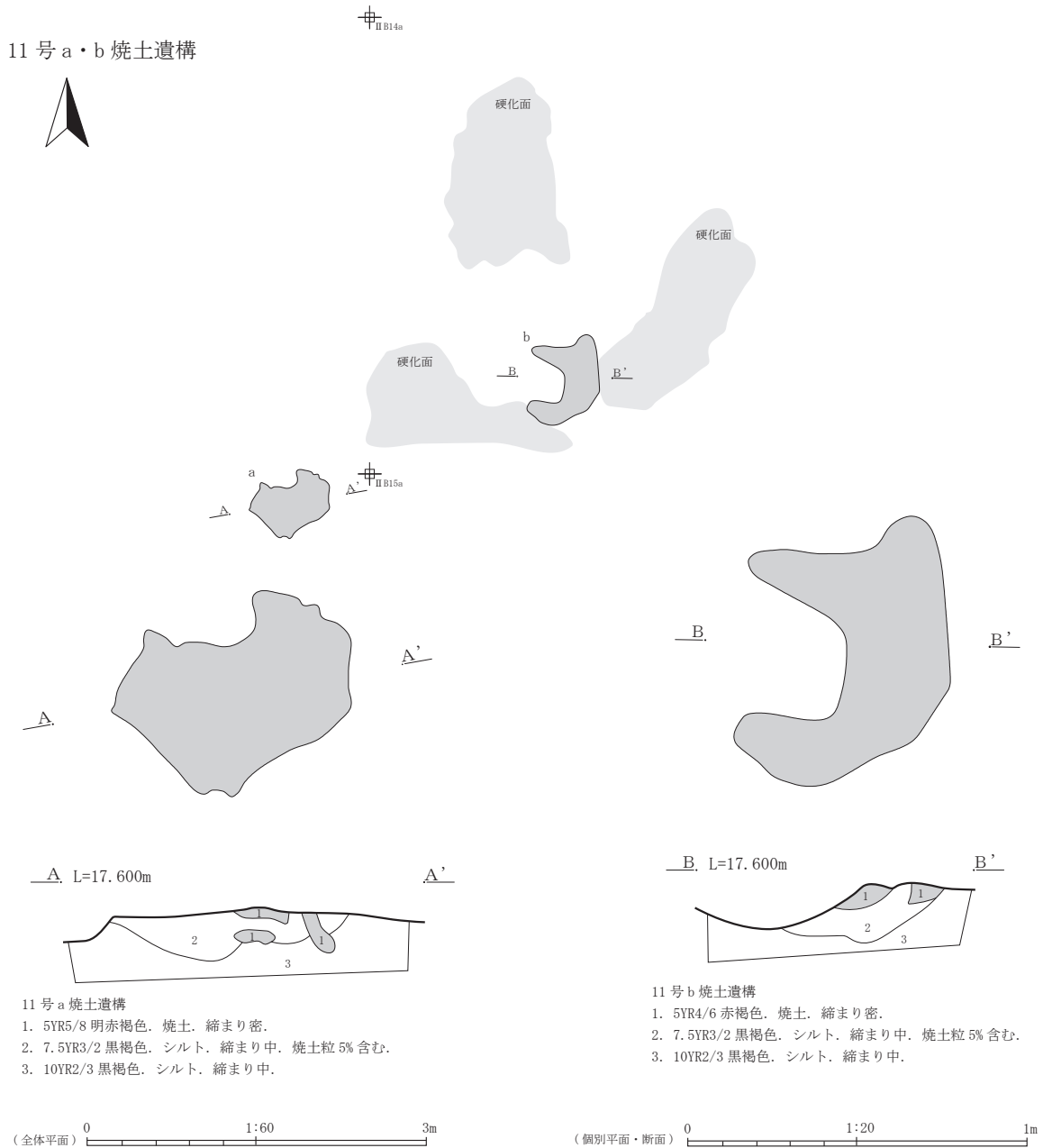
9号焼土遺構

1. 5YR5/8 明赤褐色. シルト. 粘性やや弱. 縮まりやや密. キメ細かな焼土. きれいに焼けている.
2. 10YR3/3 暗褐色. シルト. 粘性やや強. 縮まりやや密. φ5mm～1cm レキ微量含む.

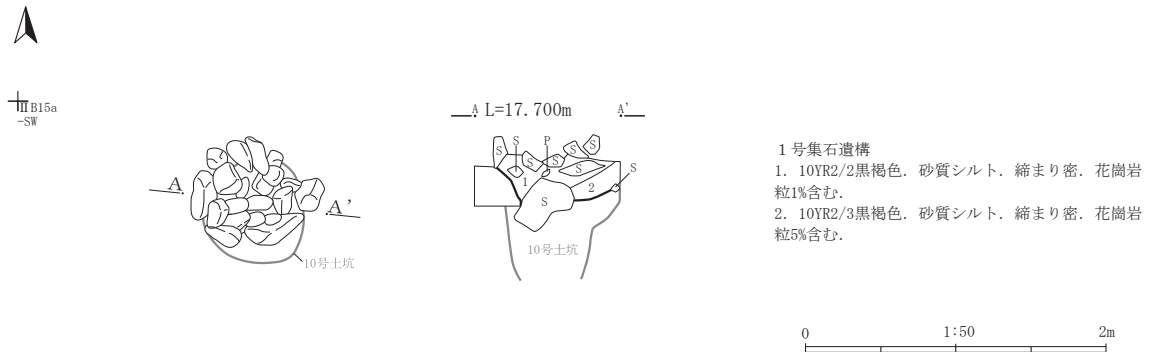


第 48 図 7～9号焼土遺構

11号a・b焼土遺構



1号集石遺構



第49図 11号焼土遺構、1号集石遺構

(5) 柱 穴 (第50図)

調査区全体から検出された柱穴は19個である。その中で掘立柱建物になるものは無かった。

PP1は、縄文時代の遺構が希薄になっている調査区北部で検出され、古代に帰属する7号a～d焼土遺構と関係する可能性がある。

PP2～17は、調査区北～中央部で検出した。竪穴建物跡や、掘立柱建物に付随する柱穴の可能性があるが、調査区外の境に近く、明確な掘り込み等も検出しなかったため、単独の柱穴とした。

PP18・19は、調査区南の西側で検出した。付近では、縄文と古代の遺構を検出したが、それらの竪穴建物跡に付設されたものという位置付けができなかった。

PP2～19は、検出面から縄文時代に帰属すると考えられる。

(6) 沢 跡 (第51図、写真図版42)

縄文時代の遺物包含層であるⅢ層とⅣ層を掘り下げ、遺構最終確認面であるⅤ層を検出していく際、調査区西際を南北に縦断するように黒色土が厚く堆積する範囲を確認した。これは、表土掘削時にはまだ確認できていないものであった。

調査区北西部では、検出面から一段下がる範囲があり、試掘トレンチによる調査を行っている。この部分は黒色土の堆積が薄く、遺構遺物は確認されなかった。また、その際に、黒色土の下に砂礫層が見られたことから間木戸川の氾濫により、本調査区内も過去に流路が形成されていたことが判明していた。

そのため、現在の地形を観察し、調査区西際は間木戸川による段丘状に形成された沢跡と判断した。また、この部分に黒色土が厚く堆積していると想定し調査を進めた。

この範囲は、2・3・4・8・10・24号竪穴と重複する。調査区のほぼ中央を横断するように中央セクションを設定し、堆積土層断面図を作成した。断面図の1a層は、古代の遺構に確認できる主堆積土のⅡ層であり、断面の形状から調査区外にかかる遺構があった可能性が考えられる。それに切られている3a・3b層の灰黄褐色シルトは、10号竪穴の埋土でも確認しており、土器を特に多く含んでいた。この灰黄褐色シルトは、調査区内で西側の一部でしか確認できていない土であり、人為的な様相である。5・6層は炭を含む黒褐色シルトである。7・8a～c層は、Ⅲ層に相当するものであり、調査区全体に確認できる。その下は、自然堆積と考えられる粘土質シルトが確認できる。

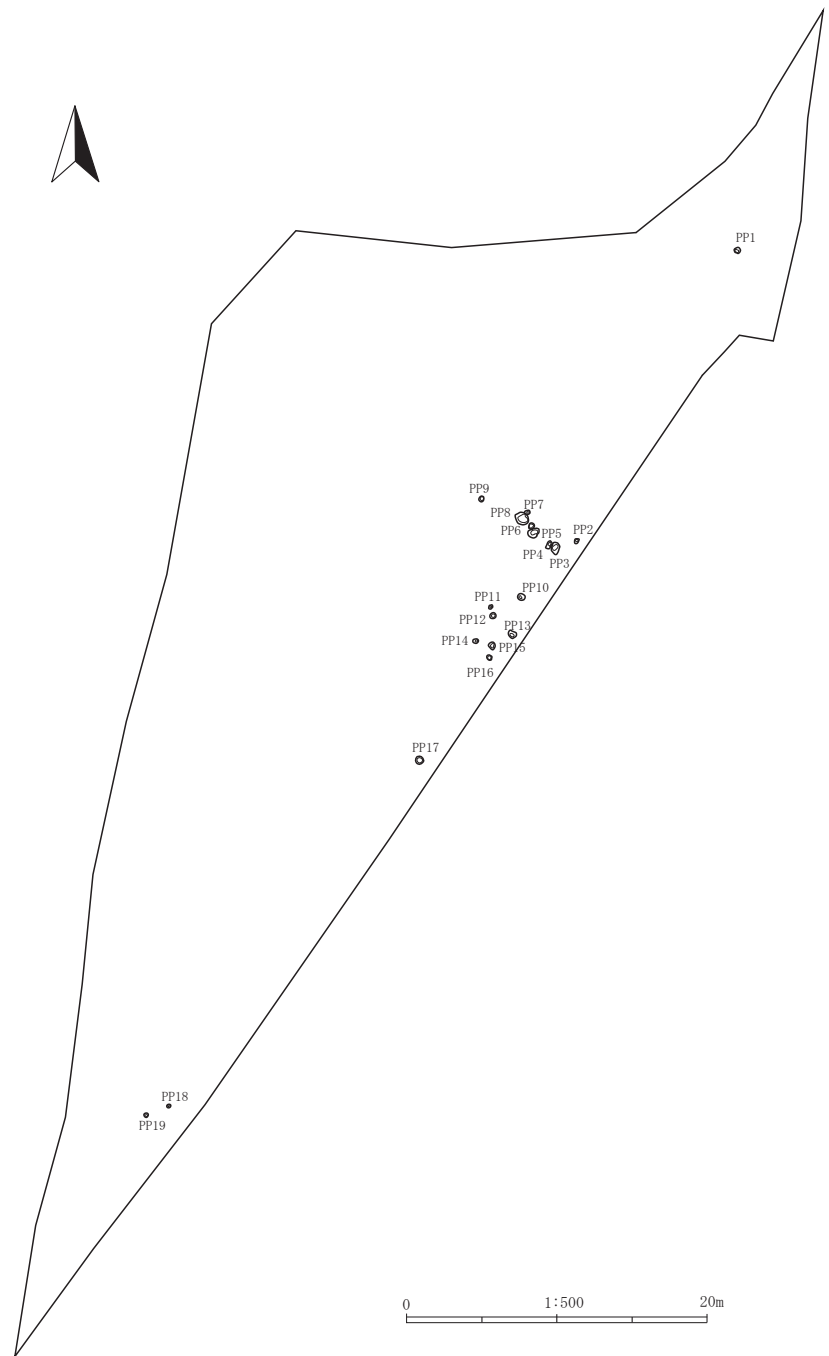
出土遺物は、堆積土下位から、G027・028の石製品が出土している。縄文土器は、P482・484・485・493・544・545・570～574等が出土しており、いずれの層からも多量に出土している。

3a・3b層である灰黄褐色シルトからは、P482・485・570等が出土している。また、7・8a～c層からは、P572・573が出土している。土器の特徴から大木6から8b式を含む7・8a～c層、大木8a・8b式を含む3a・3b層と捉まえることができる。7・8a～c層(Ⅲ層)は、大木6・7a式のみでなく中期後半の土器を多く包含しているため、大木6・7a式期と限定することが出来ない。しかし、その上に堆積する、3a・3b層は、人為的様相の灰黄褐色シルト内から多くの大木8a・8b式の土器が出土しており、一定の期間に廃棄された堆積土と考えられる。

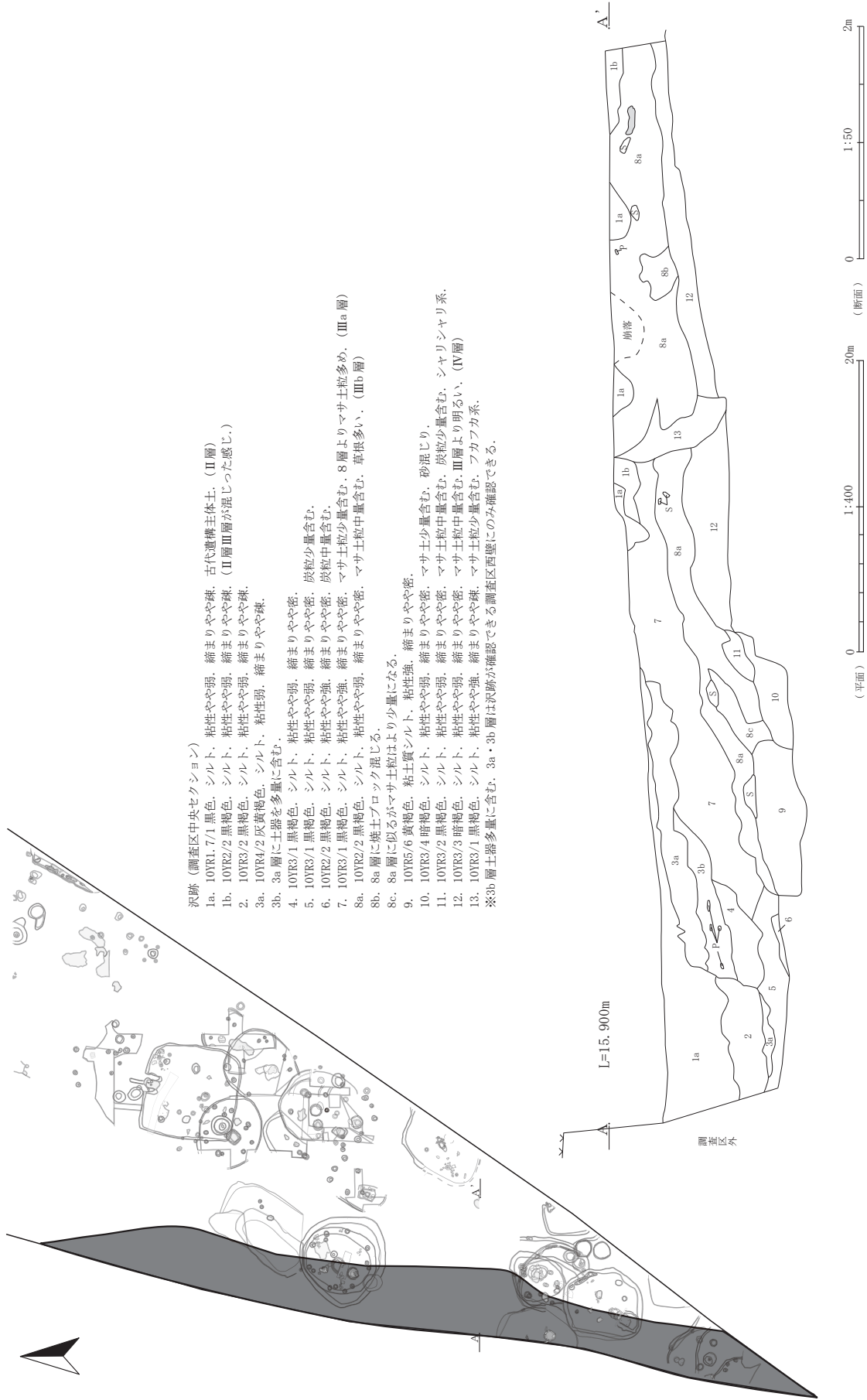
重複する10号竪穴の堆積土上位にも、同様の堆積が認められる。10号竪穴は縄文時代中期前葉から中葉に帰属すると考えられ、沢が埋没する途中で竪穴が構築され、その後廃絶し埋没していく過程で先述した縄文時代中期中葉の人々が、この窪地にも土器等の廃棄行為を行ったのではないかと考えられる。

(佐藤 あゆみ)

名前	グリッド	高低差
PP1	ⅡB8e	26.4
PP2	ⅡB13c	16
PP3	ⅡB13b	51.6
PP4	ⅡB13b	25
PP5	ⅡB13b	35.4
PP6	ⅡB13b	30
PP7	ⅡB12b	25
PP8	ⅡB13b	26
PP9	ⅡB12a	63.6
PP10	ⅡB14b	37
PP11	ⅡB14a	24.6
PP12	ⅡB14a	33.6
PP13	ⅡB14a	32
PP14	ⅡB15a	46
PP15	ⅡB15a	45.6
PP16	ⅡB15a	27
PP17	ⅡA17y	29
PP18	ⅡA22u	20.4
PP19	ⅡA22u	22.6



第 50 図 柱穴



第51図 跡跡

3 遺 物

(1) 縄文～弥生土器(第52～116図、写真図版55～96、観察表は図内)

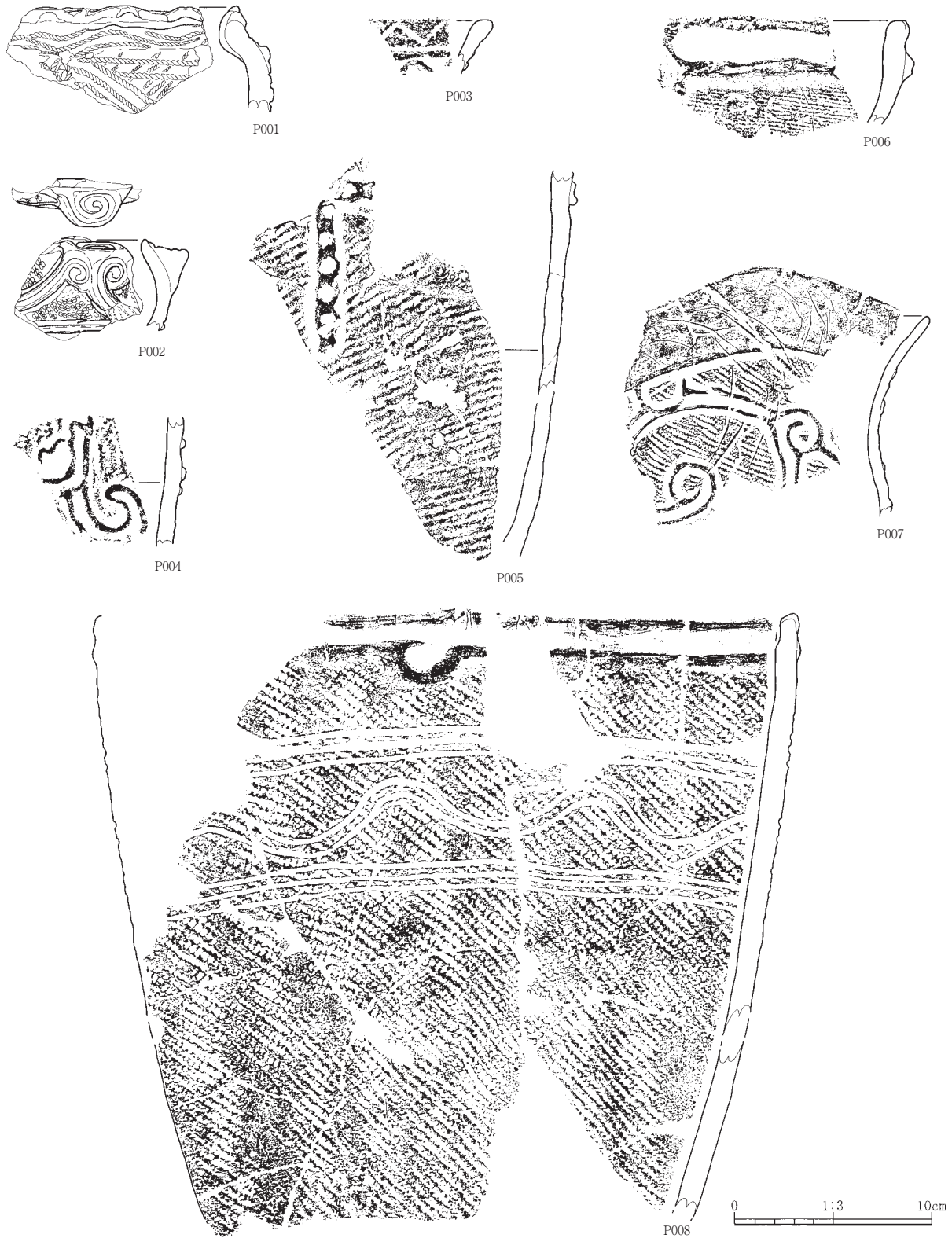
大コンテナ(32×42×30cm)約54箱(接合前)出土。大部分(2/3以上)を縄文時代中期中葉大木8 a～b式土器が占め、次いで縄文時代前期前葉大木1式～中期前葉大木7 b式、中期後葉大木9式古期で、その他は非常に少なく数片ずつである。その他には、縄文時代早期中葉貝殻文土器(P450)、早期末表裏縄文土器があり(P439、P440)、P189は縄文時代中期初頭円筒上層a式、P519は弥生時代中期、P558は縄文時代後期初頭三十稲場式系土器と思われる。P312は縄文時代後期後葉、P396は縄文のみだが中期末大木10式、P556は後期前葉十腰内I式古期の可能性がある。P500は縄文前期末円筒下層d式の影響を受けているか。大木1～7 b式では、大木7 a式が比較的多く、次いで大木4～6式で、大木3、7 b式は少ない。大木1～2 b式では、明確に型式同定できるものは少ないが、一定量出土しているようである。大木9式古期は、大木3、7 b式より少し多い程度か。4号竪穴建物跡と17号竪穴建物跡で比較的まとまって出土した。その他の土器型式については、大木7 a式古期に21号竪穴建物跡等幾つかまとまった地点が認められる以外は、大木8 a～b式土器に混じって出土している。

掲載基準(原則)。出土量が多く、また遺構内出土品が多くを占めるので、遺構外については、遺構内で出土していない時期・型式以外は、概ね10×10cm以上の残りの良いものしか選ばなかった。遺構内についても、床面出土やNo.遺物等出土位置が明確なものを除いて、残りの良いものしか選んでいない。676点を選別したが、遺構外251点は図化が追いつかず、149点しか掲載できなかった。

整理を通して気づいた特徴。大木8 a～8 b式は、縄文を胴部タテ回転するのが通常だが、口縁部は別でヨコ回転するものが多い。底面はナデ調整している。P68は、東北地方南部系の球胴鉢か。興野義一氏は「大木4式と大木5式とで大きく異なる点は、5式では体部の粘土紐貼付文が折目正しく、細かくちぎってつけられて、連続山形または鋸歯状になること」(興野 1996:p.219)と述べているが、今回調査で出土した大木5式とおぼしき土器は鋸歯状になるものがほとんどなく、大木4式との区別が難しい。大木4～5式では、外面のスス付着や内面のコゲ付着が顕著に見られ、内面のコゲは大木6～7 a式球胴鉢の下半部にも顕著である。

個々の記載は表に記したので、ここで表の見方を補足しておく。観察表の出土位置の欄の(分数)は、出土割合を示す。“→”は調整順序を示し、矢印左側の方が前で、右側が後。以下、表の補足。P46の出土位置は、表に記したほかに、“3号竪穴建物跡西・2層”、“3号竪穴建物跡西・3層”、“3号竪穴建物跡西・埋土上位”、“3号竪穴建物跡・埋土上位”、“3号竪穴建物跡・埋土中位”がある。P51は、このほか「II A20 v・IV層上位」で取り上げた破片も接合していて、その割合は、「3号竪穴」が3/6、「6号竪穴」が2/6、「II A20 v」が1/6。P274は、接合して1/4周以上残存しているが、上から見ると楕円形を呈す。これが本来の形か歪んでいるのか判断がつかないので径は復元しなかった。P273とも同一個体の可能性がある。P406の出土位置は、表に記したほかに、“II A21 t・II～III層”、“II A21 t・III層下位”がある。P460の絡条体圧痕は、軸部分の回転圧痕が認められる。P575の突起口唇部に縄文あり、原体は単軸絡条体第1類(L)のように見えるが、Lの側面圧痕かも知れない。帯状のスス、コゲは、胴部中央に幅4cm程度に認められる。

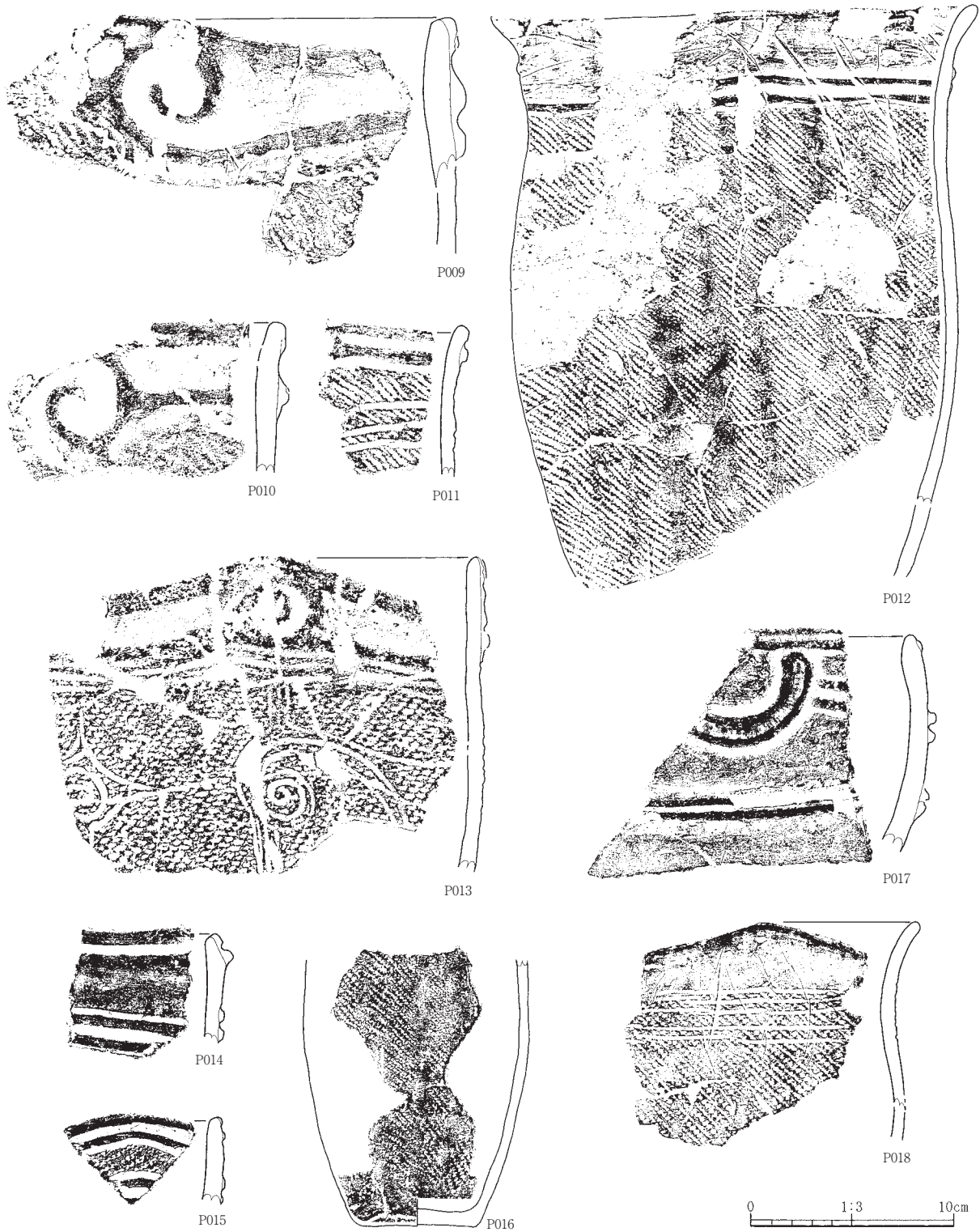
参考文献 興野義一 1996「山内清男先生供与の大木式土器写真セットについて」『画龍天晴』山内先生 没後25年記念論集刊行会 (金子 昭彦)



第3表 間木戸Ⅱ遺跡縄文~弥生土器観察表

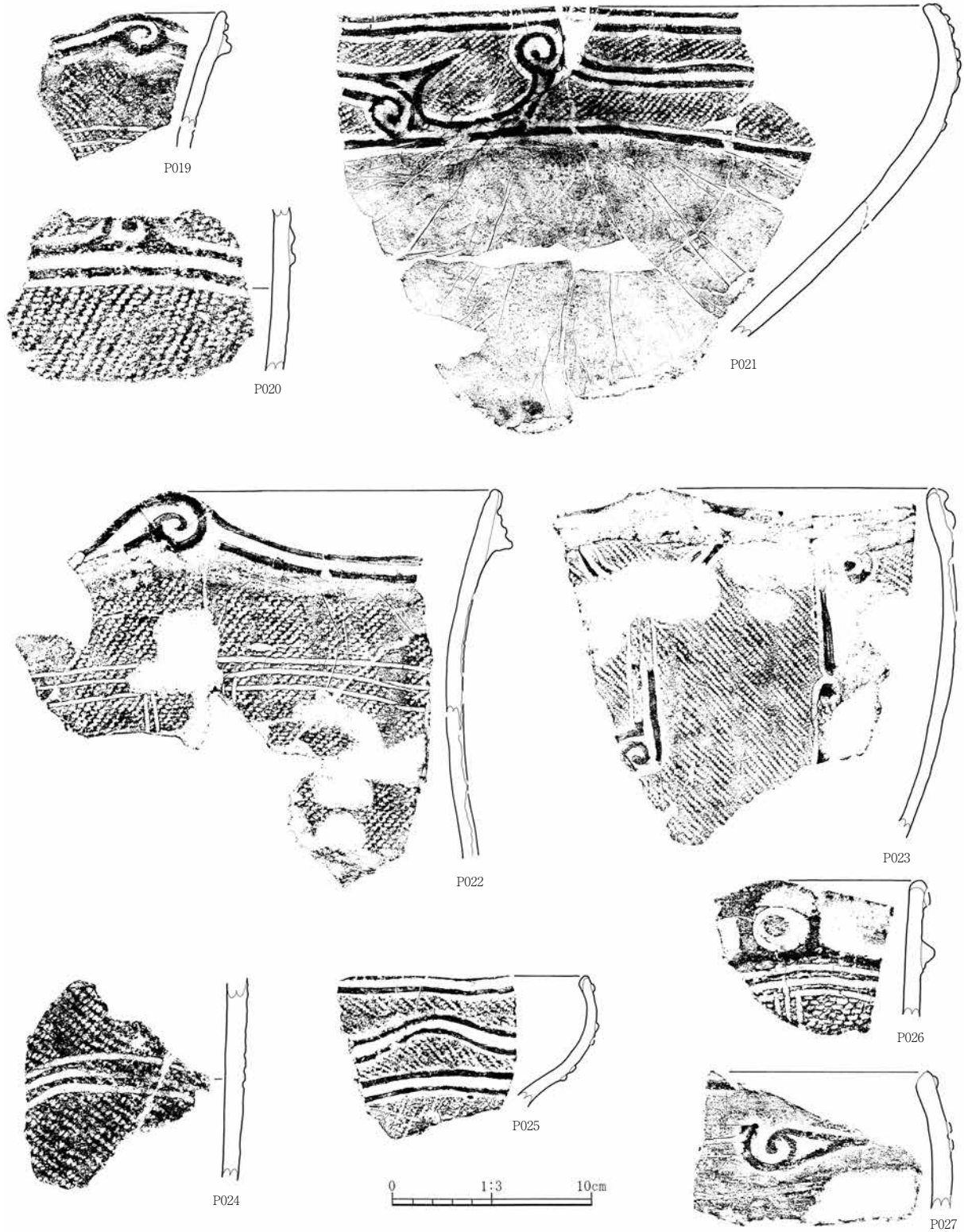
掲載No.	出土地点・層位	器種・部位	外面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内面 (調整など)	備考	本文記載	図	写真
P001	26号竪穴建物跡北(木根)・埋土上~中位	深鉢・口縁部	口縁蛇行隆帯・L側面圧痕	ナデ			52	55
P002	26号竪穴建物跡西・埋土上~中位	深鉢・口縁部	RLRヨコ→ナナメ→隆帯に沿う浅い沈線	ナデ			52	55
P003	26号竪穴建物跡南東・床直	口縁部	L側面圧痕	ナデ			52	55
P004	26号竪穴建物跡 pit5埋土	深鉢・胴部	LRヨコ→ソーン状貼付	ナデ	外面全面スス附着		52	55
P005	26号竪穴建物跡東・南東・床直、埋土上~中位、Ⅱ A15x・Ⅲ層下位	深鉢・胴部	LRヨコ、ナナメ→貼付上押圧	ナデ	胎土砂・外下部スス附着		52	55
P006	27号竪穴建物跡南側・Ⅱ層下	深鉢・口縁部	単軸絡1(L)ヨコ?→雑なナデ	ナデ	内面コゲ		52	55
P007	1号竪穴建物跡・埋土一括(5/6)、20号竪穴建物跡・埋土上~中位	深鉢(1/4周以下)	突起・LRタテ→細い隆帯に沿うナデ	ナデ	外全面スス、内全面コゲ		52	55
P008	2号竪穴建物跡 土器1床面、北埋土上位	深鉢(1/3周未満)	太く低い隆帯(光沢)・LRタテ→太く浅め沈線	ナデ	外面スス附着		52	55

第52図 縄文~弥生土器(1)



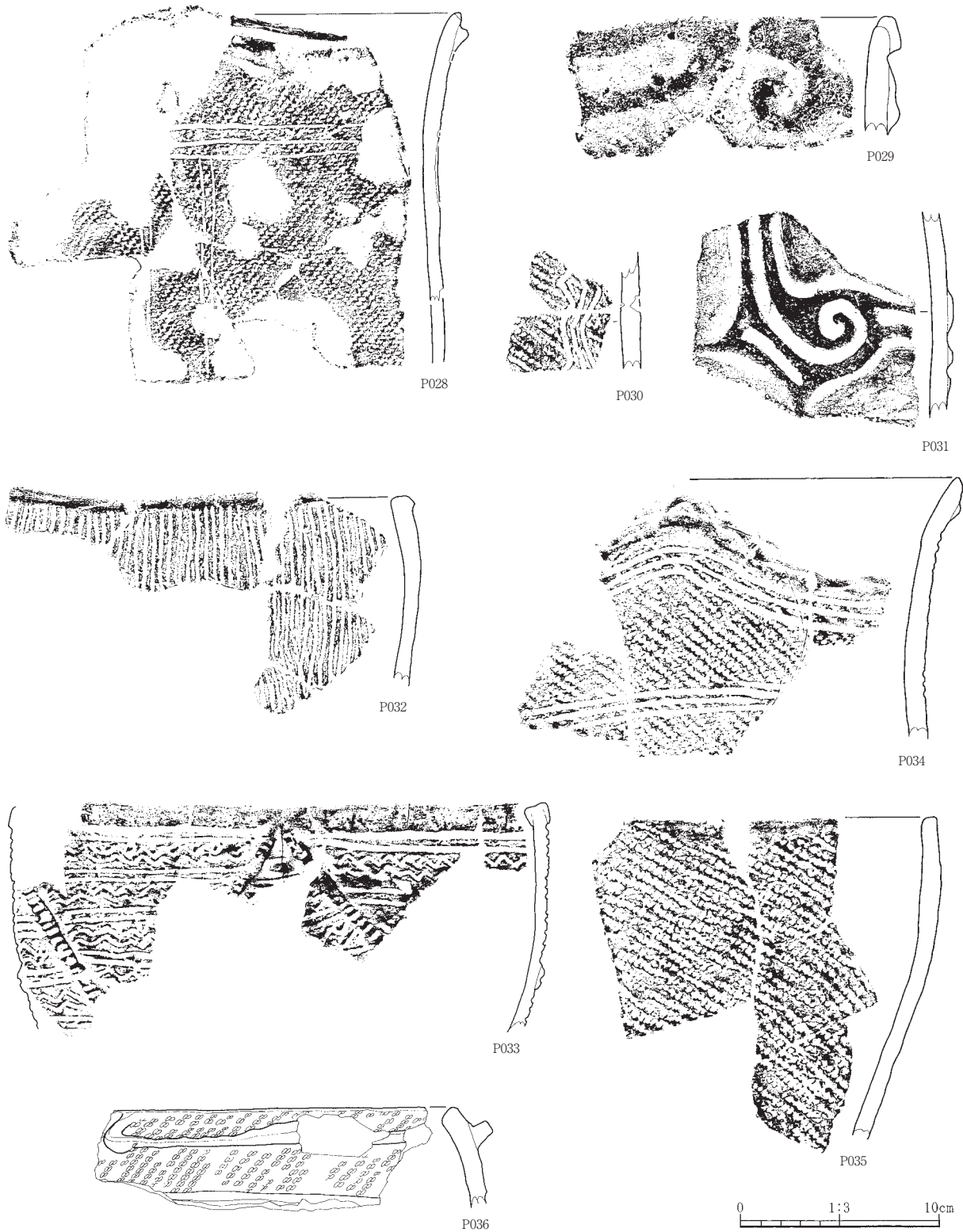
掲載No.	出土地点・層位	器種・部位	外面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内面 (調整など)	備考	本文記載	図	写真
P009	2号竪穴建物跡土器2床面	深鉢・口縁部	LRタテ?→高め貼付	ナデ	胎土石・外面スス付着・10と同一?		53	55
P010	2号竪穴建物跡土器2床面	深鉢・口縁部	LRタテ? (摩耗)	ナデ	9と同一個体?		53	55
P011	2号竪穴建物跡土器2床面	深鉢・口縁部	LRタテ?→浅め沈線	ナデ			53	55
P012	2号竪穴建物跡土器3床面、2号竪穴建物跡西・埋土上位、3号竪穴建物跡西	深鉢(胴中略一周)	LRタテ→隆帯→なでつけ	ナデ	外上スス、下二次焼成、内コゲ		53	56
P013	2号竪穴建物跡土器3床面	胴部	RLタテ→浅い沈線	摩耗	内外摩耗		53	55
P014	2号竪穴建物跡東・1層	深鉢・口縁部		ナデ			53	55
P015	2号竪穴建物跡東・1層	深鉢・口縁部	LRLヨコ→低め隆帯に沿うナデ	ナデ			53	55
P016	2号竪穴建物跡西・埋土上位(1/6)、Ⅱ A18t・Ⅳ層上位	鉢(底のみ一周)	LRタテ→底部～底面ナデ	ナデ	外スス、内底上コゲ付着		53	56
P017	2号竪穴建物跡西・埋土上位	口縁部	(ナデ)	ナデ	下の割れ口、粘土接合面剥離		53	55
P018	2号竪穴建物跡西・埋土上位	鉢(1/4周以下)	突起・LRタテ→浅い沈線	ナデ	外面スス、内面下コゲ付着		53	55

第53図 縄文～弥生土器(2)



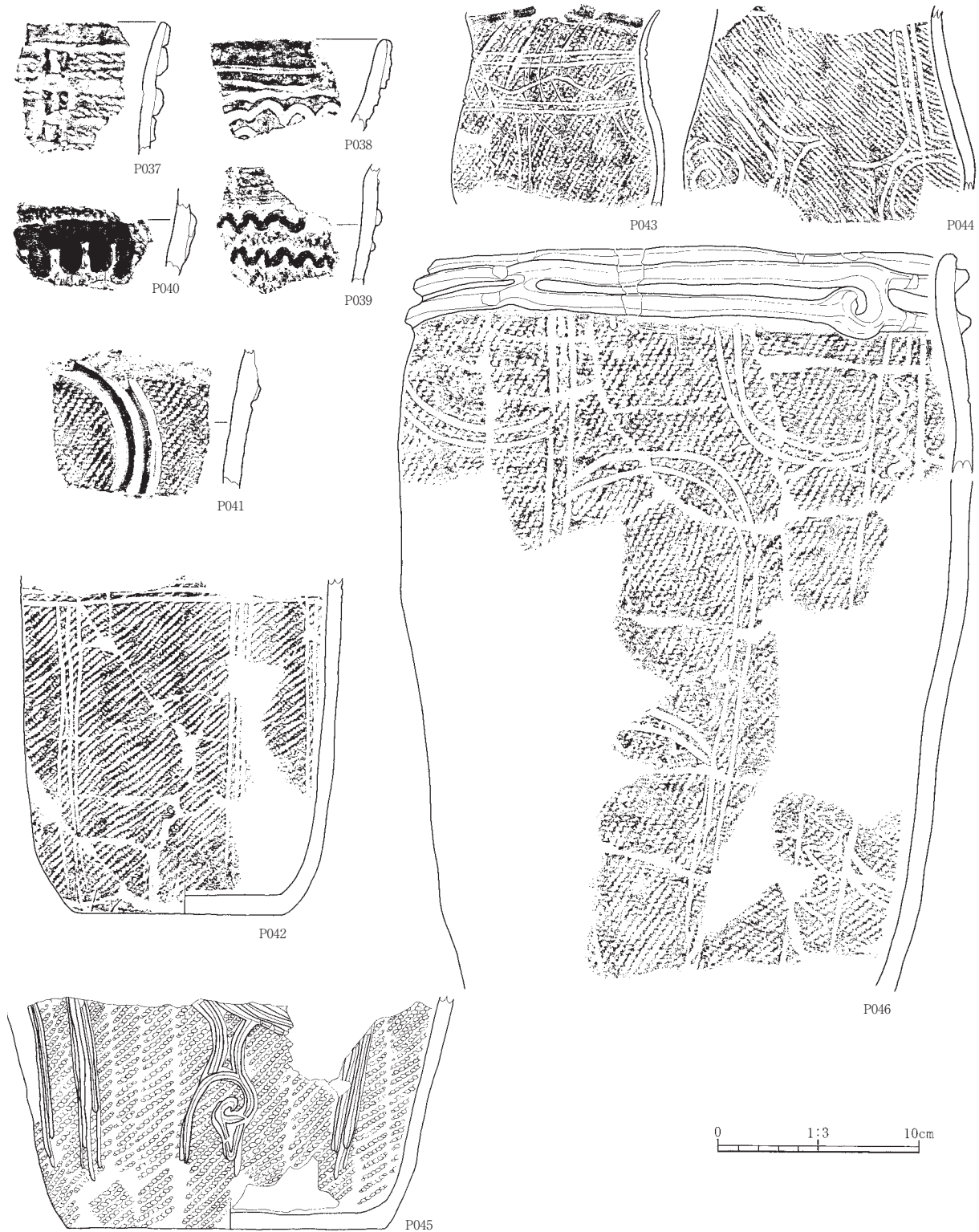
掲載 №	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部 / 胴部 / 底部 / 底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写真
P019	2号竪穴建物跡西・埋土上位	深鉢・口縁部	突起・LRタテ→浅い沈線	ナデ			54	55
P020	2号竪穴建物跡西・埋土上位	深鉢・胴部	RLRタテ→隆帯に沿うナデ	ナデ	外面二次焼成で摩耗		54	56
P021	2号竪穴建物跡西・埋土上位	浅鉢(1/5 周未満)	LRヨコ→隆帯に沿う浅い沈線	ナデ	内面摩耗		54	56
P022	2号竪穴建物跡西・埋土上位	深鉢(1/5 周以下)	RLタテ→浅い沈線	ナデ	外面剥落		54	56
P023	2号竪穴建物跡南・埋土上位	深鉢(1/5 周以下)	4波状?・LRタテ→貼付→隆帯に沿うナデ	ナデ	外面剥落		54	56
P024	2号竪穴建物跡南・埋土上位	深鉢・胴部	LRタテ→太く浅い沈線	ナデ	外面摩耗		54	56
P025	2号竪穴建物跡北・埋土上位(1/2)、2号竪穴建物跡南・埋土上位	深鉢・口縁部	RL、口縁ヨコ、胴タテ→貼付→隆帯なでつけ	ナデ	外面スス付着		54	56
P026	2号竪穴建物跡北・埋土上位	深鉢・口縁部	突起・RLR?タテ→浅い沈線	ナデ			54	56
P027	2号竪穴建物跡北・埋土上位	胴部	隆帯なでつけ	ナデ			54	56

第54図 縄文～弥生土器(3)



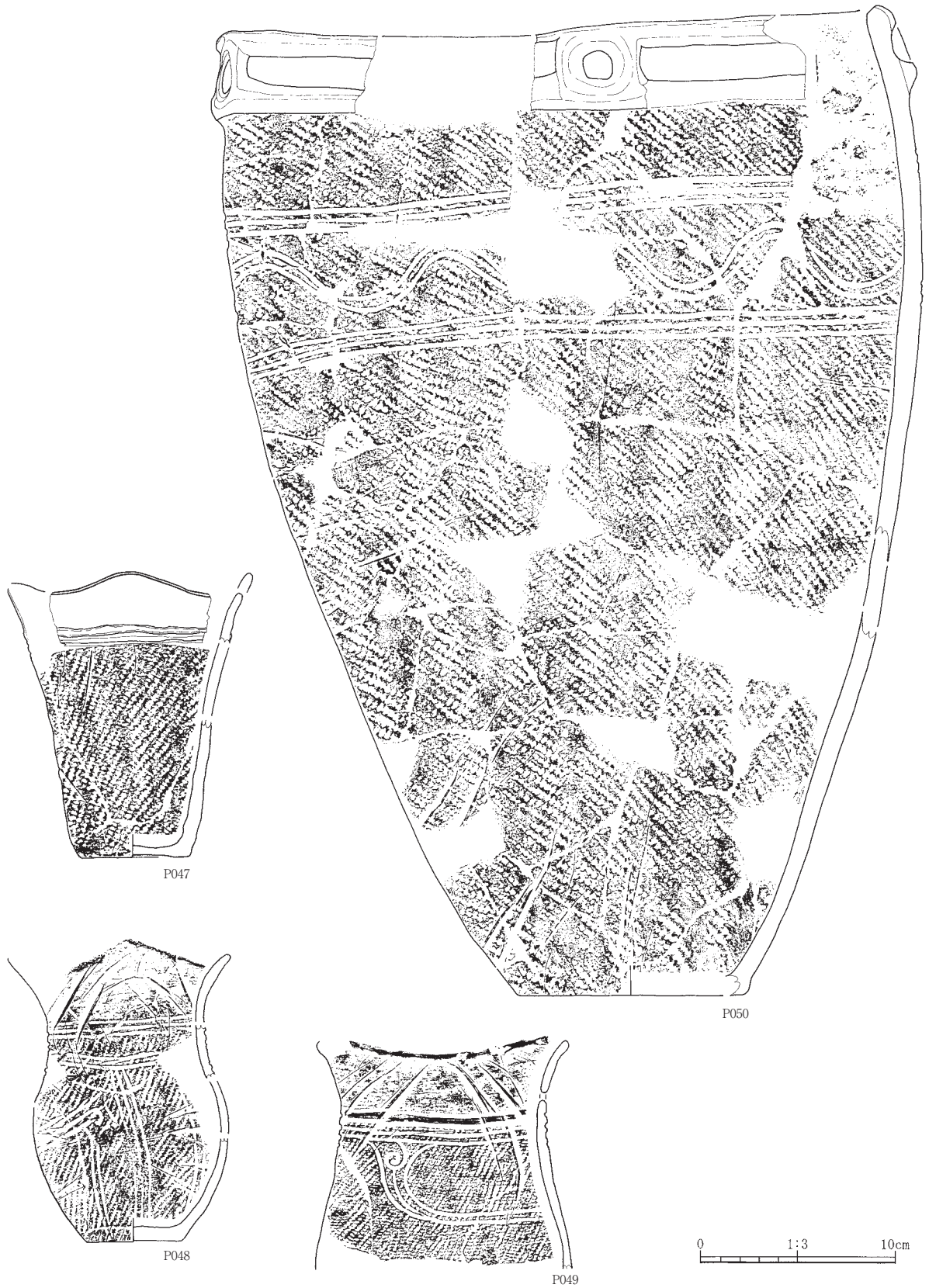
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)		内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	写 真
P028	2号竪穴建物跡北・埋土上位	深鉢 (1/4 周以下)	突起・RL タテ→浅い沈線	摩耗	外面剥落、摩耗		55	56
P029	2号竪穴建物跡北・1層	深鉢・口縁部		ナデ	胎土石・外面摩耗		55	56
P030	2号竪穴建物跡北・1層	深鉢・胴部	LR タテ→太く浅い沈線	ナデ	下の割れ口、粘土接合面剥離?		55	57
P031	2号竪穴建物跡生文課トレンチ・埋土一括	深鉢・胴部	隆帯なでつけ	ナデ丁寧			55	57
P032	2号竪穴建物跡生文課トレンチ・埋土一括、II A19t・IV層上位	深鉢・口縁部	口唇ナデ/単軸絡1 (R) タテ	ナデ			55	57
P033	II A24s・III~IV層	深鉢 (1/4 周以下)	口唇平ら・低め隆帯に刻目・浅い雑な沈線	ナデ	内面口縁以外コゲ付着		55	57
P034	II A24s・III~IV層	深鉢 (1/4 周未満)	LR タテ→太い沈線	ナデ			55	57
P035	II A24s・III~IV層	深鉢・口~胴部	LR タテ→口縁ナデ	ナデ光沢			55	57
P036	II A24s・III~IV層	深鉢・口縁 (1/4 周未満)	高い隆帯・RLR、上部側面圧痕、下部タテ回転	ナデ			55	57

第 55 図 縄文～弥生土器 (4)



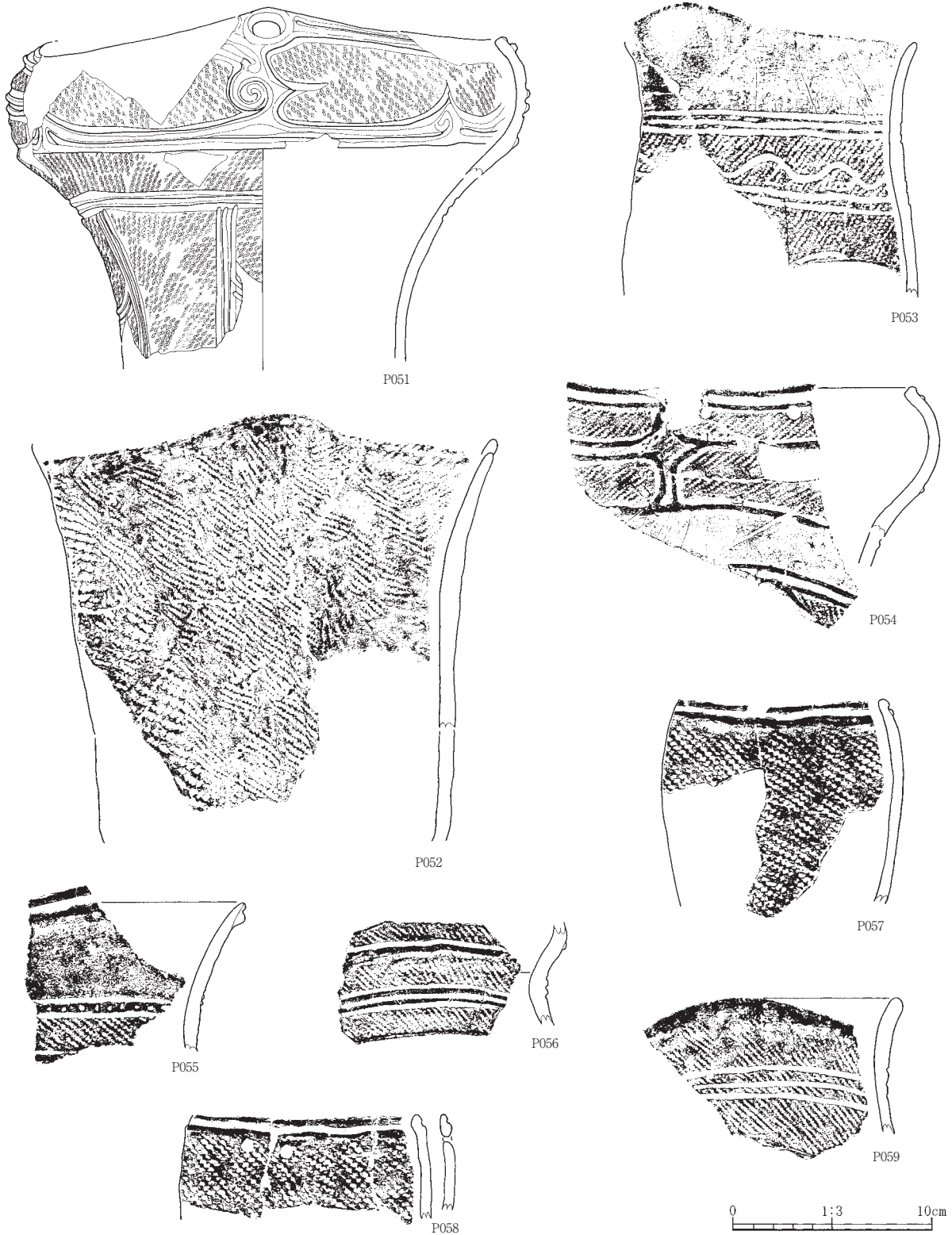
掲載 No	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写 真
P037	Ⅱ A 24 s・Ⅲ~Ⅳ層	深鉢・口縁部	高め隆帯→LR 側面圧痕	ナデ	外面スス付着		56	57
P038	Ⅱ A 24 s・Ⅲ~Ⅳ層	深鉢・口縁部	半截竹管状工具による沈線	ナデ			56	57
P039	Ⅱ A 24 s・Ⅲ~Ⅳ層	深鉢・口縁部	LR ヨコ?→高め隆帯	ナデ			56	57
P040	Ⅱ A 24 s・Ⅲ~Ⅳ層	深鉢・胴部	太く高め貼付→ほぼ無調整	ナデ	外面スス、内面コケ		56	57
P041	Ⅱ A 24 s・Ⅲ~Ⅳ層	深鉢・胴部	RL タテ→隆帯に沿う浅い沈線	ナデ			56	57
P042	3号竪穴建物跡・床面土器 No.1 (1/3)、南4層、東4層	深鉢(底略一周)	文様4単位?・RL タテ→細く浅い沈線/底面ナデ丁寧	ナデ丁寧			56	57
P043	3号竪穴建物跡・床面土器 No.2 (ほとんど)、東埋土中位	鉢(3/4 周未満)	波状口縁・文様2単位?・RL タテ→細く深め沈線	ミガキ?			56	57
P044	3号竪穴建物跡・埋土上位	鉢(1/3 周以下)	LR タテ→太く浅い沈線	ナデ丁寧	外面スス、内面コケ付着		56	57
P045	3号竪穴建物跡石囲炉1層、床面土器 No.4、西3層、南2層、南4層	深鉢(底一周)	RL タテ・低い隆帯に沿う浅い沈線/底面ナデ丁寧	ナデ	外スス・上の割れ口、粘土接合面剥離		56	57
P046	No.96=3号竪穴建物跡土器 No.5石囲炉1・1層ほか	深鉢(口3/4 周)	文様2種2単位・高い隆帯・RL タテ→太く浅め沈線、ナデ	ナデ	外黒斑?・外スス?、内コケ?	p73	56	58

第 56 図 縄文~弥生土器 (5)



掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写 真
P047	3号竪穴建物跡土器 No.3床面、3号竪穴建物跡東・埋土中位、埋土上位	鉢(底一周)	4波状?・RLタテ→太く浅い沈線、底～底面ナデ	ナデ	外スス、二次焼成、内底以外コゲ		57	58
P048	3号竪穴建物跡土器 No.3床面、東・埋土中位、南・埋土中位	鉢(底のみ一周)	二波状口縁・RLタテ→浅い沈線/底面ナデ	ナデ	外スス、内コケ?		57	58
P049	3号竪穴建物跡・床面、東埋土中位	鉢(略一周)	二波状口縁・文様2単位+異文様・RLタテ→浅い沈線	ミガキ?	外面スス付着		57	58
P050	3号竪穴建物跡東・埋土中位	深鉢(3/4周以下)	文様4単位・高く太い隆帯→LRタテ→ナデ、深め沈線	ナデ	外面スス付着		57	59

第57図 縄文～弥生土器(6)



掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写 真
P051	3号竪穴建物跡東・埋土中位、上位、6号竪穴建物跡土器No2床面、埋土中位	深鉢 (2/3 周以下)	文様2種2単位?・RL タテ→太く浅め沈線	ナデ	外面スス、内面コゲ多	p73	58	58
P052	3号竪穴建物跡東・埋土上位	深鉢 (2/3 周未満)	4波状・LR タテ、ナナム	ナデ	外スス、内コゲ・補修孔		58	58
P053	3号竪穴建物跡東・3層、埋土上位	鉢・上半	二波状・RL タテ→太く深め沈線	ナデ	外面スス付着		58	60
P054	3号竪穴建物跡東・埋土上位	深鉢 (1/5 周未満)	LR 口縁ココ、胴タテ→隆帯になでつけ	ミガキ?	補修孔		58	60
P055	3号竪穴建物跡東・埋土上位	鉢・口~胴部	LR タテ→隆帯に沿うナデ	ナデ	外面スス付着		58	60
P056	3号竪穴建物跡東・埋土上位	深鉢・頭部	LR タテ→隆帯に沿う深い沈線	ナデ	外面スス、内面コゲ		58	60
P057	3号竪穴建物跡東・埋土上位	鉢 (1/3 周未満)	LR タテ	ミガキ?	外面スス付着、二次焼成		58	60
P058	3号竪穴建物跡西・埋土中位	鉢・口縁 (1/3 周未満)	LR タテ	ミガキ? 光沢	外面スス付着・補修孔		58	60
P059	3号竪穴建物跡東・埋土中位	深鉢・口縁部	波状口縁・LR タテ→浅い沈線	ミガキ?	外面スス付着		58	60

第 58 図 縄文~弥生土器 (7)



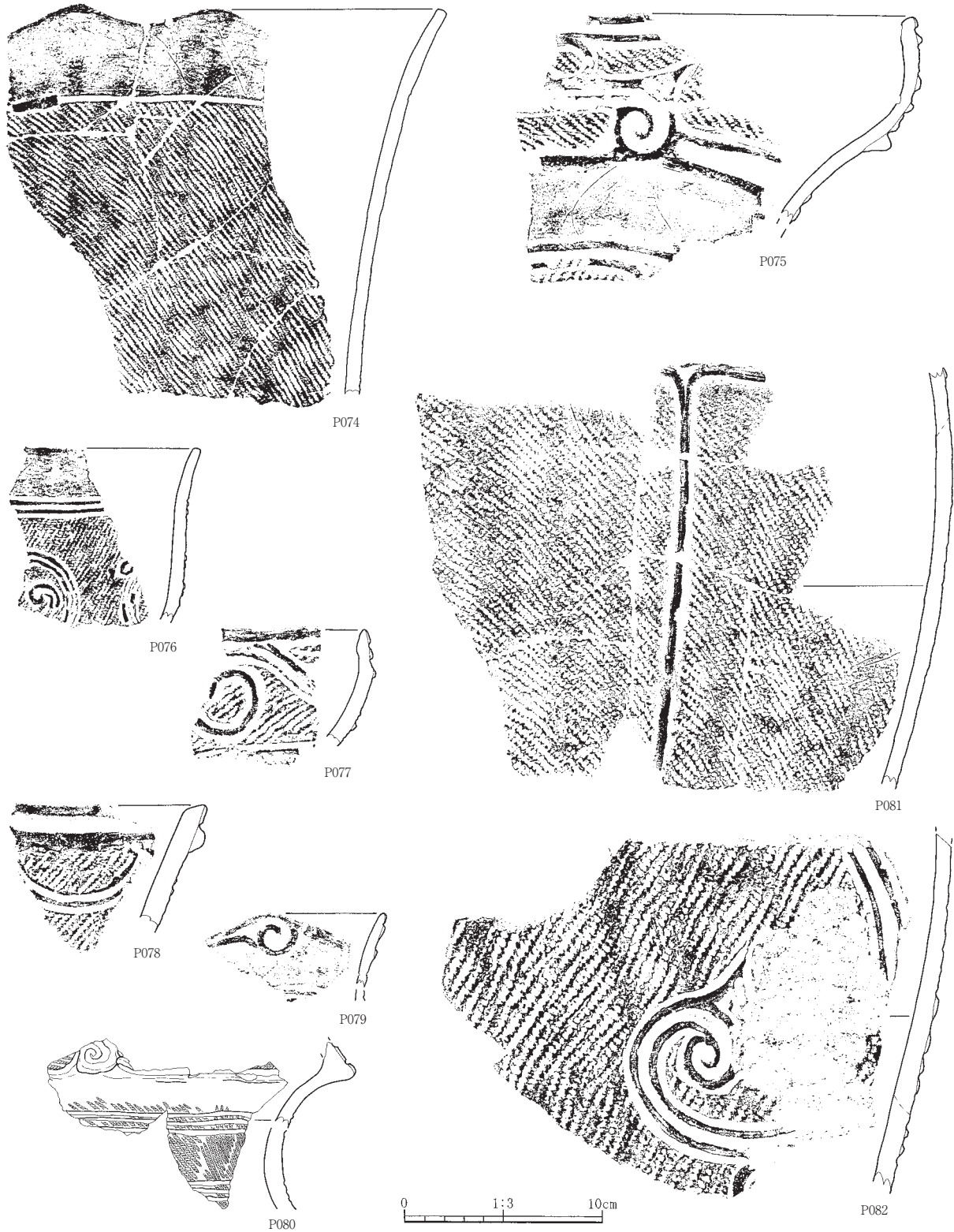
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)		内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	写 真
P060	3号竪穴建物跡東・埋土上位、中位、南・埋土上位	鉢 (1/3 周以下)	突起・LR タテ		ナデ	外面スス付着		59 60
P061	3号竪穴建物跡東・埋土中位	鉢 (1/3 周未満)	口縁突起・LR タテ→口縁消し忘れ、浅い沈線		ミガキ?	外面スス付着		59 60
P062	2号竪穴建物跡・南1層、3号竪穴建物跡東・埋土中位置 (3/4)	深鉢 (2/3 周未満)	RL タテ?→低い隆帯→脇ナデ/底面網代痕?		ナデ	外スス、二次焼成・外下部コゲ		59 60
P063	3号竪穴建物跡東・埋土中位 (1/2弱)、II A19t・II層下位	球胴鉢 (1/4 周)	RL+ 結節タテ		ナデ	外二次焼成、スス、内コゲ多		59 60
P064	3号竪穴建物跡東・埋土上位	浅鉢? (1/5 周以下)	RL タテ→隆帯に沿う浅い沈線		ナデ	外黒斑?・内外摩耗		59 60

第 59 図 縄文～弥生土器 (8)



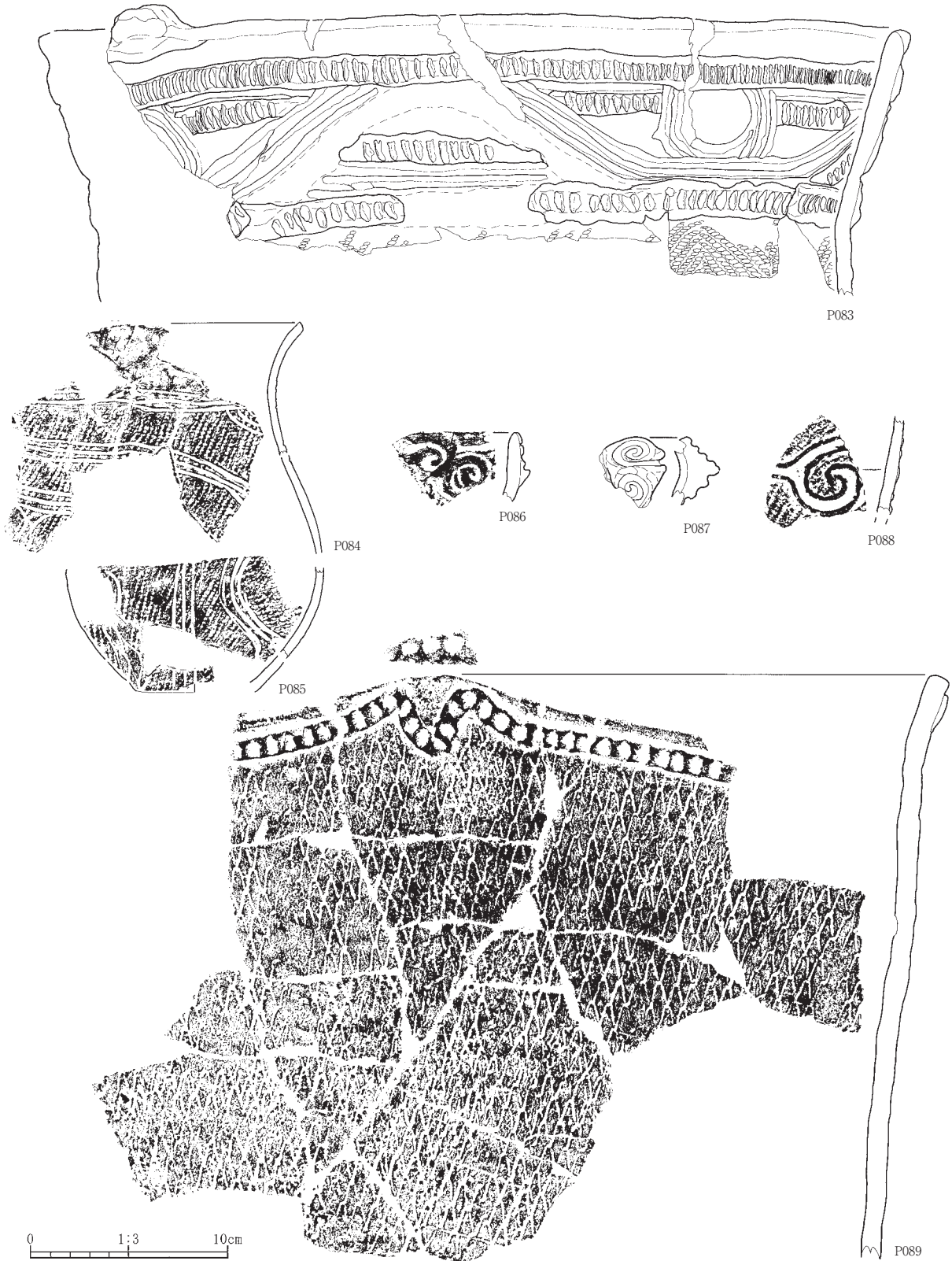
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写真
P065	3号竪穴建物跡東・埋土中位	深鉢(1/5周以下)	LR タテ・隆帯なでつけ	ナデ丁寧	外面スス付着		60	61
P066	3号竪穴建物跡東・埋土中位	深鉢・口縁部	ヨコからの半藁竹管状工具による刺突	摩耗	内外摩耗ひどい		60	61
P067	3号竪穴建物跡東・2層、埋土中位	球胴鉢・口縁部	貼付上、下から刺突	ナデ			60	61
P068	3号竪穴建物跡東・埋土中位	球胴鉢?・口縁部	内面肥厚/細かい刺突、沈線	ナデ	内面コゲ		60	61
P069	3号竪穴建物跡東・埋土中位	鉢・口縁部	波状口縁・LRタテ→たく浅い沈線	ミガキ?	外面スス付着		60	61
P070	3号竪穴建物跡東・埋土中位	深鉢・口縁部	突起・LR タテ	ナデ	内外やや摩耗		60	61
P071	3号竪穴建物跡東・2層	深鉢・口縁部	LR ヨコ隆帯に沿うナデ	ミガキ?			60	61
P072	3号竪穴建物跡東・埋土中位	球胴鉢・頭部	LR+ 結節タテ?	ナデ			60	61
P073	3号竪穴建物跡西・2層、3層	深鉢(底のみ一周)	波状口縁・LR タテ→細め浅め沈線、底部~底面ナデ	ナデ	外上スス、下二次焼成、内底コゲ		60	61

第 60 図 縄文~弥生土器 (9)



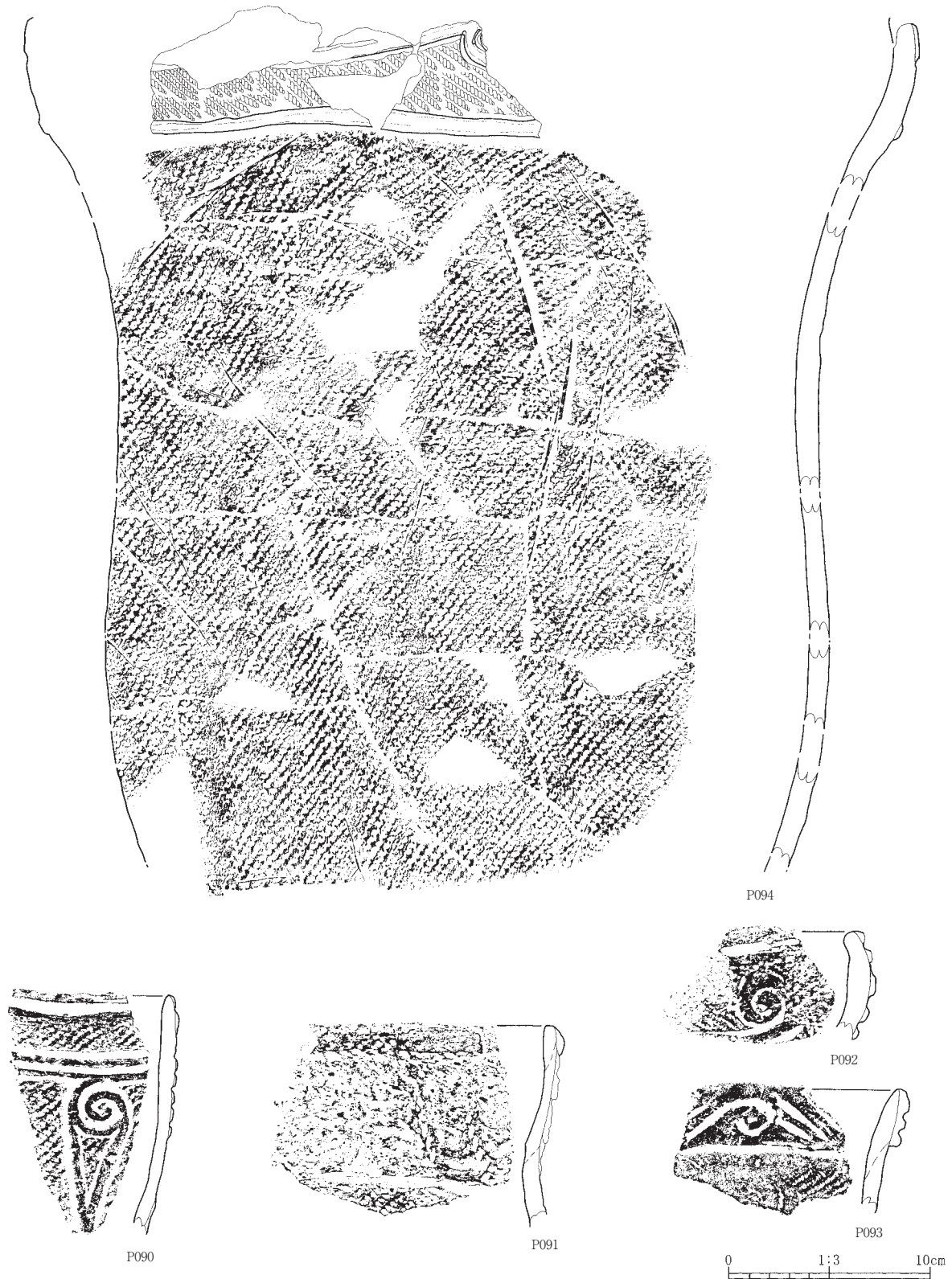
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部 / 胴部 / 底部 / 底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写真
P074	3号竪穴建物跡西・2層	深鉢 (1/5 周未満)	波状口縁・LR タテ→浅め沈線→低い粘土紐	ナデ	外面スス、内面コゲ・下割口、剥離		61	61
P075	3号竪穴建物跡西・2層	深鉢・口縁部	RL ヨコ→隆帯→沿うナデ / 胴 RL タテ	ナデ	外面スス、内面摩耗		61	61
P076	3号竪穴建物跡西・2層	鉢・口～胴部	RL タテ→低い隆帯に沿う浅い沈線	ナデ	外面スス付着		61	61
P077	3号竪穴建物跡西・2層	深鉢・口縁部	LR ヨコ→隆帯に沿う浅め沈線 (粘土まくれ痕)	ナデ	外面スス付着		61	61
P078	3号竪穴建物跡西・2層	深鉢・口縁部	RL タテ→浅め沈線	ナデ			61	61
P079	3号竪穴建物跡西・2層	鉢・口縁部	波状口縁・隆帯に押圧・浅め沈線	ナデ			61	61
P080	3号竪穴建物跡西・2層	深鉢 (1/4 周未満)	RL ヨコ、ナナメ→ミガキ	ミガキ			61	61
P081	3号竪穴建物跡西・2層	深鉢 (1/4 周未満)	LR タテ→隆帯にナデ	ナデ	外面スス付着		61	62
P082	3号竪穴建物跡西・2層	深鉢 (1/5 周未満)	RL タテ→押圧された隆帯に沿う浅い沈線	ナデ	外面スス多		61	62

第 61 図 縄文～弥生土器 (10)



掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内面 (調整など)	備考	本文記載	図	写真
P083	3号竪穴建物跡西・3層、II A20v・III-IV層、19v・III層下位 (9号竪穴建物跡下)	深鉢 (1/3 周)	RL 深く深め沈線・結束第1種 (LR、RL) タテ	ナデ	内外黒斑		62	62
P084	3号竪穴建物跡西・3層	鉢 (1/3 周未満)	RLR タテ→細い沈線	ミガキ	外胴部スス付着		62	62
P085	3号竪穴建物跡西・3層、2層、西上位	鉢 (2/3 周未満)	RL タテ、ナダメ→細く浅い沈線	ナデ丁寧	内面上部コゲ?、底接合面から剥離		62	62
P086	3号竪穴建物跡西・3層	深鉢・口縁部		ナデ			62	62
P087	3号竪穴建物跡西・3層	口縁部突起		ナデ	重み		62	62
P088	3号竪穴建物跡西・3層	深鉢・胴部	RL タテ→隆帯になでつけ	ナデ	外面スス付着		62	62
P089	3号竪穴建物跡西・IV層 (1/8)、II A19t、u・III層下位-IV層	深鉢 (1/4 周以下)	突起頂部押圧3・単軸絡6 (R) タテ・隆帯上押圧列	ナデ	外スス、二次焼成、内コゲ		62	62

第 62 図 縄文～弥生土器 (11)



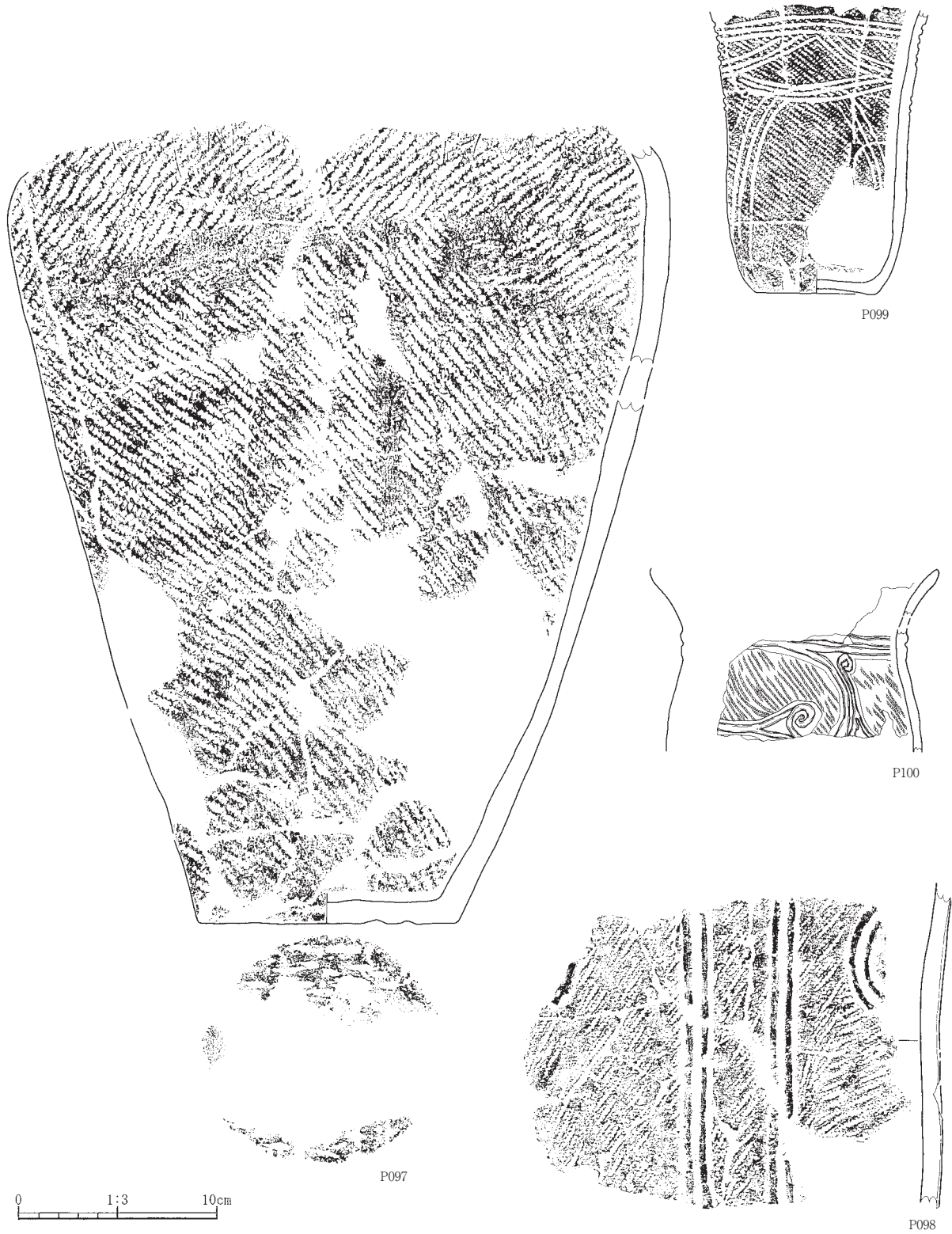
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	写 真 図
P090	3号竪穴建物跡西・4層	深鉢・口縁部	RLタテ→隆帯に沿うナデ・隆帯になでつけ	ナデ	外面スス付着	63	62
P091	3号竪穴建物跡西・4層	深鉢・口縁部	口頭部LR側面圧痕/胴LRヨコ	ナデ	外口頭部剥落	63	62
P092	3号竪穴建物跡西・4層	深鉢・口縁部	RLヨコ	ナデ	外面剥落	63	62
P093	3号竪穴建物跡西・4層	深鉢・口縁部	太く深い沈線・LRヨコ	ナデ		63	62
P094	3号竪穴建物跡西・3層(1/4)、西・2層、西・埋土上位、南・2層(1/2)	深鉢(1/3周未満)	カマボコ状隆帯・RL、口縁ヨコ、胴部タテ	ナデ	外面スス付着	63	63

第63図 縄文～弥生土器(12)



掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	写 真 図
P095	3号竪穴建物跡・3層	鉢(底欠け)	二波状・文様2種2単位・RL タテ→浅い沈線	ミガキ?	内外黒斑?・外面スス附着	64	63
P096	3号竪穴建物跡西・埋土上位	深鉢(1/3 周未満)	LR、口縁ヨコ、胴イロイロ→隆帯に沿う太く浅い沈線	ナデ(上ミガキ?)	外スス、二次焼成	64	64

第 64 図 縄文～弥生土器 (13)



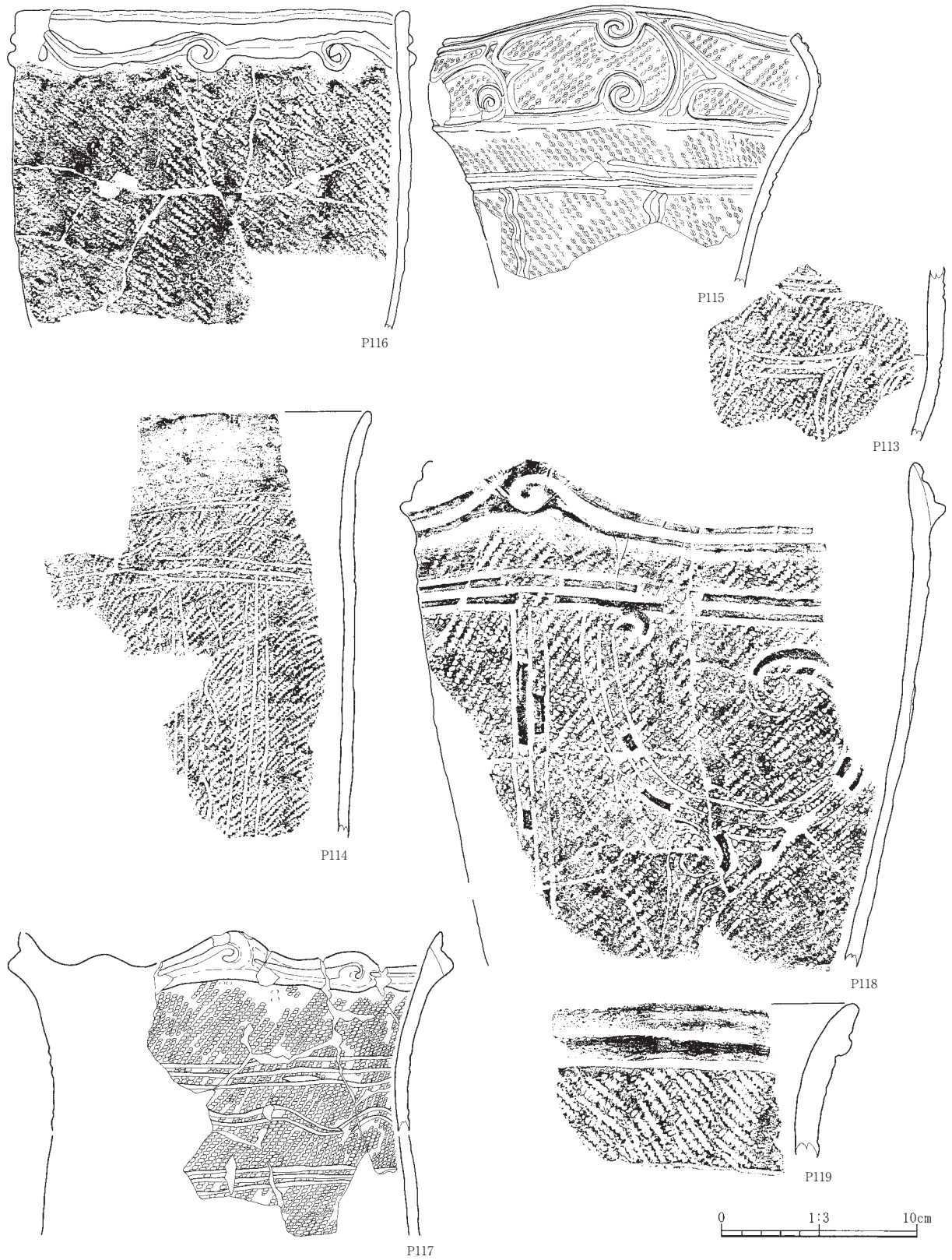
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写真
P097	3号竪穴建物跡西・埋土上位、5号土坑土器No.1坑底	深鉢(略一周)	LR、上ヨコ、下タテ→底部～底面ナデ	ナデ	外上スス、下二次焼成、内コゲ?		65	65
P098	3号竪穴建物跡西・埋土上位	深鉢・胴部	RLタテ→隆帯なでつけ	ナデ	内面コゲ付着		65	63
P099	3号竪穴建物跡東・埋土上位、3号竪穴建物跡南・埋土上位	鉢(2/3周未満)	LRタテ→浅い沈線、底部～底面ナデ	ナデ	外二次焼成?、内底コゲ?		65	63
P100	3号竪穴建物跡南・埋土上位	鉢(1/2周未満)	波状口縁・低い隆帯・RLヨコ→隆帯に層浅い沈線	ナデ	外面スス、内面コゲ付着		65	63

第65図 縄文～弥生土器(14)



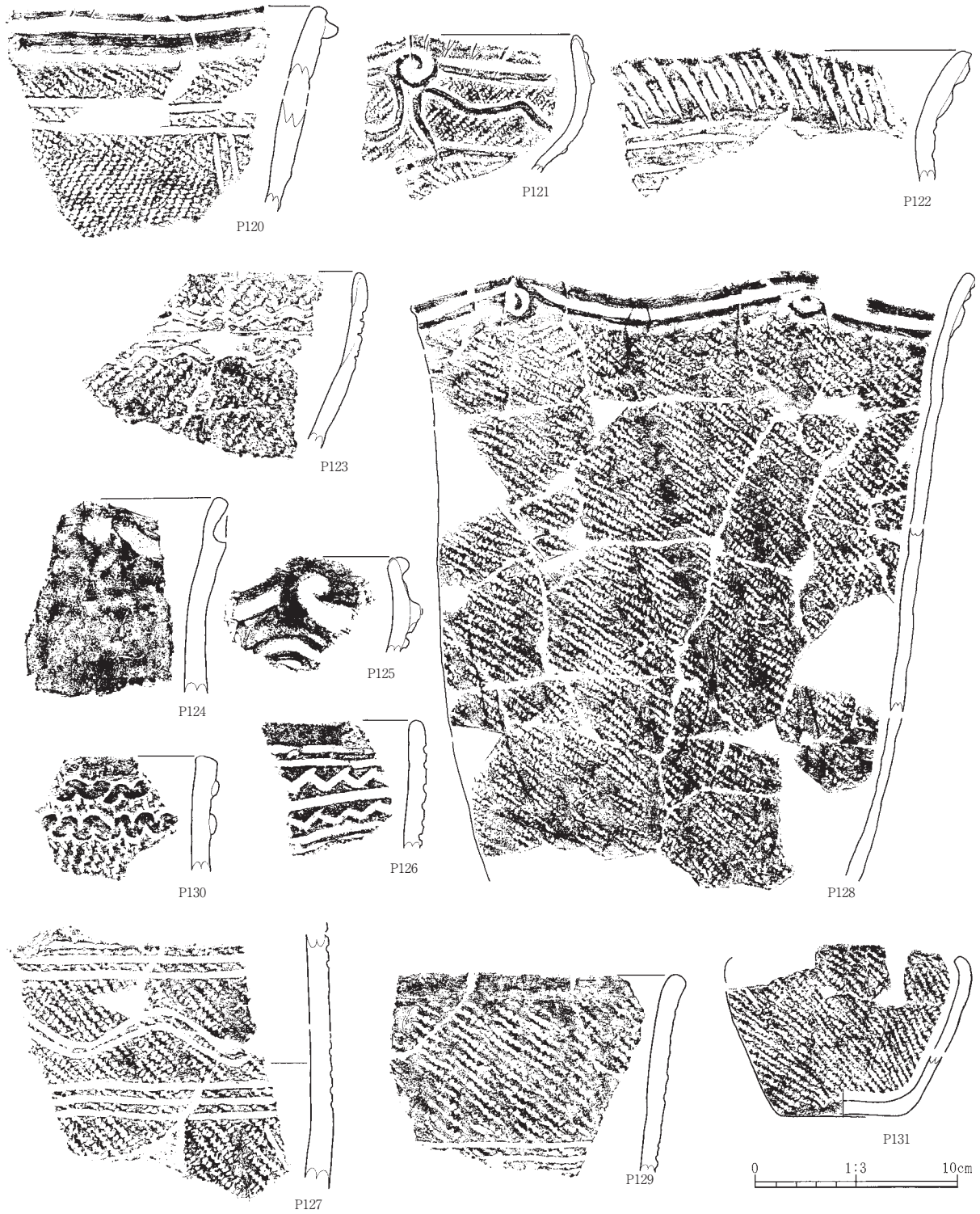
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写 真
P101	3号竪穴建物跡南・埋土上位	深鉢 (1/4 周以下)	RL タテ→隆帯なでつけ	ナデ	外面スス、剥落		66	64
P102	3号竪穴建物跡南・埋土中位	鉢 (3/4 周以下)	LR タテ→隆帯に沿う沈線 / 底面ナデ	ナデ			66	63
P103	3号竪穴建物跡南・埋土中位	深鉢・口縁部	竹管状工具による刺突・低い隆帯ヨコから押圧・LR+ 結節タテ	ナデ			66	63
P104	3号竪穴建物跡南・埋土中位	深鉢・口縁部	太く深い沈線	ナデ	外面スス付着		66	63
P105	3号竪穴建物跡南・埋土中位	深鉢・口縁部	LR ナメ→ LR 側面圧痕	ナデ丁寧			66	63
P106	3号竪穴建物跡南・埋土中位	深鉢・口縁部	内面貼付 / RLヨコ? → 浅め沈線	ナデ	内外摩耗		66	63
P107	3号竪穴建物跡南・埋土中位	深鉢・口縁部	上からの刺突・浅い沈線	ナデ	上の割口、粘土接合面剥離・内コゲ		66	63
P108	3号竪穴建物跡南・埋土中位	深鉢・胴部	LR ナメ→隆帯に沿う浅い沈線	ナデ			66	63
P109	3号竪穴建物跡南・2層	深鉢 (略一周)	口縁低め隆帯文様4単位・LR タテ→浅い沈線	ナデ	外面スス、二次焼成		66	64
P110	3号竪穴建物跡南・2層	深鉢・口縁部	RL ヨコ→隆帯に沿う深め沈線	ナデ	外面スス付着		66	65
P111	3号竪穴建物跡南・2層	深鉢・頭部?	LR タテ→隆帯なでつけ	ナデ			66	65
P112	3号竪穴建物跡南・4層	深鉢・口縁部	口唇ナデ / RLヨコ? → 沈線	ナデ			66	65

第 66 図 縄文～弥生土器 (15)



掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写 真
P113	3号竪穴建物跡南・4層	鉢・胴部	RL タテ→浅い沈線	ナデ	外面スス多、内面コゲ、摩耗		67	65
P114	3号竪穴建物跡西・埋土上位	深鉢 (1/5 周未満)	RL タテ→細く浅い沈線	ナデ	外面スス付着		67	65
P115	3号竪穴建物跡北・埋土上位	深鉢 (口縁一周)	2波状・LRL、口縁ヨコ、胴タテ→隆帯なでつけ、沿う沈線	ナデ	外口スス、下二次焼成、内コゲ多		67	65
P116	3号竪穴建物跡北・埋土上位	深鉢 (1/3 周以下)	LR タテ→隆帯なでつけ、口縁ナデ	ナデ	外黒斑?・外スス、二次焼成		67	66
P117	3号竪穴建物跡北・埋土上位	深鉢 (1/3 周未満)	突起2種4単位?・RL タテ→浅い沈線	ナデ	内面下部コゲ		67	66
P118	2号竪穴建物跡北・1層 (1/4)、3号竪穴建物跡北・埋土中位、埋土上位	深鉢 (1/4 周以下)	突起・RL タテ→隆帯貼付→なでつけ、沿うナデ	ナデ	外面スス付着、下部二次焼成		67	66
P119	3号竪穴建物跡北・埋土上位	深鉢・口縁部	LR タテ	ナデ			67	66

第 67 図 縄文～弥生土器 (16)



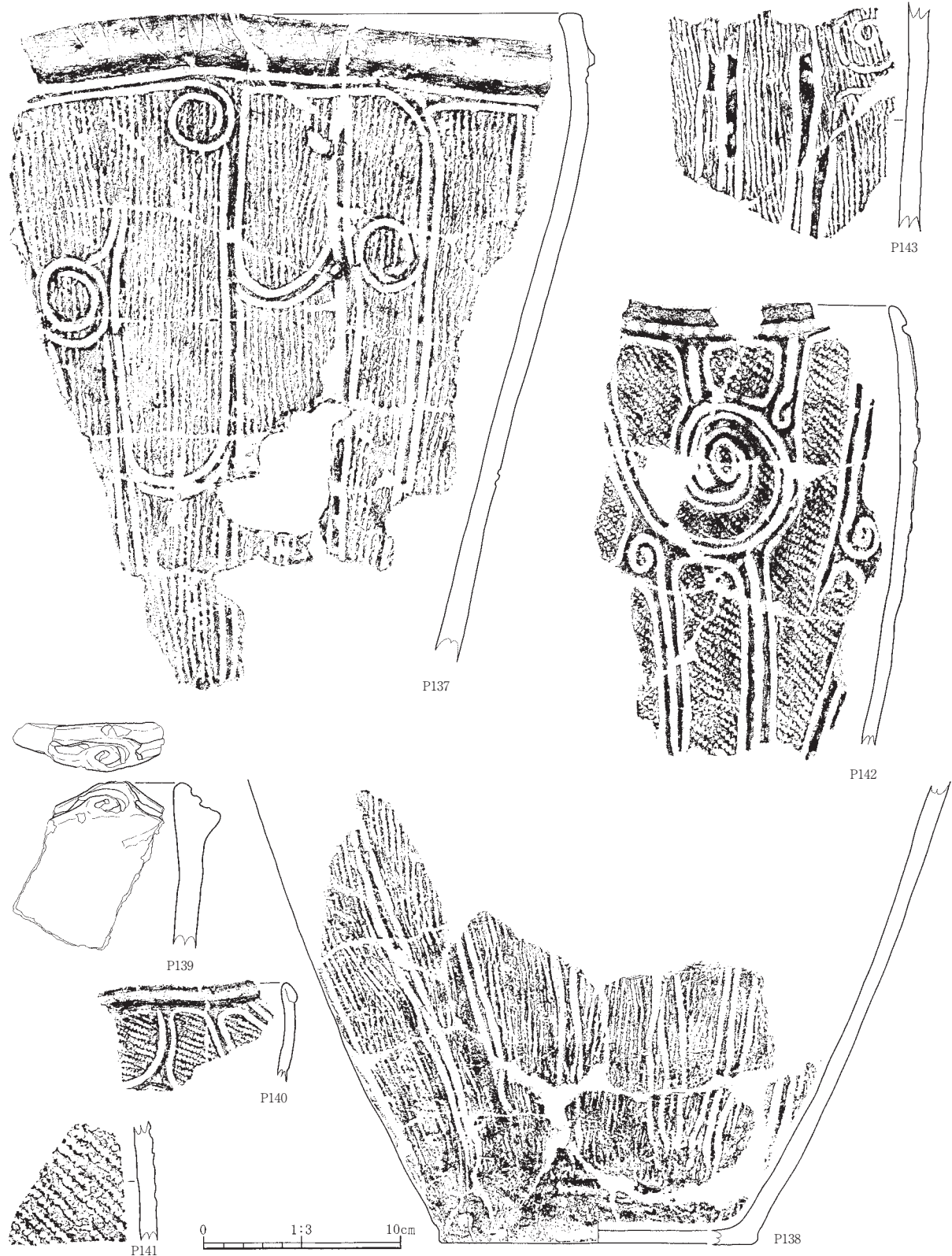
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写 真
P120	3号竪穴建物跡北・埋土上位	深鉢・口縁部	RL 口縁ヨコ、胴タテ→太く浅い沈線	ナデ光沢			68	66
P121	3号竪穴建物跡北・埋土上位	深鉢・口縁部	LR、口縁ヨコ、胴タテ→隆帯なでつけ	ナデ	外面スス、内面コケ		68	66
P122	3号竪穴建物跡東・2層、3号竪穴建物跡北・埋土上位 (3/5)	深鉢・口縁部	太く深い沈線・粘土まくれ痕	ナデ	外面黒斑?		68	66
P123	3号竪穴建物跡北・埋土中位	深鉢・口縁部	LR ヨコ→半裁竹管状工具による沈線	ナデ			68	66
P124	3号竪穴建物跡北・埋土中位	深鉢・口縁部	突起下深い円形押圧 (雑なナデ)	ナデ	外面スス附着		68	66
P125	3号竪穴建物跡北・埋土中位	深鉢・口縁部	突起・深い沈線	ナデ			68	66
P126	3号竪穴建物跡北・埋土中位	深鉢・口縁部	突起・深め沈線	ナデ			68	66
P127	4号竪穴建物跡北・埋土中位	深鉢・胴部	LR タテ→浅め沈線	ナデ	外面スス附着		68	66
P128	2号竪穴建物跡北・1層、3号竪穴建物跡北・2層	深鉢 (3/4 周以下)	突起文様単位不明・LR タテ	ナデ	外面スス附着、二次焼成		68	66
P129	3号竪穴建物跡北・2層	深鉢・口縁部	LR タテ→浅い沈線、口縁ナデ	ナデ	外面黒斑?		68	66
P130	3号竪穴建物跡北・4層	深鉢・口縁部	口唇貼付剥落?/LR ナナメ→貼付	ナデ			68	66
P131	4号竪穴建物跡炉p1床面	浅鉢 (底のみ一周)	LR タテ/底面ナデ	ナデ			68	67

第 68 図 縄文～弥生土器 (17)



掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	写 真
P132	4号竪穴建物跡 p1	深鉢 (底のみ一周)	LR タテ→太く深い沈線 / 底面ナデ	ナデ	外口縁スス、内面コゲ	69	67
P133	4号竪穴建物跡 p2床面	深鉢 (1/5 周未満)	LR タテ→沈線	ナデ	胎土石・外黒斑?・外スス付着	69	67
P134	4号竪穴建物跡 p2床面、4号竪穴建物跡南・埋土下位 (3/5)	深鉢・胴部	単軸絡1 (R) タテ?→太い沈線	ナデ	外二次焼成、内下コゲ	69	67
P135	4号竪穴建物跡 p2と5、南・埋土上~中位、北東・埋土一括	深鉢・口縁部	LR タテ→太い沈線・沈線底ヨコから刺突	ナデ		69	67
P136	4号竪穴建物跡 p2と5、北東・埋土一括	深鉢 (1/4 周未満)	波状口縁・LR タテ→太い沈線→口縁、底部~底面ナデ	ナデ		69	67

第 69 図 縄文~弥生土器 (18)



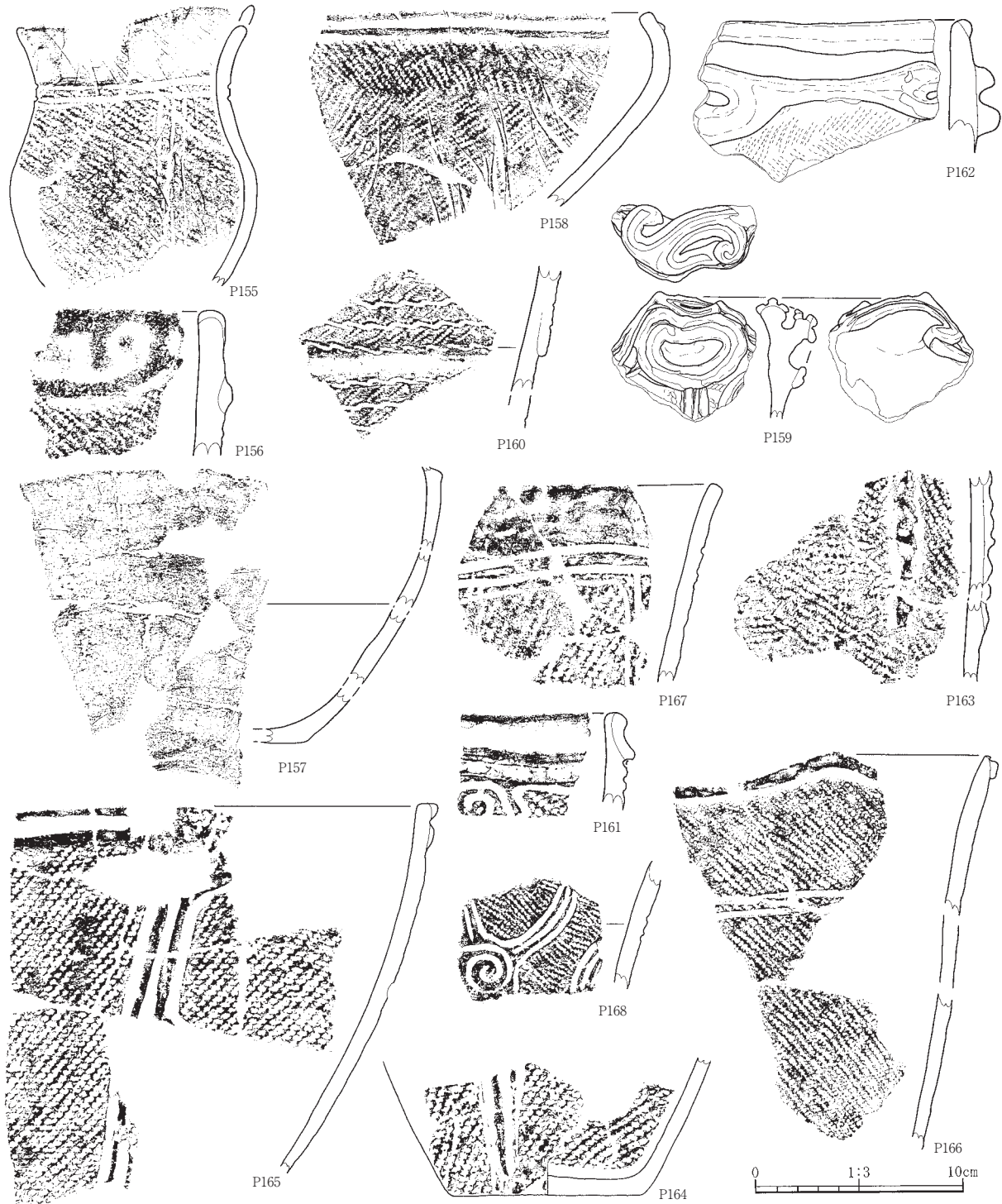
掲載 No	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写真
P137	4号竪穴建物跡炉・焼土面	深鉢 (1/4 周未満)	単軸絡1 (L) タテ→太い沈線→口縁ナデ	たがれ			70	68
P138	4号竪穴建物跡・焼土面・埋土上～中位	深鉢 (1/2 周未満)	単軸絡1 (L) ? タテ→太く浅い沈線・底部～底面ナデ	ナデ			70	68
P139	4号竪穴建物跡炉前庭部・埋土一括	深鉢・口縁部	(ナデ?)	ナデ?			70	68
P140	4号竪穴建物跡炉前庭部・埋土一括	深鉢・口縁部	LR タテ→太く浅い沈線	ナデ	外面スス附着		70	68
P141	4号竪穴建物跡炉・焼土より上	深鉢・胴部	LR タテ	ナデ	外面スス附着		70	68
P142	4号竪穴建物跡ベルトA・埋土上～中位	深鉢 (1/5 周未満)	LR タテ→隆帯に沿うナデ・横から刺突	ナデ	外面スス、内面コゲ		70	68
P143	4号竪穴建物跡ベルトA・埋土上～中位	深鉢・胴部	単軸絡1 (R?) タテ→太く浅い沈線	ナデ光沢	外面スス附着		70	68

第 70 図 縄文～弥生土器 (19)



掲載 No	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	国	写真
P144	4号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢・口縁部	LRヨコ(閉じた端回転?)	ナデ			71	68
P145	4号竪穴建物跡・床面、埋土下位(1/17)	深鉢(底略一周)	(二次焼成で?剥落)・細く深い沈線・底面ナデ	ナデ			71	69
P146	4号竪穴建物跡南・埋土上~中位、埋土下位	鉢?(1/5周未満)	橋状把手・太く深い沈線	ナデ?摩耗			71	69
P147	4号竪穴建物跡南・埋土上~中位	深鉢・口縁部	RLヨコ→太い沈線	ナデ	外上スス、下二次焼成、内コゲ		71	68
P148	4号竪穴建物跡南・埋土上~中位	深鉢・口縁部	単軸絡1(L) タテ?・ミガキ?	ナデ	外面スス付着		71	68
P149	4号竪穴建物跡南・埋土下位	深鉢(1/5周未満)	RL タテ	ナデ滑らか			71	68
P150	4号竪穴建物跡北・埋土上~中位	深鉢(1/3周以下)	LR+ 結節ヨコ/底面何かの圧痕?	ナデ	外スス、二次焼成、内底以外コゲ		71	69
P151	4号竪穴建物跡北・埋土上~中位、II A23t・IV層上位	深鉢(1/5周未満)	単軸絡1(L) ヨコ→隆帯なでつけ	ナデ	内面輪積痕・外面摩耗		71	69
P152	4号竪穴建物跡北・埋土上~中位	深鉢・口縁部	LR タテ→隆帯に沿う太く浅い沈線	ナデ	外面摩耗		71	69
P153	4号竪穴建物跡北・埋土上~中位	深鉢・胴部	RLヨコ、タテ→隆帯なでつけ、太く浅い沈線	ナデ	外面黒斑?		71	69
P154	4号竪穴建物跡南東・埋土一括	深鉢・口縁部	口唇平ら/太く浅い沈線	ナデ	内面コゲ		71	69

第71図 縄文~弥生土器(20)



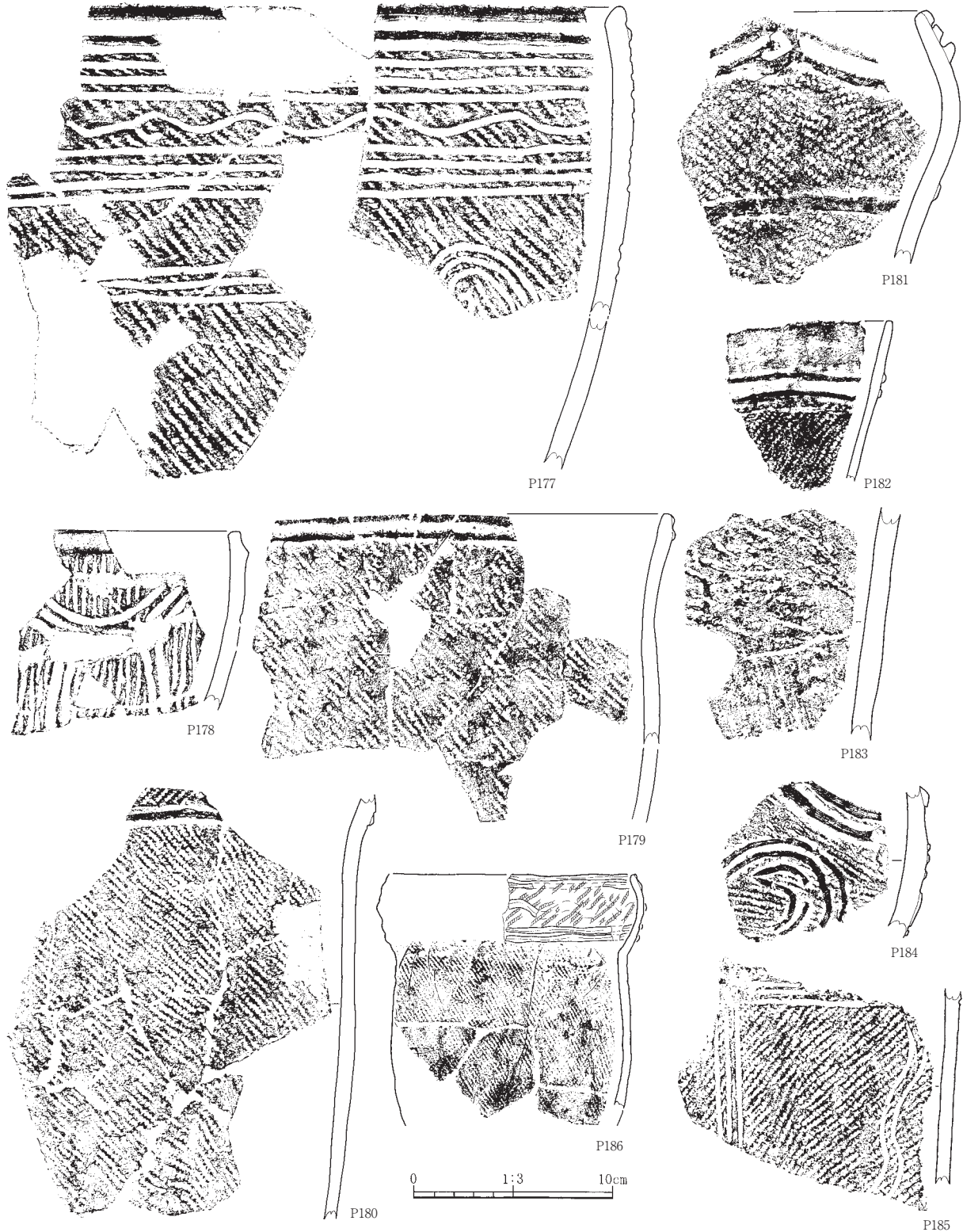
掲載 No	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写 真
P155	4号壺穴建物跡南西(西側に重複の可能性)埋土一括	鉢(1/3周未満)	波状口縁・LRタテ→浅い沈線・口縁部ミガキ?	ミガキ?	外上スス、下二次焼成、内全面コゲ?		72	69
P156	4号壺穴建物跡南西(西側に重複の可能性)埋土一括	深鉢・口縁部	口唇平ら/LRタテ	ナデ	外面摩耗		72	69
P157	4号壺穴建物跡北東・埋土一括	浅鉢?-胴-底部	胴-底面ナデ	ナデ			72	69
P158	4号壺穴建物跡北東・埋土一括	浅鉢(1/4周未満)	RL頸口コ、胴タテ→隆帯などでつけ	摩耗			72	69
P159	4号壺穴建物跡北東・埋土一括	深鉢・口縁部	縄文原体不明・隆帯に沿う深い沈線	ナデ			72	69
P160	4号壺穴建物跡北東・埋土一括	深鉢・口縁部	LR+ 結節ヨコ	ナデ			72	69
P161	4号壺穴建物跡・埋土上~中位	深鉢・口縁部	LRタテ→沈線・沈線底深い刺突	ナデ			72	69
P162	4号壺穴建物跡北南角埋土上~中位	深鉢・口縁部	結束第1種(LR、RL)ヨコ→高い隆帯	ミガキ?			72	69
P163	4号壺穴建物跡北南角埋土上~中位	深鉢(1/4周以下)	LRタテほか→隆帯上押圧	ナデ	外上スス、下二次焼成、内コゲ		72	69
P164	5号壺穴建物跡石囲炉1層上面	深鉢(底一周)	RLRタテ→隆帯に沿うナデ/底面ミガキ?	ミガキ?			72	69
P165	5号壺穴建物跡石囲炉1層上面、黒色土検出面55	深鉢(1/5周未満)	口唇ナデ/RLRタテ→隆帯上~沿うナデ	ナデ	外面スス付着		72	70
P166	5号壺穴建物跡石囲炉1層上面	深鉢	口唇深め沈線/LRタテ→浅め沈線	ナデ	内面黒斑?		72	70
P167	5号壺穴建物跡土器1床面	深鉢・口縁部	RLタテ→太く浅め沈線	ナデ			72	70
P168	5号壺穴建物跡前底部土器No.2II層上面	深鉢・胴部	LRタテ→太く浅め沈線	ナデ	外スス、内面コゲ		72	70

第72図 縄文~弥生土器(21)



掲載No.	出土地点・層位	器種・部位	外面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内面 (調整など)	備考	本文記載	写 真
P169	5号竪穴建物跡 pit6・2層	深鉢・胴部	RL タテ→浅め沈線	ナデ	外面スス付着	73	70
P170	5号竪穴建物跡南・埋土上位	深鉢(1/5 周未満)	LR タテ→太く浅め沈線	ナデ	外面剥落	73	70
P171	5号竪穴建物跡南・埋土上位	深鉢・胴部	RLR タテ→隆帯上ナデ→沿う浅い沈線	ナデ	外面全面スス、内面剥落	73	70
P172	5号竪穴建物跡南・埋土上位	深鉢・口縁部	折り返し口縁・LR 側面圧痕	ナデ		73	70
P173	5号竪穴建物跡南・埋土上位、黒色土検出面58	深鉢・胴部	RLR タテ→隆帯上～沿うナデ・沈線底深い刺突	ナデ	外上スス、内下コゲ	73	70
P174	5号竪穴建物跡南・埋土上～中位、II A15w・III層下位	深鉢(1/5 周未満)	LR タテ→隆帯に沿う深め沈線	ナデ		73	70
P175	3号竪穴建物跡北・埋土上位	鉢(底略一周)	RL タテ→ナデ/底面ナデ	ナデ		73	70
P176	6号竪穴建物跡土器集中1土器 No.1、2、4、6床面	深鉢(一部欠損)	突起2?・文様3単位・RL、口縁ヨコ、胴部タテ・ナデ(丁寧)	ナデ丁寧	外上スス、下二次焼成、内底均上コゲ	73	71

第 73 図 縄文～弥生土器 (22)



掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内面 (調整など)	備考	本文 記載	写 真
P177	6号竪穴建物跡床面土器 No.1 (2/3)、埋土一括	深鉢 (1/4 周未満)	LR タテ→太く浅め沈線	ナデ	外面剥落	74	70
P178	6号竪穴建物跡 pit1・1層	深鉢・口縁部	単軸絡1 (R) タテ?→太く浅い沈線、口縁ナデ	ナデ	外面スス付着	74	70
P179	6号竪穴建物跡土器集中1床面、II A20v・II 層下位 (15/16)	深鉢 (1/4 周以下)	LR タテ→ナデ	ナデ	外面スス付着	74	70
P180	6号竪穴建物跡土器集中	深鉢 (1/4 周未満)	LR 口縁ヨコ、胴タテ	ナデ	外面上スス付着	74	70
P181	6号竪穴建物跡土器集中1	深鉢・口縁部	LR タテ、ナナメ→隆帯なでつけ	ナデ	外面スス、摩耗、内面コゲ、摩耗	74	70
P182	6号竪穴建物跡土器集中1	鉢・口縁部	RL タテ→ナデ	ナデ	内面コゲ	74	71
P183	6号竪穴建物跡・埋土上位	深鉢・胴部	LR タテ→ナデ	ナデ		74	71
P184	6号竪穴建物跡・埋土上位	深鉢・胴部	波状口縁・RL ナナメ→隆帯貼付 (無調整)	ナデ		74	71
P185	6号竪穴建物跡・埋土上位	深鉢・胴部	RL タテ→細く浅い沈線	ナデ	外スス、内面コゲ	74	71
P186	6号竪穴建物跡北・床面、4層 (9/55)、6号竪穴建物跡・埋土中位 (45/55)	鉢 (1/3 周未満)	LR 口縁ヨコ、胴部タテ→隆帯	ナデ	外面スス、内面コゲ付着	74	71

第 74 図 縄文～弥生土器 (23)



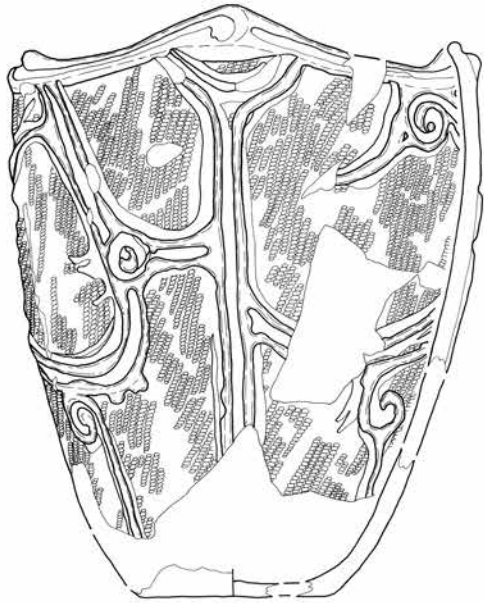
掲載 No	出土地点・層位	器種・部位	外面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内面 (調整など)	備考	本文 記載	図 号	写 真
P187	6号竪穴建物跡・埋土中位(1/3)、Ⅱ A20v・Ⅳ層(6号竪穴建物跡下)	鉢(1/5 周未満)	RL タテ→細く浅い沈線	ナデ	外面スス、内面コゲ		75	71
P188	6号竪穴建物跡・埋土中位	深鉢・口縁部	LR タテ→浅い沈線	ナデ雑	下の割れ口、粘土接合面剥離		75	71
P189	6号竪穴建物跡・埋土中位	深鉢・口縁部	隆帯上刻目・R 側面圧痕・LR タテ	ナデ			75	71
P190	6号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢(1/5 周未満)	RL タテ→太く浅い沈線	ナデ	外面スス、内面コゲ		75	71
P191	6号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢・口縁部	突起・LR タテ→太く浅い沈線	摩耗			75	71
P192	6号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢・口縁部	突起・LR ヨコ	摩耗			75	71
P193	6号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢・口縁部	竹管状工具による垂直方向刺突	ナデ	外面スス付着		75	71
P194	6号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢・口縁部	突起・側面圧痕・結節タテ	ナデ	外面剥落、スス付着		75	71
P195	6号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢	RL 口縁ヨコ、胴タテ→隆帯までつけ	ナデ			75	71
P196	6号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢(1/5 周未満)	単軸絡1(L) タテ→太く浅い沈線	ナデ	外面スス、内面コゲ		75	71
P197	6号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢・胴部	LR 口縁ヨコ、胴タテ→隆帯に沿う浅い沈線	ナデ丁寧	外面摩耗		75	72
P198	6号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢・頭部	RLR 口縁ヨコ、胴タテ→隆帯に沿う浅い沈線	ナデ丁寧			75	72
P199	6号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢・胴部	RL タテ→太く低い隆帯	摩耗	内外摩耗ひどい		75	72
P200	6号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢・胴部	ミガキ?	ミガキ?			75	72
P201	6号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢・胴部	RL ヨコ、タテ→隆帯に沿う太く浅い沈線	ナデ			75	72
P202	6号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢・胴部	粘土紐貼付	ナデ	上の割れ口、粘土接合面剥離		75	72
P203	6号竪穴建物跡北・Ⅱ層	鉢(2/3 周未満)	低い隆帯・RL タテ	ナデ	外面スス付着		75	72
P204	6号竪穴建物跡北・Ⅱ層	深鉢・口縁部	内面段/口唇突起、沈線?/半截竹管状工具による浅い沈線	ナデ			75	72

第 75 図 縄文～弥生土器 (24)



掲載 No	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部 / 胴部 / 底部 / 底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写 真
P205	II A19、20v・IV層上位、II A20t・III層下位～IV層	球胴鉢・口縁部	高い貼付・結束第2種 (RL、LR) + 結節 R と L タテ	ミガキ?	内面コゲ付着・206と同一個体		76	72
P206	II A19v・IV層上位、II A20y・IV層上位	球胴鉢・口縁部			205と同一個体		76	72
P207	6号竪穴建物跡北・3層	鉢 (1/2 周未満)	口縁低め雑な隆帯・LR タテ	ナデ雑	外面スス、内面コゲ付着		76	72
P208	6号竪穴建物跡北・3層	口縁部	LR タテ→隆帯なでつけ	ナデ	外面スス付着		76	72
P209	6号竪穴建物跡北・3層	深鉢・頸部	LR ヨコ→貼付	ナデ			76	72
P210	6号竪穴建物跡北・4層	深鉢 (1/5 周未満)	RL ヨコ? → 太めで浅い沈線	ミガキ?			76	72
P211	6号竪穴建物跡北・IV層	深鉢 (1/5 周未満)	LR タテ→太く浅い沈線 (上の割れ口、粘土接合面剥離)	ナデ	外上スス、内下コゲ		76	72
P212	6号竪穴建物跡北・4層	深鉢・胴部	低い隆帯・LR タテ	ナデ	下の割れ口、粘土接合面剥離		76	72
P213	6号竪穴建物跡北・II層	深鉢 (4/5 周以下)	4波状・文様4単位・LR、口縁ヨコ、頸～胴タテ→深め沈線	ナデ?	外黒斑?		76	72
P214	7号竪穴建物跡・埋土下位	深鉢・口縁部	R/LR ヨコ? → 隆帯に沿うナデ	ナデ	外面スス付着		76	72

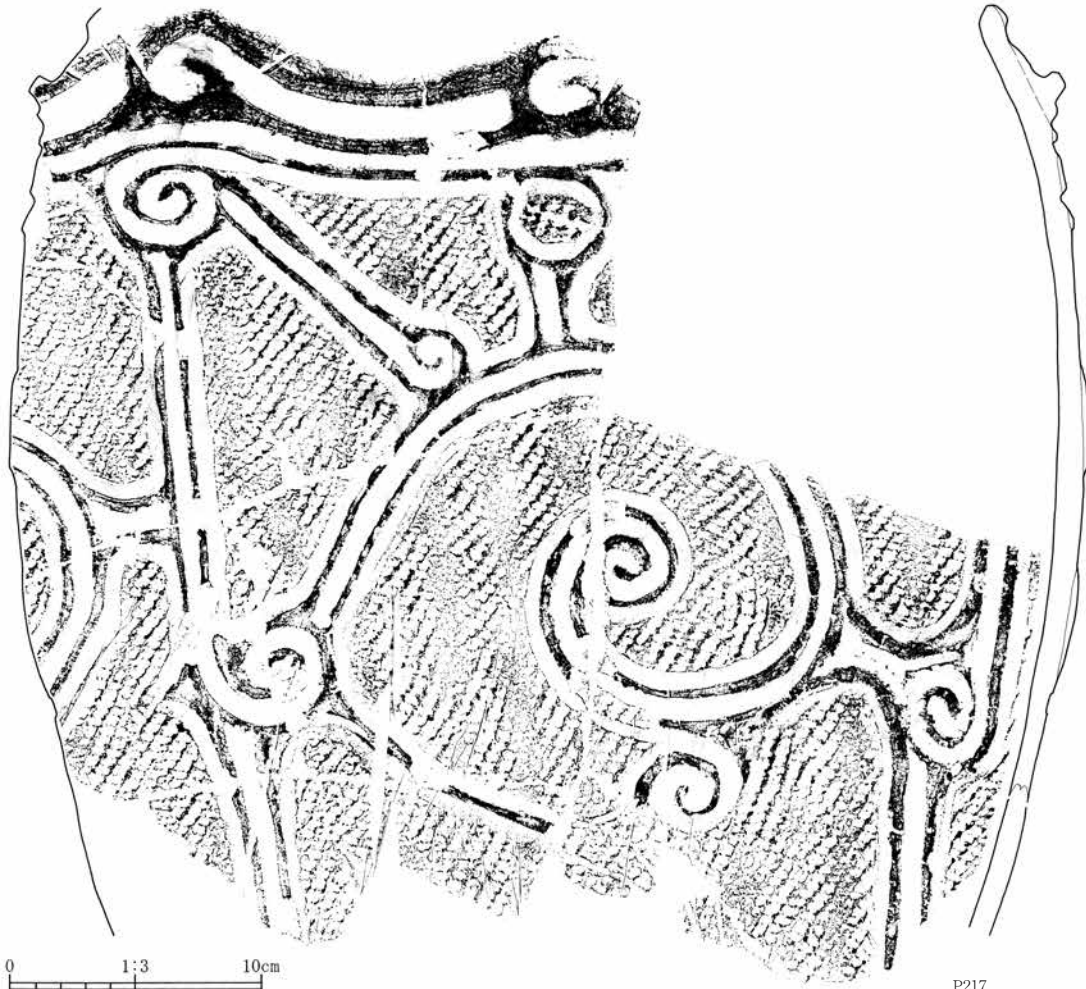
第 76 図 縄文～弥生土器 (25)



P215



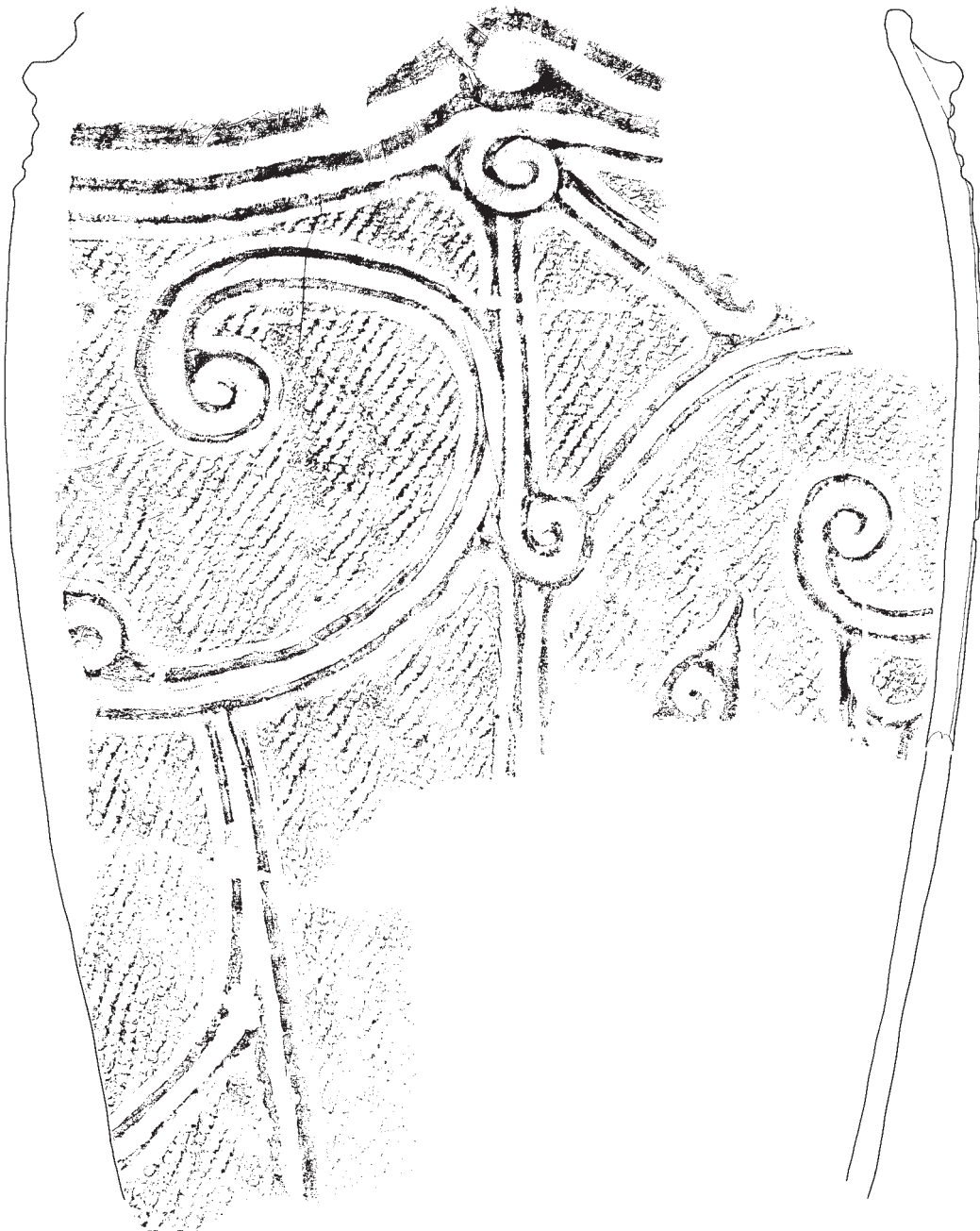
P218



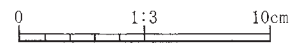
P217

掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写 真
P215	25号竪穴建物跡・埋土下位	深鉢 (一部欠損)	突起3単位・胴部文様意匠異・RLタテ→低隆帯沿う浅沈線	ミカキ?	底ナデ・外スス、内上コゲ		77	73
P217	25号竪穴建物跡・埋土一拵	深鉢 (1/3 周未滿)			No.216と同一個体		77	75
P218	7号竪穴建物跡東・埋土下位	深鉢 (底略一周)	LRタテ、ナナム、底面網代痕?→底部~面ナデ	摩耗	外二次焼成、内面コゲただれ		77	73

第 77 図 縄文~弥生土器 (26)



P216



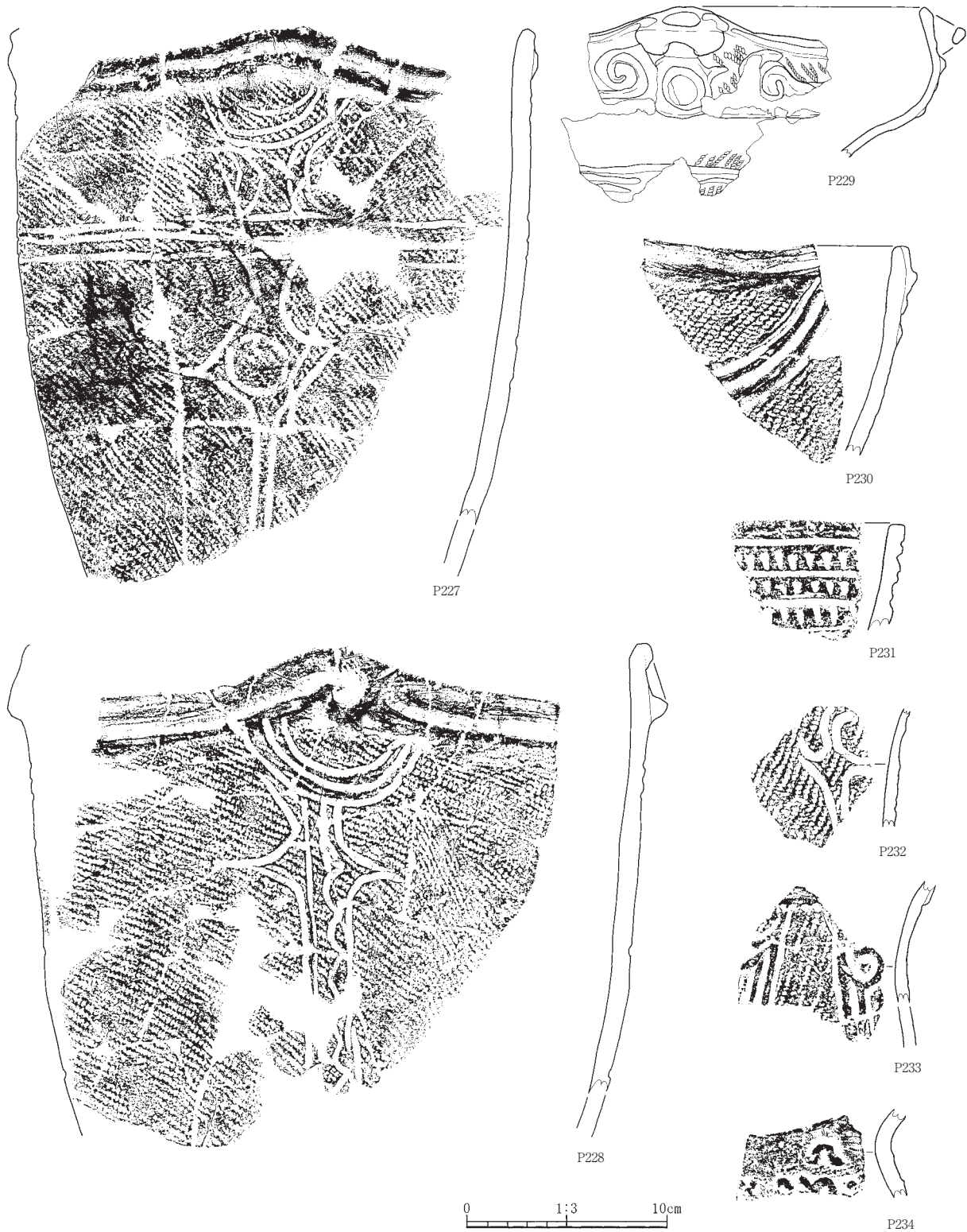
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写真
P216	17号竪穴建物跡東・埋土下位	深鉢 (1/3 周未満)	RLR? (RL?) タテ→隆帯に沿う太く浅い沈線	ナデ丁寧	突起光沢・外スス・No217と同一		78	74

第 78 図 縄文～弥生土器 (27)



掲載 No	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	写 真
P219	7号竪穴建物跡東・埋土下位	深鉢 (1/3 周未満)	突起二種・RLR タテ→太く非常に浅い沈線	ナデ		79	73
P220	7号竪穴建物跡東 (2/3)、北東・埋土下位、Ⅱ A25s以南・Ⅲ層以下	鉢 (欠損)	2波状・LR タテ→太い沈線・口縁ミガキ?/底面ナデ	ナデ		79	73
P221	7号竪穴建物跡東・埋土下位	鉢・口縁部	RL タテ→隆帯なでつけ、沿う太く浅い沈線、刺突	ナデ		79	73
P222	7号竪穴建物跡東・埋土下位	深鉢・胴部	RL タテ→隆帯に沿う浅い沈線	ナデ	隆帯剥落	79	73
P223	7号竪穴建物跡西・埋土下位	深鉢 (1/5 周未満)	RLR タテ→隆帯なでつけ、沿う浅い沈線	ナデ	下の割口、粘土接合面剥離・外スス	79	73
P224	7号竪穴建物跡西・埋土下位	深鉢・口縁部	RL タテ→隆帯なでつけ、沿うナデ	ナデ丁寧	外黒斑?	79	73
P225	7号竪穴建物跡西・埋土下位、Ⅱ A22s～t・Ⅲ～Ⅳ層	深鉢 (1/5 周未満)	単軸絡1 (L) ヨコ?→高い隆帯に沿うナデ	ナデ	内面摩耗・226と同一個体?	79	74
P226	7号竪穴建物跡西・埋土下位、7号竪穴建物跡南西・埋土中～下位	深鉢 (1/5 周未満)	単軸絡1 (L) ヨコ?→高い隆帯に沿うナデ	ナデ	内面輪痕、摩耗・225同一個体?	79	74

第 79 図 縄文～弥生土器 (28)



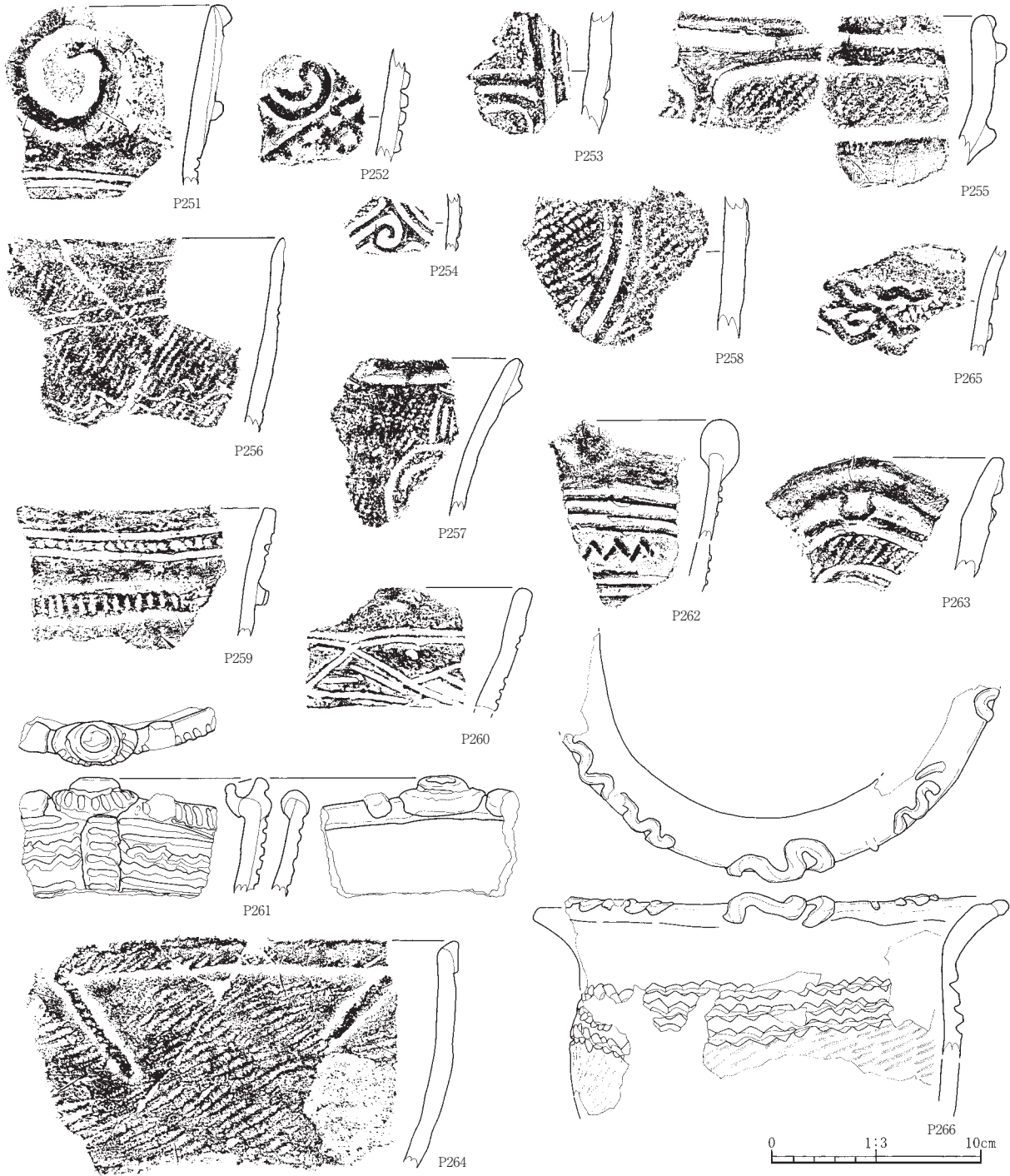
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	国	写 真
P227	7号竪穴建物跡西・埋土下位	深鉢 (1/3 周以下)	波状口縁・LR タテ→太く浅い沈線	ナデ	内外摩耗		80	75
P228	7号竪穴建物跡西・埋土下位	深鉢 (1/3 周以下)	4波状口縁・LR タテ→太く浅い沈線	ナデ			80	76
P229	7号竪穴建物跡西・埋土下位	深鉢 (1/5 周以下)	突起貫通・RL、口縁コゴ、胴タテ→隆帯、太く浅め沈線	ミガキ?	外二次焼成で摩耗、内面コゲ多		80	73
P230	7号竪穴建物跡西・埋土下位	深鉢・口縁部	RL タテ→隆帯に沿う浅い沈線	ナデ			80	73
P231	7号竪穴建物跡西・埋土下位	深鉢・口縁部	口唇平ら/下から刺突	ナデ			80	74
P232	7号竪穴建物跡西・埋土下位	深鉢・胴部	RLR タテ→太く浅い沈線	ナデ滑らか	外面スス付着		80	74
P233	7号竪穴建物跡西・埋土下位	深鉢・胴部	RL タテ? →浅い沈線	ナデ	内外摩耗		80	74
P234	7号竪穴建物跡南・埋土下位	深鉢・肩部		ナデ	外面スス、内面コゲ		80	74

第 80 図 縄文～弥生土器 (29)



掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部 / 胴部 / 底部 / 底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	写 真
P235	7号壺穴建物跡南西・埋土中～下位	深鉢・突起	貫通孔・RLRヨコ→太い沈線	ナデ			81 74
P236	7号壺穴建物跡南西・埋土中～下位	深鉢・口縁部	太く深い沈線	ナデ	外面スス付着		81 74
P237	7号壺穴建物跡南西・埋土中～下位	球胴鉢・口縁部	口唇平ら / ミズ腫れ状隆帯	ナデ	外面スス付着?		81 74
P238	7号壺穴建物跡南西・埋土中～下位	深鉢・口縁部	波状口縁	ナデ	内面コゲ付着		81 74
P239	7号壺穴建物跡南西・埋土中～下位	口縁部	RLタテ→浅め沈線	ナデ			81 74
P240	7号壺穴建物跡南西・埋土中～下位	深鉢・胴部		ナデ	内外摩耗		81 74
P241	7号壺穴建物跡北西・埋土上～中位	深鉢 (1/5 周未満)	LRタテ? → 隆帯に沿うナデ	ナデ	外摩耗・下割口粘土接合面剥離		81 75
P242	7号壺穴建物跡北東・埋土上～中位	深鉢・口縁部		ナデ	内外摩耗ひどい		81 75
P243	7号壺穴建物跡北東・埋土上～中位	深鉢・胴部	RLタテ→隆帯に沿うナデ	ナデ	下の割口、粘土接合面剥離		81 75
P244	7号壺穴建物跡北東・埋土下位	深鉢・口縁部	RLヨコ→隆帯に沿うナデ	ナデ丁寧			81 75
P245	7号壺穴建物跡北東・埋土下位	深鉢・口縁部	横から刺突	ナデ丁寧			81 75
P246	7号壺穴建物跡北西・埋土上～中位	深鉢・口縁部	LRLヨコ→隆帯に沿うナデ	摩耗			81 75
P247	7号壺穴建物跡北西・埋土上～中位	深鉢・口縁部	RLヨコ→太く浅い沈線、隆帯なでつけ	ナデ			81 75
P248	7号壺穴建物跡北西・埋土上～中位	深鉢・口縁部	LRタテ→太く浅い沈線	ナデ	外面スス、内面やや摩耗		81 75
P249	7号壺穴建物跡北西・埋土上～中位	深鉢・口縁部	(ナデ)	ナデ			81 75
P250	7号壺穴建物跡北西・埋土上～中位	深鉢・胴部	LRタテ→太く浅い沈線	ナデ	外面やや摩耗・内面下コゲ		81 76

第 81 図 縄文～弥生土器 (30)



掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内面 (調整など)	備考	本文 記載	図 号	写真
P251	7号竪穴建物跡北西・埋土上～中位	深鉢・口縁部		ナデ	下の割れ口、粘土接合面剥離		82	75
P252	7号竪穴建物跡北西・埋土上～中位	深鉢・胴部	高い貼付	ナデ	胎土白砂混入		82	75
P253	7号竪穴建物跡北西・埋土上～中位	深鉢・胴部	隆帯なでつけ	ナデ			82	75
P254	7号竪穴建物跡北西・埋土上～中位	深鉢・胴部	RLヨコ?→隆帯なでつけ	ナデ			82	75
P255	7号竪穴建物跡北西北東・埋土中～下位	深鉢・口縁部	LRヨコ→隆帯に沿うナデ	ナデ	外面やや摩耗		82	76
P256	7号竪穴建物跡北西北東・埋土中～下位	深鉢・胴部	LRヨコ→非常に浅い沈線	ナデ	外面スス、やや摩耗		82	76
P257	7号竪穴建物跡北西北東・埋土中～下位	深鉢・口縁部	RLタテ??→太く浅め沈線	ナデ	外面摩耗ひどい		82	76
P258	7号竪穴建物跡北西北東・埋土中～下位	深鉢・胴部	RLタテ→隆帯に沿うナデ	ナデ	外面やや摩耗		82	76
P259	8号竪穴建物跡・床面	深鉢・口縁部	口唇平ら/半截竹管状工具による沈線、刺突・高い隆帯に刻目	ナデ	外面スス付着		82	76
P260	8号竪穴建物跡・床面	深鉢・口縁部	突起・沈線底粘土まくれ痕	ナデ	下の割れ口、粘土接合面剥離		82	76
P261	8号竪穴建物跡・埋土下位床面	深鉢・口縁部	(下の割れ口、粘土接合面剥離)	ミガキ?	外スス多、内コゲ付着		82	76
P262	8号竪穴建物跡 pit8埋土	深鉢・口縁部	内面肥厚/丸い突起/ソーム状貼付	ナデ			82	76
P263	8号竪穴建物跡・埋土上～中位	深鉢・口縁部	LRヨコ→ソーム状貼付、太く浅い沈線	ナデ			82	76
P264	8号竪穴建物跡・埋土下位	深鉢(1/4周未満)	LRヨコ・貼付	ナデ	外全面スス、内下コゲ		82	76
P265	8号竪穴建物跡・埋土下位	深鉢・胴部	LRヨコ?→貼付	ナデ	外スス多、内コゲ付着		82	76
P266	8号竪穴建物跡 pit5埋土、II A18w・II層下位、II A17x・III層下位	深鉢(1/2周以下)	口唇高い隆帯・Lヨコ→太く非常に深い沈線	ナデ	外面全面スス、内面コゲ?		82	76

第 82 図 縄文～弥生土器 (31)



掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写真
P267	8号竪穴建物跡・埋土下位	鉢 (1/4 周未満)	高い隆帯に刻目列・結節タテ?	ナデ			83	76
P268	8号竪穴建物跡南東・埋土上~中位	深鉢 (1/4 周未満)	RL タテ→浅い沈線	ナデ			83	76
P269	8号竪穴建物跡・埋土上~中位 (4/5)、10号竪穴建物跡・埋土上~中位	深鉢・頭部	LR、頭コゴ、胴タテ→隆帯貼付	ナデ	外黒斑?・外摩耗		83	76
P270	8号竪穴建物跡南東~南西・埋土上~中位	深鉢・口縁部	折り返し口縁・LR、口縁コゴ、ナナム、頭タテ	ナデ	外面スス付着		83	76
P271	8号竪穴建物跡南東・埋土上~中位、II A21t・III~III b層相当	深鉢 (1/5 周未満)	結節タテ	ナデ	272、274と同一個体?		83	76
P272	24号竪穴建物跡炉1層、II A21t・III~IV層、II A22s ~ t・III~IV層	深鉢 (1/5 周未満)	結節タテ・浅い沈線 (*271、274と同一個体?)	ナデ	外スス多、内喫水線コゴ		83	77
P273	8号竪穴建物跡・炉、掘り方埋土、中央セクション・III層	深鉢・口縁部	口唇深い押圧、刺突・高い貼付上刻目	ナデ			83	76

第 83 図 縄文~弥生土器 (32)



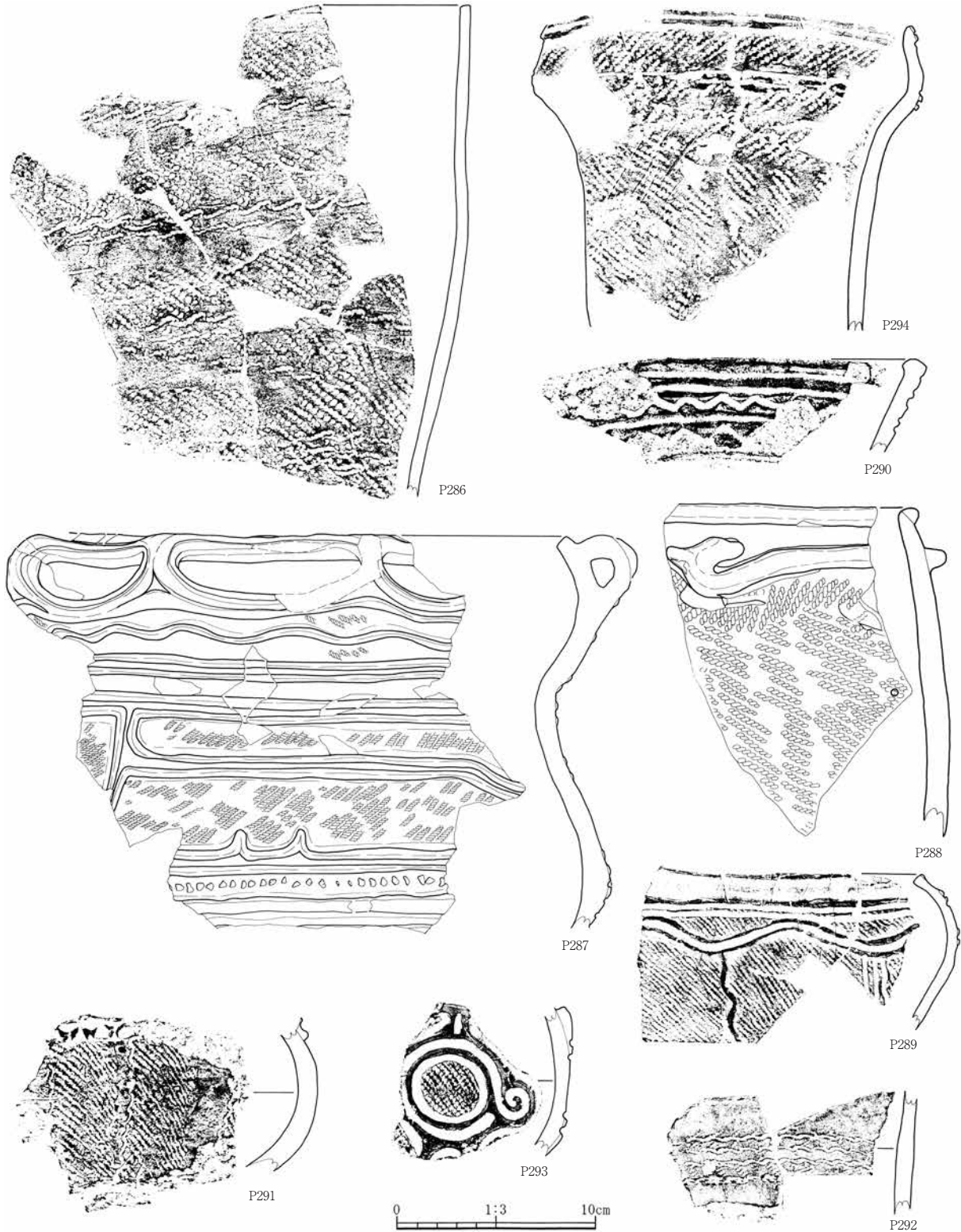
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部 / 胴部 / 底部 / 底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写 真
P274	24号竪穴建物跡の土器、Ⅱ A21t・Ⅲ～Ⅳ層、中央セクション・Ⅲ層	深鉢・胴部	結節タテ・浅い沈線 (*271、272と同一個体?)・隆帯に刻目	ナデ	外面スス付着	p73	84	77

第 84 図 縄文～弥生土器 (33)



掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	写 真
P275	8号竪穴建物跡南東南西・埋土上～中位	深鉢・口縁部	口唇～口縁貼付・貼付上半裁竹管状工具による刺突	ナデ	内外黒い	85	77
P276	4号竪穴建物跡北西隅埋土上～中位、19号竪穴建物跡埋土、1号土坑埋土上～中位	深鉢(1/3 周未満)	4波状口縁・LR口～頸部ヨコ、胴部タテ→ナデ、太く浅い沈線	ナデ	ナデで縄文大分消え・277と同一?	85	77
P277	8号竪穴建物跡南東埋土、17号竪穴建物跡埋土上～中位、19号竪穴建物跡埋土	深鉢(底一周)	LR タテ (間隔開け) → 底部～底面ナデ	ナデ	内面コゲ・276と同一個体?	85	78
P278	9号竪穴建物跡南石囲炉1周辺・床面	深鉢・口縁部	LR タテ→沈線	ナデ	外面スス付着	85	77
P279	9号竪穴建物跡南石囲炉1・1層	深鉢・口縁部	突起	ナデ	外面スス付着	85	77
P280	9号竪穴建物跡南石囲炉1・1層	深鉢・口縁部?	LR ヨコ→太く浅い沈線	ナデ丁寧		85	77
P281	9号竪穴建物跡と2号土坑(重複)・埋土上位	深鉢?(1/5 周以下)	口縁突起・RL タテ→隆帯までつけ	ナデ	外面スス、内面コゲ	85	77
P282	9号竪穴建物跡と2号土坑(重複)・埋土上位	深鉢・胴部	RL タテ→太く浅い沈線	ナデ		85	77
P283	9号竪穴建物跡と2号土坑(重複)・埋土上位	深鉢・胴部	LR ヨコ→隆帯に沿う太く浅い沈線	摩耗	内外摩耗ひどい	85	77
P284	10号竪穴建物跡・床面 p1	深鉢(1/4 周未満)	隆帯に刻目列・LR ヨコ?	ナデ	外スス多、二次焼成、内コゲタール状	85	77
P285	10号竪穴建物跡炉・覆土	深鉢・口縁部	LR+ 結節ヨコ	ナデ	外面スス付着	85	77

第 85 図 縄文～弥生土器 (34)



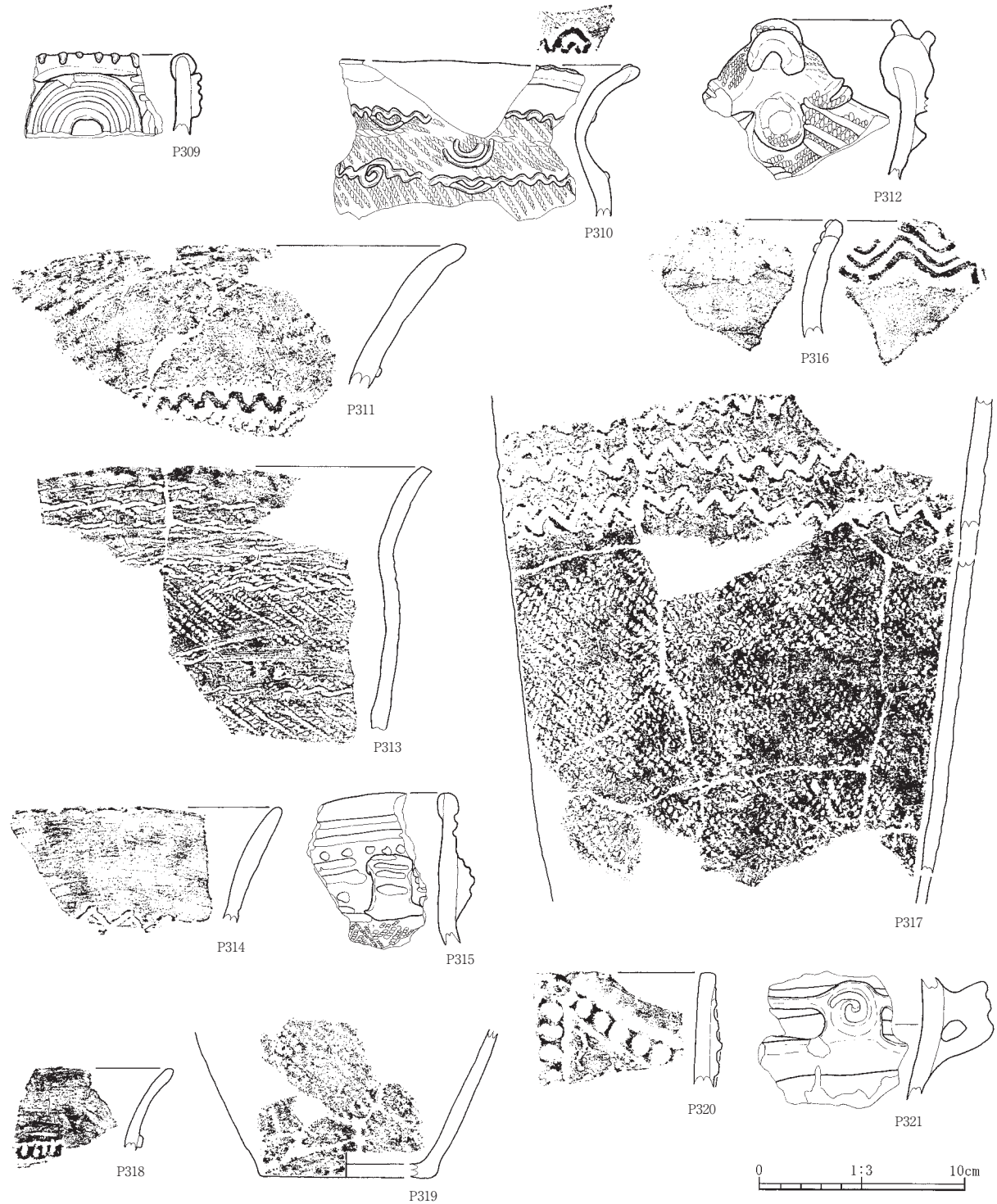
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部・胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写真
P286	10号竪穴建物跡・床面	深鉢 (1/5 周末満)	RL+ 結節ココ	ナデ	外面全面スス、内下コゲ		86	78
P287	10号竪穴建物跡・埋土上～中位	深鉢 (1/5 周末満)	口縁橋状突起・RL、口縁ココ (ナデで消え)、胴タテ・低い隆帯	ナデ			86	78
P288	10号竪穴建物跡・埋土上～中位	深鉢・口縁部	高い隆帯・LR 胴タテ→口縁ココ	ナデ			86	77
P289	10号竪穴建物跡・埋土上～中位	鉢 (1/4 周末満)	LR タテ→ソーン状貼付、浅い沈線	ミガキ?	外口縁ケール状付着物		86	77
P290	10号竪穴建物跡・埋土上～中位	深鉢 (1/5 周末満)	内面肥厚	ナデ	外面全面スス付着		86	78
P291	10号竪穴建物跡・埋土上～中位	球胴鉢・胴部	隆帯に深い△陰刻・LR+ 結節タテ	ナデ	外上スス、下二次焼成		86	78
P292	10号竪穴建物跡・埋土上～中位	深鉢・胴部	LR+ 結節ココ	ナデ	外スス、二次焼成、内全面コゲ		86	78
P293	10号竪穴建物跡・埋土上～中位	深鉢・胴部	RL タテ→隆帯に沿う浅い沈線	ミガキ?	外面スス付着		86	78
P294	10号竪穴建物跡調査区西壁・埋土上～中位	深鉢 (頸略一周)	高め隆帯・LR、口～頸ココ、胴タテ (一部末端回転)	ナデ	外面スス付着		86	78

第 86 図 縄文～弥生土器 (35)



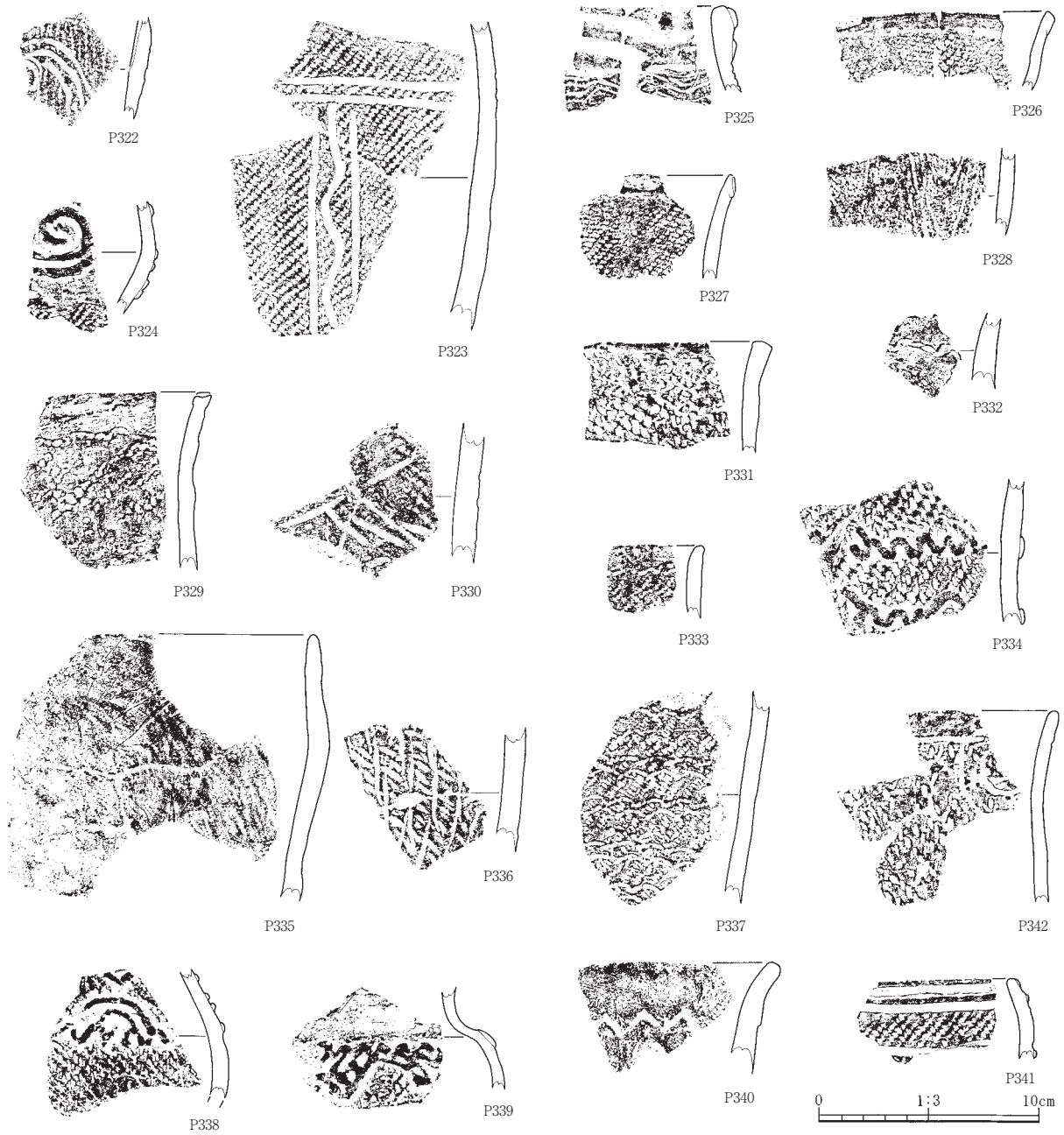
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底面/縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写 真
P295	10号竪穴建物跡調査区西壁・埋土上～中位	深鉢・底(1/2周)	RL タテ→低い隆帯→隆帯脇、底部～底面ナデ	ナデ	外二次焼成・内底から5cm以上コゲ		87	78
P296	10号竪穴建物跡調査区西壁・埋土上～中位	深鉢・口縁部	突起	ナデ	外面スス付着		87	78
P297	10号竪穴建物跡調査区西壁・埋土上～中位	深鉢・口縁部	LR タテ→隆帯に沿うナデ	ナデ			87	78
P298	10号竪穴建物跡調査区西壁・埋土上～中位	深鉢・口縁部	RLR タテ→隆帯に沿うナデ・太く深い刺突	ナデ	摩耗		87	78
P299	10号竪穴建物跡調査区西壁・埋土上～中位	深鉢・口縁部	口唇平ら/竹管状工具による刺突	ナデ			87	78
P300	10号竪穴建物跡調査区西壁・埋土上～中位	深鉢・口縁部	RL、口縁ココ、胴タテ→隆帯になでつけ	ナデ	外面スス付着		87	78
P301	10号竪穴建物跡調査区西壁・埋土上～中位	深鉢・口縁部	内面隆帯/ボタン状貼付	ナデ			87	78
P302	10号竪穴建物跡調査区西壁・埋土上～中位(3/5)、4号竪穴建物跡南・埋土上～中位	深鉢(1/5 周未満)	RLR タテ→隆帯に沿うナデ・太く深い刺突	ナデ	外面スス付着		87	79
P303	10号竪穴建物跡調査区西壁・埋土上～中位	深鉢(1/4 周未満)	RL、口縁ココ、胴タテ→隆帯、浅い沈線	ナデ	外黒斑?・内面摩耗		87	79
P304	10号竪穴建物跡(4号竪穴建物跡 SPA 近く)・埋土上～中位	深鉢・口縁部	突起・隆帯→LR タテ	ナデ			87	78
P305	10号竪穴建物跡(4号竪穴建物跡 SPA 近く)・埋土上～中位	深鉢・口縁部	LR ヨコ→側面圧痕、低い隆帯貼付	ナデ	外面スス、摩耗		87	79
P306	10号竪穴建物跡(4号竪穴建物跡 SPA 近く)・埋土上～中位	深鉢・口縁部	ミガキ?	ミガキ?			87	79
P307	10号竪穴建物跡(4号竪穴建物跡 SPA 近く)・埋土上～中位	深鉢・胴部	RLR タテ→隆帯に沿うナデ・太く深い刺突	ナデ丁寧			87	79
P308	10号竪穴建物跡南・埋土下位	深鉢・口縁部	突起頂部押圧・LR タテ?	ナデ	胎土砂・外面全面スス付着		87	79

第 87 図 縄文～弥生土器 (36)



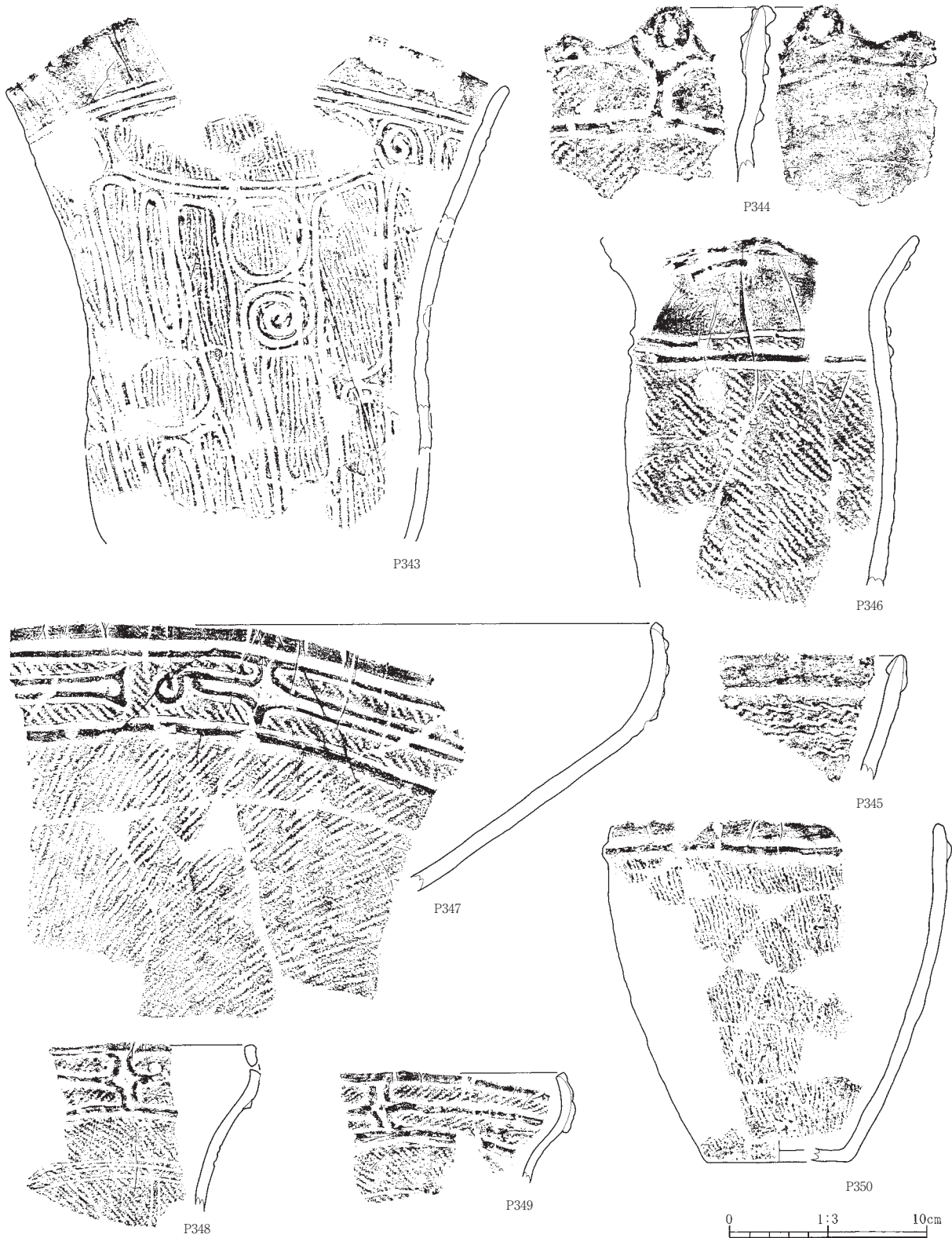
掲載 No	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	写 真
P309	10号竪穴建物跡南・埋土下位	深鉢・口縁部	口内面隆帯状・口唇ソーム状貼付・深め沈線	ナデ丁寧		88	79
P310	10号竪穴建物跡北・埋土上～中位	鉢 (1/4 周未満)	内面ソーム状貼付・LRヨコソーム状貼付	ナデ	外スス多、内面全面コゲ	88	79
P311	10号竪穴建物跡北・埋土上～中位	深鉢・口縁部	LRヨコソーム貼付	ナデ		88	79
P312	10号竪穴建物跡北・埋土上～中位	深鉢・口縁部	LRヨコソーム	ミガキ?	外面スス付着・内面コゲ?付着	88	79
P313	10号竪穴建物跡北・埋土中位	深鉢 (1/5 周未満)	RL+ 結節ヨコ (*下の割れ口、粘土接合面剥離)	ナデ	胎土繊維・外スス、内下コゲ	88	79
P314	10号竪穴建物跡北・埋土上～中位	鉢 (1/4 周未満)	内面ソーム状貼付・RLヨコソーム状貼付	ナデ	外スス多、内面全面コゲ	88	79
P315	10号竪穴建物跡・埋土中位	球胴鉢?・口縁部	口内面隆帯貼付/RL+ 結節 R ナナメ	ミガキ?		88	79
P316	10号竪穴建物跡北・埋土中位	深鉢・口縁部	内面貼付	ナデ	外面スス、剥落	88	79
P317	10号竪穴建物跡北・埋土上～中位、II A 22t 沢跡埋土	深鉢 (1/2 周未満)	RL ナナメ・太深い沈線	ナデ	外スス、内コゲ?	88	79
P318	29号竪穴建物跡北西・埋土	深鉢・口縁部	隆帯刻目	ナデ		88	79
P319	11号竪穴建物跡土器 No.4 床面	深鉢・底 (1/3 周以下)	LR タテ / 底部～底面ナデ	ナデ	外面摩擦・内面底部上コゲ付着	88	79
P320	11号竪穴建物跡東・埋土	深鉢・口縁部	突起蛇行隆帯・隆帯上押圧列	ナデ	外面スス付着	88	79
P321	11号竪穴建物跡土器 No.3、11号竪穴建物跡東・3層	胴部	橋状把手	摩耗		88	79

第 88 図 縄文～弥生土器 (37)



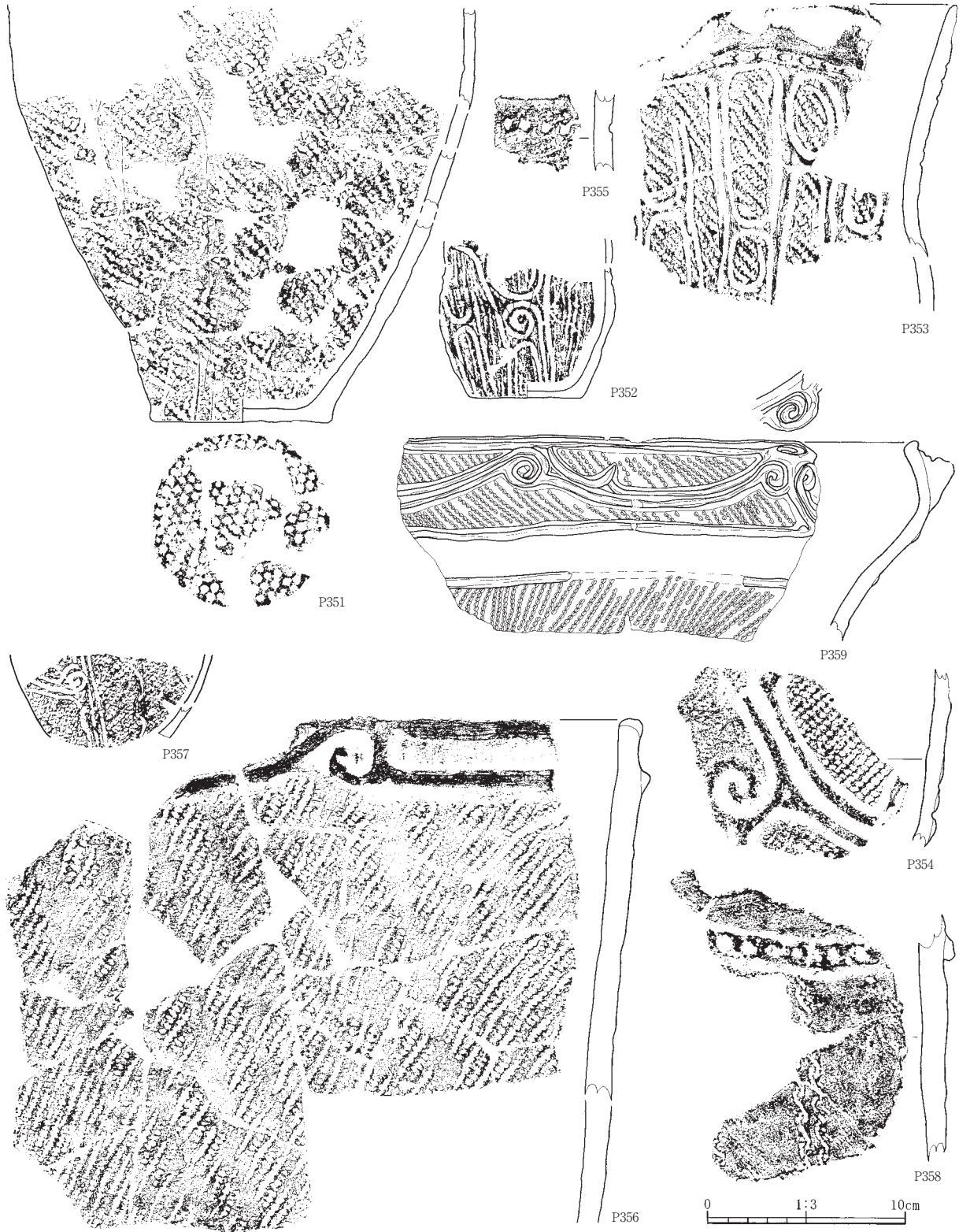
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写 真
P322	11号竪穴建物跡土器 No.1床面	深鉢・胴部	RL タテ→太く浅い沈線	ナデ	外摩耗、内コゲ、剥落		89	79
P323	11号竪穴建物跡東・埋土上位	深鉢・胴部	RL タテ→太く浅い沈線	ナデ	外面スス付着		89	79
P324	11号竪穴建物跡東・埋土上位	深鉢・頸部	RL タテ?	ナデ			89	79
P325	12号竪穴建物跡東・1層	深鉢・口縁部	半裁竹管状工具による沈線	ナデ			89	79
P326	12号竪穴建物跡西・1層	深鉢・口縁部	RL タテ→ナデ	ナデ	外面スス付着		89	79
P327	12号竪穴建物跡東・埋土下位	深鉢・口縁部	RL タテ	ナデ	外面スス付着		89	79
P328	12号竪穴建物跡西・1層	深鉢・胴部	単軸絡1A (R?) タテ	ナデ	外面スス多、内面コゲ多		89	79
P329	12号竪穴建物跡土器 No.1床面	深鉢・口縁部	口唇押圧 / LR+ 結節ヨコ	ナデ凹凸	外面スス付着		89	79
P330	12号竪穴建物跡東・床面	深鉢・胴部	縄文?・太く浅い沈線	ナデ	外面摩耗		89	79
P331	13号竪穴建物跡・埋土上位	深鉢・口縁部	RL ヨコ?	ナデ	胎土繊維・外面全面スス付着		89	79
P332	13号竪穴建物跡・床面	深鉢・胴部	結節ヨコ	ナデ			89	79
P333	13号竪穴建物跡・埋土上位	深鉢・口縁部	LR+ 結節ヨコ	ナデ	外面全面スス付着		89	79
P334	14号竪穴建物跡土器 No.3	深鉢・胴部	LR ヨコ→貼付 (無調整)	ナデ	外スス、内コゲ		89	80
P335	15号竪穴建物跡西・1層	鉢 (1/4 周以下)	縄文?・指なで	ナデ	胎土繊維・外スス、二次焼成、内全面コゲ		89	80
P336	15号竪穴建物跡東・1層	深鉢・胴部	雑な浅い沈線	ナデ			89	80
P337	15号竪穴建物跡西・1層	深鉢・胴部	LR+ 結節ヨコ	ナデ	外スス・下の割口、粘土接合面剥離		89	80
P338	16号竪穴建物跡西・1層	深鉢・胴部	RL ヨコ→貼付 (無調整)	ナデ	外上スス、下二次焼成、内全面コゲ		89	80
P339	16号竪穴建物跡西・1層	深鉢・胴部	LR ヨコ→貼付	ナデ	外全面スス、内下コゲ		89	80
P340	30号竪穴建物跡南西・埋土上~下位	深鉢・口縁部	浅い沈線	ナデ	外全面スス、内下コゲ?		89	80
P341	30号竪穴建物跡南西・埋土上~下位	深鉢・口縁部	LR ヨコ→浅い沈線・光沢	ナデ	外全面スス		89	80
P342	30号竪穴建物跡南東・埋土床直 (1/2)、埋土上~中位	深鉢・口縁部	RL ヨコ?? (原体不明) →浅い沈線	ナデ	内面コゲ		89	80

第 89 図 縄文～弥生土器 (38)



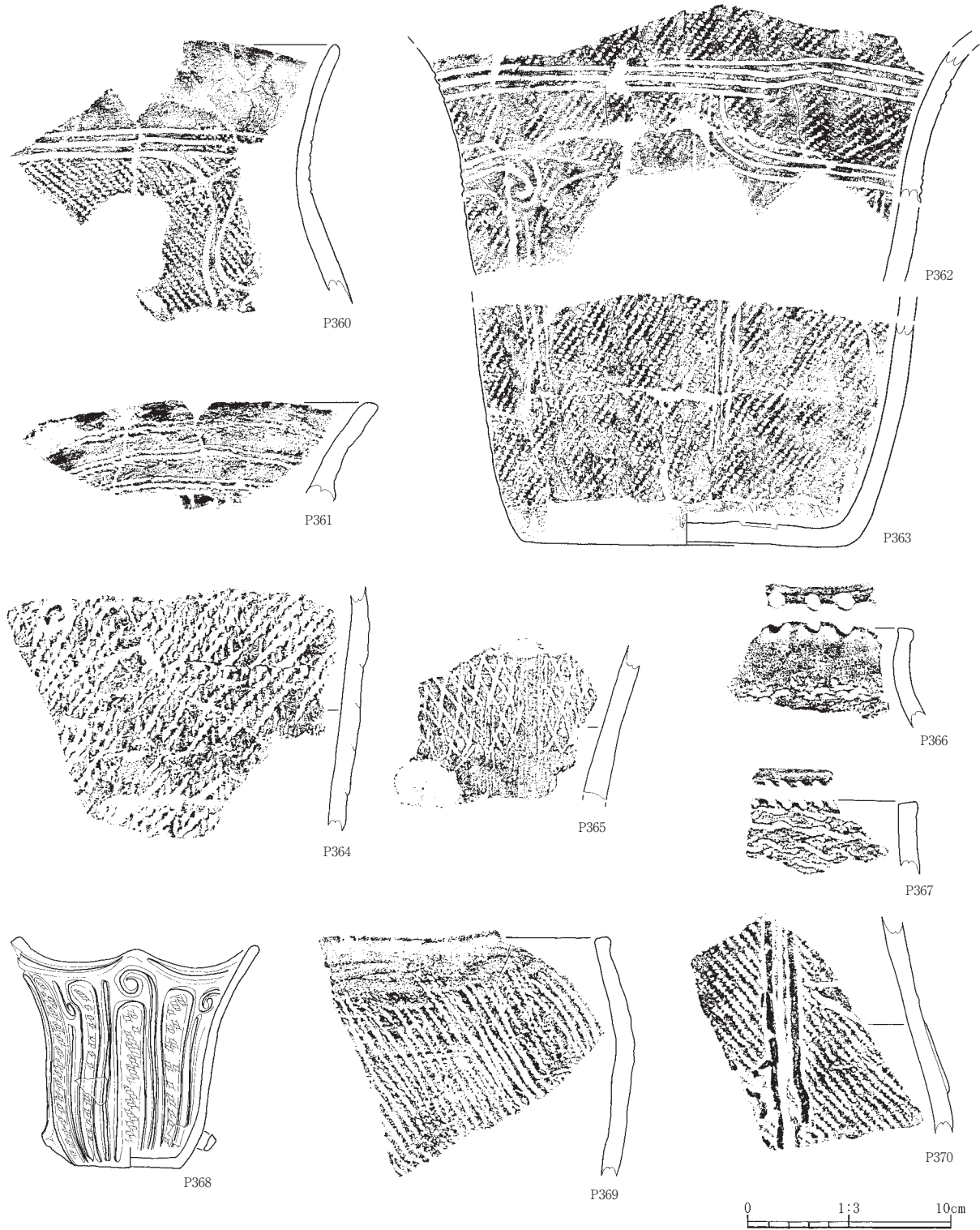
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部 / 胴部 / 底部 / 底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写真
P343	17号竪穴建物跡北東・埋土上～中位、北・埋土一括、II A21t・III～IV層 (2/3)	深鉢 (胴中位一周)	二波状?・文様2単位?・単軸絡1 (R) タテ→太く深め沈線	ナデ	外面二次焼成?、黒斑?		90	80
P344	17号竪穴建物跡・床面	深鉢・口縁部	突起内面ボタン状貼付 / LR 側面尻痕 / 胴 LR タテ	ナデ	外面全面スス付着		90	80
P345	17号竪穴建物跡北・埋土一括	深鉢・口縁部	内面隆帯 / 結節ヨコ	ナデ			90	80
P346	17号竪穴建物跡南東・埋土上～中位	鉢 (1/4周)	波状口縁・低く雑な隆帯・LR タテ	ナデ	内面下部コゲ		90	80
P347	17号竪穴建物跡南東・埋土上～中位	浅鉢 (1/5周未満)	RL、口縁ヨコ、胴タテ→隆帯に沿うナデ	ナデ滑らか			90	81
P348	II A22u・V層上位	深鉢・口縁部	LR、口縁ヨコ、胴タテ→隆帯に沿うナデ、細く浅い沈線	ナデ	補修孔・外スス、二次焼成、内全面コゲ		90	80
P349	17号竪穴建物跡南東・埋土上～中位	深鉢・口縁部	*348と同一個体	ナデ	外スス、二次焼成、内全面コゲ		90	80
P350	17号竪穴建物跡北西・埋土上～中位	鉢 (1/2周)	単軸絡1 (R) タテ? / 底面丁寧なナデ	ナデ			90	80

第 90 図 縄文～弥生土器 (39)



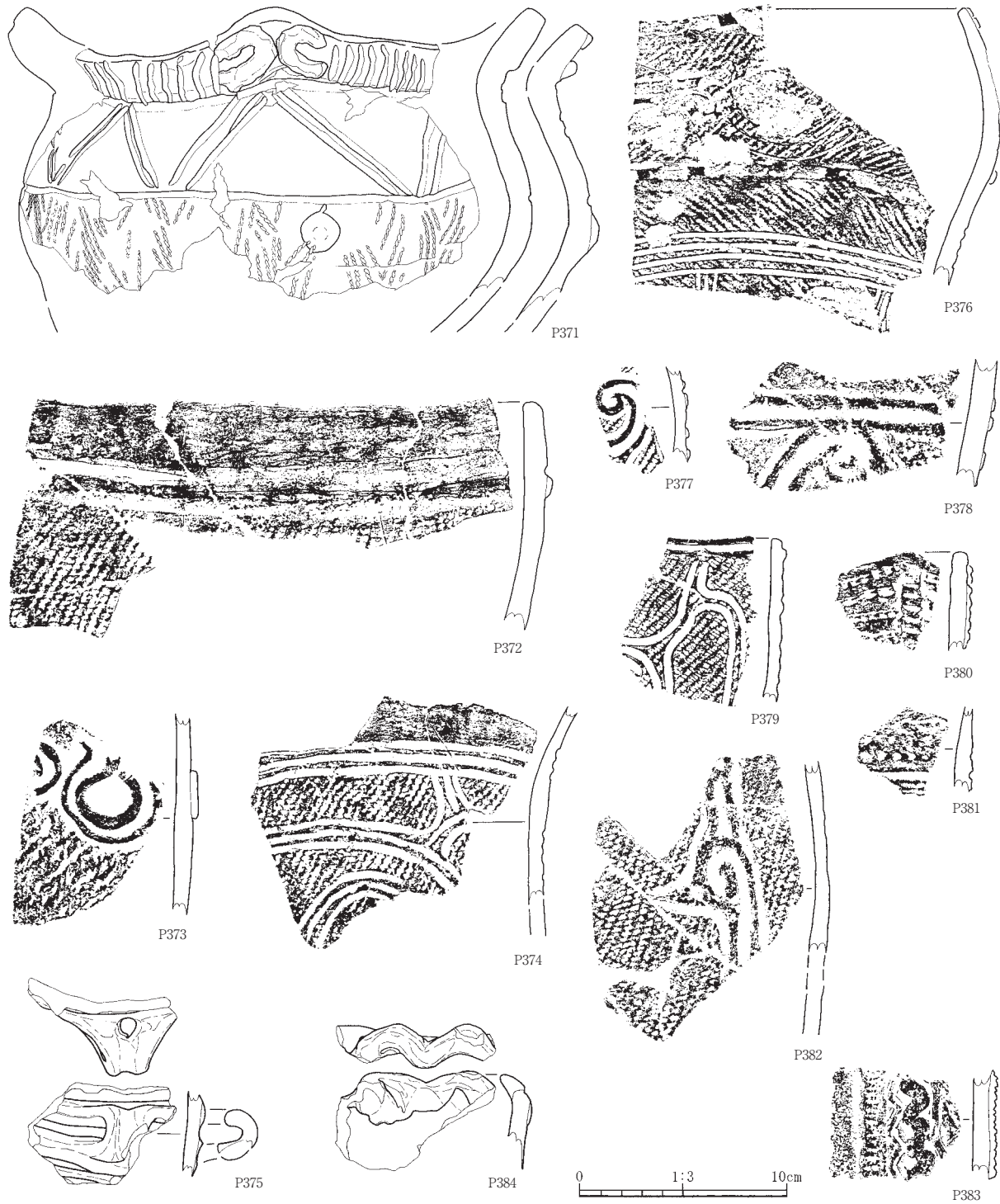
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写真
P351	17号竪穴建物跡北西・埋土上～中位	深鉢(底一周)	LRタテ→底部ナデ/底面網代痕	ナデ?	外二次焼成?、スス?、内ただれ、コゲ?		91	80
P352	17号竪穴建物跡北東・埋土上～中位	鉢(底一周)	単軸絡1(R) タテ→深め沈線/底面丁寧なナデ	ナデ?	外二次焼成?、内面底部以外コゲ		91	81
P353	17号竪穴建物跡北東・埋土上～中位	深鉢(1/4 周未満)	LRタテ→太(浅め沈線/沈線底ヨコからの刺突	ナデ	外上スス、下二次焼成、内コゲ		91	81
P354	17号竪穴建物跡北東・埋土上～中位	深鉢・胴部	RLRタテ→隆帯なでつけ、沿うナデ	ナデ滑らか	外面摩耗、内面コゲ		91	81
P355	Ⅱ A22t・Ⅲ層下位～Ⅳ層	深鉢・胴部	LRヨコ?? →下からの刺突	ナデ			91	81
P356	10号焼土遺構土器 No.1(埋土)(1/4)、Ⅱ A13z・Ⅲ層下位～Ⅳ層	深鉢(1/5 周未満)	RLタテ→隆帯なでつけ	ナデ	外面スス付着		91	81
P357	10号焼土遺構石囲炉埋土、Ⅱ A13z・Ⅲ層下位～Ⅳ層	鉢(1/2 周以下)	RLRタテ→浅い沈線(下の割れ口、粘土接合面剥離)	ナデ	外黒斑、スス		91	81
P358	10号焼土遺構土器 No.1(埋土)(1/3)	深鉢・胴部	高い隆帯に押圧列・結節タテ	ナデ	外面スス付着		91	81
P359	10号焼土遺構土器 No.4(石囲炉埋土上位)	深鉢(1/4 周未満)	RLR、口縁ヨコ、胴タテ→低め隆帯→ミガキ?	ナデ	外面黒斑・焼成良緻密		91	81

第 91 図 縄文～弥生土器 (40)



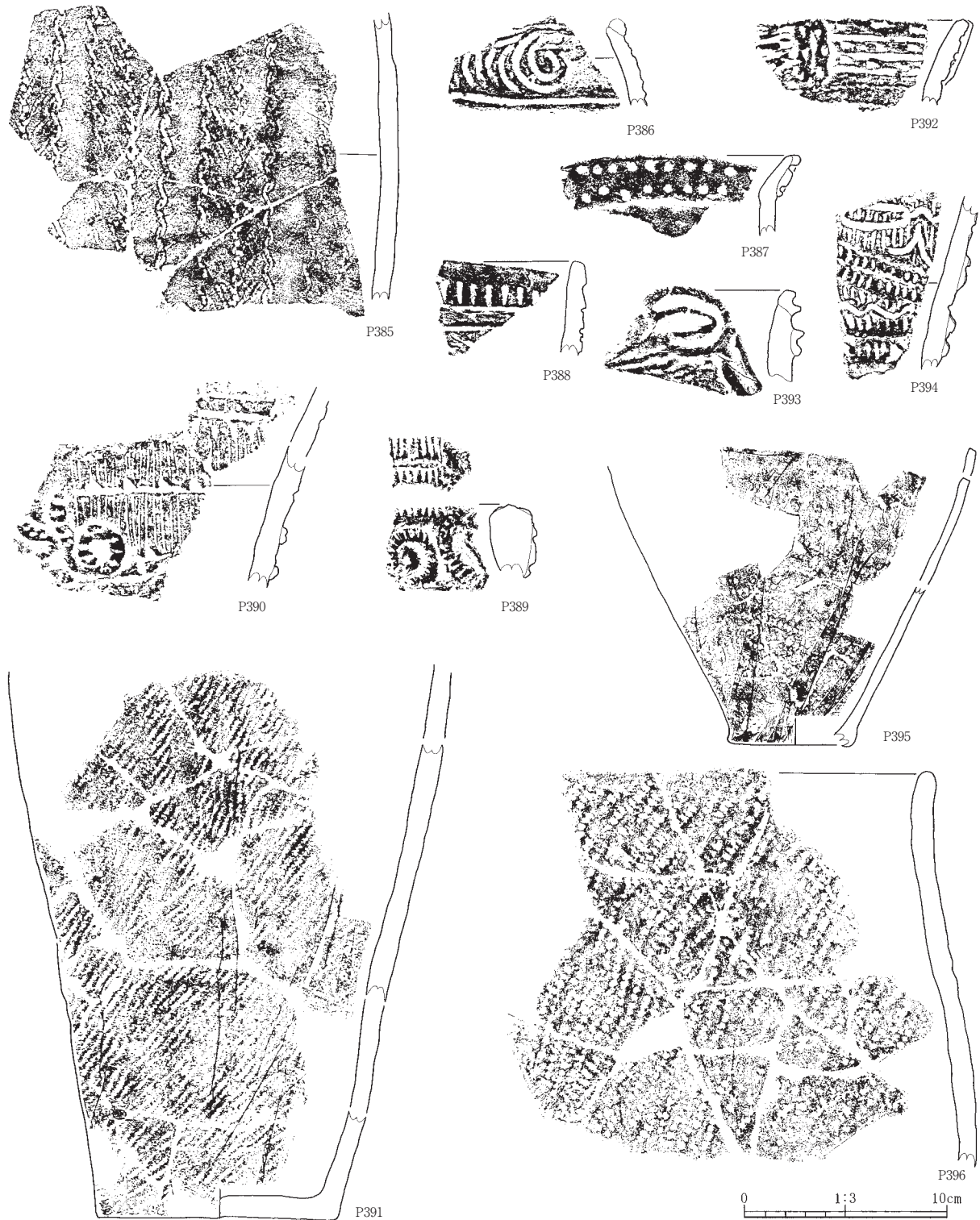
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写 真
P360	10号焼土遺構石開炉埋土	深鉢・口縁部	LR タテ→太く浅い沈線	ミガキ?	外黒斑?、やや摩耗		92	81
P361	10号焼土遺構土器 No.2 (埋土)	深鉢・口縁部	半葎竹管状工具による沈線?	ナデ			92	81
P362	II B13a・III層下位~IV層	深鉢 (5/6 周未満)	文様3単位?・RL タテ→太く浅い沈線・ナデで縄文一部消去	ナデ	No.363と同一個体?・黒斑?		92	82
P363	10号焼土遺構・埋土 (1/2)、II A13y・III層下位 No.724	深鉢 (上一周)	RL タテ→底部~底面ナデ (上の割れ口、粘土接合面から剥離)	ナデ	No.362と同一個体?		92	82
P364	11号焼土遺構土器 No.1 (床上)	深鉢・胴部	LR タテ?? (原体不明) →貼付	ナデ	外輪積痕残る・内面コゲ?		92	81
P365	11号焼土遺構土器 No.2 (床上)	深鉢・胴部	単輪絡5 (R) タテ	ナデ	外スス・下の割れ口、粘土接合面剥離		92	81
P366	18号竪穴建物跡ベルト A-A'・1層	深鉢・口縁部	口唇刺突 / 結節ヨコ	ナデ			92	81
P367	18号竪穴建物跡北西半・埋土上位	深鉢・口縁部	刻目列・結節ヨコ	ナデ	外面全面スス附着		92	81
P368	19号竪穴建物跡北東・埋土上~中位	鉢 (4/5 周以下)	4波状・突起挟み口唇沈線・LR タテ→沈線・底面ナデ	ミガキ?	高い波状下底部縦貫通孔突起		92	81
P369	19号竪穴建物跡北東・埋土上~中位	深鉢・口縁部	口唇平ら / LR タテ?	ナデ	外スス、内下コゲ、摩耗		92	81
P370	19号竪穴建物跡北東・埋土上~中位	深鉢・胴部	LR タテ→細い隆帯なでつけ	ナデ	外黒斑?		92	82

第 92 図 縄文~弥生土器 (41)



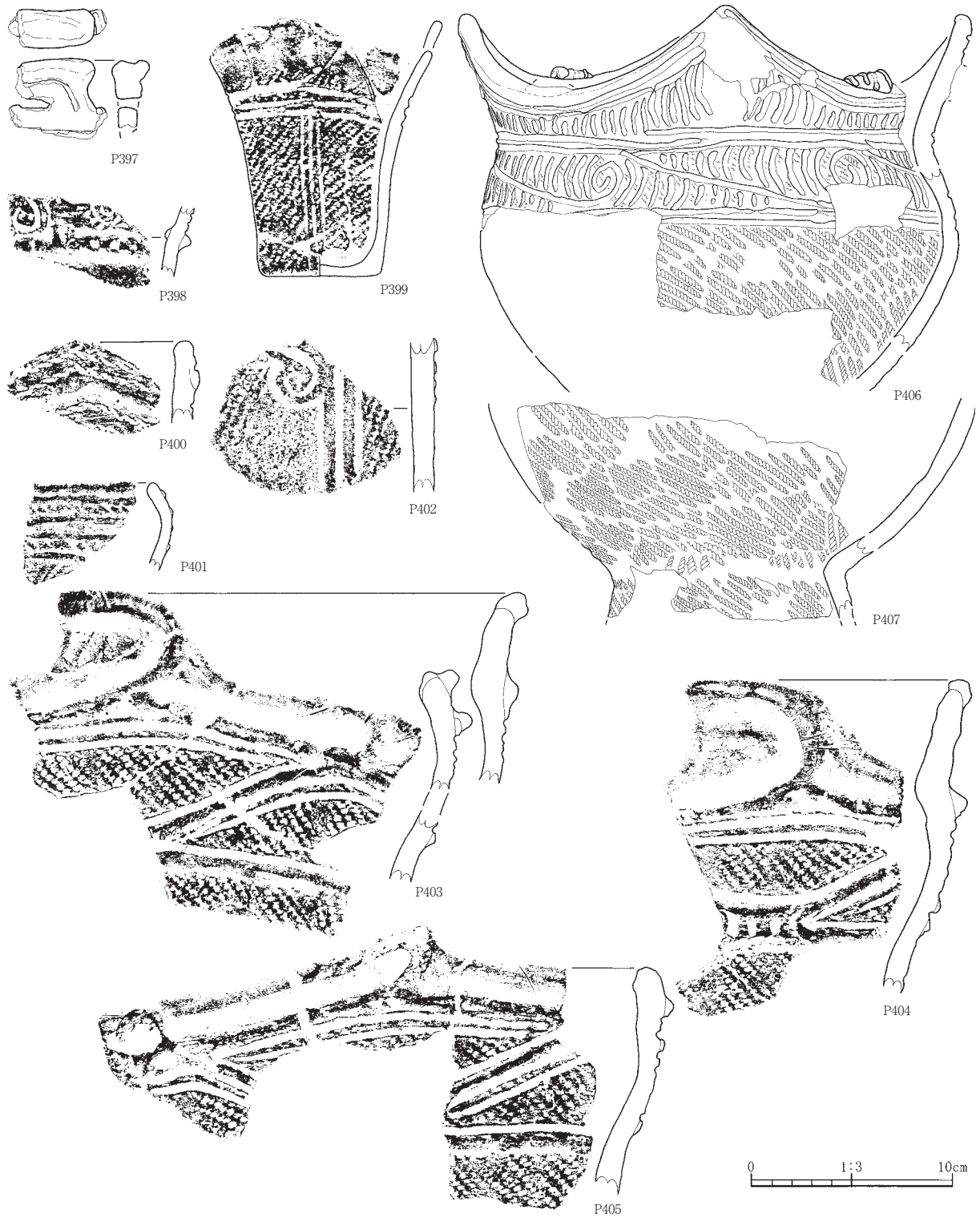
掲載No	出土地点・層位	器種・部位	外面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内面 (調整など)	備考	本文記載	図	写真
P371	20号竪穴建物跡 p1	球胴鉢 (1/4 周以下)	単軸絡1A (R?) タテ→太く浅め沈線	ナデ	外下摩耗剥落、内下コゲ		93	82
P372	20号竪穴建物跡・床面、埋土下位	深鉢 (1/5 周未満)	RL タテ	ナデ	外面全面スス付着		93	82
P373	20号竪穴建物跡・床面	深鉢・胴部	LR ヨコ→貼付 (無調整)	ナデ			93	82
P374	20号竪穴建物跡・埋土上～中位	深鉢 (1/5 周未満)	RL タテ→太く浅い沈線	ナデ	外上スス、下二次焼成、内全面コゲ		93	82
P375	20号竪穴建物跡・埋土上～中位	胴部	把手・整形丁寧	摩耗			93	82
P376	20号竪穴建物跡北・埋土上～中位	深鉢 (1/5 周未満)	LR、口縁ヨコ、胴タテ→太く浅い沈線	ナデ	外スス、剥落、内コゲ		93	82
P377	20号竪穴建物跡北・埋土上～中位	深鉢・胴部	RLR タテ→隆帯に沿うナデ	ナデ			93	82
P378	20号竪穴建物跡東・埋土上～中位	深鉢・胴部	隆帯なでつけ	ナデ	外面摩耗		93	82
P379	21号竪穴建物跡東・1層	深鉢・口縁部	RL タテ→太く浅い沈線	ミガキ?			93	82
P380	21号竪穴建物跡南・1層	深鉢・口縁部	半裁竹管状工具による押し引き	ナデ			93	82
P381	21号竪穴建物跡南・2層	深鉢・頸部	横から刺突	ナデ	外面全面スス、剥落		93	82
P382	21号竪穴建物跡南・1層	深鉢・胴部	RL タテ→隆帯に沿うナデ	ナデ	外面スス、摩耗		93	82
P383	21号竪穴建物跡南・1層	深鉢・胴部	隆帯上刻目・半裁竹管状工具による鋸歯文	ナデ	内外摩耗		93	82
P384	21号竪穴建物跡・2層	深鉢・口縁部	口唇部純行隆帯	ナデ			93	82

第 93 図 縄文～弥生土器 (42)



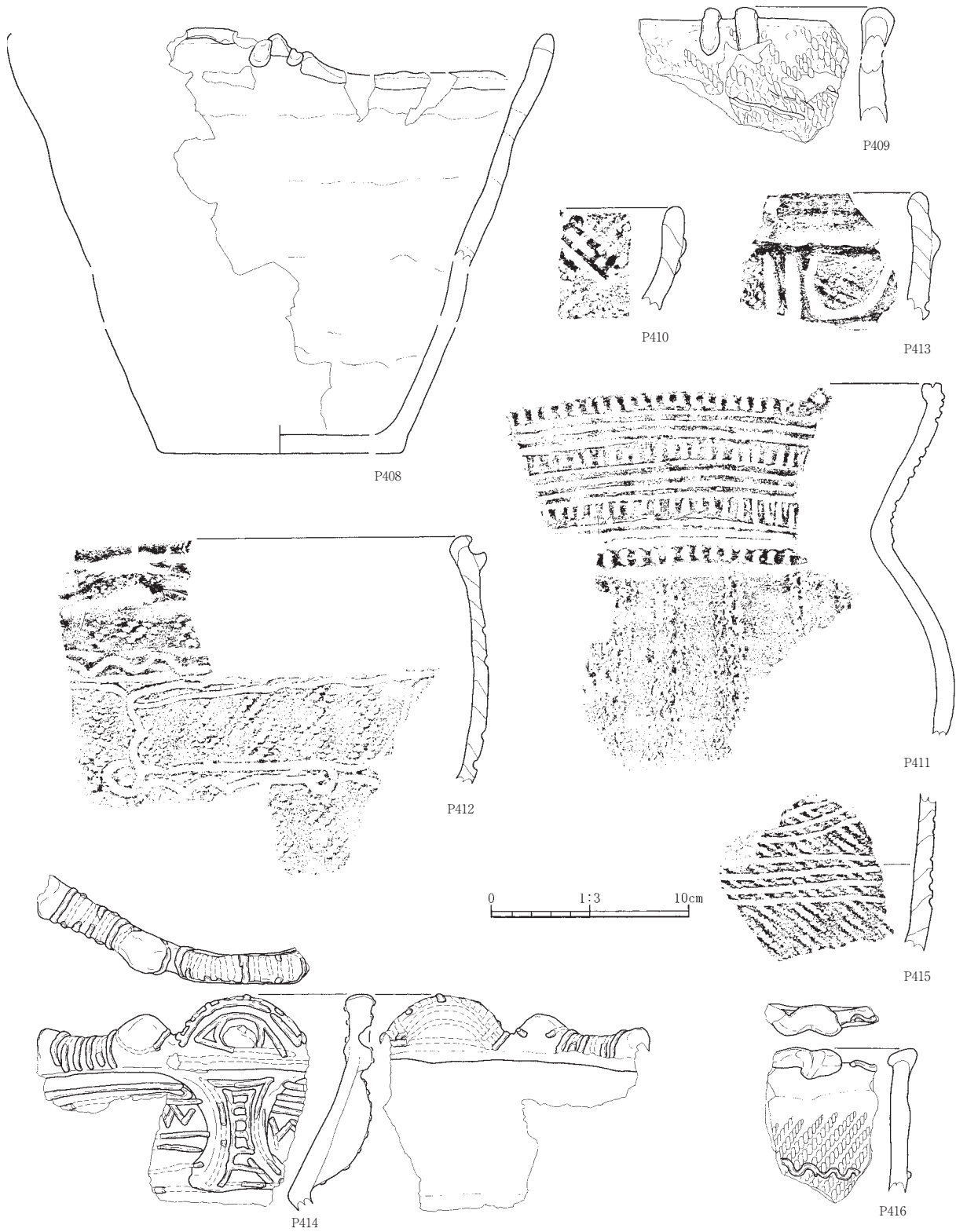
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写 真
P385	22号竪穴建物跡・埋土下位 p1、埋土一括 (1/15)	深鉢 (1/5 周未満)	LR+ 結節、RL+ 結節タテ	ナデ	外面スス、内面下コゲ		94	82
P386	22号竪穴建物跡・埋土下位 p1	球胴鉢・頭部	太く浅い沈線	ナデ			94	82
P387	22号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢・口縁部	竹管状工具による刺突	ナデ	外面スス付着		94	82
P388	22号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢・口縁部	口唇平ら/下から刺突	ナデ	外面スス付着		94	82
P389	22号竪穴建物跡・埋土一括	球胴鉢・突起	爪形文	ナデ			94	82
P390	22号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢・頭部	下から△刺突	ナデ			94	82
P391	8号竪穴建物跡・床面、24号竪穴建物跡・北西埋土下位	深鉢・下半	RLタテ?・底面光沢	ナデ	外面スス、二次焼成		94	83
P392	24号竪穴建物跡 pit10	深鉢・口縁部	LR 側面圧痕	ナデ			94	83
P393	24号竪穴建物跡南西北西・埋土下位	深鉢・口縁部	突起	ナデ			94	83
P394	24号竪穴建物跡南東・埋土下位	深鉢・頭部	粘土まくれ痕	ナデ			94	83
P395	25号竪穴建物跡・埋土上~中位	浅鉢 (4/5 周以下)	LR タテ→ナデ	ナデ	外面スス付着?		94	83
P396	25号竪穴建物跡・埋土上~中位	深鉢 (1/4 周未満)	LR ヲコ	ナデ	外上スス、下二次焼成、内下コゲ		94	83

第 94 図 縄文~弥生土器 (43)



掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写真
P397	25号竪穴建物跡・埋土上～中位	深鉢・口縁部	口唇押圧・貫通孔・浅く雑な沈線	ナデ			95	83
P398	25号竪穴建物跡・埋土上～中位	深鉢・口縁部	内面隆帯/高い隆帯上爪形文・雑な沈線	ナデ	内面コゲ付着		95	83
P399	25号竪穴建物跡・埋土一括	鉢(一部欠損)	2波状・RLタテ→浅い沈線・口縁、底部ナデ	ナデ	内面コゲ付着?		95	83
P400	25号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢・口縁部	突起・LR側面圧痕	ナデ			95	83
P401	25号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢・口縁部	RL、口縁ヨコ、胴タテ→ソーン状隆帯なでつけ	ナデ			95	83
P402	25号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢・胴部	RLタテ→隆帯なでつけ、浴うナデ	ナデ	外面スス・内外摩耗		95	83
P403	25号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢(1/5周未満)	突起・LRタテ→隆帯に沿う太い沈線(404、405と同一?)	ナデ	下の割れ口、粘土接合面剥離		95	83
P404	25号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢・口縁部	突起・LRタテ→隆帯に沿う太い沈線、下からの刺突	ナデ	403、405と同一個体?・外面スス		95	83
P405	25号竪穴建物跡・埋土一括	深鉢・口縁部	突起・LRタテ→隆帯に沿う太い沈線	ナデ	403、404と同一個体?・外面スス		95	83
P406	Ⅱ A21t・Ⅲ～Ⅳ層ほか	球胴鉢(3/4周以下)	4波状4突起・胴文様5単位・太く浅め沈線・RLヨコ	ナデ丁寧	外胴上スス、下二次焼成、内下コゲ	p73	95	84
P407	Ⅱ A20t・Ⅲ層下位～Ⅳ層、Ⅱ A21t・Ⅲ～Ⅳ層	球胴鉢(中一周)	RLヨコ (406と同一個体?・下の割れ口、粘土接合面剥離)	ナデ丁寧	外スス、二次焼成、内コゲ付着		95	84

第95図 縄文～弥生土器(44)



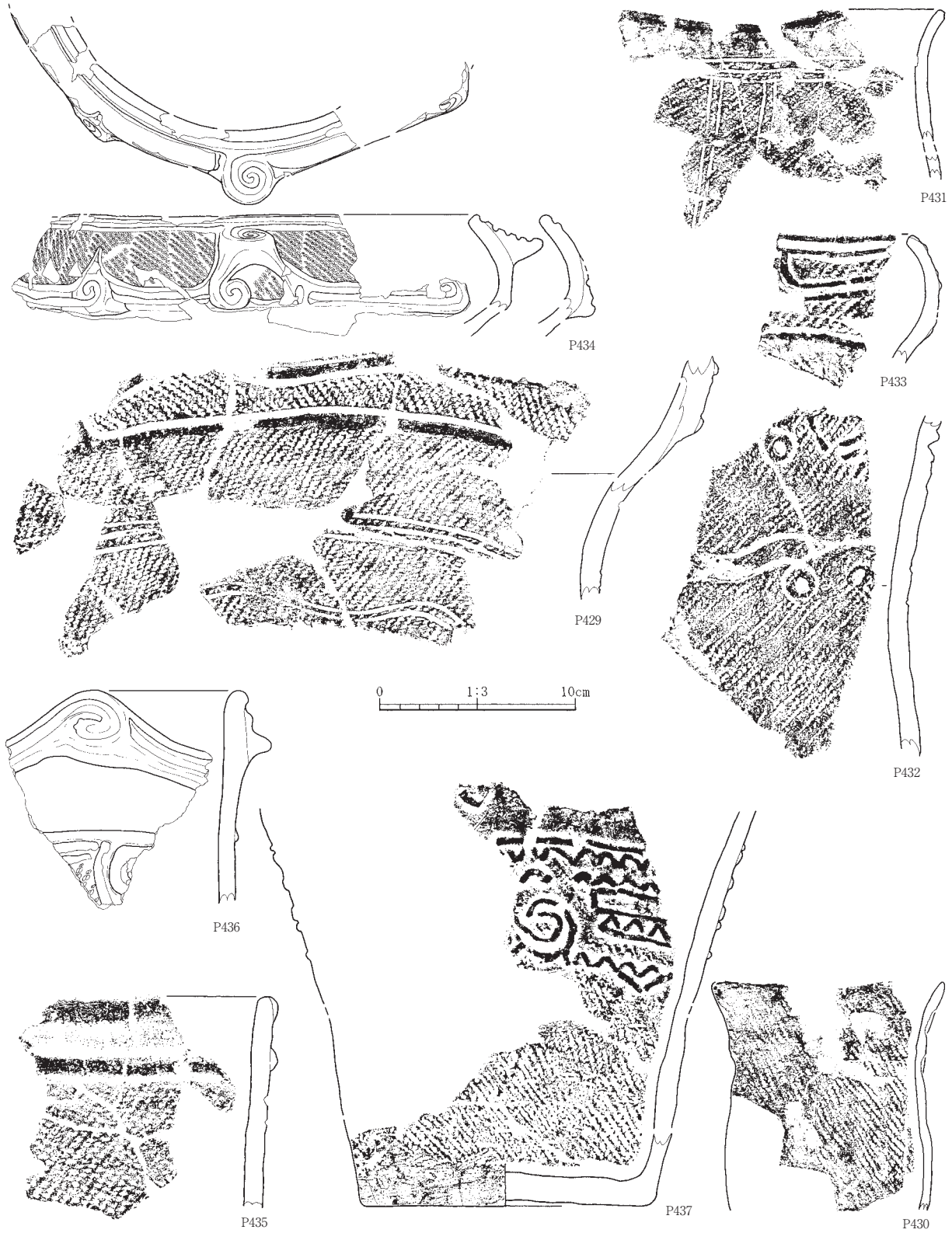
掲載 №	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部 / 胴部 / 底部 / 底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写真
P408	II A22t・皿層下位～IV層	鉢 (1/4 周以下)	口唇粘土紐貼付・輪積痕	ナデ			96	84
P409	II A22t・皿層下位～IV層	深鉢・口縁部	口唇またく隆帯・原体不明 (RL+ 結節ココ??)	ナデ	胎土織維含む		96	83
P410	II A22t・皿層下位～IV層	深鉢・口縁部	縄文?→ソーマン状貼付	ナデ	外面剥落		96	83
P411	II A22t・皿層下位～IV層	深鉢	内面隆帯 / 口唇沈線 / 横から刺突、上から刺突 / LR+ 結節タテ	ナデ	内面コゲ		96	84
P412	25号壜穴建物跡・埋土上～中位、埋土一括 (3/5)、 II A25r～s 西トレンチ	深鉢 (1/5 周未満)	高い隆帯→RLR タテ→太く浅い沈線	ナデ			96	84
P413	II A22t・皿層下位～IV層	深鉢・口縁部	RL ヨコ→隆帯に沿う太く浅い沈線	ナデ			96	83
P414	II A22t・皿層下位～IV層	球胴鉢・口縁部	ソーマン状貼付文	ミガキ?	外面スス付着		96	84
P415	II A22t・皿層下位～IV層	深鉢・胴部	LR タテ→浅い沈線	ナデ	外面下部スス付着		96	84
P416	II A22t・皿層下位～IV層	深鉢・口縁部	口唇貼付 / LR ヨコ→ソーマン状貼付	ナデ	外面スス付着		96	84

第 96 図 縄文～弥生土器 (45)



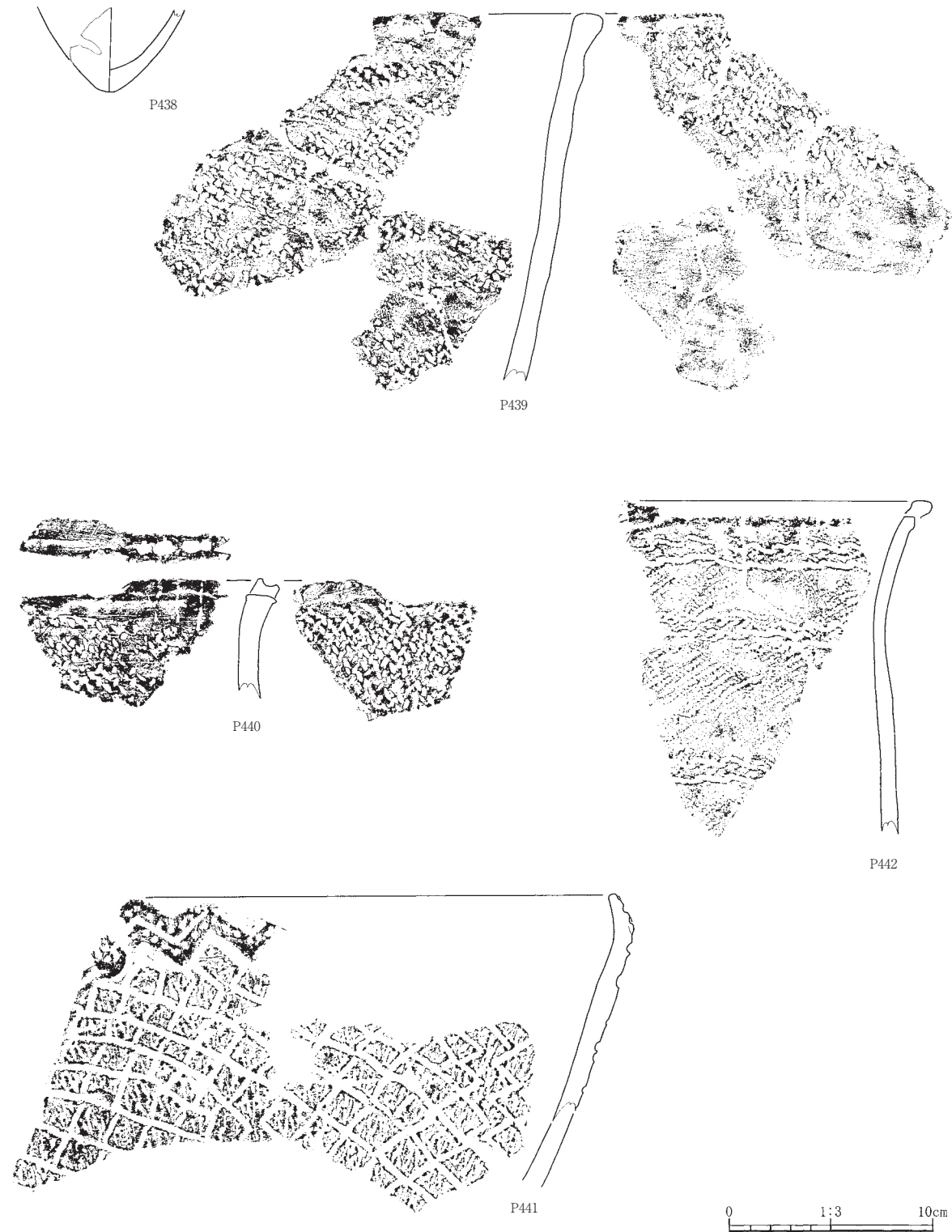
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図 写 真
P417	II A22t・Ⅲ層下位～Ⅳ層	深鉢・口縁部	結節ヨコ	ナデ	外面スス、内面コゲ		97 84
P418	II A22t・Ⅲ層下位～Ⅳ層	深鉢・口縁部	波状口縁・RLタテ?→隆帯に沿う浅い沈線	ナデ	内面コゲ付着		97 84
P419	II A22t・Ⅲ層下位～Ⅳ層	深鉢・口縁部	LRヨコ→細い隆帯などでつけ	ナデ	外面スス付着		97 84
P420	II A22t・Ⅲ層下位～Ⅳ層	深鉢・口縁部	口唇粘土粒貼付・ナデ	ナデ			97 84
P421	II A22t・Ⅲ層下位～Ⅳ層	鉢 (1/4 周未満)	LR (0段多条?) タテ→太く浅い沈線	ナデ			97 84
P422	II A22t・Ⅲ層下位～Ⅳ層	深鉢・口縁部	口唇押圧列 /LR+ 結節ヨコ	ナデ	外面スス、内面摩耗		97 84
P423	II A22t・Ⅲ層下位～Ⅳ層	深鉢・胴部	LR タテ→交互刺突文、太く浅い沈線	ナデ			97 84
P424	11号竪穴建物跡土器 No.1床面、II A18w・Ⅲ層下位、Ⅳ層上位	深鉢 (2/3 周未満)	4波状・LR タテ→口縁ナデ (下の割れ口、粘土接合面剥離)	ナデ	外上スス、下二次焼成、内下ただれ		97 85
P425	8号竪穴建物跡・埋土下位床面、17号竪穴建物跡北西・埋土下位	鉢 (3/4 周未満)	口唇隆帯・L?、口縁ヨコ、胴部タテ	ナデ	外面スス付着		97 84
P426	II A12y・Ⅲ層下位～Ⅳ層	深鉢・口縁部	口縁内面隆帯・LRヨコ→太め深め沈線・粘土まくれ痕	ナデ	外面黒斑?		97 84
P427	II B13a・Ⅲ層下位～Ⅳ層	深鉢・頸部	LRヨコ→ソームン状貼付	ナデ			97 84
P428	II A13x・Ⅲ層下位～Ⅳ層	深鉢・口縁部	LRLヨコ・ミガキ?	ミガキ?			97 84

第 97 図 縄文～弥生土器 (46)



掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写 真
P429	II A13y・Ⅲ層下位	深鉢 (1/4 周未満)	RL、口縁ヨコ、胴タテ→浅い沈線(下割口粘土接合面剥離)	ミガキ?	外スス、二次焼成、内下コゲ		98	85
P430	II A13z・Ⅲ層下位~Ⅳ層	鉢(頭一周)	波状口縁?・LR タテ	ナデ			98	85
P431	II A13z・Ⅲ層下位	深鉢 (1/4 周未満)	4波状?・RL タテ→細く浅い沈線	ナデ			98	85
P432	II A13z・Ⅲ層下位	深鉢・胴部	LRL ヨコ→ソーマン状貼付、太い沈線、刺突	ナデ	外黒斑?・外上スス、内下コゲ		98	85
P433	II A13z・Ⅲ層下位~Ⅳ層	深鉢・口縁部	LR、口縁ヨコ、胴タテ→隆帯なでつけ	ナデ	内面コゲ?		98	85
P434	II A13z・Ⅲ層下位~Ⅳ層	深鉢 (1/4 周以下)	LRL タテ→太く深い沈線→ミガキ	ナデ?	内面コゲ付着		98	85
P435	II A13z・Ⅲ層下位~Ⅳ層	深鉢・口縁部	RLR タテ	ナデ	外面摩耗、内面剥落		98	85
P436	II A13z・Ⅲ層下位~Ⅳ層	深鉢・口縁部	RLR タテ・ミガキ	摩耗			98	85
P437	II A14y・Ⅲ層下位~Ⅳ層	深鉢(底略一周)	RL タテ→低い隆帯、底部~底面ナデ	ナデ	外上スス、下二次焼成、内底上コゲ		98	86

第 98 図 縄文~弥生土器 (47)



掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部 / 胴部 / 底部 / 底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	写 真 図
P438	II A14y・皿層下位	深鉢・底(略一周)	ナデ	ナデ丁寧		99	85
P439	II A14y・皿層下位	深鉢(1/5周未満)	口唇平ら / 内外、丸組紐?	ナデ	胎土繊維・外面スス	99	86
P440	II A14y・皿層下位	深鉢・口縁部	口唇平ら、突起上押圧 / 内外、丸組紐?	(縄回転)	胎土繊維	99	85
P441	II A14y・皿層下位、皿層下位~IV層(2/3)	深鉢(1/4周未満)	口唇突起上竹管状工具による刺突・縄文? →格子目沈線	ナデ	外面全面スス付着	99	86
P442	II A14y・皿層下位	深鉢	口唇蛇行隆帯 / LR+ 結節ヨコ	ナデ	内面摩耗	99	86

第99図 縄文~弥生土器(48)



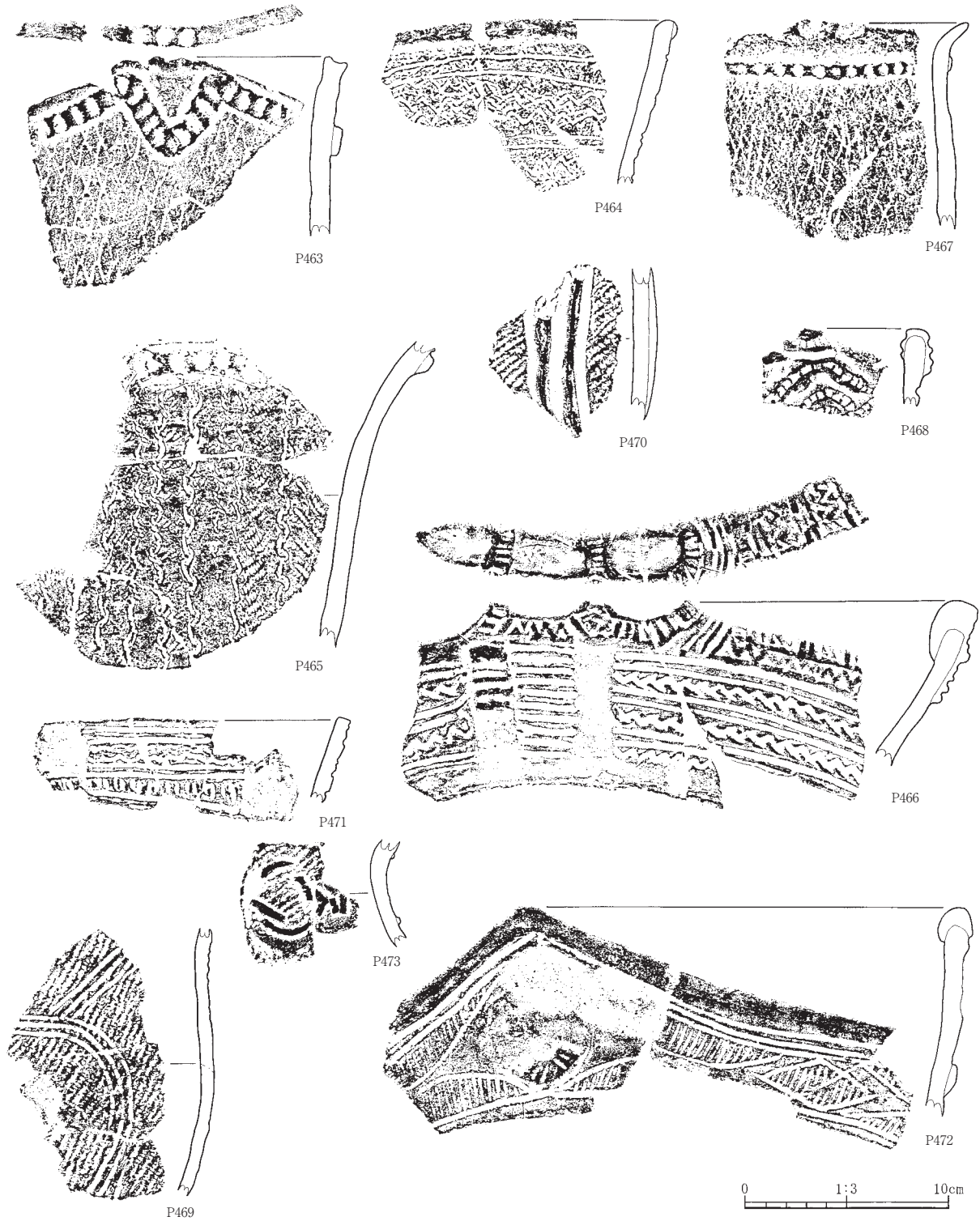
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写真
P443	II A14w・IV層以上、II A14x・III層上位	深鉢・底(2/3周)	LRL タテ→低い隆帯に沿う浅い沈線/底面ナデに縄の圧痕?	ナデ	上の割れ口、粘土接合面剥離		100	86
P444	II A14z・III層下位	深鉢(1/3周未満)	口唇蛇行か突起・LR+ 結節 R タテ	ナデ			100	86
P445	II A14z・III層下位~IV層	球胴鉢?・頸部	細い沈線	ナデ	上の割れ口、粘土接合面剥離		100	86
P446	II A15y・III層下位	深鉢・口縁部	貼付	ナデ			100	86
P447	II A16x・III層下位	深鉢・口縁部	口縁内外押圧で口唇蛇行・単軸絡5 (R?) タテ	ナデ	外面スス附着		100	86
P448	II A16w(5号竪穴建物跡下)・III層下位	深鉢・胴部	LR ヨコ→貼付	ナデ	外スス、内全面コゲ		100	86
P449	II A16w・III層下位	深鉢・口縁部	口唇沈線/結節ヨコ	ナデ	外全面スス		100	86
P450	II A16y・III層下位	深鉢・胴部	貝殻腹縁文	ナデ			100	86
P451	II A17v・IV層上位	浅鉢(1/6周未満)	RRL ヨコ→高い隆帯に層太く浅い沈線	ナデ?	外面黒斑		100	86
P452	II A18u・IV層上位	深鉢(1/5周未満)	LR タテ→隆帯に沿うナデ	ミガキ?	外黒斑?・外スス		100	86
P453	II A18w・IV層上位	深鉢・口縁部	波状口縁・口唇沈線/LR タテ→太く浅い沈線	ナデ滑らか	外面スス附着		100	86

第 100 図 縄文～弥生土器 (49)



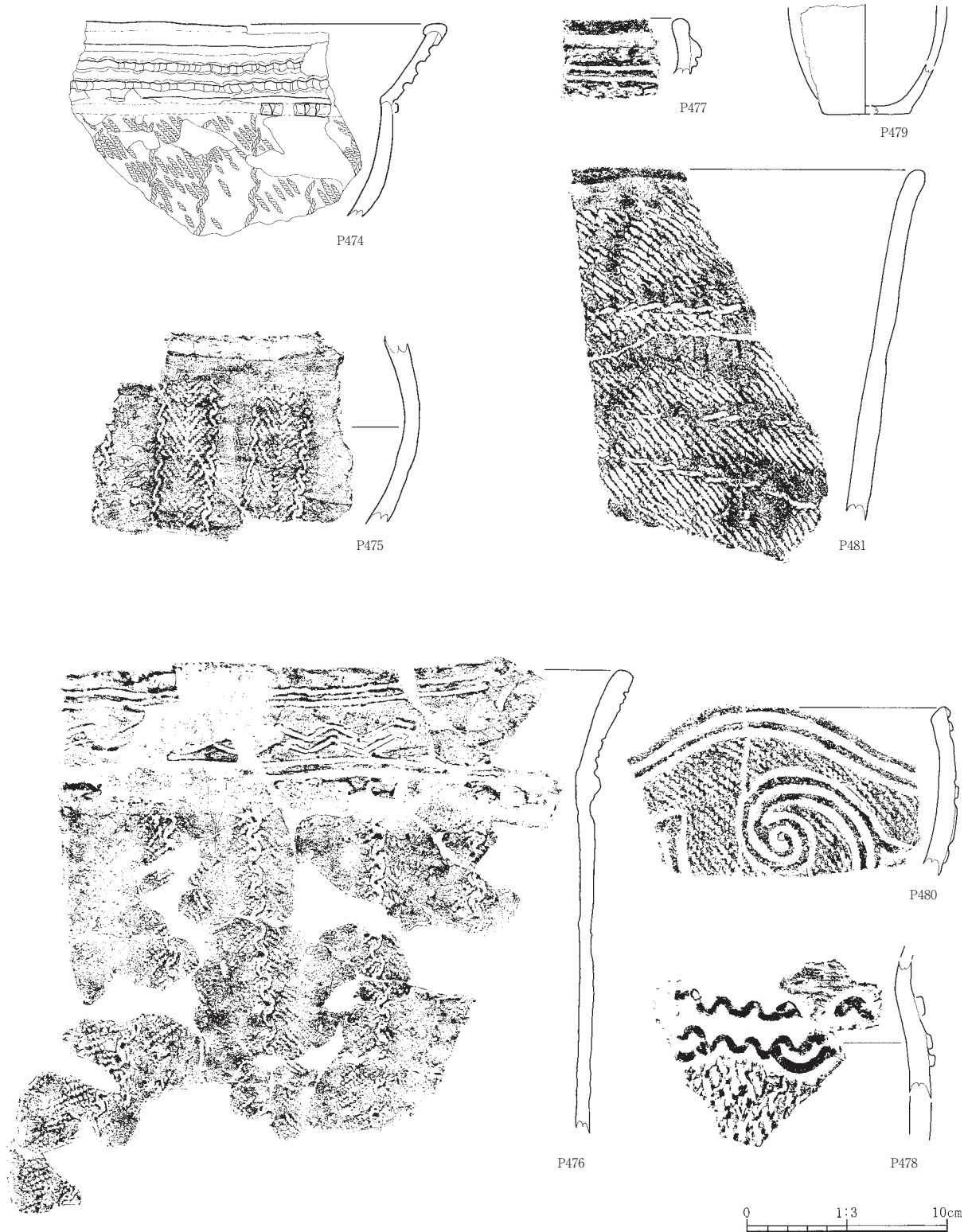
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部 / 胴部 / 底部 / 底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写真
P454	II A19t・II層下位～?層、II A19u・III層下位～IV層	深鉢 (1/5 周未満)	付加条?? (最終段右撻ココ)	ナデ			101	87
P455	II A19t・II層下位～	球胴鉢・口縁部	突起・半截竹管状工具による沈線、押し引き	ナデ			101	87
P456	II A19t・III層下位～3層?	深鉢・口縁部	口唇沈線、突起/RL+ 結節タテ	ナデ	外面スス付着		101	87
P457	II A19t・III層下位～IV層	深鉢 (1/5 周未満)	貫通突起・深め沈線	ナデ丁寧	外スス、内コゲ多		101	87
P458	II A19t・III層下位～IV層	深鉢・口縁部	突起・浅い沈線	ナデ			101	87
P459	II A19t・III層下位～3層	深鉢・口縁部	突起・RL+ 結節タテ	ナデ滑らか	外面上スス付着		101	87
P460	II A19t・III層下位～IV層	深鉢 (1/5 周未満)	半截竹管状工具による刺突・太く深め沈線・単軸絡1 (R) タテ	ナデ	外黒斑?、剥落・下割口粘土接合面剥離	p73	101	87
P461	II A19t・III層下位～IV層	球胴鉢?・把手?	透かし彫り?	ナデ	下の割れ口、粘土接合面剥離		101	87
P462	II A19t・III層下位～IV層	深鉢・口縁部	内面隆帯 / 口唇突起深い刻目	ナデ			101	87

第 101 図 縄文～弥生土器 (50)



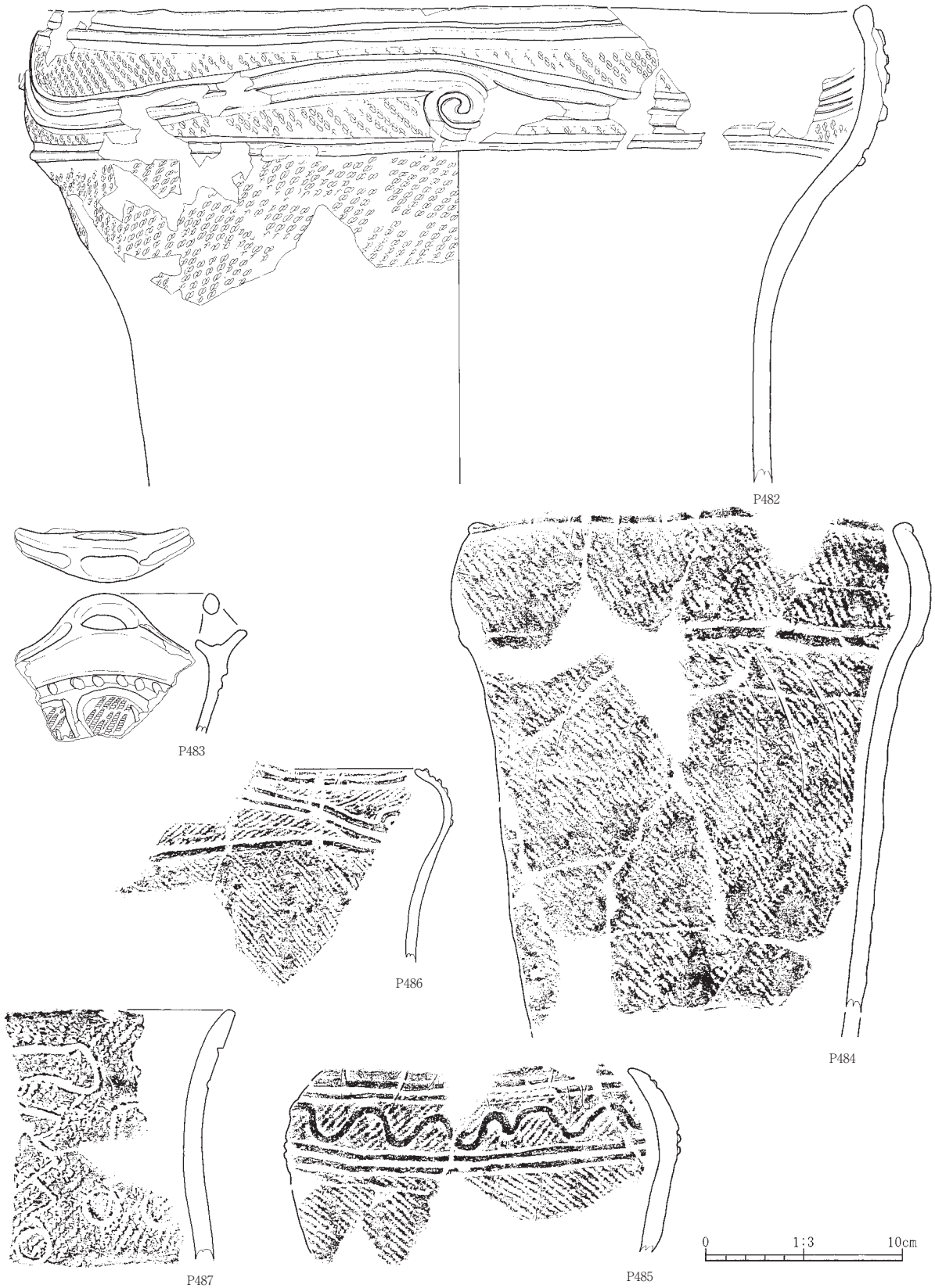
掲載 No	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部 / 胴部 / 底部 / 底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写 真
P463	II A19t・Ⅲ層下位～3層?	深鉢・口縁部	波状口縁頂部刻目・単軸絡5 (R) タテ→隆帯貼付押圧列	ナデ	外面スス附着		102	87
P464	II A19t・Ⅲ層下位～3層	深鉢・口縁部	最上部隆帯・細く浅い雑な沈線	ナデ			102	87
P465	II A19t・Ⅲ層下位～3層?	深鉢・胴部	隆帯上刻目・LR+ 結節、RL+ 結節タテ	ナデ	外下部スス附着		102	87
P466	II A19t・Ⅲ層下位 (3/5)、II A19u・Ⅲ層下～IV層	深鉢 (1/5 周以下)	口唇ソーマン状貼付・隆帯剥落	ナデ	外スス・下の割れ口、粘土接合面剥離		102	87
P467	II A19t・Ⅲ層下位～3層?	深鉢・口縁部	単軸絡5 (L) タテ→隆帯貼付→押圧列	ナデ	外上スス、下二次焼成、内コゲ多		102	87
P468	II A19t・IV層上位	深鉢・口縁部	突起一周沈線巡る・半裁竹管状工具による押し引き沈線	ナデ			102	87
P469	II A19t・IV層上位	深鉢・胴部	RL タテ→浅い沈線	ナデ	外上スス、内面コゲ		102	87
P470	II A19t・IV層上位	深鉢・胴部	RL タテ→隆帯に沿う太く浅い沈線	ナデ			102	87
P471	II A19u・IV層上位	深鉢・口縁部	口唇平ら / 粘土まくれ痕	ナデ	外面スス附着		102	87
P472	II A19u・Ⅲ層下位～IV層 (3/5)、IV層上位	球胴鉢 (1/4 周以下)	内面隆帯 / 波状口縁	ナデ	外面剥落		102	87
P473	II A19u・IV層上位	深鉢・胴部	LR ヨコソーマン状貼付	ナデ	外スス、内コゲ		102	87

第 102 図 縄文～弥生土器 (51)



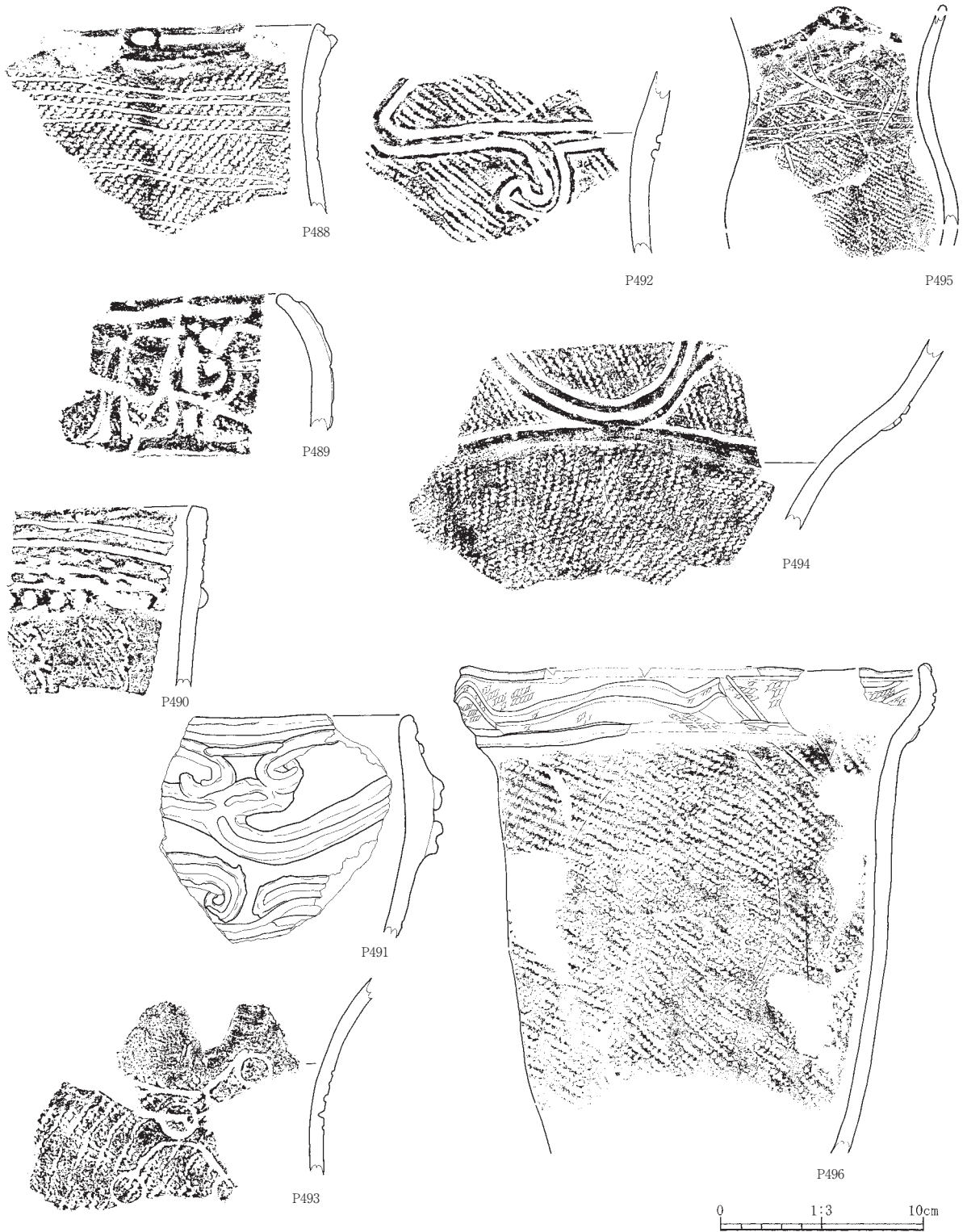
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	写 真 図
P474	II A19u・Ⅲ層下位～Ⅳ層	深鉢・口縁部	半藁竹管状工具による押し引き・LR+結節Rタテ	ナデ	外面スス付着・内面黒斑		103 87
P475	II A19u・Ⅲ層下～Ⅳ層	球胴鉢・胴部	結束第1種 (LR、RL) + 結節タテ・隆帯剥落	ナデ	外面スス・内面摩耗		103 88
P476	II A19u・Ⅲ層下位～Ⅳ層	深鉢 (1/5周未満)	半藁竹管状工具による沈線・結束第2 (LR、RL) タテ?	ナデ	内口黒斑・外面剥落		103 88
P477	II A19u・Ⅲ層下位	深鉢・口縁部		ナデ	外スス、内コゲ		103 88
P478	II A20t・Ⅲ層黒褐色土	深鉢・胴部	縄文?→貼付 (無調整)	ナデ	外面スス、内面コゲ		103 88
P479	II A20t・Ⅲ層	鉢 (1/3周以下)	胴～底面比較的丁寧なナデ				103 88
P480	II A20t・Ⅲ層	深鉢・口縁部	液状口縁・RL タテ→隆帯なでつけ	ナデ	下の割れ口、粘土接合面剥離		103 88
P481	II A20t・Ⅲ層	深鉢・口～胴部	RL+結節ヨコ	ナデ	胎土繊維・外上スス、内下コゲ		103 88

第 103 図 縄文～弥生土器 (52)



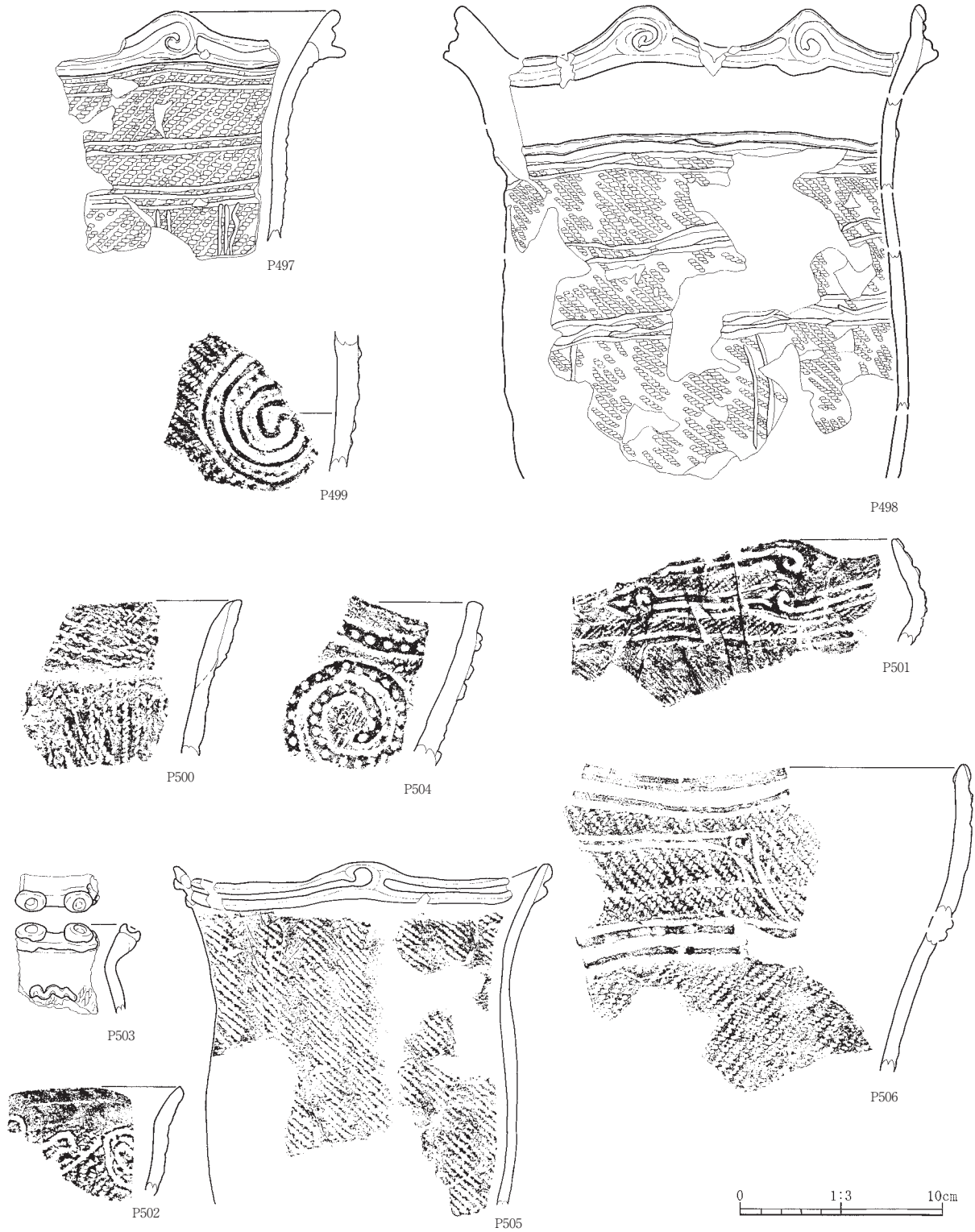
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写真
P482	II A20t・III層、中央セクション・灰黄褐色土、沢跡埋土	深鉢(2/3 周未満)	RLR 口縁ヨコ、胴タテ→高い隆帯に沿う沈線	ナデ	外面黒斑?		104	88
P483	II A20t・III層	深鉢・口縁部	LR ヨコ→低め隆帯に沿う浅い沈線	ミガキ?			104	88
P484	II A20t・III層下位→IV層、中央セクション・沢跡埋土	深鉢(1/3 周以下)	低め隆帯・LR、口縁ナメ、胴タテ	ナデ	外口縁スス、下二次焼成、内全面コゲ		104	89
P485	II A20t・III層下位→IV層、中央セクション・灰黄褐色土	深鉢(1/2 周以下)	LR、口縁ヨコ、胴タテ→低い隆帯	ナデ	外黒斑?・外スス、二次焼成、内コゲ		104	89
P486	II A20t・III層下位→IV層	深鉢(1/5 周未満)	LR、口縁ヨコ、胴タテ→隆帯に沿うナデ	ナデ	外面スス付着		104	89
P487	II A20t・III層下位→IV層	深鉢・口～胴部	LR ヨコ→断面三角形深め沈線(下の割れ口、粘土接合面剥離)	ナデ	外面スス、内面下コゲ		104	89

第 104 図 縄文～弥生土器 (53)



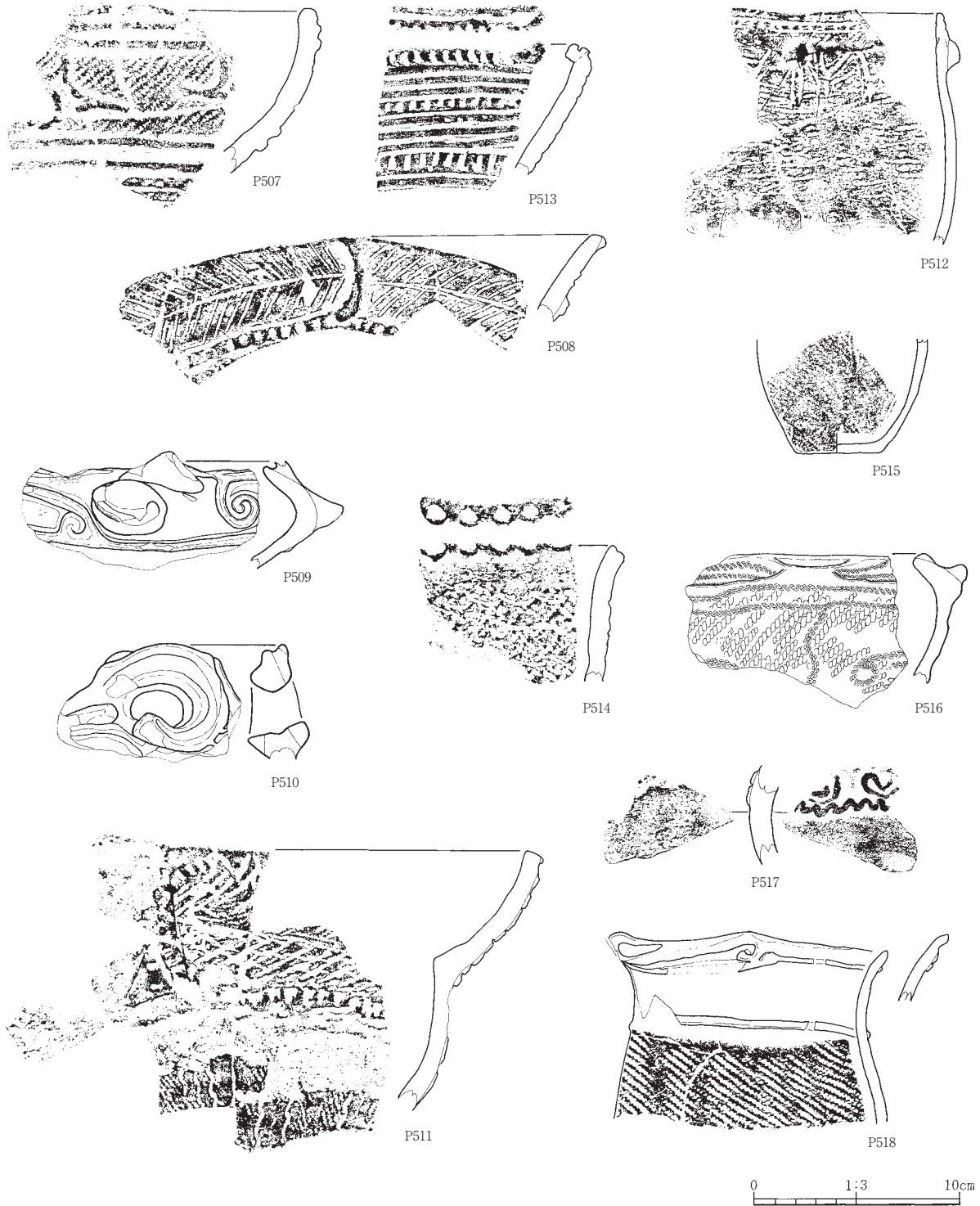
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写真
P488	II A20t・Ⅲ層下位～Ⅳ層	深鉢・口縁部	口唇深い沈線、刺突/LRLヨコ→浅い沈線	ナデ滑らか	外面全面スス付着		105	89
P489	II A20t・Ⅲ層下位～Ⅳ層	深鉢・口縁部	RLヨコ→隆帯に沿うナデ、なでつけ	ナデ	外面摩耗		105	89
P490	II A20t・Ⅲ層下位～Ⅳ層	深鉢・口縁部	口唇平ら/ヨコからの刺突/LR+ 結節タテ	ナデ			105	89
P491	II A20t・Ⅲ層下位～Ⅳ層	鉢?・口縁部	貼付痕残る	ミガキ?			105	89
P492	II A20t・Ⅲ層下位～Ⅳ層	深鉢・胴部	LRタテ→太く深い沈線・粘土まぐれ痕多	ナデ滑らか	外黒斑?		105	89
P493	II A20t・Ⅲ層下位～Ⅳ層、中央セクション沢跡・埋土	深鉢・胴部	LRヨコ→断面三角形深め沈線	ナデ			105	89
P494	II A20・Ⅲ層下位～Ⅳ層	深鉢(1/5 周未満)	RL、口縁ヨコ、胴タテ→隆帯なでつけ、沿う沈線	ナデ	外スス・上の割口、粘土接合面剥離		105	89
P495	II A20t・Ⅲ層下位～Ⅳ層、Ⅳ層	鉢(1/2 周以下)	波状口縁・口縁突起貼付?・LRタテ→細く浅い沈線	ナデ			105	89
P496	II A20t・Ⅲ層下位～Ⅳ層、Ⅳ層	深鉢(胴略一周)	LR、口縁ヨコ、頸～胴部タテ→深い沈線、隆帯なでつけ	ナデ	外上スス、剥落、下二次焼成、内コゲ		105	89

第 105 図 縄文～弥生土器 (54)



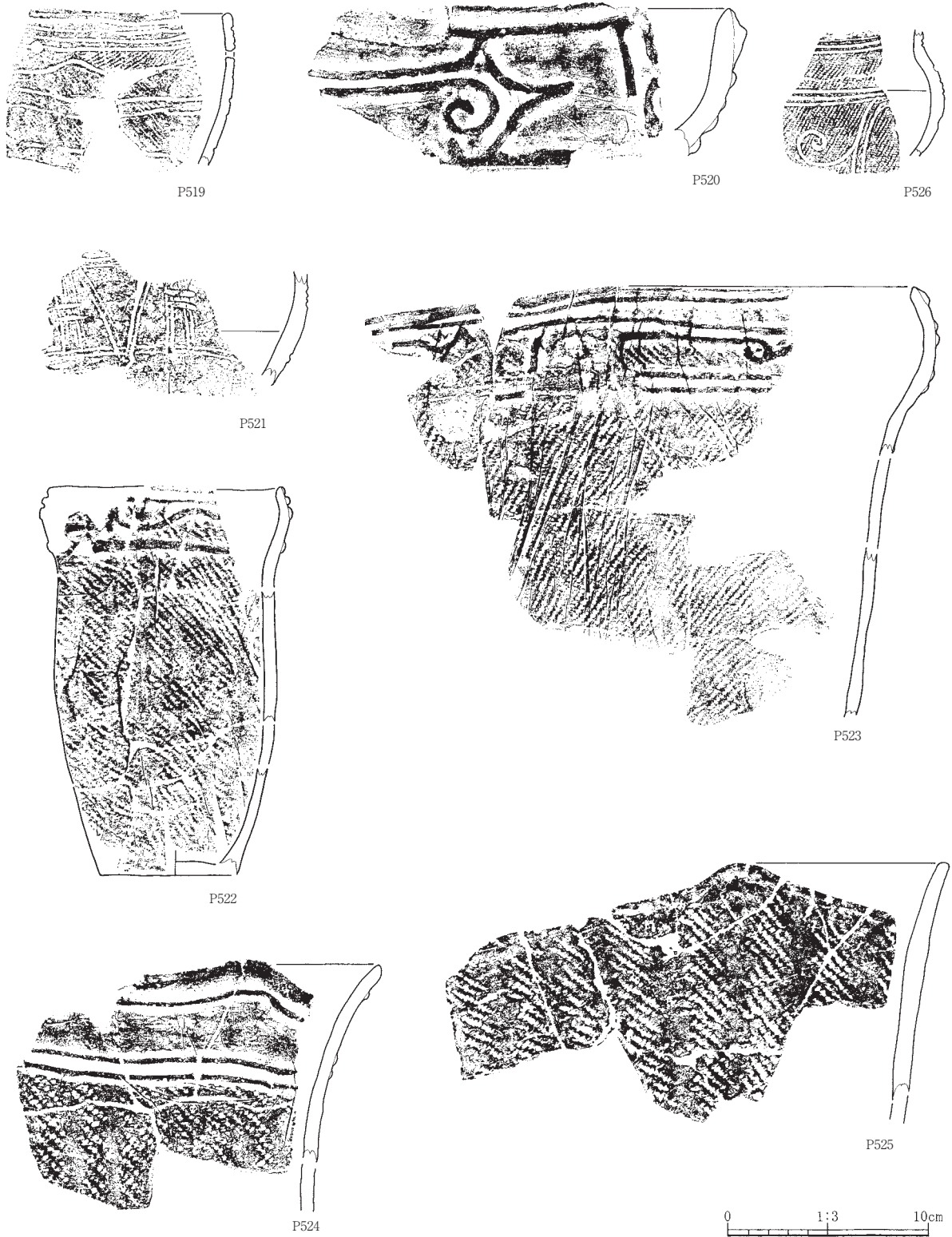
掲載 No	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写 真
P497	II A20t・IV層	深鉢 (1/5 周未満)	RL タテ? → 細く浅い沈線 (下の割れ口、粘土接合面剥離)	摩耗	外スス、内下部コゲ		106	89
P498	II A20u・III層	深鉢 (1/2 周以下)	口縁突起単位不明・低い隆帯・LR タテ → 細めで浅い沈線	ナデ			106	90
P499	II A20u・III層	深鉢・胴部	LR タテ → ソーメン状貼付なでつけ	ナデ	外面スス付着?		106	89
P500	II A20u・III層	深鉢・口縁部	折り返し口縁・単軸線1 (L)、口縁ナナメ、胴タテ~ナナメ	ナデ	外面全面スス付着・内下コゲ?		106	89
P501	II A20u・III層	深鉢 (1/4 周以下)	突起・LR、口縁ヨコ、胴タテ → 隆帯なでつけ、沿う浅い沈線	ナデ	外面スス、内面コゲ		106	89
P502	II A20u・III層下位	深鉢・口縁部	RL ナナメ、ヨコ → 深め沈線 → ナデ	ナデ	外スス、内面全面コゲ		106	89
P503	II A20u・III層下位	深鉢・口縁部	口唇貼付・LR ヨコ → ソーメン状貼付	ナデ	外面スス、内面コゲ全面付着		106	89
P504	II A20u・III層下位~IV層	深鉢・口縁部	波状口縁・RL タテ → 貼付上刺突	ナデ	外スス、内面全面コゲ特に多い		106	89
P505	II A20u・IV層上位	深鉢 (4/5 周以下)	4単位・太く深い沈線・LR タテ	ナデ			106	90
P506	II A20u・IV層上位	深鉢 (1/5 周未満)	波状口縁・RL、口縁ヨコ、胴タテ → 隆帯なでつけ、浅い沈線	ナデ			106	90

第 106 図 縄文~弥生土器 (55)



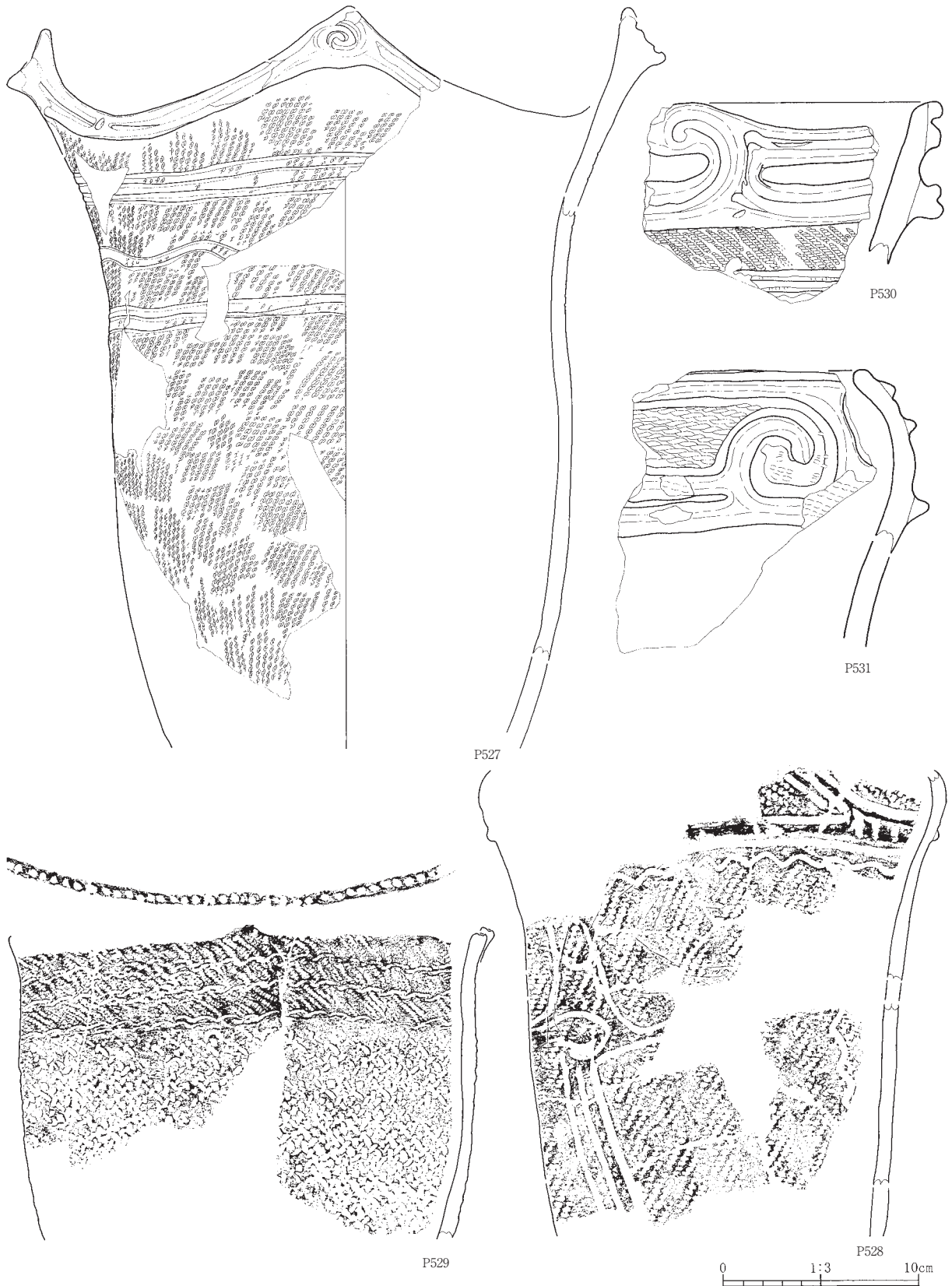
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写 真
P507	II A20u・IV層上位	深鉢・口縁部	LR ヨコ→隆帯なでつけ	ナデ	外スス、内外摩耗		107	89
P508	II A20u・Ⅲ層下位、Ⅲ層下位~Ⅳ層、Ⅳ層上位 (1/2)	深鉢 (1/4 周以下)	細い雑な沈線	ナデ			107	90
P509	II A20u・Ⅳ層上位	浅鉢?・口縁部	LR ナナメ	ナデ			107	89
P510	II A20v・Ⅲ層	深鉢・口縁突起		ナデ			107	90
P511	II A20v・Ⅲ層下位~Ⅳ層	球胴鉢 (1/5 周以下)	雑な沈線・下からの刺突・LR+ 結節タテ	ナデ丁寧	外面剥落		107	90
P512	II A20v・Ⅲ層下位~Ⅳ層	鉢 (1/4 周未満)	LR ナナメ→半藁竹管状工具による文様	ナデ	外スス、二次焼成、内全面コゲ		107	90
P513	II A20v・Ⅲ層下位~Ⅳ層	深鉢・口縁部	内面隆帯 / 口唇突起、沈線 / 浅い沈線、深め刺突	ナデ	内面コゲ		107	90
P514	II A20v・Ⅲ層下位~Ⅳ層	深鉢・口縁部	口唇押圧 / LR+ 結節ヨコ	ナデ	外スス、内下コゲ		107	90
P515	II A20v・Ⅳ層上位	鉢 (底一周)	LR タテ→細く浅い沈線 / 底面雑なナデ	ナデ	外二次焼成、内上コゲ		107	90
P516	II A20v・Ⅳ層上位	浅鉢・口縁部	LR ヨコ→側面圧痕	ナデ	摩耗 外面スス付着		107	90
P517	II A20v・Ⅲ層下位~Ⅳ層	深鉢・口縁部	内面ソーマン状貼付	ナデ	外面スス、内面コゲ		107	90
P518	II A20v・Ⅲ層下位、Ⅳ層下位、6号竪穴建物跡・埋土上位 (1/15)	鉢 (略一周)	突起?・LR タテ→隆帯なでつけ	ナデ	外面スス付着		107	90

第 107 図 縄文~弥生土器 (56)



掲載 No	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図 号	写 真
P519	II A20w・III層下位	鉢? (1/5 周未満)	LR イロイロ→浅い沈線	ナデ	外面スス・補修孔		108	90
P520	II A20w・IV層下位	深鉢 (1/5 周未満)	ナデ	ナデ滑らか			108	90
P521	II A20w・IV層上位	鉢?・胴部	半裁竹管状工具による浅い沈線	ナデ	外スス?、内コゲ多		108	90
P522	II A20w・IV層	鉢 (胴尖略一周)	LR タテ→低め隆帯、底部~底面ナデ	ナデ	外面スス、内面上部コゲ付着		108	91
P523	II A20w・IV層 (6号壜穴建物跡下)	深鉢 (1/4 周以下)	RL、口縁ヨコ、胴タテ→隆帯なでつけ	ナデ	外スス、二次焼成、内コゲ		108	91
P524	II A20w・IV層 (6号壜穴建物跡下)	深鉢 (1/4 周以下)	液状口縁・LR タテ	ナデ			108	91
P525	II A20w・IV層 (6号壜穴建物跡下)	深鉢 (1/4 周以下)	突起・LR タテ→ナデ	ナデ	外面スス付着		108	91
P526	II A20・IV層上位	鉢・胴部	RL タテ→細く浅い沈線	ナデ	外スス、内面全面コゲ		108	91

第 108 図 縄文~弥生土器 (57)



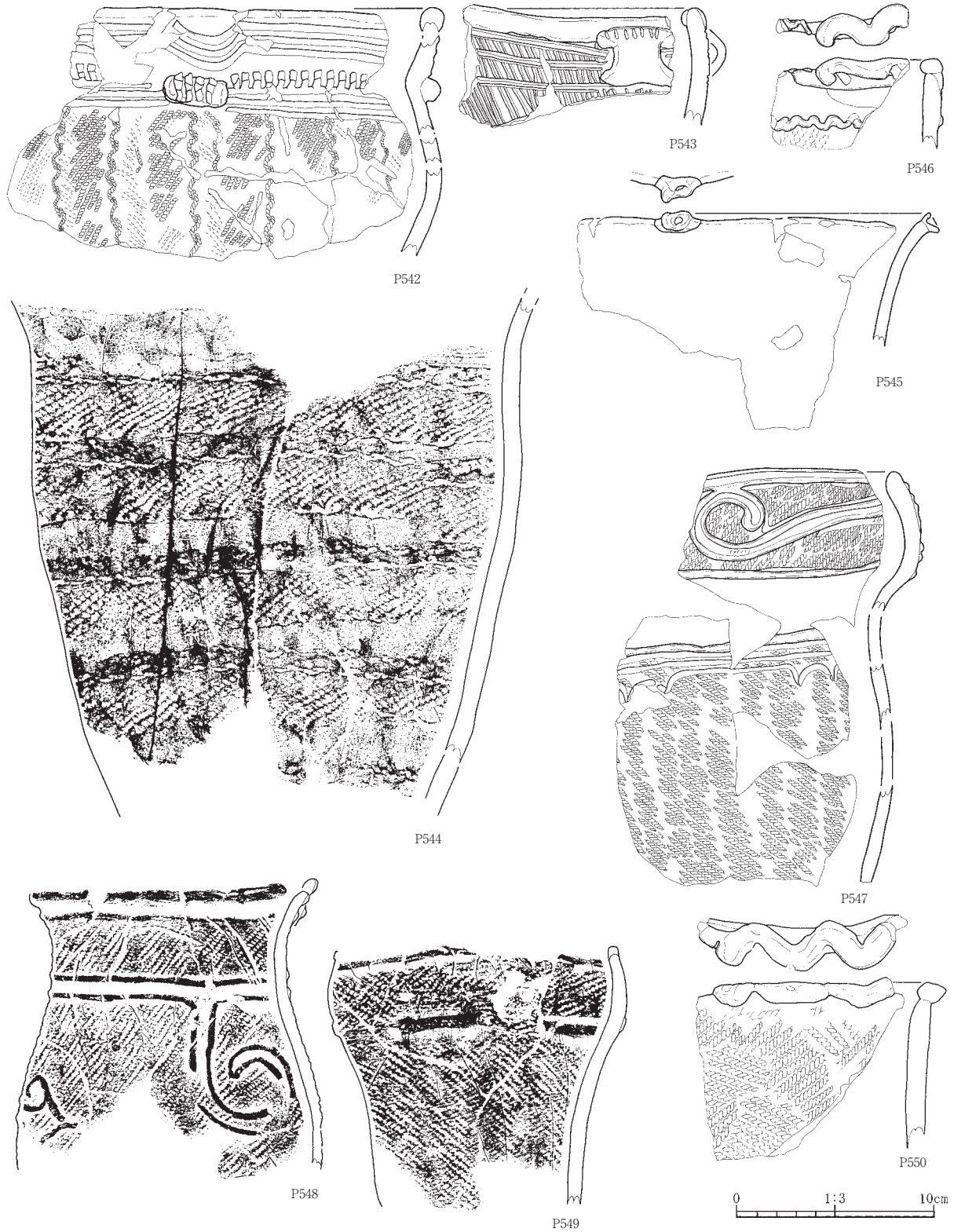
掲載 No	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	写 真
P527	II A20t・Ⅲ層下位～Ⅳ層、II A21t・Ⅱ～Ⅲ層下位	深鉢 (1/2 周以下)	4波状・RL タテ→浅い沈線	ナデ丁寧	外スス、二次焼成、内下コゲ	109	91
P528	II A21t・Ⅱ～Ⅲ層下位	深鉢 (3/4 周以下)	RL、口縁ヨコ、胴タテ→隆帯に沿うナデ、浅い沈線	ナデ	外上スス、下二次焼成、内コゲ	109	92
P529	II A21t・Ⅲ層、Ⅱ～Ⅲ層下位	深鉢 (1/3 周未満)	4突起・口唇竹管状刺突・口頭部 RL+ 結節 Lヨコ→胴丸組紐?	ナデ	胎土繊維混入・外面スス付着	109	92
P530	II A21t・Ⅲ層黒褐色土	深鉢・口縁部	LR タテ・ミガキ?	ミガキ	外面スス付着	109	91
P531	II A21t・Ⅲ層黒褐色土	深鉢・口縁部	LR ナナメ? (単軸絡1 (R)?) → 太く高い隆帯→隆帯に沿うナデ	ミガキ		109	91

第 109 図 縄文～弥生土器 (58)



掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写 真
P532	II a21t・III層黒褐色土	深鉢(1/4周未満)	内面蛇行隆帯剥落/口唇突起貼付	ナデ	外上二次焼成、下ス、内下全面コゲ		110	91
P533	II A21t・III層黒褐色土	深鉢・口縁部突起	LR ナナム	ミガキ?			110	91
P534	II A21t・III層下位	深鉢・口縁部		ミガキ?			110	91
P535	II A21t・III~IV層	深鉢・口縁部	貼付上刺突列	ナデ	外面スス付着		110	91
P536	II A21t・III~IV層	深鉢・口縁部	半截竹管状工具による刺突(下の割口、粘土接合面剥離)	ナデ? 丁寧	外下スス、内面コゲ多		110	91
P537	II A21t・III~IV層	鉢(3/4周以下)	LR 側面圧痕・LR タテ、ナナム→底部~底面ナデ	ナデ滑らか	外スス、二次焼成、内下コゲ		110	92
P538	II A21t・II~III層下位、III~IV層	深鉢(1/3周以下)	口唇円形突起・高め隆帯(下部繊維状の圧痕)	ナデ	外上スス、下二次焼成、内コゲ全面		110	92
P539	II A21t・III~IV層	深鉢(1/4周未満)	LR タテ→低い隆帯に沿う浅い沈線・ミガキ?	ナデ			110	92
P540	II A21t・IV層上位	浅鉢(1/5周未満)	単軸給1(R) ヨコ→高い隆帯に沿う浅い沈線・ミガキ	ミガキ			110	91
P541	II A21t・IV層上位	壺?・口縁部	橋状把手(摩耗)	ただれ			110	92

第 110 図 縄文~弥生土器 (59)



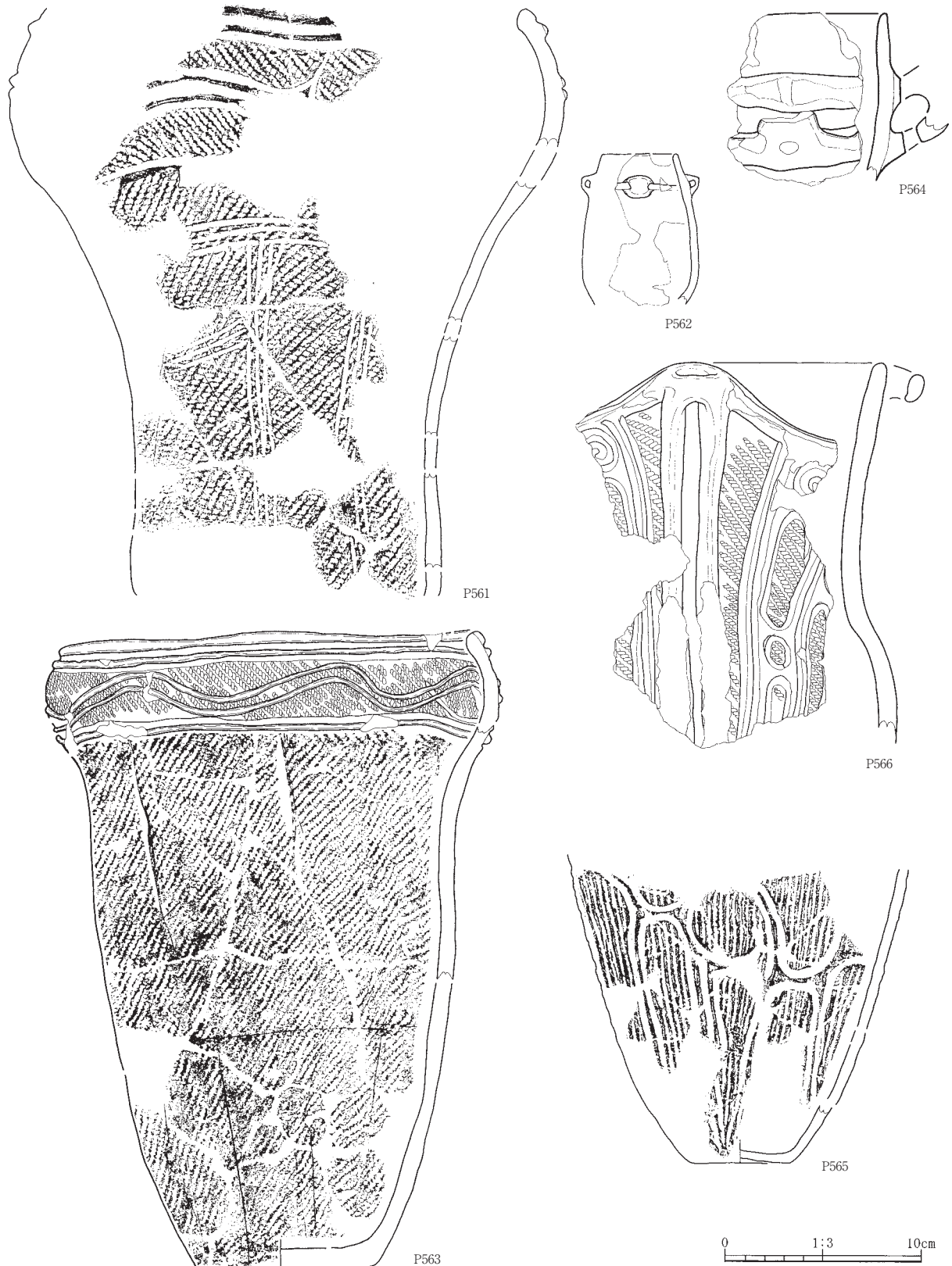
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写真
P542	II A21u・Ⅲ層下位、Ⅲ～Ⅳ層	球胴鉢(1/4 周未満)	RL+ 結節タテ→太く浅い沈線	ナデ	外スス、内コゲ付着		111	92
P543	II A21v・Ⅳ層上位	口縁部	口内面隆帯貼付・半裁竹管状工具による沈線	ミガキ?			111	93
P544	II A20v・Ⅱ層(6号型穴建物跡下)、II A22t・3層、沢跡埋土	深鉢(1/2 周未満)	LR+ 結節ヨコ→口縁ナデ(上下割口、粘土接合面剥離)	ケズルに近いナデ	外面スス多、内面コゲ?		111	93
P545	II A22t・沢跡埋土	深鉢(1/4 周弱)	口唇貼付、平ら・ナデ	ナデ	外面全面スス、内面全面コゲ		111	92
P546	II A23s(調査区西壁)・Ⅱ～Ⅲ層	深鉢・口縁部	口唇貼付・LRヨコ?→貼付	ナデ	下の割れ口、粘土接合面剥離		111	92
P547	II A23s～t・Ⅲ～Ⅳ層	深鉢(1/4 周未満)	LR口縁ヨコ、胴タテ→低い貼付に沿うナデ、浅い沈線	ナデ	外スス、二次焼成・下割口接合面剥離		111	92
P548	II A24s・Ⅱ～Ⅲ層	鉢(口一周)	二波状・文様2種2単位?・RLタテ→細く低い隆帯(沈線無)	ミガキ?	外スス・波状口縁は隣接		111	93
P549	II A24s～t・Ⅲ～Ⅳ層	深鉢(1/3 周以下)	太く低め隆帯・LR口縁ヨコ、胴タテ	ナデ	外スス、二次焼成、内全面コゲ		111	93
P550	II A24s～f・Ⅲ～Ⅴ層	深鉢・口縁部	口唇蛇行隆帯貼付・LRイロイロ	ナデ	下の割れ口、粘土接合面剥離		111	92

第 111 図 縄文～弥生土器 (60)



掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部 / 胴部 / 底部 / 底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	写 真 図
P551	II A24s ~ t・III ~ V層	深鉢・口縁部	橋状把手は貫通せず・LR タテ・LR 側面圧痕	ミガキ?			112 93
P552	II A24u・III ~ IV層	鉢(底一周)	RL タテ→高め隆帯に沿う浅い沈線 / 底面ナデ	ナデ			112 93
P553	II A24u・III ~ IV層	底一周	LR タテ→浅い沈線 / 底ナデ	ナデ	外面タール状スス附着		112 93
P554	II A25r ~ s 西トレンチ????埋土	深鉢(1/3 周以下)	LR、口縁ヨコ、タテ、胴タテ→隆帯→太い沈線	ナデ雑			112 93
P555	II A25r ~ s 西トレンチ????埋土	深鉢(1/5 周未満)	口内面弧状隆帯・RL タテ	ナデ	外面スス、内面コゲ附着		112 93
P556	II A22 ~ 25 グリッド一括	壺・胴部	橋状把手欠損・低い隆帯	ナデ?			112 93
P557	II A25s ~ III A1s 重複遺構埋土	深鉢・口縁部	横方向把手状・太い沈線・縄文原体不明	ミガキ光沢			112 93
P558	II A25s ~ III A1s 重複遺構埋土	口縁部	把手・横からの刺突による粘土盛り上がり	ナデ			112 93
P559	II A25s ~ III A1s 重複遺構埋土	球胴鉢?・口縁部	深い△陰刻・細く浅い沈線	ミガキ?			112 93
P560	II A24u・III ~ IV層、II A25s ~ III A1s 重複遺構埋土	深鉢(1/4 周未満)	口唇貼付 / LR ヨコ、ナナメ→貼付	摩耗	「II A24u」が4/7・外面スス		112 93

第 112 図 縄文～弥生土器 (61)



掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	写 真
P561	2号竪穴建物跡西・埋土上位、3号竪穴建物跡西・2層、埋土中位、埋土上位	深鉢(胴略一周)	RLR、口縁ヨコ、胴タテ→浅い沈線	ナデ	外剥落・外上ス		113 94
P562	16号竪穴建物跡西・1層	異形(1/4周以下)	貫通突起(摩耗)	ナデ			113 93
P563	5号焼土遺構(伊跡)西半埋土1層(1/8)、II A20w・IV層(5号焼土遺構周辺)	深鉢(口略一周)	RL 口縁ヨコ、胴タテ→隆帯・蛇行隆帯7頂部	ナデ	外上ス、下二次焼成、内底上6cm幅コゲ		113 94
P564	II A18w・IV層上位	鉢?・口縁部?	橋状把手に貫通孔	ナデ			113 93
P565	黒色土検出面⑬	深鉢(1/2周以下)	単軸絡1(R?) タテ→太く深い沈線/底面ナデ	ナデ			113 94
P566	黒色土層検出面⑫⑬	深鉢(1/5周未満)	突起貫通・LR タテ→低い隆帯に沿う浅い沈線・丁寧な整形	ミガキ?			113 93

第 113 図 縄文～弥生土器 (62)



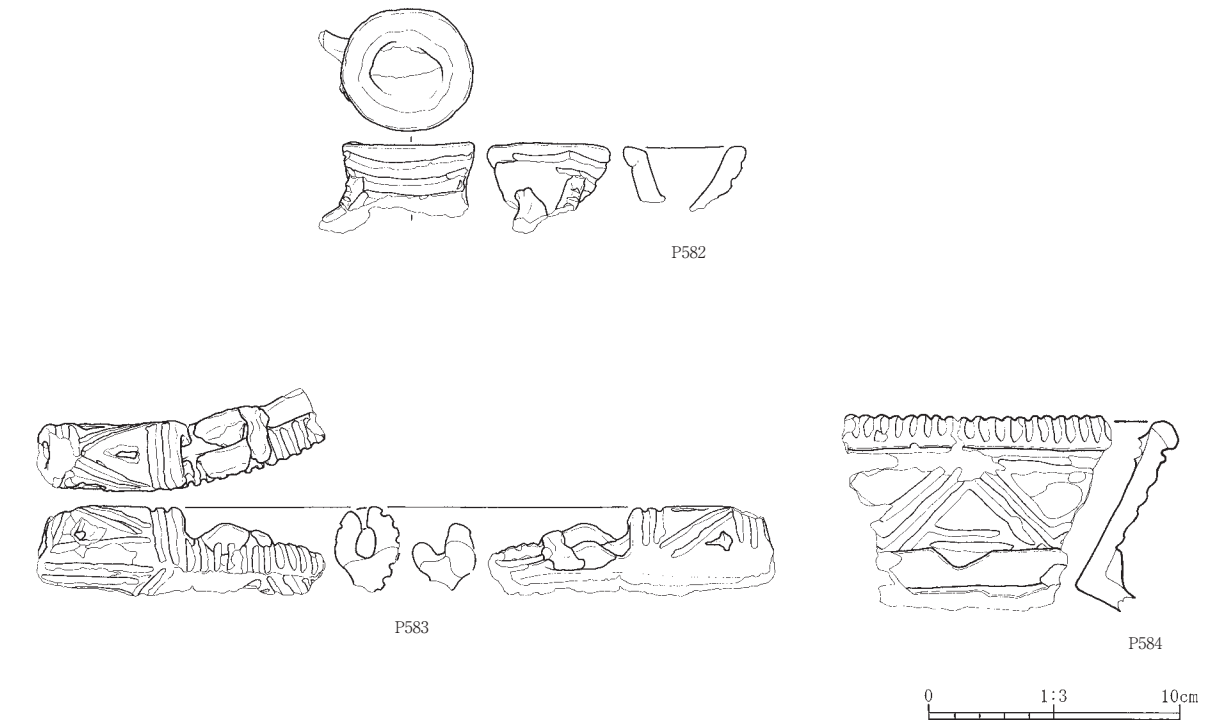
掲載 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部 / 胴部 / 底部 / 底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写 真
P567	黒色土検出面㊸	深鉢・口縁部	口唇部貼付・結節Lタテ	ナデ			114	94
P568	黒色土検出面㊸	深鉢 (1/3 周未満)	RL タテ→低い隆帯ナデつけ / 底面ナデ	ナデ			114	95
P569	黒色土検出面㊸	鉢 (1/3 周未満)	口縁高い隆帯・LR タテ→太く浅い沈線 / 底面ナデ	ナデ	外面スス付着		114	95
P570	中央セクション・沢跡埋土、灰黄褐色土	鉢 (略一周)	波状?・口縁隆帯?・LR タテ→底部→底面ナデ	ナデ	外上スス、下二次焼成、内コゲ		114	95
P571	中央セクション・沢跡埋土	鉢 (中央一周)	LR タテ→低い隆帯に沿うナデ、細い沈線・頭部ミガキ?	ミガキ?	外スス、二次焼成、内下部コゲ?		114	94
P572	中央セクション・Ⅲ層	球胴鉢 (1/4 周以下)	口内面突出気味・突起下貼付・太く深め沈線・LR ヨコ	ミガキ?	外上スス多、内コゲ多		114	95
P573	中央セクション・Ⅲ層	球胴鉢 (1/2 周未満)	突起下貼付・竹筒状工具押し引き、刺突・RL ヨコ→深め沈線	ナデ	外スス、内コゲ多		114	93

第 114 図 縄文～弥生土器 (63)



掲載 No	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写 真
P574	II A20u、v・III層、中央セクション・灰黄褐色土	鉢(2/3周未満)	低い貼付上横から刺突・LRタテ	ナデ?丁寧	外スス、二次焼成、内コゲ		115	94
P575	4号竪穴建物跡埋土一括、10号竪穴建物跡・埋土上~中位、埋土中位	深鉢(胴一周)	4単位突起・隆帯上深い刻目・竹管状工具文様・LR+結節Rタテ	ナデ	外黒斑・帯状に、外スス、内コゲ	p73	115	95
P576	木根2・表土~黒色検出面	深鉢・口縁部	口唇に蛇行隆帯	ナデ			115	94
P577	木根3・赤土~黒色検出面	深鉢・口縁部	口縁突起・LR?側面圧痕、LRタテ→沈線	ミガキ?	外面スス付着		115	94
P578	調査区一括	深鉢(4/5周以下)	単位不明・LRタテ→太く低め隆帯	ミガキ?	外面黒斑		115	96
P579	調査区一括	深鉢・口縁部	RLナナメ→貼付→刺突	ケズリに近い	外炭化物多、内下部コゲ		115	89
P580	調査区南端部・III層以下(暗褐色土)	深鉢・口縁部突起	RLヨコ→隆帯に沿う沈線	ミガキ?	外面スス、内面コゲ付着		115	94
P581	試掘トレンチ1・黒色土検出面	鉢(口3/4周)	LRタテ	ナデ	外スス、二次焼成、内コゲ		115	95

第 115 図 縄文~弥生土器 (64)



掲載 No	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部 / 胴部 / 底部 / 底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写真
P582	T7・黒色土層	深鉢・口縁部突起	太く浅め沈線	ナデ	外面スス付着		116	95
P583	黒色土・検出面㊸	球胴鉢?・口縁部	口唇跨がる末貫通突起・△深い陰刻	ナデ	下の割れ口、粘土接合面剥離		116	96
P584	T7坑・黒色土層	球胴鉢・口縁部	内面棚状隆帯 / 口唇刻目 / 太く深い沈線	摩耗			116	95

第 116 図 縄文～弥生土器 (65)

第 4 表 竪穴建物跡別縄文土器出土一覽表

遺 構 名	掲 載 No	遺 構 名	掲 載 No
1号竪穴建物跡	P007	16号竪穴建物跡	P338,339,562
2号竪穴建物跡	P008 ~ 032,P062,P118,P128,P561	17号竪穴建物跡	P343 ~ 347,349 ~ 354
3号竪穴建物跡	P042 ~ 117,P119 ~ 126,P129,P130,P175	18号竪穴建物跡	P366,367
4号竪穴建物跡	P127,P131 ~ 163,P276,P302,P575	19号竪穴建物跡	P368 ~ 370
5号竪穴建物跡	P164 ~ 174	20号竪穴建物跡	P371 ~ 378
6号竪穴建物跡	P176 ~ 204,P207 ~ 213,P518,P523 ~ 525	21号竪穴建物跡	P379 ~ 384
7号竪穴建物跡	P214,P216 ~ 258	22号竪穴建物跡	P385 ~ 390
8号竪穴建物跡	P259 ~ 273,P275,P277,P391,P425	23号竪穴建物跡	
9号竪穴建物跡	P278 ~ 283	24号竪穴建物跡	P272,274,P392 ~ 394
10号竪穴建物跡	P284 ~ 317	25号竪穴建物跡	P215,P395 ~ 405,P412
11号竪穴建物跡	P319 ~ 234,P424	26号竪穴建物跡	P001 ~ 005
12号竪穴建物跡	P325 ~ 330	27号竪穴建物跡	P006
13号竪穴建物跡	P331 ~ 333	28号竪穴建物跡	
14号竪穴建物跡	P334	29号竪穴建物跡	P318
15号竪穴建物跡	P335 ~ 337	30号竪穴建物跡	P340 ~ 342

(2) 土師器・須恵器(第 117～120図、写真図版 96～100)

土師器・須恵器は、出土遺物のうち、遺構出土資料を優先して掲載した。遺構出土資料の中では、遺構の時期決定が可能な出土状況のもので、かつ図化が可能なものを優先した。585～589・600～613は土師器、599は須恵器である。出土総量は、土師器が17,098.7g、須恵器が5,053.1gである。

1) 26号竪穴建物跡 (P585～599) 総量土師器 8,825.2g、須恵器 4,257.8g

585～589・591はカマド埋土から出土したもの。

585～589は甕で、長胴のものである。585は口縁部から底部。外面はヘラナデ後ミガキ、内面はヘラナデである。586は口縁部から胴部。外面はハケ後ミガキ、内面はハケ後ヘラナデである。587は頸部

有段のもので、口縁部から底部である。段は1段で、輪積みと一致する。外面はハケ後ミガキ、内面はハケである。588は胴部から底部。外面は内外面ともにハケである。591は頸部から底部。内外面ともにハケである。

589は鉢の口縁部である。内外面ともにミガキで、内面黒色処理である。

590は床面から出土したもの。

590は壺の口縁部から胴部である。外面はナデ後ミガキ、内面はヘラナデ後ミガキである。

591～593は埋土下位から出土したもの。

591・592は甕で、長胴のものである。591は頸部から底部。内外面ともにハケである。592は口縁部から底部。外面はハケ後ミガキ、内面はヘラナデである。

593は有段の坏の口縁から底部である。段は1段で、内面にも段があり。輪積みと一致する。内外面ともにミガキで、内面黒色処理である。

594～599は埋土中位から主体的に出土したもの。

594～596は甕で、長胴のものである。594・595は頸部有段のものである。594は完形品である。段は2段で、沈線状に見える。内外面ともにハケである。外面のハケは一部で線状の痕跡に見える部分があり、ミガキの可能性もある。595はほぼ完形品である。段は1段で、沈線状に見える。外面はハケ後ミガキ、内面はハケである。596は小型のもので、ほぼ完形品である。外面がハケ、内面はハケである。底部外面はハケ後ナデである。

597は鉢である。有段のもので、口縁部から胴部。段は1段で、輪積みと一致する。外面はハケ後ミガキ、内面はミガキで、内面黒色処理である。

598は碗である。有段のもので、口縁部から底部。段は1段で、内面にも段があり、輪積みと一致する。内外面ともにミガキで、内面黒色処理である。

599は埋土中位から出土した須恵器の中甕で、口縁部と肩部から底部である。胴部の外面は並行タタキ、内面には円礫による当て具痕がみられる。口縁部の外面はロクロナデである。

2) 27号竪穴建物跡 (P600) 総量土師器 32.1g

600はカマドの袖から出土したもの。

600は甕で、小型のものである。口縁部から底部で、ほぼ完形品である。外面はハケ後ミガキ、内面はミガキである。外面のミガキは線状の痕跡に見えるものである。

3) 29号竪穴建物跡 (P601) 総量土師器 221.1g

601は床上から出土したもの。

601は坏の口縁部から底部である。段は1段で、内面にも段があり、輪積みと一致する。外面はハケ後ミガキ、内面はミガキで、内外面黒色処理である。

4) 30号竪穴建物跡 (P602～P610) 総量土師器 3,926.6g

602～613はカマド埋土から出土したもの。

602～605は甕である。602はやや肩の張るもの、604・605は長胴のもの。602は口縁から底部。口唇は摘み上げている。二次焼成による赤化が顕著に見られる。外面はハケ後ミガキ、内面はヘラナデ後ミガキである。外面のミガキは線状の痕跡に見えるものである。603は口縁から底部。外面はハケ後ミガキ、内面はハケである。604は口縁から底部。外面はハケ後ミガキ、内面はミガキである。外面のミ

ガキは線状の痕跡に見えるものである。605は頸部有段の甕の口縁から底部である。段は1段で、輪積みと一致する。主な調整は外面がハケ後ミガキ、内面はナデ後ハケである。

606・607は坏である。606は小型のもので、口縁から底部。底部は平底で厚い。輪積みで成形している。内外面ともにミガキで内面黒色処理である。輪積みで製作している。607は有段のもので、口縁から底部。段は1段で、内面はやや段状になり輪積みと一致する。内外面ともにミガキで内面黒色処理である。

608・609は床面直上から出土したもの。

608・609は有段の坏である。段は1段で、内面は輪積みと一致する。608は口縁から底部。段はミガキにより稜線状となる。内外面ともにミガキで内面黒色処理である。609は口縁から底部。内外面ともにミガキで内面黒色処理である。

610はカマド付近の埋土下位から出土したもの。

610は甕の口縁から胴部である。外面はハケ後ミガキ、内面はナデである。

5) 7号a~d焼土遺構 (P611) 総量土師器33.4g

611は周辺の遺物包含層から出土したもの。

611は甕の底部である。外面はナデ後ハケ、内面はハケである。

他に焼土の覆土からも土師器が出土したが小片のため図化できなかった。

6) 遺物包含層 (P612・P613) 総量土師器2,373.4g、須恵器795.3g

612はⅢ層の検出面から出土したもの。

612は坏の口縁から底部である。内外面ともにミガキで内面黒色処理である。

613は出土地点が不明なものであるが、取り上げを行った同じ袋のものが30号竪穴のカマドのものと多く接合していることから、30号竪穴のカマドから出土した遺物の可能性が高い。

613は坏の口縁から底部である。内外面ともにハケ後ミガキで、内面黒色処理である。

(佐藤 剛)

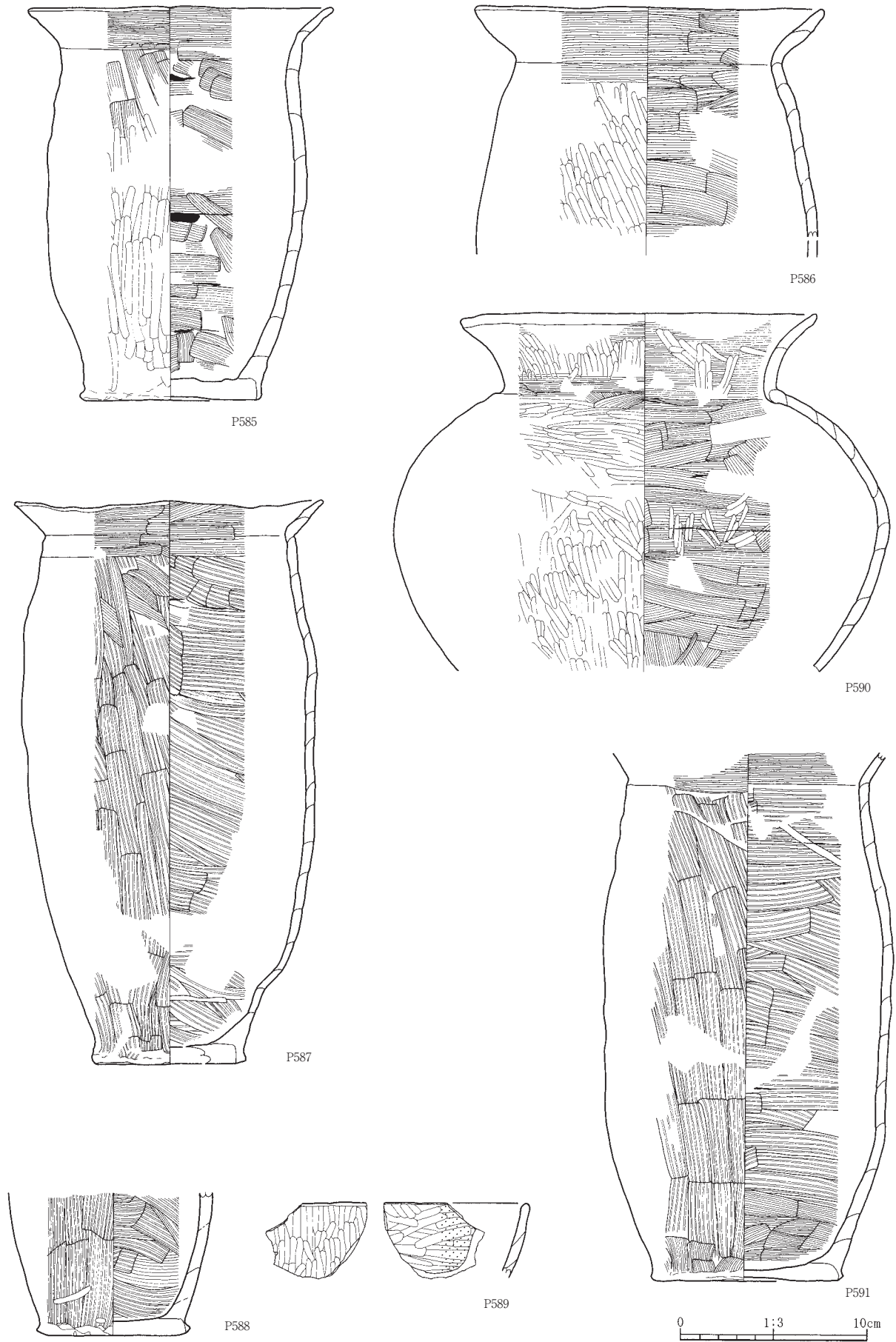
(3) 土製品(第121図、写真図版101)

縄文時代に属する資料としては、装飾品が出土している。G002は、ボタン状で、中央には直径1.5mmの穿孔が見られる。G003は、欠損しているが、管状になっているのが確認できる。G004は、中期中葉に帰属する7号竪穴建物跡から出土した斧状土製品である。G005は縄文土器片を円盤状に加工したもので、穿孔は認められない。

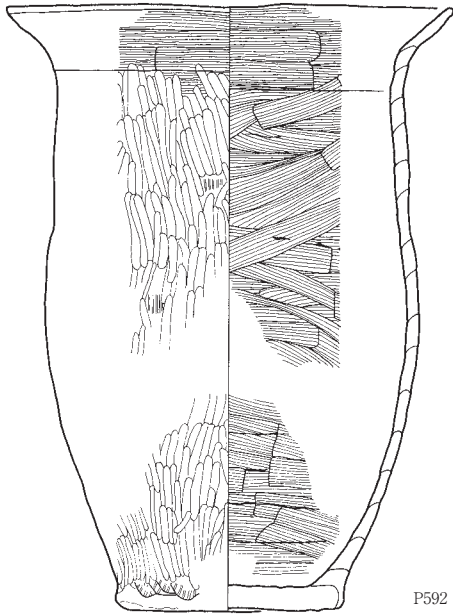
古代に属する資料は、紡錘車が4点出土した。26号竪穴建物跡から出土したG006は、全面をミガキ調整され光沢を放つ。G008も同じく26号竪穴建物跡の床面資料であるが、側面に紐状の圧痕が2カ所確認できる。制作時に使用した道具痕であろうか。G010は30号竪穴建物跡から出土した。26号竪穴建物跡から出土している紡錘車と比較すると薄手である。

(4) 石器・石製品(第122~133図、写真図版101~108)

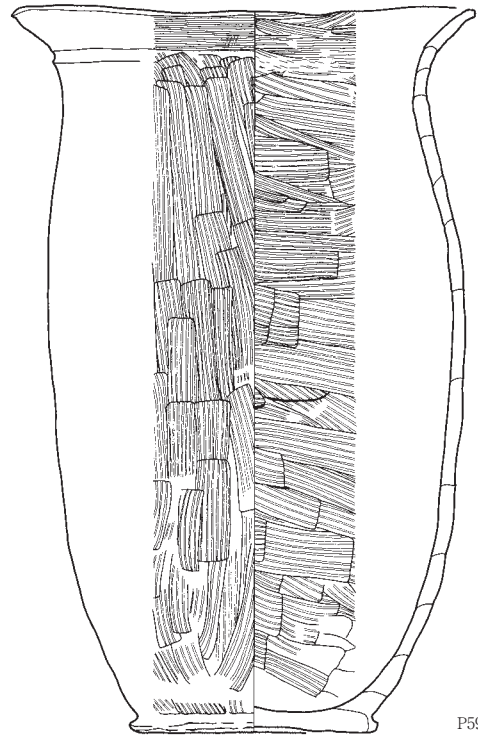
本調査で出土した石器・石製品は、種類ごとに下記の通り分類し、全て観察表に記載している。整理期間の都合上全てを図化することは困難であったため、写真にその解釈を頼るものも少なくない。なお、形状が類似するもの出土地点が同遺構のもの等は観察表のみにとどめていることをご承知願



第 117 図 土師器・須恵器 (1)



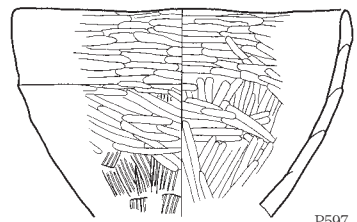
P592



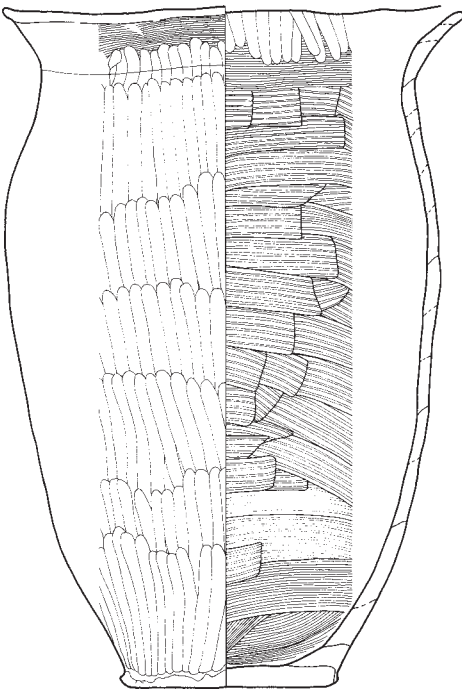
P594



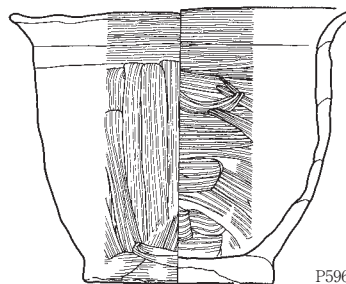
P593



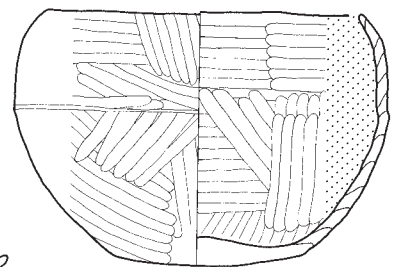
P597



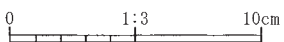
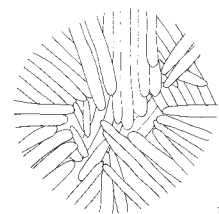
P595



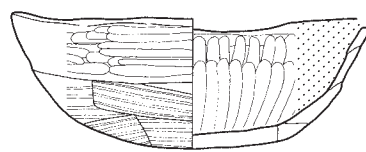
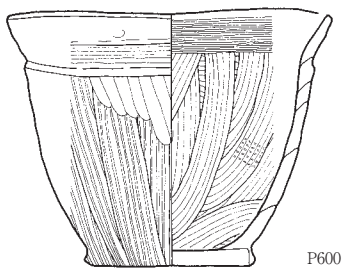
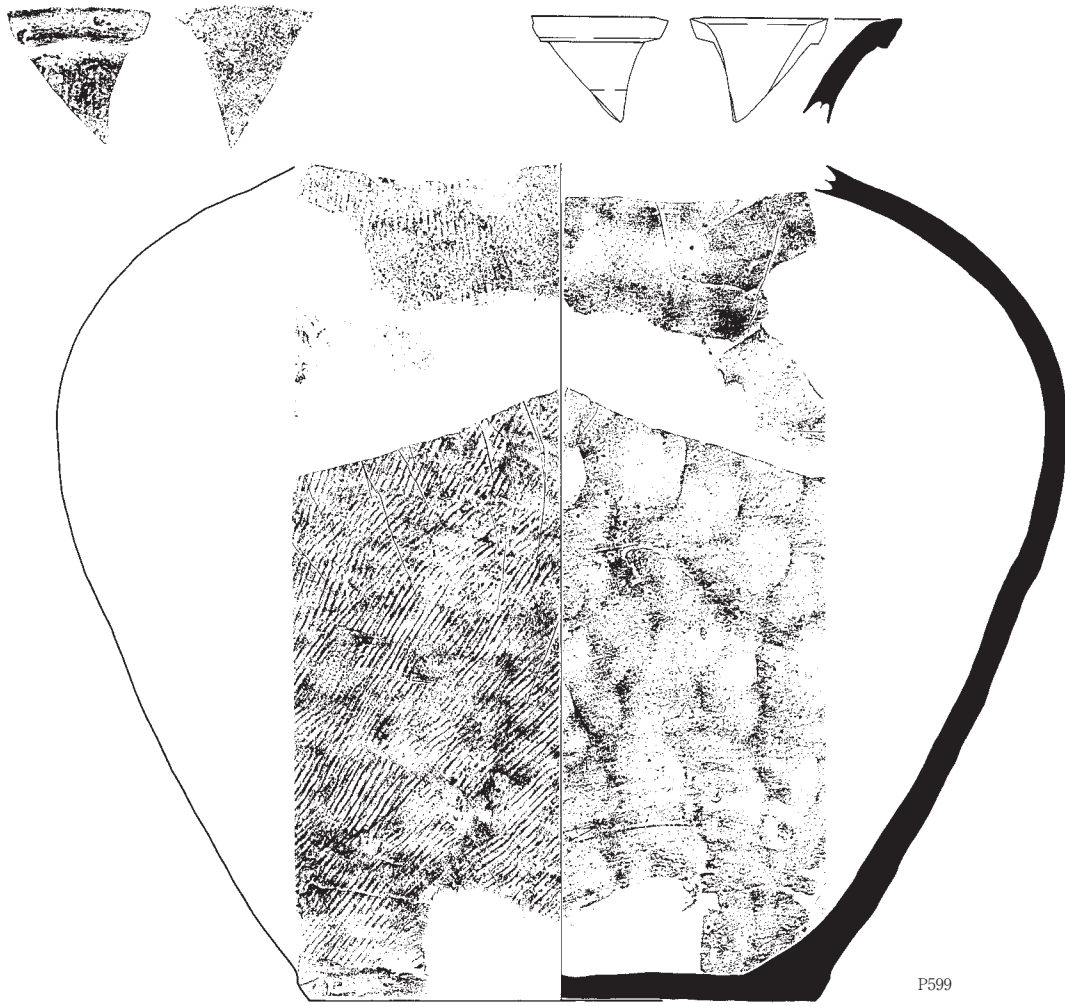
P596



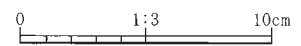
P598



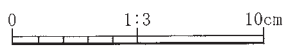
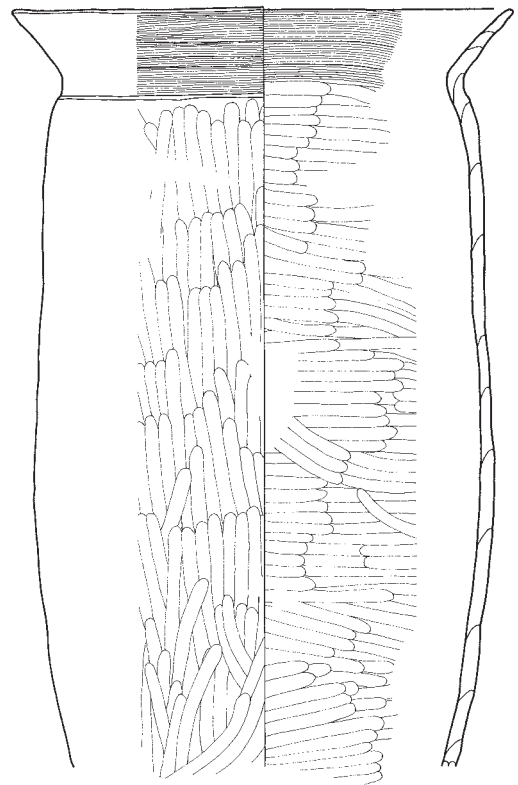
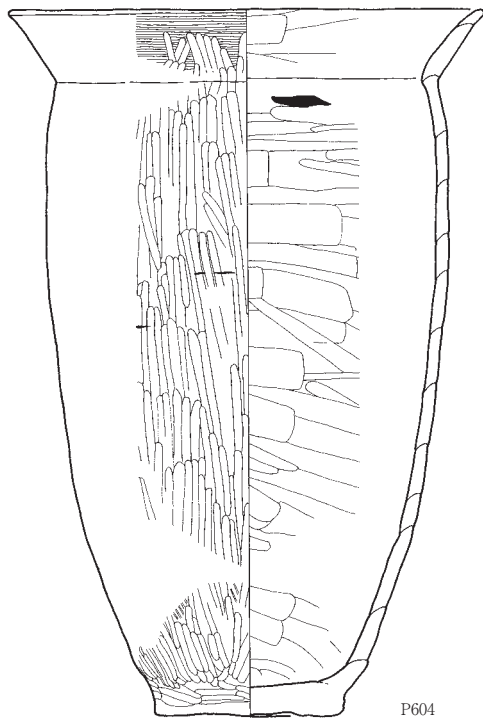
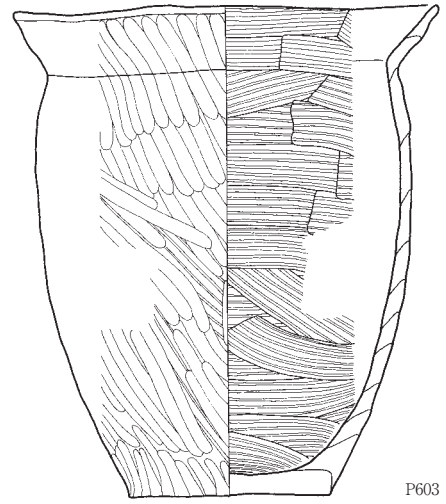
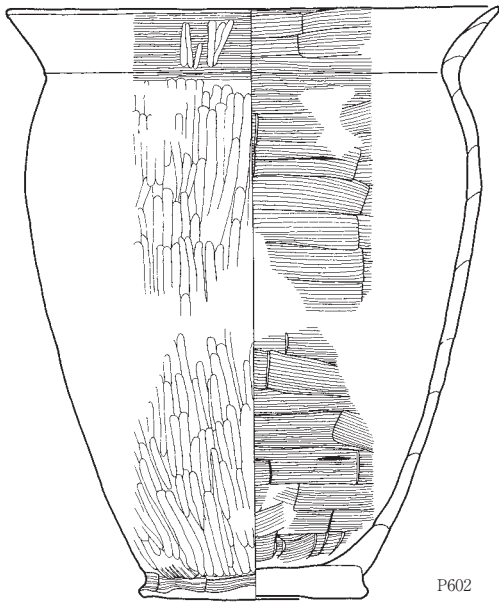
第 118 図 土師器・須恵器 (2)



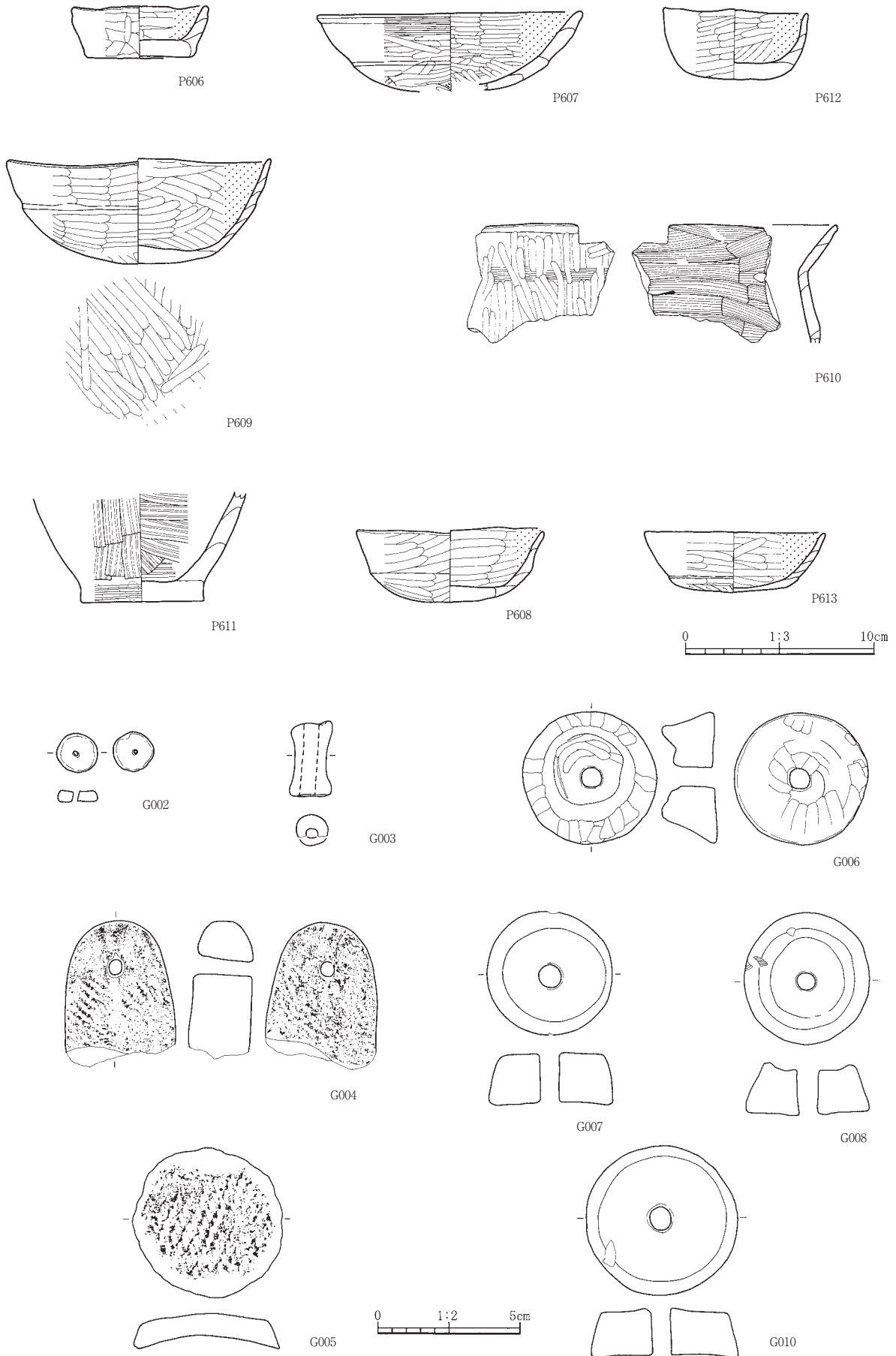
P601



第119図 土師器・須恵器(3)



第 120 図 土師器・須恵器 (4)



第121図 土師器・須恵器(5)・土製品

3 遺物

たい。石質は代表的な資料を抜き出し、肉眼鑑定を花崗岩研究会に委託した。その他、調査者の肉眼で識別可能なものは観察表に記入している。

石鏃

118点出土。45点を図化と写真掲載、5点は写真掲載のみにした。分類・細分は以下の通り行った。

1. 無茎のもの
 - a 基部が深く抉られる
 - b 基部が平坦
2. 有茎のもの
3. 基部全体が出っ張るもの
 - a 棒状
 - b 基部が丸味をおびる（円茎）
4. 異形石鏃
5. 未成品

全体のおよそ72%が無茎である。8号竪穴建物跡から出土したS037は、先端部が小さく抉られ、基部がΩ字状に加工される。

石匙

25点出土。12点を図化と写真掲載にした。分類は以下の通り行った。つまみ部を上にした時の刃部の位置が

1. 側面に確認できるもの（縦型）
2. 下面に確認できるもの（横型）

縦型と横型に大きな偏りはない。つまみ部は全て両面調整により加工されている。S133は、大形の石匙である。つまみ部は両面から加工されているが、刃部は片面のみの調整である。

尖頭器

8点出土し、5点を図化と写真掲載、1点を写真掲載のみとした。

全体的に細かな調整が施されている。S151は、基部に丸味をもたせたつまみのような形状をしている。山形県押出遺跡で出土した押出ポイントと類似するものと考えられる。先端は欠損している。

スクレイパー

19点出土し、4点図化と写真掲載、2点は写真掲載のみにした。分類は以下の通り行った。

1. 搔器 刃部が局部的にのみ作り出され、急な角度に調整されたもの。皮なめしに使いそうなもの。
2. 削器 刃部が連続的に作り出され、直線的に調整されたもの。物を切ったり、削ったり出来そうなもの。

S158は、搔器で、下部にのみ加工調整が確認できる。親指と人差し指に収まるサイズである。

石錐

5点出土し、2点図化と写真掲載、3点は写真掲載のみにした。

縦長の一部を加工し、その断面が菱形になるものである。石鏃と区別が困難なものがあるが前述の点を選別の基準とした。

S172は、つまみあり。寸胴である剥片の一端を加工調整して錐部を作り出している。

石篋

7点出土し、3点図化と写真掲載、2点を写真掲載のみとした。

刃部が丸いもの、直線的なもので厚みがある。スクレイパーよりずっしりするもの。

S177は、楕円形気味の形で両面加工が施される。

楔形石器

1点出土し、写真掲載のみとした。

S183は、両側縁に階段状剥離が認められる。

不定形剥片石器

微細加工のある剥片(UF)は13点、加工痕のある剥片(RF)は11点出土しており、5点写真掲載のみとした。

石核

9点出土し、2点を写真掲載のみにした。

全て、北上山地中生代前期の頁岩である。青灰色を呈するこれらは、本調査で出土している石鏃にも、同じ石質のものが散見でき、この場で製作されていたことが考えられる。

石斧

15点出土し、8点図化と写真掲載、7点写真掲載のみとした。

磨製11点と打製3点である。S231は小形で鑿状であるが、使用痕は認められず実用性を目的としていないと考えられる。

敲磨器

120点出土し33点図化と写真掲載をした。分類／細分は以下の通り行った。

はじめに、形状で3分類し

1. 円形
2. カマボコ形・断面が多角形
3. 棒状

次に、痕跡別で細分した。

- a. 磨った範囲が表面もしくは裏面にあるもの。
- b. 磨った範囲が表裏両面もしくは、2面以上あるもの。
- c. 磨った範囲が側面にあるもの。(特殊磨り石)
- d. 敲石。敲打痕があるもの。
- e. 凹石。凹みがあるもの。

痕跡が複合的に観察できるものは、「1 ad」といったように表記している。

3 遺物

側面を使用する、いわゆる特殊磨り石が全体のおよそ37%を占める。特殊磨り石の中には、下部を平らに打ち割っているものがあり、大人の掌におさまる大きさである。また、2号竪穴建物跡床面資料のS235のように側面を平らに作り出し、使用しているものがある。特殊磨り石と捉まえて資料を観察したとき、この2点が認められる蓋然性が高く、側面で磨るという利用方法に固執している様子がかがえる。

砥石

3点出土し、1点図化と写真掲載、1点を写真掲載のみとした。

S352は古代の竪穴26号竪穴建物跡埋土下位から出土した砂岩製の砥石である。長方形の板状で片面のみが平滑となっている。一方S354は、縄文の竪穴4号竪穴建物跡から出土した砥石である。同じく砂岩製で自然礫の形状が生かされ使用痕が数状の溝としてあらわれている。

台石

15点出土し、3点写真掲載のみにした。

石棒

3点出土し、2点を図化と写真掲載、1点を写真掲載のみとした。

G011は、6号竪穴建物跡床面から出土した大形の石棒である。表面中央部が凹み、研磨痕が顕著である。下部は平らに打ち割られ整形が施される。裏面は自然面を残し、側面の研磨も荒々しい。

有孔石製品

1点出土し写真掲載のみとした。

G014、砂岩製の自然礫を使用した有孔石製品が22号竪穴建物跡から出土している。正面からの穿孔による貫通と見られ、裏面の孔は小さい。その他の加工は認められない。

円形・半円形石製品

3点出土し、全点写真掲載のみとした。

7号竪穴建物跡埋土下位から出土しているG015は、円形状に縁辺を加工してから、半円形になるように打ち割ったものと考えられる。G016は、礫の丸味部分を活かし一部打ち割っている縁が連続する。

棒状石製品

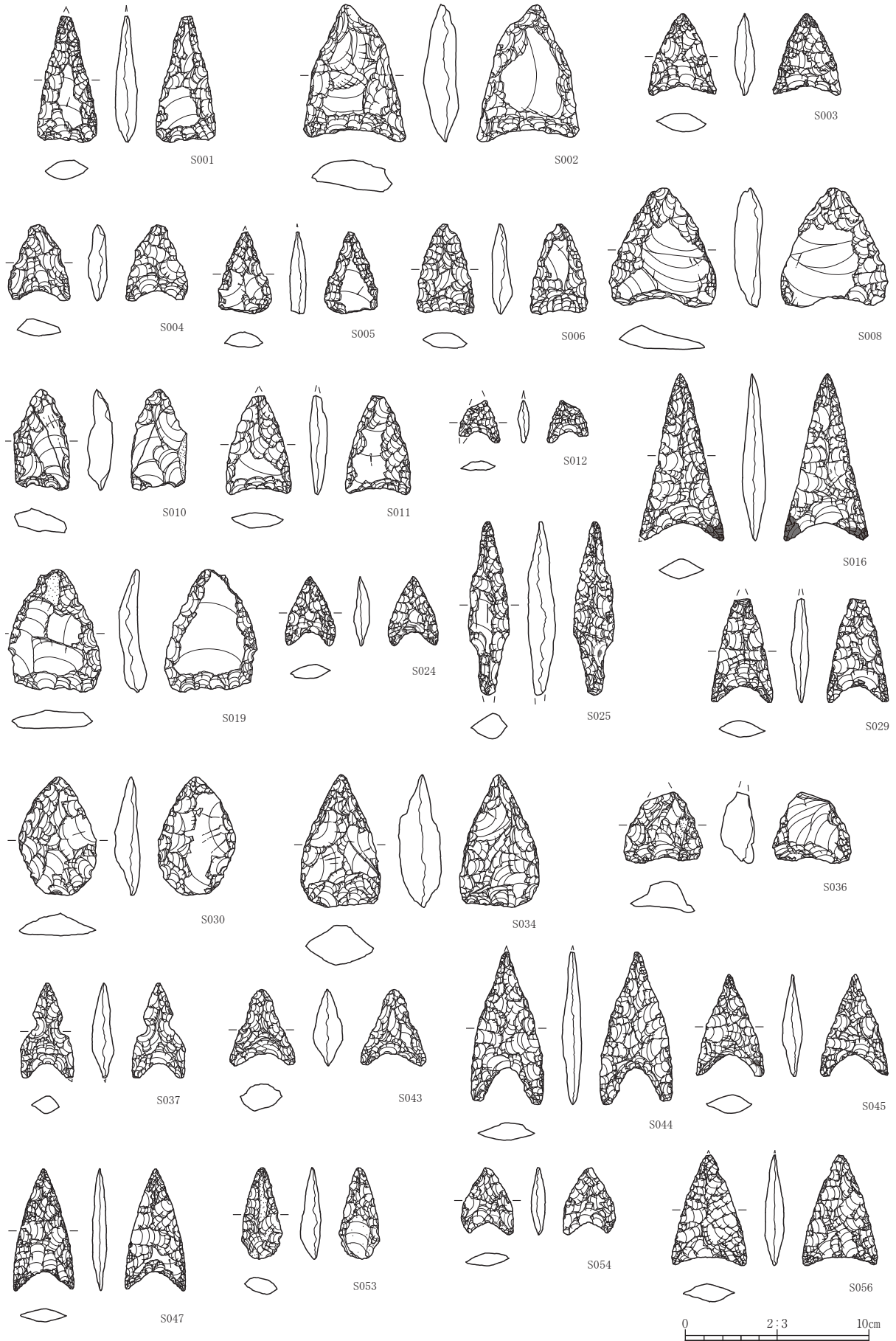
3点出土し、全点写真掲載のみとした。

G020は、3号竪穴建物跡から出土した頁岩の棒状の石製品で全面に削痕が認められる。26号竪穴建物跡埋土下位から出土したG018は、断面が台形で平滑面が確認でき、砥石の可能性もある資料である。

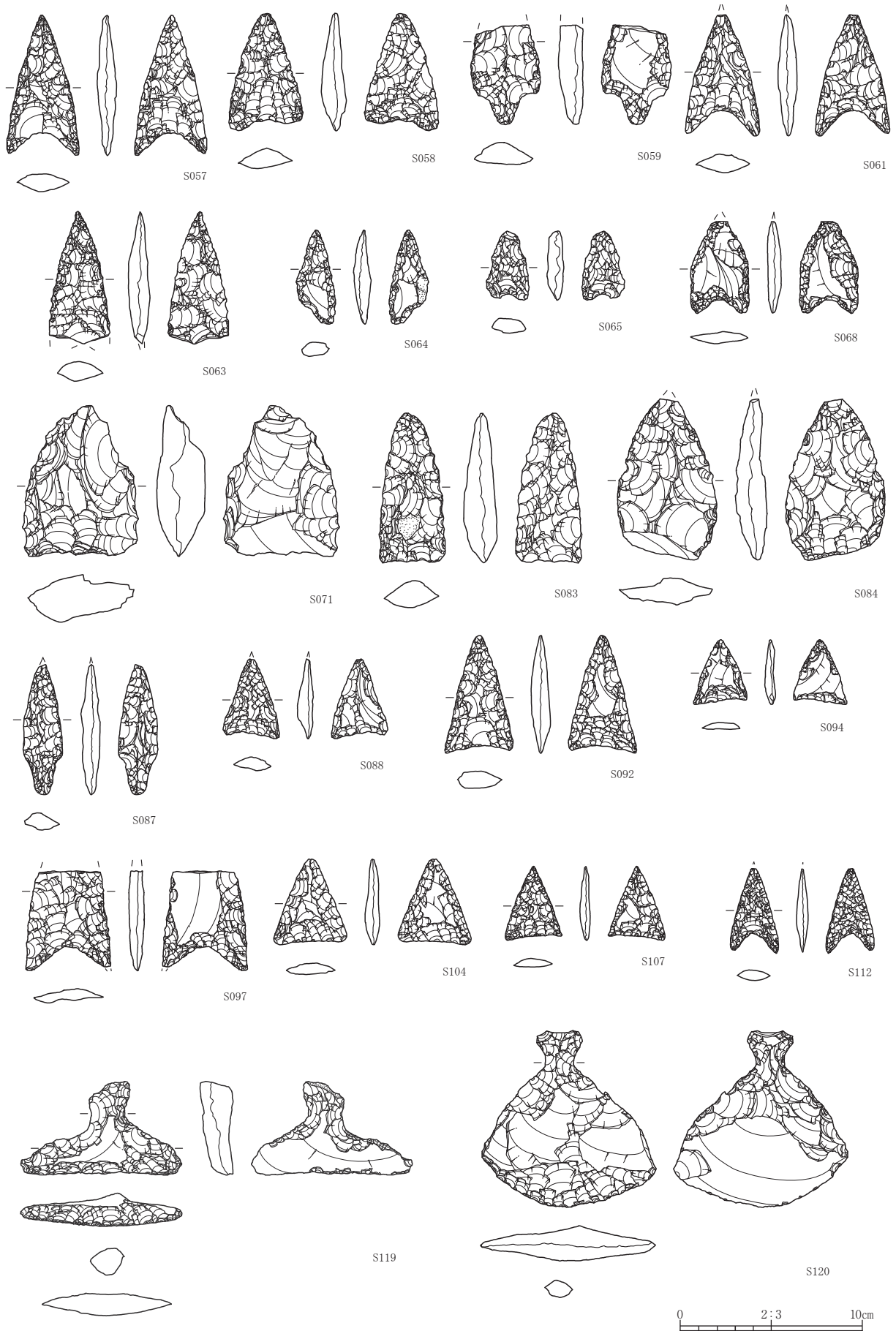
玦状耳飾り

2点出土し、全点図化と写真掲載をした。

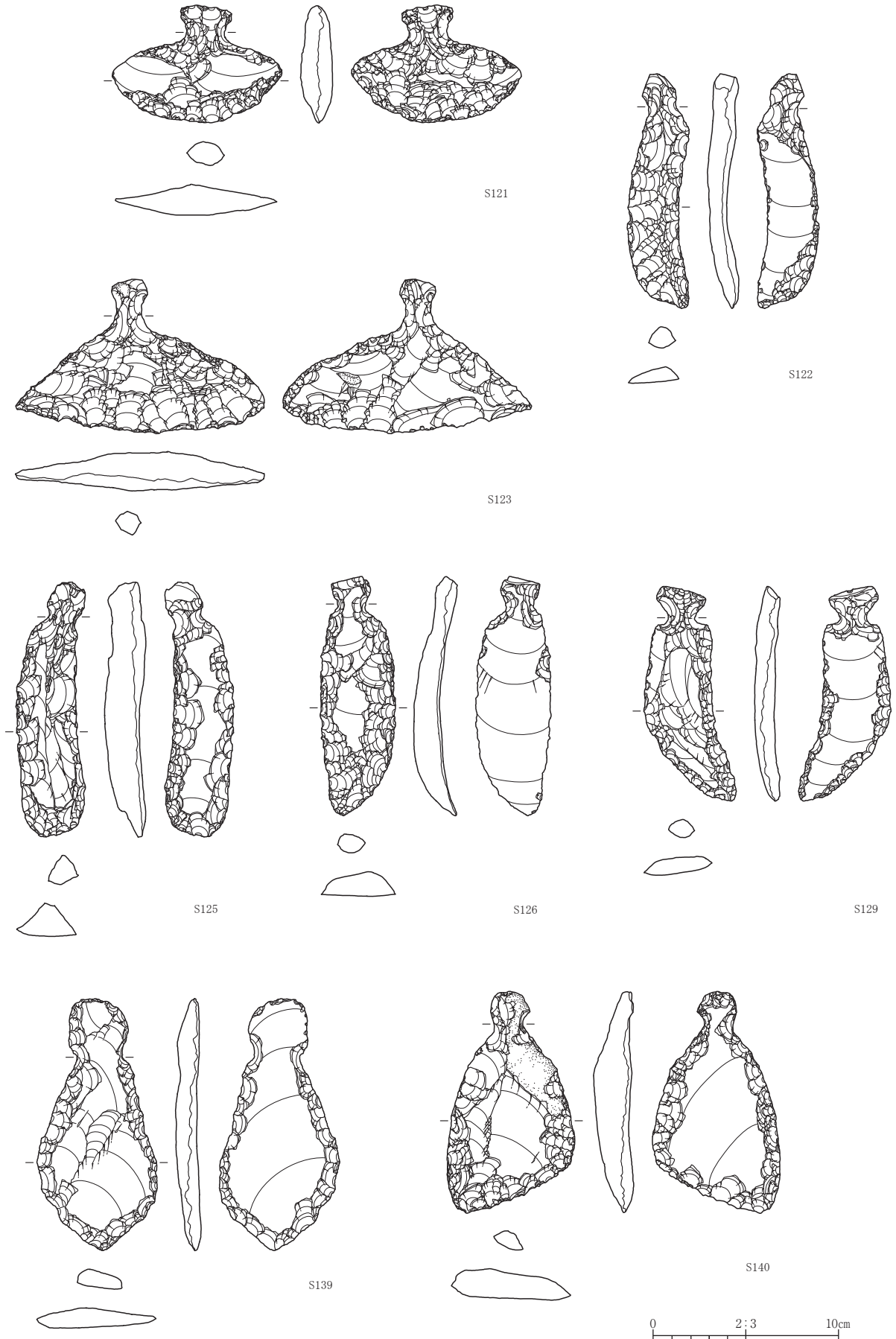
いずれも欠損している。G027は、沢跡から出土した蛇紋岩製の玦状耳飾りである。孔が1カ所認め



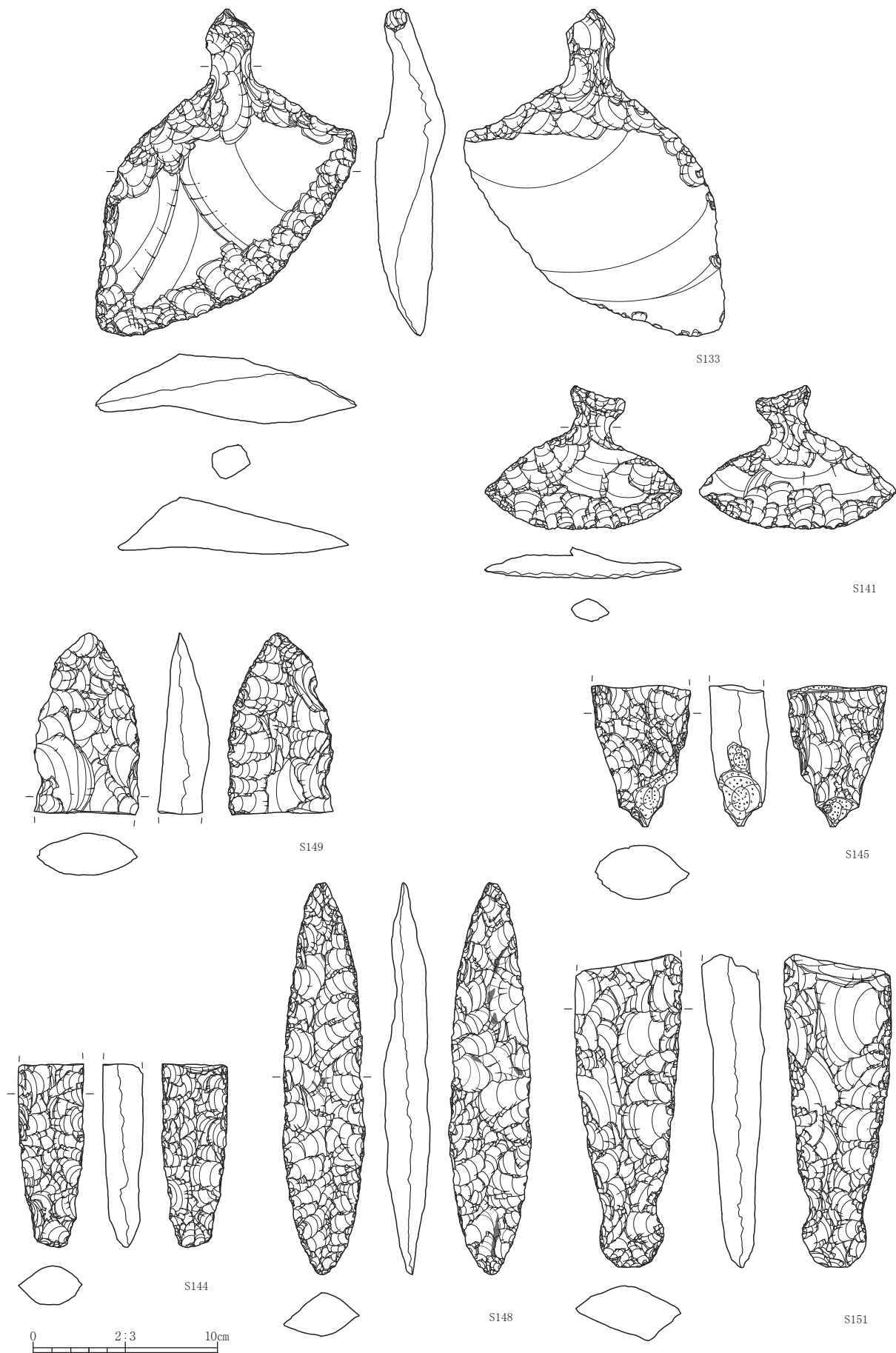
第122図 石器(1)



第 123 図 石器 (2)



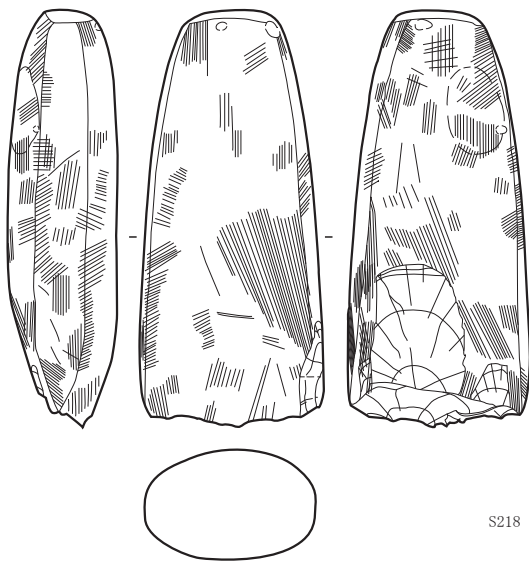
第124図 石器(3)



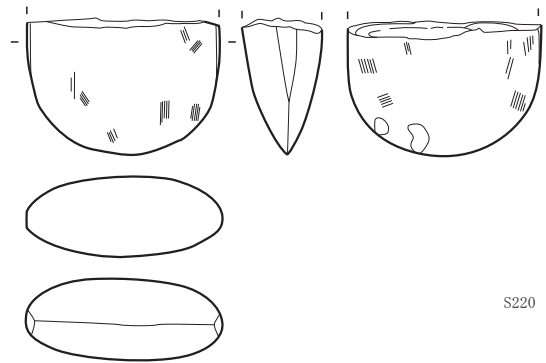
第 125 図 石器 (4)



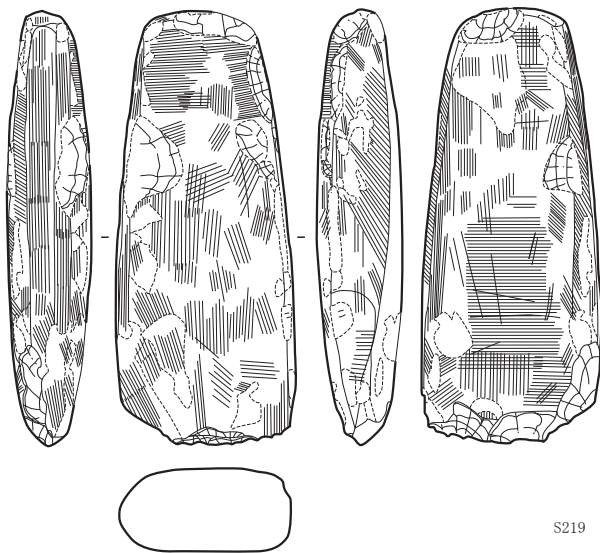
第 126 図 石器 (5)



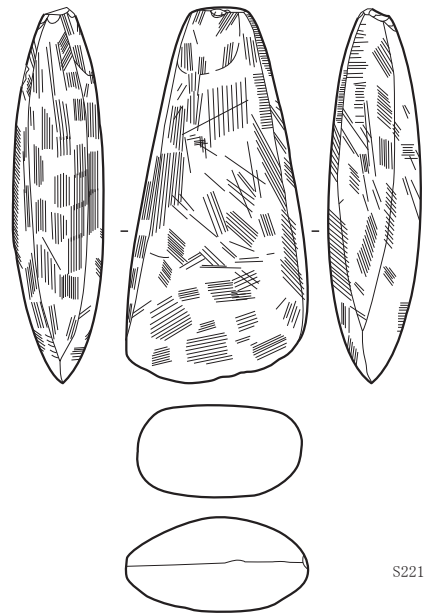
S218



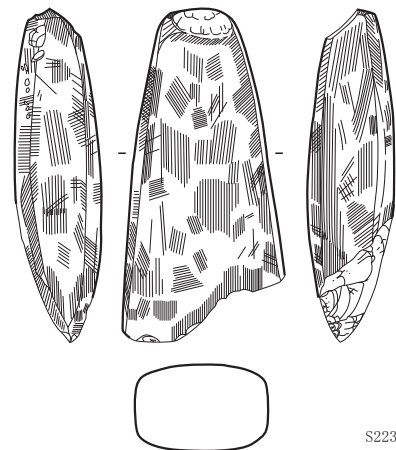
S220



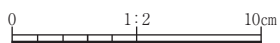
S219



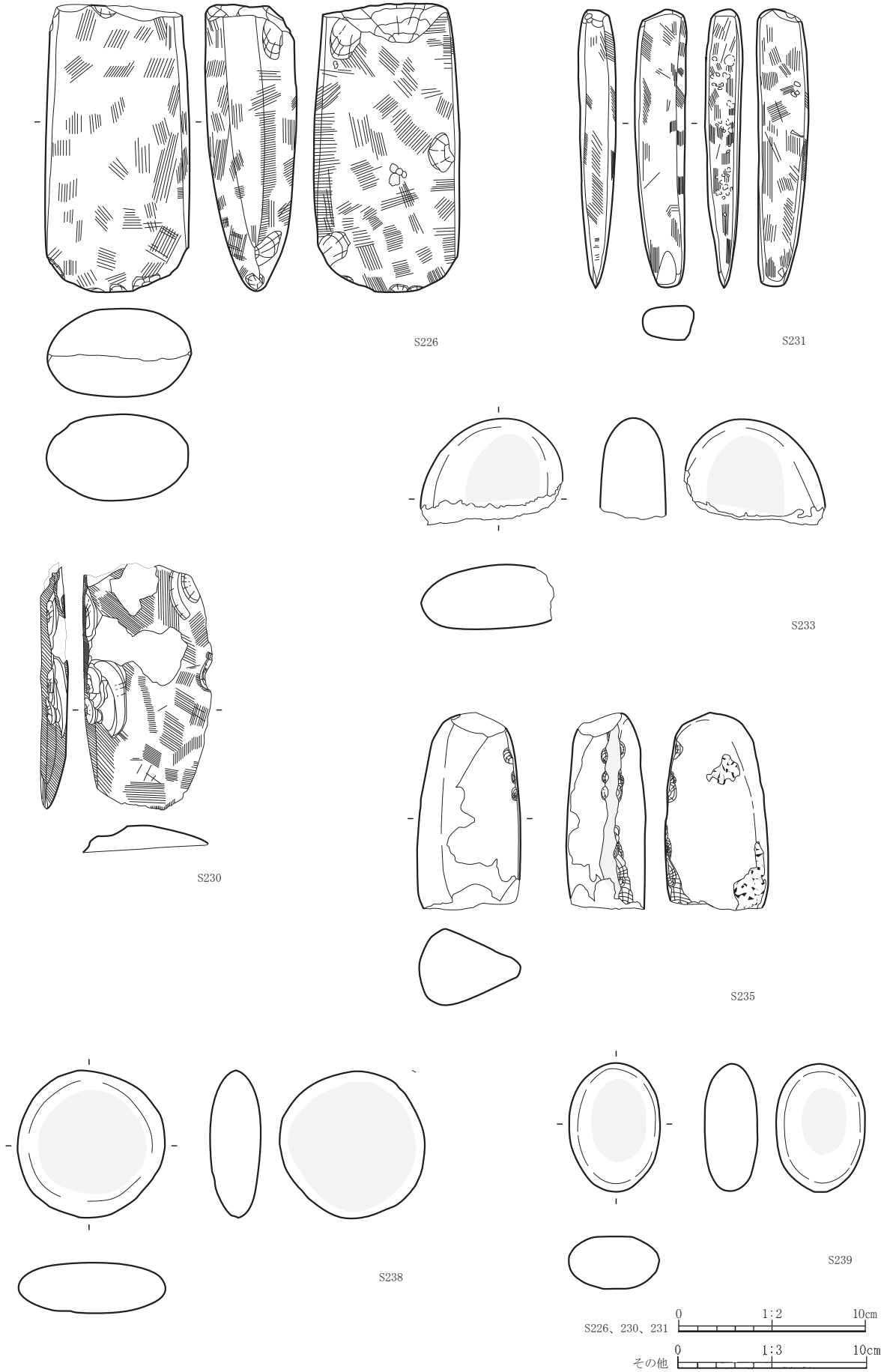
S221



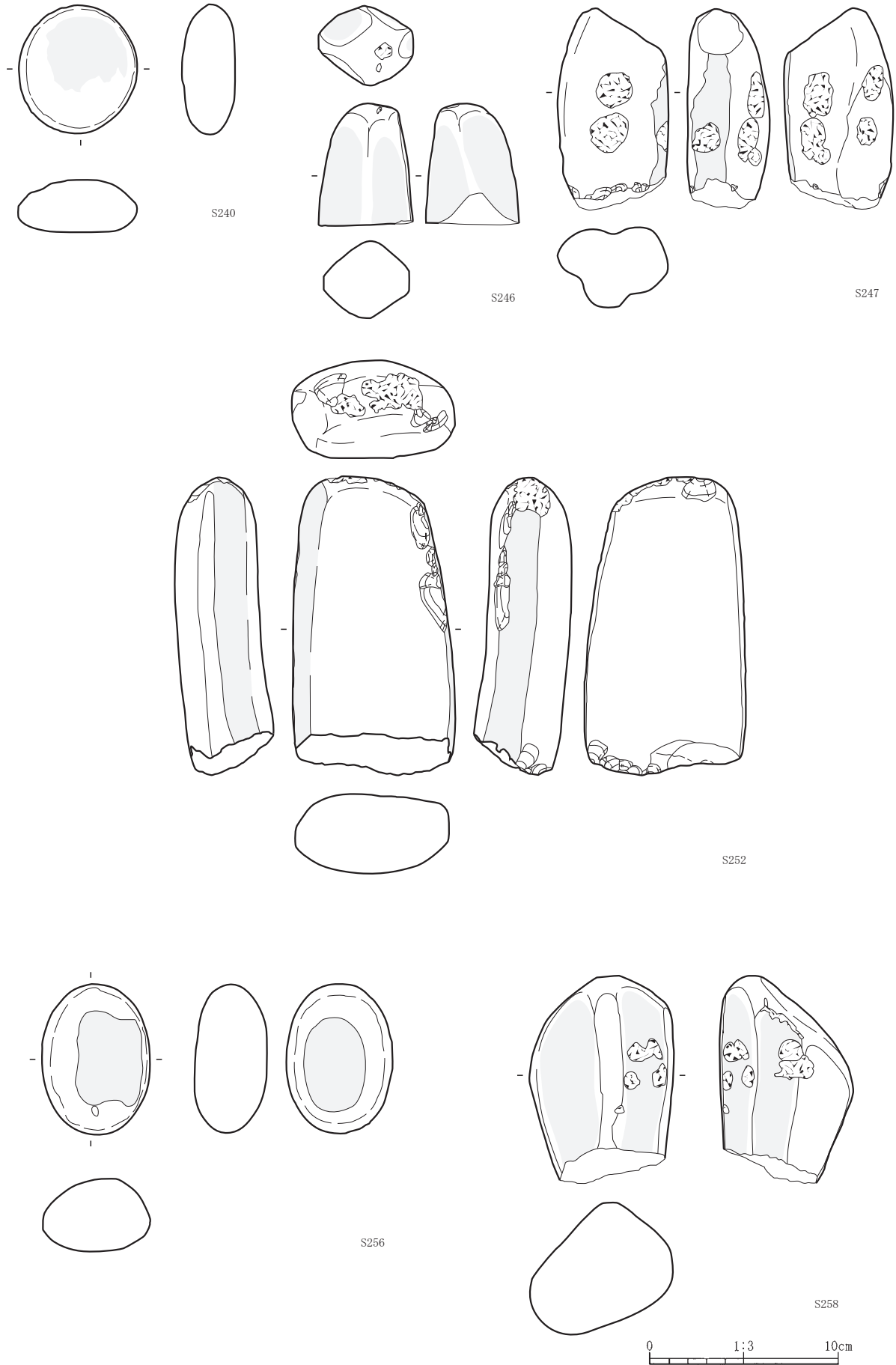
S223



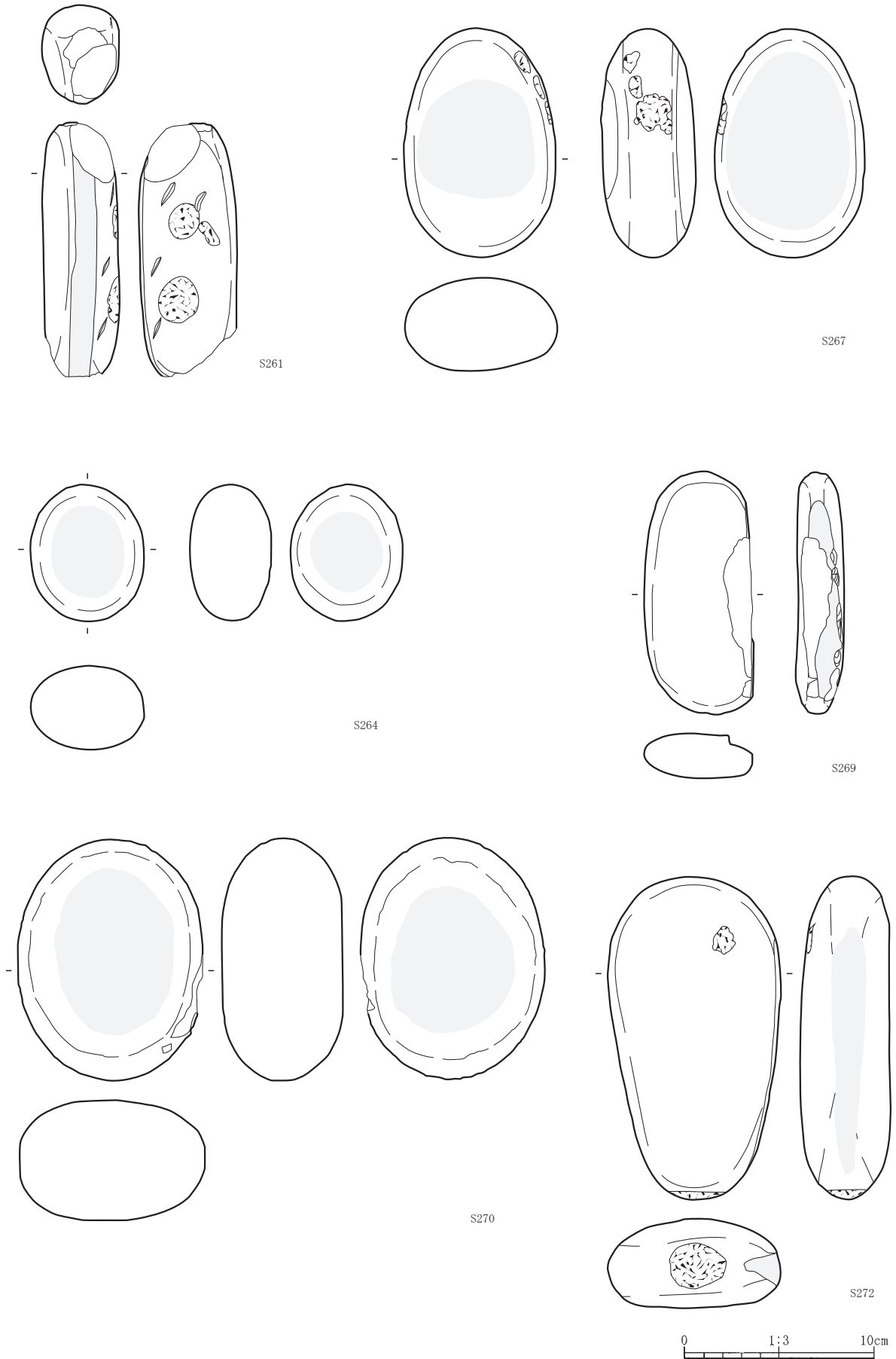
第 127 図 石器 (6)



第128図 石器(7)



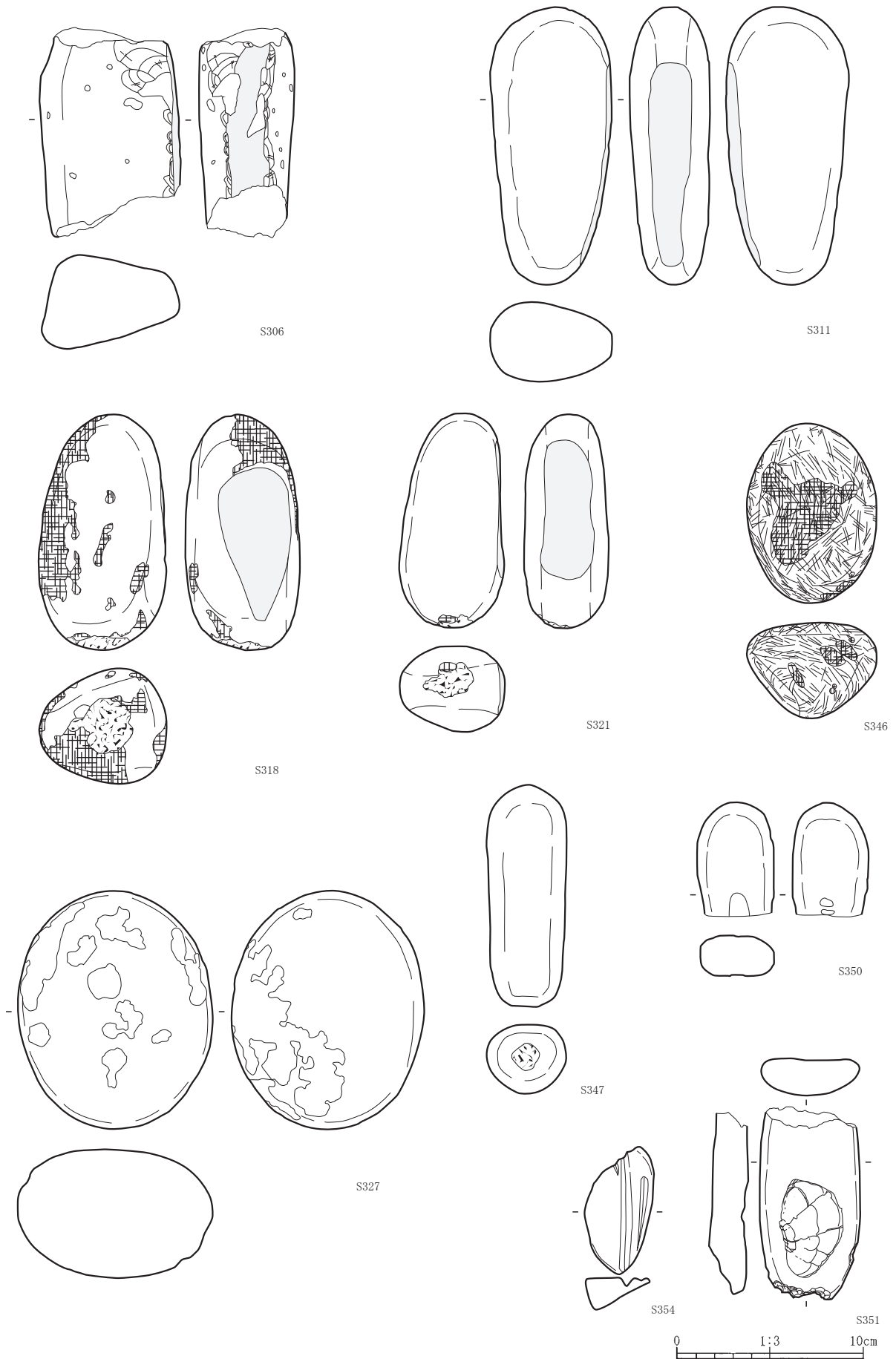
第 129 図 石器 (8)



第130図 石器(9)



第 131 図 石器 (10)



第132図 石器(11)

られ、両面からの穿孔による貫通と考えられる。G030は頁岩製である。

その他石製品

3点出土し、全点図化と写真掲載をした。

G029は華奢な作りの輪と考えられるが、半部欠損しており全容が不明である。また、これに関しては鑑定の結果、石質が不明とのことで、石ではない可能性も考えられる。G029は、欠損部分が多いが頁岩の垂飾りと思われる。1個の孔は、両面から石錐のようなもので穿孔したと思われる痕跡が認められる。G031は、近隣での採取が不可能な軽石製の石製品である。中央上部に穿孔が認めら浮子と考えられる。軽石のため非常に軽く脆い。

(5) 鉄 製 品 (第 133 図、写真図版 101)

G032～G034、G038は鉄鏃で、G032は、茎部が欠けているがほぼ完形のものである。鏃身部が正三角形に近い形状である。G033は、茎部が欠けているがほぼ完形のものである。鏃身部が正三角形に近い形状であるが、G032に比して小さい。G034は頸部と茎部からなる柄部のみである。G035は刀子の柄部。G037は鉄鐸である。斜めの合わせ目が確認できる。鉄板の両端を合わせる方法ではなく、丸めて閉じ合わせたものと考えられる。舌は無い。(詳細は後述のⅦ総括)

(6) 鉄 滓 類

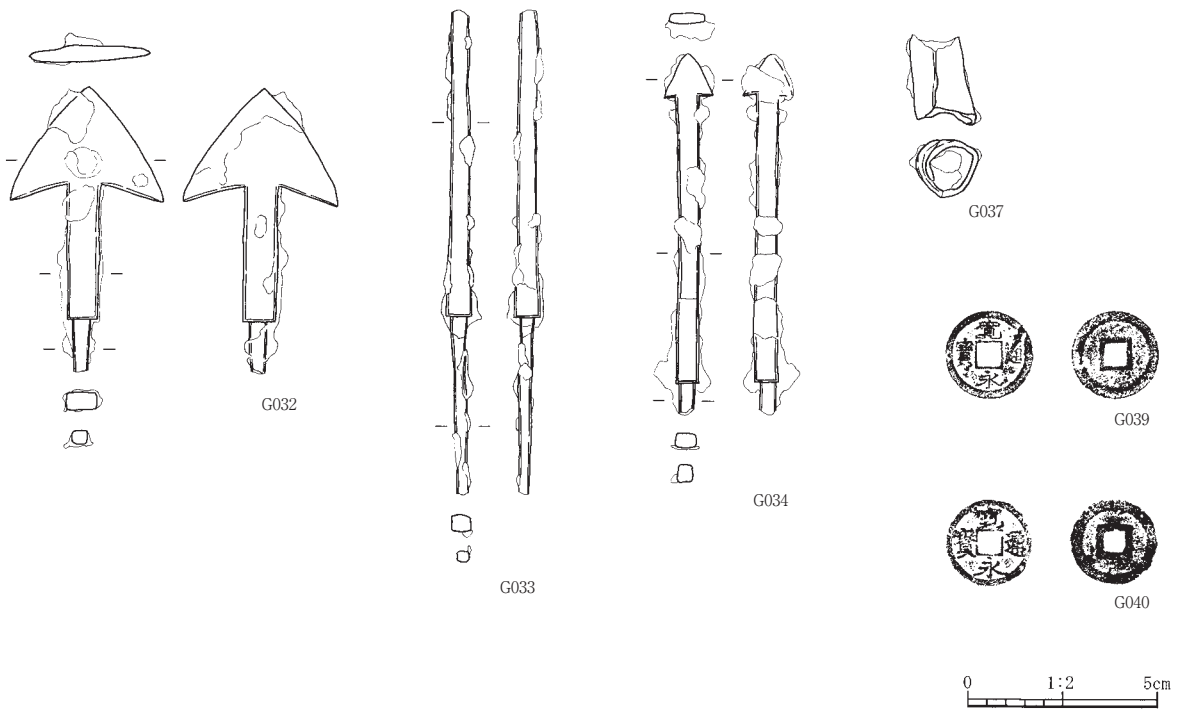
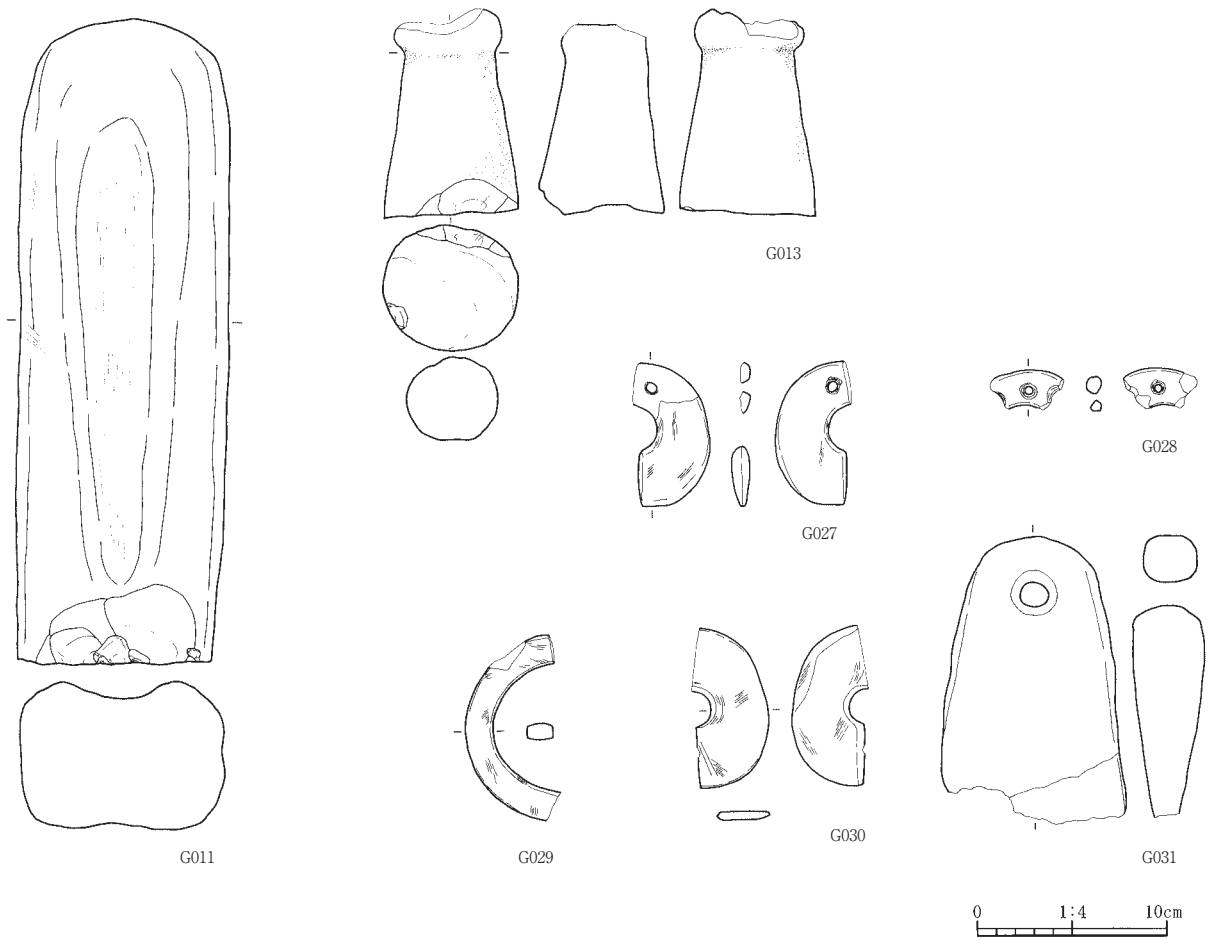
分類方法や分類基準等については、後述の「間木戸Ⅴ遺跡 3 遺物 (8) 鉄滓類」で記されている手順になった。調査区域内から総重量3598.4gの鉄滓が出土している。本調査では、製鉄に関する遺構が検出されておらず、ほとんどが遺構外からの出土である。遺構内からの出土資料は26号竪穴建物跡や30号竪穴建物跡などであり古代の竪穴からの出土である。総重量の約3分の1を占めたのは、磁着反応の弱い流動滓(A'-2) 1184.0gであった。

(7) 銭 貨 (第 133 図、写真図版 101)

寛永通宝が遺構外から2点出土した。2点のうち、G040は「寶」の字の特徴から古寛永通宝である。2点とも裏面は無刻である。

(8) 動物 遺 存 体

26号竪穴建物跡床面および、北東壁際から出土した甕の内部から貝類やウニの棘が出土した。なお、青森県教育委員会斎藤靖史氏に分析・鑑定を賜った。(Ⅵ-4)



第 133 図 石製品・鉄製品・銭貨

第5表 間木戸Ⅱ遺跡土師器・須恵器観察表

掲載No.	出土地点	種別	残存部位	残存率(%)	色調	調整技法			計測値(cm)〔復元〕〔残存〕			備考	図	写真
						外面 (胴部、口縁部周辺)	内面(内)	底部 (外面調整、特徴)	口径	底径	器高			
P585	26号壺穴建物跡	土師器	口縁～底部	80	灰黄褐色	ハラナデ→ミガキ、ヨコナデ	ハラナデ、ヨコナデ	ナデ	[15.2]	9.7	20.9		117	96
P586	26号壺穴建物跡	土師器	口縁～胴部	30	灰黄褐色、にぶい黄褐色	ハラナデ→ミガキ、ヨコナデ	ハラナデ→ミガキ、ヨコナデ	—	18.4	—	(13.1)		117	96
P587	26号壺穴建物跡	土師器	口縁～底部	80	にぶい黄褐色	ハラナデ→ミガキ、ヨコナデ→ミガキ	ハラナデ→ヨコナデ	木薬痕	16.4	8.3	(30.2)	頸部有段1段	117	96
P588	26号壺穴建物跡	土師器	胴部～底部	10	灰黄褐色	ハラナデ	ハラナデ	ナデ	—	8.2	(7.6)	小型	117	96
P589	26号壺穴建物跡	土師器	口縁	破片	にぶい黄褐色	ミガキ、ミガキ	ミガキ、黒色処理	—	—	—	(4.1)		117	96
P590	26号壺穴建物跡	土師器	口縁～胴部	40	にぶい黄褐色	ハラナデ→ミガキ、ヨコナデ→ミガキ	ハラナデ→ミガキ、ヨコナデ→ミガキ	—	(18.9)	—	(19.1)		117	96
P591	26号壺穴建物跡	土師器	胴部～底部	80	灰黄褐色	ハラナデ	ハラナデ	木薬痕	—	10.3	(28)		117	97
P592	26号壺穴建物跡	土師器	口縁～底部	40	にぶい黄褐色	ハラナデ→ミガキ、ヨコナデ	ハラナデ、ハラナデ	木薬痕	[17.4]	9.1	[23.8]		118	98
P593	26号壺穴建物跡	土師器	口縁～底部	30	にぶい黄褐色	ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ケズリ→ミガキ、平底風丸底	(14.8)	—	4.4	有段1段(内面段)	118	97
P594	26号壺穴建物跡	土師器	口縁～底部	100	にぶい黄褐色	ハラナデ(一部線状)、ヨコナデ	ハラナデ→ヨコナデ	木薬痕→ナデ	18.4	9.8	28.9	頸部有段 沈線状段2段	118	97
P595	26号壺穴建物跡	土師器	口縁～底部	90	にぶい黄褐色	ハラナデ→ミガキ、ヨコナデ	ハラナデ	木薬痕	18.1	8.7	26.9	沈線状段2段	118	98
P596	26号壺穴建物跡	土師器	口縁～底部	90	灰黄褐色	ハラナデ→ミガキ、ヨコナデ	ハラナデ→ヨコナデ	ナデ	13.4	[7.6]	10.9	小型 底部外面ハラナデ	118	97
P597	26号壺穴建物跡	土師器	口縁～胴部	40	暗褐色	ハラナデ→ミガキ、ハラナデ→ヨコナデ	ハラナデ→ヨコナデ	—	13	—	(9)	有段1段(輪積み一致)	118	97
P598	26号壺穴建物跡	土師器	口縁～底部	70	にぶい黄褐色	ミガキ、ミガキ	ミガキ、黒色処理	ミガキ、平底風丸底	12.3	—	10	有段1段(内面段) 平底風丸底(稜有り)	118	97
P599	26号壺穴建物跡	須恵器	口縁、胴部～底部	60	暗紫灰	平行タタキ、凹底クワ	円腰当て具痕	—	—	9.7	(20.9)		119	99
P600	27号壺穴建物跡	土師器	口縁～底部	90	灰黄褐色、にぶい黄褐色	ハラナデ→ナデ(線状)、ヨコナデ	ハラナデ→ヨコナデ	不明	12.6	6.9	10.1	口唇積み上げ	119	97
P601	29号壺穴建物跡	土師器	口縁～底部	70	にぶい黄褐色、灰褐色	ハラナデ、ミガキ	ハラナデ、黒色処理	ハラナデ、平底風丸底	13.8	—	5.2	有段1段(内面段)	119	97
P602	30号壺穴建物跡	土師器	口縁～胴部	25	にぶい赤褐色、にぶい褐色	ハラナデ→ヨコナデ	ハラナデ(線状)、ナデ(線状)→ヨコナデ	木薬痕	(19.3)	9.1	[23.3]	二次焼成による赤化	120	100
P603	30号壺穴建物跡	土師器	口縁～底部	60	—	ハラナデ→ミガキ、ヨコナデ	ハラナデ→ヨコナデ	—	16.8	8	19.3		120	97
P604	30号壺穴建物跡	土師器	口縁～底部	60(非接合含む)	にぶい黄褐色	ハラナデ→ミガキ(線状)、ハラナデ→ヨコナデ	ハラナデ(線状)、ハラナデ→ヨコナデ	—	(18.7)	7.6	(27.9)		120	100
P605	30号壺穴建物跡	土師器	口縁～底部	70(非接合含む)	にぶい赤褐色、にぶい黄褐色	ハラナデ→ハラナデ→ミガキ、ヨコナデ	ハラナデ→ハラナデ→ヨコナデ	木薬痕	19.8	9.2	(30.2)+(4.2)	頸部有段1段 二次焼成による赤化	120	100
P606	30号壺穴建物跡	土師器	口縁～底部	60	にぶい黄褐色、褐灰	ミガキ	ミガキ、黒色処理	ミガキ、平底(厚い)	[7.0]	5.9	2.8	輪積み成形	121	97
P607	30号壺穴建物跡	土師器	口縁～底部	10	にぶい黄褐色、灰黄褐色	ミガキ、ヨコナデ→ミガキ	ミガキ、黒色処理	ケズリ→ミガキ、平底風丸底	[14.5]	—	(4.2)	有段1段(内面段)	121	99
P608	30号壺穴建物跡	土師器	口縁～底部	80	にぶい黄褐色	ミガキ、ミガキ	ミガキ、黒色処理	ケズリ→ミガキ、平底風丸底	9.7	—	3.9		121	99
P609	30号壺穴建物跡	土師器	口縁～底部	70	にぶい褐色	ミガキ、ミガキ	ミガキ、黒色処理	ケズリ→ミガキ、平底風丸底	13.7	—	5.6	有段1段(輪積み一致)	121	99
P610	30号壺穴建物跡	土師器	口縁～胴部	破片	灰黄褐色	ハラナデ→ミガキ、ハラナデ→ヨコナデ	ハラナデ→ヨコナデ	—	—	—	(6.2)		121	99
P611	7号壺土遺構	土師器	底部	10	灰黄褐色	ハラナデ→ハラナデ	ハラナデ→ハラナデ	木薬痕	—	6.4	(5.2)		121	99
P612	出土地点不明	土師器	口縁～底部	30	にぶい黄褐色	ハラナデ→ミガキ、ミガキ	ハラナデ→ミガキ	—	[7.6]	—	3.8	手づくね	121	99
P613	遺物ポイント66	土師器	口縁～底部	80	灰黄褐色、にぶい黄褐色	ミガキ、ミガキ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ケズリ、平底風丸底	9.3	—	3.2	有段1段(輪積み一致)	121	99

第6表 間木戸Ⅱ遺跡土製品観察表

掲載番号	仮番号	出土地点	層位	形状	分類	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	備考	掲載縮尺	図	写真
G001	土0 1	26号竪穴建物跡北(本根)	埋土上～中位	紐状		2.1	0.6	0.4	1	土器の貼付けか？			
G002	土0 2	2号竪穴建物跡北	埋土下位	耳飾りボタン状		1.4	1.4	0.4	0.1	中央部に穿孔	1/2	121	101
G003	土0 3	6号竪穴建物跡	床面	円飾り		2.6	1.5	0.5	38	上部欠損。管状	1/2	121	101
G004	土0 4	7号竪穴建物跡 南西	埋土中位～下位	糸状土製品		(5.2)	3.9	2.1	46.9	下部欠損。	1/2	121	101
G005	土0 5	II A21t	III層黒褐色土	円盤状		5.3	5.2	0.8	28.8	LRヨコ	1/2	121	101
G006	紡01	26号竪穴建物跡	床面	紡錘車		4.7	4.7	1.9	36.9	完。表・裏面ミガキ顕著。黒光りする。	1/2	121	101
G007	紡02	26号竪穴建物跡 西	埋土中～下位	紡錘車		4.4	4.5	1.8	37.8	完。表・裏面ミガキ顕著。黒光りする。	1/2	121	101
G008	紡03	26号竪穴建物跡 北	床面	紡錘車		4.6	4.4	1.9	36.7	完。側面に紐状の圧痕？	1/2	121	101
G009	紡04	G007と接合したため欠番											
G010	紡05	30号竪穴建物跡 南西	埋土下位	紡錘車		5.3	5.3	1.1	55.1	完。	1/2	121	101

第7表 間木戸Ⅱ遺跡石器観察表

1 間木戸Ⅱ石鏃観察表

掲載番号	仮番号	出土地点	層位	分類	欠損	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	備考	掲載縮尺	図	写真
S001	ぞ001	26号竪穴建物跡東	埋土上位	1b	先端	3.4	1.6	0.6	2.5	頁岩			2/3	123	102
S002	ぞ096	26号竪穴建物跡南	埋土中位	1a	完	3.7	2.7	0.9	8.2	頁岩			2/3	123	102
S003	ぞ002	1号竪穴建物跡	床面	1a	完	2.2	1.8	0.5	1.5	挂算頁岩	北上山地		2/3	123	102
S004	ぞ003	II A24S	埋土一括	1a	完	2.0	1.7	0.5	1.4	頁岩			2/3	123	102
S005	ぞ004	II A24S	埋土一括	1b	先端	2.2	1.4	0.4	1.2	頁岩			2/3	123	102
S006	ぞ005	3号竪穴建物跡	床面、石器No.4	1b	完	2.4	1.5	0.5	1.8	頁岩			2/3	123	102
S007	ぞ006	3号竪穴建物跡北	埋土中位	1a	先端	(3.1)	1.8	0.3	2.1	頁岩			2/3	123	102
S008	ぞ007	3号竪穴建物跡北	埋土上位	1a	完	3.2	2.9	0.8	2.1	頁岩		挟り深い			
S009	ぞ008	3号竪穴建物跡西	埋土上位	1a	片側の基部	2.3	1.6	0.4	1	頁岩		礫面残る	2/3	123	102
S010	ぞ009	4号竪穴建物跡炬	焼土より上	1a	完	2.7	1.5	0.7	2.1	頁岩			2/3	123	102
S011	ぞ010	4号竪穴建物跡炬付近	床面	1a	先端	2.6	1.7	0.5	2	頁岩			2/3	123	102
S012	ぞ011	4号竪穴建物跡北壁付近	埋土中位	1a	先端・片側基部	1.1	1.1	0.3	0.2	黒曜石	北上山地		2/3	123	102
S013	ぞ012	4号竪穴建物跡北	埋土上～中位	1a	先端	(2)	1.6	0.4	1	頁岩	北上山地		2/3	123	102
S014	ぞ013	4号竪穴建物跡南東	埋土一括	5		3.1	2.5	1.2	8.5	頁岩	北上山地				
S015	ぞ014	4号竪穴建物跡北東	埋土一括	1b	片側の基部	2.6	1.7	0.2	1.2	頁岩					
S016	ぞ015	5号竪穴建物跡南庭部	1層、石器No.1	1a	片側の基部	4.5	2.2	0.6	3.4	頁岩			2/3	123	102
S017	ぞ097	5号竪穴建物跡石圍垣1	1層	1a	先端	(1.5)	1.6	0.2	0.5	頁岩		基部に黒色物付着	2/3	123	102
S018	ぞ114	5号竪穴建物跡南	埋土上位	5		3.9	1.7	0.5	4.8	頁岩		未成品・礫面残る			
S019	ぞ016	6号竪穴建物跡	床面、石器1	1b	完	3.3	2.5	0.7	4.9	頁岩			2/3	123	102
S020	ぞ017	6号竪穴建物跡	埋土一括	1a	完	3.4	2	0.7	3.6	頁岩					
S021	ぞ018	6号竪穴建物跡	埋土一括	1a	完	2.5	1.6	0.6	1.7	頁岩					
S022	ぞ115	6号竪穴建物跡	埋土中位	1b	片側	3.9	(1.3)	(0.5)	1.2	頁岩					
S023	ぞ019	7号竪穴建物跡北西北壁	埋土中～下位	3b	片側	3.9	(1.3)	(0.5)	1.7	頁岩					
S024	ぞ020	7号竪穴建物跡北西北壁	埋土中～下位	1a	完	1.8	1.3	0.4	0.7	頁岩		基部黒色物付着	2/3	123	102
S025	ぞ021	7号竪穴建物跡北西北壁	埋土中～下位	2	基部	4.7	1.1	0.7	2.6	頁岩		基部黒色物付着	2/3	123	102
S026	ぞ022	7号竪穴建物跡北西北壁	埋土中～下位	1a	片側の基部	1.7	(1.2)	0.3	0.4	頁岩					
S027	ぞ023	7号竪穴建物跡北西北壁	埋土中～下位	1a	先端	(1.6)	1.3	0.2	0.4	頁岩					
S028	ぞ098	7号竪穴建物跡南西	埋土中～下位	1b	片側	2	(1.5)	0.4	1.3	頁岩					
S029	ぞ024	8号竪穴建物跡	床面	1a	先端	2.8	1.6	0.5	3.6	頁岩	北上山地		2/3	123	102
S030	ぞ025	8号竪穴建物跡	床面	3b	完	3.2	2.1	0.7	1.5	頁岩			2/3	123	102
S031	ぞ026	8号竪穴建物跡	床面	1a		1.5	1.2	0.1	0.2	頁岩					
S032	ぞ027	8号竪穴建物跡	床面	5		3.7	2.2	0.7	6.1	頁岩					
S033	ぞ028	8号竪穴建物跡北西	床面	1b	先端	(2.6)	2.3	0.5	4.2	頁岩		礫面残る			

掲載番号	仮番号	出土地点	層位	分類	欠損	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	備考	掲載縮尺	図	写
S034	ぞ 029	8号竪穴建物跡北西	埋土下位	1b	完	36	21	1.1	72	頁岩	北上山地 中生代前期		2/3	123	102
S035	ぞ 030	8号竪穴建物跡北西	埋土下位	1a	完	3.2	1.9	0.7	3.1	頁岩					
S036	ぞ 031	8号竪穴建物跡	埋土上～中位	1a	先端	1.9	2.1	0.9	26	水晶		分析試料No.2	2/3	123	102
S037	ぞ 031	8号竪穴建物跡	埋土上～中位	4	完	2.5	1.4	0.6	1.3	頁岩			2/3	123	102
S038	ぞ 032	8号竪穴建物跡南東	埋土上～中位	1a	先端	(25)	1.7	0.8	26	頁岩	北上山地 中生代前期				
S039	ぞ 033	8号竪穴建物跡	埋土上～中位	1a	先端	(29)	1.5	0.4	1.5	頁岩					
S040	ぞ 034	8号竪穴建物跡東	埋土上～中位	1a	片側の基部	(31)	1.7	0.4	1.9	頁岩					
S041	ぞ 035	8号竪穴建物跡東	埋土上～中位	—	片側～基部	(31)	(1.3)	0.3	1.5	頁岩	北上山地 中生代前期				
S042	ぞ 036	8号竪穴建物跡	埋土上～中位	1b	完	3.4	2	1	4.4	頁岩					
S043	ぞ 037	9号竪穴建物跡	床面、石器No.3	1a	完	2.0	1.7	0.8	1.6	頁岩			2/3	123	102
S044	ぞ 038	10号竪穴建物跡	埋土中～下位	1a	完	4.1	1.9	0.5	2.6	頁岩			2/3	123	102
S045	ぞ 039	10号竪穴建物跡北	埋土中位	1a	完	2.7	1.8	0.5	1.1	頁岩			2/3	123	102
S046	ぞ 040	10号竪穴建物跡北	埋土中位	1a?	片側	(3.2)	(1.0)	0.3	1.1	頁岩					
S047	ぞ 041	10号竪穴建物跡北	埋土中位	1a	完	3.3	1.6	0.4	1.5	頁岩			2/3	123	102
S048	ぞ 100	10号竪穴建物跡 南	埋土上～中位	5	完	1.9	1.1	0.4	1	頁岩		未成品			
S049	ぞ 116	10号竪穴建物跡南	埋土上～中位	5		(1.7)	(2.0)	0.4	1	頁岩					
S050	ぞ 043	10号竪穴建物跡	埋土上～中位	5		2.7	2	0.3	2.4	頁岩					
S051	ぞ 043	10号竪穴建物跡	埋土上～中位	3b	完	4.4	2.2	1.1	11.4	頁岩					
S052	ぞ 117	11号竪穴建物跡石囲炉2周辺	床面	3b	完	4.2	2.6	0.8	7.8	砂岩	北上山地 中生代前期	基部丸凸。滴形。	2/3	123	102
S053	ぞ 044	11号竪穴建物跡北	1層	3b	完	2.4	1.1	0.5	1	頁岩			2/3	123	102
S054	ぞ 101	12号竪穴建物跡東	3層	1a	完	1.8	1.4	0.4	0.8	頁岩			2/3	123	102
S055	ぞ 046	14号竪穴建物跡	床面、石器No.1	1a	先端	(2.6)	1.3	0.4	1.3	頁岩		基部太め	2/3	123	102
S056	ぞ 047	II A22t	皿層下位～IV層	1a	完	3.8	1.9	0.5	2.5	珪質頁岩			2/3	123	102
S057	ぞ 048	24号竪穴建物跡南西	埋土下位	1a	完	3.2	2.0	0.7	2.9	頁岩	北上山地 中生代前期		2/3	124	102
S058	ぞ 049	24号竪穴建物跡南東	埋土下位	2	先端	2.7	2.9	0.7	3.3	頁岩			2/3	124	102
S059	ぞ 102	25号竪穴建物跡	埋土上～中位	1a	先端	(1.6)	1.8	0.4	0.9	頁岩			2/3	124	102
S060	ぞ 050	II A22t	皿層下位～IV層	1a	先端	3.3	2.0	0.5	2.2	頁岩			2/3	124	102
S061	ぞ 103	II A23t	皿層下位～IV層	1b	完	2.2	1.8	0.5	1.8	頁岩			2/3	124	102
S062	ぞ 051	II A24t	皿層下位～IV層	1a	両側の基部	3.6	1.6	0.6	2.7	頁岩			2/3	124	102
S063	ぞ 052	5号土坑	坑底、石器No.3	3a	完	2.5	1.1	0.5	0.9	頁岩			2/3	124	102
S064	ぞ 053	1号土坑	埋土一括	1a	完	1.9	1.1	0.4	0.9	頁岩			2/3	124	102
S065	ぞ 054	9号焼土遺構	燃焼面	1a	先端・片側基部	(3.4)	(1.5)	0.5	1.9	頁岩	北上山地 中生代前期		2/3	124	102
S066	ぞ 055	II A25s pp3	埋土	1a	先端	(3.3)	1.8	0.2	2.1	頁岩	北上山地 中生代前期		2/3	124	102
S067	ぞ 055	T3	表土～黒色土	1a	先端	2.5	1.6	0.4	2.1	頁岩		五角形気味	2/3	124	102
S068	ぞ 056	T3	黒色土	5?	完?	3.2	2.3	0.9	6.4	頁岩		未成品? 礫面残る。			
S069	ぞ 105	T401	皿層	1b	完	2.9	2.8	0.3	1	頁岩					
S070	ぞ 059	中央セクション	皿層	1b	完	4.1	3.1	1.3	1.4	頁岩			2/3	124	102
S071	ぞ 062	II A2v	皿層	3b	完	3	2.2	1	6	赤色頁岩	北上山地 中生代前期	五角形気味			
S072	ぞ 106	II A12y	皿層下位～IV層	3b	完	5.2	3	0.6	9.5	頁岩					
S073	ぞ 107	II A13x	皿層下位～IV層	1b	先端	(2.6)	1.4	0.3	1.3	頁岩					
S074	ぞ 063	II A13z	皿層下位～IV層	1a	完	3.7	1.8	0.5	2.3	頁岩					
S075	ぞ 064	II A14y	皿層下位	5	完	3.3	1.8	0.4	3.1	頁岩					
S076	ぞ 065	II A14y	皿層下位	—	先端・基部	3.4	2.3	0.8	9.1	頁岩	北上山地 中生代前期	未成品			
S077	ぞ 066	II A14y	皿層～IV層	1b	片側	2.6	(1.3)	0.3	1.1	頁岩					
S078	ぞ 067	II A14z	皿層下位～IV層	1a	先端	2.6	1.5	0.4	1.2	頁岩					
S079	ぞ 068	II A14z	皿層下位～IV層	5	先端	2.3	1.8	0.6	2.4	頁岩					
S080	ぞ 069	II A14z	皿層下位～IV層	—	基部	(2.5)	(1.7)	0.3	1.3	頁岩		未成品			
S081	ぞ 070	II A14z	皿層下位～IV層	1a	完	2.1	1.8	0.4	1.4	頁岩					

掲載番号	仮番号	出土地点	層位	分類	欠損	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	備考	掲載縮尺	図	写
S083	ぞ071	II A15y	Ⅲ層下位	1b	完	4.1	1.8	0.9	57	頁岩			2/3	124	102
S084	ぞ072	II A15v	Ⅳ層	3b	先端	4.4	2.7	0.9	81	頁岩			2/3	124	102
S085	ぞ073	II A16w	Ⅲ層下位	1a	先端	2.3	1.6	0.4	15	頁岩					
S086	ぞ074	II A16w	Ⅲ層下位	1a	先端	2.4	1.6	0.5	18	頁岩					
S087	ぞ094	II A17w	Ⅳ層	2	先端	3.5	1.1	0.5	16	頁岩			2/3	124	102
S088	ぞ075	II A17x	Ⅲ層下位	1b	先端	2.1	1.5	0.4	1	頁岩			2/3	124	102
S089	ぞ108	II A18x	Ⅲ層下位	1b	完	2.4	1.9	0.4	17	頁岩					
S090	ぞ093	II A19t	Ⅲ層下位～Ⅳ層	1a	片側基部	3.2	(2.1)	0.5	26	頁岩	北上山地 中生代前期	抉り深い			
S091	ぞ076	II A19u	Ⅳ層上位	1a	先端	3.5	1.9	0.6	39	頁岩					
S092	ぞ077	II A19u	Ⅲ層上位	1b	完	3.2	1.8	0.5	22	頁岩			2/3	124	102
S093	ぞ078	II A20t	Ⅲ層下位～Ⅳ層	1a	片側基部	2.9	(1.6)	0.4	15	頁岩		抉り深い			
S094	ぞ079	II A20t	Ⅲ層	1b	完	1.7	1.4	0.3	0.5	頁岩			2/3	124	102
S095	ぞ080	II A20t	Ⅲ層	1a	先端	(2.2)	1.6	0.6	1.5	頁岩					
S096	ぞ081	II A20v	Ⅳ層上位	1a	片側基部	2.3	(1.5)	0.3	0.9	頁岩					
S097	ぞ082	II A20v	Ⅳ層	1a	先端・片側基部	2.7	2.3	0.4	24	頁岩			2/3	124	102
S098	ぞ109	II A20v	Ⅲ～Ⅳ層	2	完	2.3	1.3	0.5	16	頁岩		基部太め	2/3	124	102
S099	ぞ110	II A20v	Ⅲ層下位～Ⅳ層	3a	完	2.3	1	0.3	0.9	頁岩					
S100	ぞ083	II A20u～21u	Ⅲ層下位	1a	片側基部	3.4	(1.6)	0.3	18	頁岩					
S101	ぞ084	II A21t	Ⅲ層～Ⅳ層	3b	完	3.5	2.5	0.9	54	頁岩	北上山地 中生代前期	基部丸凸。滴形。			
S102	ぞ085	II A21t	Ⅲ層～Ⅳ層	1a	先端・基部	(3.1)	(2.1)	0.4	18	頁岩	北上山地 中生代前期				
S103	ぞ086	II A21t	Ⅲ層～Ⅳ層	1a	完	2.1	1.9	0.3	0.9	頁岩	北上山地 中生代前期		2/3	124	102
S104	ぞ087	II A21t	Ⅲ層～Ⅳ層	1b	完	2.3	2.0	0.4	1.5	頁岩					
S105	ぞ111	II A21t	Ⅲ～Ⅳ層	1b	片側基部	1.9	(1.6)	0.3	0.8	頁岩					
S106	ぞ057	II A22t	沢跡埋土	3b	完?	2.8	1.6	0.6	2	頁岩		石雜?			
S107	ぞ058	II A22t	沢跡埋土	1b	完	2.0	1.5	0.3	0.6	頁岩			2/3	124	102
S108	ぞ112	II A23s (調査区西壁)	Ⅱ～Ⅲ層	1a	先端	(2.2)	1.8	0.3	1.4	頁岩					
S109	ぞ088	II A23s	Ⅱ～Ⅲ層	1b	先端・片側基部	(2.4)	(1.8)	0.3	1.5	頁岩					
S110	ぞ089	II A24u	Ⅲ層～Ⅳ層	3b	完?	3.9	1.4	0.6	2.3	頁岩		石雜? 黒色付着物。	2/3		102
S111	ぞ095	II A25r～25s (西トレンチ)	重複遺構埋土	1b	先端	(2.6)	1.7	0.4	1.9	頁岩					
S112	ぞ060	II A25r～25s	重複遺構埋土	1a	先端	2.2	1.3	0.3	0.6	頁岩			2/3	124	102
S113	ぞ061	木根2	表土～黒色土	2	基部	(2.3)	1.7	0.6	2.7	頁岩					
S114	ぞ090	調査区一括	表探	1a	完	3.2	2.8	0.5	2	頁岩					
S115	ぞ091	調査区一括	埋土中位	1b	先端・片側基部	(3.0)	(1.8)	0.3	2	頁岩					
S116	ぞ092	調査区一括	埋土上～中位	1b	先端・片側基部	(2.2)	(1.6)	0.3	1	頁岩					
S117	ぞ113	調査区一括	埋土下位	1a	完	3.1	2	0.4	1.9	頁岩					
S118	ぞ118	表探	埋土	一	基部	(2.1)	(1.8)	0.4	1.5	頁岩					
S118	ぞ118	表探	表土	一	基部	(2.1)	(1.8)	0.4	1.5	頁岩					

2 問木戸Ⅱ石匙観察表

掲載番号	仮番号	出土地点	層位	欠損	分類	調整	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	備考	掲載縮尺	図	写
SS119	さ001	3号竪穴建物跡南	埋土中位	完	横	刃部・つまみ部両面	2.5	4.4	0.9	5.4	頁岩			2/3	123	103
S120	さ002	8号竪穴建物跡西	埋土上～中位	完	横	刃部片側・つまみ部両面	4.8	4.7	0.9	13.7	頁岩			2/3	123	103
S121	さ003	8号竪穴建物跡	埋土上～中位	完	横	刃部・つまみ部両面	3.1	4.5	0.9	8.4	頁岩			2/3	124	103
S122	さ004	10号竪穴建物跡南	埋土下位	完	縦	刃部・つまみ部両面	6.2	1.6	0.8	6	頁岩			2/3	124	103
S123	さ005	24号竪穴建物跡 pit11	埋土	完	横	刃部・つまみ部両面	4.1	6.6	1.0	16.6	頁岩			2/3	124	103
S124	さ006	T 2	表土	刃部	縦	刃部・つまみ部両面 (5.8)	2	0.6	0.6	10.7	頁岩			2/3	124	103
S125	さ007	II A22t	沢跡埋土	完	縦	刃部・つまみ部両面	6.8	1.9	1.1	10.6	頁岩			2/3	124	103
S126	さ008	II A25 r～25s (西トレンチ)	重複遺構埋土	完	縦	刃部片側・つまみ部両面	6.4	2.0	1.1	10.4	頁岩			2/3	124	103
S127	さ009	II A24s	黒色土検出面	刃部	横	刃部片側・つまみ部両面	3.1	(4.4)	0.6	5.4	頁岩					

掲載番号	仮番号	出土地点	層位	欠損	分類	調整	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	備考	掲載縮尺	図	写
S128	さ 010	II A16x	表土～黒色土検出面	完	縦	刃部片面	5.6	1.8	0.5	6.4	頁岩					
S129	さ 011	II A13z	IV層下位～IV層	完	縦	刃部・つまみ部両面	5.7	2.4	0.7	6	頁岩			2/3	124	103
S130	さ 012	II A19v	IV層上位	刃部	横	刃部・つまみ部両面	2.8	(22)	0.4	2.2	頁岩		欠番			
S131																
S132	さ 014	II A20v	IV層上位	刃部	横	刃部・つまみ部両面	2.5	(41)	0.6	5.7	頁岩					
S133	さ 015	II A23s	III層	完	横	刃部片面・つまみ部両面	8.7	7.0	1.6	60.8	頁岩		特大	2/3	125	103
S134	さ 016	II A23s	III層	完	縦	刃部片面・つまみ部両面	5.3	3.5	0.9	10.2	頁岩					
S135	さ 017	II A24s ~ 24t	III～IV層	刃部	縦	刃部・つまみ部両面	(32)	(28)	0.8	6.3	頁岩		つまみ肥大			
S136	さ 018	II B14a	III層下位	刃部	縦	刃部・つまみ部両面	(40)	(25)	0.7	8.1	頁岩					
S137	さ 019	II B14a	III層下位	刃部	縦	刃部・つまみ部両面	(28)	(20)	0.9	4.9	頁岩					
S138	さ 020	調査区北壁	表土～黒色土検出面	完	縦	刃部片面・つまみ部両面	6.7	2.3	0.7	8.7	頁岩					
S139	さ 021	調査区一括	埋土上位	完	縦	刃部・つまみ部両面	6.7	3.2	0.7	11.7	頁岩		つまみ円形	2/3	124	103
S140	さ 022	2号建物跡東	埋土上位	完	縦	刃部・つまみ部両面	5.6	3.4	1.1	16.5	頁岩			2/3	124	103
S141	さ 023	8号建物跡北東	埋土上～中位	完	横	刃部・つまみ部両面	3.8	5.3	0.8	6.6	頁岩			2/3	125	103
S142	さ 024	12号建物跡西	3層	完	縦	刃部・つまみ部両面	5	3.2	0.4	6.6	頁岩	北上山地 中生代前期				
S143	さ 025	II A20t	IV層上位	未成品	-	つまみ部両面	4.3	3.8	0.3	5.3	赤色頁岩	北上山地 中生代前期	未成品			

3 間木戸 II 尖頭器観察表

掲載番号	仮番号	出土地点	層位	欠損	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	備考	掲載縮尺	図	写
S144	せ 001	II A18v	III層下位	先端	4.9	1.8	1.1	10.8	頁岩			2/3	125	103
S145	せ 002	II A18w	III～IV層	先端	3.9	2.7	1.6	15.9	頁岩			2/3	125	103
S146	せ 003	II A21t	III～IV層	先端	(42)	2.9	1.3	13.4	頁岩					
S147	せ 004	II A21v	IV層	先端	(33)	2.8	0.9	7.9	頁岩					
S148	せ 005	II A 2 3 s	IV層	完	10.5	2.2	1.2	23.7	頁岩			2/3	125	103
S149	せ 006	調査区一括	III層	基部	4.9	2.8	1.4	16.5	頁岩			2/3	125	103
S150	せ 007	II B10c	III層下位～IV層	先端	(80)	3.1	1.4	41.4	頁岩	北上山地 中生代前期		2/3	125	103
S151	せ 008	II A20u	III層	先端	8.4	2.9	1.7	31.7	頁岩	北上山地 中生代前期		2/3	125	103

4 間木戸 II スクレイバー観察表

掲載番号	仮番号	出土地点	層位	欠損	分類	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	備考	掲載縮尺	図	写
S152	ス 001	3号建物跡西	埋土上位		1	5.7	3.8	1.2	22.8	頁岩		礫面残る	2/3	126	103
S153	ス 002	4号建物跡北東	埋土一括		2	5.8	4.3	1.5	31.6	頁岩			2/3	126	103
S154	ス 003	8号建物跡東	埋土中～下位		2	5.4	2.3	1.5	15.8	頁岩			2/3	126	103
S155	ス 004	10号建物跡	埋土上～中位		1	5.7	5.2	2.2	68.5	頁岩					
S156	ス 005	7号建物跡北西北壁	埋土中～下位		2	8.4	3.9	0.7	28.1	頁岩					
S157	ス 006	7号建物跡南西	埋土中～下位		2	5.4	3.6	1	19.1	頁岩					
S158	ス 007	7号建物跡北	埋土中～下位		1	5.0	2.3	0.9	7	頁岩			2/3	126	103
S159	ス 008	10号建物跡	埋土上～中位		2	3	2.3	0.3	2.2	頁岩					
S160	ス 009	24号建物跡	床下		2	3.6	2.2	1.4	6.1	頁岩					
S161	ス 010	II A21t	埋土上～中位		2	4.1	1.9	0.6	5.8	頁岩					
S162	ス 011	II A19t	III層下位～IV層		1	3.9	3.3	0.9	12.6	頁岩					
S163	ス 012	II A20 w	IV層 (S110下)		2	5.5	3.2	1.5	26.7	頁岩					
S164	ス 013	II A20v	IV層上位		2	5.1	4.5	0.8	16.6	頁岩		円形	2/3	103	103
S165	ス 014	II A14z	III層下位～IV層		2	3.2	3.3	1.1	11.7	頁岩					
S166	ス 015	中央セクション	沢跡埋土		2	4.4	3.3	0.7	8.9	頁岩					
S167	ス 016	中央セクション	沢跡埋土		2	4.5	4.8	0.9	20.4	頁岩		円形	2/3	103	103
S168	ス 017	4号建物跡北	埋土上～中位		2	(39)	2.9	0.7	10.2	頁岩					
S169	ス 018	8号建物跡北西	埋土下位		2	(21)	2.1	0.5	3.2	頁岩					
S170	ス 019	II A21t	III層～IV層		2	(35)	2.6	0.6	6.4	頁岩					

5 問木戸Ⅱ石錐観察表

掲載番号	仮番号	出土地点	層位	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考	掲載縮尺	図	写
SI71	き 001	10号竪穴建物跡	埋土上～中位	4.5	1.7	1.3	7.5	頁岩		2/3	126	104
SI72	き 002	II A24u	III層～IV層	2.5	1.6	0.9	2.1	頁岩	つまみ有	2/3	126	104
SI73	き 003	8号竪穴建物跡南東	埋土上～中位	2.4	1.3	0.3	1.2	頁岩	礫面残る	2/3		104
SI74	き 004	II A20v	III層	3.1	1.3	0.5	1.9	頁岩	礫面残る	2/3		104
SI75	き 005	II A22s,22t	III～IV層	3.8	1.4	0.4	2.3	頁岩		2/3		104

6 問木戸Ⅱ石鏡観察表

掲載番号	仮番号	出土地点	層位	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	備考	掲載縮尺	図	写
SI76	へ 001	2号竪穴建物跡西	埋土上位	4.9	4.9	1.8	32.9	ホルンフェルス	北上山地	中生代前期の頁岩が中生代白亜紀に變成	2/3	126	104
SI77	へ 002	3号竪穴建物跡西	埋土中位	8.3	3.1	1.6	32.7	頁岩			2/3	126	104
SI78	へ 003	6号竪穴建物跡	埋土一括	5.2	3.1	1.6	21.1	頁岩			2/3	126	104
SI79	へ 004	II A19u	III層下位～IV層	6.2	3.6	1	28.6	頁岩		礫面残る			
SI80	へ 005	8号竪穴建物跡	埋土下位	(5.3)	2	1.3	16	頁岩	北上山地	中生代前期	2/3		104
SI81	へ 006	8号竪穴建物跡南東	埋土上～中位	6.4	4.5	1.4	41.6	頁岩			2/3		104
SI82	へ 007	II A21t	III～IV層	4.8	2.5	0.9	13.8	頁岩	北上山地	中生代前期			

7 問木戸Ⅱ椀形石器観察表

掲載番号	仮番号	出土地点	層位	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考	掲載縮尺	図	写
SI83	< 0 0 1	10号竪穴建物跡	埋土上位	2.4	2.6	0.8	7.1	頁岩	黒色付着物	2/3		104

8 問木戸Ⅱ不定形石器観察表

掲載番号	仮番号	出土地点	層位	RF/UF	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	掲載縮尺	図	写
SI84	不 001	3号竪穴建物跡西	埋土中位	UF	4.3	2	0.4	4.4	頁岩		2/3		104
SI85	不 002	4号竪穴建物跡北東	埋土一括	UF	2.6	1.5	0.4	1.8	頁岩				
SI86	不 003	8号竪穴建物跡南東	埋土上～中位	RF	2.7	3	0.9	6.7	頁岩				
SI87	不 004	10号竪穴建物跡 (調査区西壁)	埋土上～中位	UF	2.4	1.8	0.5	2.2	頁岩				
SI88	不 005	12号竪穴建物跡東	埋土上位	UF	2.6	2.9	0.3	3.2	頁岩				
SI89	不 006	24号竪穴建物跡南東	埋土下位	UF	2.5	1.9	0.3	2.3	珪質頁岩	北上山地中生代海期	2/3		104
SI90	不 007	II A21t	III層下位～IV層	RF	4.9	3.5	0.8	11.7	頁岩				
SI91	不 008	8号焼土遺構	覆土	RF	4.5	2.4	0.7	8.3	頁岩				
SI92	不 009	3号土坑	埋土上位	RF	3.4	2.5	0.7	6.9	頁岩				
SI93	不 010	5号土坑	I層	RF	3.1	2.8	0.4	2.3	頁岩				
SI94	不 011	4号竪穴建物跡南西の西側	重複遺構埋土?	UF	3.3	1.5	0.7	3.3	頁岩				
SI95	不 012	中央セクション	灰黄褐色土	UF	4.8	2.1	0.6	4.4	頁岩		2/3		104
SI96	不 013	T1	黒色土層	RF	3.9	2.9	0.7	8.6	頁岩				
SI97	不 014	T 7 坑張	黒色土層	RF	5.3	4.8	1.4	25.7	頁岩				
SI98	不 015	II A24t	II層	RF	2.7	1.7	0.7	3.2	頁岩		2/3		104
SI99	不 016	II A20u	黒色土検出面	RF	3.4	2.8	1.3	11.8	頁岩				
S200	不 017	II A16w	III層下位	UF	5.6	2.1	0.8	11.3	頁岩		2/3		104
S201	不 018	II A16y	III層下位	RF	3.6	2.6	0.9	7.8	頁岩				
S202	不 019	II A16z	III層下位～IV層	RF	2.3	2.1	0.6	3.3	頁岩				
S203	不 020	II A19t	III層下位～IV層	UF	3.3	2.1	0.5	4.2	頁岩				
S204	不 021	II A19t	III層下位～IV層	UF	4	2.8	0.9	8.7	頁岩				
S205	不 022	II A19u	III層下位～IV層	UF	1.8	1.8	0.3	1.6	頁岩				
S206	不 023	II A20u	III層上位	UF	2.2	2.5	0.8	7.7	頁岩				
S207	不 024	II A23u	III層下位～IV層	UF	3.9	2.4	0.5	5	頁岩				

9 間木戸Ⅱ石核観察表

掲載番号	仮番号	出土地点	層位	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	掲載縮尺	図	写
S208	核 001	2号竪穴建物跡 西	埋土上位	6.6	7	1.5	75.8	頁岩	北上山地 中生代前期	2/3		104
S209	核 002	中央セクション	沢跡埋土	3.4	4.6	1.6	20.9	頁岩	北上山地 中生代前期			
S210	核 003	II A17c	黒色土検出面	2.3	3.9	2.8	27.2	頁岩	北上山地 中生代前期			
S211	核 004	II A18x	表土～黒色土検出面	6.4	5.5	2.1	87.9	頁岩	北上山地 中生代前期			
S212	核 005	II B11b	皿層下位	6.2	8.3	2.9	159.4	頁岩	北上山地 中生代前期			
S213	核 006	II A15v	皿層以上	6.4	5.5	5.5	229.5	頁岩	北上山地 中生代前期	2/3		104
S214	核 007	II A21t	II～皿層下位	3.9	2.7	3	41.1	頁岩	北上山地 中生代前期			
S215	核 008	II A23s	皿層上位	4.2	5.6	2.7	90.9	頁岩	北上山地 中生代前期			
S216	核 009	II A19y	皿層下位	5.2	8.1	4.8	266.2	頁岩	北上山地 中生代前期			

10 間木戸Ⅱ石斧観察表

掲載番号	仮番号	器種	出土地点	層位	分類	形状	形	磨り	刃部	欠損	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	備考	掲載縮尺	図	写
S217	A001	石斧	1号竪穴建物跡	埋土一括	1	円	円	なし	なし		10.4	5.4	2	179.9	細粒閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀		1/2	127	105
S218	A002	石斧	3号竪穴建物跡 (石器No.1)	床面	磨製	円欠	円欠	あり	刃部		11	4.8	2.9	259	細粒閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀		1/2	127	105
S219	A003	石斧	3号竪穴建物跡 (石器No.2)	床面	磨製	円欠	円欠	あり	刃部		11.5	4.3	2.2	219.5	蛇紋岩	北上山地 早池峰山～宮守古生代オルドビス紀		1/2	127	105
S220	A004	石斧	17号竪穴建物跡	埋土一括	磨製	円	円	-	基部		(3.6)	5.1	2.1	54.4	細粒花崗閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀		1/2	127	105
S221	A005	石斧	II A16x	IV層	磨製	あり	あり	あり	備刃		9.9	4.8	2.4	179.8	蛇紋岩	北上山地 早池峰山～宮守古生代オルドビス紀		1/2	127	105
S222	A006	石斧	II A21t	不明	磨製	あり	あり	あり	基部		(7.8)	5.1	2.5	167.8	細粒閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀		1/2	127	105
S223	A007	石斧	II A23s (調査区西壁)	II～皿層	磨製	なし	円欠	なし	刃部		8.8	4.2	2.3	125	頁岩	北上山地 中生代前期		1/2	127	105
S224	A008	石斧	II A20v	皿層下位	磨製	あり	円欠	あり	基部・裏面		8.5	4.4	2.4	133	細粒閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀		1/2	127	105
S225	A009	石斧	T1	黒色土層	磨製	あり	円欠	あり	刃部・裏面		(10.4)	14.6	(1.4)	120	蛇紋岩	北上山地 早池峰山～宮守古生代オルドビス紀		1/2	127	105
S226	A010	石斧	II A19a	皿層下位～IV層	磨製	なし	円	なし	基部		10.2	5.1	3.1	288.9	細粒花崗閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀		1/2	128	105
S227	A011	石斧	2号竪穴建物跡南	埋土上位	打製	なし	擦型・直刃	なし	完		7.3	7.1	2.1	85.5	頁岩	北上山地 中生代前期		1/2	128	105
S228	A012	石斧	10号竪穴建物跡南	埋土下位	打製	なし	直刃	-	完		5.2	3.6	1.1	21.7	頁岩	北上山地 中生代前期	薄手	1/2	128	105
S229	A013	石斧	II A18w	皿層下位	打製	なし	不明	なし	-		8.1	7.2	2.4	198.2	頁岩	北上山地 中生代前期	未成品か	1/2	128	105
S230	A014	石斧	II A21s21t	暗緑色土下	磨製	あり	円欠	あり	基部・裏面		8.7	4.6	0.9	46	頁岩	北上山地 中生代前期		1/2	128	105
S231	A015	石斧	II A15v	IV層以上	磨製	あり	備刃	あり	完		9.8	1.9	1.4	41.1	頁岩	北上山地 中生代前期	小形。鑿。	1/2	128	105

11 間木戸Ⅱ敲磨器観察表

掲載番号	仮番号	出土地点	層位	形状	形	磨り	分類	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	備考	掲載縮尺	図	写	
S232	B001	26号竪穴建物跡 南・東	埋土下位	1	円	両	1b	8.1	7.6	3.6	320.8	細粒花崗閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀					
S233	B002	26号竪穴建物跡 北角	床面	1	円欠	両	1b	(5.7)	7.6	3.4	224.8	閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀		1/3	128	106	
S234	B003	26号竪穴建物跡 北角 (木根)	埋土中位	1	円	両	1b	9.1	9.2	5.7	727.5	閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀					
S235	B004	2号竪穴建物跡 (石器No.1)	床面	3	扁平欠	側	2c	(10.6)	5.6	4.3	339.1	砂岩	北上山地 中生代前期	側面 (磨り部) 加工調整	1/3	128	106	
S236	B005	2号竪穴建物跡 南	埋土上位	2	扁平欠三	側	1bc	(7.6)	6.3	6.3	345.7	花崗岩	北上山地 中生代白亜紀					
S237	B006	II A24s	皿層～IV層	2	円	両	1be	8.1	6	4.7	364.6	閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀					
S238	B007	3号竪穴建物跡 (石器No.3)	床面	2	円	側・上	1bce	11.8	6	4.2	356.3	細粒閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀	凹み激しい	1/3	128	106	
S239	B008	3号竪穴建物跡 (石器No.5)	床面	1	円	両	1bd	6.9	4.8	2.8	135.2	花崗岩	北上山地 中生代白亜紀		1/3	128	106	
S240	B009	3号竪穴建物跡 (石器No.6)	床面	1	円	表	1a	6.9	6.3	2.8	175.2	ホルンフェルス	北上山地 中生代前期の頁岩が中生代白亜紀に變成		1/3	129	106	
S241	B010	3号竪穴建物跡 南	埋土上位	2	円	両	1b	15.2	13.5	8.9	2911.3	閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀					
S242	B011	3号竪穴建物跡 東	2層	1	円	両	1be	10.5	7.8	6.5	838.1	閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀					
S243	B012	3号竪穴建物跡 東	2層	1	扁平	両	1b	15.1	8.2	6.1	1314.1	閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀	赤色物 (焼土?) 付着				
S244	B013	3号竪穴建物跡 西	4層	3	扁平欠	側	2c	(8.4)	4.3	6.8	370.2	花崗閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀					
S245	B014	3号竪穴建物跡 東	3層	3	扁平欠	側	2c	(5.5)	2.2	4.4	87	砂岩	北上山地 中生代前期					

掲載番号	仮番号	出土地点	層位	形状	形	磨り	分類	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	備考	掲載縮尺	写真	
S246	B015	3号竪穴建物跡 北	3層	3 棒	不明	多面	3bd	(6.5)	5.1	4.1	190.3	細粒花崗閃緑岩	北上山地	磨り多面	1/3	129 106	
S247	B016	3号竪穴建物跡 北	3層	3 棒	不明	側	3ce	11.8	6	4.2	356.3	細粒花崗閃緑岩	北上山地	破き激しい ほぼ欠損	1/3	129 106	
S248	B017	3号竪穴建物跡 西	3層	1 不明													
S249	B018	3号竪穴建物跡 東	埋土中位	1 円	表	表	1a	64	58	4.4	238.6	花崗岩	北上山地				
S250	B019	3号竪穴建物跡 東	埋土中位	3 扁平欠三	側	側	2c	(8.2)	6.9	6.3	556.8	花崗岩	北上山地				
S251	B020	4号竪穴建物跡 炉	炉石	3 扁平欠三	側	側	2ce	(14.1)	6.5	7.7	842.2	花崗斑岩	北上山地				
S252	B021	4号竪穴建物跡 炉	炉石	3 扁平欠三	側	側	2cd	16	8.7	5.3	1977.6	砂岩	北上山地	側面(磨り部)、下部が調整加工されている	1/3	129 106	
S253	B022	4号竪穴建物跡 南	埋土上～中位	2 円欠	表	表	1ae	75	(5.7)	3	208.6	花崗岩	北上山地				
S254	B023	4号竪穴建物跡 西	埋土上～中位	2 円欠	表	表	1ae	99	10.1	4	475	砂岩	北上山地				
S255	B024	4号竪穴建物跡 南西	埋土一括	3 扁平欠三	側	側	2ce	(9.9)	5.2	6.8	477.8	砂岩	北上山地				
S256	B025	5号竪穴建物跡 石囲炉1	石器No.1	2 円	側	側	1b	8	5.7	3.9	292.6	閃緑岩	北上山地				
S257	B026	5号竪穴建物跡 石囲炉1	1層上面	1 円	表	表	1a	11.3	8.3	4.3	691.4	閃緑岩	北上山地				
S258	B027	6号竪穴建物跡 北	床面	3 扁平欠五	側	側	2bc	11.1	7.7	7	684.9	花崗岩	北上山地				
S259	B028	6号竪穴建物跡	埋土中位	3 扁平欠三	側	側	2c	(9.4)	6.5	6.3	480.7	砂岩	北上山地				
S260	B029	6号竪穴建物跡	埋土一括	3 扁平欠三	側	側	2c	(6.1)	5.5	8	286.7	花崗岩	北上山地				
S261	B030	6号竪穴建物跡	埋土一括	3 棒欠	側	側	3ce	13.5	4.1	4.2	431.3	砂岩	北上山地	スズ付着	1/3	130 106	
S262	B031	7号竪穴建物跡 西	埋土下位	1 円	側	側	1b	7.4	5.5	3.2	188.4	閃緑岩	北上山地				
S263	B032	7号竪穴建物跡 西	埋土下位	2 円	側	側	1be	7.7	6.3	3.3	242.6	花崗岩	北上山地				
S264	B033	7号竪穴建物跡 西	埋土下位	2 円	側	側	1be	7.3	6	4.4	298.1	花崗岩	北上山地				
S265	B034	7号竪穴建物跡 北西	埋土上～中位	3 扁平欠三	側	側	2cd	(8.2)	4.9	5.5	300	花崗岩	北上山地				
S266	B035	7号竪穴建物跡 南西	埋土中～下位	3 棒欠	側	側	3cd	(7.2)	3.8	5.3	171.8	砂岩	北上山地				
S267	B036	8号竪穴建物跡	床面	2 円	側	側	1bd	12.2	8	5	724.1	花崗岩	北上山地	側面に敲打痕	1/3	130 106	
S268	B037	8号竪穴建物跡 北西	埋土下位	3 扁平欠三	側	側	2c	(10.2)	4.4	7.1	436.9	砂岩	北上山地				
S269	B038	8号竪穴建物跡 北西	埋土下位	3 扁平欠三	側	側	2c	12.9	5.8	6.6	338.8	閃緑岩	北上山地	側面(磨り部)加工調整	1/3	130 106	
S270	B039	8号竪穴建物跡 南東	埋土下位	1 円	側	側	1bd	12.9	9.8	2.4	1320.7	閃緑岩	北上山地				
S271	B040	8号竪穴建物跡 西	埋土上～中位	不明													
S272	B041	10号竪穴建物跡 北	埋土下位	2 円	側	側	2cd	17.2	9.3	4.8	1299.3	閃緑岩	北上山地				
S273	B042	10号竪穴建物跡 (調査区西壁)	埋土上～中位	3 扁平三	側	側	2c	17.7	6.7	7.6	1262.7	花崗閃緑岩	北上山地				
S274	B043	10号竪穴建物跡 (調査区西壁)	埋土上～中位	2 円	側	側	1be	10.3	7.4	3.9	491.4	閃緑岩	北上山地				
S275	B044	10号竪穴建物跡 (調査区西壁)	埋土上～中位	2 円	側	側	1be	(4.0)	(9.2)	4.8	236.4	閃緑岩	北上山地				
S276	B045	10号竪穴建物跡	埋土上～中位	2 円	側	側	1bd	8.3	5.4	4.6	294.4	花崗岩	北上山地				
S277	B046	11号竪穴建物跡 石囲炉1周辺	床面	1 円	側	側	1b	5.7	7.9	4.6	247.6	閃緑岩	北上山地	スズ付着	1/3	131 106	
S278	B047	12号竪穴建物跡 東	埋土下位	2 円	表	表	1ad	6.9	5.7	6.2	364.5	閃緑岩	北上山地				
S279	B048	14号竪穴建物跡 北	2層	1 楕円	側	側	1b	12.1	7.7	4.1	651.1	閃緑岩	北上山地				
S280	B049	18号竪穴建物跡 (石器No.1)	埋土下位	1 円	側	側	1b	8.9	7.9	4.9	554.2	閃緑岩	北上山地				
S281	B050	18号竪穴建物跡 (石器No.2)	埋土下位	1 円	側	側	1b	10.4	9.1	4.3	670.4	閃緑岩	北上山地				
S282	B051	18号竪穴建物跡 (石器No.3)	埋土下位	1 円	側	側	1b	12.7	9	4.4	803.8	花崗岩	北上山地				
S283	B052	20号竪穴建物跡 東	埋土上～中位	2 円	側	側	1bd	9.6	7.6	2.7	315.7	花崗岩	北上山地				
S284	B053	20号竪穴建物跡 東	埋土上～中位	1 円	側	側	1b	7.4	7.3	5.7	464.2	閃緑岩	北上山地				
S285	B054	20号竪穴建物跡	床面	1 円	側	側	1b	7.9	6.4	2.6	227	閃緑岩	北上山地				
S286	B055	20号竪穴建物跡	床面	3 さんかく	側	側	2c	9.4	8.2	6	1021.5	細粒花崗閃緑岩	北上山地	側面(磨り部)加工調整	1/3	131 106	
S287	B056	25号竪穴建物跡	埋土上～中位	3 扁平欠三	側	側	2ce	(9.8)	3.1	6.8	368.2	花崗岩	北上山地	被熱			
S288	B057	II A21t	III～IV層	1 円	側	側	1b	11.7	9.6	4.9	820.1	花崗斑岩	北上山地	縁辺加工調整			
S289	B058	II A21t	III～IV層	3 扁平欠三	側	側	2c	(8.8)	2.4	7.3	269.9	細粒閃緑岩	北上山地				
S290	B059	II A21t	III～IV層	2 円	側	側	1ce	(11.8)	7.6	4.3	685.9	閃緑岩	北上山地				
S291	B060	中央セクション	沢跡埋土	3 扁平欠三	側	側	2c	(9.1)	3.1	7	410.3	閃緑岩	北上山地				
S292	B061	II A24u	III～IV層	1 円	側	側	1b	11.7	7.9	5.3	832.9	閃緑岩	北上山地				
S293	B062	II A20u	III層下位～IV層	3 扁平欠三	側	側	2c	8.6	6.2	2.1	167.2	細粒花崗閃緑岩	北上山地	側面(磨り部)加工調整	1/3	131 106	
S294	B063	II A20u	III層下位～IV層	3 扁平欠三	側	側	2c	(7.3)	3.9	6.6	230.9			側面(磨り部)加工調整			

掲載番号	仮番号	出土地点	層位	形状	形	磨り	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	掲載縮尺	図	写真
S295	B064	II A15x	III層下位	3 扁平欠	側	側	2c	(6.3)	2.4	8	186.1						
S296	B065	II A15w	III層下位	3 扁平欠	側	側	2c	(11.2)	2.2	8.2	314.3			側面(磨り部)加工調整			
S297	B066	II A21t	III~IV層	3 扁平欠	側	側	2c	(10.1)	3.8	7.5	467.1			下部が調整加工されている			
S298	B067	排土		3 扁平三	側	側	2cd	12.7	7.5	5.7	833	閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀		1/3	131	107
S299	B068	II A14x	表土~黒色土検出面	1 円	表	表	1a	8.1	5.8	3.7	282.8	閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀		1/3	131	107
S300	B069	II A18w	III~IV層	2 円	両	両	1be	8.7	6.9	5.8	547.1	閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀				
S301	B070	II A20v	III層	1 円	両	両	1b	7.2	4.7	3.1	175.6						
S302	B071	II A20t	III層下位~IV層	3 扁平欠三	側	側	1bd	(13.4)	4.6	6	390.8						
S303	B072	II A20u	III層下位	3 扁平欠台	両側	両側	2c	12.9	6.3	5.2	1443.1				1/3	131	107
S304	B073	II A20v	IV層上位	1 円	両	両	1b	6.4	5.6	4.2	236.5						
S305	B074	II A20v	IV層上位	1 円	両	両	1b	10.3	10	5.2	885.2						
S306	B075	II A21t	III~IV層	3 扁平欠台	側	側	2ce	11.3	7.1	5.3	907.6	細粒閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀	側面(磨り部)加工調整	1/3	132	107
S307	B076	II A23u	III~IV層	3 扁平欠三	側	側	2c	9.6	5.3	6.6	450.7						
S308	B077	II A20u	III層下位~IV層	1 円	両	両	1b	10.8	8.5	4.2	554						
S309	B078	II A19u	IV層上位	3 扁平欠	側	側	2c	(5.9)	4.8	7.8	340						
S310	B079	II A18x	III層下位	3 扁平欠	側	側	2c	(7.7)	3.3	(4.5)	187.3						
S311	B080	II A18w	IV層上位	3 扁平	側	側	2c	15	6.6	4.3	893	閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀		1/3	132	107
S312	B081	II A21t	III~III b相当層	3 扁平欠	側	側	2c	(11.7)	4.8	6.7	458.7						
S313	B082	II A21t	III~III b相当層	1 円	表	表	1a	9.5	7.9	3.5	450.9						
S314	B083	II A21t	III~III b相当層	1 円	両	両	1b	11.9	8.7	6.1	931						
S315	B084	II A19t	IV層上位	3 扁平欠三	側	側	2c	(7.1)	2.6	5.1	177.3						
S316	B085	II A19t	IV層上位	3 扁平台	側	側	2c	15.4	6.3	8.1	1018.2						
S317	B086	II A24s	II~III層	1 円	両	両	1b	8.1	6.5	5	362.9						
S318	B087	II A19t	III層下位~IV層	3 扁平?三	側	側	2cd	12.8	6.9	6.2	1464.6	細粒花崗閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀	スス付着	1/3	132	107
S319	B088	II A19t	III層下位~IV層	1 円	両	両	1b	9.7	8.4	5.1	660.9			黒色物付着			
S320	B089	II A14y	III層下位~IV層	3 扁平欠三?	側	側	2c	(10.5)	4.8	7.5	604.9						
S321	B090	II A20v	IV層(S10下)	2 榿	側	側	3cd	11.6	4.7	5.4	445.6	花崗岩	北上山地 中生代白亜紀	茶色物付着	1/3	132	107
S322	B091	II A20v	IV層(S10下)	3 扁平?欠三	側	側	2c	(10.5)	5.1	7.6	485.1						
S323	B092	II A15z	III層下位	1 円	表	表	1a	10.9	9.1	6.2	845.4						
S324	B093	II A19u	III層下位~IV層	1 円(欠)	両	両	1b	(11.4)	(7.4)	5.8	646.5						
S325	B094	T1	黒色土層	1 円	表	表	1a	8.9	7.9	5.5	499.5			黒色物付着、ツルツル			
S326	B095	63	黒色土検出面	1 円	両	両	1b	15.3	12.8	5.7	1701.7						
S327	B096	47	黒色土検出面	2 円	なし	なし	1e	12.9	10.5	7	1403.3	花崗閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀	茶色物付着	1/3	132	107
S328	B097	II A21u	IV層上位	1 円	両	両	1b	11.7	8.3	6.1	896.8						
S329	B098	II A24s(調査区壁)	III層	3 扁平欠三	2側	2側	2c	(7.5)	3.7	6.6	280.8						
S330	B099	II A24s(調査区壁)	III層	3 扁平欠	側	側	2c	(7.8)	5.4	7.5	454.7						
S331	B100	II A21t	II~III層	1 円	両	両	1b	10	6.5	4	400.9						
S332	B101	II A13x	III層下位	3 扁平欠	側	側	2c	(9.8)	8.5	3.3	499.9						
S333	B102	調査区南端	III層以下(暗褐色土)	2 円	表	表	1ade	11.7	8.5	4.3	690.6						
S334	B103	調査区南端	III層以下(暗褐色土)	2 円	両	両	1be	7.5	7	3.5	285.1			下部が調整加工されている			
S335	B104	調査区南端	III層以下(暗褐色土)	1 円	両	両	1b	10.7	8.8	4.8	698.8						
S336	B105	II A24s	不明	1 円欠	多面?	多面?	1b	—	—	—	—			ほぼ欠損			
S337	B106	II B13a	III層下位~IV層	1 円	両	両	1b	8	6	4.3	336.1			スス?付着			
S338	B107	II B14a	III層下位	2 円欠	側	側	1ce	(8.4)	2.9	6.4	197.6			縦割、スス?付着			
S339	B108	調査区南端	III層以下(暗褐色土)	3 扁平欠	両	両	2b	(7.9)	6.3	4.7	302.1						
S340	B109	II A21s,21t	暗褐色土下	3 扁平欠三	側	側	2c	10.1	6.4	6	356.3				両端調整加工		
S341	B110	T1	黒色土層	3 扁平欠	側	側	2c	(7.7)	3	7.8	310.4						
S342	B111	調査区一括		3 扁平三	側	側	2cd	15.1	4.1	5.4	427.5						
S343	B112	調査区一括		1 円	表	表	1a	8.7	8	7.5	726.4						
S344	B113	調査区一括		1 円	両	両	1b	8.3	6.9	5.7	459.7						

掲載番号	仮番号	出土地点	層位	形状	形	磨り	分類	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	備考	掲載縮尺	図	写真
S345	B114	調査区一括		1 円	円?三?	面に	1b	6.7	4.7	3.4	153.3						
S346	B115	調査区一括		1 円	円?三?	全体に削痕	1b	9.7	7	5.2	443.7	凝灰岩	北上山地	中生代前期	スス付着、黒光りしている。	1/3	132 107
S347	C001	II A21t	III層		棒状	なし	3d	12	4.3	3.7	287.9	細粒花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀		1/3	132 107
S348	C002	II A14z	III b ~ IV層		棒状	なし	3d	12.5	5.2	4.1	438.1						
S349	D001	26号竪穴建物跡 南・東	埋土下位		棒状欠け												
S350	D002	II A20v	III層下位~IV層		棒状欠け	なし	3e	6.2	4.1	2.2	87.8	細粒花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	画面凹み	1/3	132 107
S351	A001	1号竪穴建物跡	埋土一括	1	棒状欠け	なし	3d	10.4	5.4	2	179.9	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	先端と正面に敲打痕		

12 間木戸Ⅱ砥石観察表

掲載番号	仮番号	出土地点	層位	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	備考	掲載縮尺	図	写真
S352	F001	26号竪穴建物跡 南・東	埋土下位	18.5	6.8	3.1	781.1	砂岩	北上山地	中生代前期	片面平滑	1/3	107
S353	F002	3号竪穴建物跡 東	埋土上位	8.1	(5.9)	2.8	111.3	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	片面平滑		
S354	F003	4号竪穴建物跡 南東壁付近	埋土一括	6.9	3.7	1.7	33	砂岩	北上山地	中生代前期	溝の真	1/3	132 107

13 間木戸Ⅱ台石観察表

掲載番号	仮番号	出土地点	層位	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	備考	掲載縮尺	図	写真
S355	E 001	26号竪穴建物跡 北	3層	—	—	4.9	299.6			片面平滑。欠けまくり			
S356	E 002	3号竪穴建物跡 西	2層	(5.7)	(5.1)	5.7	333.9	砂岩		画面平滑。砥石か。			
S357	E 003	3号竪穴建物跡 西	2層	(21.4)	(14.4)	13.4	7900	花崗斑岩		2面平滑			
S358	E 004	26号竪穴建物跡 北	埋土中位	(14.3)	(14.8)	5.6	2368.8			片面平滑			
S359	E 005	5号竪穴建物跡 石囲炉1	石組No.1	(17.7)	(15.7)	6	2320.6			片面平滑			
S360	E 006	7号竪穴建物跡 西	埋土下位	(9.3)	(9.2)	5.3	736.8			画面平滑			
S361	E 007	7号竪穴建物跡 西	埋土下位	(11.0)	(9.9)	4.6	840.8	砂岩		片面平滑			
S362	E 008	7号竪穴建物跡 南西	埋土中~下位	—	—	4.3	667.6			片面平滑。欠けまくり			
S363	E 009	8号竪穴建物跡	埋土下位	—	—	4.4	305.5			画面平滑。欠けまくり			
S364	E 010	3号土坑 (石器No.1)	1層	(17.8)	(17.5)	7.5	4025.3			片面平滑			
S365	E 011	3号土坑 (石器No.3)	2層	(7.1)	10.1	3.9	495.5			画面平滑			
S366	E 012	3号土坑 北半	1層	26.7	25.2	9.4	11000			画面平滑。整形されている	1/4		107
S367	E 013	12号竪穴建物跡 (石器No.2)	床面					花崗斑岩	北上山地	中生代白亜紀	片面平滑、凹凸あり	1/4	108
S368	E 014	3号竪穴建物跡	2層					花崗斑岩	北上山地	中生代白亜紀	片面平滑	1/4	108
S369	E 015	9号竪穴建物跡 南	床面	28.2	24.2	3.9	4592.8	花崗斑岩		画面平滑			

第8表 石製品観察表

掲載番号	仮番号	出土地点	層位	種類・形状	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	備考	掲載縮尺	図	写
G011	Z016	6号堅穴建物跡	床面	石棒	34.2	11	7.8	5460	砂岩	北上山地 中生代前期	正面凹む。下部を平らに打ち削っている	1/4	133	101
G012	Z013	3号土坑 (石器 No. 2)		石棒 (欠)	(29.8)	11.9	10.9	5280	花崗岩	北上山地 中生代白亜紀		1/4		101
G013	Z014	II A18x (石棒 No.1)	III層下位	石棒 (欠)	(10.7)	7.2	6.6	548	砂岩	北上山地 宮古層群? 中生代白亜紀		1/4	133	101
G014	Z006	22号堅穴建物跡	埋土一括	有孔	6.5	6.6	3.5	215.7	砂岩	北上山地 中生代前期	穿孔1カ所	1/4	133	101
G015	Z002	7号堅穴建物跡 西	埋土下位	半月形	9.2	17.8	3.8	758.1	頁岩	北上山地 中生代前期	凹形状に作り出しから、半月形にするため打ち削っている。	1/4	133	101
G016	Z008	II A20v	III層下位~IV層	円形	10.2	8.6	2.5	355.7	デイスイト	北上山地 中生代前期	窪の形状を生かす部分と、打ち削っている部分とで凹形状。	1/4		101
G017	Z010	II A16y	III層下位	円形	8.4	7	1.8	171			扁平			
G018	Z012	26号堅穴建物跡 南東	埋土下位	棒状	(11.4)	3.6	3.1	220.2	花崗閃緑岩	北上山地宮古岩体 中生代白亜紀	断面台形。砥石か。			
G019	Z015	26号堅穴建物跡 南・東	埋土下位	棒状	13.1	4.5	3	267.6			下部を平らに打ち削っている	1/4		
G020	Z001	3号堅穴建物跡 東	埋土上位	棒状	20.1	2.6	1.7	151.7	頁岩	北上山地 中生代前期	凹痕深い。		133	101
G021	Z003	8号堅穴建物跡 西	埋土上~中位	不明	7.2	3.8	2.8	25.7	軽石	不明				
G022	Z004	10号堅穴建物跡	埋土上~中位	不明	(4.7)	(5.3)	(2.9)	120.9	花崗閃緑岩	北上山地宮古岩体 中生代白亜紀	平滑面あり。角張る。			
G023	Z005	20号堅穴建物跡 東	埋土上~中位	不明										
G024	Z011	II A22g	層位不明	不明	(21.3)	(5.2)	8.8	732			石棒の一部か。			
G025	Z007	調査区一括		不明	(9.8)	4.8	3.5	186.6			平滑面あり。砥石か。			
G026	Z009	調査区一括		不明	15	10.5	8	2213.3			石棒の一部か。			
G027	装 001	II A22t 沢跡	埋土下位	球状耳飾り	3.8	(1.9)	0.5	5.2	蛇紋岩	北上山地 早池峰山~宮守 古生代オールドビス紀	穿孔1カ所あり。	1/2	133	101
G028	装 002	II A22a 沢跡	埋土下位	装飾品	(4.9)	(2.4)	0.4	4	不明			1/2	133	101
G029	装 003	木根3	表土~黒色土検出面	輪	(1.0)	(1.9)	0.4	1.2	滑石	北上山地 早池峰山~宮守 古生代オールドビス紀	穿孔1カ所あり。	1/2	133	101
G030	装 004	II A21v	IV層	球状耳飾り	4.3	(2.0)	0.2	4	頁岩	北上山地 中生代前期		1/2	133	101
G031	装 005	4号堅穴建物跡	埋土上~中位	浮子	(7.6)	4.9	1.9	7.3	軽石	十和田火山? 新生代代四紀	穿孔1カ所あり。	1/2	133	101

第9表 鉄製品観察表

掲載番号	仮番号	種類	出土地点	層位	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	備考	図	写
G032	鉄 01	26号堅穴建物跡	床面	(7.6)	4	0.7	18.2	鉄鏃	茎下部欠	154	101
G033	鉄 02	26号堅穴建物跡	床面	(12.8)	0.7	0.6	9.3	鉄鏃柄部	鏃身下部欠	154	101
G034	鉄 03	26号堅穴建物跡	床面	(9.6)	1.3	0.5	9.5	鉄鏃	茎下部欠	154	101
G035	鉄 04	26号堅穴建物跡	貼床	- 4.9	0.7	0.5	18.8	刀子柄部	柄の一部		101
G036	鉄 05	II A21t	III~IV層	14.3	1.8	1.1	65.1	くさび?	近世~近代		101
G037	鉄 08	II A13y	III層下位~IV層	2.5	1.5	1.0	6.9	鉄鏃	合わせ目広め	154	101
G038	鉄 09	II A14y	III層下位~IV層	- 4.8	0.5	0.5	3.59	鉄鏃柄部	断面長方形		101

第10表 銭貨観察表

掲載番号	仮番号	種類	出土地点	層位	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	備考	図	写
G039	銭 01	寛永通宝	II A13a	表土	2.4	2.4	0.1	2.3	裏面無刻 (一文)	133	101
G040	銭 02	寛永通宝	II B11a	III層上位	2.3	2.3	0.1	2.5	裏面無刻 (一文) 古寛永	133	101

第 11 表 鉄滓出土一覽表

遺構名	袋No	A				A'				B				C				計						
		1	2	2'	3	4	1	2	2'	3	4	1	2	2'	3	4								
26号竪穴建物跡北・埋土上～中位	1																39.7							
27号竪穴建物跡・I層・2層	2																	39.7						
30号竪穴建物跡南東・埋土上～中位	3									19.8													19.8	
17号竪穴建物跡北西・埋土上～中位	4									62.3														62.3
T1・黒色土層	5																							11.9
T2・表土	6																							7.2
T3・表土～黒色土	7									60.4														182.4
T3坑(下)・黒色土	8		19.4							329.6														349.0
T3・黒色土層上部	9		36.3																					36.3
T4・表土～黒色土	10																							45.3
T4・黒色土～黒色土以下	11																							10.2
T45間・表土	12										21.9													21.9
T6・表土	13										7.5													21.8
T7・黒色土層	14																							7.5
T8・表土	15																							15.3
ⅡA24t・Ⅲ層～Ⅳ層	16		28.8							66.3														18.2
ⅡA24t・Ⅲ層～Ⅳ層	17																							107.6
ⅡA23t・Ⅲ層～Ⅳ層	18																							107.6
ⅡA22t・Ⅲ層～Ⅳ層	19	112.9									167.0													100
ⅡA23a・Ⅲ層～Ⅳ層	20																							100
ⅡA23t・Ⅲ層～Ⅳ層	21																							197
ⅡA23t・Ⅲ層～Ⅳ層	22									93.6														418
ⅡA23t・Ⅲ層～Ⅳ層	23																							4.5
ⅡA21v・Ⅲ層～Ⅳ層	24		88.0																					88.0
ⅡA19v・Ⅲ層～Ⅳ層	25									43.5														56
ⅡA19a・Ⅲ層～Ⅳ層	26	28.5	156.5																					185.0
ⅡA15v・Ⅲ層～Ⅳ層	27										44.4													10.9
ⅡA18x・Ⅲ層～Ⅳ層	28																							1.5
ⅡA16x・Ⅲ層～Ⅳ層	29																							1.5
ⅡB12a・Ⅲ層下位	30																							56.1
ⅡB13a・Ⅲ層下位～Ⅳ層	31																							90.6
ⅡB14a・Ⅲ層下位	32																							56.3
ⅡA13v・Ⅲ層下位～Ⅳ層	33										26.6													89.9
ⅡA13z・Ⅲ層下位～Ⅳ層	34									91.0														63.3
ⅡA14x・Ⅲ層上位	35										17.9													3.4
ⅡA14z・Ⅲ層下位	36																							9.2
ⅡA15v・Ⅳ層	37																							34.8
ⅡA15w・Ⅲ層下位	38																							41.1
ⅡA18w・Ⅲ層～Ⅳ層	39																							5.4
ⅡA20t・Ⅲ層	40																							37.7
ⅡA21t・Ⅲ層～Ⅳ層	41		55.4								37.7													66.6
ⅡA21v・Ⅳ層	42										11.2													25.9
ⅡA22s・Ⅳ層上位	43																							27.9
ⅡA22s・22t Ⅲ～Ⅳ層	44		5.5								22.4													49.2
ⅡA22t・Ⅳ層上位	45										9.9													13.8
調査区北壁・表土～黒色土	46																							115.5
地点不明 → 調査区一拵	47																							52.1

V 間木戸V遺跡の調査

1 概 要

(1) 遺構数・遺物数

間木戸V遺跡は沢を挟んで間木戸II遺跡の北側に隣接する遺跡である。確認された遺構は縄文時代の竪穴建物跡2棟、焼土遺構1基、埋設土器1基、古代の竪穴建物跡1棟、土坑3基、焼土遺構3基、工房跡2基、製鉄炉5基、炭置き場跡2基、柱穴2個、排滓場1箇所、包含層1箇所、時代不明の土坑2基、不明遺構1基、柱穴6個、遺物は縄文土器大コンテナ1箱、石鏃、敲磨器等の石器25点、土師器大コンテナ1と1/3箱、土製紡錘車2点、鉄鏃等の鉄製品4点、羽口中コンテナ1箱、炉壁中コンテナ2箱、鉄滓中コンテナ33.5箱である。

基本的な調査方法は間木戸II遺跡と同じであるので、第三章を参照して頂きたい。

(2) 遺 構 名 称 (第12表)

野外調査で使用した仮名称は、報告書掲載にあたり、S I Oを○号竪穴建物跡、S K △を△号土坑といったように変更している。詳細は、第12表で対比していただきたい。

(3) 層 序 (第134図)

層序は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課が行った試掘の際の層序観察を基本としながら、以下の通り分層した。

I層：10YR3/2黒褐色シルト層。粘性無し、締まりやや無し。表土層。暗褐色シルトがブロック状（7～10%）で混入する。植物の根の影響が大きい。層高が地点によって異なるが最大で60cmである。

II層：10YR2/1～2/2黒～黒褐色シルト層。粘性無し、締まり中。風化した花崗岩を起源とする堆積層である。北側の斜面ではしまりがある。主に古代以降の遺物を包含する。層高は10～20cmである。

III層：10YR3/3暗褐色シルト層。粘性無し、締まりやや有り。

III a層：10YR3/3～4/3暗褐～にぶい黄褐色砂層。粘性・締まり無し。調査区の南半（標高24.5m周辺）で確認される。

III b層：10YR3/3暗褐色砂層。粘性・締まり無し。炭化物を多く含む。調査区の南半（標高24.5m周辺）で確認される。

IV層：10YR2/3黒褐色シルト層。粘性無し、締まりやや有り。

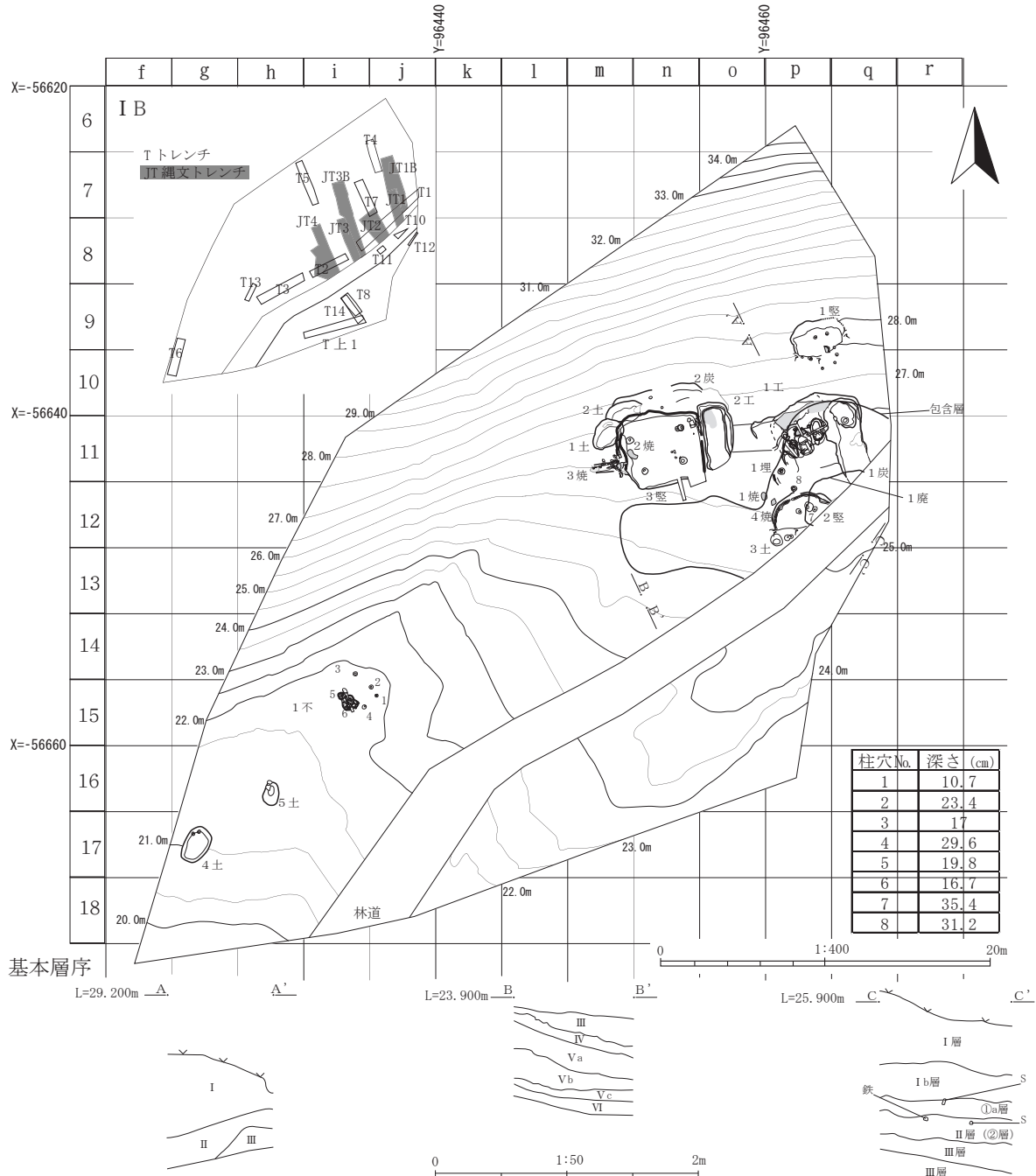
V層：10YR3/4～4/4暗褐～褐色シルト層。粘性無し、締まりやや有り。花崗岩を多く含む。場所によっては人頭大の礫を含む。

V b層：10YR2/3黒褐色シルト層。粘性無し、締まりやや有り。拳大の礫を含む。花崗岩粒はV層よりも多い。

V c層：10YR3/3暗褐色シルト層。粘性無し、締まりやや有り。花崗岩粒を含む。漸移層。

VI層：10YR4/6～5/6褐～黄褐色シルト層。粘性無し、締まり有り。地山層。

1 概要



第 134 図 間木戸 V 遺跡調査区全体図・基本層序

第 12 表 新旧遺構名対応表

報告書掲載名	現場使用名	報告書掲載名	現場使用名	報告書掲載名	現場使用名
1号竪穴建物跡	SI05	1号焼土遺構	SN07	3号製鉄炉	炉6
2号竪穴建物跡	SI07	2号焼土遺構	SN02	2号工房跡	SI06
3号竪穴建物跡	SI01	3号焼土遺構	SN04	4号製鉄炉	炉1
1号土坑	SK03	4号焼土遺構	SN05	5号製鉄炉	炉2
2号土坑	SK06	1号埋設土器	1号埋設土器	1号炭置き場跡	SI02
3号土坑	SK07	1号工房跡	SI03	2号炭置き場跡	SK04
4号土坑	SK01	1号製鉄炉	炉3	1号排滓場	排滓場
5号土坑	SK02	2号製鉄炉	炉2	1号不明遺構	SX01

2 遺 構

(1) 豎 穴 建 物 跡

1号豎穴建物跡（第135図、写真図版44）

〔位置・検出状況〕 I B 9 p 付近、調査区北東側の斜面裾周辺に位置する。当初、本遺構周辺で縄文土器がまとまって確認され、遺構の存在を想定していたが、プランが確認できなかった。その後、Ⅲ層上面まで面的に掘り下げを行ったところ、一部に規則的な配置となる礫を確認した。そのため、ベルトを設定して掘り下げを行い、石囲炉を検出した。さらに、豎穴の存在を想定してセクションを観察したところ、斜面上方で平坦な面と壁が立ち上がったため、豎穴建物跡と判断した。〔規模・形状〕 斜面下方が残存していないため、詳細な規模は不明であるが、柱穴の配置と残存する壁から判断すると、4 m前後の円形もしくは隅丸方形を呈するものと考えられる。〔埋土・堆積状況〕 地山ブロックを含む黒褐色砂質シルトの単層である。〔壁・床面〕 残存する床面は概ね平坦である。特別に硬化している部分は確認できなかった。壁は外傾気味に立ち上がる。〔炉〕 本来の遺構の中央部分と考えられる位置に石囲炉を検出した。西側半分は試掘の際に掘り上げてしまっており、残存していない。残存する範囲から判断すると、炉の規模は長辺約50cm、短辺約40cmで、焼成深度は最大で8 cmである。〔柱穴〕 炉を中心に本遺構に伴うと考えられる柱穴を8個検出した。いずれも堆積土はⅢ層土に相当する黒褐色シルトの単層である。炉を中心にP 1～P 4・P 6・P 7が六角形に配置されており、これらが支柱穴の可能性が想定される。〔付属施設〕 なし。〔重複遺構〕 なし。〔出土遺物〕 炉周辺から土器片が出土しているが、掲載可能なものはなかった。〔帰属時期〕 出土遺物から縄文時代中期に帰属する可能性が高いが、遺構の残存状態・遺物量の少なさから断定はできない。

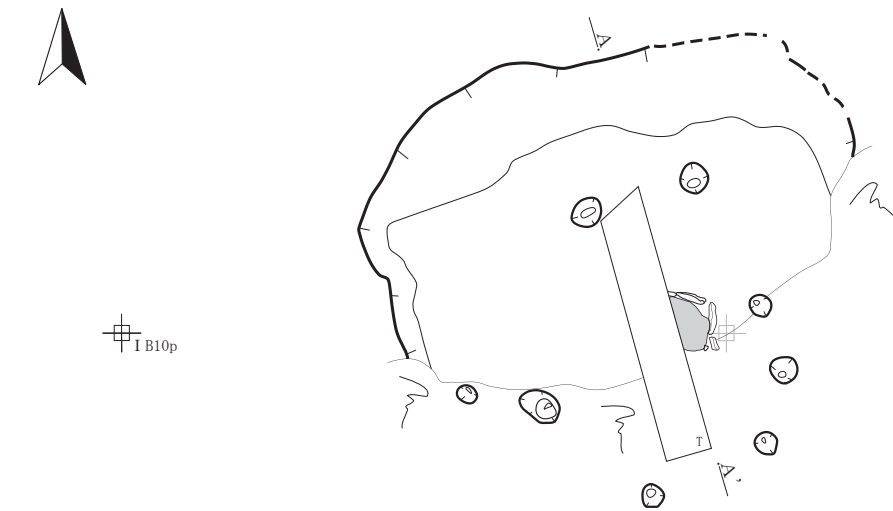
2号豎穴建物跡（第135図、写真図版45）

〔位置・検出状況〕 I B 12 p 付近、調査区東側の林道に面した比較的平坦な部分に位置する。南東側は林道構築により消失している。Ⅵ層上面で、暗褐色シルトのプランを検出した。〔規模・形状〕 南半分が残存していないため、詳細な規模は不明であるが、残存する部分から判断すると、4 m前後の円形を呈するものと考えられる。〔埋土・堆積状況〕 Ⅴ層起源の暗褐色シルトを主体とする。壁際から周溝にかけては同じⅤ層起源の褐色シルト層が遺構のプラン外より一連で堆積しており、自然堆積の可能性が高いと考えられる。〔壁・床面〕 残存する床面は概ね平坦である。特別に硬化している部分は確認できなかった。壁は外傾気味に立ち上がる。〔炉〕 現在の作業道内に構築されていたと考えられるが、床面より深く掘削が及んでおり、確認できなかった。〔柱穴〕 本遺構に伴うと考えられる柱穴を3個検出した。いずれも堆積土はⅤ層起源の暗褐色シルトの単層である。南側を大きく壊されているため、配置は不明である。〔付属施設〕 なし。〔重複遺構〕 同時期の遺構との重複関係はない。〔出土遺物〕 埋土から大木8 b～9式期と考えられる土器片が出土していたが、掲載はしていない。〔帰属時期〕 出土遺物から縄文時代中期後葉の大木8 b～9式期に帰属する。

3号豎穴建物跡（第136・137図、写真図版46・47）

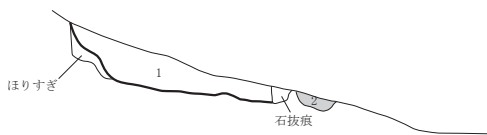
〔位置・検出状況〕 I B 11 n 付近、調査区北側の斜面裾周辺に位置する。Ⅲ層上面で黒褐色シルトの明瞭なプランを検出した。当初から本遺構とS N 03（現場遺構名）は一体のものと想定して調査を行っていたが、豎穴部の床面で、燃焼部が確認できなかったため、一度別遺構とした。しかし、S N

1号竪穴建物跡



1号竪穴建物跡

A L=28.300m



A'

1号竪穴建物跡

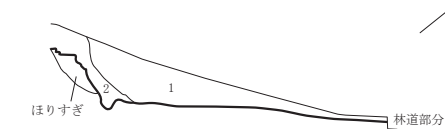
1. 10YR2/3 黒褐色、砂質シルト、粘性なし、縮まりややあり、地山層よりは縮まらない、花崗岩粒 20～25%、黄褐色土ブロック 5% 含む。
2. 10YR6/4 にぶい黄橙色、粘性なし、縮まりややあり、花崗岩粒 3～5%炭化物 1～2% 含む。

2号竪穴建物跡



2号竪穴建物跡

A L=25.400m



A'

2号竪穴建物跡

1. 10YR3/4 暗褐色、シルト、粘性なし、縮まりややなし、黄褐色土ブロック 3% 含む、花崗岩粒 1% 含。
2. 10YR4/4 褐色、シルト、粘性なし、縮まりややなし、花崗岩粒 3～5%、暗褐色土ブロック 7% 含。

0 1:50 2m

第 135 図 1・2号竪穴建物跡

03の焼成面が本遺構の張り出し部分の底面に沿って確認されたため、本遺構のカマドと判断した。〔規模・形状〕斜面裾にあるため、斜面下方の形状が判然としないことと、斜面上方にテラス状の張り出しが確認できるが、その張り出しが北側でしか確認できないことのため、張り出しを含めた正確な規模は不明であるが、堅穴部下部の規模は、東西522cm、南北464cm、張り出しを含めた確認できた規模は東西約580cm、南北約600cm、深さは最大で104cmである。〔埋土・堆積状況〕10層に細分した。残存状態の良好な北側壁付近や張り出し部分にはⅢ層起源と考えられる堆積土が見られるが、大部分は黒色～黒褐色シルトを主体とする堆積土である。堅穴部下部（6～10層）の堆積は花崗岩粒を含む黒色シルトと黒褐色シルトがほぼ交互に厚さ10～15cmでレンズ状もしくは三角形状に堆積しており、自然堆積の可能性が高いと考えられるが、上部（5層）の堆積は鉄滓や礫を含み、重複する2号炭置き場跡と同時に埋まっており、人為堆積の可能性を否定できない。〔壁・床面〕床面は概ね平坦である。特に硬化している部分は確認できなかった。壁は、カマドのある西壁以外の下部は直立気味に立ち上がり、張り出しまで緩やかになり、最後は外傾気味に立ち上がる。〔カマド〕西壁の中央南寄りに確認した。床面では燃焼部・袖が確認できず、カマドを持たない堅穴と考えていたが、西壁に隣接して直線上に配置される礫と焼土層を確認していた。この部分にベルトを設定して掘り下げを行ったところ、堅穴部内側のプランと接する部分に床面とほぼ同レベルの焼成面が確認できたため、本遺構のカマドと判断した。焼成深度は最大で6cmである。燃焼部からW8.5° Sの方向に浅い煙道が約1.5m延びており、にぶい褐色～明褐色の汚れた焼土層で埋没している。煙道部の北壁には部分的に細長い礫が配置されており、カマド構築に伴う礫と考えられる。検出時に確認された礫は、煙道部を構築していたこれらの礫の一部と考えられる。燃焼部の両脇には浅黄橙色の範囲が確認でき、袖の一部と考えられる。この他に明瞭な袖は確認できなかった。〔柱穴〕方形に配置される支柱穴と考えられる柱穴を4個検出した。いずれも黒褐色シルトを主体とする堆積土の単層である。〔付属施設〕施設ではないが、Pit 4の東側に礫が集中する部分を確認した。褐色シルトを主体とした裏込めが確認できたが、詳細な機能は不明である。〔重複遺構〕1号土坑、2号土坑、2号焼土遺構、3号焼土遺構、2号炭置き場跡と重複し、本遺構が最も古い。ただし、2号炭置き場跡とは同時に存在した可能性がある。〔出土遺物〕縄文土器VP001～005、土師器VP030～038、石鏃VS008・010、敲磨器類VS016～019、台石VS024、刀VG005、座金VG006、鉄滓類等が出土している。〔帰属時期〕出土遺物から8世紀代に帰属するものと考えられる。

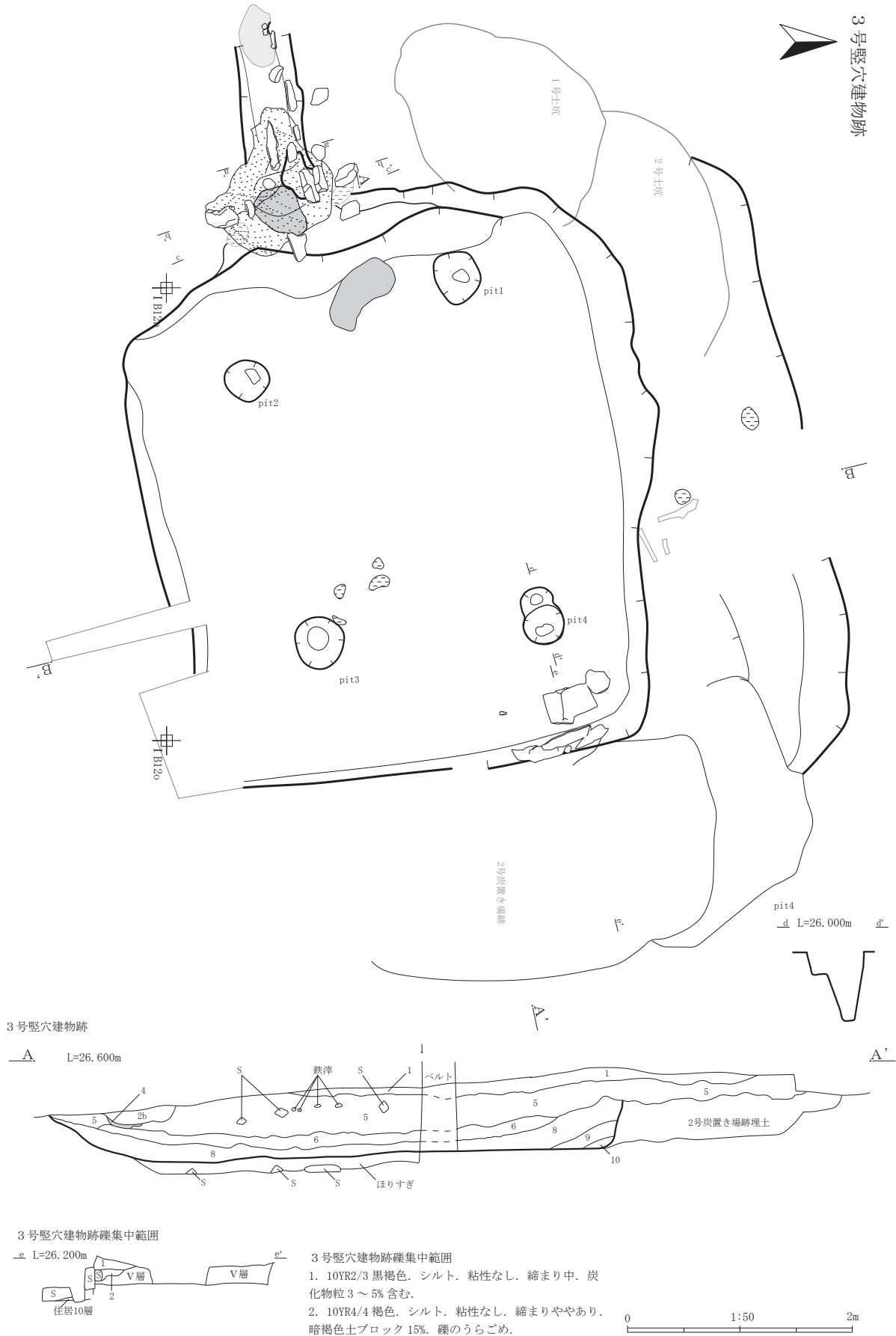
（2）土 坑

1号土坑（第138図、写真図版47）

〔位置・検出状況〕IB11m、調査区北側の斜面裾周辺に位置し、Ⅲ層上面で炭化物主体の黒色土のプランを検出した。〔規模・形状〕218×152cmの不整楕円形を呈する。南東側は斜面下方にあたり、削平もしくは崩落している可能性が考えられる。深さは最大で40cmである。〔埋土・堆積状況〕3層に分層した。中間部に鉄滓を含む黒褐色シルト層があるため、3層に分層したが、全体的に炭化物主体の人為堆積土と考えられる。〔壁・底面〕底面は概ね平坦で、壁は底面からなだらかに立ち上がる。〔重複遺構〕3号堅穴建物跡、2号土坑と重複し、本遺構が最も新しい。〔出土遺物〕土器類は伴わず、堆積土から鉄滓類が出土している。〔帰属時期〕堆積土の様相から古代に帰属する可能性が高い。

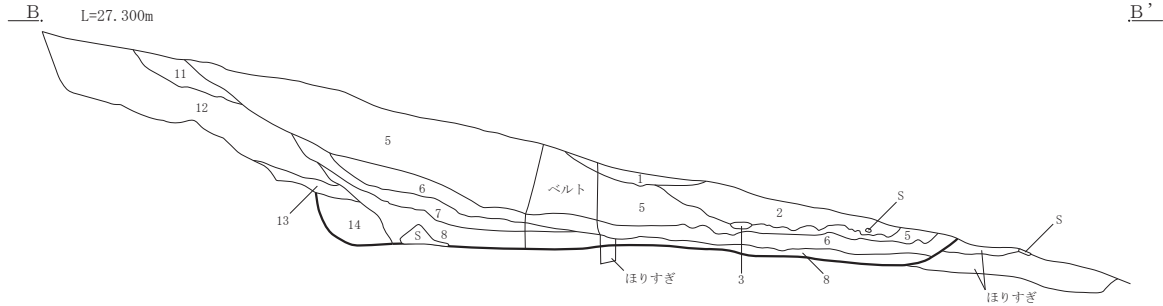
2号土坑（第138図、写真図版47）

〔位置・検出状況〕IB10m付近、調査区北側の斜面裾周辺に位置する。1号土坑の精査終了後、3



第136図 3号竪穴建物跡(1)

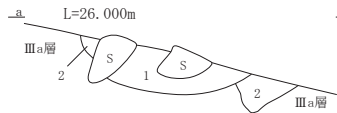
3号竪穴建物跡



3号竪穴建物跡 A-A'・B-B'

1. 10YR3/1 黒褐色。シルト。粘性なし。締まり中。花崗岩小粒3～5%含む。植物根の影響大。
2. 10YR3/2 黒褐色。シルト。粘性なし。締まり中。花崗岩小粒5～7%、灰白色砂ブロック7%含む。
- 2b. 10YR2/2 黒褐色。シルト。粘性なし。締まり中。花崗岩小粒1～2%含む。
3. 10YR5/6 黄褐色。シルト。粘性なし。締まりややあり。ブロックでみられる。
4. 7.5YR4/6 褐色。シルト。粘性なし。締まり中。べっとりした焼土層。非常にうすくあまり強く焼けていない。(2号焼土遺構)
5. 10YR2/2 黒褐色。シルト。粘性なし。締まり中～ややなし。花崗岩小粒3～5%、黒色土ブロック7%、暗褐色砂ブロック2～3%。鉄滓を含む。
6. 10YR2/1 黒色。シルト。粘性なし。締まり中。灰白色砂粒～1%含む。
7. 10YR2/2 黒褐色。シルト。粘性なし。締まりややなし。花崗岩小粒10～15%含む。
8. 10YR2/2.5 黒褐色。シルト。粘性なし。締まりややなし。花崗岩小粒10～15%、亜角レキ中量(人頭大)を含む。
9. 10YR2/1 黒色。シルト。粘性なし。締まりややなし。砂粒1～2%含む。東壁端のみに見られる。
10. 10YR2/3 黒褐色。シルト。粘性なし。締まり中。
11. 10YR3/1 黒褐色。シルト。粘性なし。締まりややなし。花崗岩小粒7～10%含む。
12. 10YR3/2～3/3 黒褐色～暗褐色。シルト。粘性なし。締まりなし。III層に近いが締まりがなくほれる。にぶい黄褐色土ブロック5%、こぶし大の亜角レキ含む。
13. 10YR2/2 黒褐色。シルト。粘性なし。締まり中。炭化物を層状に含む。
14. 10YR2/2 黒褐色。シルト。粘性なし。締まりややなし。新鮮な状態では暗褐色を有するが時間がたつと黒くなる。花崗岩小粒7～10%含む。

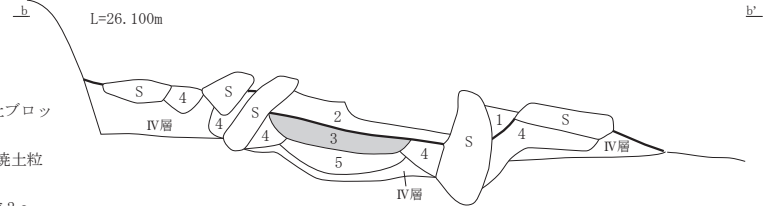
3号竪穴建物跡カマド a-a'



3号竪穴建物跡カマド a-a'

1. 7.5YR5/4～5/6 にぶい褐色～明褐色。粘性なし。締まりややあり～中。断面にはないが、部分的に赤褐色や橙色も見られる。
2. 7.5YR3/3 暗褐色。粘性なし。締まり中。黒褐色シルトで汚れている。

3号竪穴建物跡カマド b-b'



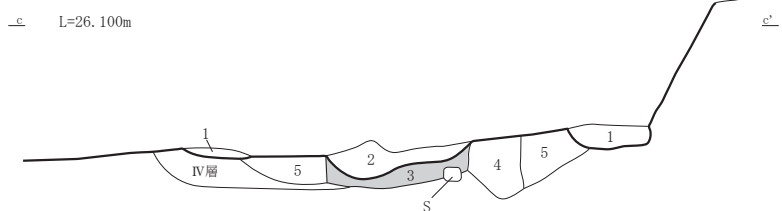
3号竪穴建物跡カマド b-b'

1. 10YR3/3 暗褐色。シルト。粘性なし。締まり中。浅黄橙色土ブロック1～2%含む。
2. 10YR5/6 黄褐色。シルト。粘性なし。締まりややあり。焼土粒2～3%、花崗岩粒1～2%含む。
3. 5YR6/8 橙色。粘性なし。締まりあり。焼土層。花崗岩粒2～3%含む。
4. 10YR4/3～4/4 にぶい黄褐色～褐色。シルト。粘性なし。締まりややあり。黄褐色土ブロック2～3%。石の掘りかた埋土。
5. 10YR3/3～3/4 暗褐色。シルト。粘性なし。非常に硬くしまる。

3号竪穴建物跡カマド c-c'

1. 10YR8/4 浅黄橙色。粘性なし。締まり中。袖の残存?
2. 10YR5/6 黄褐色。シルト。粘性なし。締まりあり。
3. B-B' の3層
4. 10YR4/6 褐色。シルト。粘性なし。締まりややなし。(石の掘りかた)
5. B-B' の5層。

3号竪穴建物跡カマド c-c'



第137図 3号竪穴建物跡 (2)

号竪穴建物跡として精査していたが、炭化物主体の堆積土が確認された。ベルトを設定して掘り下げを行ったところ、平坦な底面と斜面上方で壁を確認したため、土坑として登録した。本遺構の南側はベルト設定以前に掘り上げてしまっており、残存していない。〔規模・形状〕前述の通り、北半しか確認できなかったため、正確な形状や規模は不明である。平面形は残存する部分から判断すると、楕円形を呈するものと考えられる。〔埋土・堆積状況〕3層に分層した。最下部には10cm程の炭化物主体の堆積土が確認でき、その上部は地山の崩落土と考えられる暗褐色シルトや黒褐色シルトで埋没している。〔壁・底面〕残存する底面は概ね平坦である。壁は底面から外傾気味に立ち上がる。〔重複遺構〕3号竪穴建物跡、1号土坑と重複し、本遺構が3号竪穴建物跡より新しく、1号土坑より古い。〔出土遺物〕土器類は伴わず、堆積土から鉄滓類が出土している。〔帰属時期〕堆積土の様相から古代に帰属する可能性が高い。

3号土坑（第138図、写真図版48）

〔位置・検出状況〕I B 12 p、調査区東側の林道に面した比較的平坦な部分に位置し、Ⅲ層上面で黒褐色シルトのプランを検出した。〔規模・形状〕77×66cmの楕円形状を呈する。深さは最大で15cmである。〔埋土・堆積状況〕地山ブロックを含む黒褐色シルトの単層である。層高がないため、人為か自然かの判断はできなかった。〔壁・底面〕底面は掘り鉢状を呈し、壁は底面からなだらかに立ち上がる。〔重複遺構〕同時代の遺構との重複関係はない。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕検出状況から古代に帰属する可能性が高い。

4号土坑（第138図、写真図版48）

〔位置・検出状況〕I B 17 g、調査区南西側の沢に面した緩斜面周辺に位置する。Ⅲ層上面で明瞭な黒褐色シルトのプランで検出した。〔規模・形状〕225×150cmの楕円形を呈する。深さは最大で30cmである。〔埋土・堆積状況〕2層に細分した。下部には炭化物を多量に含む黒色シルト（2層）が10cm程の厚さで堆積し、その上部に締まりのない黒褐色シルト（1層）が堆積している。下部には少量ではあるが、鉄滓が出土している。〔壁・底面〕底面は概ね平坦で、壁は底面からなだらかに立ち上がる。南側は斜面下方にあたり、残存状態が悪く、わずかな立ち上がりしか確認できない。〔その他〕北西隅で2個の柱穴を確認した。いずれも黒褐色シルトの単層である。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕土器類は伴わず、堆積土から鉄滓類が出土している。〔帰属時期〕不明。

5号土坑（第139図、写真図版48）

〔位置・検出状況〕I B 16 h、調査区南西側の沢に面した緩斜面周辺に位置する。Ⅲ層上面で明瞭な黒褐色シルトのプランで検出した。〔規模・形状〕139×97cmの不整楕円形を呈する。深さは最大で35cmである。〔埋土・堆積状況〕3層に細分した。Ⅱ層起源の黒色シルトもしくは黒褐色シルトを主体とする。堆積土中に礫が混入しているが、人為的な堆積は確認できなかった。〔壁・底面〕底面は掘り鉢状を呈し、壁は底面からなだらかに立ち上がる。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕土器類は伴わず、堆積土から鉄滓類が出土している。〔帰属時期〕不明。

(3) 焼土遺構

1号焼土遺構 (第139図、写真図版45)

〔位置・検出状況〕 I B12o 周辺、調査区東側の林道に面した比較的平坦な部分に位置し、V層面が赤変している。〔規模・形状〕 47×34cmの楕円形を呈する。焼成深度は最大6cmである。〔被熱・堆積状況〕 暗赤褐色の焼土が確認できるが、掘り込みは認められない。〔重複遺構〕 なし。〔出土遺物〕 なし。〔帰属時期〕 検出状況から縄文時代に帰属する可能性が高い。

2号焼土遺構 (第139図、写真図版48)

〔位置・検出状況〕 I B11m 付近、調査区北側の斜面裾周辺に位置する。3号竪穴建物跡の5層中で検出した。〔規模・形状〕 71×38cmの不整形である。焼成深度は最大3cmである。〔被熱・堆積状況〕 3号竪穴建物跡の2b層直下で褐色の焼土層が確認できる。掘り込みは認められない。〔重複遺構〕 3号竪穴建物跡より新しい。〔出土遺物〕 土器類は伴わず、堆積土から鉄滓類が出土している。〔帰属時期〕 検出状況から古代に帰属する可能性が高い。

3号焼土遺構 (第139図、写真図版49)

〔位置・検出状況〕 I B11m、調査区北側の斜面裾周辺に位置する。3号竪穴建物跡の煙道西端で検出した。〔規模・形状〕 56×30cmの楕円形状を呈する。焼成深度は最大4cmである。〔被熱・堆積状況〕 掘り込みがあり、地山ブロックを含むⅢ層起源の暗褐色シルトで埋没した上面が赤変しているが、不明瞭である。〔重複遺構〕 3号竪穴建物跡より新しい。〔出土遺物〕 土師器VP040が出土している。〔帰属時期〕 出土遺物から奈良時代に帰属する。

4号焼土遺構 (第140図、写真図版49)

〔位置・検出状況〕 I B12p、調査区東側の林道に面した比較的平坦な部分に位置し、Ⅱ層面が赤変している。廃滓場形成時の初期段階に形成された焼土遺構である。〔規模・形状〕 43×31cmの菱形状を呈する。焼成深度は最大5cmである。〔被熱・堆積状況〕 黄橙色の焼土が確認できるが、掘り込みは認められない。〔重複遺構〕 なし。〔出土遺物〕 なし。〔帰属時期〕 検出状況から古代に帰属する可能性が高い。

(4) 埋設土器

1号埋設土器 (第140図、写真図版49)

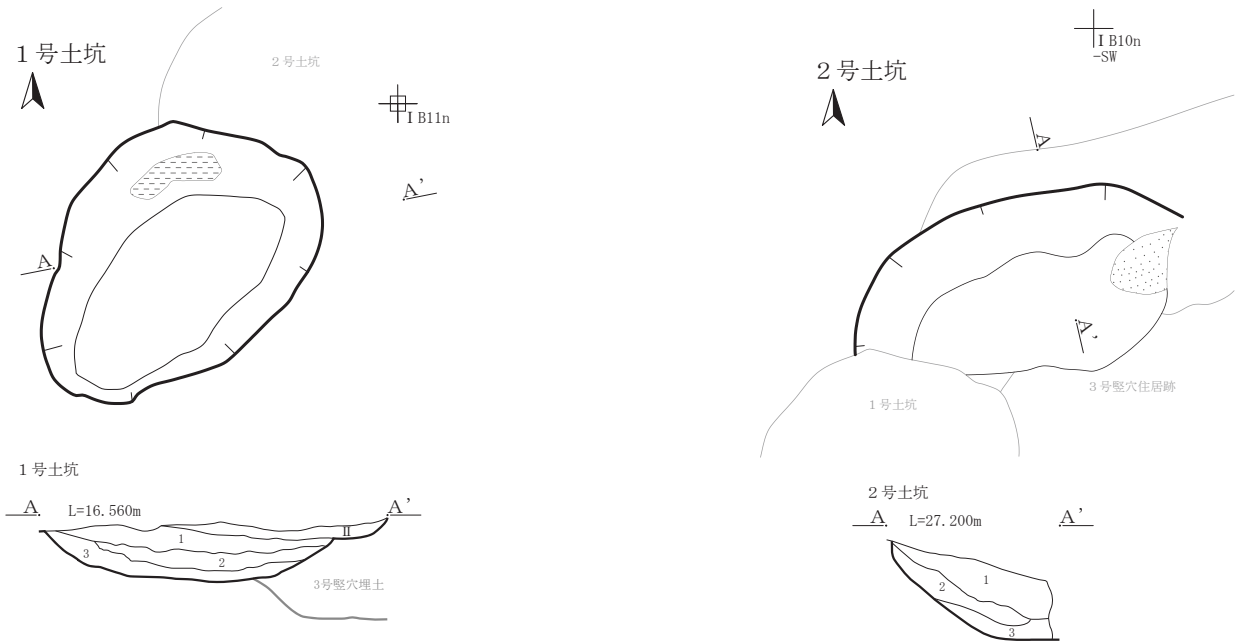
〔位置・検出状況〕 I B12p、調査区東側の林道に面した比較的平坦な部分に位置し、Va層上面で検出した。〔規模・形状〕 46×43cmの円形の掘り方の中央部に小形の浅鉢を、V層起源の暗褐色シルトを掘り方埋土として埋設している。〔埋土・堆積状況〕 V層起源の暗褐色シルトを掘り方埋土とし、土器内部には黒褐色シルトが確認された。〔重複遺構〕 なし。〔出土遺物〕 縄文土器VP027が出土している。〔帰属時期〕 縄文時代中期後葉に帰属する。

(5) 工房跡

1号工房跡 (第141・142図、写真図版50・51)

〔位置・検出状況〕 I B11p 付近、調査区東側の林道に面した比較的平坦な部分に位置し、Ⅲ層上面

2 遺構



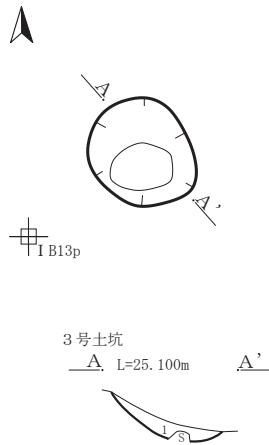
1号土坑

1. 10YR1.7/1 黒色. シルト, 粘性なし. 縮まりなし. 炭化物 (1 cm ~ 5 cm までのものがいろいろある) 主体の層. 花崗岩粒 3 ~ 5% 含む.
2. 10YR3/1 黒褐色. 砂質シルト, 粘性なし. 縮まりなし. 花崗岩小粒 5 ~ 7%, 炭化物 3% 含む. 最下部に鉄滓 (赤) がみられる.
3. 1層と同じ. 縮まり中. 炭化物の大きさもほぼ同じ. 花崗岩の含有量が少ない.

2号土坑

1. 10YR2/3 黒褐色. シルト, 粘性なし. 縮まり中. 花崗岩粒 15 ~ 20% 含む.
2. 10YR3/3 暗褐色. シルト, 粘性なし. 縮まり中. 花崗岩粒 15 ~ 20% 含む.
3. 10YR1.7/1 黒色. シルト, 粘性中. 縮まり中. 炭化物主体層.

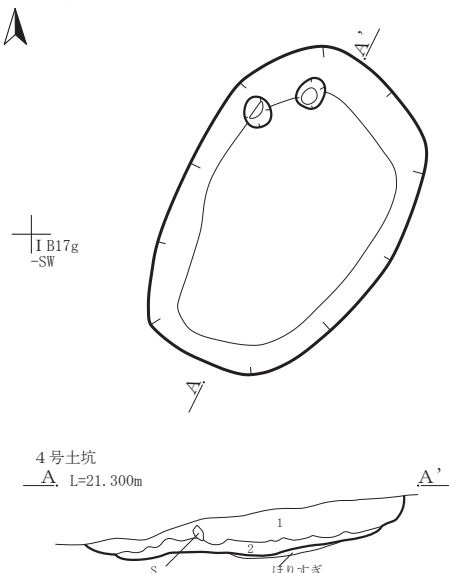
3号土坑



3号土坑

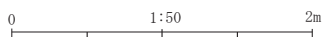
1. 10YR2/2 黒褐色. シルト, 粘性なし. 縮まりややなし. 黄褐色土小ブロック 2 ~ 3% 含む.

4号土坑

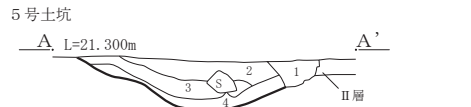
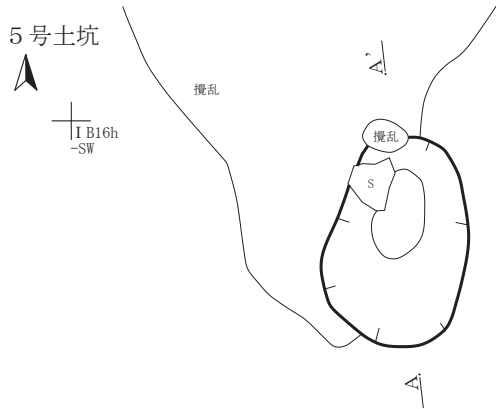


4号土坑

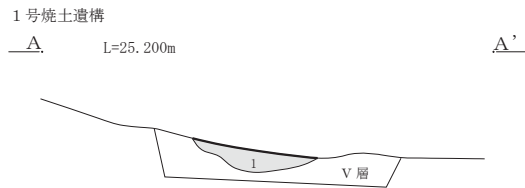
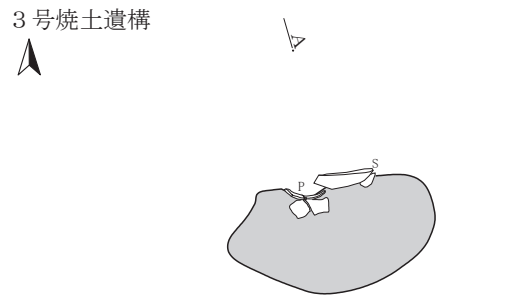
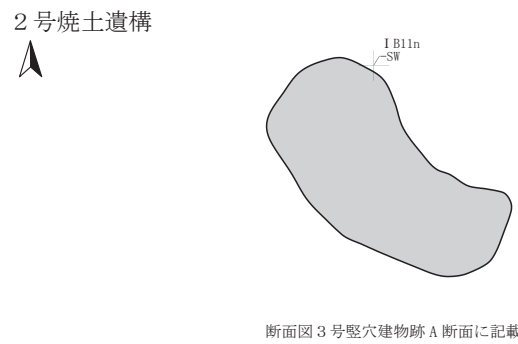
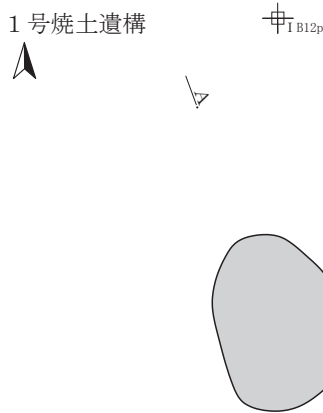
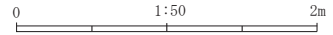
1. 10 YR3/2 黒褐色. シルト, 粘性なし. 縮まりなし. 非常にモソモソしており亜角レキを含む.
2. 10YR1.7/1 黒色. シルト, 粘性なし. 縮まりややなし. 炭を多量に含む. 地山 (III層) 砂層を互層で含む.



第 138 図 1 ~ 4 号土坑



- 5号土坑
1. カクラン
 2. 10YR3/1 黒褐色. シルト, 粘性中. 縮みややなし. 花崗岩粒 2~3% 含む.
 3. 10YR1.7/1 黒色~10YR2/1 黒色. シルト, 粘性中. 縮まり中. 花崗岩粒 1~2% 含む.
 4. 10YR2/2 黒褐色. シルト, 粘性なし. 縮みややなし. 花崗岩粒 7~10% 含む.



- 1号焼土遺構
1. 5YR3/3 暗赤褐色. 粘性なし. 縮まり中. 花崗岩粒 7~10% 含む.

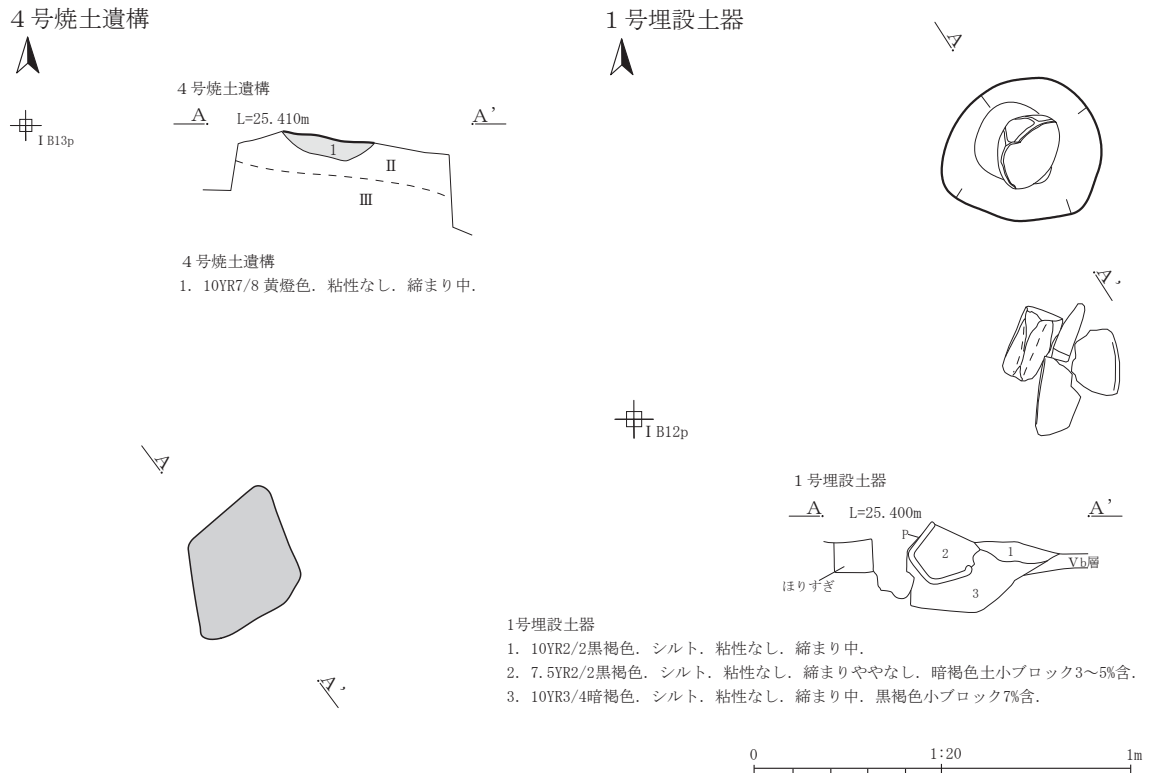


- 3号焼土遺構
1. 10YR7/6 明黄褐色. 粘性なし. 縮まりややあり.
 2. 10YR3/3 暗褐色. シルト, 粘性なし. 縮まり中. 黄褐色土 1~2% 含む.



第 139 図 5号土坑、1~3号焼土遺構

2 遺構



第 140 図 4号焼土遺構、1号埋設土器

で黒褐色シルトの明瞭なプランを検出した。斜面下方にあたる南東側は崩落や削平等により確認できなかった。本遺構は1号～3号製鉄炉、Pit 1、柱穴2個で構成される。〔規模・形状〕北西壁以外の部分では明瞭な壁を確認することができなかった。そのため、詳細な規模は不明であるが、残存する北西壁や製鉄炉、製鉄炉を被覆している炉壁混じりのブロック焼土範囲から判断すると、一辺4m前後の隅丸方形を呈するものと考えられる。〔埋土・堆積状況〕7層に細分した。黒色・黒褐色シルトを主体とする。2号製鉄炉の直上には炉構築材を含む褐色シルト層（7層）が確認できる。北西壁際には壁崩落土と考えられる黒褐色シルト層（6層）が三角形に堆積し、その上部に黒色シルト層（5層）がほぼ水平に堆積している。この層の最上面には部分的に黄褐色粘土質シルトが薄く堆積している。また、5層上面が1号製鉄炉の構築面となっており、1号工房最新段階の作業面（床面）であったと考えられる。黒色シルト（3層）、黒褐色シルト（2層）と斜面上方から堆積した状況を呈しており、最終的には自然に埋没したものと考えられる。〔壁・床面〕床面は概ね平坦である。1号製鉄炉の北側、北隅周辺と2号製鉄炉の北西側の床面が硬化している。製鉄炉の斜面上方にあたり、フイゴが置かれた場所が想定される。壁は北西のみで確認できた。床面から直立気味に立ち上がり、上半で強く開くように立ち上がる。〔柱穴〕本遺構に伴うと考えられる柱穴を2個検出した。2号製鉄炉を挟んで対になる位置に構築されている。Pit 3は1号製鉄炉に被覆されており、1号製鉄炉に伴う可能性は低い。また、Pit 2は3号製鉄炉と近接しており、3号製鉄炉に伴う可能性は低いと考えられる。2個とも焼土ブロックを含む黒褐色シルトの単層である。〔付属施設〕2号製鉄炉と3号製鉄炉の間に円形のPitを検出している。両遺構よりも新しいものである。1号製鉄炉に伴う可能性が高い。直径0.53mの円形基調のものである。炉と考えて精査を行ったが、還元層や赤変層、鍛造剥片等の微細な鉄滓類が確認できなかったため、炉とは判断しなかった。色調や混入物の違いにより2層に

分層したが、炉壁や焼土ブロック、炭化物を含む黒色シルトで人為的に埋められている。〔その他〕上記の他に1号製鉄炉の北側と2号製鉄炉の北西側で床面が硬化している範囲を確認した。どちらも不整形で、前者は長辺1.37m、短辺0.66m、後者は長辺1.6m、短辺1.05mの規模で、いずれも対応する製鉄炉の長辺と硬化範囲の長辺が直交している。斜面上方の炉の背面に位置する場所にあり、フイゴが設置された場所が想定される。〔重複遺構〕2号工房跡、1号炭置き場跡と重複し、本遺構が新しい。〔出土遺物〕1号製鉄炉の炉面から鉄鏃VG003、埋土から羽口VG018、Pit 1から羽口VG019・020、鉄滓類等が出土している。〔帰属時期〕出土遺物や検出状況から古代に帰属すると考えられる。

〈製鉄炉〉

1号製鉄炉（第141図、写真図版50・51）

〔位置〕1号工房跡にある3基の製鉄炉のうち、最も北東側に位置する。構築面は5層上面で3基ある製鉄炉のうち、レベル的に最も高く、最も新しい製鉄炉である。〔規模・形状〕炉の平面形は楕円形で、長辺1.32m、短辺0.75mである。炉の構築面から炉底面までの深さは18cmで、断面形は逆台形状を呈する。長辺を主軸とするとN12°Wとなる。〔埋土・堆積状況〕炉内の堆積土は大きく2層に細分でき、下部は炉壁を含む鉄滓主体の層で、上部は炭化物・鉄滓を含む焼土・炉壁の混合層で、人為堆積である。〔壁・底面〕古い製鉄炉の炉体を利用して作業床面とし、その床面を長辺1.33m、短辺0.89mの楕円形に掘り窪め、炉を構築している。底面は広範囲にわたって還元しており、炉の判断の根拠となっている。上部は部分的に赤変した炉体が残存している。〔重複遺構〕2号製鉄炉より新しい。

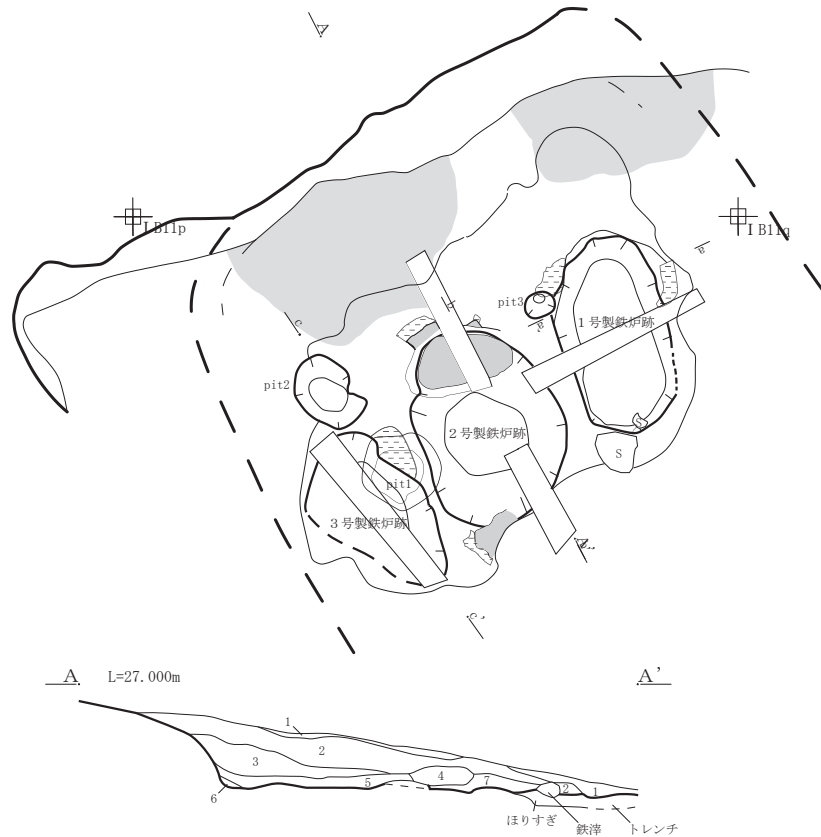
2号製鉄炉（第142図、写真図版51）

〔位置〕1号工房跡のほぼ中央に位置する。締まりのある暗褐色シルト（b断面6層）上面を構築面としている。〔規模・形状〕炉の平面形は楕円形で、長辺1.35m、短辺0.97mである。炉の構築面から炉底面までの深さは28cmで、断面形は皿状を呈する。長辺を主軸とするとN18°Wとなる。〔埋土・堆積状況〕3層に細分した。大部分は鉄滓と炉壁の混合層（3層）で、その上部に炉壁を含む黄褐色シルト層（2層）、炉壁を含む暗褐色シルト層（1層）が堆積している。全体的に混入物が多く人為堆積と考えられる。〔壁・底面〕床面を長辺1.5m、短辺0.98mの楕円形に掘り窪め、炉を構築している。底面は斜面下方に傾斜している。南側の一部で炉体の残存と考えられる部分が確認できたが、広範囲にわたって鉄滓があり、南側は不明瞭である。斜面上方にあたる北側では底面から壁面にかけて還元層、残存する炉壁、赤変した炉壁が確認できた。〔重複遺構〕3号製鉄炉より新しく、1号製鉄炉より古い。

3号製鉄炉（第142図、写真図版51）

〔位置〕1号工房跡の南西側に位置する。1号工房跡床面施設の最終確認段階で検出し、2号製鉄炉の構築面とは15cm程の高低差がある、1号工房跡で最も古い製鉄炉である。〔規模・形状〕残存状態が悪く、詳細な規模は不明であるが、確認できた範囲から判断すると、長辺1.2m前後、短辺0.7m前後の楕円形を呈するものと考えられる。確認面から炉底面までの深さは15cmである。長軸は他の2基より西に傾いている。〔埋土・堆積状況〕色調の違いにより2層に細分したが、炉体を主体とした人為的な埋め戻し土で埋没している。〔壁・底面〕3号製鉄炉も他の製鉄炉と同様に、楕円形に掘り窪

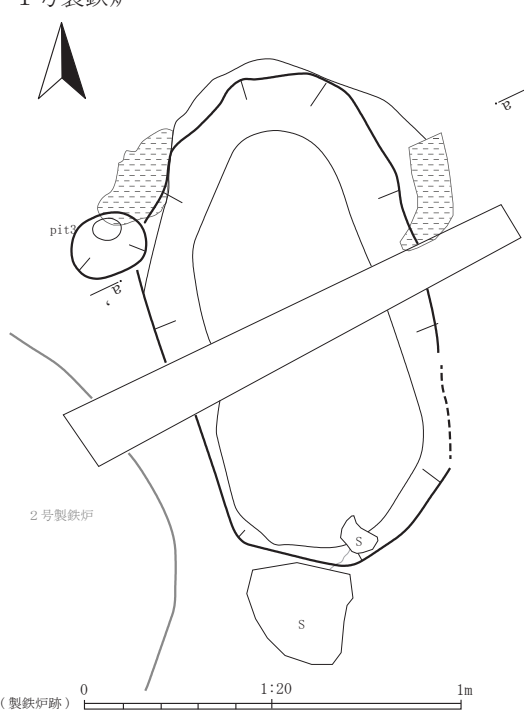
1号工房跡



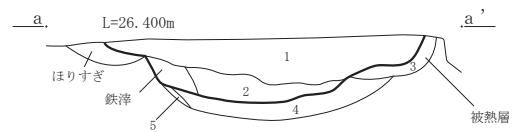
1号工房跡

1. 10YR3/2 黒褐色. シルト. 粘性なし. 縮まりややあり. 風化花崗岩粒 2~3% 含む
2. 10YR2/2 黒褐色. シルト. 粘性なし. 縮まり中. 風化花崗岩小粒 3~5% 含む. 3層との境はやや暗褐色化している
3. 10YR2/1 黒色. シルト. 粘性なし. 縮まりややあり. 風化花崗岩小粒 3~5% 含む.
4. 10YR2/2.5 黒褐色. シルト. 粘性なし. 縮まりややなし. 焼土粒 1~2% 含む.
5. 10YR2/1 黒色. シルト. 粘性なし. 縮まりややあり. 花崗岩小粒 2~3%. 焼土粒 1%.
6. 10YR2/3 黒褐色. シルト. 粘性なし. 縮まり中. 花崗岩小粒 2~3%
7. 7.5YR4/6 褐色. シルト. 粘性なし. 縮まり中.

1号製鉄炉



1号製鉄炉



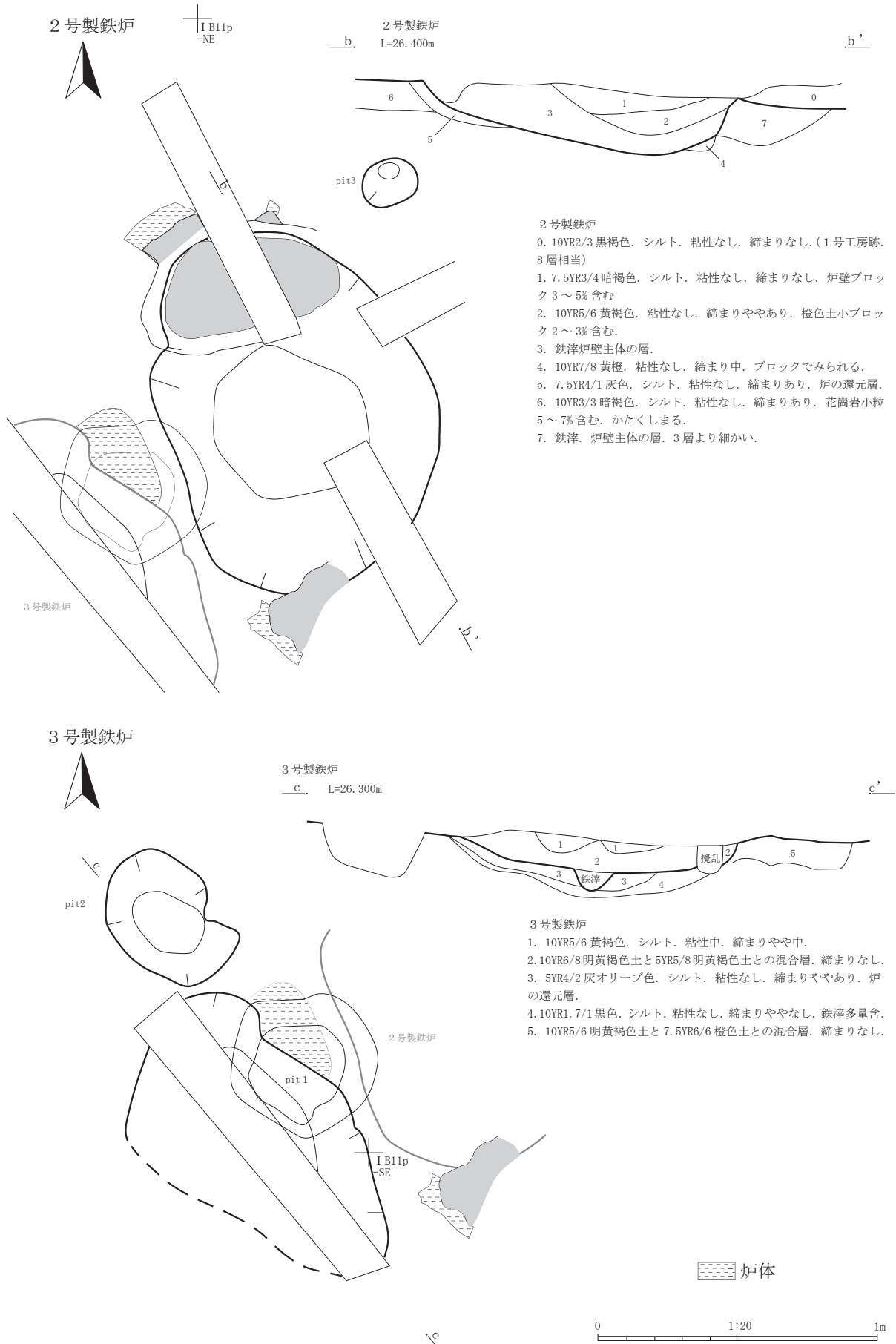
1号製鉄炉

1. 10YR7/6 明黄褐色土ブロックや 5YR7/8 橙色土ブロック (炉壁) の混合層. 炭化物 7~10%. 鉄滓含む. 粘性なし. 縮まりあり.
2. 鉄滓主体の層. 炉壁等のブロックが 15~20% 含む.
3. 5YR7/8 橙色. 粘性なし. 縮まりあり. 炉体.
4. 7.5Y4/1 灰. 粘性なし. 縮まりあり.
5. 10YR1.7/1 黒色. 粘性なし. 縮まりあり. 焼土ブロック 2~3% 含む. 非常にかたくしまる.

炉体



第 141 図 1号工房跡 (1)



第 142 図 1号工房跡 (2)

め、炉を構築しているが、前述の通り詳細な規模は不明である。底面は広範囲にわたって還元している。〔重複遺構〕2号製鉄炉より古い。

2号工房跡（第143図、写真図版52・53）

〔位置・検出状況〕I B11p付近、調査区東側の林道に面した比較的平坦な部分に位置する。1号工房跡の3号製鉄炉周辺を掘り下げたところ、平坦な面とわずかに立ち上がる壁、2基の製鉄炉を確認したため、工房跡とした。1号工房跡と同様に、斜面下方にあたる南東側は確認できなかった。本遺構は4号製鉄炉、5号製鉄炉で構成される。〔規模・形状〕北西壁の一部しか確認できなかったため、詳細な規模は不明である。残存する壁や製鉄炉の位置から判断すると4m前後と考えられる。

〔埋土・堆積状況〕色調や混入物の違いにより6層に細分した。南東側の下部に廃滓場の②層下部に相当する黒褐色～暗褐色シルト層（4層）が堆積するが、大部分は黒褐色シルト層で埋没している。堆積土にはあまり多くはないが、鉄滓や焼土ブロック、炭化物の混入が見られ、他遺構との重複を想定すると、人為堆積の可能性が高いと考えられる。〔壁・床面〕床面は概ね平坦である。壁は一部のみで確認されたにとどまる。〔重複遺構〕1号工房跡、1号炭置き場跡と重複し、本遺構が最も古い。また、排滓場と近接しているが、新旧関係は不明である。〔出土遺物〕縄文土器VP006・007、土師器VP039、羽口、鉄滓類等が出土している。〔帰属時期〕出土遺物や検出状況から古代に帰属すると考えられる。

〈製鉄炉〉

4号製鉄炉（第143図、写真図版52・53）

〔位置〕2号工房跡の南西側に位置する。全体的に残存状態が悪いため、5号製鉄炉との新旧関係は不明である。〔規模・形状〕南東側は確認できなかったため、詳細な規模・形状は不明と言わざるをえないが、確認できた範囲から判断すると、長辺1.5m前後の楕円形基調を呈すると考えられる。確認面から炉底面までの深さは最大で33cmである。長軸方向は北北西である。〔埋土・堆積状況〕底部周辺に黒色シルト（3層）が堆積し、大部分が焼土ブロックや鉄滓・炉壁を多量に含む黒褐色シルトで埋没している。人為堆積と考えられる。〔壁・底面〕炉底は南東側に向かって傾斜し、わずかに立ち上がる。壁は北西の一部のみ確認でき、熱を受けて赤変している。〔重複遺構〕5号製鉄炉との新旧関係は不明。

5号製鉄炉（第143図、写真図版53）

〔位置〕2号工房跡の北東側に位置する。〔規模・形状〕残存状態は悪いが、確認できた規模は、北西－南東方向0.85m、北東－南西方向0.79mで、平面形は隅丸方形を呈する。確認面から炉底面までの深さは最大で10cmである。〔埋土・堆積状況〕鉄滓・焼土ブロック・炭化物を含む黒色シルトの単層である。〔壁・底面〕底面は北西側がやや窪むが南東側に向かって平坦になり、そのまま床面となっている。北側の底面から壁面の一部が還元している。〔重複遺構〕4号製鉄炉との新旧関係は不明。

（6）炭置き場跡

1号炭置き場跡（第146図、写真図版53）

〔位置・検出状況〕I B11p付近、調査区東側の林道に面した部分に位置する。南側は林道構築時に

削平されている。Ⅲ層上面で黒褐色シルトのプランを検出した。〔規模・形状〕南側が削平されているため、詳細な規模は不明であるが、確認できた部分では長辺4.7m、短辺2.48mの不整長楕円形を呈する。確認面から底面までの最大の深さは58cmである。長辺を主軸とすると、N15°Wである。〔埋土・堆積状況〕黒褐色シルトを主体とし、7層に細分した。最下部には黒褐色シルト（5層・6層）が堆積し、その上部に炭化物を多く含む黒色シルト層が全体的に水平に堆積している。この層より上位では黒褐色シルト主体で埋没しているが、南側（4a層）では黒みが強く、炭化物・鉄滓を含み、北側（2層）では焼土粒を含む。混入物が多く、上部は人為堆積の可能性が高いと考えられる。〔壁・底面〕底面は概ね平坦であるが、北側が浅く窪んでおり、その中央にPitを1個確認した。北壁と東壁、西壁南側は残存状態が良好で、底面から直立気味に立ち上がる。断面観察箇所の西壁は立ち上がり不明瞭で、なだらかに立ち上がる。〔重複遺構〕1号工房跡、2号工房跡と重複し、1号工房跡より古く、2号工房跡より新しい。〔出土遺物〕羽口VG007～017、鉄滓類等が出土している。〔帰属時期〕検出状況や重複関係から古代に帰属すると考えられる。

2号炭置き場跡（第146図、写真図版54）

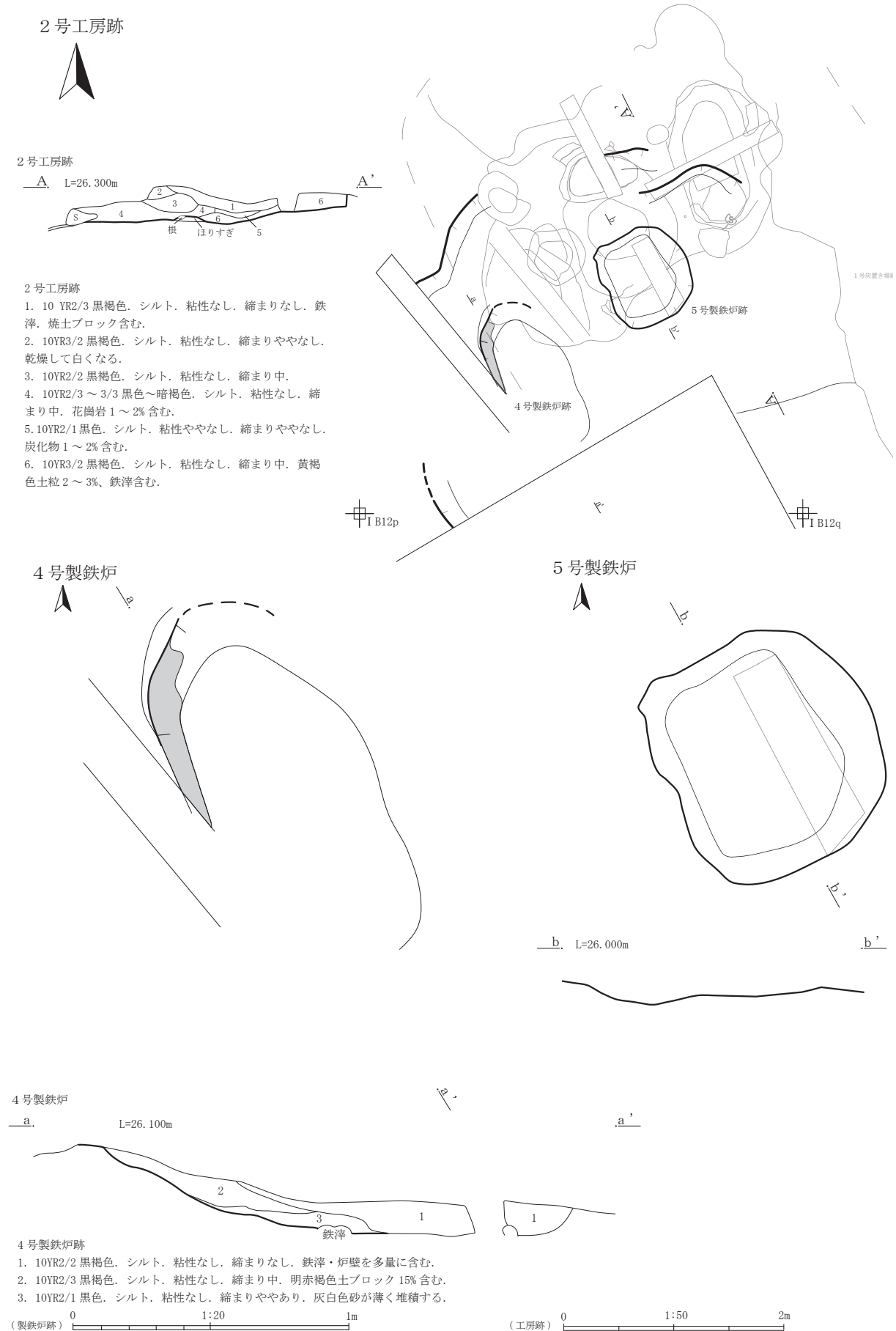
〔位置・検出状況〕IB11o付近、調査区北側の斜面裾周辺に位置する。3号竪穴建物跡と同じ面で検出した。〔規模・形状〕確認できた規模は長辺4.08m、短辺2.02mの不整長楕円形を呈する。確認面から底面までの最大の深さは33cmである。長辺を主軸とすると、N5°Wである。〔埋土・堆積状況〕4層に細分した。黒褐色砂もしくは黒褐色～暗褐色砂質シルトと炭化物主体層との互層で、最下部には7～8cmの炭化物主体層が水平に堆積している。〔壁・底面〕底面は南側に傾斜しているが、概ね平坦である。壁は、北側では直線的に立ち上がり、東側ではなだらかに立ち上がる。〔重複遺構〕3号竪穴建物跡と重複するが、断面観察箇所では、新旧関係を捉えられず、判断できなかった。最終的には3号竪穴建物跡ともに埋没している。〔出土遺物〕台石VS025、鉄滓類等が出土している。〔帰属時期〕検出状況や重複関係から古代に帰属し、3号竪穴建物跡と大きな時間差はないものと考えられる。

（7）廃滓場

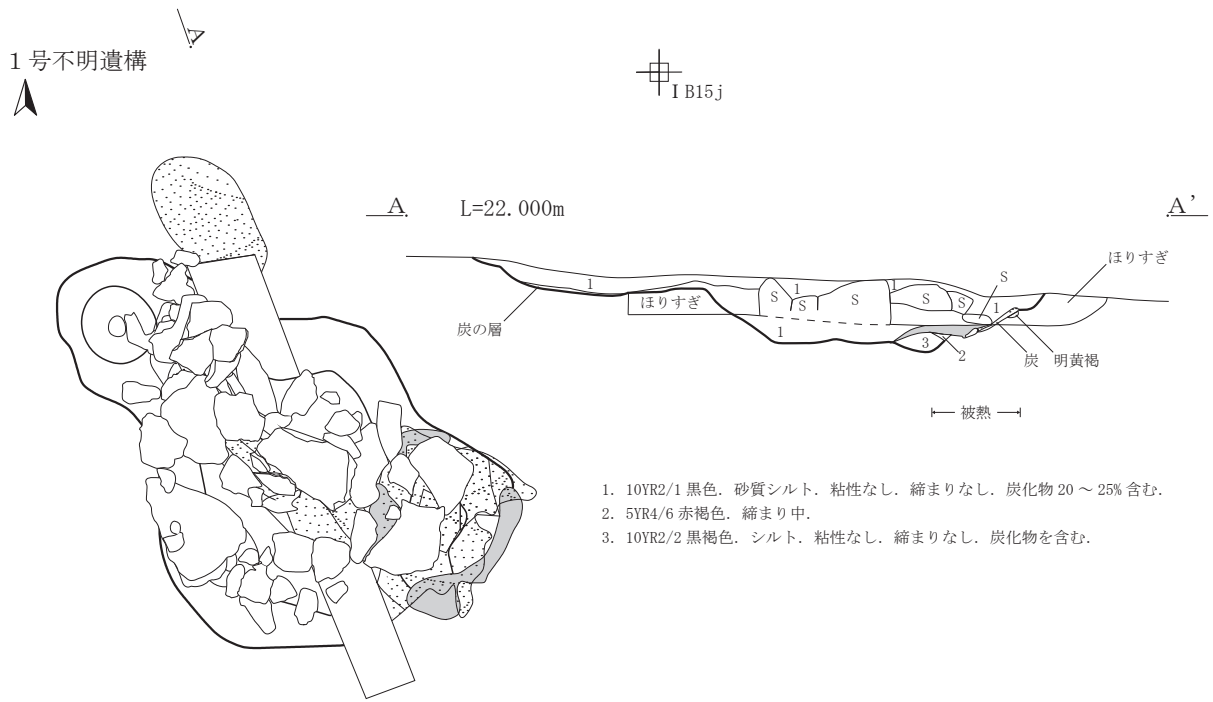
1号廃滓場（第147図、写真図版49）

〔位置・検出状況〕IB12p付近、調査区東側の林道に面した部分に位置する。南半は林道構築時に削平を受けて消失している。工房の南側に位置し、Ⅲ層上面に形成されている。〔規模・形状〕林道構築時に削平を受けているため、正確な規模や形状は不明であるが、確認できた部分では6.2×2.35mの範囲にわたる。〔埋土・堆積状況〕3層に分層し、Ⅱ層を基本とする。鉄滓等を多く含む層は①層の下半から②層の上半である。〔重複遺構〕後述する包含層内に位置する。鉄滓と共に土師器等も出土しており、包含層との分離は困難である。そのため、鉄滓類の分布が非常に密な部分を廃滓場として認識し、廃滓場を含めた、土師器類が出土する部分を包含層と認識した。廃滓場と包含層は前述のとおり、鉄滓の出土量によるものであるため、完全に分離できるものではなく、一連の堆積過程で生じたものと捉えている。また、本来は1号工房跡や2号工房跡と重複していると考えられるが、削平や堆積土の流出により重複箇所が残存しておらず、新旧関係は不明と言わざるをえない。〔出土遺物〕土師器VP030・035・043～045・051・052・054・055・057、羽口VG021・022・024、鉄滓類等が出土している。〔帰属時期〕出土遺物や検出状況から古代に帰属すると考えられる。

2 遺構

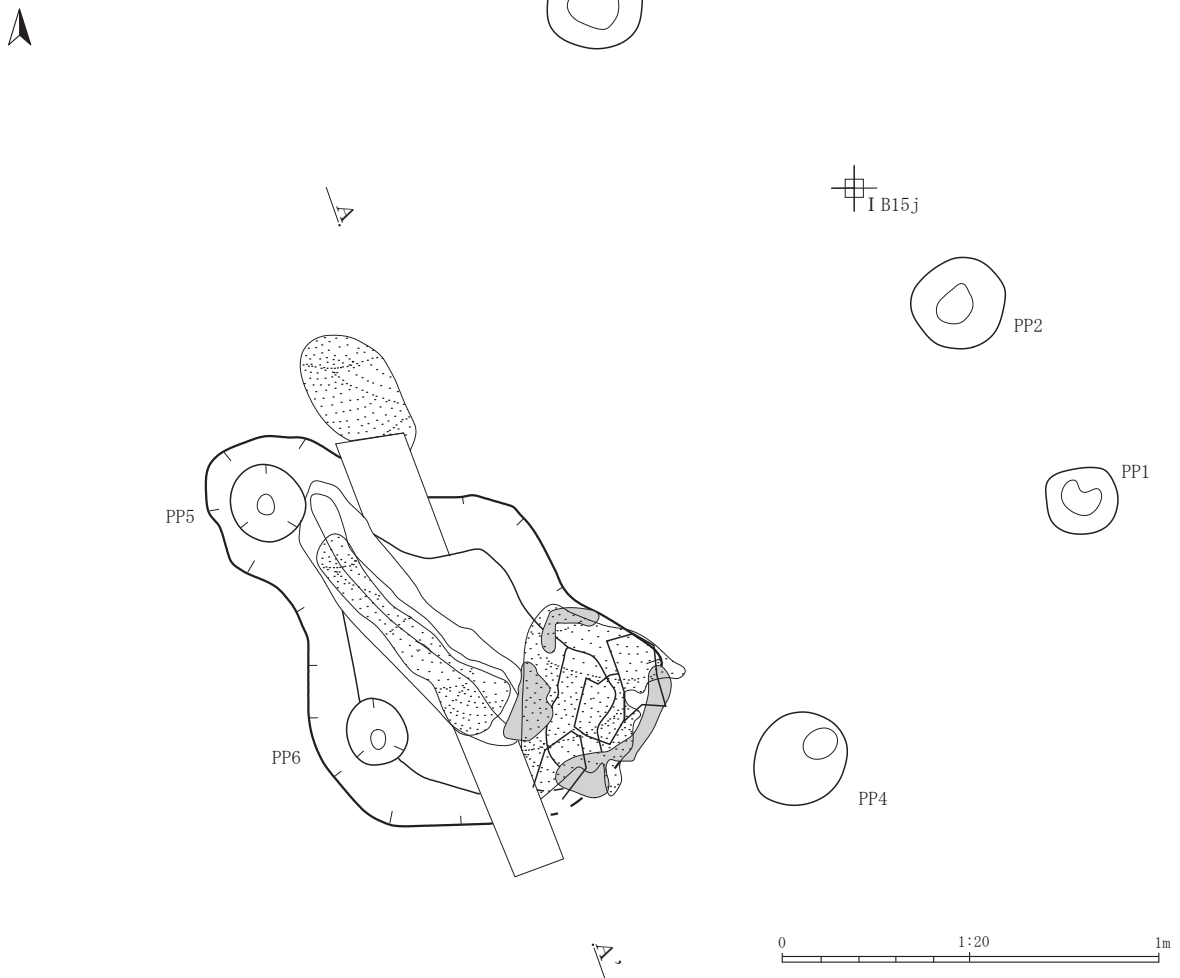


第 143 図 2号工房跡



第 144 図 1号不明遺構 (1)

1号不明遺構 (礎除去後・周辺の柱穴検出)



第 145 図 1号不明遺構 (2)、柱穴

(8) 不明遺構

1号不明遺構（第144・145図、写真図版54）

〔位置・検出状況〕 I B 15 i 付近、調査区南西側の比較的平坦な面に位置し、Ⅲ層上面で花崗岩と炭化物が密集していることで確認した。〔規模・形状〕 276 × 179cmの不整形を呈する。〔埋土・堆積状況〕 2層に分層した。溝状に窪んだ部分では炭化物を含む黒褐色シルトが堆積し、大部分は黒色砂質シルトで埋没している。炭化物や礫の混入が見られ、人為堆積と考えられる。〔壁・底面〕 底面中央が溝状に窪んでおり、その周囲は比較的平坦である。壁は底面からなだらかに立ち上がる。〔重複遺構〕 なし。〔出土遺物〕 鉄滓類等が出土している。〔帰属時期〕 時期の特定できる遺物が伴わず、帰属時期を判断することはできなかった。

(9) 柱 穴（第145図）

柱穴は8個検出した。規模等は第134図中に表で示した。PP 7・8は古代に帰属すると考えられる柱穴で、4号焼土遺構周辺で検出した。2個とも黒褐色シルトを主体としている。検出位置から4号焼土遺構に伴う柱穴の可能性が想定される。PP 1～6は1号不明遺構に隣接して円形状に配置されるように検出された。堆積土は1号不明遺構と類似する黒色土主体としており、1号不明遺構に関連する柱穴の可能性が高い。帰属する時期は1号不明遺構と同様、特定には至らなかった。

(10) 包含層

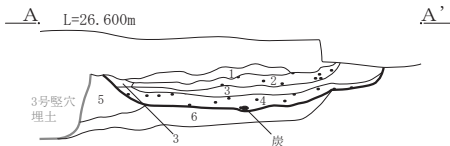
調査区東側の中央部分、I B 11～13 l～q（林道より北側）で古代の遺物がまとまって出土しており、包含層として報告する。当初、1号・2号工房跡が確認されたI B 12・13 n o p 付近は、竪穴建物跡や工房跡等の遺構が複数重複しているものと考えており、一連で堆積土の観察をできるよう、北東-南西ベルト（プランの長辺を通るベルト）とそれに直交するベルトをプラン毎に設定して、掘削を行った。また、I B 12・13 l m 付近でも不整形のプランがあり、遺構の存在を想定し、十字のベルトを設定して掘削を行った。しかし、遺物は出土するものの、明瞭な遺構が確認できないため、包含層として取り上げを行った。前者は北東-南西ベルトを挟んで、南側は東から西へ①～⑦、北側は東から西へ⑧～⑭の番号を付し、包含層出土遺物として、取り上げを行った。なお、⑩は遺構が重複していることが明らかであったため、EとWに細分して取り上げた。後者は東側⑱を、南側を⑳、北側を㉓、西側を㉔として取り上げを行った。遺物出土層位は①a層・②層・②層下で、Ⅱ層に対比可能な②層からの出土が多い。1号廃滓場と包含層の関係は、1号廃滓場でも記載したとおりである。出土した遺物のうち、土師器V P030・035・038・039・041～058、石鏃V S002～007・009、石匙V S012、スクレイパーV S014、石斧V S015、敲磨器類V S021、羽口V G023を掲載した。

1号炭置き場跡



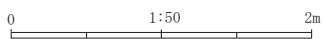
2号炭置き場跡

2号炭置き場跡



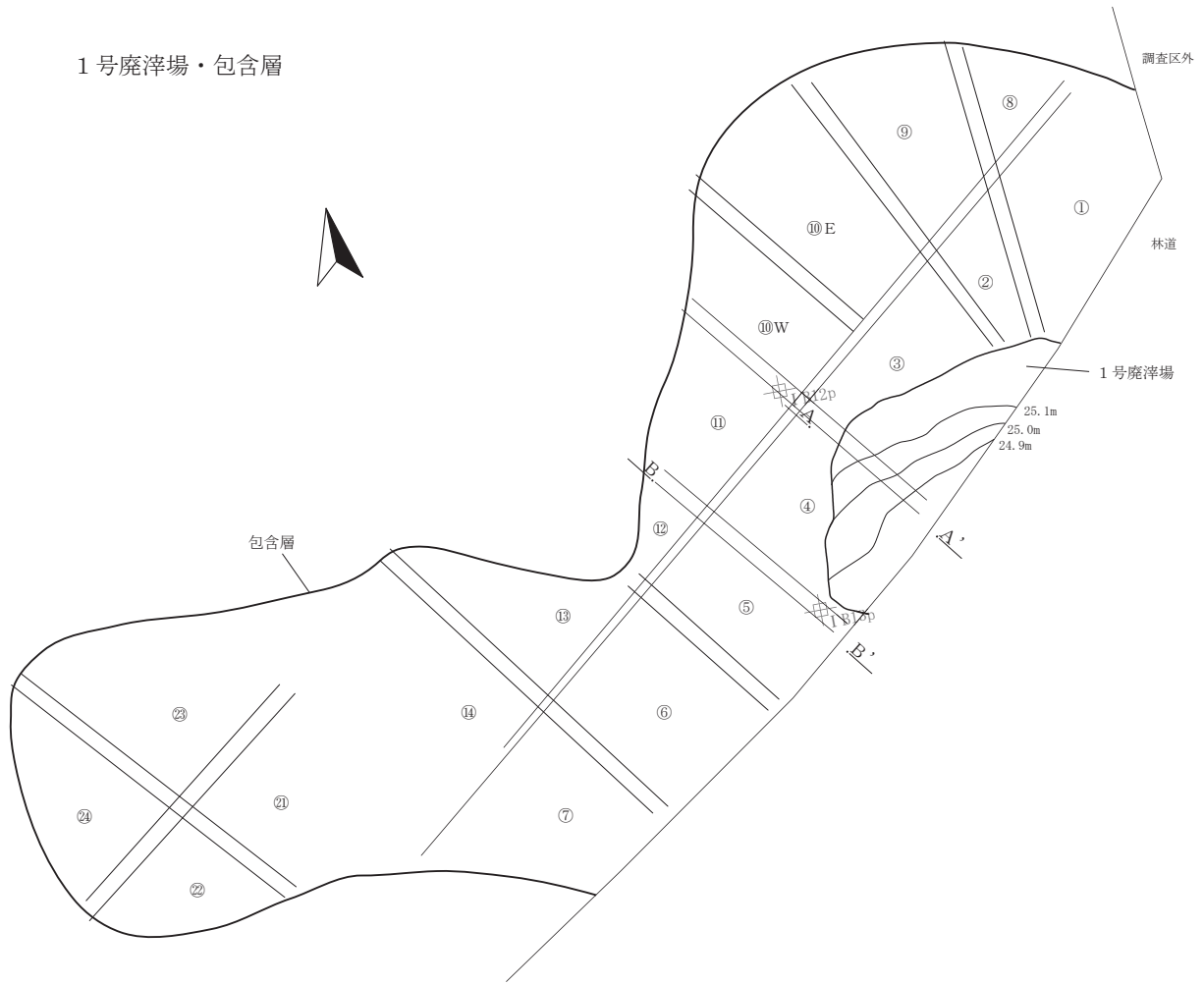
2号炭置き場跡

- 2.5Y3/2 黒褐色。砂。粘性なし。縮まりややなし。灰白色砂ブロック3～5%、炭2～3%含む。
- 10YR1.7/1 黒。炭化物主体の層。3cm～5cmのものが多く。
- 10YR3/2～3/3 黒褐色～暗褐色。砂質シルト層。花崗岩小粒2～3%。
- 10YR2/1 黒色。粘性なし。縮まり中～ややなし。炭化物主体の層。
- 10YR5/6 黄褐色。シルト。粘性なし。縮まりややあり。黒褐色しみ状にみられる。
- 10YR3/3 暗褐色。シルト。粘性なし。縮まりややあり。黒褐色土10～15%、花崗岩粒15～20%含む。



第146図 1・2号炭置き場跡

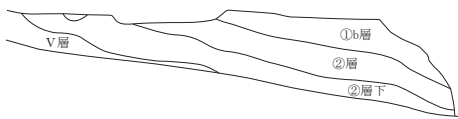
1号廃滓場・包含層



廃滓場 A

- ①b層. 10YR3/1～3/2 黒褐色. シルト. 粘性なし. 締り中～ややあり. 羽口片, 鉄滓・炉壁ブロック多量含む.
- ②層. 10YR2/1～2/2 黒～黒褐色. シルト. 粘性なし. 締り中. 炉壁ブロック 2～3%, 花崗岩粒 2～3% 含む. (II層)
- ②層下. 10YR2/2～2/3 黒褐色. シルト. 粘性ややなし. 締り中～ややなし. 暗褐色ブロック 10～15%, 遺物少量含む.

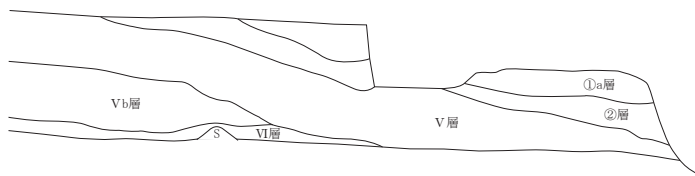
A L=25.300m



包含層 B

- ①a層 10YR3/1～2/2 黒褐色. シルト. 粘性なし. 締り中～ややなし. 花崗岩粒 7～10% 含む. 鉄滓ほとんど含まない.
- ②層 Aの②と似るが 10YR2/2 が強い. 土器片含む.
- V層 10YR3/4～4/4 暗褐色～褐色. シルト. 粘性なし. 締りややあり. 花崗岩を多く含む. 場所によっては人頭大の礫含む.
- ①～⑤, ⑧～⑫には, 本層の上にみられる厚いIII層土や薄いIV層が確認できない. そのため, II層もしくはII層起源の②層の下に本層が確認できる. (工廃-S101の北半では, 花崗岩起源の砂層がみられ, 本層を確認するにはいたらなかった.)
- Vb層 10YR2/3 黒褐色. シルト. 粘性なし. 締りややあり. こがし大の礫含む. 花崗岩粒はV層より多い. V層と比べると暗い色調.
- VI層 10YR4/6～5/6 褐色～黄褐色. シルト. 粘性なし. 締りあり.

B L=26.000m



(平面図) 0 1:100 4m

(断面図) 0 1:50 2m

第 147 図 廃滓場・包含層

3 遺 物

(1) 縄文～弥生土器（第148・149図、写真図版109）

大コンテナ（32×42×30cm）約1箱（接合前）出土した。縄文時代中期後葉がほとんどを占める。大木8b式を中心にその前後を含むのは、間木戸Ⅱ遺跡と同様であるが、大木8a-1式以前は出土していないようである。当該期以外では、弥生時代後期の土器が出土している（VP018、VP020、VP029）。観察表の“→”は調整順序を示し、矢印左側の方が前で、右側が後である。

（金子 昭彦）

(2) 土師器・須恵器（第150～152図、写真図版110・111）

土師器・須恵器は、出土遺物のうち、遺構出土資料を優先して掲載した。遺構出土資料の中では、遺構の時期決定が可能な出土状況のもので、かつ図化が可能なものを優先した。また、間木戸V遺跡の製鉄関連遺構の性格や時期を検討するため、別に丸数字の区画を設定して取り上げた包含層出土資料に関しても、可能な限り掲載した。VP001～VP028はすべて土師器である。須恵器は3号竪穴建物跡の埋土から小片が1点出土したのみである。小片のため図化できなかった。出土総量は、土師器が27,539.3g、須恵器が6gである。

1) 3号竪穴建物跡（VP001～VP009） 総量土師器3,863.5g、須恵器6g

VP001・VP002は床面直上から出土したもの。

VP001は壺の口縁部から肩部である。内外面ともにハケ後ミガキである。

VP002は坏の口縁部から底部である。外面はハケ後ミガキ、内面はミガキで内面黒色処理である。

VP003・VP004は埋土最下層から出土したもの。

VP003・VP004は坏の口縁部から底部である。VP003は外面がハケ後ミガキ、内面はミガキで黒色処理である。VP004は外面がハケ後ミガキ、内面はヘラナデ後ミガキで黒色処理である。口縁部の上面観が一部で波状に見えることから、花卉状口縁の可能性もある。

VP005・VP006は壁際の三角堆積から出土したもの。

VP005は甕の口縁部から肩部である。外面はミガキ、内面はハケ後ミガキである。口唇部は摘み上げている。

VP006は壺である。外面はミガキ、内面はハケ後ミガキである。

VP007・VP009は埋土下位から出土したもの。

VP007は坏の口縁部から底部である。外面はハケ後ミガキ、内面はミガキで黒色処理である。

VP009は壺の口縁部から肩部である。肩部は段になる。内外面ともにミガキである。内面のミガキは幅の広いものである。

VP008は埋土上位から出土したもの。

VP008は有段の坏の口縁から底部である。段は2段で、内面は輪濟みと一致する。ミガキにより沈線状に見える。底部は角に厚みのある平底である。内外面ともにミガキで内面黒色処理である。

2) 2号工房跡（VP010） 土師器62.1g

VP010は2号工房跡の下から出土したもの。遺構に直接伴う資料ではなく、包含層出土資料であ

3 遺物

る。しかし、遺構の上限を示す可能性があり、かつ類例が少ないため掲載した。

VP010は赤彩壺の口縁部の小破片である。赤彩は縦の直線状に口縁部の内外面に施文する。内外面ともにヨコナデである。

3) 3号焼土遺構 (VP011) 総量土師器116.7g

VP011は3号焼土遺構から出土したもの。

VP011は甕の口縁部から胴部である。内外面ともにハケである。

4) 包含層 (VP012～VP029) 総量土師器22,409.1g

VP012～VP017は甕である。VP012～VP015は口縁部から胴部。VP012は口縁部が受け口状に内湾する。内外面ともにハケ後ミガキである。VP013は肩部が段になる。外面がハケ後ミガキ、内面はハケである。外面のミガキは線状の痕跡に見える。VP014は外面がハケ、内面はハケで、頸部のみその後ナデである。VP015は内外面ともにハケである。VP016・VP017は胴部から底部。VP016の外面はハケ後ミガキ、内面はハケである。VP017は内外面ともにハケである。

VP018は甕である。肩部は段になる。内外面ともにハケ後ミガキである。

VP019～VP023は壺である。VP019は口縁部から肩部と胴部から底部の同一個体。内外面ともにミガキである。VP020は口縁部から胴部。内外面ともにハケ後ミガキである。VP021は肩部から胴部。外面はミガキ、内面はヘラナデ後ミガキである。VP022は胴部。内外面ともにハケ後ミガキである。VP023は大型の底部。内外面ともにミガキである。VP024は四脚付きの小型壺である。底部外面はやや丸みがあり、そこに丸みのある脚がつく。外面はミガキ、内面はナデ後ミガキである。

VP025～VP029は坏である。VP025～VP027・VP029は有段のもの。VP025は口縁部から胴部。段は1段で、内面の段も明瞭で、輪積みと一致する。口縁はやや内湾する。内外面ともにミガキである。VP026は碗形の口縁部から底部。段は沈線で表現するもので、2条あり、輪積みと一致しない。VP027は口縁部から底部。段は1段で、輪積みと一致する。内外面ともにミガキである。VP028は底部。内外面ともにミガキである。VP029は口縁部から胴部。段は1段で、輪積みと一致する。

(佐藤 剛)

(3) 土製品 (第154図、写真図版110・113)

紡錘車が2点出土し、全点を図化した。いずれも遺構外からの出土で欠損部が目立つ。ミガキ調整は認められない。

(佐藤 あゆみ)

(4) 石器 (第153図、写真図版112)

本調査で出土した石器は、前述した間木戸Ⅱ遺跡の分類にならない下記に記載する。

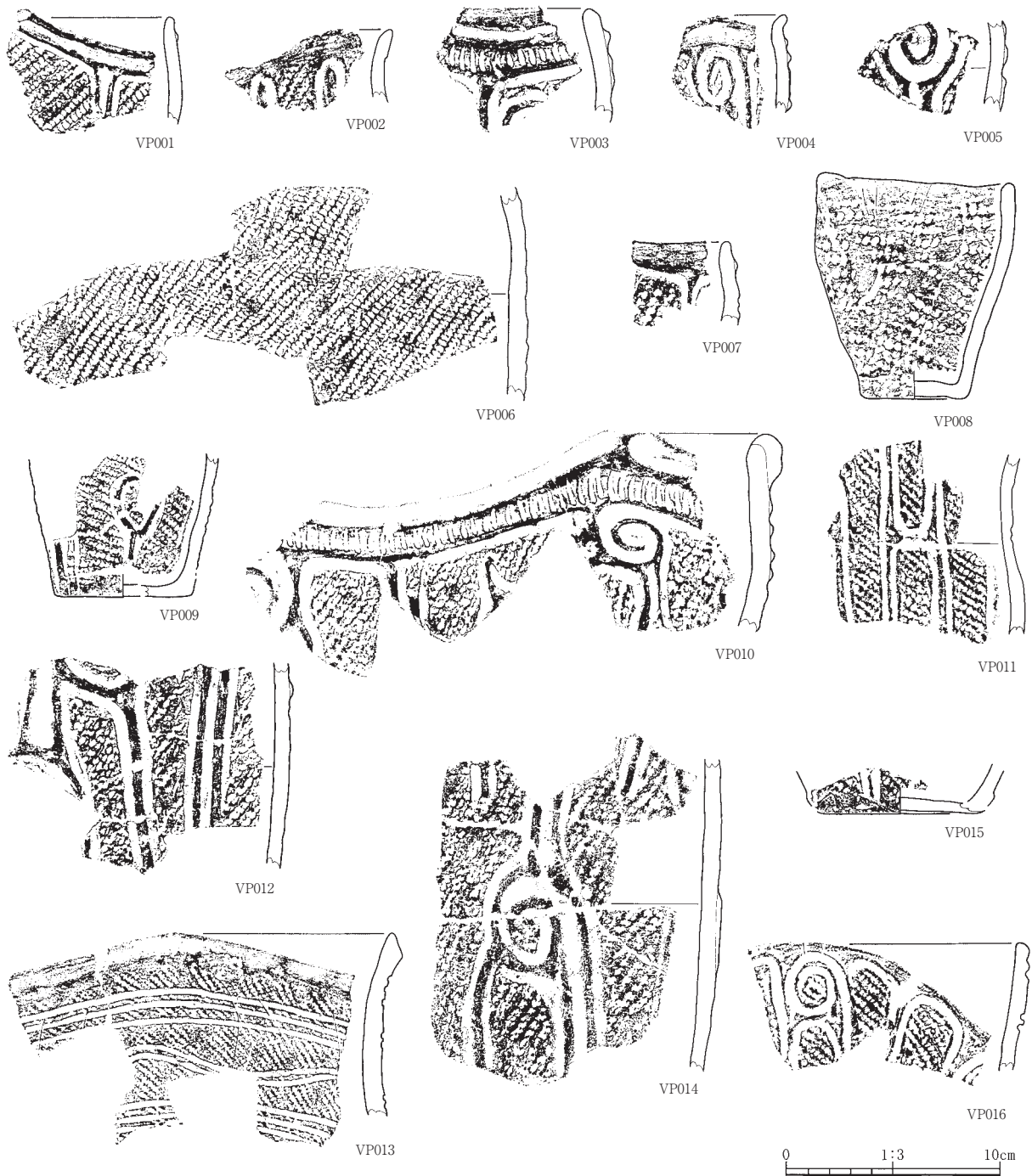
石鏃

11点出土。7点を図化と写真掲載をした。

1a類は、VS001、VS002、VS004、VS005、VS008、VS009、VS011である。VS005はアスファルト様の黒色物が付着する。

1b類は、VS003、VS006、VS010である。VS006は厚みがあり石錐の可能性もある。

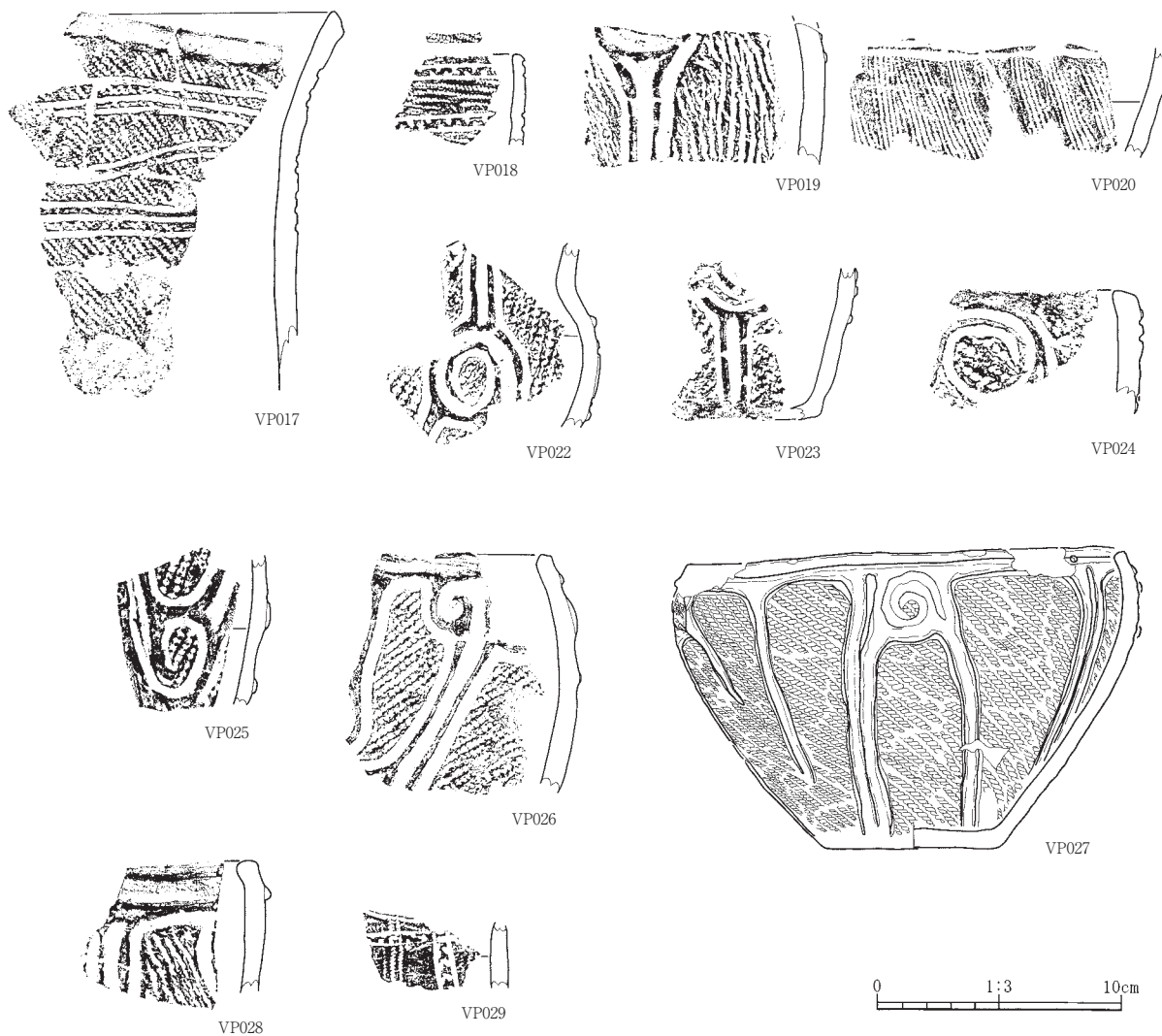
2類は、VS007のみである。



第 148 図 縄文～弥生土器 (1)

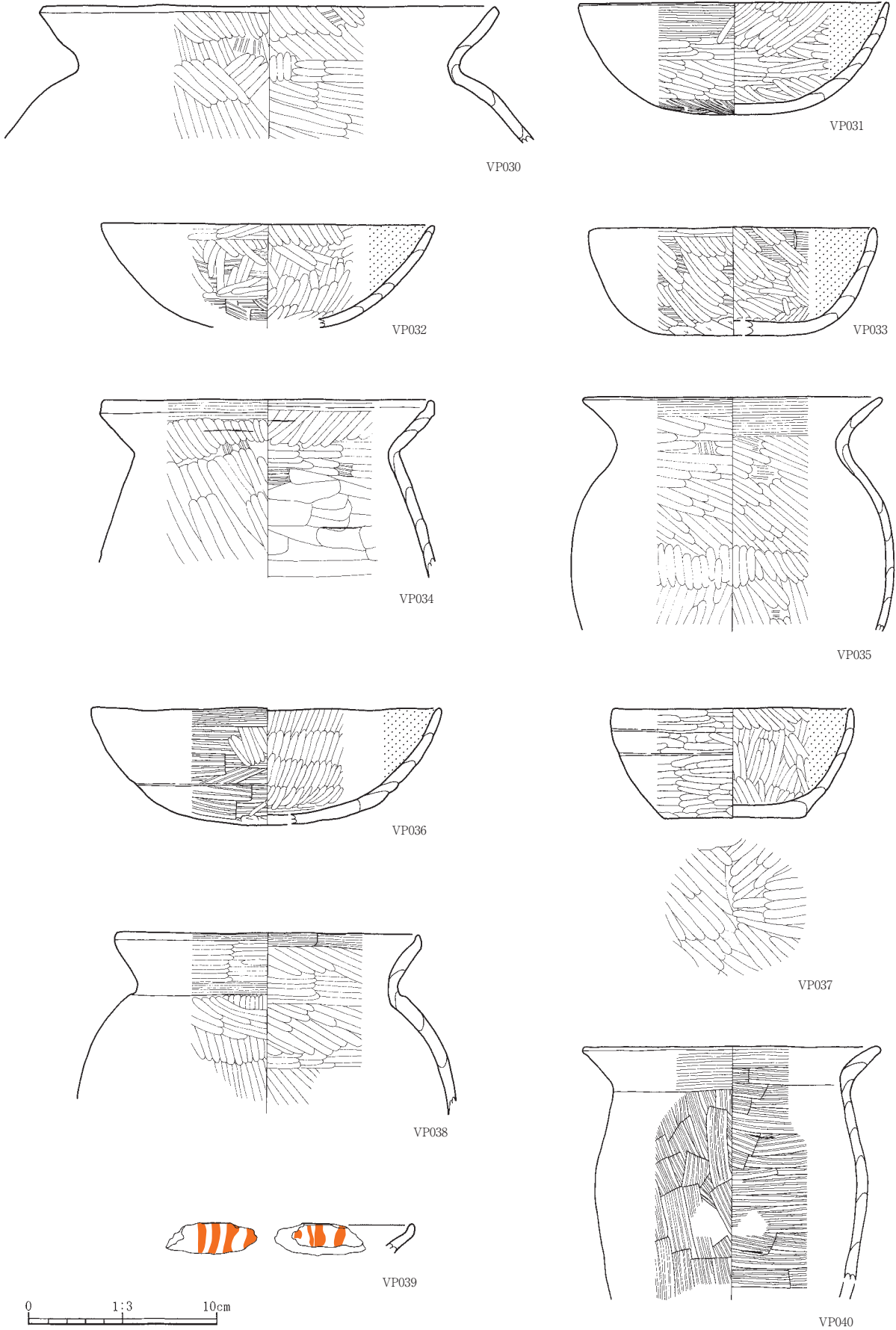
第 13 表 間木戸V遺跡縄文～弥生土器観察表

掲載No	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写真
VP001	3号壺穴住居跡 SW 14 WEベルト	深鉢・口縁部	RL タテ→隆帯に沿うナデ	ナデ光沢			148	109
VP002	3号壺穴住居跡 Eベルト	深鉢・口縁部	RL タテ→太く浅め沈線	ナデ			148	109
VP003	3号壺穴住居跡 NE	深鉢・口縁部	深い刻目列・隆帯に沿うナデ	ナデ			148	109
VP004	3号壺穴住居跡 NE	深鉢・口縁部	RL タテ?→隆帯に沿うナデ	ナデ光沢			148	109
VP005	3号壺穴住居跡 NE	深鉢・胴部	隆帯に沿うナデ	ナデ	外面スス多		148	109
VP006	1号炭置き場跡・2号工房跡の下、縄文レンチ1-2間、3b	深鉢・胴 (1/5 周未満)	RL タテ	ナデ	外面スス付着		148	109
VP007	2号工房跡	深鉢・口縁部	RRLR タテ?→隆帯に沿うナデ	ナデ			148	109
VP008	縄文レンチ 1-2間	小型鉢 (略完形)	LR タテ、ナダメ/底面ナデ	ナデ	外スス、二次焼成・内下コゲ		148	109
VP009	縄文レンチ1-2間	小型鉢 (1/3 周未満)	LR タテ→低い隆帯に沿う浅い沈線/底面ナデ	ナデ	外面スス付着、内面コゲ?		148	109
VP010	㊦、縄文レンチ3b	深鉢・口縁 (1/4 周未満)	RRLR タテ→隆帯に沿うナデ	ナデ	外面スス付着		148	109
VP011	縄文レンチ3-4間	深鉢・胴部	RRLR タテ→隆帯に沿うナデ	ナデ			148	109
VP012	縄文レンチ3-4間	深鉢・胴部	RRLR タテ→隆帯に沿うナデ	ナデ	外スス、内コゲ・外面摩耗ひどい		148	109
VP013	縄文レンチ3-4間	深鉢・胴部	LR タテ→深め沈線	ナデ	内面全面コゲ		148	109
VP014	縄文レンチ3-4間	底部 (1/3 周未満)	LR タテ?→深い沈線/底面ナデ	ナデ			148	109
VP015	縄文レンチ3-4間	深鉢・口縁部	LR タテ→太く深い沈線	ナデ	外面スス付着		148	109
VP016	縄文レンチ3-4間、㊧w	深鉢 (1/4 周未満)	LR タテ→浅い沈線	ナデ	外面二次焼成、摩耗・17と同一?		148	109

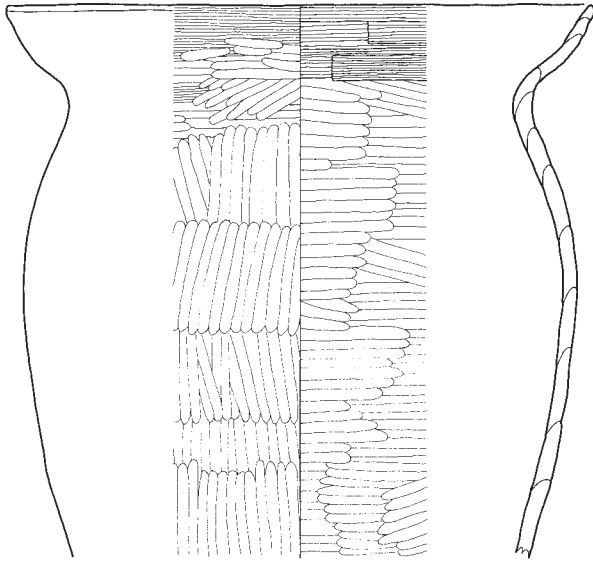


第 149 図 縄文～弥生土器 (2)

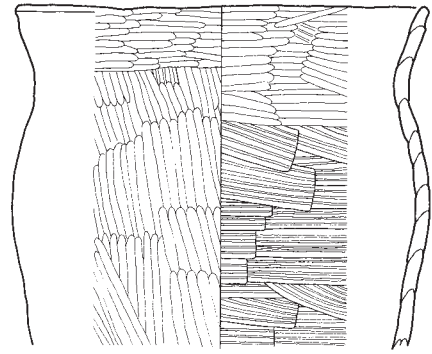
掲載№	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文原体など)	内 面 (調整など)	備 考	本文 記載	図	写真
VP017	縄文トレンチ3-4間、⑬w	深鉢・口～胴部	LR タテ→浅い沈線	ナデ	16と同一個体?		149	109
VP018	IB 12 m	深鉢・口縁部	口唇 RL ヨコ? / RL ナナメ?・浅い沈線・下からの交互刺突文	ナデ			149	109
VP019	遺物ポイント	深鉢・胴部	単軸絡 1 (R) タテ?→隆帯に沿うナデ	ナデ	上の割れ口、粘土接合面剥離		149	109
VP020	遺物ポイント	深鉢・口縁部?	RL ナナメ→側面圧痕	ナデ			149	109
VP021	遺物ポイント	深鉢・口縁部			10に接合			
VP022	遺物ポイント	鉢・胴部	RLR タテ→隆帯に沿う浅め沈線	ナデ光沢			149	109
VP023	遺物ポイント	鉢・胴部	RL タテ→隆帯に沿うナデ	ナデ光沢	外底研磨による改変?		149	109
VP024	遺物ポイント	深鉢・口縁部	LR タテ?→太く浅め沈線	ナデ	外面スス付着		149	109
VP025	遺物ポイント	鉢・胴部	RL タテ→隆帯に沿うナデ	ナデ	外スス、内コゲ		149	109
VP026	遺物ポイント	深鉢・口縁部	RL タテ→隆帯に沿う浅い沈線	ナデ丁寧			149	109
VP027	1号埋設土器	浅鉢 (一部欠損)	LR タテ→隆帯に沿う浅い沈線・隆帯に調整/底面ナデ	ナデ			149	109
VP028	IB 11 ~ 12 p~r	深鉢・口縁部	内面肥厚 / LR タテ→隆帯に沿う沈線	ナデ			149	109
VP029	IB 13 m~n	深鉢・胴部	RL ナナメ・交互刺突	ナデ			149	109



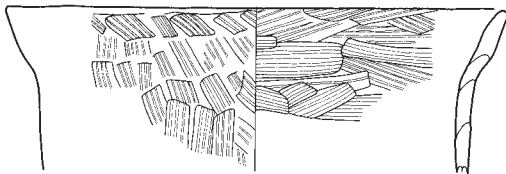
第150図 土師器(1)



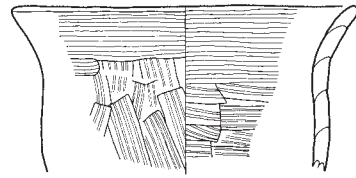
VP041



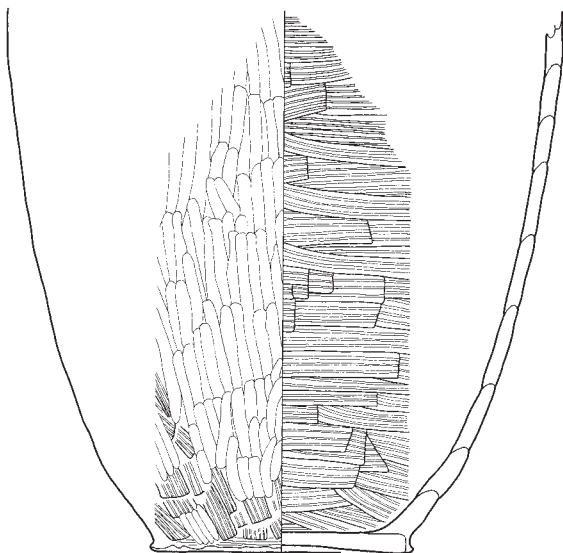
VP042



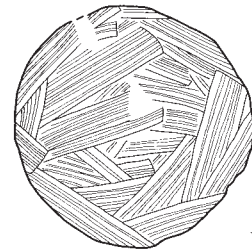
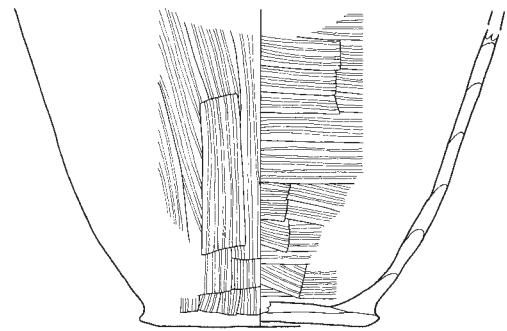
VP043



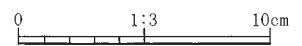
VP044



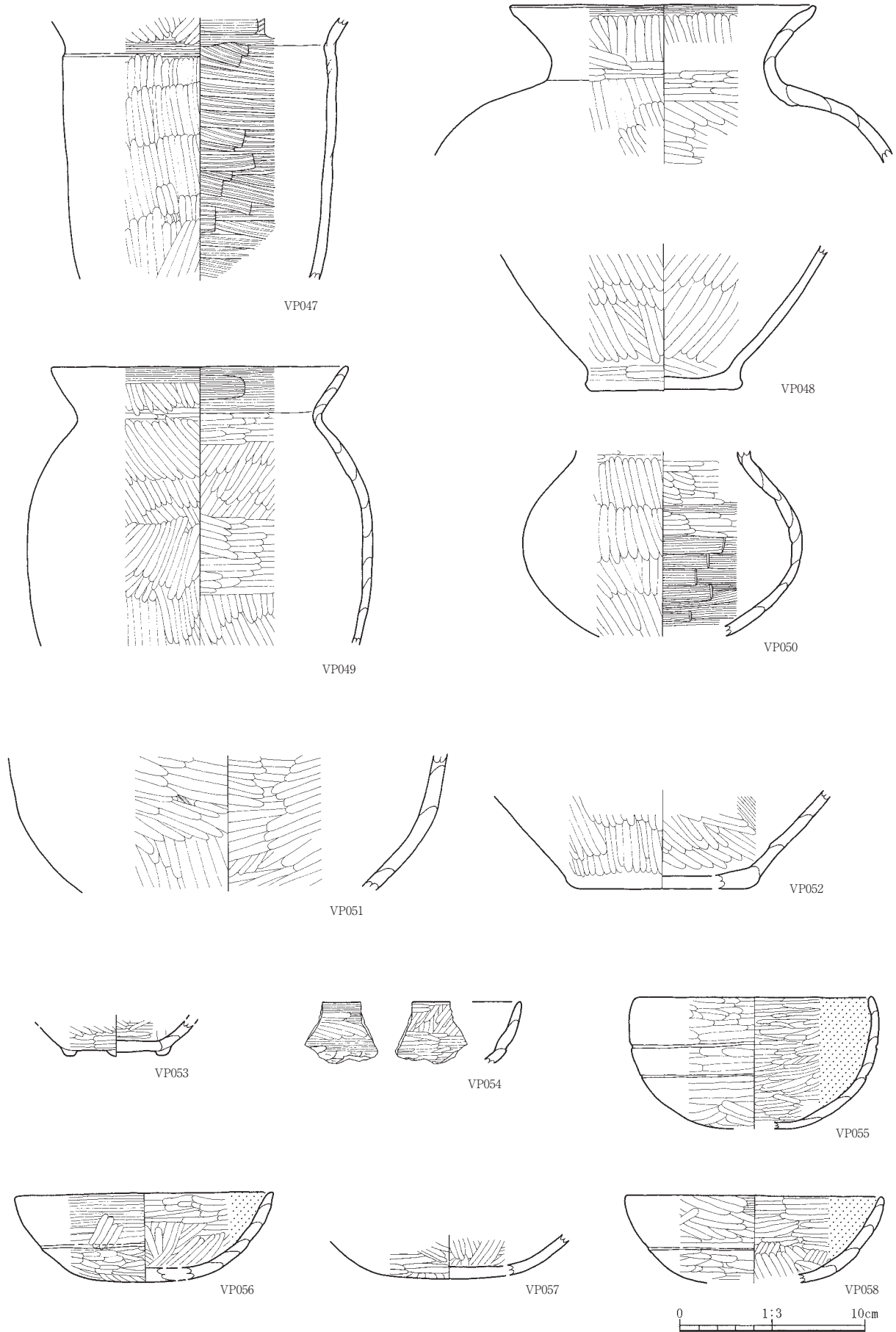
VP045



VP046



第 151 図 土師器 (2)



第 152 図 土師器 (3)

3 遺物

石匙

1点出土。図化と写真掲載をした。

横型の頁岩製石匙である。つまみ部は両面調整、刃部は欠損している。

スクレイパー

2点出土。1点図化と写真掲載をした。

いずれも、2類の削器と考えられる。VS013は、両辺に連続的な刃部を作り出している。

石斧

1点出土。図化と写真掲載をした。

VS015は花崗閃緑岩の磨製石斧である。稜線が認められ、刃部は欠損している。

敲磨器

8点出土。1点図化と写真掲載をし、1点を写真掲載のみとした。

VS020は、掌におさまる円礫で下面が平坦になる。下面には敲打痕、裏面には黒色物の付着が認められる。

台石

2点出土。観察表の記載のみとした。

(佐藤 あゆみ)

(5) 鉄 製 品

4点出土して、3点を図化した。VG003は、鉄族の頸部のみで、1号製鉄炉の炉面から出土した。VG004は楔状鉄製品で近代のものと思われる。VG006は蕨手刀の座金部である。VG005はVG003と同じ3号竪穴建物跡から出土した鉄製品で刀片と思われる。(詳細は後述のⅦ総括)

(佐藤 あゆみ)

(6) 羽 口

中コンテナ1箱出土し、3点を図化と写真掲載をし、15点を写真掲載のみとした。全体的に欠損が多く、掲載基準は、外・内径の測定が可能か否か、羽口の制作手法が観察出来るもので判断している。内径の平均値は約3.3cm、外径は8.1cmであった。外径の大きさはその残存部によっても違いがあるが、内径については、概ね3～4cmほどに統一されている。装着部は鉄滓の付着が著しいが、VG009のように、羽口が溶解して滓化しているのも見受けられた。軸側の末端部は滓の付着は認められず、ヘラ状工具痕や指の圧痕と思われる凹部、内面には芯棒の痕跡が観察された。なお、前述の通り出土資料は欠損部が多かったため、装着角度の算出は統計として特徴を数的に示すことが不可能であると判断し計測は行っていない。

(佐藤 あゆみ)

(7) 炉 壁

中コンテナ2箱出土し、5点を写真掲載のみとした。羽口同様に、全体の形状が分かる資料が少ない。VG025・VG026は、炉壁の芯棒痕と思われる痕跡が認められる。これは木舞孔と呼ばれるものと考えられる。炉体を構築する際に木舞を造りそこに材料である粘土を貼り付けていった痕跡と思われる。表面は、指の圧痕と思われる凸凹が認められる。当初は、通風口と考えたが、滓の付着部や炉壁の角の位置等から通風口では装着角度が不釣り合いと認識したものである。

炉壁の特徴は、分類中に外観を観察した内容を下記に列記する。

・ 1号炭置き場出土炉壁

2～5cmに砕けたものがほとんど。10YR8/6黄橙色のものは軟質で、スサ少なめ。10YR5/1褐灰色のものは、軽い。5YR6/8橙色のものは、鉄滓の付着が目立つ。いずれも細礫を多く含んでいた。熱の伝わりが場所によって違うからだろうか。

・ 1号工房跡出土炉壁

7.5YR8/8黄橙色のものは軟質で、スサ少なめ。5YR7/8橙色のものは1号炭置き場跡より多く見られスサが混じる。

・ 2号工房跡出土炉壁

炉1からは、10YR5/1褐灰色のものが目立つ。1号工房跡下として取り上げている物に5YR6/8橙色で鉄滓の付着が顕著な物多い。

・ 排滓場から出土した炉壁

10YR6/2灰黄褐色で脆いものが多い。

5YR6/8橙色で鉄滓の付着が顕著な物は、炉の下部に使用された炉壁と考えられる。粘土質でスサの混じりが少なく、補強の役目で貼られたものであろうか。

(佐藤 あゆみ)

(8) 鉄 滓 類

鉄滓は、鉄原料となる砂鉄の中に含まれる不純物が高温で熱せられることで熔融し、排出したもので、工房跡や廃滓場から出土している。分類については、遺跡間でのデータ比較を有効なものとするために、同じ機器で行うことが望まれるが、当センターで使用してきたメタルチェッカー（MR-50B）がほとんど使用できない状態であるため、今回の分類では金属探知機「下地センサーEX（シンワ測定株式会社製）」と強力磁石「ハンドマグネット着脱式A-2（シンワ測定株式会社製）」を使用した。今回の調査では鍛冶炉が検出されていないことと、椀形滓や鍛造剥片、粒状滓等鍛冶に伴う鉄滓が見られないことから、製鉄に係る鉄滓と判断して、分類を行っている。鉄滓の分類は、まず、強力磁石を使用した磁着の有無を検査し、磁着した鉄滓を磁着遺物としてさらに金属探知機を使用した検査を行った。磁着のしない鉄滓は非磁着遺物（鉄滓C）とした。金属探知機を使用した検査は、反応により鉄塊系遺物、含鉄（大）遺物（鉄滓A）、含鉄（小）遺物（鉄滓A'）、磁化遺物（鉄滓B）とした。これらを色調や形状により以下のように分類した。

鉄塊系遺物

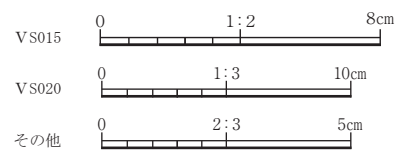
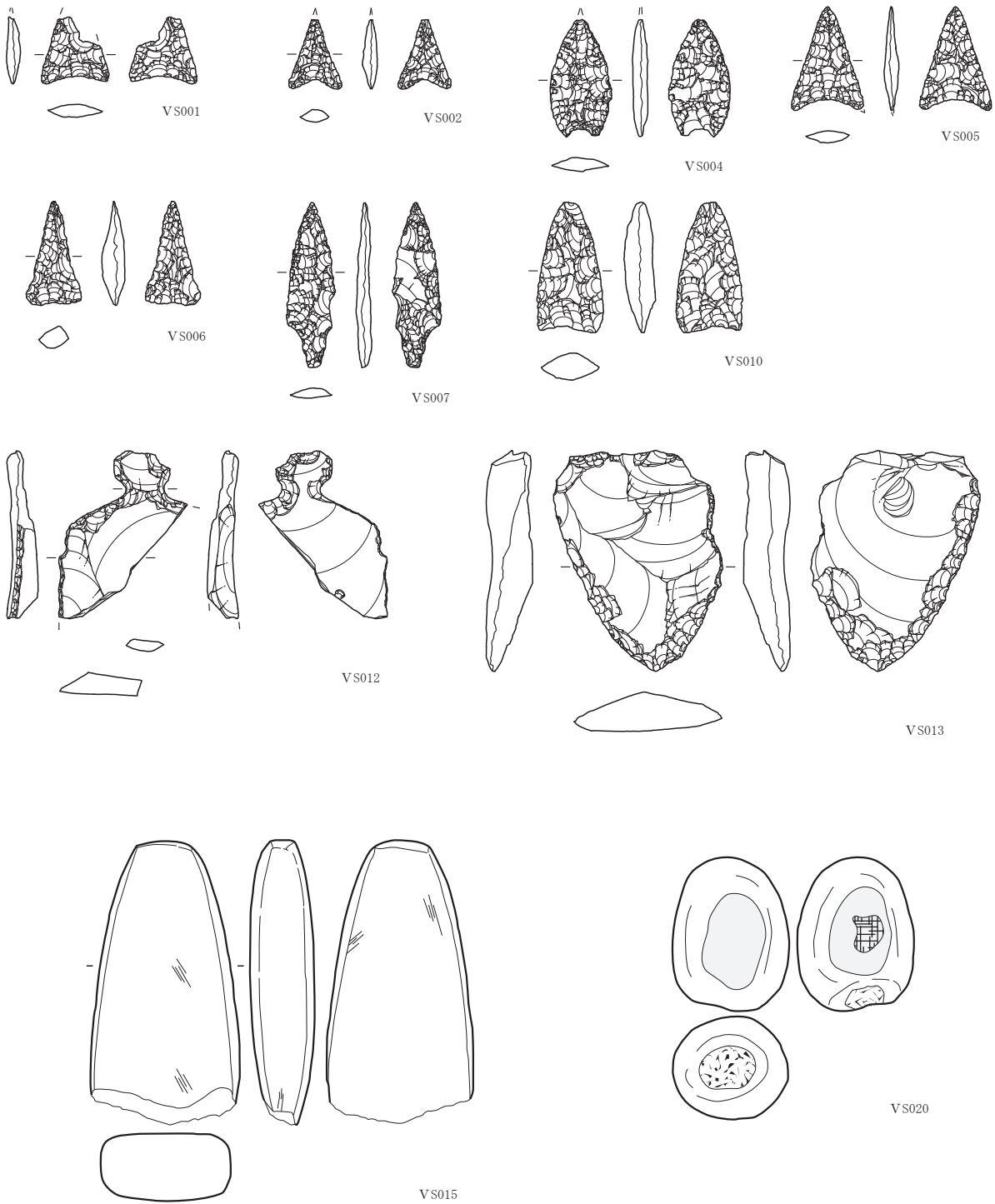
表面は錆等によりデコボコしており、色調は赤褐色を呈する。鉄が多く残留し、磁着性が強く、金属探知機で緑色のランプが連続点灯するほどに非常に強く反応する。

流出滓A1類

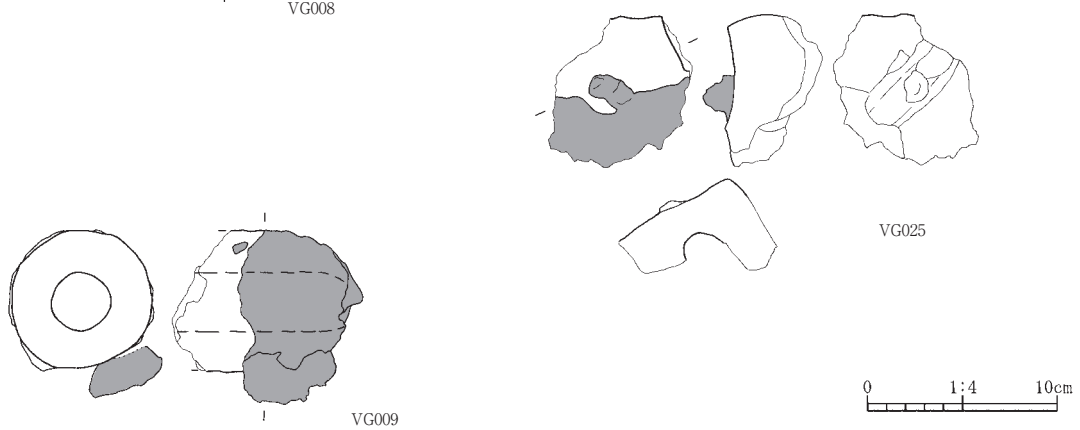
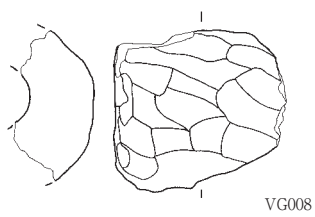
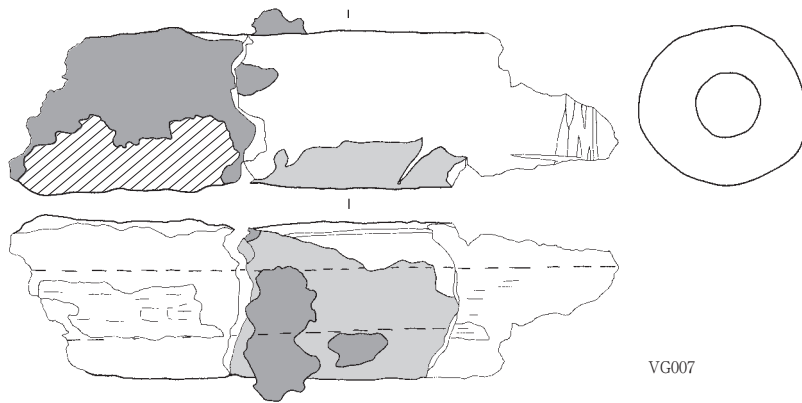
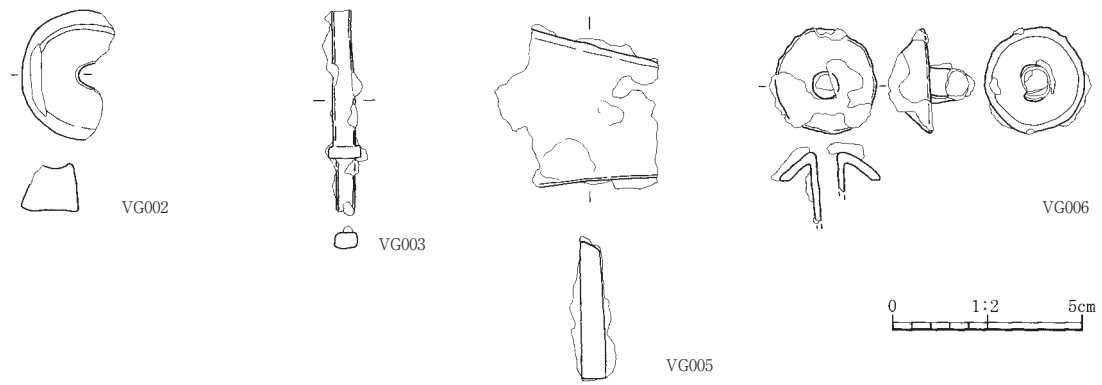
炉外へ流れ出た鉄滓が急速に冷えて固まった流動状の滓で、表面は平滑で、流れた痕跡が認められる。色調は青黒色や青灰色を呈する。磁着性が強く、金属探知機での反応は、緑色のランプが点灯したり、赤色から緑色のランプの間を行き来したりする反応を示す。

流出滓A'1類

炉外へ流れ出た鉄滓が急速に冷えて固まった流動状の滓で、表面は平滑で、流れた痕跡が認められる。色調は青黒色や青灰色を呈する。磁着性が強いが、金属探知機にはかすかに反応し、赤ランプが1つ点灯する程度である。



第 153 図 石器



第 154 図 土製品、鉄製品、羽口、炉壁

流出滓B 1類

炉外へ流れ出た鉄滓が急速に冷えて固まった流動状の滓で、表面は平滑で、流れた痕跡が認められる。色調は青黒色や青灰色を呈する。磁着性が強いが、金属探知機には反応しない。

流出滓C 1類

炉外へ流れ出た鉄滓が急速に冷えて固まった流動状の滓で、表面は平滑で、流れた痕跡が認められる。色調は青黒色や青灰色を呈する。磁着性がなく、金属探知機にも反応しない。

炉内滓A 2類

炉内に生成された滓全般である。表面は気泡が弾けたようにデコボコした状態を呈しているものや、燃料の木炭等が食い込んだ状態のもの等がある。色調は全体的に赤褐色を呈する。磁着性が強く、金属探知機での反応は、緑色のランプが点灯したり、赤色から緑色のランプの間を行き来したりする反応を示す。

炉内滓A 2'類

炉内に生成された滓全般である。表面は気泡が弾けたようにデコボコした状態を呈しているものや、燃料の木炭等が食い込んだ状態のもの等がある。色調は青黒色を呈する。磁着性が強く、金属探知機での反応は、緑色のランプが点灯したり、赤色から緑色のランプの間を行き来したりする反応を示す。

炉内滓A' 2類

炉内に生成された滓全般である。表面は気泡が弾けたようにデコボコした状態を呈しているものや、燃料の木炭等が食い込んだ状態のもの等がある。色調は全体的に赤褐色を呈する。磁着性が強いが、金属探知機にはかすかに反応し、赤ランプが1つ点灯する程度である。

炉内滓A' 2'類

炉内に生成された滓全般である。表面は気泡が弾けたようにデコボコした状態を呈しているものや、燃料の木炭等が食い込んだ状態のもの等がある。色調は青黒色を呈する。磁着性が強いが、金属探知機にはかすかに反応し、赤ランプが1つ点灯する程度である。

炉内滓B 2類

炉内に生成された滓全般である。表面は気泡が弾けたようにデコボコした状態を呈しているものや、燃料の木炭等が食い込んだ状態のもの等がある。色調は全体的に赤褐色を呈する。磁着性が強いが、金属探知機には反応しない。

炉内滓B 2'類

炉内に生成された滓全般である。表面は気泡が弾けたようにデコボコした状態を呈しているものや、燃料の木炭等が食い込んだ状態のもの等がある。色調は青黒色を呈する。磁着性が強いが、金属探知機には反応しない。

炉内滓C 2類

炉内に生成された滓全般である。表面は気泡が弾けたようにデコボコした状態を呈しているものや、燃料の木炭等が食い込んだ状態のもの等がある。色調は全体的に赤褐色を呈する。磁着性がなく、金属探知機にも反応しない。

炉内滓C 2'類

炉内に生成された滓全般である。表面は気泡が弾けたようにデコボコした状態を呈しているものや、燃料の木炭等が食い込んだ状態のもの等がある。色調は全体的に赤褐色を呈する。磁着性がなく、金属探知機にも反応しない。

炉底滓A 3類

製鉄炉の炉底に生成された滓で、裏面に青灰色の砂が付着している。表面は平滑で青黒色を呈するものと、デコボコしており赤褐色を呈するものがある。工具で搔いたような痕跡が見られるものもある。磁着性が強いが、金属探知機にはかすかに反応し、赤ランプが1つ点灯する程度である。

炉底滓A' 3類

製鉄炉の炉底に生成された滓で、裏面に青灰色の砂が付着している。表面は平滑で青黒色を呈するものと、デコボコしており赤褐色を呈するものがある。磁着性が強いが、金属探知機にはかすかに反応し、赤ランプが1つ点灯する程度である。

炉底滓B 3類

製鉄炉の炉底に生成された滓で、裏面に青灰色の砂が付着している。表面は平滑で青黒色を呈するものと、デコボコしており赤褐色を呈するものがある。磁着性が強いが、金属探知機には反応しない。

炉底滓C 3類

製鉄炉の炉底に生成された滓で、裏面に青灰色の砂が付着している。表面は平滑で青黒色を呈するものと、デコボコしており赤褐色を呈するものがある。工具で搔いたような痕跡が見られるものもある。磁着性がなく、金属探知機にも反応しない。

炉壁付着滓A 4類

炉壁が付着した滓である。磁着性が強いが、金属探知機にはかすかに反応し、赤ランプが1つ点灯する程度である。

炉壁付着滓A' 4類

炉壁が付着した滓である。磁着性が強いが、金属探知機にはかすかに反応し、赤ランプが1つ点灯する程度である。

炉壁付着滓B 4類

炉壁が付着した滓である。磁着性が強いが、金属探知機には反応しない。

炉壁付着滓C 4類

炉壁が付着した滓である。磁着性がなく、金属探知機にも反応しない。

第 14 表 鉄滓出土量一覧(1)

	鉄塊系 遺物	流出滓				炉内滓				
		A1	A' 1	B1	C1	A2	A2'	A' 2	A' 2'	B2
3号竪穴建物跡	360.1	38.7	0.0	21.3	11653.0	909.9	0.0	154.1	0.0	29.4
	1.8	0.2	0.0	0.1	58.9	4.6	0.0	0.8	0.0	0.1
3号竪穴建物跡・ 2号炭置き場	0.0	0.0	85.0	0.0	6.7	0.0	0.0	12.7	0.0	0.0
	0.0	0.0	76.6	0.0	6.0	0.0	0.0	11.5	0.0	0.0
1号工房跡1号製鉄炉	0.0	0.0	0.0	0.0	2733.0	386.0	0.0	1589.0	20.2	166.9
	0.0	0.0	0.0	0.0	16.0	2.3	0.0	9.3	0.1	1.0
1号工房跡2号製鉄炉	0.0	0.0	104.1	0.0	598.0	1107.7	0.0	1488.5	63.4	239.8
	0.0	0.0	0.8	0.0	4.4	8.1	0.0	10.9	0.5	1.8
1号工房跡3号製鉄炉	0.0	0.0	0.0	0.0	213.8	0.0	0.0	132.9	0.0	13.7
	0.0	0.0	0.0	0.0	46.6	0.0	0.0	28.9	0.0	3.0
1号工房跡製鉄炉以外	0.0	0.0	16.9	20.3	7736.2	799.4	54.9	2108.0	67.6	590.3
	0.0	0.0	0.1	0.1	33.1	3.4	0.2	9.0	0.3	2.5
2号工房跡4号製鉄炉	0.0	0.0	7.1	1.7	3803.5	112.4	92.9	842.0	12.2	354.6
	0.0	0.0	0.1	0.0	29.5	0.9	0.7	6.5	0.1	2.7
2号工房跡5号製鉄炉	0.0	0.0	54.2	4.2	2847.9	56.9	0.0	156.4	0.0	44.9
	0.0	0.0	1.5	0.1	79.6	1.6	0.0	4.4	0.0	1.3
2号工房跡製鉄炉以外	0.0	0.0	2377.0	472.7	21292.6	1864.7	91.1	2774.3	158.2	2130.0
	0.0	0.0	4.3	0.9	39.0	3.4	0.2	5.1	0.3	3.9
1号炭置き場跡	0.0	0.0	415.8	78.4	35083.6	6603.8	260.8	2785.9	1297.5	323.3
	0.0	0.0	0.7	0.1	57.1	10.8	0.4	4.5	2.1	0.5
2号炭置き場跡	0.0	0.0	0.0	67.1	284.7	2116.4	0.0	115.5	0.0	48.0
	0.0	0.0	0.0	1.8	7.5	55.5	0.0	3.0	0.0	1.3
1号廃滓場	0.0	0.0	2614.9	109.8	184100.5	4900.4	17.3	3352.4	274.5	1426.7
	0.0	0.0	1.1	0.0	80.9	2.2	0.0	1.5	0.1	0.6
包含層①～⑭	0.0	180.8	156.9	0.0	38238.1	963.7	7.4	893.8	60.3	104.0
	0.0	0.4	0.4	0.0	86.0	2.2	0.0	2.0	0.1	0.2
包含層⑳～㉔	0.0	0.0	0.0	0.0	184.5	36.1	0.0	0.0	0.0	0.0
	0.0	0.0	0.0	0.0	83.6	16.4	0.0	0.0	0.0	0.0
1号土坑	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.6	0.0	28.0	0.0	17.2
	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.4	0.0	57.4	0.0	35.2
2号土坑	0.0	0.0	0.0	0.0	73.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
4号土坑	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	85.2	0.0	172.7	0.0	16.9
	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	18.5	0.0	37.4	0.0	3.7
5号土坑	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	18.6	0.0	10.4	0.0	0.0
	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	16.5	0.0	9.2	0.0	0.0
2号焼土遺構	0.0	0.0	0.0	0.0	57.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
1号不明遺構	0.0	0.0	0.0	0.0	174.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	0.0	0.0	0.0	0.0	67.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
遺構外	0.0	85.4	533.4	20.9	43917.1	1416.7	0.0	1292.8	505.5	157.2
	0.0	0.2	1.0	0.0	85.3	2.8	0.0	2.5	1.0	0.3
排土一括	0.0	0.0	0.0	0.0	446.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合計	360.1	304.9	6365.3	796.4	353445.9	21381.5	524.4	17909.4	2459.4	5662.9
	0.1	0.1	1.2	0.1	65.9	4.0	0.1	3.3	0.5	1.1

上段：重量（g） 下段：遺構等毎に占める鉄滓類の比率（％）

炉内滓			炉底滓				炉壁付着滓				重量合計
B2'	C2	C2'	A3	A' 3	B3	C3	A4	A' 4	B4	C4	
0.0	1337.5	1649.7	0.0	19.6	0.0	3577.4	0.0	0.0	0.0	30.1	19780.8
0.0	6.8	8.3	0.0	0.1	0.0	18.1	0.0	0.0	0.0	0.2	100%
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.5	0.0	0.0	0.0	0.0	110.9
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.9	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
1.8	1971.5	495.6	0.0	0.0	5.1	9651.8	0.0	0.0	0.0	11.7	17032.6
0.0	11.6	2.9	0.0	0.0	0.0	56.7	0.0	0.0	0.0	0.1	100%
16.4	2772.9	1776.7	0.0	0.0	0.0	2840.9	0.0	205.3	150.4	2283.3	13647.4
0.1	20.3	13.0	0.0	0.0	0.0	20.8	0.0	1.5	1.1	16.7	100%
0.0	31.3	39.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	27.8	459.1
0.0	6.8	8.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.1	100%
16.2	4595.0	1559.1	0.0	0.0	0.0	5295.2	144.9	282.3	0.0	87.3	23373.6
0.1	19.7	6.7	0.0	0.0	0.0	22.7	0.6	1.2	0.0	0.4	100%
9.9	3537.6	2962.2	0.0	0.0	0.0	1162.4	0.0	0.0	0.0	0.0	12898.5
0.1	27.4	23.0	0.0	0.0	0.0	9.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
1.1	363.9	47.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3576.5
0.0	10.2	1.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
250.2	13143.4	2510.8	488.7	0.0	0.0	4298.7	8.0	889.7	33.8	1866.6	54650.5
0.5	24.0	4.6	0.9	0.0	0.0	7.9	0.0	1.6	0.1	3.4	100%
15.2	6399.6	768.8	0.0	0.0	0.0	5345.7	420.6	0.0	0.0	1610.7	61409.7
0.0	10.4	1.3	0.0	0.0	0.0	8.7	0.7	0.0	0.0	2.6	100%
0.0	18.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1163.0	3813.0
0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	30.5	100%
70.6	11469.5	2266.8	835.8	5.6	1.9	6106.9	806.1	239.9	2403.7	6647.8	227651.1
0.0	5.0	1.0	0.4	0.0	0.0	2.7	0.4	0.1	1.1	2.9	100%
24.1	2057.7	914.2	0.0	0.0	0.0	606.1	0.0	0.0	3.6	245.5	44456.2
0.1	4.6	2.1	0.0	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.6	100%
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	220.6
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	48.8
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	73.6
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
0.0	186.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	461.4
0.0	40.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
0.0	83.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	112.5
0.0	74.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	57.9
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	83.7	258.0
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	32.4	100%
67.3	1120.5	355.6	181.1	35.3	0.0	1148.7	283.2	0.0	173.1	220.5	51514.3
0.1	2.2	0.7	0.4	0.1	0.0	2.2	0.5	0.0	0.3	0.4	100%
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	446.9
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
472.8	49088.8	15346.1	1505.6	60.5	7.0	40040.3	1662.8	1617.2	2764.6	14278.0	536053.9
0.1	9.2	2.9	0.3	0.0	0.0	7.5	0.3	0.3	0.5	2.7	100%

は各遺構毎で最も比率の高い資料を示す

第 14 表 鉄滓出土量一覧 (2)

	鉄塊系 遺物	流出滓				炉内滓				
		A1	A' 1	B1	C1	A2	A2'	A' 2	A' 2'	B2
1号工房跡	0.0	0.0	16.9	20.3	7736.2	799.4	54.9	2108.0	67.6	588.6
1号工房跡1号製鉄炉	0.0	0.0	0.0	0.0	2733.0	386.0	0.0	1589.0	20.2	166.9
1号工房跡2号製鉄炉	0.0	0.0	104.1	0.0	598.0	1107.7	0.0	1488.5	63.4	239.8
1号工房跡3号製鉄炉	0.0	0.0	0.0	0.0	213.8	0.0	0.0	132.9	0.0	13.7
1号工房跡 Pit1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7
1号工房跡 合計	0.0	0.0	121.0	20.3	11281.0	2293.1	54.9	5318.4	151.2	1010.7
1号工房跡 重量比	0.0	0.0	0.2	0.0	20.7	4.2	0.1	9.8	0.3	1.9
2号工房跡	0.0	0.0	2377.0	472.7	21292.6	1864.7	91.1	2774.3	158.2	2130.0
2号工房跡4号製鉄炉	0.0	0.0	7.1	1.7	3803.5	112.4	92.9	842.0	12.2	354.6
2号工房跡5号製鉄炉	0.0	0.0	54.2	4.2	2847.9	56.9	0.0	156.4	0.0	44.9
2号工房跡 合計	0.0	0.0	2438.3	478.6	27944.0	2034.0	184.0	3772.7	170.4	2529.5
2号工房跡 重量比	0.0	0.0	3.4	0.7	39.3	2.9	0.3	5.3	0.2	3.6
1号廃滓場 ①b層	0.0	0.0	195.7	9.8	32720.4	1116.7	0.0	477.4	33.1	137.0
	0.0	0.0	0.5	0.0	78.0	2.7	0.0	1.1	0.1	0.3
1号廃滓場 ①b～②層上部	0.0	0.0	1390.7	25.4	9078.4	992.8	0.0	790.7	15.9	173.4
	0.0	0.0	7.3	0.1	47.6	5.2	0.0	4.1	0.1	0.9
1号廃滓場 ②層	0.0	0.0	573.3	68.2	74524.6	1829.0	0.0	978.9	90.8	948.8
	0.0	0.0	0.7	0.1	86.6	2.1	0.0	1.1	0.1	1.1
1号廃滓場 ①b～②層	0.0	0.0	389.8	3.7	45291.4	493.7	17.3	719.2	84.8	136.2
	0.0	0.0	0.7	0.0	83.1	0.9	0.0	1.3	0.2	0.2
1号廃滓場 ②層下	0.0	0.0	0.0	0.0	16117.2	6.8	0.0	149.8	0.0	31.3
	0.0	0.0	0.0	0.0	98.0	0.0	0.0	0.9	0.0	0.2
1号廃滓場 その他	0.0	0.0	65.4	2.7	6368.5	461.4	0.0	236.4	49.9	0.0
	0.0	0.0	0.7	0.0	66.0	4.8	0.0	2.5	0.5	0.0
1号廃滓場 合計	0.0	0.0	2614.9	109.8	184100.5	4900.4	17.3	3352.4	274.5	1426.7
1号廃滓場 重量比	0.0	0.0	1.1	0.0	80.9	2.2	0.0	1.5	0.1	0.6
包含層①～⑭ ①a層	0.0	0.0	27.9	0.0	1853.3	0.0	0.0	41.9	0.0	12.8
	0.0	0.0	1.4	0.0	93.2	0.0	0.0	2.1	0.0	0.6
包含層①～⑭ ①a～②層	0.0	180.8	129.0	0.0	34080.2	883.2	7.4	827.4	60.3	91.2
	0.0	0.5	0.3	0.0	86.5	2.2	0.0	2.1	0.2	0.2
包含層①～⑭ ②層	0.0	0.0	0.0	0.0	2304.6	80.5	0.0	24.5	0.0	0.0
	0.0	0.0	0.0	0.0	75.1	2.6	0.0	0.8	0.0	0.0
包含層①～⑭ 合計	0.0	180.8	156.9	0.0	38238.1	963.7	7.4	893.8	60.3	104.0
包含層①～⑭ 重量比	0.0	0.4	0.4	0.0	86.0	2.2	0.0	2.0	0.1	0.2

上段：重量（g） 下段：遺構等毎に占める鉄滓類の比率（％）

炉内滓			炉底滓				炉壁附着滓				重量 合計
B2'	C2	C2'	A3	A' 3	B3	C3	A4	A' 4	B4	C4	
16.2	4595.0	1559.1	0.0	0.0	0.0	5295.2	144.9	282.3	0.0	87.3	23371.9
1.8	1971.5	495.6	0.0	0.0	5.1	9651.8	0.0	0.0	0.0	11.7	17032.6
16.4	2772.9	1776.7	0.0	0.0	0.0	2840.9	0.0	205.3	150.4	2283.3	13647.4
0.0	31.3	39.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	27.8	459.1
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7
34.4	9370.7	3871.0	0.0	0.0	5.1	17787.9	144.9	487.6	150.4	2410.1	54512.7
0.1	17.2	7.1	0.0	0.0	0.0	32.6	0.3	0.9	0.3	4.4	100%
250.2	13143.4	2510.8	488.7	0.0	0.0	4298.7	8.0	889.7	33.8	1866.6	54650.5
9.9	3537.6	2962.2	0.0	0.0	0.0	1162.4	0.0	0.0	0.0	0.0	12898.5
1.1	363.9	47.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3576.5
261.2	17044.9	5520.0	488.7	0.0	0.0	5461.1	8.0	889.7	33.8	1866.6	71125.5
0.4	24.0	7.8	0.7	0.0	0.0	7.7	0.0	1.3	0.0	2.6	100%
12.1	2116.1	197.5	810.6	0.0	0.0	2223.0	10.0	65.9	29.6	1774.0	41928.9
0.0	5.0	0.5	1.9	0.0	0.0	5.3	0.0	0.2	0.1	4.2	100%
12.2	3304.0	24.0	0.0	5.6	1.9	1715.3	559.9	0.0	0.0	972.2	19062.4
0.1	17.3	0.1	0.0	0.0	0.0	9.0	2.9	0.0	0.0	5.1	100%
38.8	2613.7	855.2	25.2	0.0	0.0	644.6	199.0	143.4	15.5	2506.3	86055.3
0.0	3.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.2	0.2	0.0	2.9	100%
4.6	2560.1	983.3	0.0	0.0	0.0	109.9	0.0	9.0	2358.6	1349.8	54511.4
0.0	4.7	1.8	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	4.3	2.5	100%
0.0	111.7	11.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	18.6	16446.4
0.0	0.7	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	100%
2.9	763.9	195.8	0.0	0.0	0.0	1414.1	37.2	21.6	0.0	26.9	9646.7
0.0	7.9	2.0	0.0	0.0	0.0	14.7	0.4	0.2	0.0	0.3	100%
70.6	11469.5	2266.8	835.8	5.6	1.9	6106.9	806.1	239.9	2403.7	6647.8	227651.1
0.0	5.0	1.0	0.4	0.0	0.0	2.7	0.4	0.1	1.1	2.9	100%
13.7	22.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.6	12.9	1988.9
0.7	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.6	100%
10.4	1903.3	914.2	0.0	0.0	0.0	133.8	0.0	0.0	0.0	179.0	39400.2
0.0	4.8	2.3	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.5	100%
0.0	131.6	0.0	0.0	0.0	0.0	472.3	0.0	0.0	0.0	53.6	3067.1
0.0	4.3	0.0	0.0	0.0	0.0	15.4	0.0	0.0	0.0	1.7	100%
24.1	2057.7	914.2	0.0	0.0	0.0	606.1	0.0	0.0	3.6	245.5	44456.2
0.1	4.6	2.1	0.0	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.6	100%

は各遺構毎で最も比率の高い資料を示す

第 15 表 間木戸V遺跡土師器観察表

掲載No.	出土地点	器種	残存部位	残存率 (%)	色調
VP030	3号竪穴建物跡 南西床直・南西埋土・T10一括・③南②層・④南北トレンチ②層・⑬②層上～中位・⑭トレンチ一括	壺	口縁～肩部	10	にぶい橙、褐灰
VP031	3号竪穴建物跡 南西床直・ベルト5層・北西埋土	坏	口縁～底部	30	にぶい黄橙
VP032	3号竪穴建物跡 北東埋土最下位・北東（2号炭置き場跡重複付近）埋土中位	坏	口縁～底部	20	明黄褐
VP033	3号竪穴建物跡 北東埋土最下位・北東（SK04重複付近）埋土中位・ベルト6層・北西埋土下位・北東埋土上～中位	坏	口縁～底部	70	にぶい黄橙
VP034	3号竪穴建物跡 ベルト5、7、8、13、14層・南西埋土	甕	口縁～肩部	5	にぶい黄橙
VP035	3号竪穴建物跡 10層・1号炭置き場跡4a～4層・T1南Ⅱ層・③南西トレンチ一括・③西②層、①b～②層・③西サブトレンチ②層中～下位・④トレンチ②層・④ベルト②層・排Aベルト②層	壺	口縁～胴部	20	にぶい橙、灰褐色
VP036	3号竪穴建物跡 ベルト（中央）8層・北東埋土・北西埋土	坏	口縁～底部	20	明黄褐
VP037	3号竪穴建物跡 ベルト5層・北東埋土	坏	口縁～底部	60	明褐
VP038	3号竪穴建物跡 北西埋土下位・⑭②層・生文課トレンチ埋戻し土・I B14Ⅰ層・⑥②層下位	壺	口縁～肩部	17	明赤褐色、にぶい橙
VP039	③ ②層	壺	口縁	小破片	浅黄橙
VP040	3号焼土遺構 P1・P2・焼土層・Ⅱ層	甕	口縁～胴部	20	
VP041	⑭ ②層中～下位・②～Ⅲ層上位	甕	口縁～胴部	50 (非接合含)	灰黄褐
VP042	⑭ ②層中位・⑬②層上～中位・⑭②層上位	甕	口縁～胴部	25	灰黄褐
VP043	③ ②層・④②層上位・⑤-⑥間ベルト①a層・⑥②層中～下位・⑥トレンチ②層	甕	口縁～肩部	5	にぶい黄橙
VP044	④ ②層上位	甕	口縁～肩部	5	褐灰
VP045	④ ②層・②層下・②層上位・⑥②層中～下位・⑦-⑭間ベルト②層上位・T1Ⅰ層	甕	胴部～底部	40 (非接合含)	にぶい褐
VP046	⑥ ②層・②層中～下位	甕	胴部～底部	25	褐灰、にぶい黄橙
VP047	⑥ ②層中～下位	甕	頸部～胴部	10	にぶい黄橙、灰黄褐
VP048	⑭ ②層中位・⑭②層上位	壺	口縁～肩部	30	にぶい黄橙、灰黄褐
VP049	⑥ ②層・②層中～下位・⑥-⑦間ベルト②層	壺	口縁～胴部	33	灰黄褐
VP050	⑭ ②層上面・I B13kⅢ～Ⅳ層	壺	肩～胴部	20	にぶい赤褐色、褐灰
VP051	④ ②層下・②層中位	壺	胴部	5	にぶい黄褐
VP052	④ ②層	壺	胴部～底部	5	にぶい黄橙
VP053	⑳ ②層上位	壺	底部	5	灰黄褐
VP054	③ ①b～②層	坏	口縁～胴部	小破片	にぶい黄橙
VP055	④ ②層下位・②層中～下位	坏	口縁～底部	40	灰黄褐、にぶい黄褐
VP056	⑥ ②層中～下位・⑥-⑦間ベルト②層	坏	口縁～底部	20	にぶい黄橙、灰黄褐
VP057	③ ②層・⑤②層下位・②層中～下位・⑤-⑥間ベルト②層・⑭②層上位	坏	胴部～底部	20	にぶい黄橙
VP058	⑥ ①a～②層	埴	口縁～底部	40	にぶい橙

調整技法			法量 (cm) [復元] (残存)			備考	図	写真
外面 (胴部、口縁部周辺)	内面 (同)	底部 (外面調整、特徴)	口径	底径	器高			
ハケ→ミガキ、ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ、ハケ→ミガキ	—	[24.3]	—	(7)		150	110
ハケ→ミガキ、ミガキ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ハケ、平底風丸底	[16.2]	—	5.9		150	110
ハケ→ミガキ、ハケ→ミガキ	ミガキ、黒色処理	ハケ、平底風丸底	[17.6]	—	5.4		150	110
ハケ→ミガキ、ハケ→ヨコナデ→ミガキ	ハラナデ→ミガキ	ハケ、平底風丸底 (平坦)	15.2	—	5.8	花弁状口縁の可能性	150	110
ミガキ、ヨコナデ	ハケ→ミガキ、ヨコナデ	—	[17.4]	—	—	口唇摘み上げ	150	110
ハケ→ミガキ、ハケ→ミガキ→ヨコナデ	ハケ→ミガキ、ハケ→ヨコナデ	—	[15.6]	—	(12.5)		150	110
ハケ→ミガキ、ハケ→ミガキ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ケズリ、平底風丸底	[18.4]	—	6.2		150	110
ミガキ、ミガキ	ミガキ、黒色処理	ケズリ→ミガキ、厚角平底	[12.8]	—	5.8	沈線状段 2 段	150	110
ミガキ、ヨコナデ→ミガキ→ヨコナデ (口唇)	ミガキ (幅広)、ミガキ→ヨコナデ	—	[16.2]	—	(9.5)	口唇摘み上げ 肩部段赤色意識の可能性	150	110
ヨコナデ、赤彩 (縦線)	ヨコナデ、赤彩 (縦線)	—	—	—	(1.7)	口唇摘み上げ 縦線 3 本単位の可能性	150	110
ハケ	ハケ、ハケ→ヨコナデ	—	[15.6]	—	(13.3)		150	110
ハケ→ミガキ、ハケ→ヨコナデ→ミガキ	ハケ→ミガキ、ミガキ→ヨコナデ	—	[23.1]	—	(21.8)	受け口状	151	111
ハケ→ミガキ (線状)、ヨコナデ	ハケ、ハケ→ミガキ	—	[16]	—	(13.4)	肩部段 (輪積み一致)	151	111
ハケ、ハケ→ヨコナデ (頸部)	ハケ	—	[19.8]	—	(6.5)		151	111
ハケ、ヨコナデ	ハケ、ハケ→ヨコナデ	—	[13.6]	—	(6.5)	小甕	151	111
ハケ→ミガキ	ハケ	木葉痕	—	10.4	(21.5)		151	111
ハケ	ハケ	ハケ	—	9.4	(12.5)	底部外面ハケ	151	111
ハケ→ミガキ、ヨコナデ→ミガキ	ナデ→ハケ、ハケ→ヨコナデ	—	—	—	(14.2)	肩部段	152	110
ミガキ、ヨコナデ (口唇)→ミガキ	ミガキ、ヨコナデ (口唇)→ミガキ	木葉痕	[16.1]	8.5	(8.6) + (7.9)	口唇摘み上げ	152	111
ハケ→ミガキ、ハケ→ミガキ→ヨコナデ	ハケ→ミガキ、ヨコナデ	—	15.8	—	(15.1)		152	110
ミガキ	ハラナデ→ミガキ	—	—	—	(10)	赤色意識の可能性	152	111
ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	—	—	—	(7.3)		152	111
ミガキ	ナデ→ミガキ	砂痕の可能性	—	[10.3]	(5.3)		152	111
ミガキ	ミガキ	四脚付き 丸底	—	—	(2)	四脚付小形壺 (小壺の可能性)	152	111
ヨコナデ→ミガキ	ミガキ	—	—	—	(3.5)	有段 1 段 (輪積み一致、内面段明瞭)	152	111
ミガキ、ハケ→ミガキ	ミガキ、黒色処理	ケズリ、平底風丸底	[12.8]	—	7.1	沈線状段 2 段 (輪積み一致)	152	111
ハケ→ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ハケ、平底風丸底	[13.8]	—	4.8	有段 1 段 (輪積み一致) 内面ハジケ	152	111
ミガキ	ミガキ、黒色処理	ハケ、平底風丸底 (平坦)	—	—	—		152	111
ミガキ、ヨコナデ→ミガキ	ミガキ、黒色処理	ケズリ、平底風丸底 (丸底)	14	—	4.7	有段 1 段	152	111

第 16 表 間木戸V遺跡土製品観察表

掲載番号	仮番号	出土地点	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考	図	写
VG001	V-紡01	T1 深掘(南)	紡錘車	(3.7)	(3.1)	(0.9)	8.4	表面剥離		113
VG002	V-紡02	T1 深掘	紡錘車	34	(2.4)	1.2	10.5	半分欠損	154	113

第 17 表 間木戸V遺跡石器観察表

掲載番号	仮番号	種類	出土地点	層位	欠損	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	掲載縮尺	図	写
VS001	V-ぞ001	石鏃	T7	II層	先端	1a	1.6	1.6	0.3	0.6	頁岩			2/3	153	112
VS002	V-ぞ002	石鏃	③W	II層中位	先端	1a	1.6	1.2	0.3	0.4	頁岩			2/3	153	112
VS003	V-ぞ003	石鏃	③E-W間	II層上～中	先端	1b	(25)	1.9	0.6	2.8	頁岩					
VS004	V-ぞ004	石鏃	⑦NSトレンチ	II層	先端	1a	2.8	1.5	0.4	1.4	挂算頁岩	北上山地 中生代前期		2/3	153	112
VS005	V-ぞ005	石鏃	⑩W	II層一括	完	1a	2.5	1.7	3.0	0.8	頁岩		黒色物付着	2/3	153	112
VS006	V-ぞ006	石鏃	⑪	II層	完	1b	2.5	1.3	0.5	0.9	頁岩		石鏃か。	2/3	153	112
VS007	V-ぞ007	石鏃	⑭	II層一括	完	2	4.0	1.2	0.4	1.2	頁岩			2/3	153	112
VS008	V-ぞ008	石鏃	3号堅穴建物跡の壁際	暗褐色土層上面	先端	1a	(23)	1.6	0.4	1.1	頁岩					
VS009	V-ぞ009	石鏃	⑬-⑭間ベルト	II層一括	片側基部	1a	2.5	(15)	0.3	1.6	頁岩			2/3	153	112
VS010	V-ぞ010	石鏃	3号堅穴建物跡 Nベルト	5層	完	1b	3.1	1.6	0.4	3.1	頁岩	北上山地 中生代前期		2/3	153	112
VS011	V-ぞ011	石鏃	IB11m	II層	先端	1a	(22)	1.7	0.3	1.2	頁岩	北上山地 中生代前期				
VS012	V-さ001	石匙	⑯	II～III層上部	刃部	横	4.0	3.0	7.2	4.9	頁岩			2/3	153	112
VS013	V-ス001	スクレイパー	縄文トレンチII～III間	III～IV層	完	2a	5.3	4.0	1.1	20.7	頁岩		錆付着	2/3	153	112
VS014	V-ス002	スクレイパー	④Sトレンチ	II層一括	完	2b	4.8	3.5	0.9	16.6	頁岩	北上山地 中生代前期				
VS015	VA-1	石斧	22	II層一括	刃部	磨製・稜線あり	(9.0)	4.7	2.1	153.4	花崗閃緑岩	北上山地宮古岩体 中生代白亜紀		1/2	153	112
VS016	VB-1	敲磨器類	3号堅穴建物跡 Wベルト	5層	-	2c	(4.3)	5.9	1.6	58.1	砂岩	北上山地 中生代前期	特殊磨り?ほとんどが欠けているため不明。			
VS017	VB-2	敲磨器類	3号堅穴建物跡 Wベルト	5層	-	2c	(5.6)	(7.6)	3.1	138.7	砂岩	北上山地 中生代前期	特殊磨り?ほとんどが欠けているため不明。			
VS018	VB-3	敲磨器類	3号堅穴建物跡 NE	埋土下部	完	1b	5.3	5	2.3	90.6	アブライト	北上山地宮古岩体 中生代白亜紀		1/3		112
VS019	VB-4	敲磨器類	3号堅穴建物跡 NE・2号炭置き場跡重複	埋土中位	完	1bd	7.5	4.8	3.3	178.1	凝灰岩	北上山地 中生代白亜紀 原地山層?	敲き			
VS020	VB-5	敲磨器類	3号堅穴建物跡より南	II層	完	1b	7.4	5.7	4.9	335.7	花崗閃緑岩	北上山地宮古岩体 中生代白亜紀	下面に敲。黒色物付着。	1/3	153	112
VS021	VB-6	敲磨器類	③W	②層下位	-	1b	10.6	7.6	4.1	489.4	流紋岩	北上山地 中生代白亜紀 原地山層?				
VS022	VB-7	敲磨器類	23の東(縄文トレンチ3-4間)	III～IV層	-	1a	(6.3)	6.7	5.4	333.5	ペグマタイト	北上山地宮古岩体 中生代白亜紀				
VS023	VB-8	敲磨器類	調査区一括	-	-	1b	9.2	6	4.7	421.4	花崗閃緑岩	北上山地宮古岩体 中生代白亜紀				
VS024	VE-1	台石	3号堅穴建物跡 Nベルト壁際	層位不明	-		(5.0)	(9.4)	7	609.5	花崗閃緑岩	北上山地宮古岩体 中生代白亜紀	被熱あり。好石?金床石? 2面平滑			
VS025	VE-2	台石	2号炭置き場跡	2層	-		(6.6)	(7.2)	7	791.7	花崗閃緑岩	北上山地宮古岩体 中生代白亜紀	スズ付着、3面平滑			

第18表 間木戸V遺跡鉄製品観察表

掲載番号	仮番号	種類	出土地点	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考	図	写
VG003	鉄06	鉄鎌マチ部	1号製鉄炉	炉面	(5.5)	0.6	0.7	5.6	マチあるか？	154	113
VG004	鉄07	くさび？	I B14・15pq	I～II層	13.6	1.7	0.9	54.2	近世～近代		
VG005	鉄10	刀	3号竪穴建物跡	埋土	(4.3)	4.4	0.7	37.1	敵手刀の刀身？	154	113
VG006	鉄11	座金	3号竪穴建物跡	埋土	2.8	2.7	(1.8)	29.4	敵手刀の金具	154	113

第19表 間木戸V遺跡羽口観察表

掲載番号	仮番号	遺構名	地点	層位	残存部分	残存長(cm)	外径(cm)	内径(cm)	重量(g)	所見	掲載縮尺	図	写
VG007	は001	557.627.543	羽口1周辺	3層	体部	(32.1)	9	3.5	1274.9	砂礫多量、ガラス質少量附着。棒状工具痕、紐？網？圧痕。内面に芯棒痕。先端部に近い。	1/3	154	113
VG008	は002	471		埋土下部	末端部	(10.1)	7.4	3.2	263.3	ヘラ状工具でのけずりと、指（凹部）の調整痕？胎土の細礫少量。羽口末端部。	1/3	154	113
VG009	は003	626		4層上面	先端部～体部	(9.2)	[9.4]	[3.8]	440.5	擦垂れる鉄滓附着。先端部溶解顕著。	1/3	154	113
VG010	は004	544		3層	先端部～体部	7.1	7.4	2.2	306.3	鉄滓附着。胎土脆い、細礫含む。	1/3		113
VG011	は005	467		埋土一括	先端部～体部	11.4	7.7	3.2	544	擦垂れる鉄滓附着、一部ガラス質溶化。胎土脆い、細礫含む。	1/3		113
VG012	は006	303.468		2層	体部	5.6	[7.4]	[2.9]	169.7	擦垂れる鉄滓附着、ガラス質溶化顕著。胎土脆い。	1/3		113
VG013	は007	547.302.468		2～5層	末端部	13.8	8.3	4.1	375.1	細礫を巻き込んだ鉄滓附着。胎土脆い。	1/3		113
VG014	は008	465.297		3層	先端部～体部	10.7	[7.1]	[3.2]	175.2	擦垂れる鉄滓附着、赤変顕著、一部ガラス質溶化。	1/3		113
VG015	は009	472.474		埋土下部	先端部～体部	9.4	[9.8]	[4.2]	152.8	棒状工具痕、紐？網？圧痕。胎土細礫含む。	1/3		113
VG016	は010	302		3～5層	先端部～体部	8.8	-	[3.2]	255.9	擦垂れる鉄滓附着、一部ガラス溶化。胎土細礫含む。	1/3		113
VG017	は011	478.322		S102 焼土範囲内、S103 炉周辺	先端部～体部	13.4	7.3	3.1	369.6	鉄滓附着、一部ガラス溶化。胎土脆い、細礫含む。	1/3		113
VG018	は012	577		S103 E	先端部～体部	10.5	8.1	3.4	353.3	鉄滓附着、赤変顕著、先端部溶解顕著。胎土細礫含む。	1/3		113
VG019	は013	487		S103 P11W	先端部～体部	12.1	7.8	3	269.2	鉄滓附着、赤変顕著。胎土細礫、スサ少量含む。炉壁の溶解附着。	1/3		113
VG020	は014	480.323		S103 P11E	2・3層	10.5	9.7	3.3	350	鉄滓附着、外面全体に焼け弾けて発砲している。	1/3		114
VG021	は015	519		①b～②層	先端部～体部	10.3	7.3	3.3	370.6	鉄滓附着、粒状の鉄滓顕著。胎土細礫多量含む。	1/3		114
VG022	は016	368		②～③E間	先端部～体部	10.2	8.2	2.9	369.7	鉄滓附着、粒状の鉄滓顕著。胎土細礫多量含む。	1/3		114
VG023	は017	530		④～⑤間ベルト	先端部～体部	11.5	7.7	3.5	315.7	鉄滓附着、赤変顕著、先端部溶解顕著。胎土細礫含む。	1/3		114
VG024	は018	368		②～③E間	先端部～体部	6.2	-	-	71	ヘラ状の工具痕。V字断面の深い割り。	1/3		114

第20表 間木戸V遺跡炉壁観察表

掲載番号	遺構名	地点	層位	色調	所見	掲載縮尺	図	写
VG025	1号炭置き場跡	羽口1周辺	3層	5YR7/8 橙色	錆滓・発砲気味の滓附着。スサ・細礫多量含む。芯棒？痕→木舞孔の痕か（還元している）。	1/3	154	114
VG026	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	5YR7/8 橙色	錆滓・発砲気味の滓附着。スサ・細礫多量含む。芯棒？痕痕→木舞孔の痕か（還元している）。一部溶解。	1/3		114
VG027	2号工房跡		埋土一括	7.5YR7/6 橙色	脆い。細礫少量含む。スサ未混入。	1/3		114
VG028	2号工房跡		埋土一括	5YR7/8 橙色	錆滓・ガラス質滓片面多量附着。スサ・細礫多量含む。	1/4		114
VG029	2号工房跡		埋土一括	10YR5/1 褐色	錆滓・ガラス質滓片面多量附着。スサ・細礫多量含む。	1/4		114

VI 分析・鑑定

1 間木戸V遺跡、間木戸II遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1 測定対象試料

間木戸V遺跡、間木戸II遺跡は、岩手県下閉伊郡山田町山田第3地割56に所在する。測定対象試料は、間木戸V遺跡の遺構から出土した木炭等13点と、間木戸II遺跡の遺構から出土した木炭4点の合計17点である（表1）。

2 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/ℓ（1 M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を使い、OxCalv4.2較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」 (または「cal BP」) という単位で表される。

5 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

間木戸V遺跡出土試料の ^{14}C 年代は、試料01~06のうち試料03と試料06の値が誤差 ($\pm 1\sigma$) の範囲で一致する。他の試料の間には年代差が認められる。

暦年較正年代 (1σ) は、古い方から順に試料02が縄文時代中期中葉から後葉頃、試料01が弥生時代後期頃に相当し、試料03~06が古代から中世に含まれる年代値となっている (小林2009、小林編2008、佐原2005)。

なお、試料01が含まれる1~3世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある (尾寄2009、坂本2010など)。その日本版較正曲線を用いて試料01の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

間木戸II遺跡出土試料の ^{14}C 年代は、4点のうち試料08と試料09の値が誤差 ($\pm 1\sigma$) の範囲で一致し、試料10もかなり近い値である。これら3点と試料07の間には明瞭な年代差が認められる。

暦年較正年代 (1σ) は、試料07が古代頃、試料08~10が縄文時代中期前葉から中葉頃に相当する (小林編2008、佐原2005)。

試料11~17の ^{14}C 年代は、 $1120 \pm 20\text{yrBP}$ (試料15) から $910 \pm 20\text{yrBP}$ (試料11) の間にあり、特に $1120 \sim 1050\text{yrBP}$ の狭い範囲に6点が集中する。暦年較正年代 (1σ) は、最も古い15が $895 \sim 969\text{cal AD}$ の間に2つの範囲、最も新しい11が $1046 \sim 1164\text{cal AD}$ の間に3つの範囲で示され、全体でおおよそ古代ないし古代から中世初頭頃に相当する (佐原2005)。

試料の炭素含有率を確認すると、木炭9点はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。試料01は、土に含まれた黒色の物質で、通常の炭化物よりもやや明るい色調を呈していた。できるだけ黒い部分を採取したが、炭素含有率が5%というかなり低い値を示してい

1 問木戸Ⅴ遺跡、問木戸Ⅱ遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

る。試料形態は炭化物としたが、試料中の炭素の由来について注意する必要がある。

表1 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{13}\text{C}$ 補正值）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
I AAA - 131444	試料01	問木戸Ⅴ遺跡 3号焼土遺構 焼土下位	炭化物	AaA	-24.33 ± 0.63	1,930 ± 30	78.67 ± 0.25
I AAA - 131445	試料02	問木戸Ⅴ遺跡 3号竪穴建物跡 北壁	木炭	AAA	-26.99 ± 0.79	4,100 ± 30	60.02 ± 0.22
I AAA - 131446	試料03	問木戸Ⅴ遺跡 1号炭置き場跡 Nベルト4層	木炭	AaA	-24.09 ± 0.7	1,100 ± 30	87.21 ± 0.27
I AAA - 131447	試料04	問木戸Ⅴ遺跡 1号工房跡 Pit1 3層	木炭	AAA	-25.08 ± 0.77	910 ± 20	89.32 ± 0.27
I AAA - 131448	試料05	問木戸Ⅴ遺跡 1号不明遺構 C6	木炭	AAA	-27.31 ± 0.65	810 ± 20	90.37 ± 0.27
I AAA - 131449	試料06	問木戸Ⅴ遺跡 2号工房跡5号製鉄炉	木炭	AAA	-25.9 ± 0.55	1,140 ± 30	86.72 ± 0.27
I AAA - 131450	試料07	問木戸Ⅱ遺跡 26号竪穴建物跡西 埋土中位～下位	木炭	AAA	-23.5 ± 0.36	1,290 ± 20	85.22 ± 0.24
I AAA - 131451	試料08	問木戸Ⅱ遺跡 2号竪穴建物跡炉1 1層	木炭	AAA	-25.6 ± 0.73	4,460 ± 30	57.42 ± 0.21
I AAA - 131452	試料09	問木戸Ⅱ遺跡 10号竪穴建物跡炉 覆土	木炭	AAA	-23.4 ± 0.97	4,440 ± 30	57.54 ± 0.22
I AAA - 131453	試料10	問木戸Ⅱ遺跡 24号竪穴建物跡 埋土中～下位	木炭	AAA	-25.63 ± 0.58	4,560 ± 30	56.68 ± 0.21
I AAA - 133113	試料11	問木戸Ⅴ遺跡 3号竪穴建物跡 埋土下部	炭化物	AAA	-25.84 ± 0.58	910 ± 20	89.32 ± 0.26
I AAA - 133114	試料12	問木戸Ⅴ遺跡 1号工房跡 Pit1 E 2層3層	炭化物	AAA	-26.47 ± 0.6	1,050 ± 20	87.77 ± 0.25
I AAA - 133115	試料13	問木戸Ⅴ遺跡 1号工房跡3号製鉄炉 4層	炭化物	AAA	-27.26 ± 0.5	1,080 ± 20	87.38 ± 0.24
I AAA - 133116	試料14	問木戸Ⅴ遺跡 2号炭置き場跡 9層	炭化物	AAA	-26.11 ± 0.36	1,090 ± 20	87.27 ± 0.24
I AAA - 133117	試料15	問木戸Ⅴ遺跡1号廃滓場 ③E ②層	炭化物	AAA	-25.53 ± 0.66	1,120 ± 20	87 ± 0.25
I AAA - 133118	試料16	問木戸Ⅴ遺跡1号廃滓場 ③W ①b～②層	炭化物	AAA	-24.19 ± 0.28	1,060 ± 20	87.68 ± 0.24
I AAA - 133119	試料17	問木戸Ⅴ遺跡1号廃滓場 ③W ①b～②層	炭化物	AaA	-27.62 ± 0.29	1,080 ± 20	87.38 ± 0.27

[#6052,6053]

表2 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）(1)

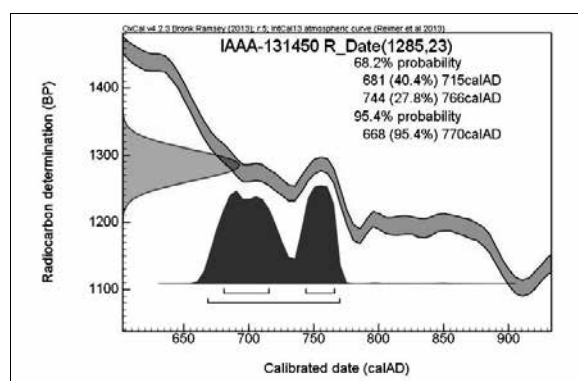
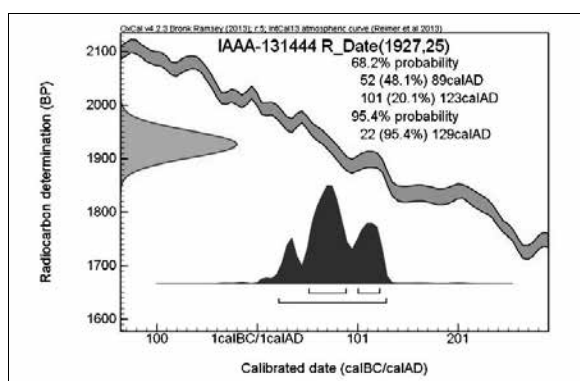
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
I AAA - 131444	1,920 ± 20	78.78 ± 0.22	1,927 ± 25	52calAD - 89calAD (48.1%) 101calAD - 123calAD (20.1%)	22calAD - 129calAD (95.4%)
I AAA - 131445	4,130 ± 30	59.77 ± 0.19	4,100 ± 28	2839calBC - 2815calBC (14.2%) 2675calBC - 2580calBC (54.0%)	2861calBC - 2807calBC (22.1%) 2757calBC - 2719calBC (9.1%) 2705calBC - 2572calBC (63.6%) 2512calBC - 2505calBC (0.7%)
I AAA - 131446	1,080 ± 20	87.37 ± 0.24	1,099 ± 25	899calAD - 923calAD (27.7%) 947calAD - 983calAD (40.5%)	889calAD - 995calAD (95.4%)
I AAA - 131447	910 ± 20	89.3 ± 0.22	907 ± 23	1046calAD - 1093calAD (40.4%) 1121calAD - 1140calAD (14.4%) 1147calAD - 1164calAD (13.5%)	1038calAD - 1188calAD (95.4%)
I AAA - 131448	850 ± 20	89.94 ± 0.25	813 ± 24	1216calAD - 1257calAD (68.2%)	1182calAD - 1267calAD (95.4%)
I AAA - 131449	1,160 ± 20	86.56 ± 0.25	1,144 ± 25	782calAD - 787calAD (2.2%) 877calAD - 906calAD (23.1%) 916calAD - 968calAD (42.9%)	777calAD - 793calAD (5.8%) 802calAD - 849calAD (11.1%) 855calAD - 975calAD (78.5%)
I AAA - 131450	1,260 ± 20	85.48 ± 0.24	1,285 ± 23	681calAD - 715calAD (40.4%) 744calAD - 766calAD (27.8%)	668calAD - 770calAD (95.4%)
I AAA - 131451	4,470 ± 30	57.35 ± 0.19	4,456 ± 29	3322calBC - 3235calBC (36.3%) 3171calBC - 3163calBC (2.7%) 3116calBC - 3084calBC (13.7%) 3065calBC - 3028calBC (15.5%)	3336calBC - 3211calBC (46.3%) 3193calBC - 3151calBC (9.2%) 3139calBC - 3019calBC (39.9%)
I AAA - 131452	4,410 ± 30	57.73 ± 0.19	4,440 ± 30	3311calBC - 3295calBC (4.9%) 3286calBC - 3275calBC (3.4%) 3265calBC - 3239calBC (12.4%) 3107calBC - 3020calBC (47.5%)	3331calBC - 3215calBC (31.9%) 3186calBC - 3156calBC (4.6%) 3127calBC - 3007calBC (52.6%) 2988calBC - 2931calBC (6.4%)
I AAA - 131453	4,570 ± 30	56.6 ± 0.19	4,561 ± 29	3366calBC - 3333calBC (36.4%) 3213calBC - 3189calBC (17.8%) 3154calBC - 3133calBC (14.0%)	3487calBC - 3473calBC (2.0%) 3372calBC - 3316calBC (41.3%) 3293calBC - 3289calBC (0.4%) 3274calBC - 3266calBC (0.9%)

					3238calBC - 3108calBC (50.8%)
I AAA - 133113	920 ± 20	89.17 ± 0.23	907 ± 23	1046calAD - 1093calAD (40.4%) 1121calAD - 1140calAD (14.4%) 1147calAD - 1164calAD (13.5%)	1038calAD - 1188calAD (95.4%)
I AAA - 133114	1,070 ± 20	87.5 ± 0.22	1,048 ± 22	989calAD - 1016calAD (68.2%)	906calAD - 916calAD (2.1%) 967calAD - 1025calAD (93.3%)
I AAA - 133115	1,120 ± 20	86.98 ± 0.22	1,083 ± 22	901calAD - 921calAD (20.7%) 953calAD - 993calAD (47.5%)	896calAD - 928calAD (28.0%) 940calAD - 1016calAD (67.4%)
I AAA - 133116	1,110 ± 20	87.08 ± 0.23	1,093 ± 22	901calAD - 921calAD (25.1%) 951calAD - 987calAD (43.1%)	892calAD - 995calAD (95.4%)
I AAA - 133117	1,130 ± 20	86.91 ± 0.22	1,118 ± 22	895calAD - 929calAD (35.2%) 940calAD - 969calAD (33.0%)	886calAD - 985calAD (95.4%)
I AAA - 133118	1,040 ± 20	87.83 ± 0.23	1,056 ± 22	984calAD - 1016calAD (68.2%)	901calAD - 921calAD (6.2%) 962calAD - 1024calAD (89.2%)
I AAA - 133119	1,130 ± 20	86.91 ± 0.26	1,083 ± 24	901calAD - 921calAD (20.9%) 951calAD - 993calAD (47.3%)	895calAD - 929calAD (28.3%) 940calAD - 1016calAD (67.1%)

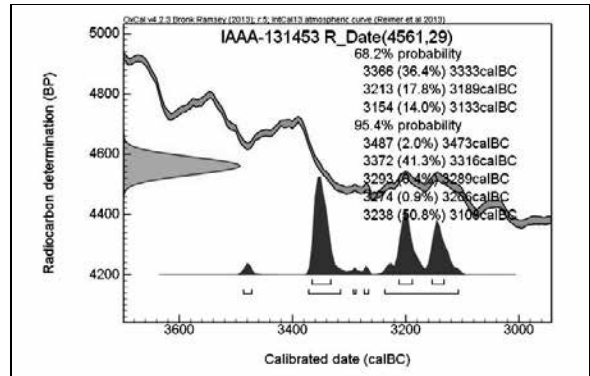
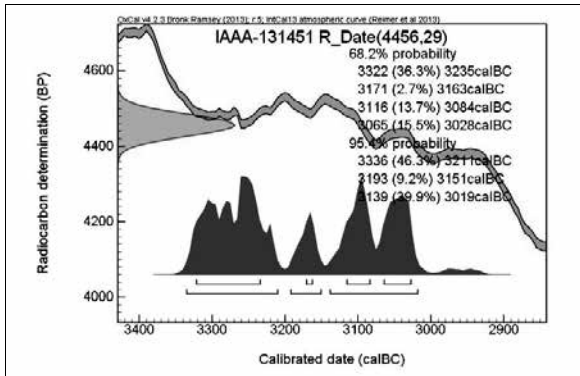
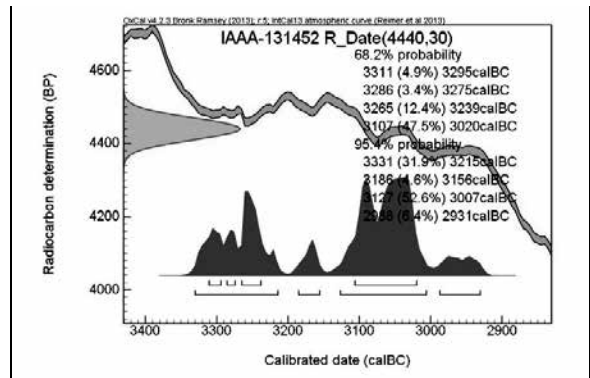
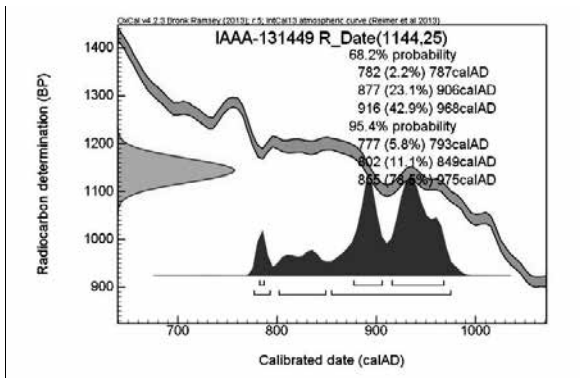
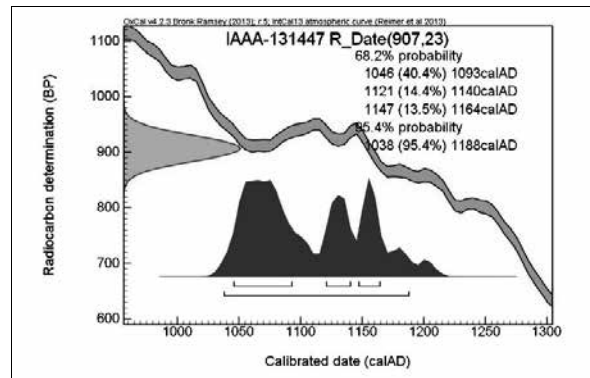
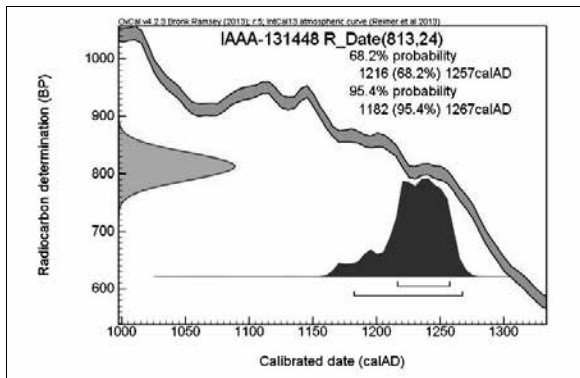
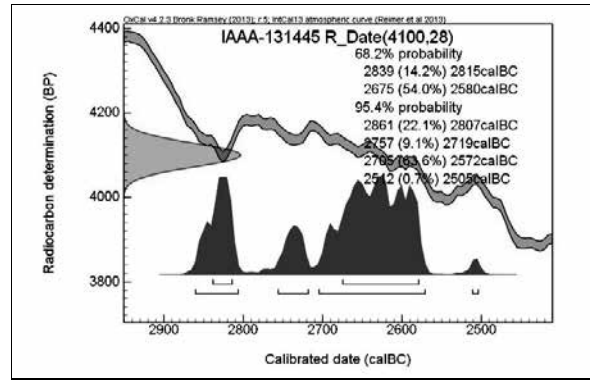
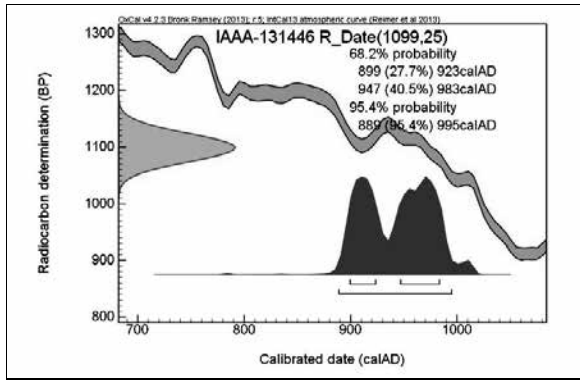
[参考値]

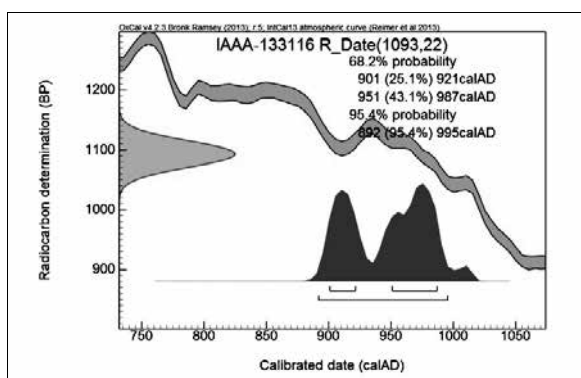
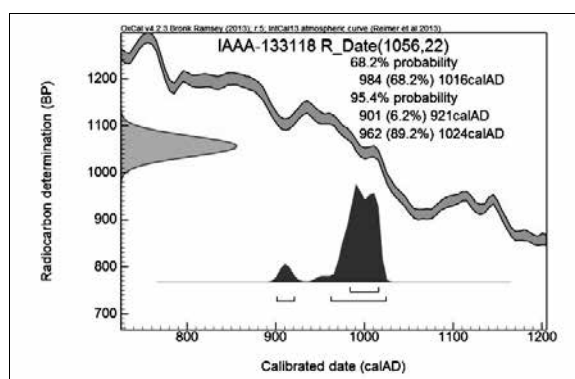
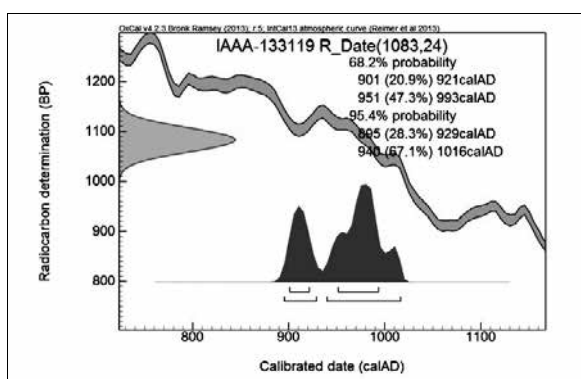
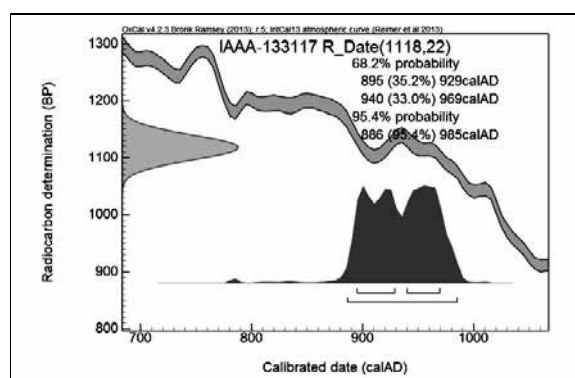
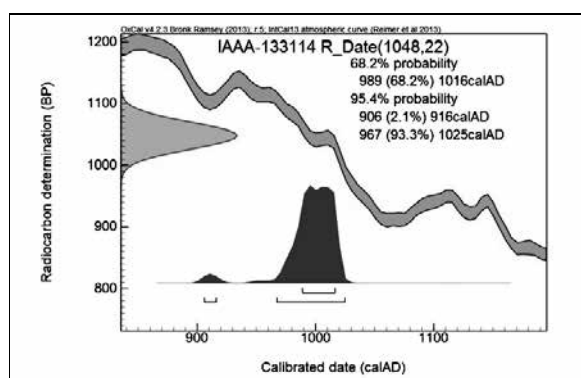
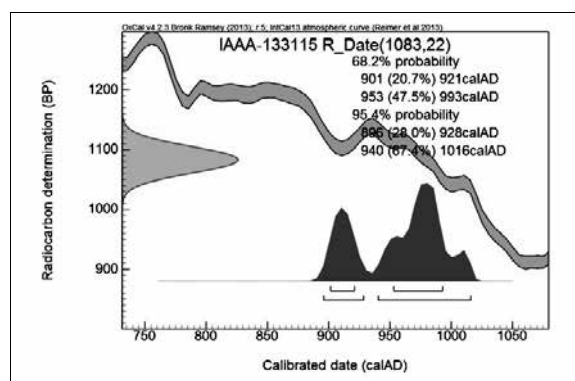
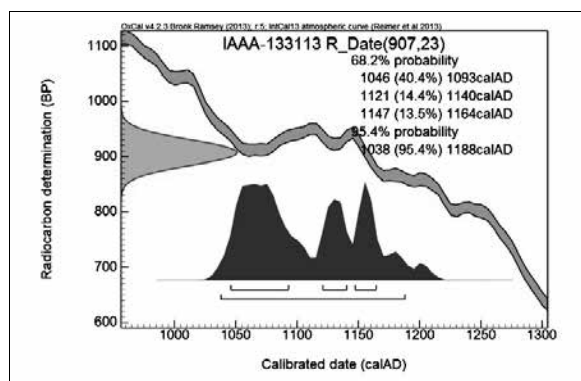
文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337-360
- 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 55-82
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
- 尾寄大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代, 設楽博己, 藤尾慎一郎, 松木武彦編弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55 (4), 1869-1887
- 佐原 真 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集, 日本の考古学 上 ドイツ展記念概説, 学生社, 14-19
- 坂本 稔 2010 較正曲線と日本産樹木-弥生から古墳へ-, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株)加速器分析研究所, 85-90
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363



1 間木戸V遺跡、間木戸II遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）





【図版】 暦年較正年代グラフ (参考)

2 間木戸Ⅱ・Ⅴ遺跡出土黒曜石の産地同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県山田町間木戸Ⅱ遺跡では、縄文時代中期とされる竪穴建物跡が確認され、それらの遺構からは土器や石器などの遺物が出土している。また間木戸Ⅴ遺跡では、古代の製鉄に関連する遺構や遺物が出土しているが、調査区内の黒色土層からはおそらく縄文時代とされる石器が出土している。今回の分析調査では、間木戸Ⅱ遺跡の建物跡内から出土した黒曜石製石器と間木戸Ⅴ遺跡の黒色土層から出土した黒曜石製石器について元素分析を行い、原産地の同定を行う。

1. 試料

試料は、間木戸Ⅱ遺跡の建物跡内から出土した黒曜石製石器4点(ただし、1点は無色透明な色調を呈する外観から黒曜石ではない可能性もあるとされている)と間木戸Ⅴ遺跡の②層から出土した黒曜石製石器1点の合計5点である。試料には、試料No.1～5が付されている。各試料の出土遺構または出土位置、出土層位などは、一覧にして表1に示す。また、試料の外観を図版1、2に示す。

表1. 黒曜石試料一覧

試料No.	仮番号	遺跡	出土地点	層位	重さ(g)	分析番号
1	ぞ011	間木戸Ⅱ	4号竪穴建物跡北壁付近	埋土中位	0.2	120570
2	ぞ099	間木戸Ⅱ	8号竪穴建物跡	埋土中位	2.6	120571
3	黒2	間木戸Ⅱ	4号竪穴建物跡南西	埋土一括	0.9	120572
4	黒1	間木戸Ⅱ	9号竪穴建物跡	床面(石器No2)	2.5	120573
5	—	間木戸Ⅴ	1号廃滓場③W	②層	0.9	120574

2. 分析方法

(1) 試料の測定

本分析では、エネルギー分散型蛍光X線分析装置(セイコーインスツルメンツ社製SEA2110Lシリーズ卓上型蛍光X線分析計)を用いて元素分析を行なう。分析元素はAl、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの12元素である。試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それらを産地の特定のための指標とした。ここでは、Ca/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zr、Al/K、Si/Kの値を求め、産地を区別する指標として用いる。

なお、黒曜石製遺物の蛍光X線分析においては、試料の表面の風化程度、試料の厚さおよび試料の形状によって分析値に影響が及ぶ。表面が曇っているほどの風化がある場合は、カリウムの分析値が大きくなるため、Ca/K、Ti/Kの両軽元素比を除いて産地判定をする。試料の厚さが1.5mm以下の場合には、重い元素は小さく測定されるため、分析値に実験で求めた厚さ補正値を乗じて産地判定をする。厚さ0.3mm以下の試料については補正困難なため、産地判定はできない。試料の形状については、厚さの薄い部分を含んでいたり、極端な曲面しかないものなどを測定した場合に、分析値は変動し、産地判定結果は一定しない。そのような場合には、分析場所を変えて多数の分析値により産地判定をし、最

も多く判定された産地を選択する。

(2) 産地判定

a) 黒曜石原石の分析

黒曜石の原産地は、北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に分布している。調査を終えている原産地の一部を図1に示す。これら原石について、上述した測定を行い、上記の元素比を求め、分類した。ここでは分類の単位を「群」とよび、例えばその地名を付して「和田峠第1群」などとする。現時点では、日本および近隣国(ロシア、北朝鮮、台湾など)の原石群と、原石産地が不明の遺物で作った遺物群を加えると、合計331個の原石群・遺物群を得ている。産地判定は、試料の元素比とこれら331群の元素比とを比較し、必要条件と十分条件を求めて行う。

b) 産地の判定

上述した各元素比を変量とし、それらの相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT2乗検定を、試料と331個の原石群・遺物群との間で行い、各群に帰属する確率を求めて産地を判定する(東村,1976;1990)。ただし、低い確率(0.1%未満)で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略する。なお本分析法では、低い確率の原産地も確認しているということが重要である。すなわち、低い確率とされた原産地の原石が使用された可能性を考える必要がないという結果でもあるからである。

次に、ホテリングのT2乗検定の定量的な同定結果から、石材の成分組成以外の各産地特有の原石の特徴を考慮して、遺物の原石産地を判定する。石材の成分組成以外の特徴としては、肉眼観察においてキラキラ光る鉱物が多いか少ないか、また光る鉱物は輝石か雲母か、さらに表面の光沢の状況や角礫あるいは円礫の特徴が認められるなどがあげられる。

なお本分析は、遺物材料研究所の協力を得て行ったものである。

3. 結果

各試料の元素比分析結果を表2に示し、ホテリングのT2乗検定結果による原産地とその帰属確率および検定結果に成分組成以外の特徴などを加えて判定した産地を、表3に示す。

試料No.1は、原石群の中に帰属確率が信頼限界の0.1%を超えるものが認められず、原石産地は不明であるが、遺跡から出土した遺物で構成される遺物群のなかでみると、HY遺物群に34%の確率で帰属する。HY遺物群は、青森県日和山遺跡で使用されている産地未発見の原石で作られた遺物の成分組成で作られた遺物群で、三内丸山遺跡でもその使用が確認されている。今回の分析結果により、HY遺物群は広い範囲で使用されている黒曜石の可能性が推測された。

試料No.2については、その無色透明な色調から黒曜石ではない可能性が指摘されていたが、本分析で同時に測定した化学組成では、SiO₂の含有量が約94%と非常に高く(黒曜石は78%程度)、比重は2.648を示し、劈開面のような面も認められることから、水晶の破片であると判断される。

試料No.3～5までの3点については、岩手郡雫石町の小赤沢地区の礫層から採取される雫石群、水沢市真城の折居地区の礫層より採取された円礫からなる折居-1群、西磐井郡花泉町の払田および金沢の両地区の礫層より採取された小円礫の原石で作られた花泉群という3群に同定された。これら3群の元素組成は相互に似ており、元素組成のみでは明確に区別することはできない。したがって、本分析結果による産地判定では、これら複数の産地を併記することとした。

表2. 黒曜石試料の元素比分析結果

試料No.	分析番号	元 素 比									
		Ca/ K	Ti/ K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/ K	Si/ K
1	120570	0.221	0.134	0.054	1.785	0.445	0.145	0.520	0.030	0.022	0.517
2	120571	0.000	0.000	0.004	0.034	0.134	1.180	0.010	0.000	0.864	47.595
3	120572	0.669	0.207	0.054	1.821	0.306	0.439	0.202	0.039	0.043	0.598
4	120573	0.623	0.183	0.052	1.742	0.289	0.407	0.204	0.051	0.041	0.592
5	120574	0.674	0.203	0.050	1.778	0.305	0.429	0.197	0.044	0.041	0.595
JG-1		0.780	0.208	0.072	4.113	0.969	1.260	0.310	0.047	0.031	0.317

JG-1 : 標準試料 - Ando,A.,Kurasawa,H.,Ohmori,T.& Takeda,E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal, Vol.8 175-192 (1974)

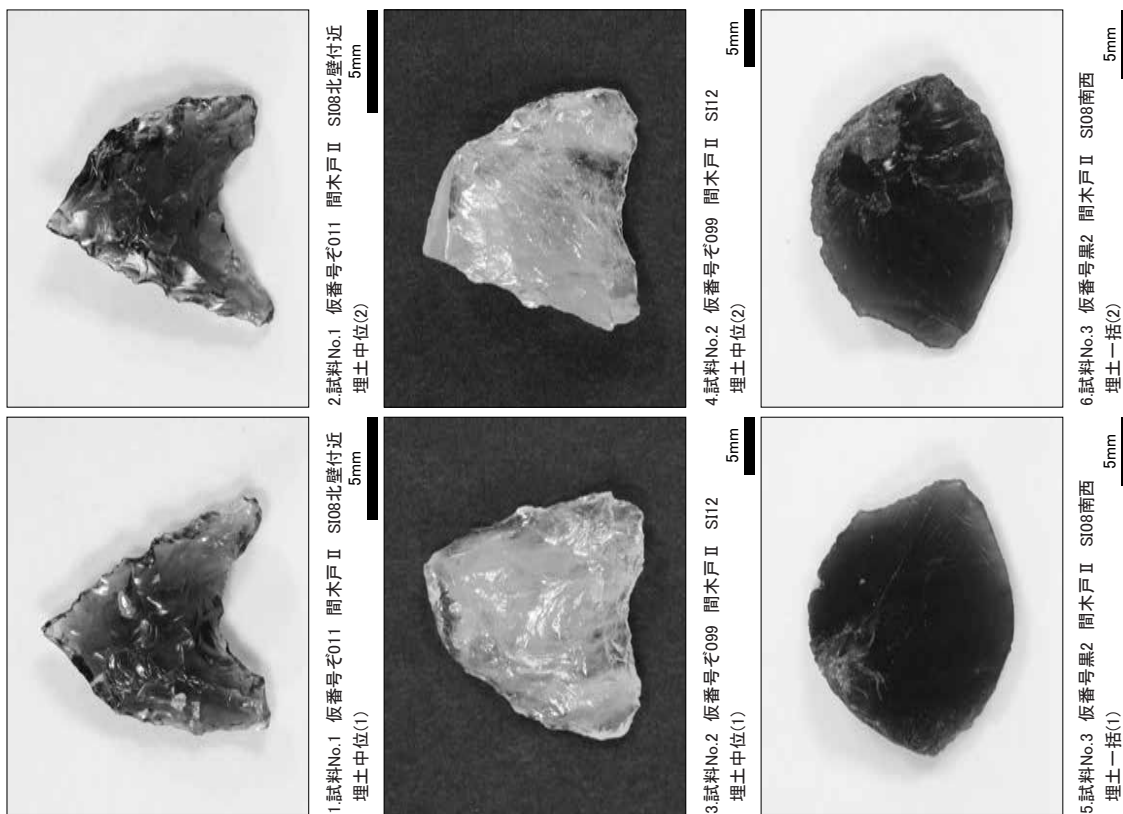
表3. 黒曜石試料の産地分析結果

試料No.	遺跡	出土地点	分析番号	ホテリングのT ² 検定結果	判定	備考
1	間木戸Ⅱ	4号竪穴建物跡北壁付近	120570	HY遺物群 (34%)	HY遺物群	
2	間木戸Ⅱ	8号竪穴建物跡	120571		水晶	比重2.648
3	間木戸Ⅱ	4号竪穴建物跡南西	120572	霏石(95%), 花泉(67%), 折居-1(47%)	霏石、花泉、折居	
4	間木戸Ⅱ	9号竪穴建物跡	120573	折居-1(98%), 霏石(97%), 花泉(95%)	霏石、花泉、折居	
5	間木戸Ⅴ	1号廃滓場③W	120574	霏石(95%), 折居-1(89%), 花泉(77%)	霏石、花泉、折居	

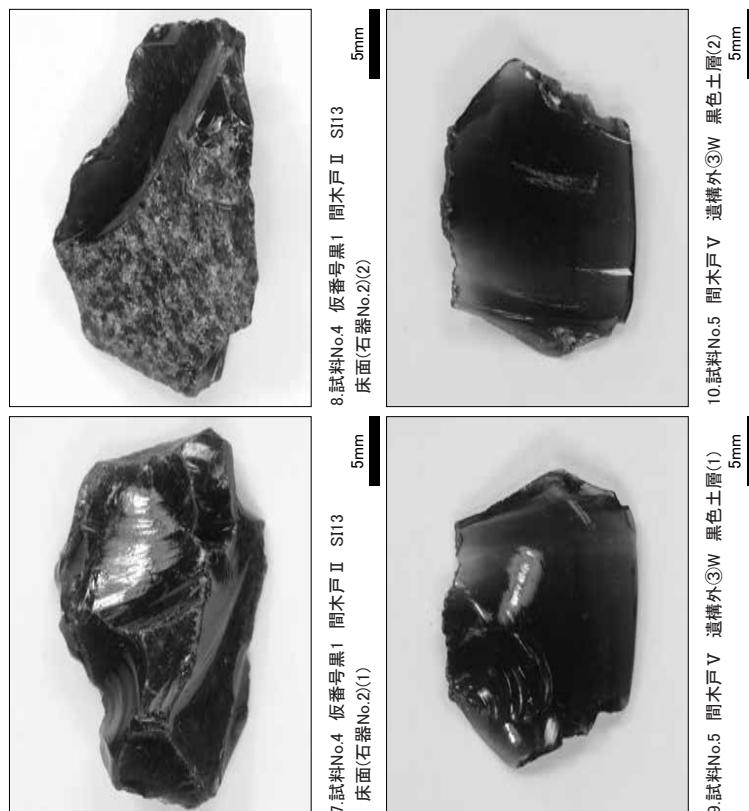
引用文献

- 東村武信, 1976, 産地推定における統計的手法.考古学と自然科学,9,77-90.
 東村武信, 1990, 考古学と物理化学.学生社,212p.

図版1 黒曜石試料(1)



図版2 黒曜石試料(2)



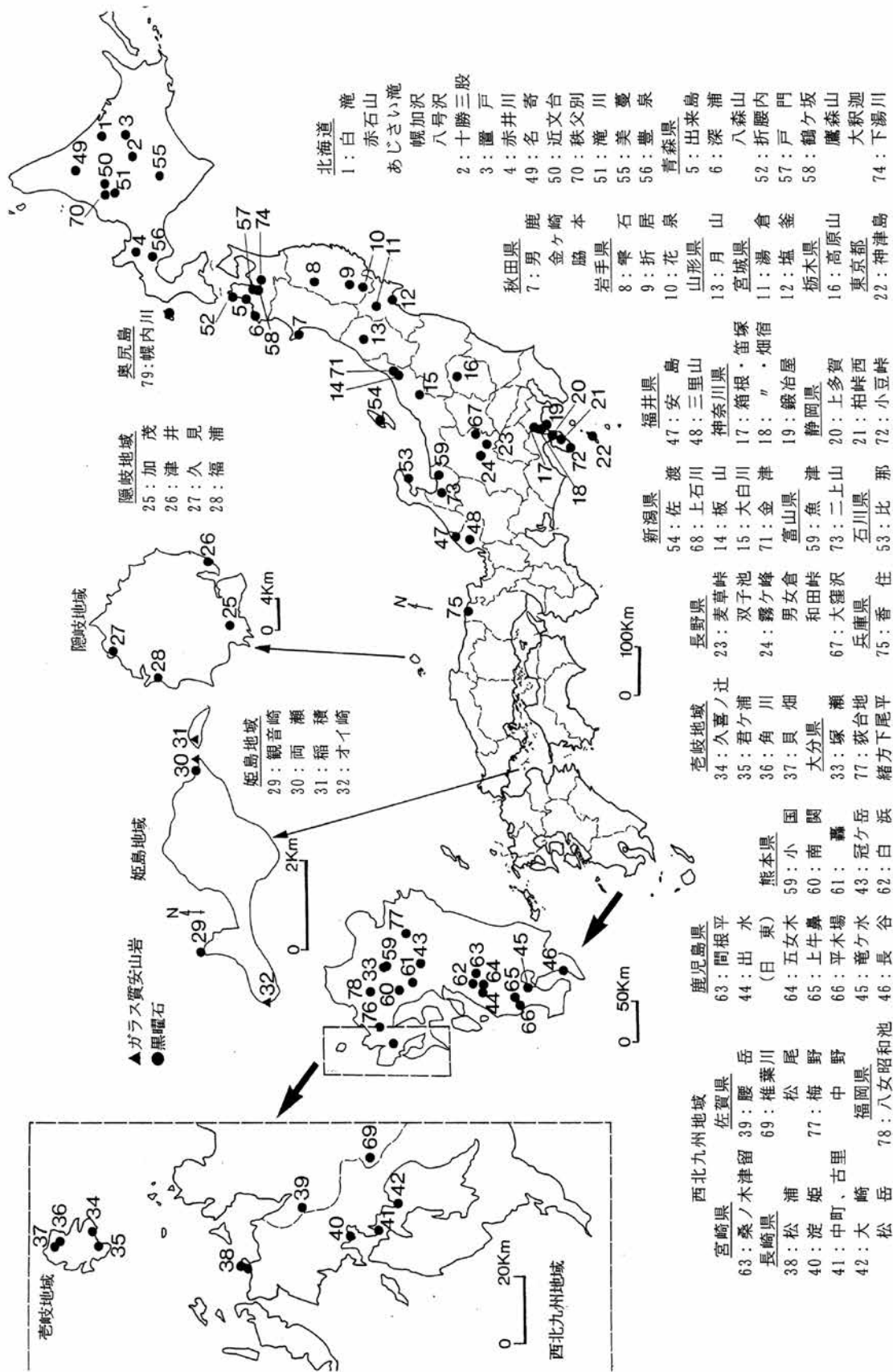


図 1. 黒曜石の原産地

3 間木戸Ⅱ・Ⅴ遺跡出土鉄滓類の成分分析

JFE テクノリサーチ株式会社
ソリューション本部（千葉）
埋蔵文化財調査研究室

1. はじめに

三陸沿岸道路の建設事業に伴い、岩手県下閉伊郡山田町に所在する間木戸Ⅱ・Ⅴ遺跡から出土した製鉄遺物について、学術的な記録と今後の調査のための一環として化学成分分析・顕微鏡組織観察を含む自然科学的観点での調査を依頼された。鉄滓、及び砂鉄等について化学成分分析、顕微鏡組織観察、X線回折測定等を行い、その結果にもとづき材質、始発原料、及び製造工程上の位置づけなどを中心に調査した。その結果について報告する。

2. 調査項目および試験・観察方法

(1) 調査項目

調査試料の記号、出土遺構・注記および調査項目を表1に示す。

(2) 調査方法

(i) 重量計測、外観観察および金属探知調査

試料重量の計量は電子天秤を使用して行い、少数点2位以下で四捨五入した。各種試験用試料を採取する前に、試料の外観をmm単位まであるスケールを同時に写し込みで撮影した。試料の出土位置や試料の種別等は提供された資料に準拠した。

着磁力調査については、直径30mmのリング状フェライト磁石を使用し、6mmを1単位として35cmの高さから吊した磁石が動きは始める位置を着磁度として数値で示した。遺物内の残存金属の有無は金属探知機（MC：metal checker）を用いて調査した。金属検知にあたっては参照標準として直径と高さを等しくした金属鉄円柱（1.5mmφ x 1.5mmH、2.0mmφ x 2.0mmH、5mmφ x 5mmH、10mmφ x 10mmH、16mmφ x 16mmH、20mmφ x 20mmH、30mmφ x 30mmH）を使用し、これとの対比で金属鉄の大きさを判断した。

(ii) 化学成分分析

化学成分分析は鉄鋼に関するJIS分析法に準じて行っている。

- ・全鉄（T.Fe）：三塩化チタン還元-ニクロム酸カリウム滴定法。
- ・金属鉄（M.Fe）：臭素メタノール分解-EDTA滴定法。
- ・酸化第一鉄（FeO）：ニクロム酸カリウム滴定法。
- ・酸化第二鉄（Fe₂O₃）：計算。 ・化合水（C.W.）：カールフィッシャー法。
- ・炭素（C）、イオウ（S）：燃焼-赤外線吸収法。
- ・ライム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化マンガン（MnO）、酸化ナトリウム（Na₂O）、珪素（Si）、マンガン（Mn）、リン（P）、銅（Cu）、ニッケル（Ni）、コバルト（Co）、アルミニウム（Al）、ヴァナジウム（V）、チタン（Ti）：ICP発光分光分析法。

・シリカ (SiO_2)、アルミナ (Al_2O_3)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、二酸化チタン (TiO_2)、酸化リン (P_2O_5)、酸化カリウム (K_2O)：ガラスビード蛍光X線分析法。但しCaO, MgO, MnOは含有量に応じてICP分析法またはガラスビード蛍光X線分析法を選択。

・酸化ナトリウム (Na_2O)：原子吸光法。

なお、鉄滓中成分は、18成分（全鉄T.Fe、金属鉄M.Fe、酸化第一鉄 FeO 、酸化第二鉄 Fe_2O_3 、シリカ SiO_2 、アルミナ Al_2O_3 、ライム CaO 、マグネシア MgO 、酸化ナトリウム Na_2O 、酸化カリウム K_2O 、二酸化チタン TiO_2 、酸化マンガン MnO 、酸化リン P_2O_5 、化合物C.W.、炭素C、ヴァナジウムV、銅Cu、ジルコニウムZr）を化学分析している。分析は各元素について分析し、酸化物に換算して表示している。

胎土成分は、17成分（全鉄T.Fe、酸化鉄 FeO 、シリカ SiO_2 、アルミナ Al_2O_3 、ライム CaO 、マグネシア MgO 、化合物C.W.、二酸化チタン TiO_2 、酸化マンガン MnO 、酸化ナトリウム Na_2O 、酸化カリウム K_2O 、炭素C、ルビジウムRb、ストロンチウムSr）を化学分析している。

鉄製品中成分の化学分析は、13成分（炭素C、シリコンSi、マンガンMn、リンP、イオウS、銅Cu、ニッケルNi、コバルトCo、アルミニウムAl、ヴァナジウムV、チタンTi、カルシウムCa、マグネシウムMg）を化学分析している。

(iii) 顕微鏡組織観察

試料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨（鏡面仕上げ）する。炉壁・羽口・粘土などの鉍物性試料については顕微鏡で観察しながら代表的な鉍物組織などを観察し、その特徴から材質、用途、熱履歴などを判断する。滓関連資料も炉壁・羽口などと同様の観察を行うが特徴的鉍物組織から成分的な特徴に結びつけ製・精錬工程の判別、使用原料なども検討する。金属鉄はナイトール（5%硝酸アルコール液）で腐食後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、顕微鏡組織および介在物（不純物、非金属鉍物）の存在状態等から製鉄・鍛冶工程の加工状況や材質を判断する。原則として100倍および400倍で撮影を行う。必要に応じて実体顕微鏡（5倍～20倍）による観察もする。

(iv) X線回折測定

試料を粉砕して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれに固有な反射（回折）された特性X線を検出（回折）できることを利用して、試料中の未知の化合物を同定することができる。多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定される。

測定装置 理学電気株式会社製 ロータフレックス (RU-300 型)		
測定条件		
①	使用 X 線	Cu-K α (波長 = 1.54178Å)
②	K β 線の除去	グラファイト単結晶モノクロメーター
③	管電圧・管電流	55kV・250mA
④	スキヤニング・スピード	4.0°/min
⑤	サンプリング・インターバル	0.020°
⑥	D.S. スリット	1°
⑦	R.S. スリット	0.15mm
⑧	S.S. スリット	1°
⑨	検出器	シンチレーション・カウンター

3. 調査結果および考察

分析調査結果を図表にまとめて249～253頁に示す。表1に調査試料と調査項目をまとめた。表2～7に試料の化学成分分析結果を、表8にX線回折結果を、表9に調査結果のまとめをそれぞれ示した。全試料の外観写真を256～264頁に、マクロ写真を264頁に、鉄滓等の顕微鏡組織を265～282頁に、金属組織の顕微鏡組織写真を283頁に、X線回折チャートを284～300頁にそれぞれ示す。

以下、試料の番号順に述べる。

試料 No. 1 鉄塊系遺物、着磁度：4、金属探知機反応：16mm以上

外観観察：外観写真を256頁に示す。重量87.0g、長さ61.8mm、幅39.4mm、厚さ27.8mm。X字のような形をした鉄塊系遺物で着磁度4、金属探知機反応が16mm以上を示すことから棒状の鉄塊が滓で結合したものと見られる。酸化土砂に覆われて茶褐色を呈しているが局所的に内部から染み出た錆汁の暗紫色で斑模様を呈している。ゴツゴツとした凹凸のある面で小さいがずっしりと重量感がある。上面側には粘土が付着し、下面側には3～5mm大の小石が付着している。滓は採取できないのでメタルを分析する。

マクロ観察：10倍の断面写真を264頁に示す。鉄塊の遺存状態は良好で白色のセメント組織と黒色のパーライト組織と見られる金属組織が観察される。

顕微鏡組織：メタルの顕微鏡組織写真を283頁に示す。ほぼ全域が灰黒色のパーライト組織に白色のセメント組織が析出した過共析鋼組織である。

化学成分：メタルの化学成分分析結果を表6～7に示す。Cは1.95%で過共析鋼組織の領域にあり顕微鏡で観察された結果と一致する。Siは0.059%、Alは0.027%、Tiは0.006%、Vは0.002%と少なく滓などの混入はほとんどない。Mnは0.002%、Cuは0.007%である。Pは0.087%、Sは0.040%である。

以上から本試料はCが1.95%の過共析鋼組織の鉄塊を含む鉄塊系遺物と見られる。

試料 No.2 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を256頁に示す。重量16.4g、長さ46.6mm、幅28.8mm、厚さ17.2mm。不斉三角形状を呈した扁平で軽量感のある鉄滓。内部から染み出た錆汁で暗紫色の斑状を呈している。上面側には3～5mm大の小石が付着し、木炭痕も観察される。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を265頁に示す。ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウルボスピネル (Ulvospinel:2FeO·TiO₂) 組織等が観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が中強度に、ファイヤライ

ト (Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) 組織、及びウルボスピネル (Ulvospinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄51.9%に対して金属鉄は0.20%とわずかである。FeOは57.1%、 Fe_2O_3 は10.5%、 SiO_2 は19.2%、 Al_2O_3 は5.04%、 TiO_2 は2.07%で始発原料は砂鉄である。FeO- SiO_2 - TiO_2 の3成分系に換算するとFeOは76.1%、 SiO_2 は21.6%、 TiO_2 は2.3%となる。28頁のFeO- SiO_2 - TiO_2 系の平衡状態図ではウスタイト組織とファイヤライト組織の境界領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料 No.3 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を256頁に示す。重量70.5g、長さ58.4mm、幅40.7mm、厚さ33.5mm。ずんぐりとした小山のような形状をした鉄滓。酸化土砂に覆われて茶褐色を呈しているが滓は黒色。上面側は滓が溶融した滑らかな曲面で発泡出生じた破孔がある。下面側は1～2mm大の気泡が点在したブツブツとした表面である。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を265頁に示す。ガラス質組織が主体でこの中に微細なメタル粒が観察される。

X線回折：結果を表8に示す。クリストバライト (Quartz: SiO_2) 組織の回折線が高強度に、ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) 組織、及びマグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄13.0%に対して金属鉄は0.09%とわずかである。FeOは2.90%、 Fe_2O_3 は15.3%、 SiO_2 は52.6%、 Al_2O_3 は21.0%、 TiO_2 は1.59%で始発原料は砂鉄である。FeO- SiO_2 - TiO_2 の3成分系に換算するとFeOは25.1%、 SiO_2 は72.7%、 TiO_2 は2.2%となる。28頁のFeO- SiO_2 - TiO_2 系の平衡状態図ではクリストバライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は炉壁付着滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した炉壁付着滓と見られる。

試料 No.4 鉄滓、着磁度：1、金属探知機反応：2mm

外観観察：外観写真を256頁に示す。重量28.5g、長さ54.2mm、幅37.7mm、厚さ26.6mm。不斉五角形状の軽量感のある鉄滓。上面側は滓であるが下面側は胎土であることから滓が付着した炉壁片と見られる。上面側は比較的平坦で1mm大の気泡が点在する厚さ5mm程度の滓が付着したな面である。下面側は胎土面で亀裂が走り、表面には切痕が点在し、6mm大の鉱物粒が散見される。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を266頁に示す。銹化鉄組織が主体で銹化で生じた粗大な気泡も多い。

X線回折：結果を表8に示す。銹化鉄に由来するマグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織やヘマタイト (Hematite: Fe_2O_3) の回折線が高強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄63.5%に対して金属鉄は0.22%とわずかである。FeOは21.5%、 Fe_2O_3 は66.6%、 SiO_2 は5.15%、 Al_2O_3 は1.35%、 TiO_2 は1.09%で始発原料は砂鉄である。FeO- SiO_2 - TiO_2 の3成分系に換算するとFeOは93.4%、 SiO_2 は5.5%、 TiO_2 は1.2%となる。図1のFeO- SiO_2 - TiO_2 系の平衡状態図ではマグネタイト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観

察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図であるが、本試料は銹化鉄が多く含まれ鉄滓による生成工程の位置付けは困難と判断。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする銹化鉄が多い鉄滓と見られる。

試料 No. 5 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を257頁に示す。重量30.0g、長さ46.9mm、幅50.5mm、厚さ18.6mm。不斉台形状を呈した扁平で軽量感のある鉄滓。酸化土砂に覆われて茶褐色を呈している。上面側は滓が流動した緩やかな凹凸面で1mm大の気泡が点在している。下面側は比較的平坦で小石や砂が一面に付着している。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を266頁に示す。ガラス質組織が主体で鉄滓組織は確認されない。

X線回折：結果を表8に示す。クリストバライト (Quartz:SiO₂) 組織やアノーサイト (Anorthite:CaOAl₂O₃2SiO₂) の回折線が高強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄9.34%に対して金属鉄は0.07%とわずかである。FeOは5.30%、Fe₂O₃は7.40%、SiO₂は60.4%、Al₂O₃は16.6%、TiO₂は0.78%で始発原料は砂鉄である。FeOn-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeOnは17.1%、SiO₂は81.8%、TiO₂は1.1%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではクリストバライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は炉壁付着滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した炉壁付着滓と見られる。

試料No.6 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を257頁に示す。重量14.6g、長さ67.1mm、幅19.2mm、厚さ10.6mm。螺旋形の棒状を呈した鉄滓。薄っすらと粘土に覆われて灰黒色を呈しているが滓は黒色。上面側には発泡で生じた1mm大の気泡が点在し、下面側には3～5mm大の小石が巻き込まれている。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を267頁に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、及びウルボスピネル (Ulvospinel:2FeO·TiO₂) 組織がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が中強度に、ウルボスピネル (Ulvospinel:2FeO·TiO₂) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄47.1%に対して金属鉄は0.10%とわずかである。FeOは51.9%、Fe₂O₃は9.50%、SiO₂は23.0%、Al₂O₃は6.70%、TiO₂は2.10%で始発原料は砂鉄である。FeOn-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeOnは71.0%、SiO₂は26.6%、TiO₂は2.4%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではウスタイト組織とファイヤライト組織の境界領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料 No. 7 鉄滓、着磁度：2、金属探知機反応：2mm

外観観察：外観写真を257頁に示す。重量10.4g、長さ31.6mm、幅30.0mm、厚さ16.7mm。上部に突起があ

る栗のような形をした鉄滓。上面側は中央部が凸面で銹化で生じた錆汁の暗紫色で覆われ、3～5mm大の小石が付着している。下面側は比較的平坦で木炭痕が散見される。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を267頁に示す。銹化鉄組織が主体で銹化で生じた粗大な気泡も多い。鉄滓組織は観察されない。

X線回折：結果を表8に示す。銹化鉄に由来するマグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織の回折線が高強度に、ウスタイト (Wustite: FeO) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄59.4%に対して金属鉄は0.17%とわずかである。 FeO は23.0%、 Fe_2O_3 は59.1%、 SiO_2 は7.10%、 Al_2O_3 は1.84%、 TiO_2 は1.57%で始発原料は砂鉄である。 $\text{FeO}-\text{SiO}_2-\text{TiO}_2$ の3成分系に換算すると FeO は90.5%、 SiO_2 は7.8%、 TiO_2 は1.7%となる。図1の $\text{FeO}-\text{SiO}_2-\text{TiO}_2$ 系の平衡状態図ではマグネタイト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.8 鉄滓、着磁度：1、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を257頁に示す。重量1434.1g、長さ222.0mm、幅91.0mm、厚さ77.5mm。短冊状を呈したずっしりと重量感のある鉄滓。下面側は胎土であることから炉壁に付着した鉄滓と見られる。上面側は炉内側で滓が流動、発泡した凹凸の激しいゴツゴツとした面を呈している。酸化土砂に覆われて茶褐色を呈しているが局所的には錆汁の暗紫色を呈している。下面側は炉壁の胎土面で亀裂が走り、5～10mm大の鉋物粒が点在している。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を268頁に示す。ガラス質組織と銹化鉄組織が主体であるが僅かにファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織が観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ガラス質組織のクリストバライト (Quartz: SiO_2) 組織の回折線が高強度に、銹化鉄に由来するマグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織の回折線が中強度に、ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄31.2%に対して金属鉄は0.11%とわずかである。 FeO は9.08%、 Fe_2O_3 は34.4%、 SiO_2 は35.1%、 Al_2O_3 は13.5%、 TiO_2 は0.95%で始発原料は砂鉄である。 $\text{FeO}-\text{SiO}_2-\text{TiO}_2$ の3成分系に換算すると FeO は54.6%、 SiO_2 は44.2%、 TiO_2 は1.2%となる。28頁の $\text{FeO}-\text{SiO}_2-\text{TiO}_2$ 系の平衡状態図ではクリストバライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生じた鉄滓と見られる。

試料No.9 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を258頁に示す。重量57.1g、長さ77.2mm、幅37.2mm、厚さ31.0mm。不斉台形状を呈した鉄滓。酸化土砂に覆われて茶褐色を呈しているが滓は黒色。上面側は比較的平坦で亀裂や1mm大の気泡が点在している。下面側には木炭痕があり表面は薄っすらと粘土で覆われている。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を268頁に示す。ガラス質組織が主体であるが僅かにファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織、ウルボスピネル (Ulvospinel: $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$) 組織等が観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ガラス質組織のクリストバライト (Quartz: SiO_2) 組織の回折線が高強

度に、ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄19.2%に対して金属鉄は0.08%とわずかである。FeOは4.81%、 Fe_2O_3 は22.0%、 SiO_2 は45.9%、 Al_2O_3 は19.2%、 TiO_2 は1.33%で始発原料は砂鉄である。FeO- SiO_2 - TiO_2 の3成分系に換算するとFeOは36.2%、 SiO_2 は62.0%、 TiO_2 は1.8%となる。28頁のFeO- SiO_2 - TiO_2 系の平衡状態図ではクリストバライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生じた鉄滓と見られる。

試料No.10 鉄塊系遺物、着磁度：4、金属探知機反応：12mm

外観観察：外観写真を258頁に示す。重量66.8g、長さ58.9mm、幅34.4mm、厚さ22.3mm。長円上のゴツゴツとした形状でずっしりと重量感があり、着磁度4、金属探知機反応が12mmを示すことから内部に鉄塊が存在すると見られる。上面側は内部から染み出た錆汁で覆われ暗紫色を呈している。3～5mm大の小石が付着している。下面側も錆汁で覆われ、中央部には錆化で膨張して生じたと思われる20mm大の瘤がある。

マクロ観察：10倍の断面写真を264頁に示す。鉄塊の遺存状態は良好で白色のセメント組織と黒色のパーライト組織と見られる金属組織が観察される。

顕微鏡組織：メタルの顕微鏡組織写真を283頁に示す。ほぼ全域が灰黒色のパーライト組織に白色のセメント組織が析出した亜共晶鑄鉄組織である。滓の顕微鏡組織写真を269頁に示す。錆化鉄組織が主体であるが僅かにファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織が観察される。

X線回折：結果を表8に示す。錆化鉄に由来するマグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織の回折線が中強度に、ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：滓の化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄46.9%に対して金属鉄は0.98%である。FeOは40.7%、 Fe_2O_3 は20.4%、 SiO_2 は20.9%、 Al_2O_3 は5.68%、 TiO_2 は3.06%で始発原料は砂鉄である。FeO- SiO_2 - TiO_2 の3成分系に換算するとFeOは71.8%、 SiO_2 は24.6%、 TiO_2 は3.6%となる。図1のFeO- SiO_2 - TiO_2 系の平衡状態図ではウスタイト組織とファイヤライト組織の境界領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図であるが、本試料は錆化鉄が多く含まれ鉄滓による生成工程の位置付けは困難と判断。メタルの化学成分分析結果を表6～7に示す。Cは2.68%で亜共晶鑄鉄組織の領域にあり顕微鏡で観察された結果と一致する。Siは0.003%、Alは0.002%、Tiは0.001%、Vは0.001%と少なく滓などの混入はほとんどない。Mnは<0.001%、Cuは0.003%である。Pは0.017%、Sは0.072%である。滓の化学成分分析結果を表2～3に示す。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とするCが2.68%の亜共晶鑄鉄組織の鉄塊を含む鉄塊系遺物と見られる。

試料 No.11 鉄滓、着磁度：1、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を258頁に示す。重量984.8g、長さ148.2mm、幅137.3mm、厚さ38.6mm。不斉三角形の扁平な形状のずっしりと重量感のある鉄滓。上面側は酸化土砂に覆われて茶褐色を呈しているが滓は黒色で滓が溶解して発泡した凹凸の激しい曲面で構成されている。下面側は平坦で亀裂が走り3～5mm大の小石が一面に付着している。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を269頁に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、及びウルボスピネル (Ulvospinel:2FeO·TiO₂) 組織がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線が高強度に、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、及びウルボスピネル (Ulvospinel:2FeO·TiO₂) 組織の回折線が中強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄49.8%に対して金属鉄は0.10%と僅かである。FeOは55.9%、Fe₂O₃は8.9%、SiO₂は19.9%、Al₂O₃は5.21%、TiO₂は3.10%で始発原料は砂鉄である。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは73.8%、SiO₂は22.7%、TiO₂は3.5%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではウスタイト組織とファイヤライト組織の境界領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.12 鉄滓、着磁度：3、金属探知機反応：8mm

外観観察：外観写真を258頁に示す。重量23.5g、長さ29.4mm、幅26.9mm、厚さ15.8mm。不斉四角形状の小さいがずっしりと重量感がある鉄滓。着磁度3、金属探知機反応が8mmを示すことから滓の中に大きな粒鉄が存在すると見られる。上面側は酸化土砂に覆われて茶褐色を呈しているが滓は黒色。下面側は錆化で生じた錆汁の暗紫色に覆われ、錆化の膨張で生じたと思われる亀裂が走っている。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を270頁に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、及びマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織がそれぞれ観察され、多くのメタルが点在している。

X線回折：結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線が高強度に、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、及びマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織の回折線が中強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄57.8%に対して金属鉄は4.16%で微細なメタルが混入している。FeOは42.3%、Fe₂O₃は29.7%、SiO₂は14.3%、Al₂O₃は4.24%、TiO₂は0.79%で始発原料は砂鉄である。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは82.7%、SiO₂は16.4%、TiO₂は0.9%となる。28頁のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではウスタイト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.13 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を259頁に示す。重量137.8g、長さ83.3mm、幅57.7mm、厚さ45.1mm。不斉三角形のサザエ工具のような形をした鉄滓。粘土で薄っすらと覆われ灰黒色を呈しているが滓は黒色。上面側は滓の溶融、発泡で生じた激しい凹凸面で13×17mm大の木炭痕がある。下面側は左端部がやや丸みを帯びた滓の流動面で大半は上面側と同様な発泡で生じた激しい凹凸面である。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を270頁に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線が中強度に、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄37.6%に対して金属鉄は0.07%と僅かである。FeOは21.8%、Fe₂O₃は29.4%、SiO₂は29.9%、Al₂O₃は9.86%、TiO₂は1.55%で始発原料は砂鉄である。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは62.0%、SiO₂は36.2%、TiO₂は1.9%となる。28頁のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではガラス質スラグの影響でファイヤライト組織とクリストバライト組織の境界領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察と一致しない。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生じた鉄滓と見られる。

試料No.14 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を259頁に示す。重量98.2g、長さ83.0mm、幅52.5mm、厚さ16.6mm。不斉長方形状を呈した比較的軽量感のある鉄滓。粘土で薄っすらと覆われて灰黒色を呈しているが滓は黒色である。上面側は比較的平坦で木炭痕があり上部は破面で3mm大の小石が多数付着している。下面側はゴツゴツとした形状の破孔面で構成され1mm大の気泡が点在している。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を271頁に示す。ほぼ全面がファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織で、微細なウルボスピネル (Ulvospinel:2FeO·TiO₂) 組織が点在して観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線が高強度に認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄37.4%に対して金属鉄は0.10と僅かである。FeOは26.2%、Fe₂O₃は24.2%、SiO₂は30.2%、Al₂O₃は10.2%、TiO₂は1.58%で始発原料は砂鉄である。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは61.3%、SiO₂は36.7%、TiO₂は1.9%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではガラス質スラグの影響でクリストバライト組織の境界領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察と一致しない。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生じた鉄滓と見られる。

試料No.15 鉄滓、着磁度：4、金属探知機反応：3mm

外観観察：外観写真を259頁に示す。重量26.9g、長さ47.4mm、幅30.1mm、厚さ22.4mm。不斉菱形のような形をした鉄滓。上面側はゴツゴツとした粗野な面で内部から染み出た錆汁の暗紫色で覆われている。下面側は酸化土砂に覆われた茶褐色の部分と黒色の滓の部分とほぼ半々である。滓側には1～3mm大の気泡が点在している。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を271頁に示す。錆化鉄組織が主体で鉄滓は観察されない。

X線回折：結果を表8に示す。錆化鉄に由来するマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織の回折線が高強度に、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄69.2%に対して金属鉄は0.18%とわずかである。FeOは49.2%、Fe₂O₃は44.0%、SiO₂は3.45%、Al₂O₃は0.74%、TiO₂は0.58%で始発原料は砂鉄と見られる。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは95.9%、SiO₂は3.5%、TiO₂は0.6%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではマグネタイト組織の領域にあり平衡状態図上の位置

は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図であるが、本試料は銹化鉄が多く含まれ鉄滓による生成工程の位置付けは困難と判断。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする銹化鉄が多い鉄滓と見られる。

試料No.16 鉄滓、着磁度：1、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を259頁に示す。重量88.6g、長さ53.8mm、幅40.7mm、厚さ26.4mm。粘土が薄っすらと付着して灰黒色を呈した楕円状でずっしりと重量感のある鉄滓。上面側は1mm大の気泡が点在し中央部が丸みを帯びて窪んでいる。下面側は比較的平坦で1～3mm大の小石が付着している。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を272頁に示す。ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織、マグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織、及びウスタイト (Wustite: FeO) 組織がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織の回折線が中強度に、ウスタイト (Wustite: FeO) 組織、及びマグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄50.3%に対して金属鉄は0.04%と僅かである。FeOは52.4%、 Fe_2O_3 は13.6%、 SiO_2 は21.6%、 Al_2O_3 は6.32%、 TiO_2 は1.15%で始発原料は砂鉄である。FeO- SiO_2 - TiO_2 の3成分系に換算するとFeOは74.4%、 SiO_2 は24.3%、 TiO_2 は1.3%となる。図1のFeO- SiO_2 - TiO_2 系の平衡状態図ではファイヤライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料 No.17 鉄滓、着磁度：2、金属探知機反応：3mm

外観観察：外観写真を260頁に示す。重量34.2g、長さ51.6mm、幅32.3mm、厚さ13.0mm。不斉三角形の小山のような形状で軽量感のある鉄滓。錆汁で覆われて暗紫色の斑模様を呈している。上面側には銹化による膨張で生じた瘤や木炭痕が観察される。下面側は中央部が窪んだ形状で3～5mm大の小石が多数巻き込まれている。底部には8×10mm大の比較的大きな木炭痕がある。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を272頁に示す。写真には記載していない銹化鉄組織に混じり凝集したウスタイト (Wustite: FeO) 組織が観察される。

X線回折：結果を表8に示す。銹化鉄に由来するマグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織の回折線が高強度に、ウスタイト (Wustite: FeO) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄50.5%に対して金属鉄は0.17%と僅かである。FeOは30.5%、 Fe_2O_3 は38.1%、 SiO_2 は22.7%、 Al_2O_3 は1.85%、 TiO_2 は1.12%で始発原料は砂鉄である。FeO- SiO_2 - TiO_2 の3成分系に換算するとFeOは74.2%、 SiO_2 は24.6%、 TiO_2 は1.2%となる。図1のFeO- SiO_2 - TiO_2 系の平衡状態図ではファイヤライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.18 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を260頁に示す。重量244.6g、長さ115.1mm、幅74.3mm、厚さ40.5mm。不斉菱形のよ

うな形状の扁平な鉄滓。粘土で薄っすらと覆われて灰黒色を呈しているが滓は黒色。上面側は滓が流動して生じた丸みを帯びた曲面で1～5mm大の気泡が点在している。下面側は比較的平坦で小石や礫が多数巻き込まれている。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を273頁に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織、メタル粒等がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が中強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄51.9%に対して金属鉄は0.09%と僅かである。FeOは57.3%、Fe₂O₃は10.4%、SiO₂は19.9%、Al₂O₃は6.25%、TiO₂は1.15%で始発原料は砂鉄である。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは76.3%、SiO₂は22.4%、TiO₂は1.3%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではファイヤライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.19 鉄滓、着磁度：1、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を260頁に示す。重量46.2g、長さ50.7mm、幅36.1mm、厚さ23.6mm。酸化土砂に覆われて茶褐色を呈しているが滓は黒色。上面側は中央部が窪んだ形をし木炭痕が点在している。下面側は凸面で1～5mm大の小石が多数付着している。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を273頁に示す。凝集したウスタイト (Wustite:FeO) 組織、ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及び微細なウルボスピネル (Ulvospinel:2FeO·TiO₂) 組織等がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、及びファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線が中強度に、ウルボスピネル (Ulvospinel:2FeO·TiO₂) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄53.1%に対して金属鉄は8.68%とメタルが混入している。FeOは47.9%、Fe₂O₃は10.3%、SiO₂は20.1%、Al₂O₃は4.53%、TiO₂は1.83%で始発原料は砂鉄である。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは72.6%、SiO₂は25.1%、TiO₂は2.3%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではファイヤライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.20 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を260頁に示す。重量120.5g、長さ70.4mm、幅55.4mm、厚さ24.7mm。ずっしりと重量感のある鉄滓。上面側は粘土で薄っすらと覆われて灰黒色を呈し、ブツブツとした形状の凹凸のある面と比較的平坦な褶曲面で構成され、1～5mm大の気泡が点在している。下面側は酸化土砂に覆われて茶褐色を呈し中央部がやや窪んだ形状である。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を274頁に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織等がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線が高強度に、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が中強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄47.3%に対して金属鉄は2.11%とメタルが混入している。FeOは48.4%、Fe₂O₃は10.8%、SiO₂は26.1%、Al₂O₃は6.49%、TiO₂は0.97%で始発原料は砂鉄である。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは68.6%、SiO₂は30.2%、TiO₂は1.1%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではファイヤライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.21 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を261頁に示す。重量87.0g、長さ107.3mm、幅22.0mm、厚さ19.3mm。粘土で薄っすらと覆われて灰黒色を呈したずっしりと重量感のある棒状の鉄滓。上面側は凸面で構成され5～7mm大の白色の小石が点在して付着している。下面側は中央部が線状に窪んだ形状で1mm大の気泡が点在している。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を274頁に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織等がそれぞれ観察される。メタル粒も観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が中強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄53.0%に対して金属鉄は0.28%と僅かである。FeOは60.1%、Fe₂O₃は8.6%、SiO₂は19.9%、Al₂O₃は5.35%、TiO₂は1.11%で始発原料は砂鉄である。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは76.6%、SiO₂は22.2%、TiO₂は1.2%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではファイヤライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.22 鉄滓、着磁度：1、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を261頁に示す。重量1162.4g、長さ152.9mm、幅96.5mm、厚さ48.7mm。粘土と錆汁で覆われたずっしりと重量感のある鉄滓。上面側は滓が流動して生じた丸みのある凹凸面で1mm大の気泡が点在している。下面側は泥で覆われた平坦な面で3～5mm大の小石が一面に付着している。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を275頁に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織等がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線が高強度に、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄39.3%に対して金属鉄は0.14%と僅かである。FeOは39.2%、Fe₂O₃は12.4%、SiO₂は30.4%、Al₂O₃は9.05%、TiO₂は1.20%で始発原料は砂鉄である。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは62.0%、SiO₂は36.5%、TiO₂は1.4%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではファイヤライト組織とクリストバライト組織の境界領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の

生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.23 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を261頁に示す。重量305.3g、長さ82.2mm、幅74.7mm、厚さ26.6mm。ずっしりと重量感がある扁平な鉄滓。上面側は滓が流動した緩やかな曲面で構成される。下面側は比較的凹凸がある面で構成されており、5～7mm大の木炭痕や5～10mm大の小石が点在している。破面は2、破面で見ると緻密な組織で1mm大の気泡は観察されない。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を275頁に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織等がそれぞれ観察され金属粒も多数存在する。

X線回折：結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線が高強度に、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が中強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄49.0%に対して金属鉄は0.21%と僅かである。FeOは56.4%、Fe₂O₃は7.1%、SiO₂は22.6%、Al₂O₃は6.86%、TiO₂は1.32%で始発原料は砂鉄である。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは72.6%、SiO₂は25.9%、TiO₂は1.5%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではファイヤライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.24 鉄滓、着磁度：4、金属探知機反応：16mm

外観観察：外観写真を261頁に示す。重量92.2g、長さ52.2mm、幅42.8mm、厚さ33.2mm。酸化土砂に覆われて茶褐色を呈したずっしりと重量感のある鉄滓。着磁度4、金属探知機反応が16mmを示していることから鉄塊に滓が付着した鉄塊系遺物と見られる。上面側は丸みのある凸面が多いことから鉄塊に滓が付着した面と見られる。下面側は鉄塊と見られ内部から染み出た錆汁で覆われている。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を276頁に示す。写真には記載していないが錆化鉄組織が多い中でファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織等がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。錆化鉄に由来するマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織、ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が中強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄56.2%に対して金属鉄は0.94%である。FeOは43.5%、Fe₂O₃は30.7%、SiO₂は14.5%、Al₂O₃は4.50%、TiO₂は0.69%で始発原料は砂鉄と見られる。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは83.0%、SiO₂は16.2%、TiO₂は0.8%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではマグネタイト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図であるが、本試料は錆化鉄が多く含まれ鉄滓による生成工程の位置付けは困難と判断。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする錆化鉄が多い鉄滓と見られる。

試料No.25 鉄滓、着磁度：2、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を262頁に示す。重量58.4g、長さ54.3mm、幅49.1mm、厚さ35.0mm。中央部に突起がある不斉三角形のずんぐりとした重量感のある鉄滓。上面側には1mm大の気泡が点在し、内部から滲み出た錆汁で生じた暗紫色の斑模様がある。下面側は中央部が凸面で構成され1mm大の小石が付着している。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を276頁に示す。写真には記載していないが錆化鉄組織やガラス質組織が多い中でファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及び微細なマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織等がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。クリストバライト (Quartz:SiO₂) 組織、及び錆化で生じたマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織の回折線が中強度に、錆化で生じたゲーサイト (Goethite:Fe(OOH)₃) 組織やファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄28.4%に対して金属鉄は0.37%とわずかである。FeOは16.8%、Fe₂O₃は21.4%、SiO₂は40.8%、Al₂O₃は12.2%、TiO₂は0.76%で始発原料は砂鉄と見られる。FeO-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeOは47.9%、SiO₂は51.2%、TiO₂は1.0%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではクリストバライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生じた鉄滓と見られる。

試料No.26 鉄滓、着磁度：1、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を262頁に示す。重量17.8、長さ40.6mm、幅21.1mm、厚さ18.1mm。軽量感のある鉄滓で酸化土砂に覆われて茶褐色を呈している。上面側の下部は内部から染み出た錆汁で暗紫色の斑状を呈し、下面側は比較的ゴツゴツとした質感。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を277頁に示す。錆化鉄組織、凝集ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、及びファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織等がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。錆化鉄に由来するマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が中強度に、ゲーサイト (Goethite:Fe(OOH)₃)、及びファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄66.8%に対して金属鉄は0.10%と僅かである。FeOは59.4%、Fe₂O₃は29.3%、SiO₂は6.24%、Al₂O₃は1.32%、TiO₂は0.62%で始発原料は砂鉄と見られる。FeO-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeOは92.8%、SiO₂は6.5%、TiO₂は0.6%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではマグネタイト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図であるが、本試料は錆化鉄が多く含まれ鉄滓による生成工程の位置付けは困難と判断。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする錆化鉄が多い鉄滓と見られる。

試料No.27 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を262頁に示す。重量294.1g、長さ109.8mm、幅63.4mm、厚さ60.10mm。不斉長方形の形状を呈した炉壁に付着した鉄滓。酸化土砂に覆われてやや赤味を帯びた暗紫色を呈しているが滓は黒色。上面側は滓が溶融して生じた凹凸のある曲面で10mm大の破孔や3mm大の気泡が点在している。下面側は胎土で木炭痕が多数観察される。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を277頁に示す。ガラス質組織が主体であるが僅かにウスタイト (Wustite:FeO) 組織が観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ガラス質組織のクリストバライト (Quartz:SiO₂) 組織の回折線が高強度に、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄15.5%に対して金属鉄は0.06%とわずかである。FeOは3.95%、Fe₂O₃は17.7%、SiO₂は52.5%、Al₂O₃は18.6%、TiO₂は0.78%で始発原料は砂鉄である。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは28.9%、SiO₂は70.1%、TiO₂は1.0%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではクリストバライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は炉壁付着滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した炉壁付着滓と見られる。

試料No.28 鉄滓、着磁度：2、金属探知機反応：3mm

外観観察：外観写真を262頁に示す。重量53.4、長さ57.0mm、幅42.5mm、厚さ25.7mm。ゴツゴツとした岩山のような鉄滓。酸化土砂と内部から染み出た錆汁に覆われて暗赤紫色を呈しているが滓は黒色。鉄滓の小片が結合したと見られるようにゴツゴツとした複雑な形状を呈している。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を278頁に示す。錆化鉄組織、凝集ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、及びファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織等がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、及び錆化鉄に由来するマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織の回折線が高強度に、ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線が中強度に、ゲーサイト (Goethite:Fe(OOH)₃) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄61.8%に対して金属鉄は0.20%と僅かである。FeOは45.8%、Fe₂O₃は37.2%、SiO₂は9.36%、Al₂O₃は2.71%、TiO₂は0.60%で始発原料は砂鉄と見られる。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは89.3%、SiO₂は10.1%、TiO₂は0.6%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではマグネタイト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図であるが、本試料は錆化鉄が多く含まれ鉄滓による生成工程の位置付けは困難と判断。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする錆化鉄が多い鉄滓と見られる。

試料No.29 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を263頁に示す。重量218.2、長さ54.3mm、幅55.9mm、厚さ54.1mm。板状でずっしりと重量感のある鉄滓。薄っすらと酸化土砂に覆われて暗赤紫色を呈しているが滓は黒色。上面側は比較的平坦で滓が流動した筋状の模様が観察される。下面側は破面で、緻密な組織で小気泡はほとんどなく集合した20～30mm大の粗大な気泡が観察される。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を278頁に示す。ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びメタル粒等がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が中強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄49.6%に対して金属鉄は0.17%と僅かである。FeOは56.8%、Fe₂O₃は7.5%、SiO₂は22.8%、Al₂O₃は6.75%、TiO₂は1.03%で始発原料は砂鉄である。

FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは73.0%、SiO₂は25.9%、TiO₂は1.2%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではファイヤライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.30 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を263頁に示す。重量427.0、長さ116.6mm、幅83.5mm、厚さ26.4mm。不斉五角形状を呈した扁平でずっしりと重量感のある鉄滓。酸化土砂に覆われて茶褐色を呈しているが滓は黒色。上面側は中央部が窪み、下面側は緩やかな凸面で3～5mm大の小石が巻き込まれている。椀形滓の破片と見られる。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を279頁に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織等がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が中強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄49.0%に対して金属鉄は0.10%と僅かである。FeOは53.1%、Fe₂O₃は10.9%、SiO₂は23.7%、Al₂O₃は6.77%、TiO₂は0.88%で始発原料は砂鉄と見られる。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは72.3%、SiO₂は26.8%、TiO₂は1.0%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではファイヤライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.31 鉄塊系遺物、着磁度：2、金属探知機反応：3mm

外観観察：外観写真を263頁に示す。重量38.5、長さ51.2mm、幅32.2mm、厚さ28.9mm。不斉三角形状でゴツゴツとした小山のような鉄滓。内部から染み出た錆汁で暗紫色を呈している。上面側の上部には10×13mm大の木炭痕がある。鉄塊に滓が付着した鉄塊系遺物と見られる。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を279頁に示す。錆化鉄組織が主体で僅かながら、ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織等が観察される。

X線回折：結果を表8に示す。錆化鉄に由来するマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織の回折線が高強度に、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びゲーサイト (Goethite:Fe(OOH)₃) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄57.5%に対して金属鉄は0.18%と僅かである。FeOは18.3%、Fe₂O₃は61.6%、SiO₂は9.23%、Al₂O₃は2.68%、TiO₂は0.32%で始発原料は砂鉄か否かは判断できない。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは89.3%、SiO₂は10.3%、TiO₂は0.4%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではマグネタイト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図であるが、本試料は錆化鉄が多く含まれ鉄滓による生成工程の位置付けは困難と判断。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする錆化鉄が多い鉄滓と見られる。

試料No.32 鉄滓、着磁度：4、金属探知機反応：6～8mm

外観観察：外観写真を263頁に示す。重量128.1、長さ80.2mm、幅53.6mm、厚さ23.7mm。長円状で中央部がやや窪んだ扁平でずっしりと重量感のある鉄塊系遺物。着磁度4、金属探知機反応が6～8mmを示すことから内部に鉄塊の存在が伺われる。上面側の窪んだ部分は錆汁で暗紫色を呈し、下面側はやや黒ずんだ滓の色彩で1mm大の気泡が点在している。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を280頁に示す。写真は記載していないが錆化鉄組織が主体でこの中に僅かながら、ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織、及びウスタイト (Wustite: FeO) 組織等が観察される。

X線回折：結果を表8に示す。錆化鉄に由来するマグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織の回折線が中強度に、ウスタイト (Wustite: FeO) 組織、ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織、及びゲーサイト (Goethite: $\text{Fe}(\text{OOH})_3$) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄60.6%に対して金属鉄は0.22%と僅かである。FeOは53.6%、 Fe_2O_3 は26.3%、 SiO_2 は11.6%、 Al_2O_3 は2.50%、 TiO_2 は0.63%で始発原料は砂鉄か否かは判断できない。FeO- SiO_2 - TiO_2 の3成分系に換算するとFeOは86.8%、 SiO_2 は12.5%、 TiO_2 は0.7%となる。図1のFeO- SiO_2 - TiO_2 系の平衡状態図ではマグネタイト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図であるが、本試料は錆化鉄が多く含まれ鉄滓による生成工程の位置付けは困難と判断。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする錆化鉄が多い鉄滓と見られる。

試料No.33 鉄滓、着磁度：1、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を264頁に示す。重量620.7、長さ135.4mm、幅79.6mm、厚さ47.8mm。長辺状の板状を呈したずっしりと重量感のある鉄滓。薄っすらと酸化土砂に覆われて暗赤紫色を呈しているが滓は黒色。上面側の中央部には滓が流動して生じたと思われる筋状の模様が見える。下面側には泥や小石が多数付着している。破面は2、破面で見ると緻密な組織であり小さな気泡は観察されない。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を280頁に示す。マグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織、ウスタイト (Wustite: FeO) 組織、ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織等が観察される。

X線回折：結果を表8に示す。マグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織の回折線が中強度に、ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織、及びウスタイト (Wustite: FeO) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄53.2%に対して金属鉄は0.44%と僅かである。FeOは61.1%、 Fe_2O_3 は7.5%、 SiO_2 は19.5%、 Al_2O_3 は5.50%、 TiO_2 は1.13%で始発原料は砂鉄である。FeO- SiO_2 - TiO_2 の3成分系に換算するとFeOは76.9%、 SiO_2 は21.8%、 TiO_2 は1.3%となる。図1のFeO- SiO_2 - TiO_2 系の平衡状態図ではマグネタイト組織とファイヤライト組織の境界領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.34 砂鉄

外観観察：外観写真を264頁に示す。やや茶褐色を帯びた砂鉄で粒径範囲は広い。+1400 μm が38%と多く、1400～500 μm が27%、500～250 μm が17%、-250 μm は18%である。平均粒径は算術平均

で616 μm 。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を281頁に示す。粒子内には気孔や亀裂が観察される。チタン鉄鉱と磁鉄鉱とが固溶体になり格子状の微細な模様を呈するウィドマンステッテン組織 (Widmanstatten Structure) を有する粒子も観察される。400倍の写真はウィドマンステッテン型組織が一部見られる粒子である。

化学成分：分析結果を表4～5に示した。全鉄は27.3%で、FeOは12.1%、 Fe_2O_3 は25.4%で Fe_2O_3 とFeOの比率は68：32である。代表的な不純物である SiO_2 は13.1%と多い。 TiO_2 の含有量は1.19%で低い。

試料No.35 砂鉄

外観観察：外観写真を264頁に示す。茶褐色を呈した砂鉄で磁着は半分程度。試料重量が0.3gであったため粒度分析は実施せず。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を281頁に示す。粒子内には気孔や亀裂が観察される。チタン鉄鉱と磁鉄鉱とが固溶体になり格子状の微細な模様を呈するウィドマンステッテン組織 (Widmanstatten Structure) を有する粒子も観察される。400倍の写真はウィドマンステッテン型組織が一部見られる粒子である。

化学成分：分析結果を表4～5に示した。全鉄は19.8%で、FeOは12.1%、 Fe_2O_3 は14.7%で Fe_2O_3 とFeOの比率は55：45である。代表的な不純物である SiO_2 は11.4%と多い。 TiO_2 の含有量は1.50%で低い。

試料No.36 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を264頁に示す。重量39.7、長さ42.0mm、幅31.3mm、厚さ23.8mm。薄っすらと酸化土砂に覆われて暗赤紫色を呈しているが滓は黒色。上面側中央部の凹部は破孔と見られ内部には小さな木炭痕が観察される。下面側には13×15mm大の木炭痕がある。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を282頁に示す。マグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織、ウスタイト (Wustite: FeO) 組織、ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織等が観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ウスタイト (Wustite: FeO) 組織の回折線が中強度に、ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織、及びマグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄57.4%に対して金属鉄は0.17%と僅かである。FeOは61.3%、 Fe_2O_3 は13.7%、 SiO_2 は13.8%、 Al_2O_3 は4.10%、 TiO_2 は2.43%で始発原料は砂鉄である。FeO- SiO_2 - TiO_2 の3成分系に換算するとFeOは82.2%、 SiO_2 は15.1%、 TiO_2 は2.7%となる。図1のFeO- SiO_2 - TiO_2 系の平衡状態図ではウスタイト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

4. ま と め

(1) 遺跡の性格

本調査で得られた試料は、鉄滓34試料、砂鉄2試料の合計36試料である。鉄滓の出所を製造工程別に分類した結果、不明な8試料をのぞく26試料全てが製錬工程であり、本遺跡は製鉄炉により鉄素材を生産し、消費地に近い鍛冶炉へ鉄素材を供給していたと見られる。

(2) 始 発 原 料

本調査で得られた鉄滓4試料から、TiO₂ 鉱物のウルボスピネル組織が観察されていることや、鉄滓試料の全てから TiO₂ が1～3% 検出されたこと等から、本遺跡の始発原料は砂鉄と判断された。遺構内で採取された砂鉄の TiO₂ 濃度が1.19%と1.50%であったこと等から低濃度 Ti の砂鉄が始発原料であったと考えられる。

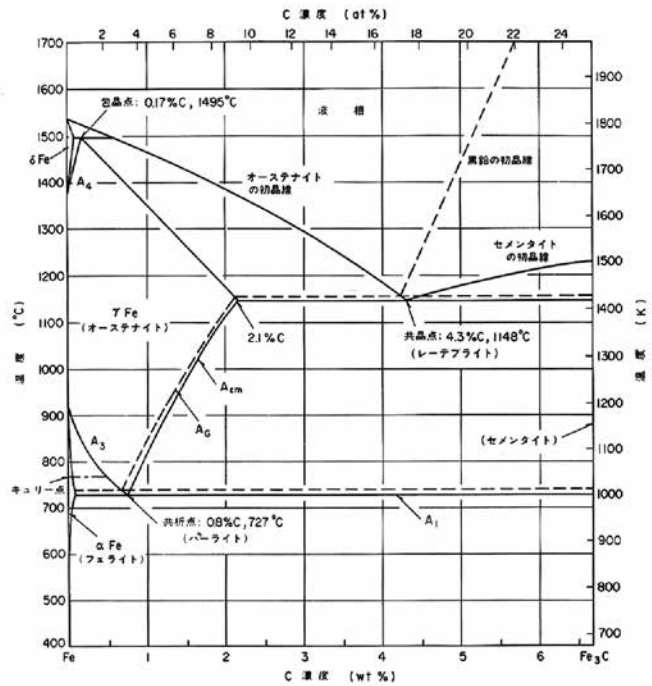
5. 参 考

(1) 鉄滓の顕微鏡組織について：鉄滓を構成する化合物結晶には、一般的に表A1のような鉱物組織がある。酸化鉄 (Fe₂O₃、Fe₃O₄、FeO)、二酸化ケイ素 (シリカ: SiO₂)、アルミナ (Al₂O₃) および二酸化チタン (TiO₂) を組み合わせた化合物 (固溶体) が多く、これら鉱物結晶は含有量にも依存するが、X線回折により検出され確認できる。鉄滓中の低融点化合物がガラス相 (非晶質) を形成することがあり、X線回折では検出されない。

表 A 1 鉄滓の顕微鏡鉱物組織とその観察状況

鉱物組織名 (和)	鉱物名 (英)	化学式	偏光顕微鏡観察状況
ヘマタイト	Hematite	$\alpha - \text{Fe}_2\text{O}_3$	赤褐色～赤紫色
マーズマイト	Maghemite	$\gamma - \text{Fe}_2\text{O}_3$	赤紫色～黒紫色
マグネタイト	Magnetite	Fe ₃ O ₄	白青色、四角または多角盤状
ウスタイト	Wustite	FeO	灰白色、繡玉状または樹枝状
ファイヤライト	Fayalite	2FeO·SiO ₂	薄い青灰色、短冊状の長い結晶
ウルボスピネル	Ulvospinel	2FeO·TiO ₂	白色、四角～角形板状結晶
イルメナイト	Ilmenite	FeO·TiO ₂	白色、針状・棒状の長い結晶
シュードブルッカイト	Pseudobrookite	FeO·2TiO ₂	白色、針状の結晶
ハロイサイト	Halloysite	Al ₂ O ₃ ·2SiO ₂ ·2H ₂ O	X線で同定できたが組織は不明
ハーシナイト	Hercynite	FeO·Al ₂ O ₃	ウスタイト中に析出、ごま粒状。
アカゲナイト	Akagenite	$\beta - \text{FeOOH}$	X線で同定できたが組織は不明
ゲーサイト	Goethite	$\alpha - \text{FeOOH}$	白～黄色、リング状が多い。

(2) 鉄-炭素系平衡状態図



(3) ゼーゲルコーン溶倒温度比較表

註：コーンは正確な温度を測定するものではない。

耐火度の数値を概略の温度で示す場合にのみ上の温度表が使われる。

この表は JIS R0305 付表による。コーン番号 = SK 番号

温度 (°C)	SK コーン番号	温度 (°C)	SK コーン番号	温度 (°C)	SK コーン番号	温度 (°C)	SK コーン番号
600	22	960	07a	1,280	9	1,650	29
650	21	980	06a	1,300	10	1,670	30
670	20	1,000	05a	1,320	11	1,690	31
690	19	1,020	04a	1,350	12	1,710	32
710	18	1,040	03a	1,380	13	1,730	33
730	17	1,060	02a	1,410	14	1,750	34
750	16	1,080	01a	1,435	15	1,770	35
790	015a	1,100	1a	1,460	16	1,790	36
815	014a	1,120	2a	1,480	17	1,825	37
835	013a	1,140	3a	1,500	18	1,850	38
855	012a	1,160	4a	1,520	19	1,880	39
880	011a	1,180	5a	1,530	20	1,920	40
900	010a	1,200	6a	1,580	26	1,960	41
920	09a	1,230	7	1,610	27	2,000	42
940	08a	1,250	8	1,630	28		

6. 図表・写真

表1 調査試料と調査項目

試料番号	遺構名	出土場所	出土層位	種類	①化学成分分析	②顕微鏡組織観察	③X線回折測定	④着磁力調査	⑤金属探知機反応	⑥外観写真	⑦マクロ写真
No.1	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○		○	○	○	○
No.2	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.3	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.4	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.5	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.6	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.7	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.8	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.9	1号工房跡	1号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.10	1号工房跡	1号製鉄炉	ベルト炉内	鉄滓	○2	○2	○	○	○	○	○
No.11	1号工房跡	1号製鉄炉	炉内2	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.12	1号工房跡	3号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.13	1号工房跡	3号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.14	1号工房跡	3号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.15	2号工房跡	4号製鉄炉	記載なし	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.16	2号工房跡	4号製鉄炉	記載なし	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.17	2号工房跡	4号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.18	2号工房跡	4号製鉄炉	記載なし	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.19	2号工房跡	5号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.20	2号工房跡	5号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.21	2号工房跡	5号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.22	2号工房跡	5号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.23	1号廃滓場	③E	②層下位	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.24	1号廃滓場	③EW間	①b層	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.25	1号廃滓場	③E	②層下位	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.26	1号廃滓場	③W	①b～②層上位	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.27	1号廃滓場	③W	①b～②層上位	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.28	1号廃滓場	③W	①b～②層	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.29	1号廃滓場	③W	①b～②層	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.30	1号廃滓場	③W	①b～②層	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.31	1号廃滓場	③W	②層中位	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.32	1号廃滓場	④	②層中位	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.33	1号廃滓場	③W	②層下	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.34	1号工房跡	3号製鉄炉	炉内	砂鉄	○	○		○	○	○	
No.35	深堀トレンチ	基本層序B	砂	砂鉄	○	○		○	○	○	
No.36	Ⅱ遺跡27号 竪穴建物跡	北	埋土上～中位	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
分析数					37	37	33	36	36	36	2

表2 鉄滓の化学組成分析結果 (%)

試料 No.	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O	比率	
											FeO	Fe ₂ O ₃
No.2	51.9	0.2	57.1	10.5	19.2	5.04	2.22	0.57	0.3	0.45	84.5	15.5
No.3	13	0.09	2.9	15.3	52.6	21	1.44	1.23	1.9	1.31	15.8	84.2
No.4	63.5	0.22	21.5	66.6	5.15	1.35	0.71	0.22	0.06	0.11	24.4	75.6
No.5	9.34	0.07	5.3	7.4	60.4	16.6	2.85	1.26	1.35	3.05	41.9	58.1
No.6	47.1	0.1	51.9	9.5	23	6.7	3	0.67	0.51	0.73	84.5	15.5
No.7	59.4	0.17	23	59.1	7.1	1.84	1.67	0.22	0.1	0.29	28	72
No.8	31.2	0.11	9.08	34.4	35.1	13.5	0.96	0.75	1.71	1.05	20.9	79.1
No.9	19.2	0.08	4.81	22	45.9	19.2	1.6	1.08	1.83	1.27	17.9	82.1
No.10	46.9	0.98	40.7	20.4	20.9	5.68	3.05	0.58	0.43	0.48	66.6	33.4
No.11	49.8	0.1	55.9	8.9	19.9	5.21	3.24	0.66	0.48	0.69	86.2	13.8
No.12	57.8	4.16	42.3	29.7	14.3	4.24	0.81	0.42	0.43	0.45	58.8	41.2
No.13	37.6	0.07	21.8	29.4	29.9	9.86	2.36	0.88	0.98	0.93	42.6	57.4
No.14	37.4	0.1	26.2	24.2	30.2	10.2	2.49	0.9	1.03	0.98	52	48
No.15	69.2	0.18	49.2	44	3.45	0.74	0.27	0.1	0.03	0.05	52.8	47.2
No.16	50.3	0.04	52.4	13.6	21.6	6.32	1.59	0.61	0.43	0.6	79.4	20.6
No.17	50.5	0.17	30.5	38.1	22.7	1.85	0.48	0.16	0.06	0.1	44.5	55.5
No.18	51.9	0.09	57.3	10.4	19.9	6.25	1.6	0.54	0.58	0.69	84.6	15.4
No.19	53.1	8.68	47.9	10.3	20.1	4.53	2.39	0.52	0.4	0.56	82.3	17.7
No.20	47.3	2.11	48.4	10.8	26.1	6.49	1.55	0.83	0.44	0.53	81.7	18.3
No.21	53	0.28	60.1	8.06	19.9	5.35	1.57	0.46	0.52	0.54	87.5	12.5
No.22	39.3	0.14	39.2	12.4	30.4	9.05	2.96	0.4	1.06	1.67	75.9	24.1
No.23	49	0.21	56.4	7.1	22.6	6.86	2.13	0.61	0.66	0.77	88.9	11.1
No.24	56.2	0.94	43.5	30.7	14.5	4.5	0.76	0.37	0.28	0.39	58.7	41.3
No.25	28.4	0.37	16.8	21.4	40.8	12.2	1.81	0.89	1.13	1.41	44	56
No.26	66.8	0.1	59.4	29.3	6.24	1.32	0.17	0.14	0.06	0.06	66.9	33.1
No.27	15.5	0.06	3.95	17.7	52.5	18.6	1.08	1.06	2.04	1.58	18.3	81.7
No.28	61.8	0.2	45.8	37.2	9.36	2.71	0.27	0.24	0.14	0.07	55.2	44.8
No.29	49.6	0.17	56.8	7.5	22.8	6.75	1.55	0.56	0.65	0.78	88.3	11.7
No.30	49	0.1	53.1	10.9	23.7	6.77	1.32	0.55	0.52	0.68	83	17
No.31	57.5	0.18	18.3	61.6	9.23	2.68	0.4	0.15	0.17	0.2	22.9	77.1
No.32	60.6	0.22	53.6	26.8	11.6	2.5	0.24	0.21	0.06	0.06	66.7	33.3
No.33	53.2	0.44	61.1	7.5	19.5	5.5	1.7	0.45	0.61	0.66	89	11
No.36	57.4	0.17	61.3	13.7	13.8	4.1	1.61	0.46	0.32	0.33	81.7	18.3

表3 鉄滓の化学組成分析結果(続き) (%)

試料 No.	TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	C	化合水	V	Cu	Zr	TiO ₂ /T.Fe	MnO/TiO ₂	造滓成分
No.2	2.07	0.35	0.79	0.07	0.95	0.19	0.002	0.014	0.04	0.169	27.8
No.3	1.59	0.18	0.29	0.02	0.17	0.048	0.002	0.061	0.122	0.113	79.5
No.4	1.09	0.28	0.487	0.07	2.02	0.18	0.004	0.058	0.017	0.257	7.6
No.5	0.78	0.11	0.31	0.08	0.43	0.027	< 0.001	0.015	0.084	0.141	85.5
No.6	2.1	0.32	0.947	0.04	0.35	0.15	0.001	0.12	0.045	0.152	34.6
No.7	1.57	0.31	0.769	0.23	3.48	0.15	0.002	0.009	0.026	0.197	11.2
No.8	0.95	0.14	0.494	0.07	1.68	0.07	0.004	0.045	0.03	0.147	53.1
No.9	1.33	0.15	0.48	0.01	0.19	0.055	0.002	0.037	0.069	0.113	70.9
No.10	3.06	0.28	0.801	0.61	1.89	0.11	0.002	0.17	0.065	0.092	31.1
No.11	3.1	0.34	0.971	0.01	0.28	0.22	0.001	0.17	0.062	0.11	30.2
No.12	0.79	0.28	0.23	0.11	1.59	0.24	0.001	0.39	0.014	0.354	20.7
No.13	1.55	0.79	0.323	0.04	0.74	0.34	0.001	1.42	0.041	0.51	44.9
No.14	1.58	0.81	0.329	0.04	0.55	0.35	0.001	1.48	0.042	0.513	45.8
No.15	0.58	0.35	0.227	0.07	0.61	0.18	0.001	0.075	0.008	0.603	4.6
No.16	1.15	0.63	0.345	0.04	0.49	0.18	0.001	0.69	0.023	0.548	31.2
No.17	1.12	0.45	0.383	0.27	3.46	0.28	0.001	0.53	0.022	0.402	25.4
No.18	1.15	0.5	0.33	0.02	0.34	0.3	0.001	0.62	0.022	0.435	29.6
No.19	1.83	0.3	0.825	0.1	1.44	0.18	0.004	0.11	0.034	0.164	28.5
No.20	0.97	0.69	0.325	0.02	0.59	0.11	0.001	0.67	0.021	0.711	35.9
No.21	1.11	0.57	0.356	0.02	0.39	0.23	0.001	0.86	0.021	0.514	28.3
No.22	1.2	0.43	0.527	0.04	0.43	0.084	0.001	0.8	0.031	0.358	45.5
No.23	1.32	0.55	0.406	0.02	0.19	0.23	0.001	0.48	0.027	0.417	33.6
No.24	0.69	0.26	0.194	0.28	2.43	0.22	0.002	0.4	0.012	0.377	20.8
No.25	0.76	0.22	0.302	0.25	1.57	0.12	0.001	0.25	0.027	0.289	58.2
No.26	0.62	0.32	0.299	0.18	1.57	0.15	0.001	0.48	0.009	0.516	8
No.27	0.78	0.13	0.173	0.06	0.22	0.033	0.001	0.087	0.05	0.167	76.9
No.28	0.6	0.3	0.284	0.15	2.49	0.26	0.001	0.39	0.01	0.5	12.8
No.29	1.03	0.49	0.314	0.07	0.26	0.23	0.001	0.76	0.021	0.476	33.1
No.30	0.88	0.42	0.264	0.06	0.54	0.19	0.001	0.65	0.018	0.477	33.5
No.31	0.32	0.11	0.154	1.4	5.05	0.047	0.001	0.18	0.006	0.344	12.8
No.32	0.63	0.3	0.305	0.17	3.2	0.16	0.001	0.39	0.01	0.476	14.7
No.33	1.13	0.57	0.369	0.03	0.26	0.22	0.001	0.81	0.021	0.504	28.4
No.36	2.43	0.25	0.367	0.12	0.81	0.29	0.002	0.2	0.042	0.103	20.6

造滓成分 = SiO₂+ Al₂O₃+ CaO+ MgO+ Na₂O+ K₂O

表4 砂鉄の化学組成分析結果 (%)

試料 No.	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O
No.34	27.3	0.14	12.1	25.4	39.4	13.1	2.34	1.02	0.89	1.64
No.35	19.8	0.14	12.1	14.7	49.2	11.4	3.47	1.99	1.26	1.64

表5 砂鉄の化学組成分析結果(続き) (%)

試料 No.	TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	C	化合水	V
No.34	1.19	0.18	0.362	1.53	2.27	0.074
No.35	1.5	0.16	0.128	1.53	2.27 -	0.060 -

表6 メタルの化学成分分析結果 (%)

試料 No.	C	Si	Mn	P	S	Cu	Ni	Co	Al	V
No.1	1.95	0.059	0.002	0.087	0.04	0.007	0.008	0.016	0.027	0.002
No.10	2.68	0.003	<0.001	0.017	0.072	0.003	0.005	0.012	0.002	0.001

表7 メタルの化学成分分析結果 (続き) (%)

試料 No.	Ti	Ca	Mg
No.1	0.006	0.013	0.003
No.10	0.001	0.002	<0.001

表8 X線回折測定結果

試料 No	同定鉱物種と回折強度
No.2	W 中、F 弱、U 弱
No.3	Q 強、F 弱、M 弱
No.4	M 強、H 強
No.5	Q 強、An 強
No.6	F 中、W 中、U 弱
No.7	M 強、W 弱
No.8	Q 強、M 中、F 弱
No.9	Q 強、F 弱
No.10	M 中、F 弱
No.11	F 強、W 中、U 中
No.12	F 強、W 中、M 中
No.13	F 中、W 弱
No.14	F 強
No.15	M 強、W 弱
No.16	F 中、W 弱、M 弱
No.17	M 強、W 弱
No.18	F 中、W 中
No.19	F 中、W 中、U 弱
No.20	F 強、W 中
No.21	F 中、W 中
No.22	F 強、W 弱
No.23	F 強、W 中
No.24	M 中、F 中、W 中
No.25	Q 中、M 中、Go 弱、F 弱
No.26	M 中、W 中、F 弱、Go 弱
No.27	Q 強、W 弱
No.28	W 強、M 強、F 中、Go 弱
No.29	F 中、W 中
No.30	F 中、W 中
No.31	M 強、W 弱、F 弱、Go 弱
No.32	M 中、W 弱、F 弱、Go 弱
No.33	M 中、F 弱、W 弱
No.36	W 中、F 弱、M 弱

鉱物記号：

W (ウスタイト：Wustite-FeO)、M (マグネタイト：Magnetite-Fe₃O₄)、
 F (ファイヤライト：Fayalite-Fe₂SiO₄)、Go (ゲーサイト：Goethite- α FeOOH)、
 H (ヘマタイト：Hematite-Fe₂O₃)、U (ウルボスピネル：Ulvospinel-2FeO · TiO₂)、
 Il (イルメナイト：Ilmenite-FeO · TiO₂)、Ps (シユードブルッカイト：Pseudobrookite-FeO · TiO₂)、
 An (アノーサイト：Anorthite-CaOAl₂O₃2SiO₂)、Q,Cb (シリカ、クリストパライト：Quartz- SiO₂)、
 Fs (フェロシャーマカイト：Ferroschermakite-Ca₂FeAl₂ (Si₆Al₂) O₂₂(OH)₂)、
 Ag (アウガイト：Augite-Ca (Fe,Mg) Si₂O₆)、Mu (ムライト：Mullite-3Al₂O₃ · 2SiO₂)

表9 個別試料のまとめ

試料番号	遺構名	出土場所	出土層位	種類	始発原料	鉄滓の生成工程
No.1	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄塊系遺物	Cが1.95%の鉄を含む	
No.2	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.3	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.4	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	-
No.5	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.6	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.7	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.8	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.9	1号工房跡	1号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.10	1号工房跡	1号製鉄炉	ベルト炉内	鉄塊系遺物	砂鉄	-
No.11	1号工房跡	1号製鉄炉	炉内2	鉄滓	砂鉄	製錬
No.12	1号工房跡	3号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.13	1号工房跡	3号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.14	1号工房跡	3号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.15	2号工房跡	4号製鉄炉	記載なし	鉄滓	砂鉄	-
No.16	2号工房跡	4号製鉄炉	記載なし	鉄滓	砂鉄	製錬
No.17	2号工房跡	4号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.18	2号工房跡	4号製鉄炉	記載なし	鉄滓	砂鉄	製錬
No.19	2号工房跡	5号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.20	2号工房跡	5号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.21	2号工房跡	5号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.22	2号工房跡	5号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.23	1号廃滓場	③ E	②層下位	鉄滓	砂鉄	製錬
No.24	1号廃滓場	③ EW 間	① b 層	鉄滓	砂鉄	-
No.25	1号廃滓場	③ E	②層下位	鉄滓	砂鉄	製錬
No.26	1号廃滓場	③ W	① b ~②層上位	鉄滓	砂鉄	-
No.27	1号廃滓場	③ W	① b ~②層上位	鉄滓	砂鉄	製錬
No.28	1号廃滓場	③ W	① b ~②層	鉄滓	砂鉄	-
No.29	1号廃滓場	③ W	① b ~②層	鉄滓	砂鉄	製錬
No.30	1号廃滓場	③ W	① b ~②層	鉄滓	砂鉄	製錬
No.31	1号廃滓場	③ W	②層中位	鉄滓	砂鉄	-
No.32	1号廃滓場	④	②層中位	鉄滓	砂鉄	-
No.33	1号廃滓場	③ W	②層下	鉄滓	砂鉄	製錬
No.34	1号工房跡	3号製鉄炉	炉内	砂鉄	TiO ₂ が1.19%の砂鉄	
No.35	深堀トレンチ	基本層序B	砂	砂鉄	TiO ₂ が1.50%の砂鉄	
No.36	Ⅱ遺跡27号竪穴建物跡	北	埋土上~中位	鉄滓	砂鉄	製錬

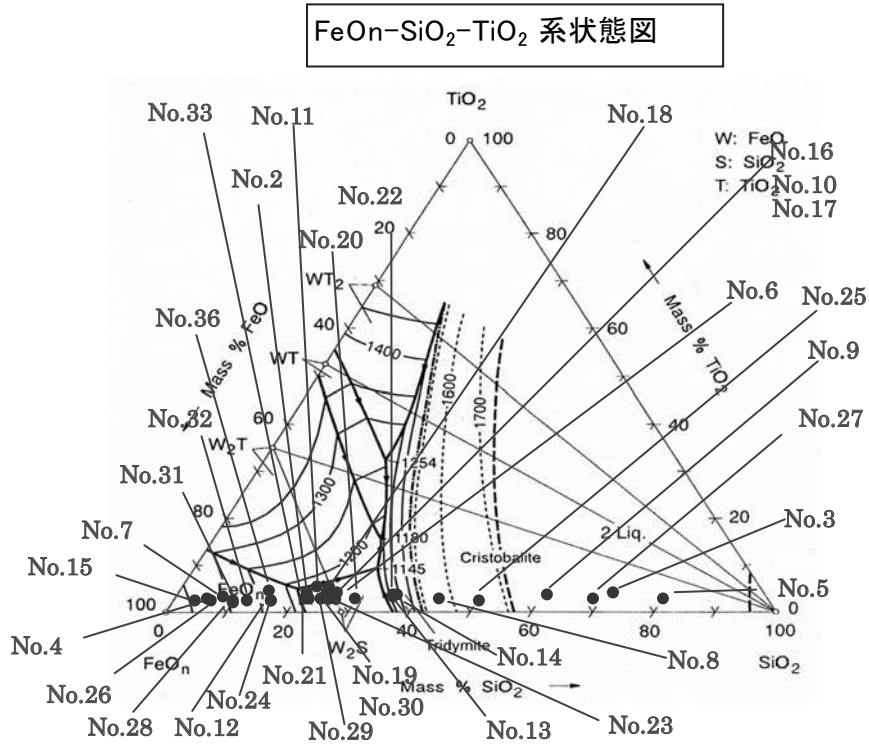


図1 間木戸Ⅱ・V遺跡鉄滓のFeO-SiO₂-TiO₂系鉄滓の平衡状態図

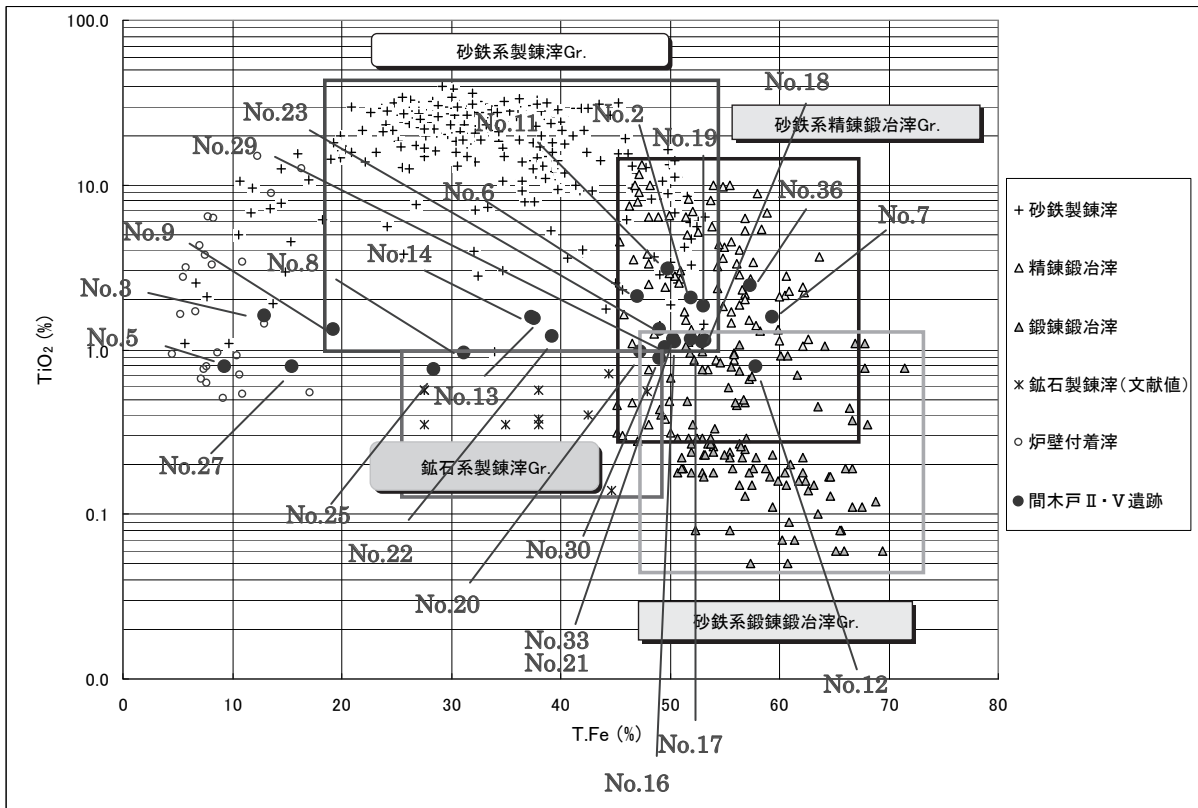


図2 間木戸Ⅱ・V鉄滓の製錬滓、精錬滓、及び鍛錬滓の分類

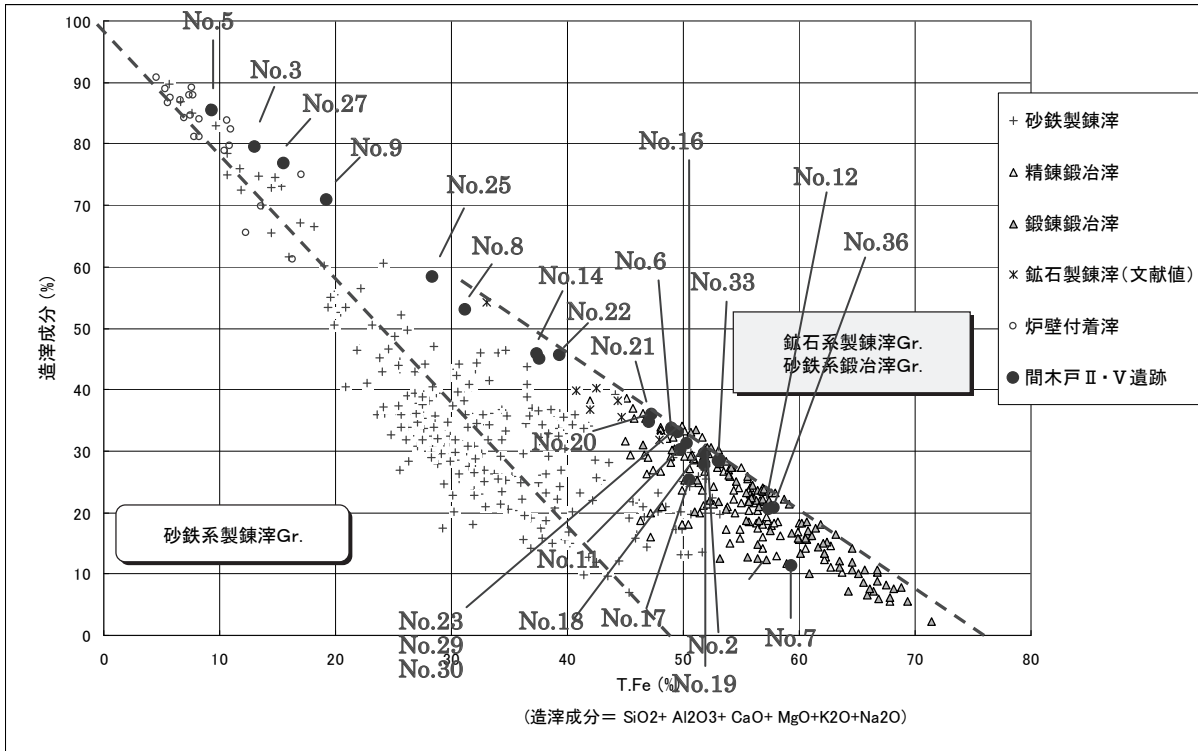
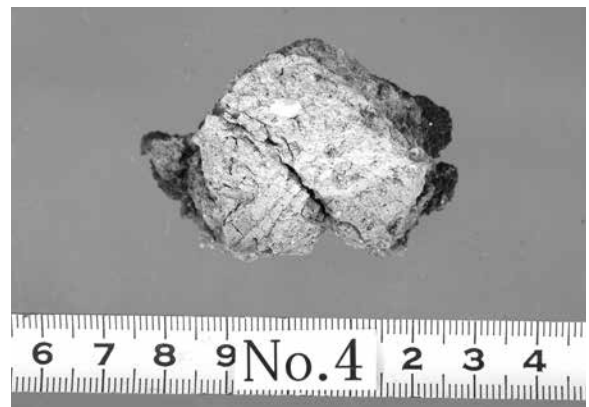
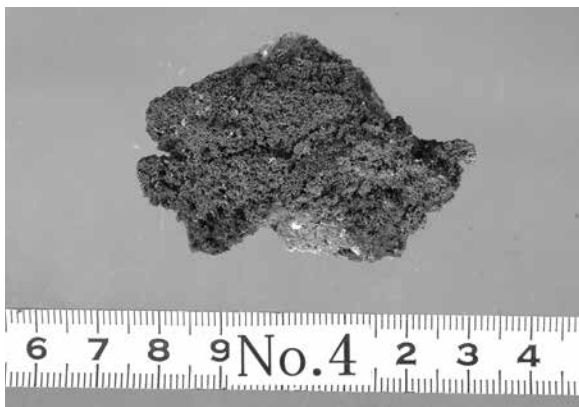
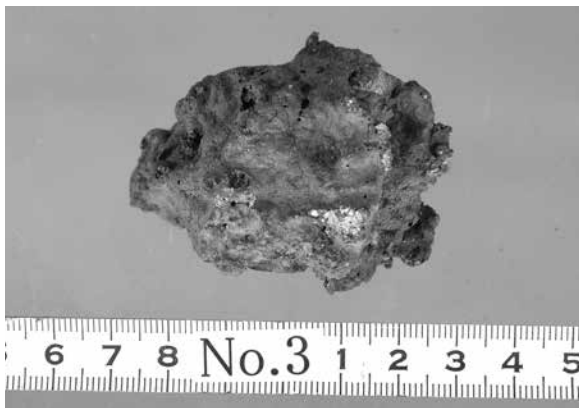
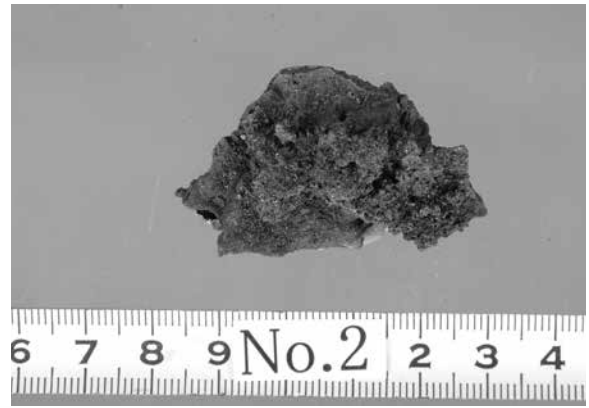
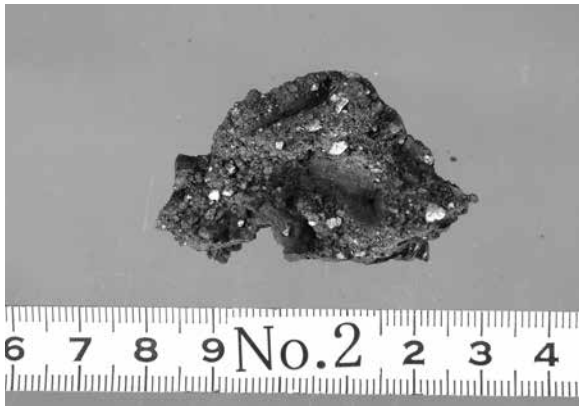
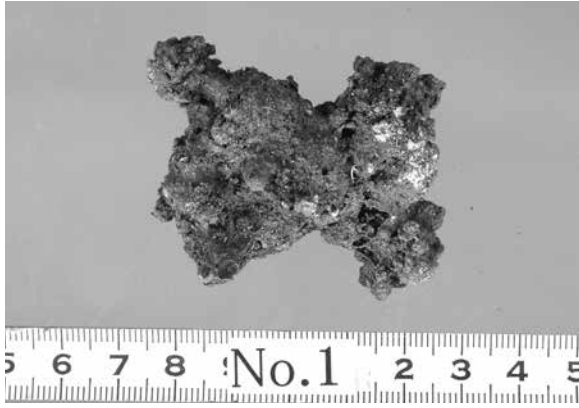
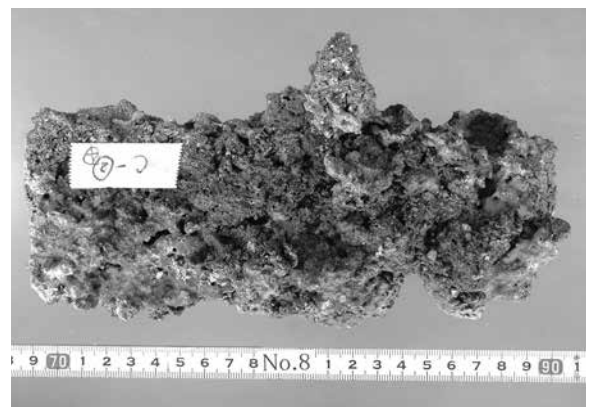
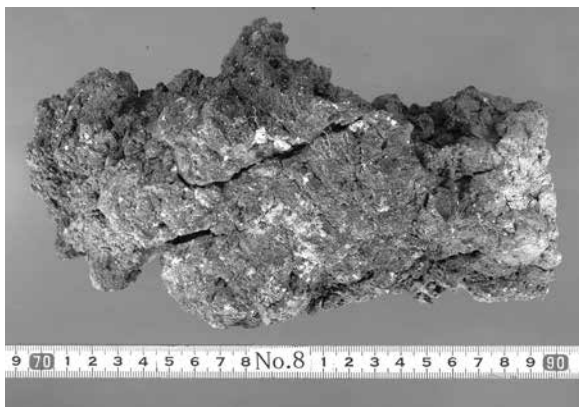
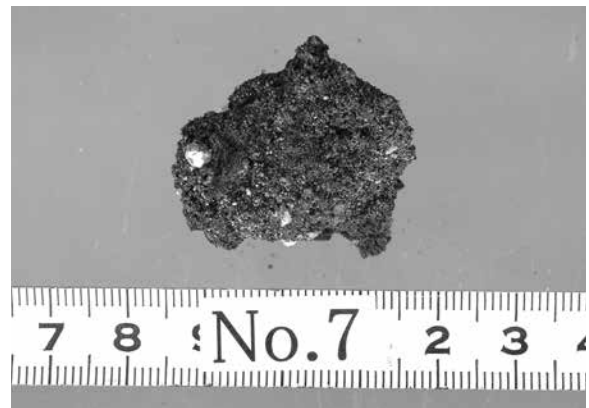
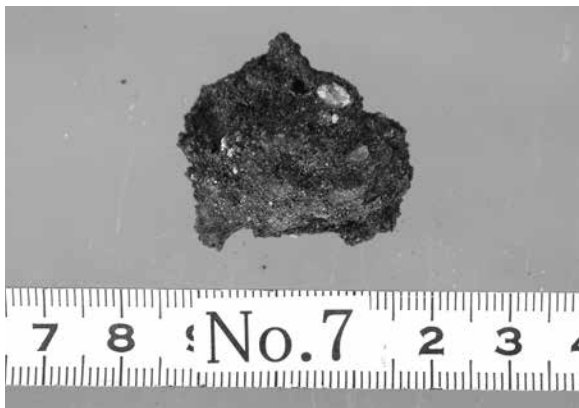
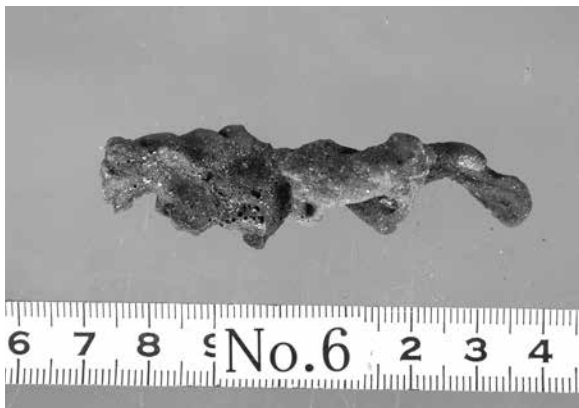
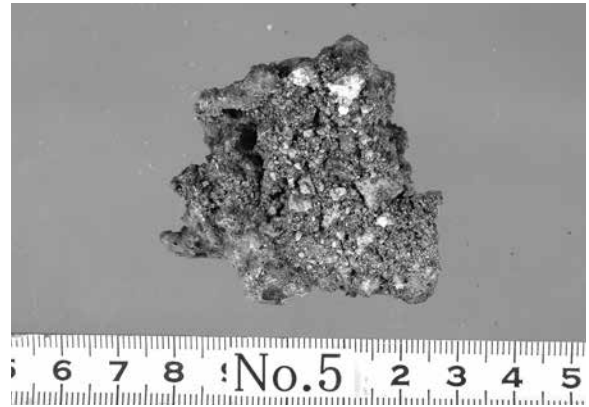
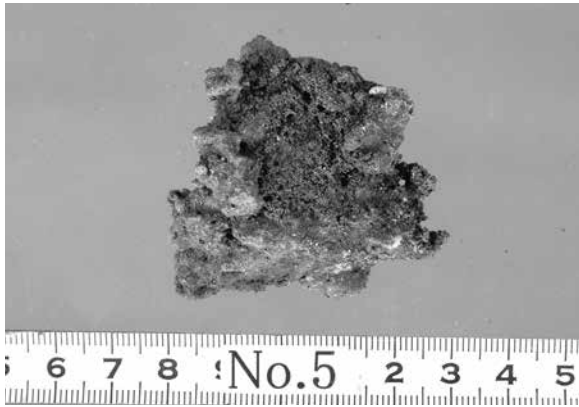


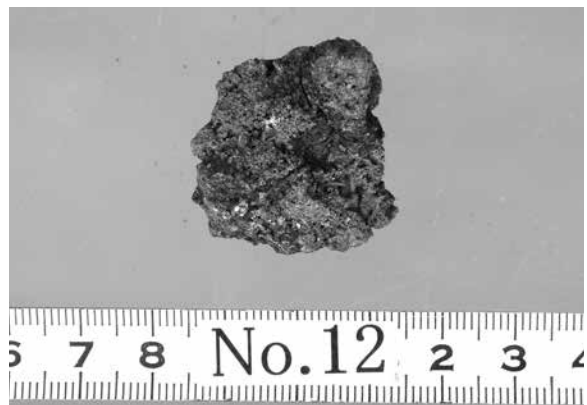
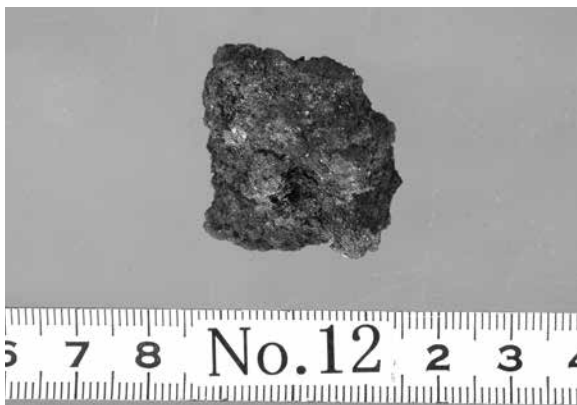
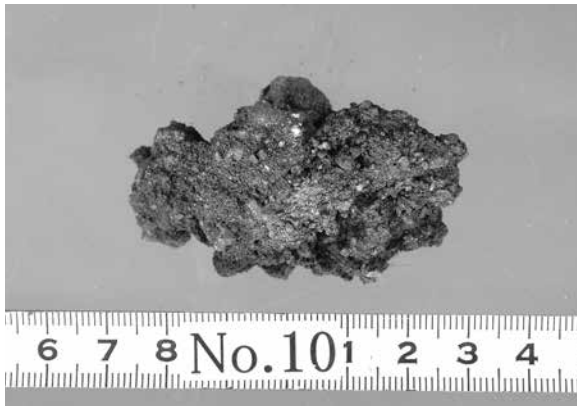
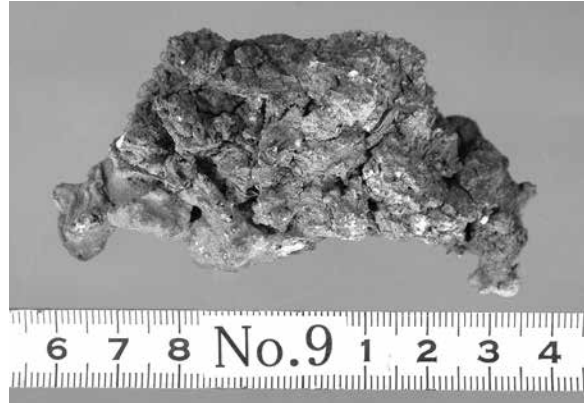
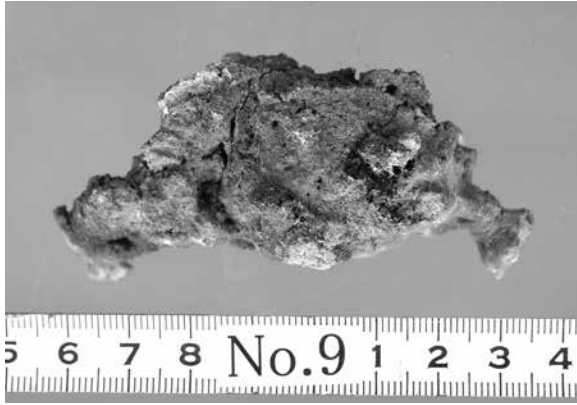
図3 間木戸Ⅱ・Ⅴ鉄滓の製錬滓と鍛冶滓の分類



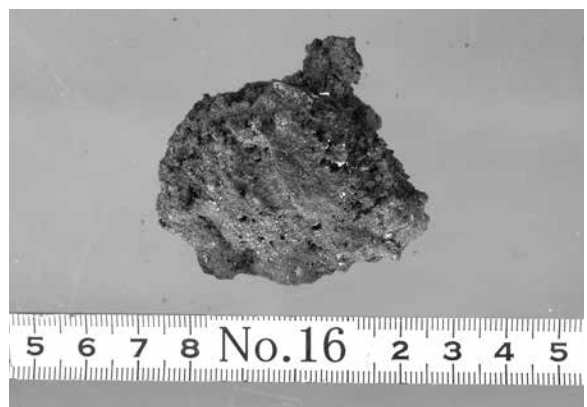
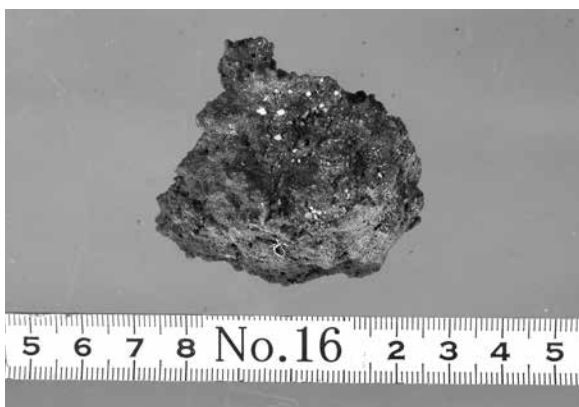
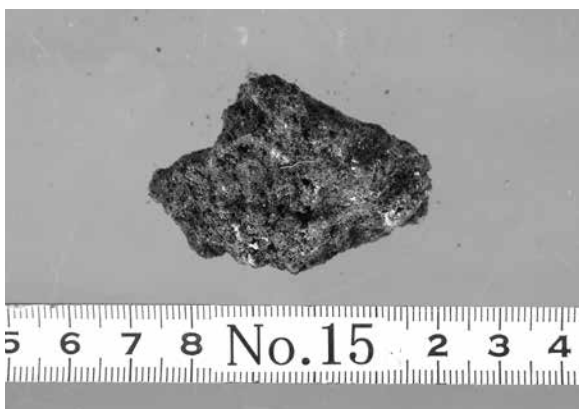
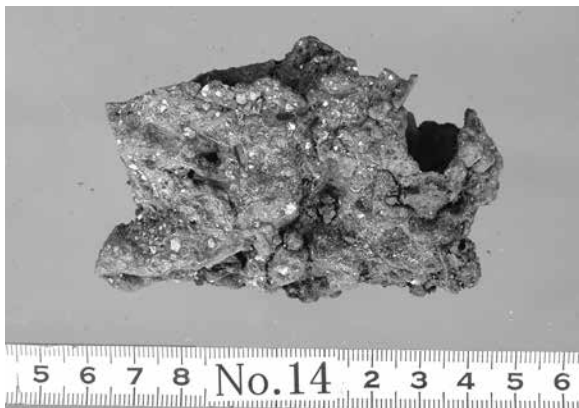
外観写真1



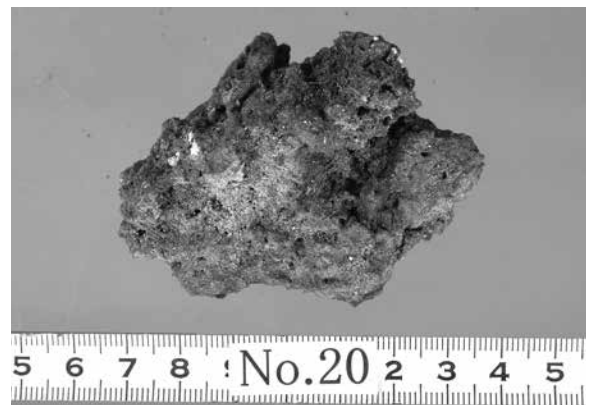
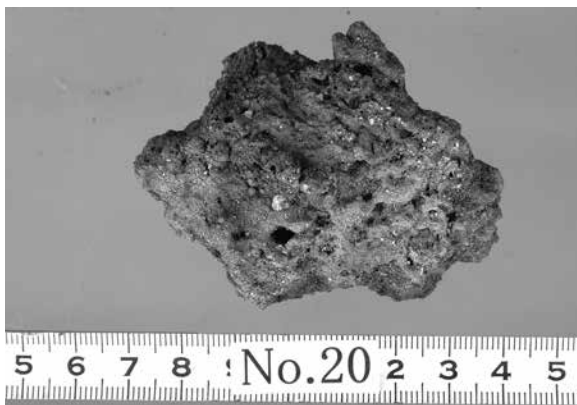
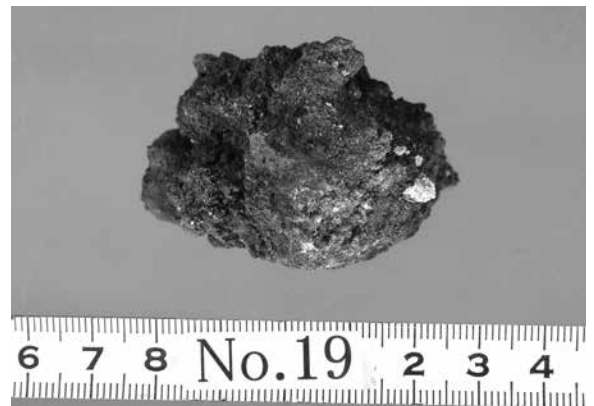
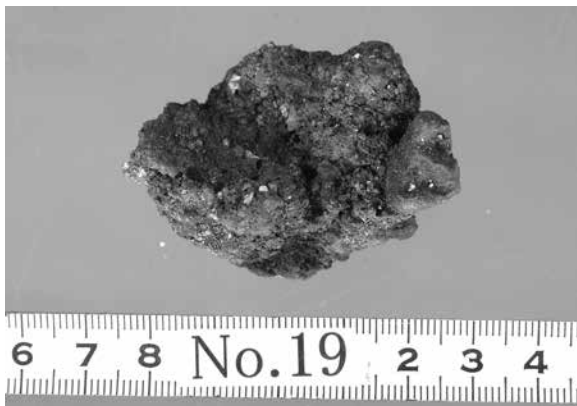
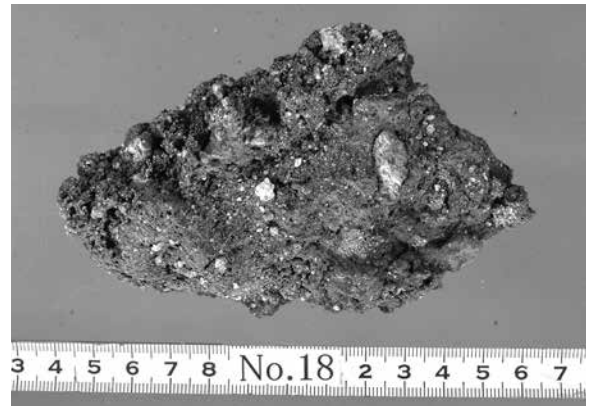
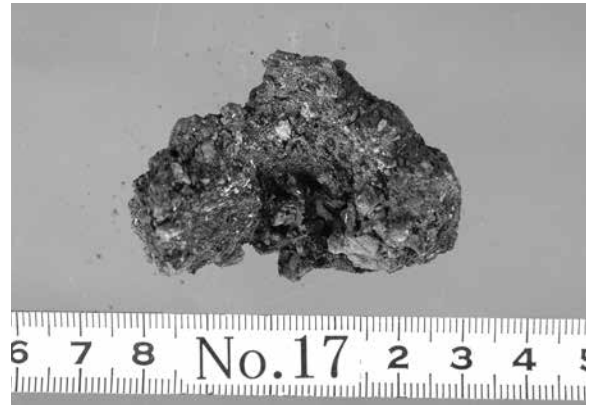
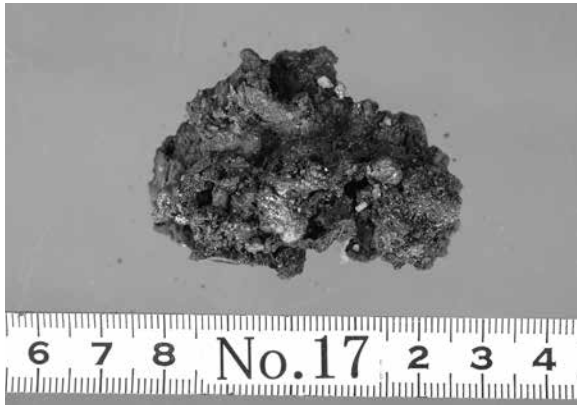
外觀写真2



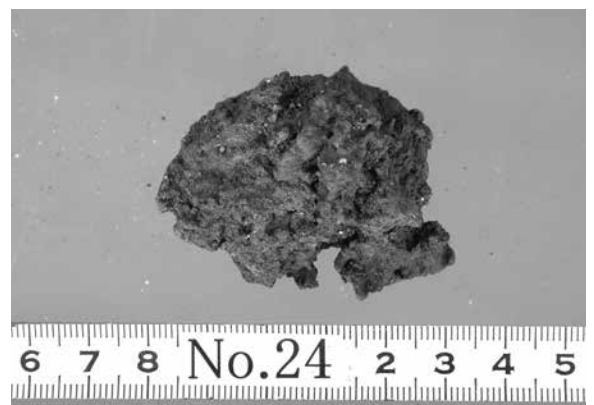
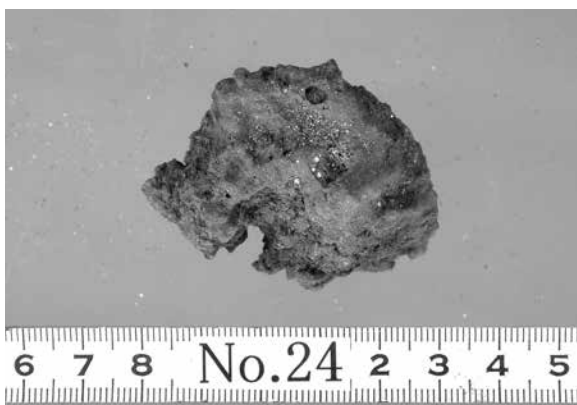
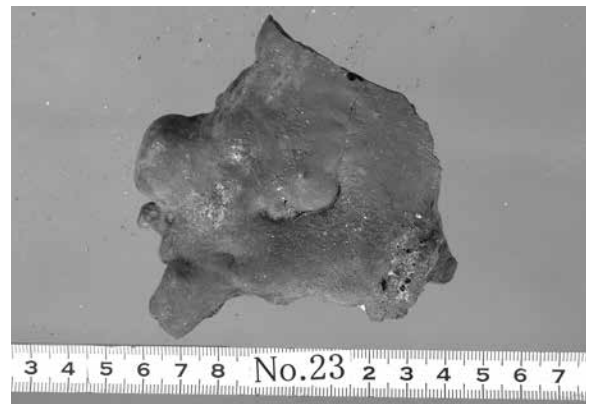
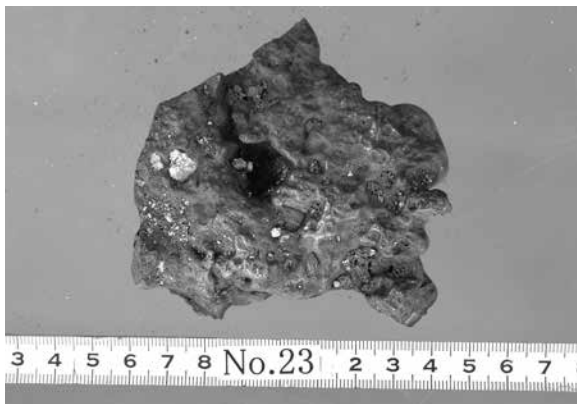
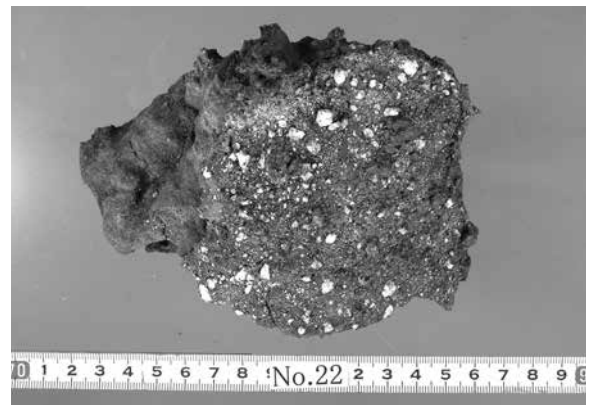
外観写真3



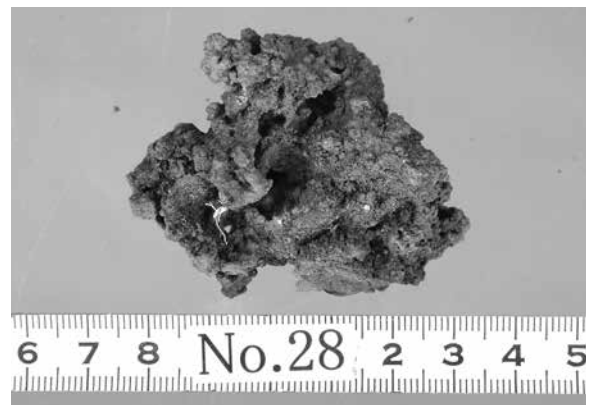
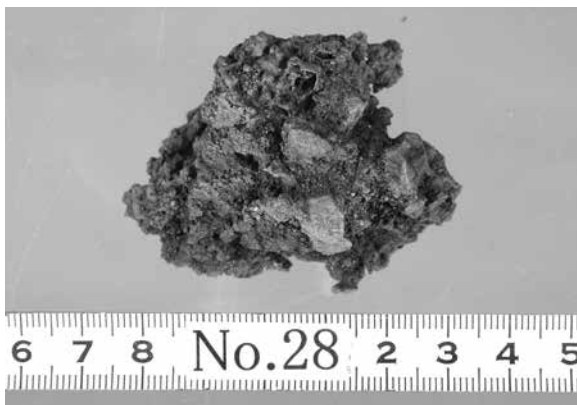
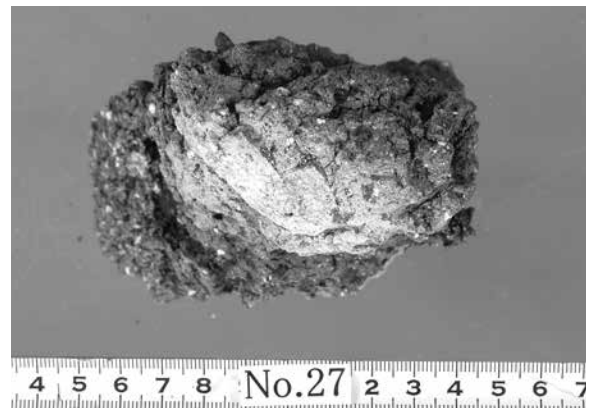
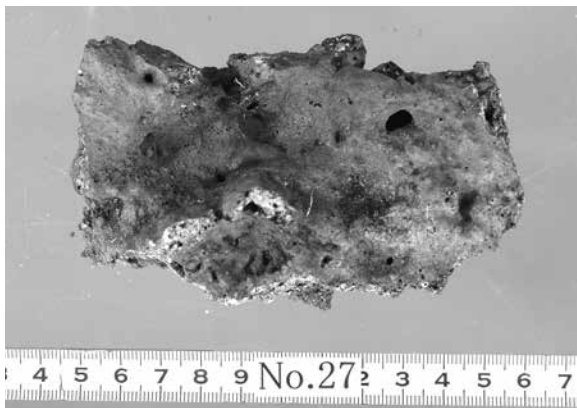
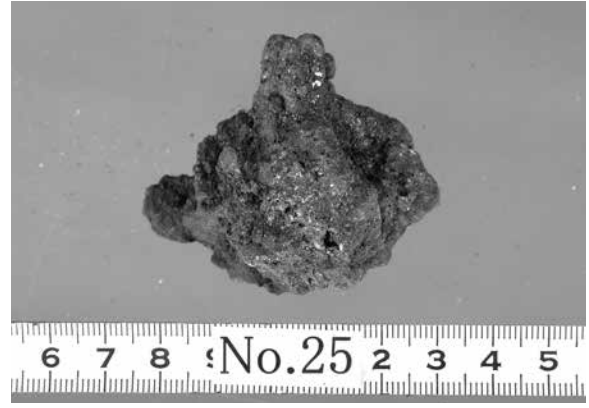
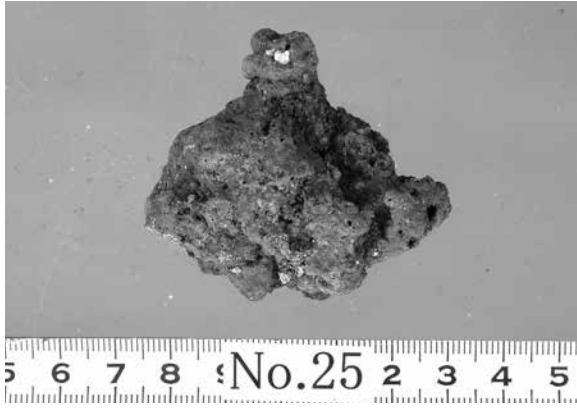
外觀写真 4



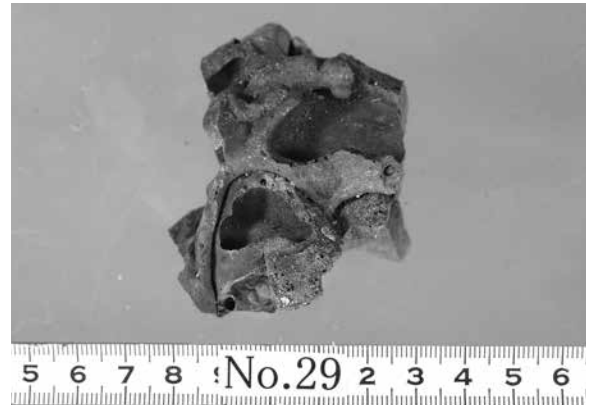
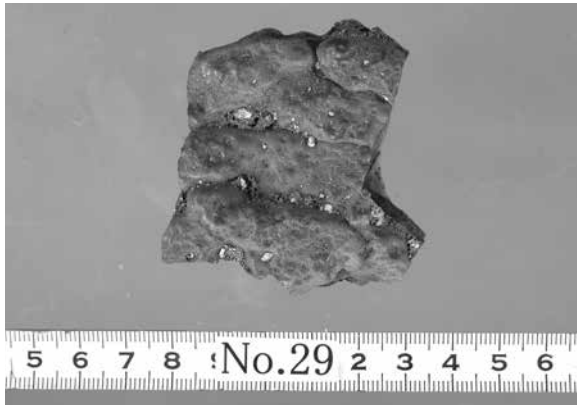
外観写真5



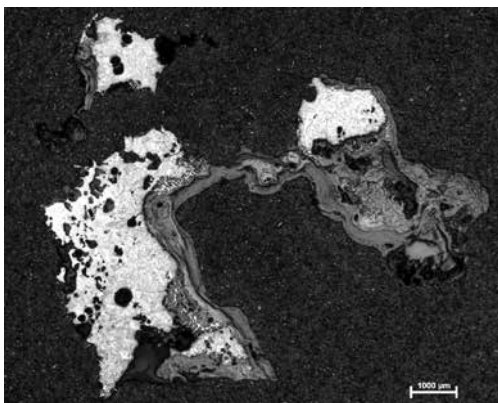
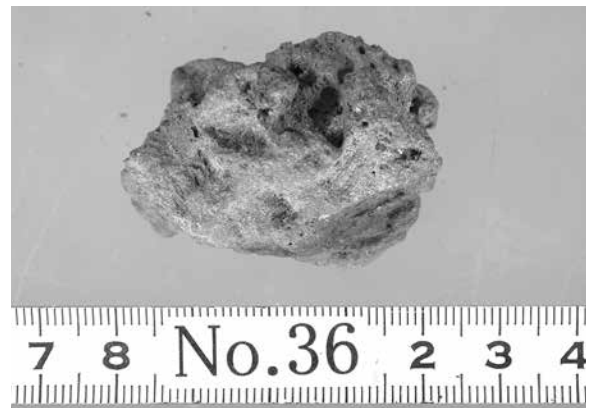
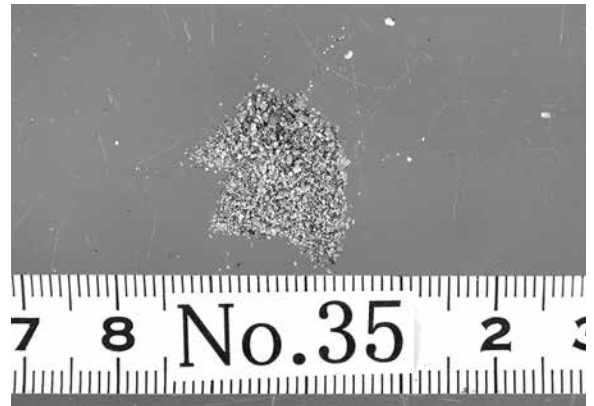
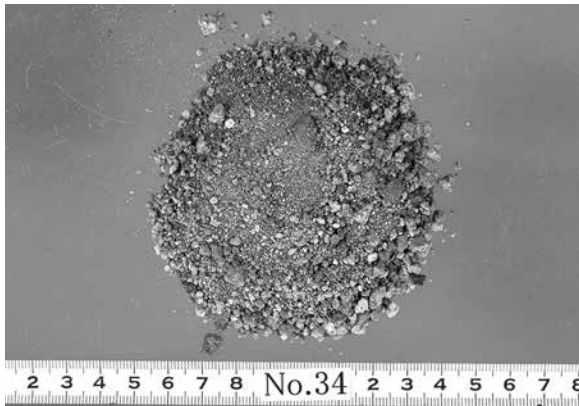
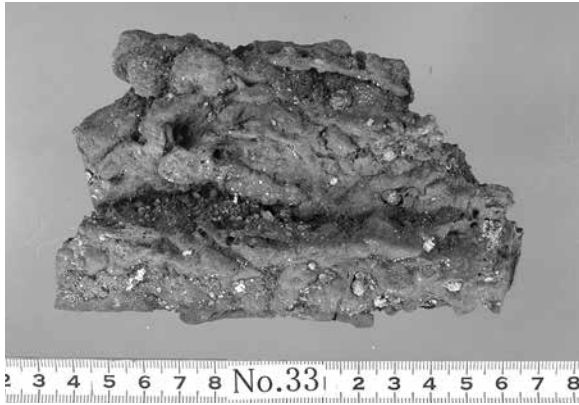
外觀写真6



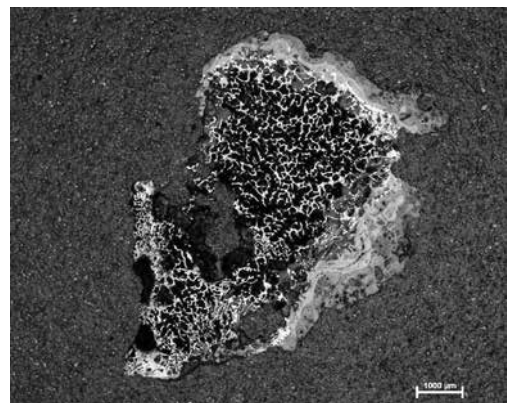
外観写真7



外觀写真 8

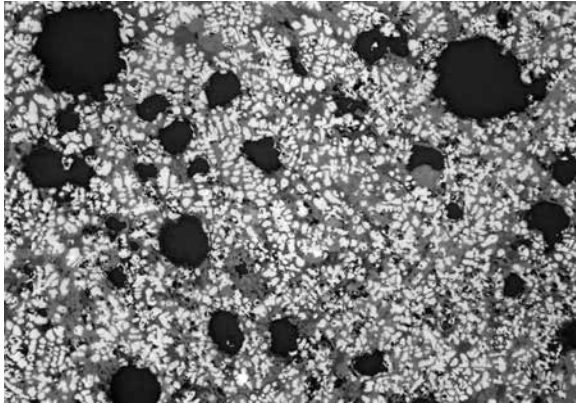


金属マクロ組織写真 No.1 × 10

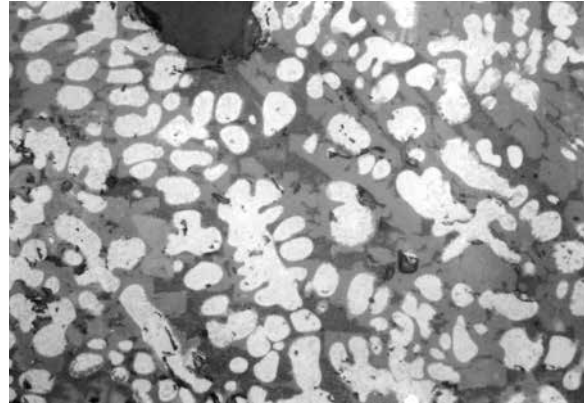


金属マクロ組織写真 No.10-2 × 10

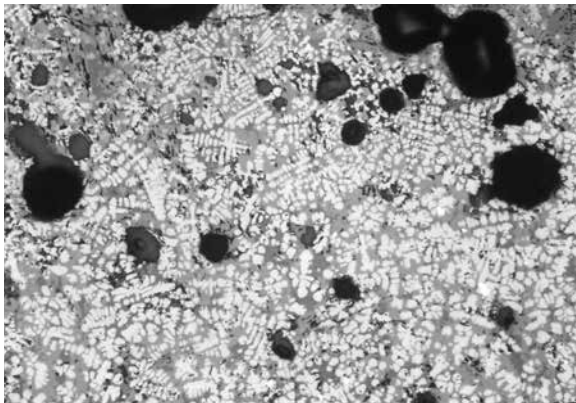
外観写真9・金属マクロ写真



鉄滓顕微鏡組織写真 No.2-1 × 100



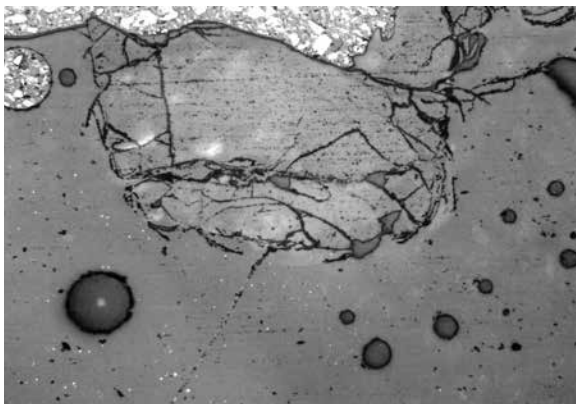
鉄滓顕微鏡組織写真 No.2-1 × 400



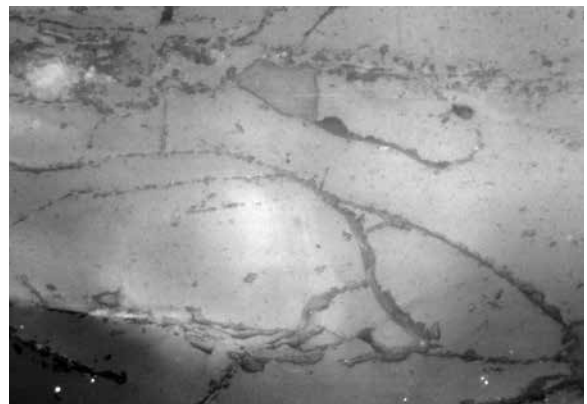
鉄滓顕微鏡組織写真 No.2-2 × 100



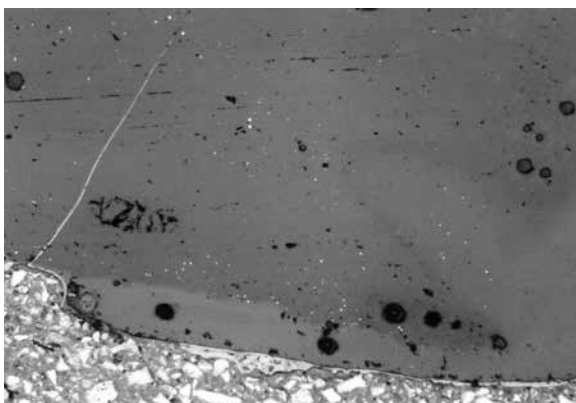
鉄滓顕微鏡組織写真 No.2-2 × 400



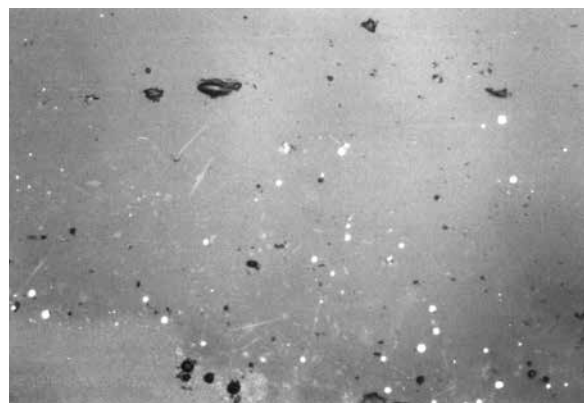
鉄滓顕微鏡組織写真 No.3-1 × 100



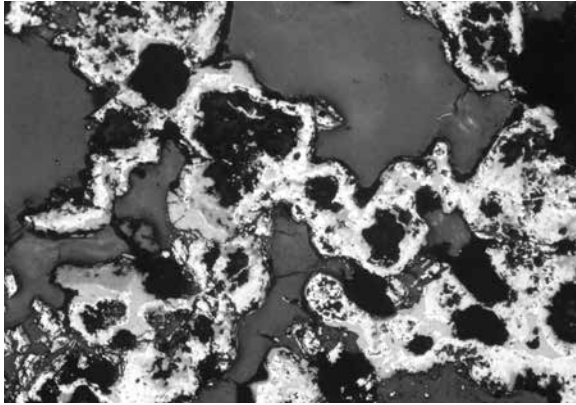
鉄滓顕微鏡組織写真 No.3-1 × 400



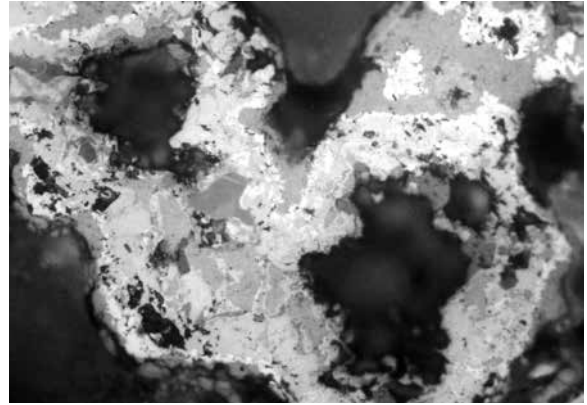
鉄滓顕微鏡組織写真 No.3-2 × 100



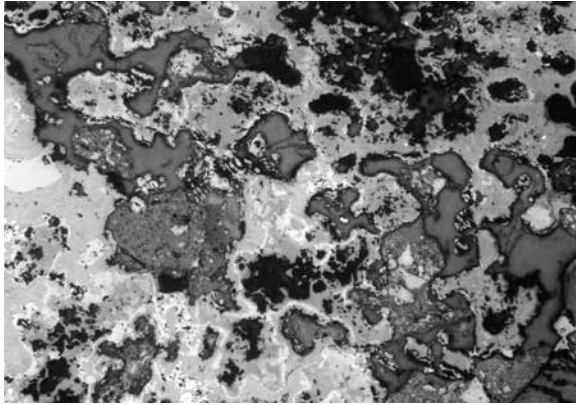
鉄滓顕微鏡組織写真 No.3-2 × 400



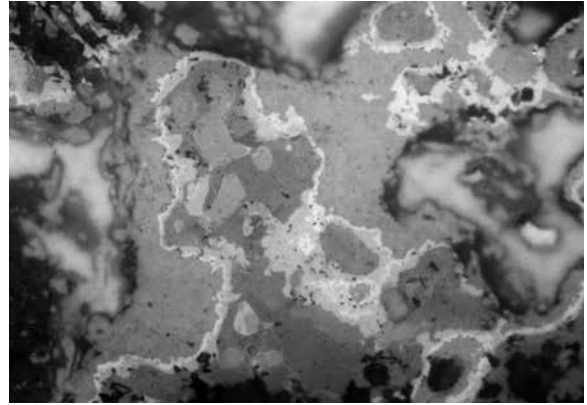
鉄滓顕微鏡組織写真 No.4-1 × 100



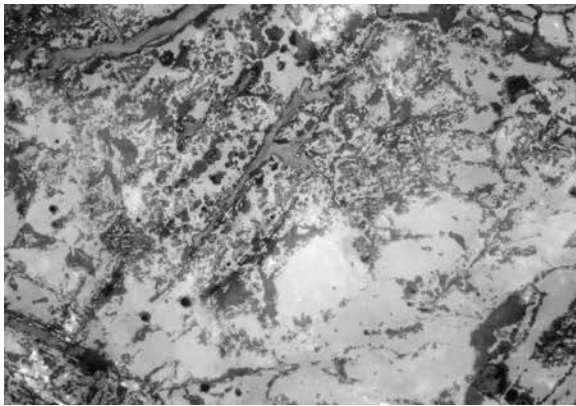
鉄滓顕微鏡組織写真 No.4-1 × 400



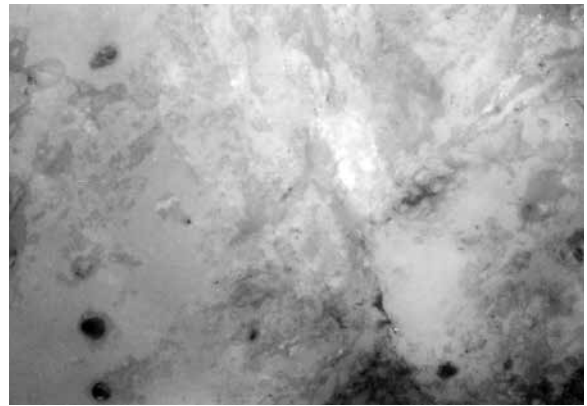
鉄滓顕微鏡組織写真 No.4-2 × 100



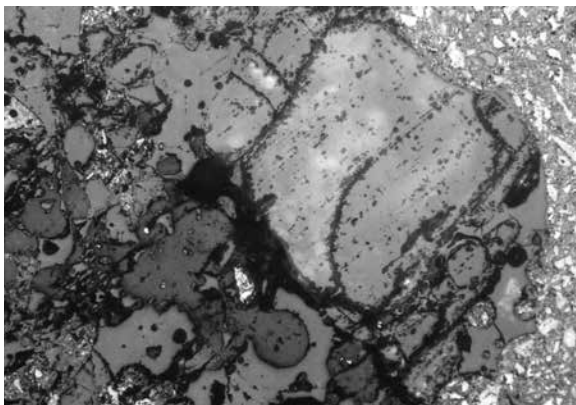
鉄滓顕微鏡組織写真 No.4-2 × 400



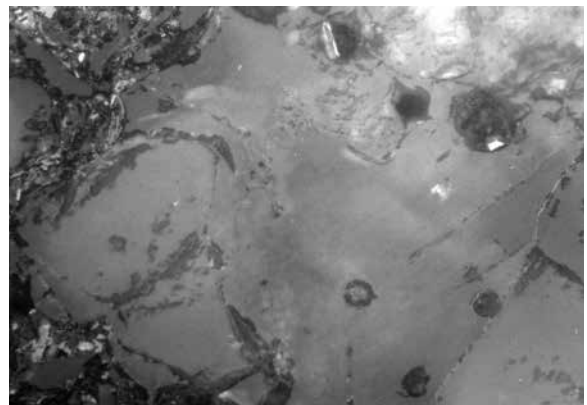
鉄滓顕微鏡組織写真 No.5-1 × 100



鉄滓顕微鏡組織写真 No.5-1 × 400



鉄滓顕微鏡組織写真 No.5-2 × 100

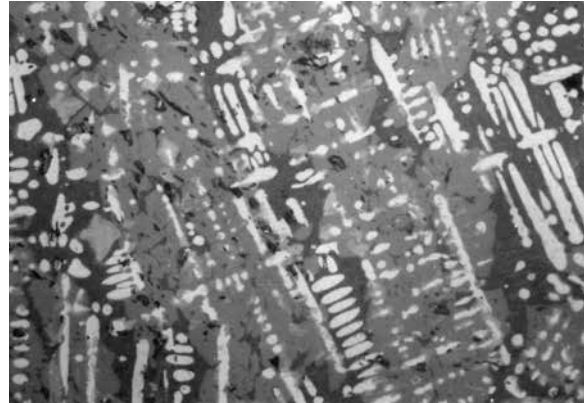


鉄滓顕微鏡組織写真 No.5-2 × 400

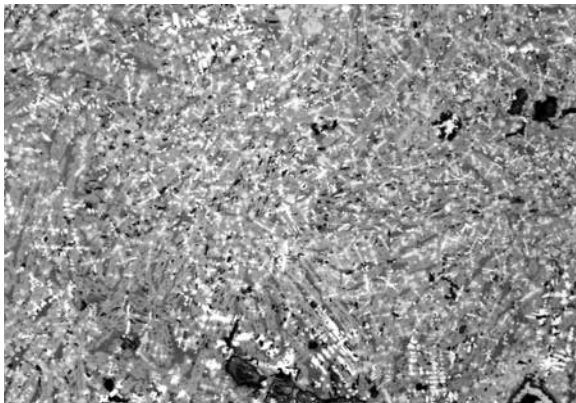
鉄滓顕微鏡組織写真 2



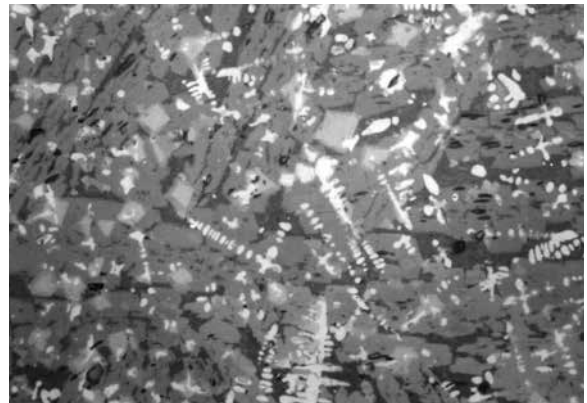
鉄滓顕微鏡組織写真 No.6-1 × 100



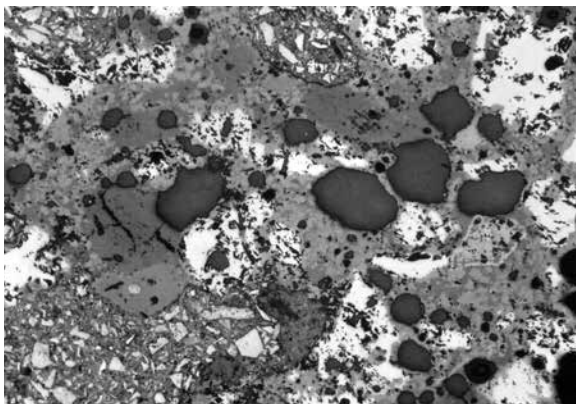
鉄滓顕微鏡組織写真 No.6-1 × 400



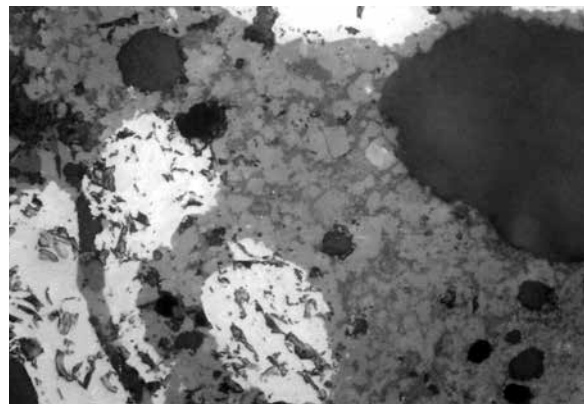
鉄滓顕微鏡組織写真 No.6-2 × 100



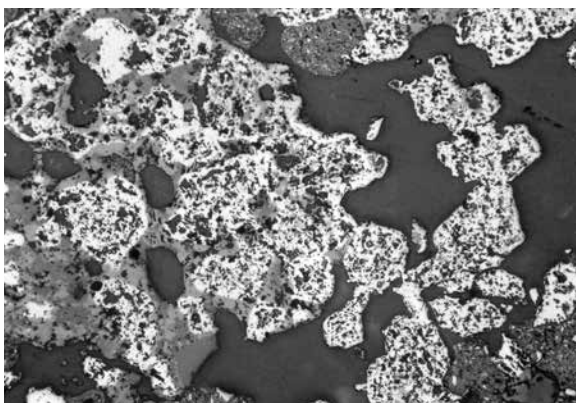
鉄滓顕微鏡組織写真 No.6-2 × 400



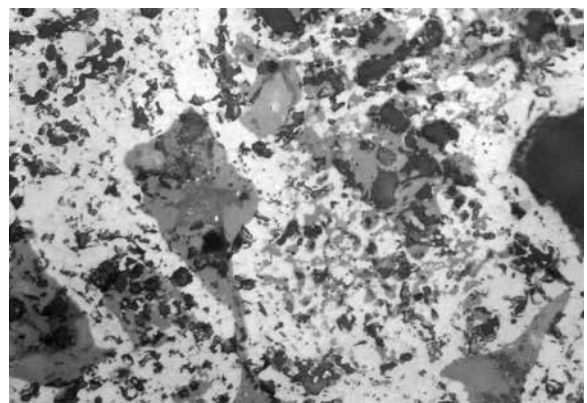
鉄滓顕微鏡組織写真 No.7-1 × 100



鉄滓顕微鏡組織写真 No.7-1 × 400

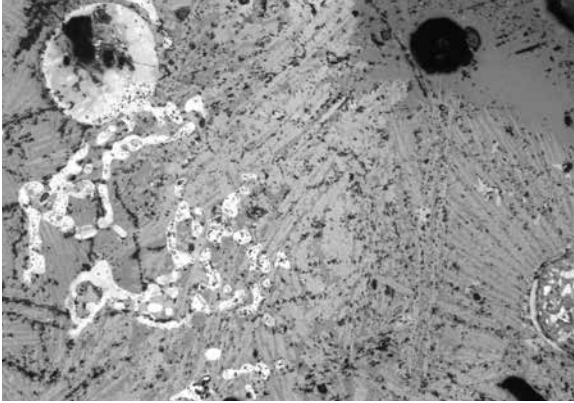


鉄滓顕微鏡組織写真 No.7-2 × 100

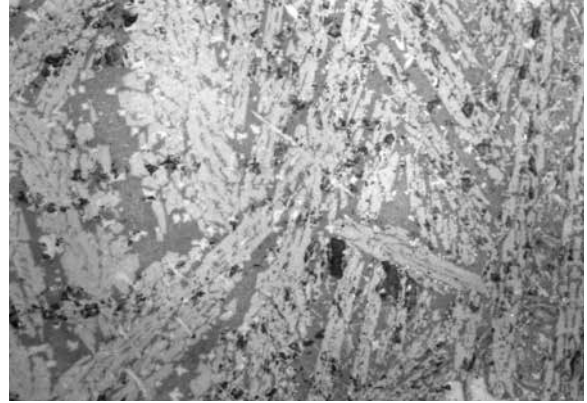


鉄滓顕微鏡組織写真 No.7-2 × 400

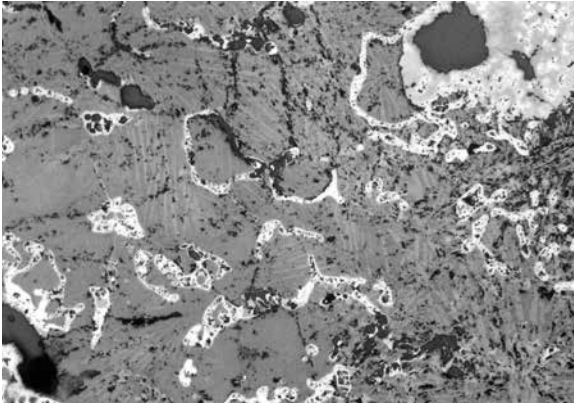
鉄滓顕微鏡組織写真 3



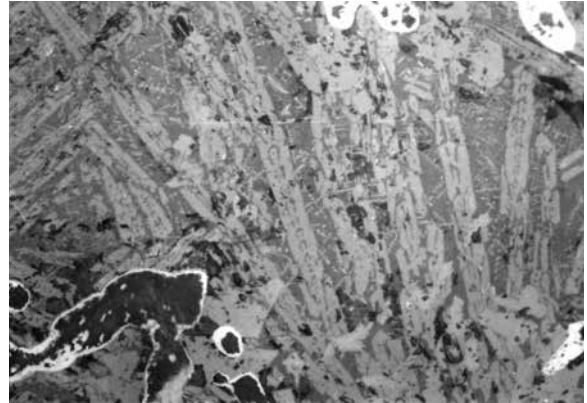
鉄滓顕微鏡組織写真 No.8-1 × 100



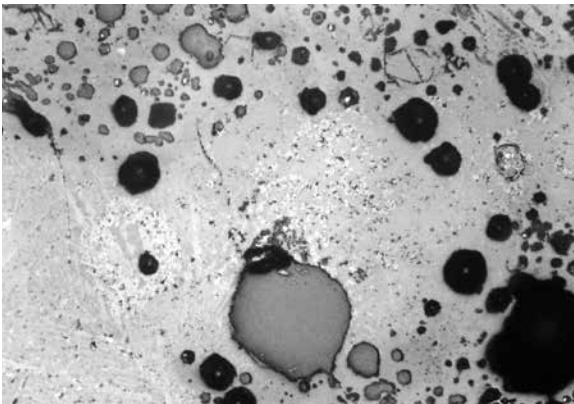
鉄滓顕微鏡組織写真 No.8-1 × 400



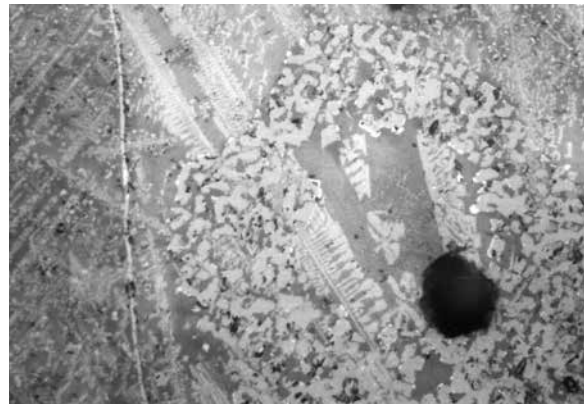
鉄滓顕微鏡組織写真 No.8-2 × 100



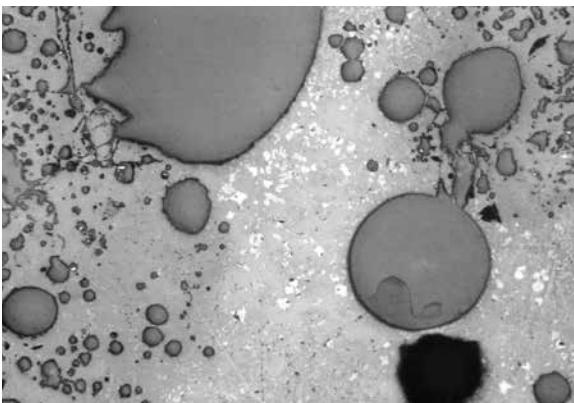
鉄滓顕微鏡組織写真 No.8-2 × 400



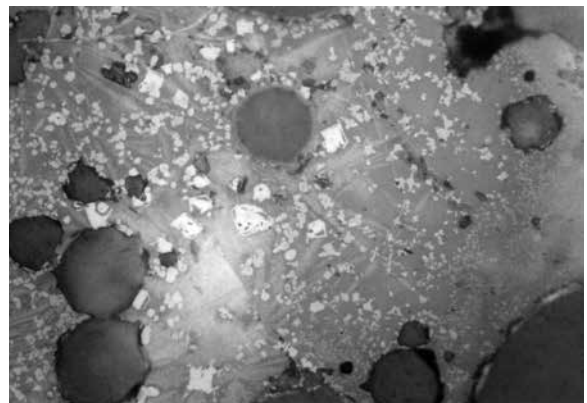
鉄滓顕微鏡組織写真 No.9-1 × 100



鉄滓顕微鏡組織写真 No.9-1 × 400

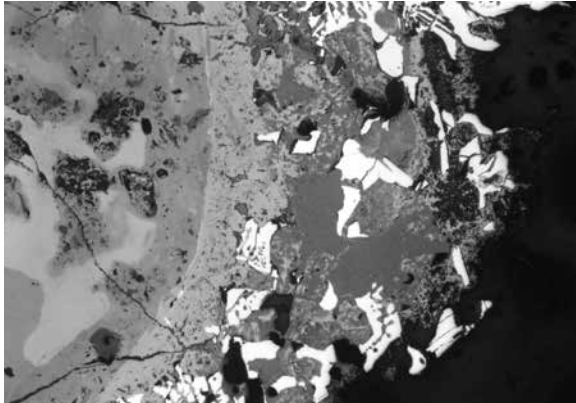


鉄滓顕微鏡組織写真 No.9-2 × 100

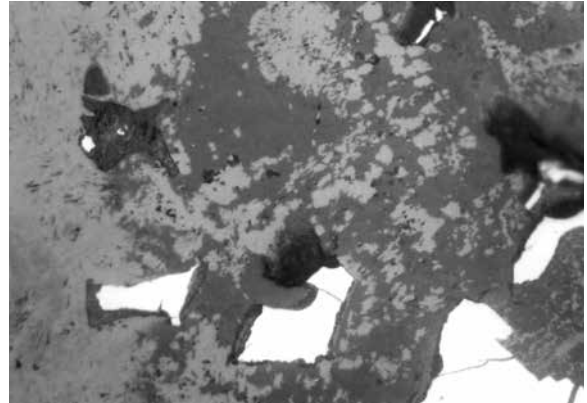


鉄滓顕微鏡組織写真 No.9-2 × 400

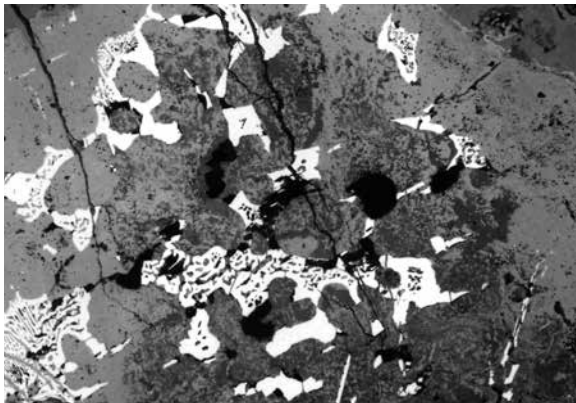
鉄滓顕微鏡組織写真 4



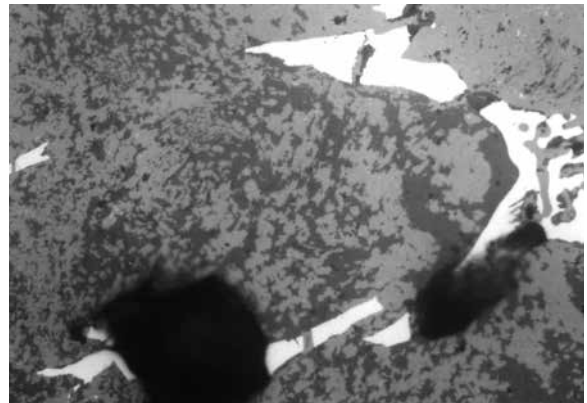
鉄滓頭微鏡組織写真 No.10-1 × 100



鉄滓頭微鏡組織写真 No.10-1 × 400



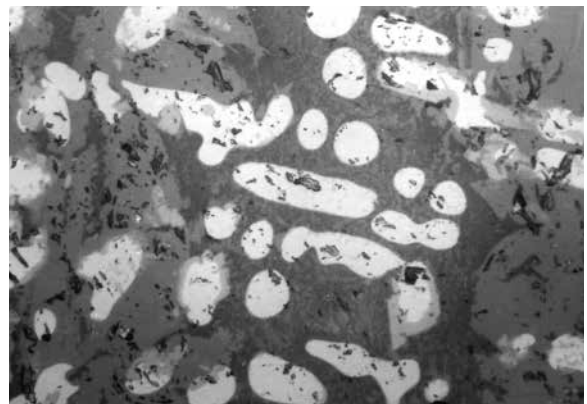
鉄滓頭微鏡組織写真 No.10-2 × 100



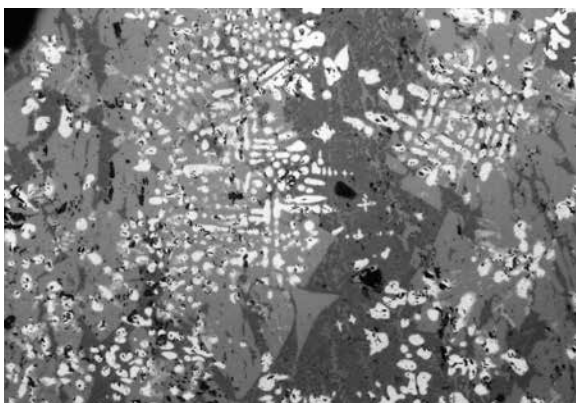
鉄滓頭微鏡組織写真 No.10-2 × 400



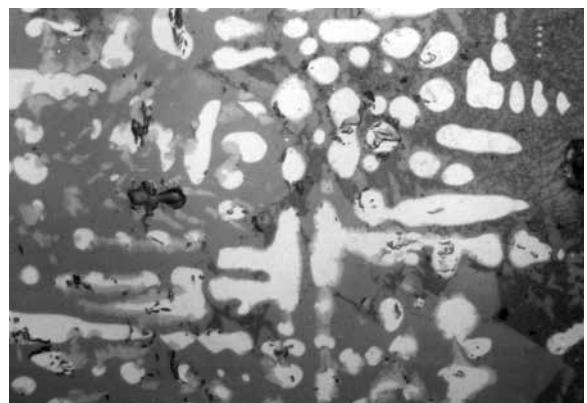
鉄滓頭微鏡組織写真 No.11-1 × 100



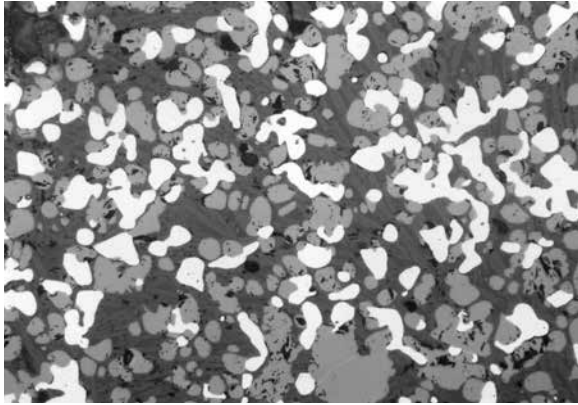
鉄滓頭微鏡組織写真 No.11-1 × 400



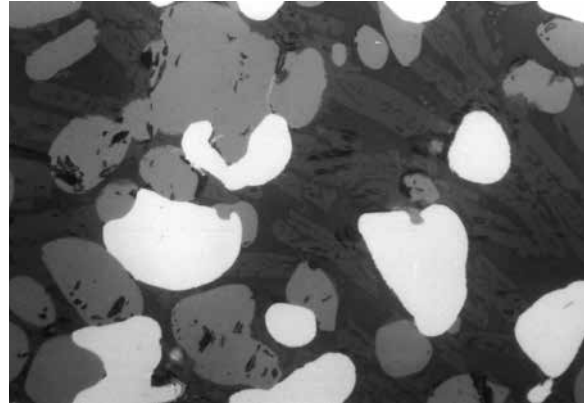
鉄滓頭微鏡組織写真 No.11-2 × 100



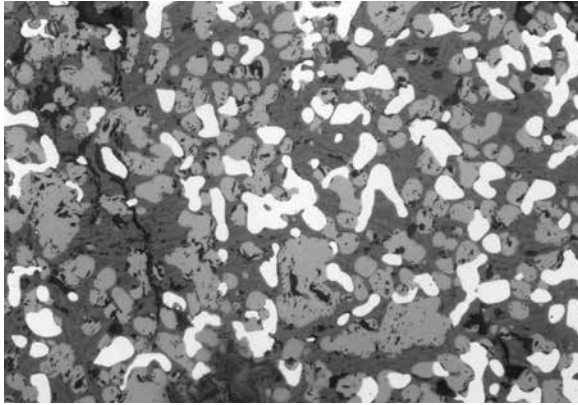
鉄滓頭微鏡組織写真 No.11-2 × 400



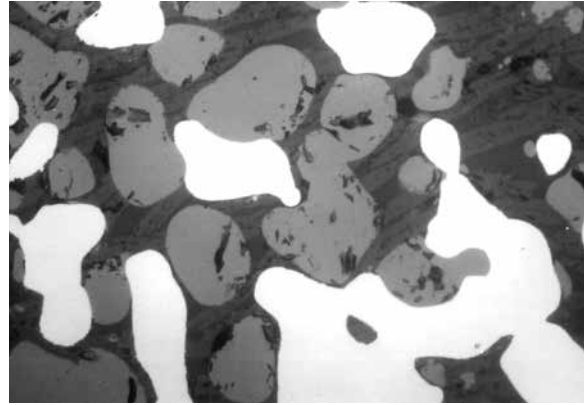
鉄滓頭微鏡組織写真 No.12-1 × 100



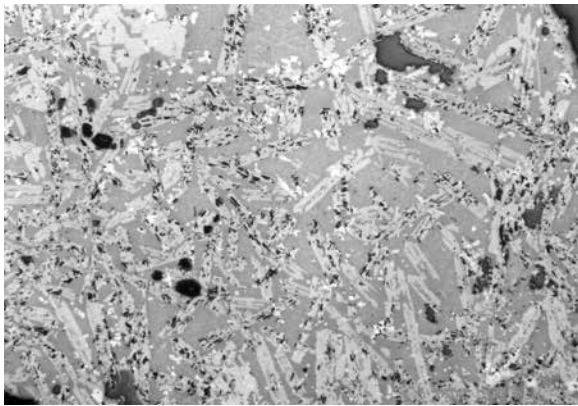
鉄滓頭微鏡組織写真 No.12-1 × 400



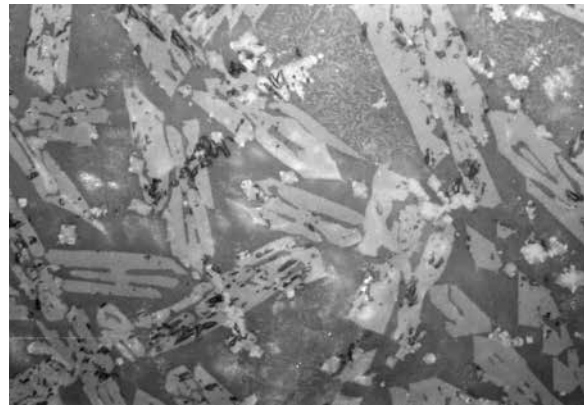
鉄滓頭微鏡組織写真 No.12-2 × 100



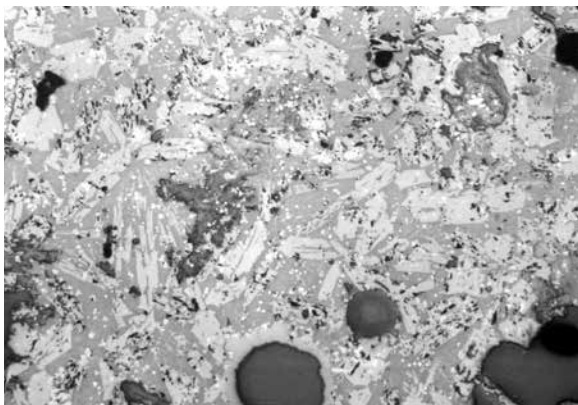
鉄滓頭微鏡組織写真 No.12-2 × 400



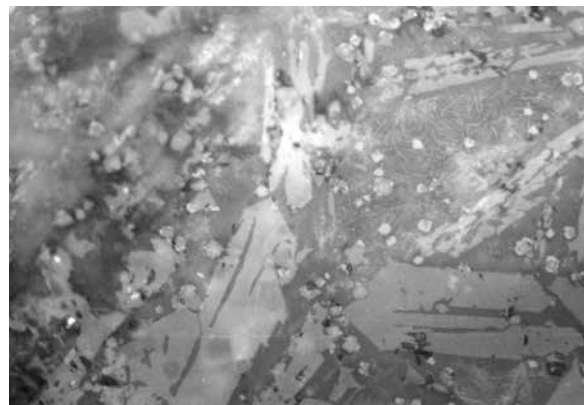
鉄滓頭微鏡組織写真 No.13-1 × 100



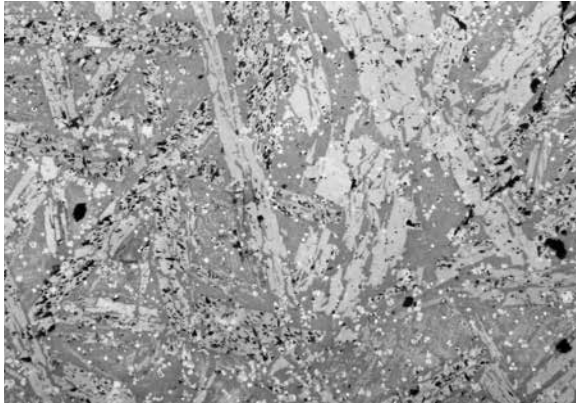
鉄滓頭微鏡組織写真 No.13-1 × 400



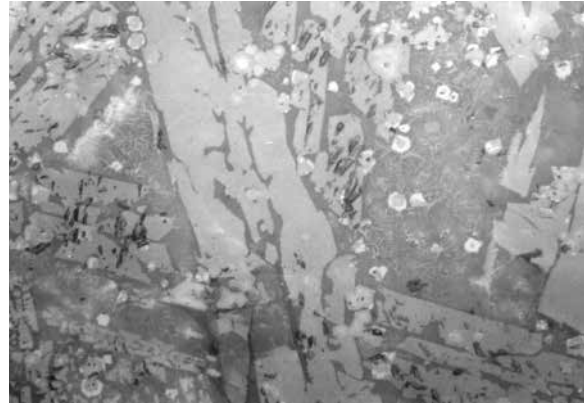
鉄滓頭微鏡組織写真 No.13-2 × 100



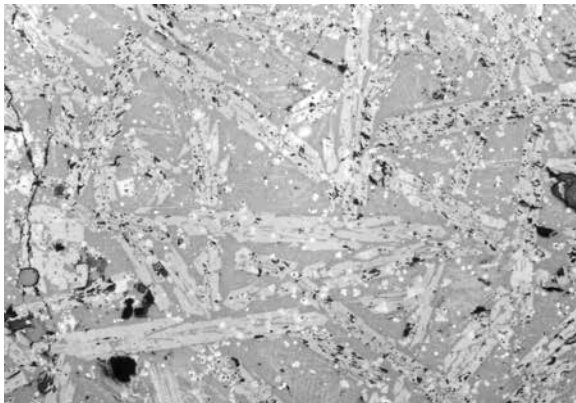
鉄滓頭微鏡組織写真 No.13-2 × 400



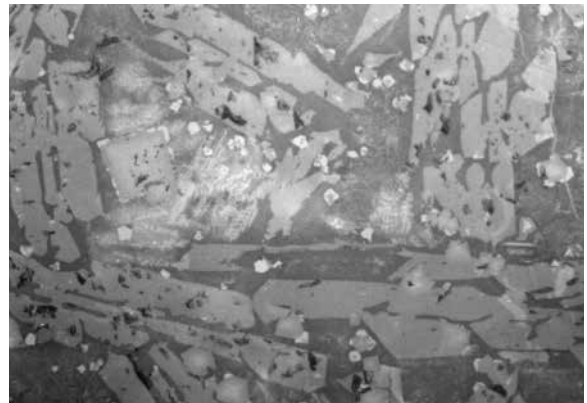
鉄滓頭微鏡組織写真 No.14-1 × 100



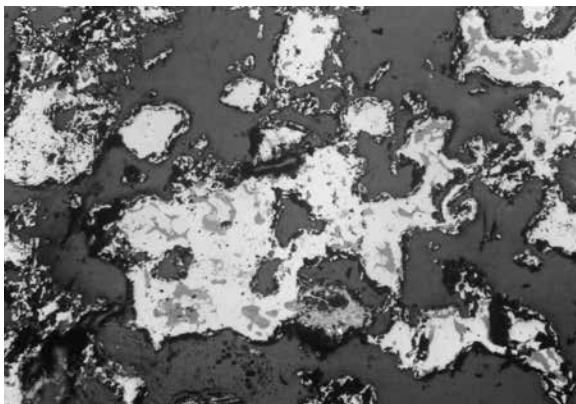
鉄滓頭微鏡組織写真 No.14-1 × 400



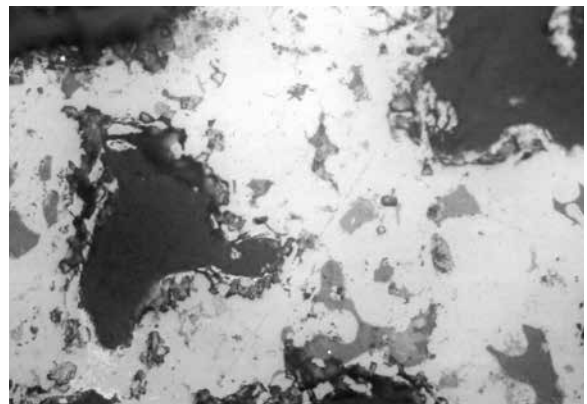
鉄滓頭微鏡組織写真 No.14-2 × 100



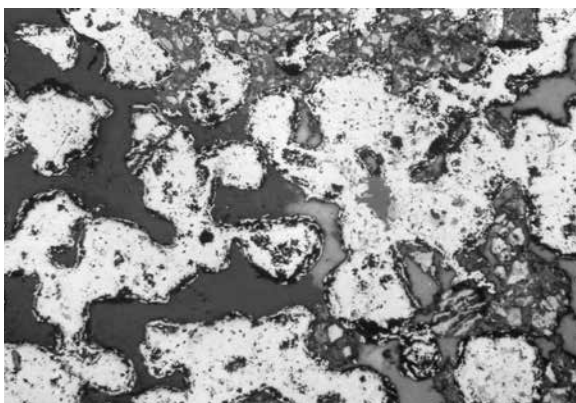
鉄滓頭微鏡組織写真 No.14-2 × 400



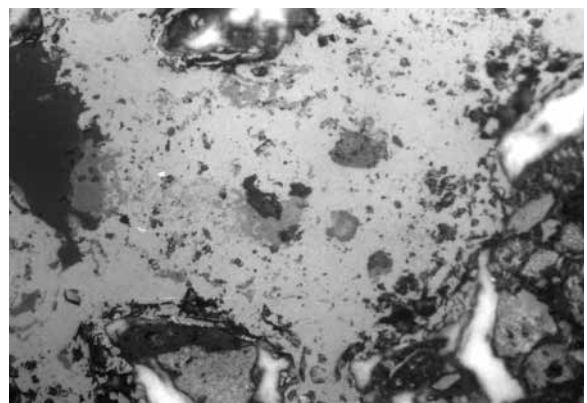
鉄滓頭微鏡組織写真 No.15-1 × 100



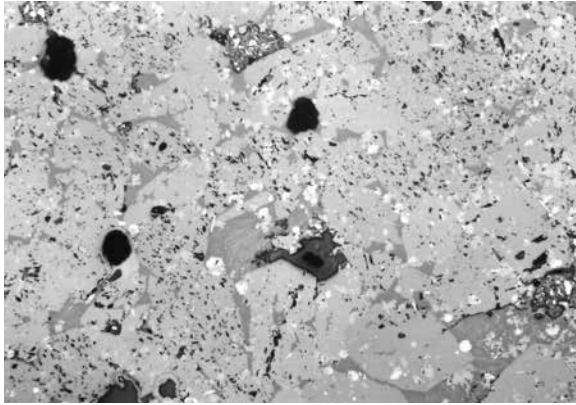
鉄滓頭微鏡組織写真 No.15-1 × 400



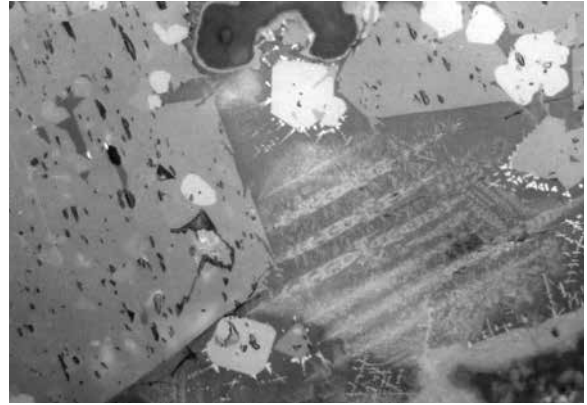
鉄滓頭微鏡組織写真 No.15-2 × 100



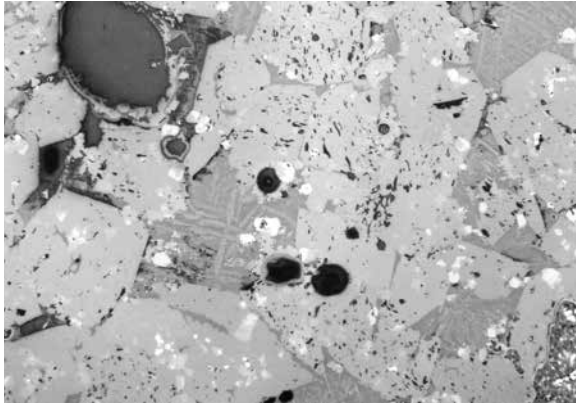
鉄滓頭微鏡組織写真 No.15-2 × 400



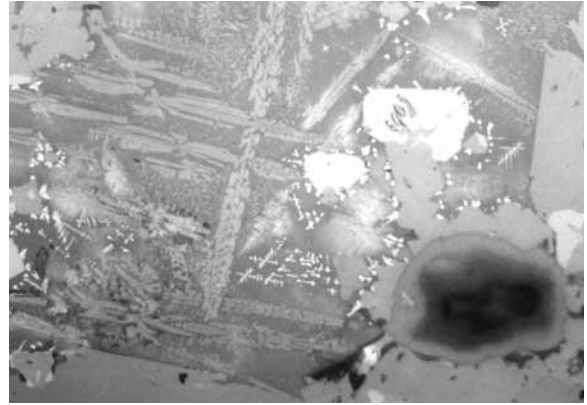
鉄滓頭微鏡組織写真 No.16-1 × 100



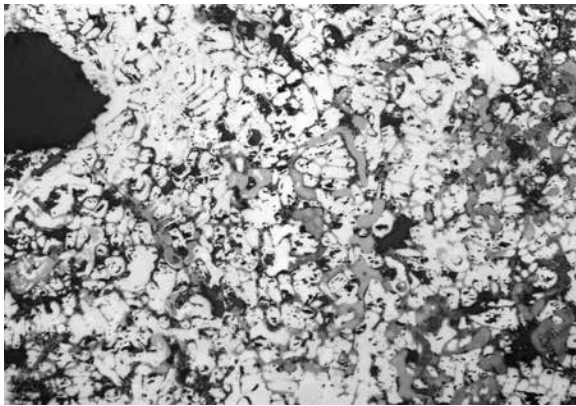
鉄滓頭微鏡組織写真 No.16-1 × 400



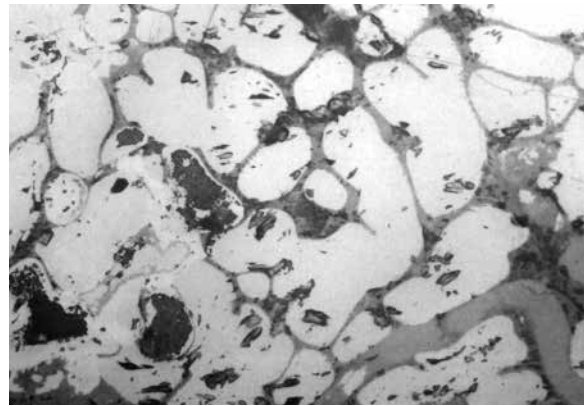
鉄滓頭微鏡組織写真 No.16-2 × 100



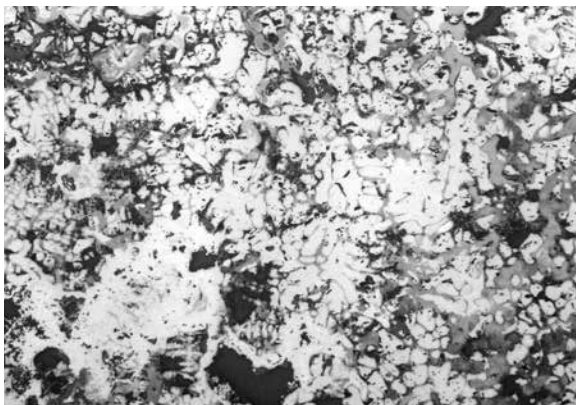
鉄滓頭微鏡組織写真 No.16-2 × 400



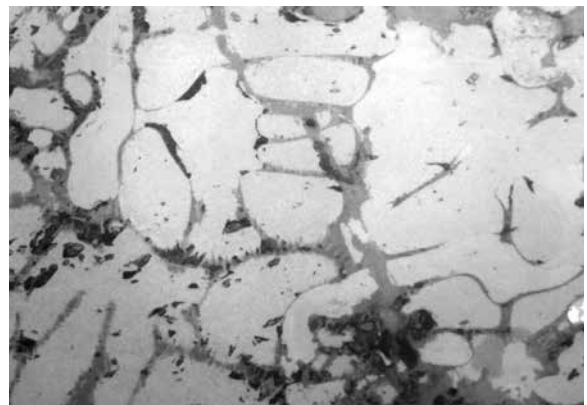
鉄滓頭微鏡組織写真 No.17-1 × 100



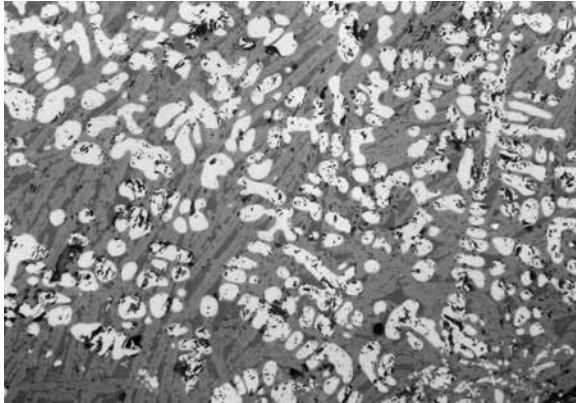
鉄滓頭微鏡組織写真 No.17-1 × 400



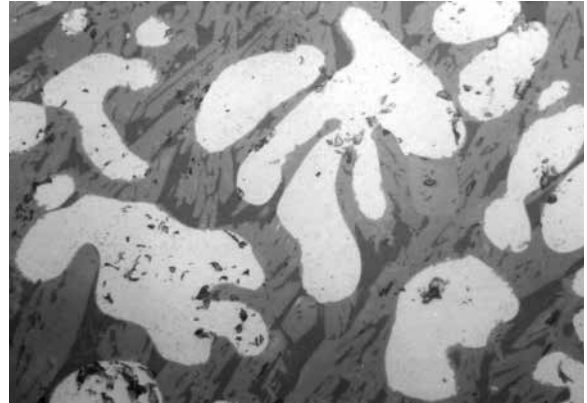
鉄滓頭微鏡組織写真 No.17-2 × 100



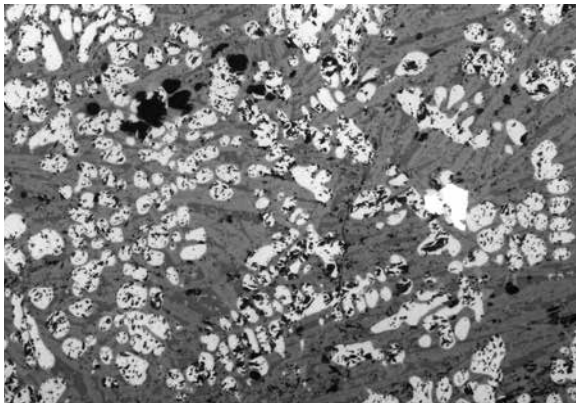
鉄滓頭微鏡組織写真 No.17-2 × 400



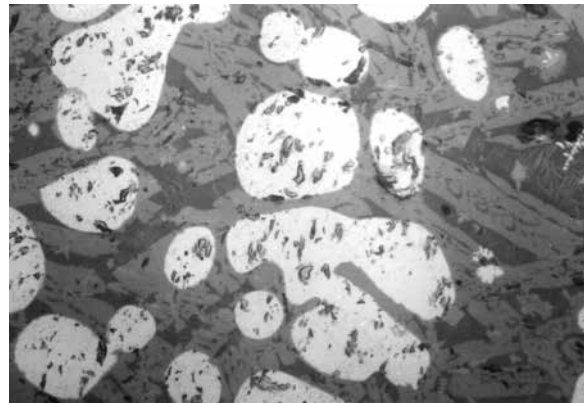
鉄滓頭微鏡組織写真 No.18-1 × 100



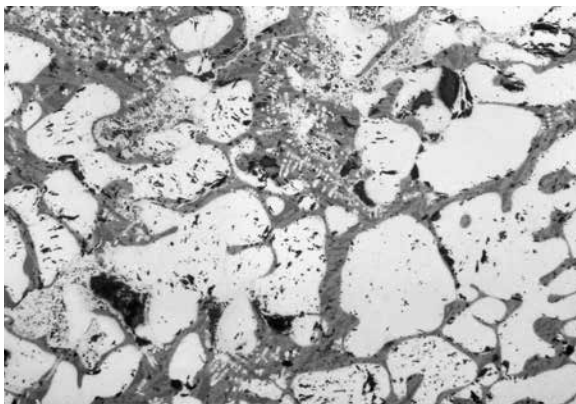
鉄滓頭微鏡組織写真 No.18-1 × 400



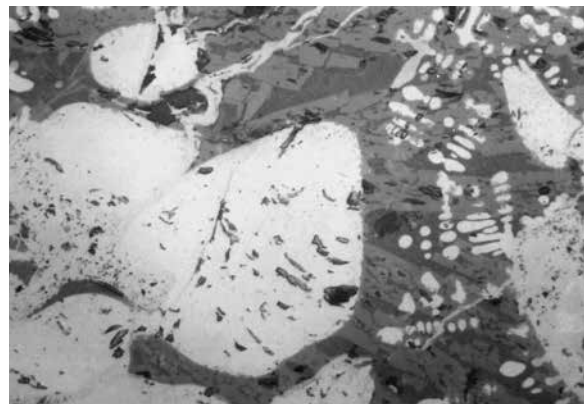
鉄滓頭微鏡組織写真 No.18-2 × 100



鉄滓頭微鏡組織写真 No.18-2 × 400



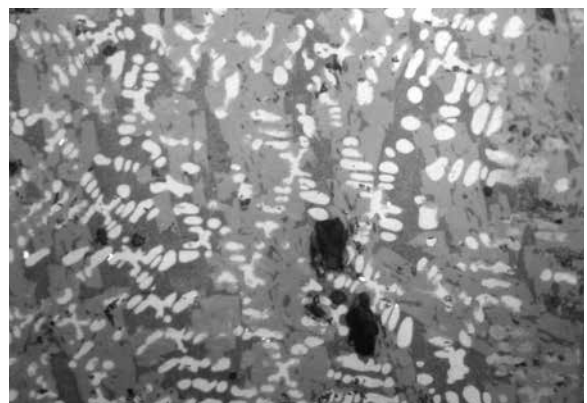
鉄滓頭微鏡組織写真 No.19-1 × 100



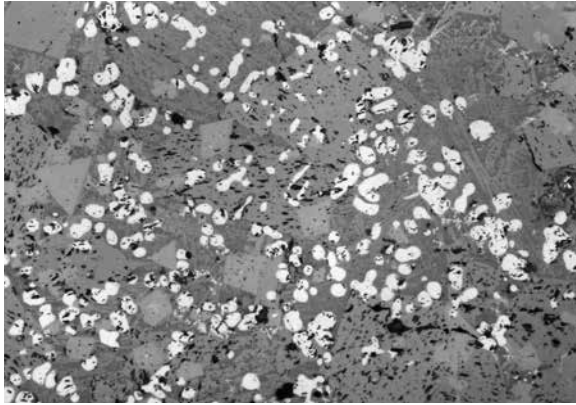
鉄滓頭微鏡組織写真 No.19-1 × 400



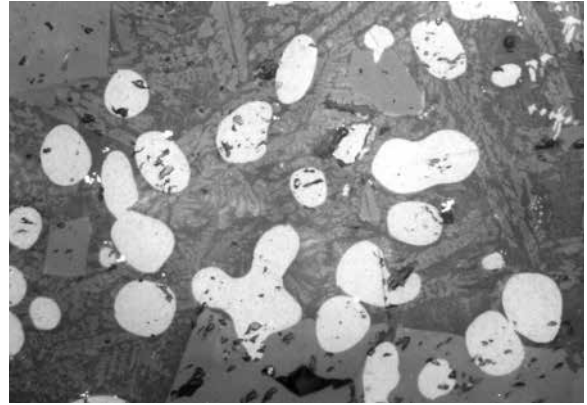
鉄滓頭微鏡組織写真 No.19-2 × 100



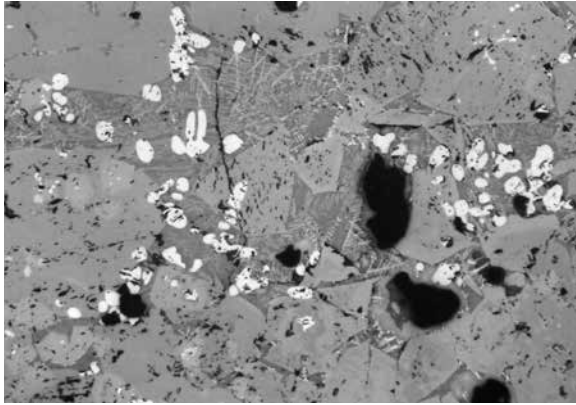
鉄滓頭微鏡組織写真 No.19-2 × 400



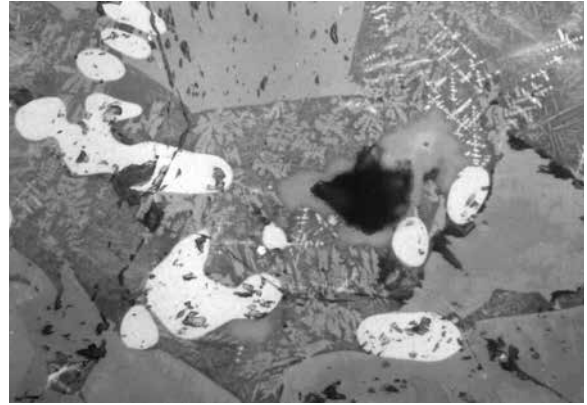
鉄滓頭微鏡組織写真 No.20-1 × 100



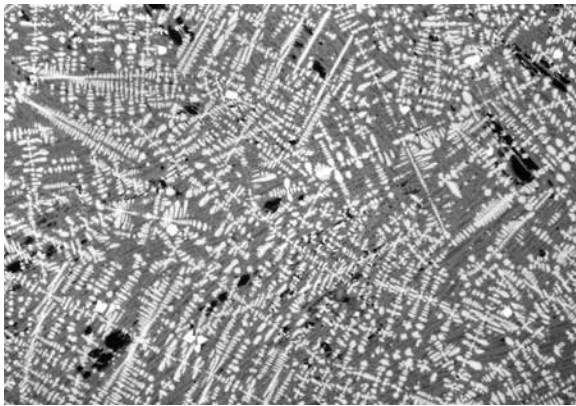
鉄滓頭微鏡組織写真 No.20-1 × 400



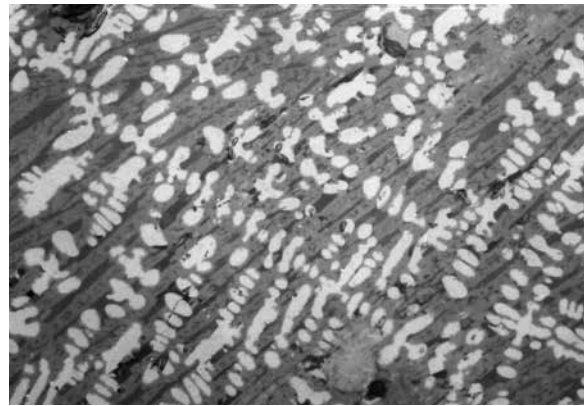
鉄滓頭微鏡組織写真 No.20-2 × 100



鉄滓頭微鏡組織写真 No.20-2 × 400



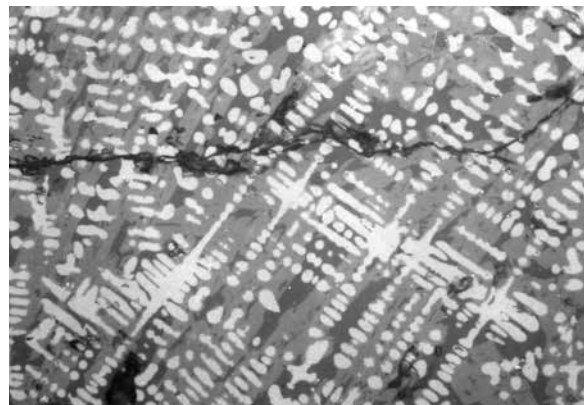
鉄滓頭微鏡組織写真 No.21-1 × 100



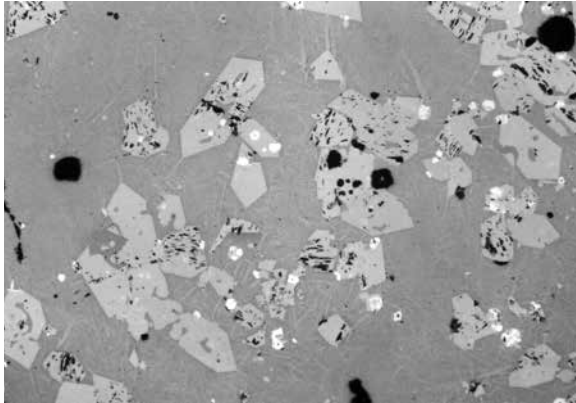
鉄滓頭微鏡組織写真 No.21-1 × 400



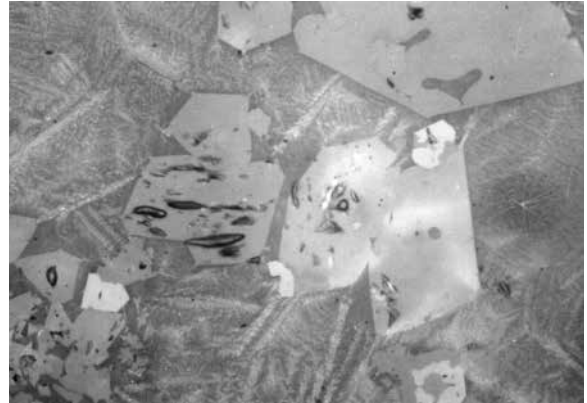
鉄滓頭微鏡組織写真 No.21-2 × 100



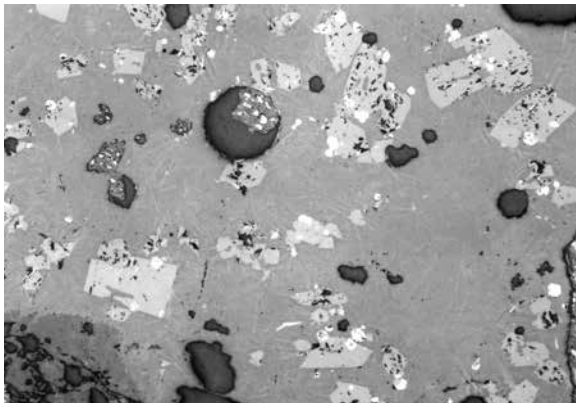
鉄滓頭微鏡組織写真 No.21-2 × 400



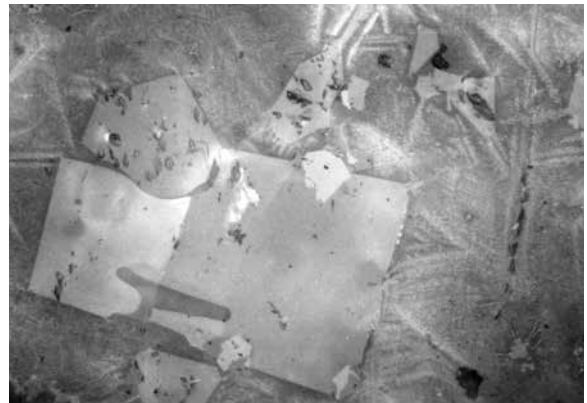
鉄滓頭微鏡組織写真 No.22-1 × 100



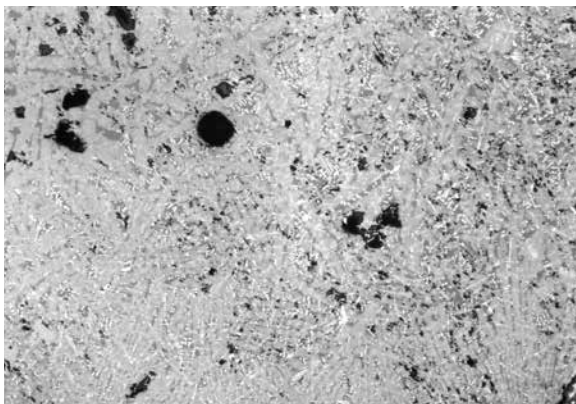
鉄滓頭微鏡組織写真 No.22-1 × 400



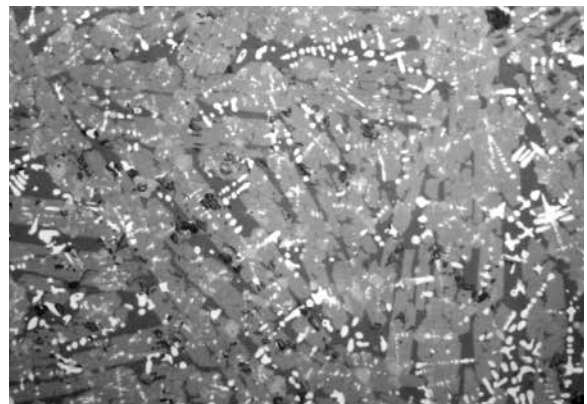
鉄滓頭微鏡組織写真 No.22-2 × 100



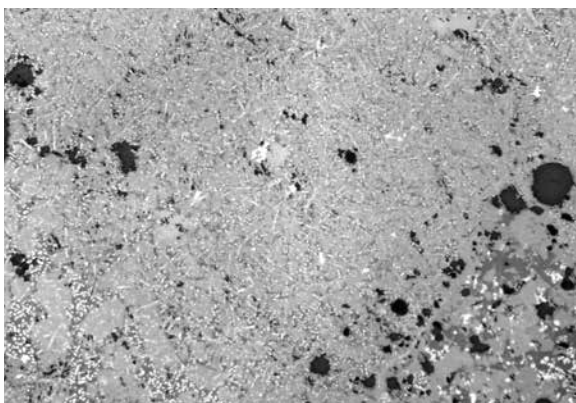
鉄滓頭微鏡組織写真 No.22-2 × 400



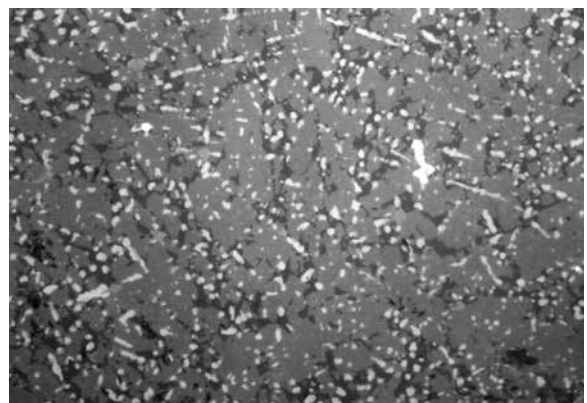
鉄滓頭微鏡組織写真 No.23-1 × 100



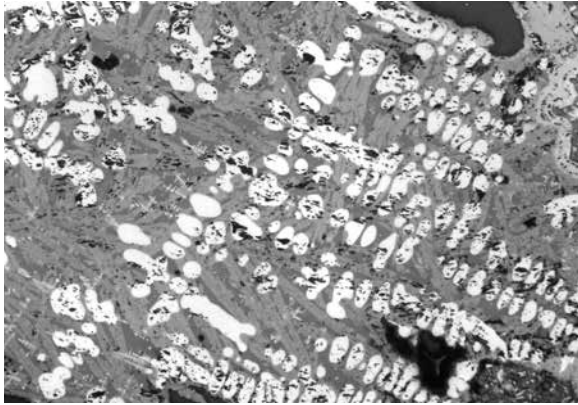
鉄滓頭微鏡組織写真 No.23-1 × 400



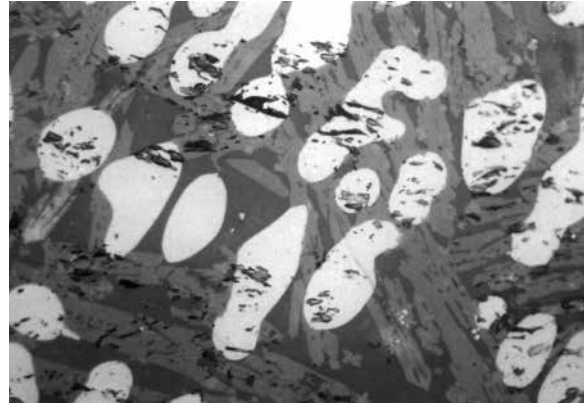
鉄滓頭微鏡組織写真 No.23-2 × 100



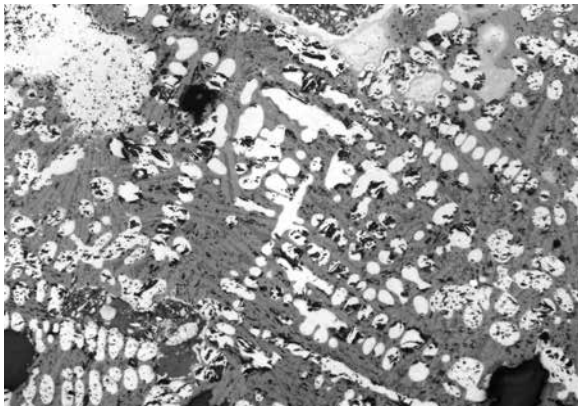
鉄滓頭微鏡組織写真 No.23-2 × 400



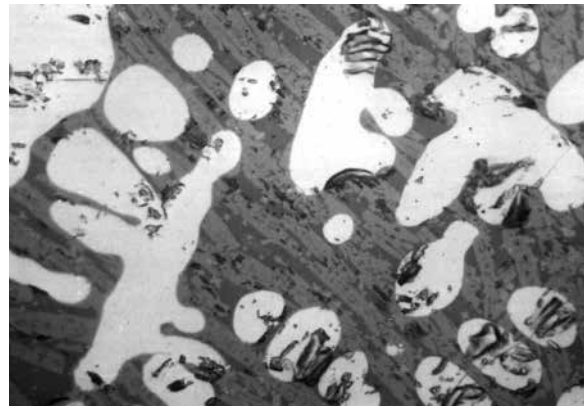
鉄滓頭微鏡組織写真 No.24-1 × 100



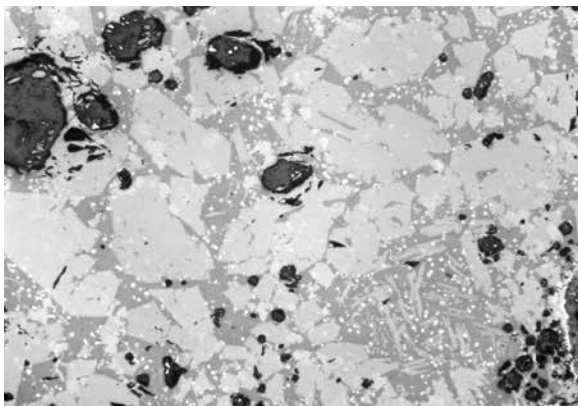
鉄滓頭微鏡組織写真 No.24-1 × 400



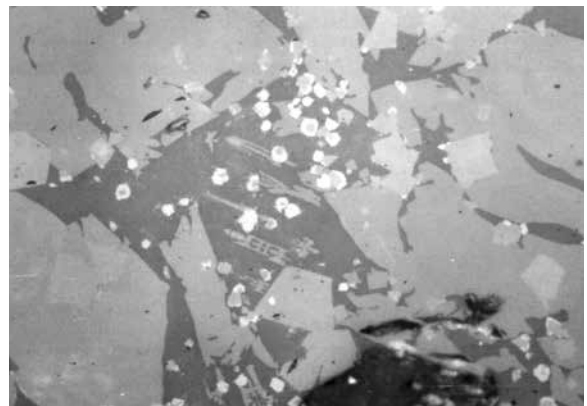
鉄滓頭微鏡組織写真 No.24-2 × 100



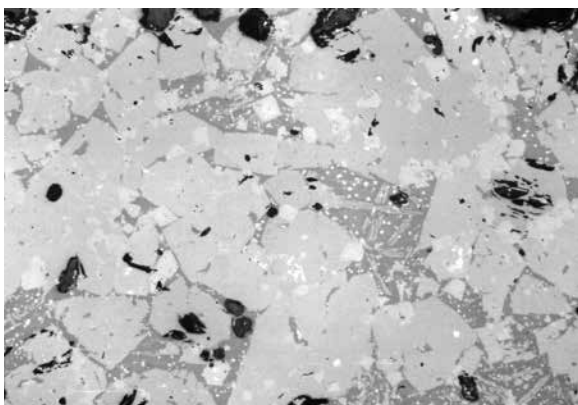
鉄滓頭微鏡組織写真 No.24-2 × 400



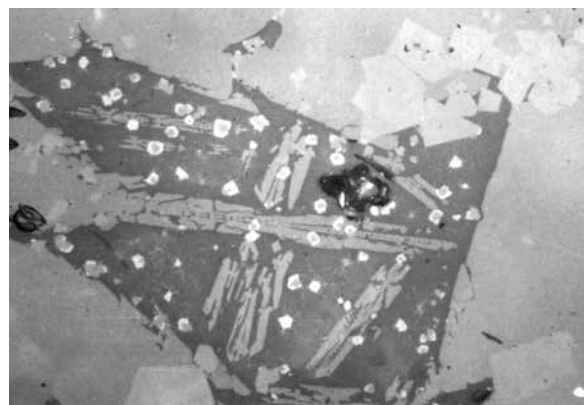
鉄滓頭微鏡組織写真 No.25-1 × 100



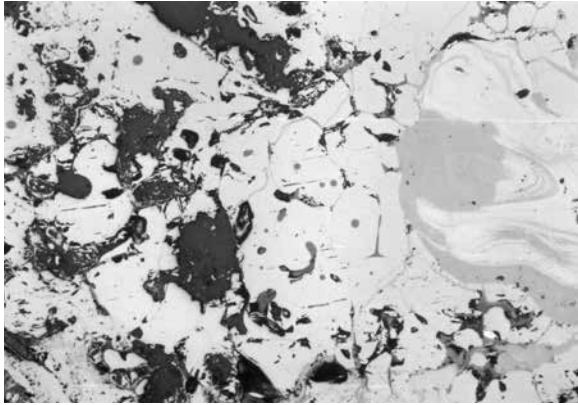
鉄滓頭微鏡組織写真 No.25-1 × 400



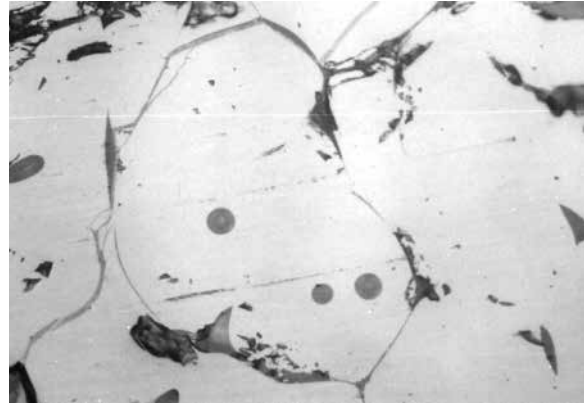
鉄滓頭微鏡組織写真 No.25-2 × 100



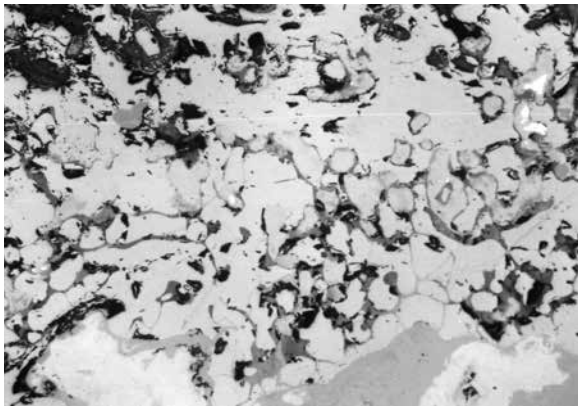
鉄滓頭微鏡組織写真 No.25-2 × 400



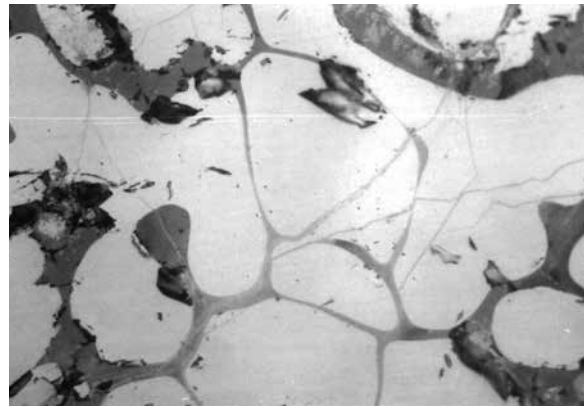
鉄滓頭微鏡組織写真 No.26-1 × 100



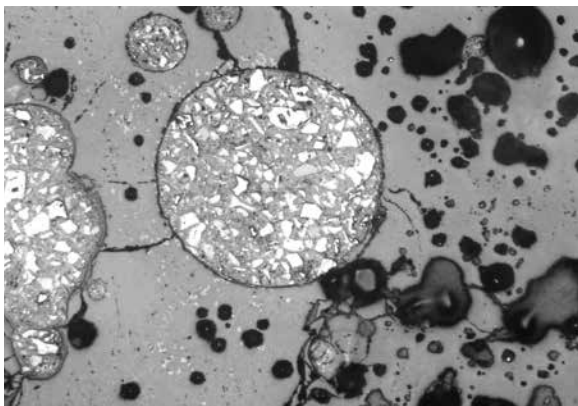
鉄滓頭微鏡組織写真 No.26-1 × 400



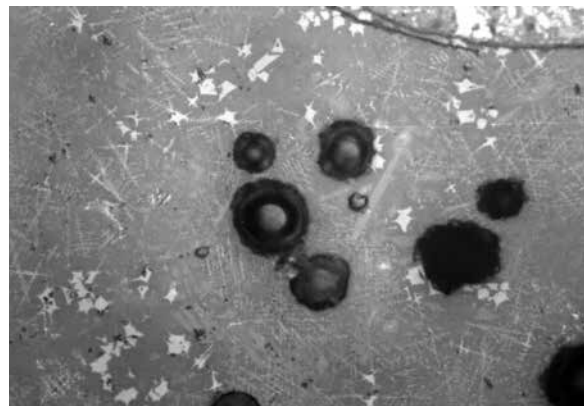
鉄滓頭微鏡組織写真 No.26-2 × 100



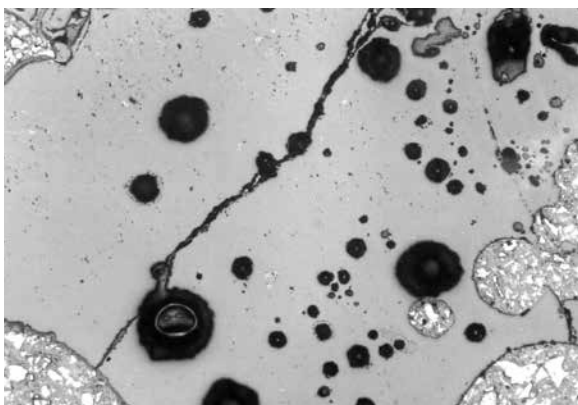
鉄滓頭微鏡組織写真 No.26-2 × 400



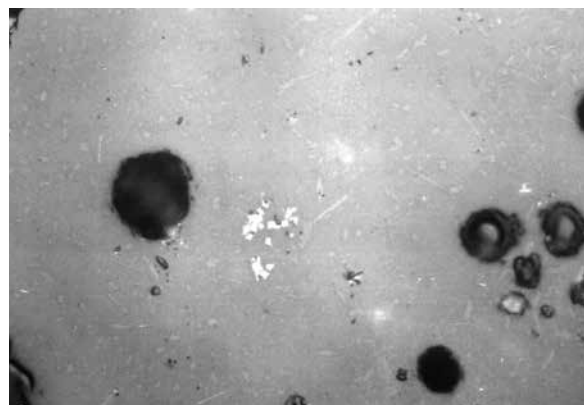
鉄滓頭微鏡組織写真 No.27-1 × 100



鉄滓頭微鏡組織写真 No.27-1 × 400



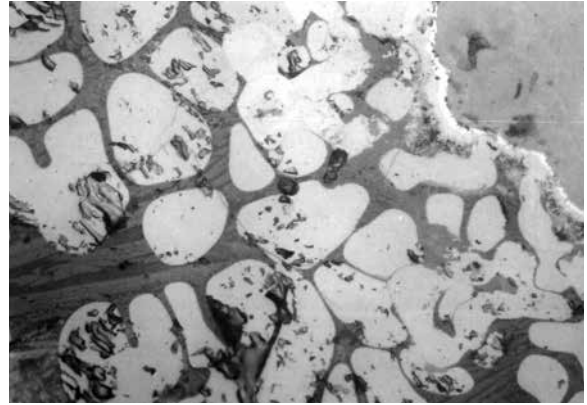
鉄滓頭微鏡組織写真 No.27-2 × 100



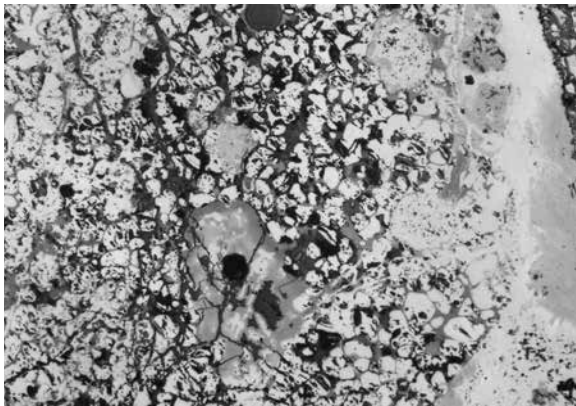
鉄滓頭微鏡組織写真 No.27-2 × 400



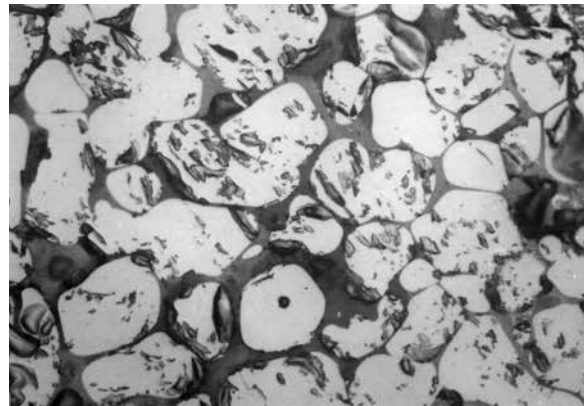
鉄滓頭微鏡組織写真 No.28-1 × 100



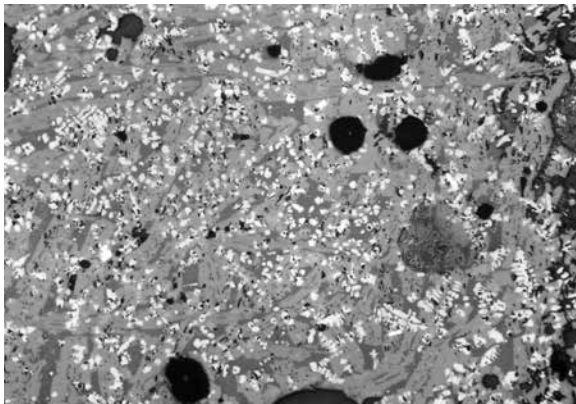
鉄滓頭微鏡組織写真 No.28-1 × 400



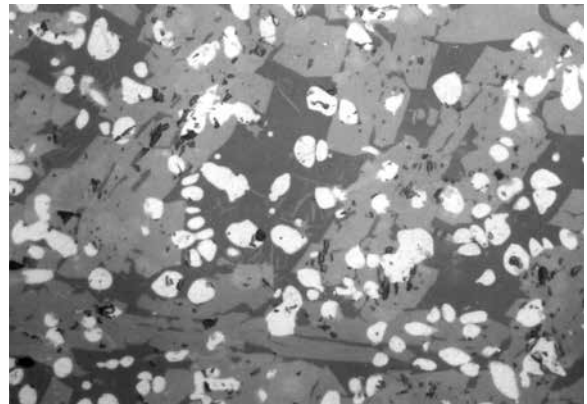
鉄滓頭微鏡組織写真 No.28-2 × 100



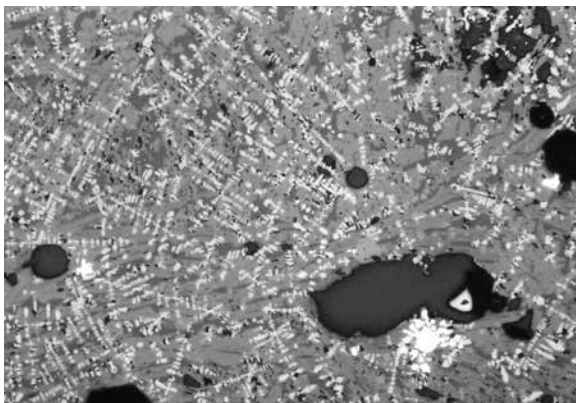
鉄滓頭微鏡組織写真 No.28-2 × 400



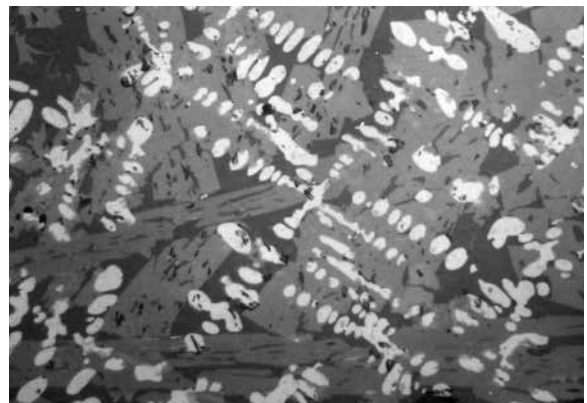
鉄滓頭微鏡組織写真 No.29-1 × 100



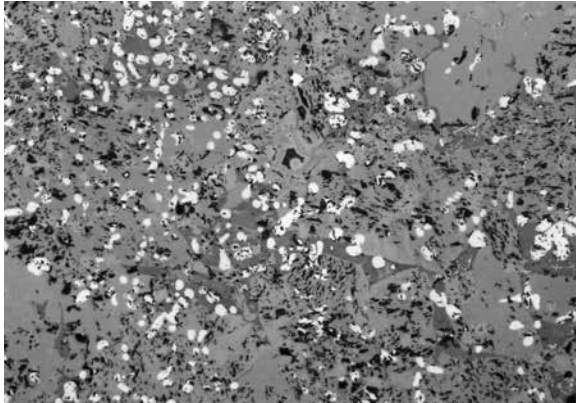
鉄滓頭微鏡組織写真 No.29-1 × 400



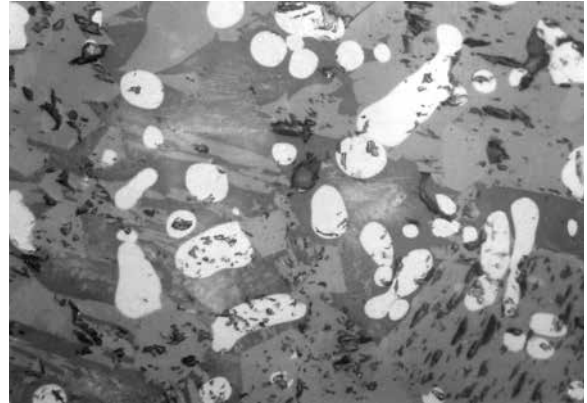
鉄滓頭微鏡組織写真 No.29-2 × 100



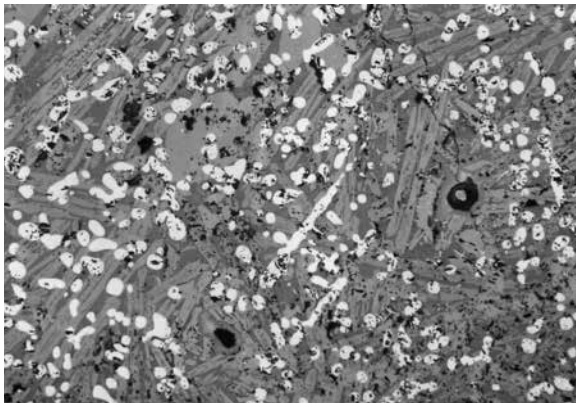
鉄滓頭微鏡組織写真 No.29-2 × 400



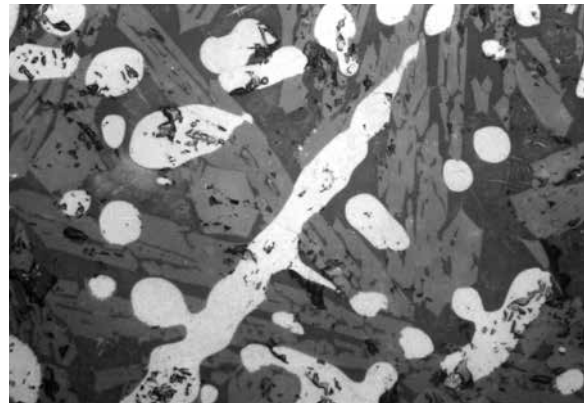
鉄滓頭微鏡組織写真 No.30-1 × 100



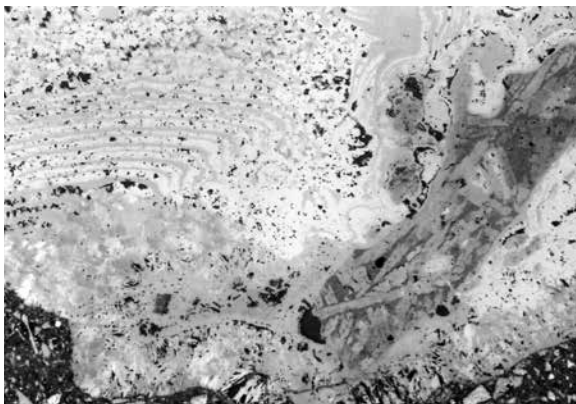
鉄滓頭微鏡組織写真 No.30-1 × 400



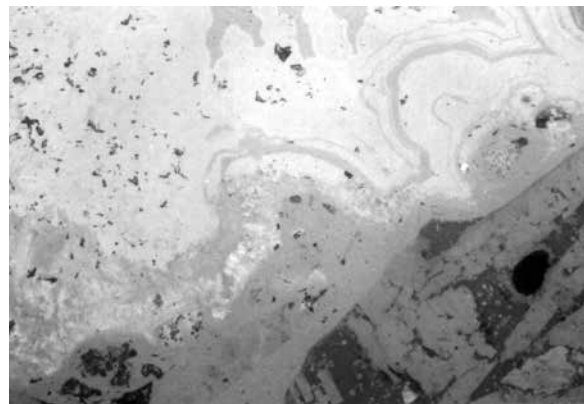
鉄滓頭微鏡組織写真 No.30-2 × 100



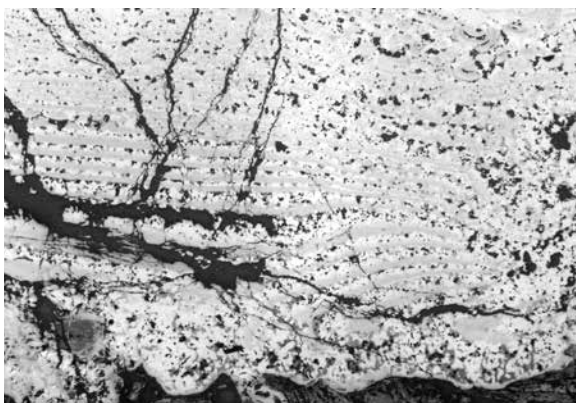
鉄滓頭微鏡組織写真 No.30-2 × 400



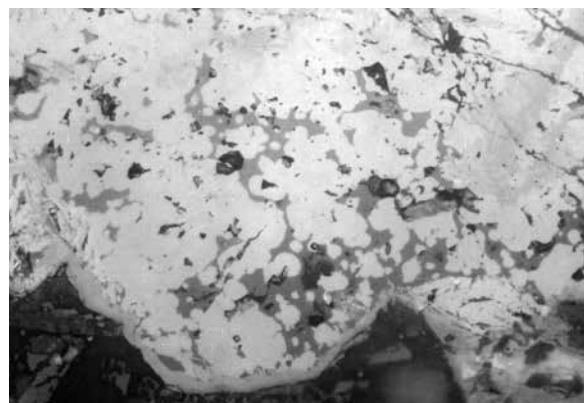
鉄滓頭微鏡組織写真 No.31-1 × 100



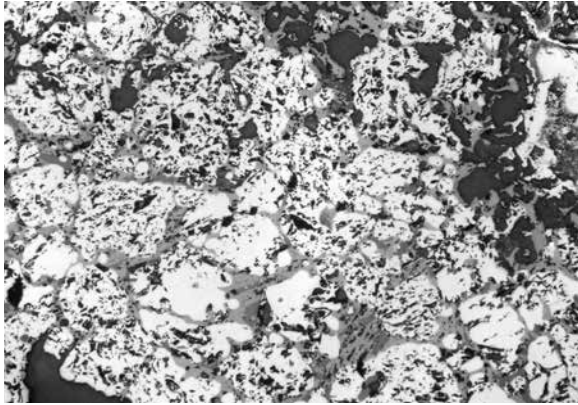
鉄滓頭微鏡組織写真 No.31-1 × 400



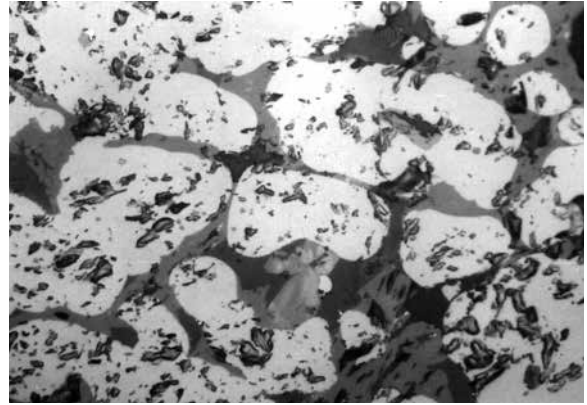
鉄滓頭微鏡組織写真 No.31-2 × 100



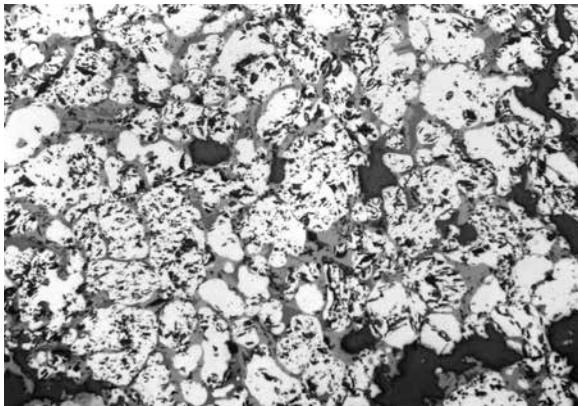
鉄滓頭微鏡組織写真 No.31-2 × 400



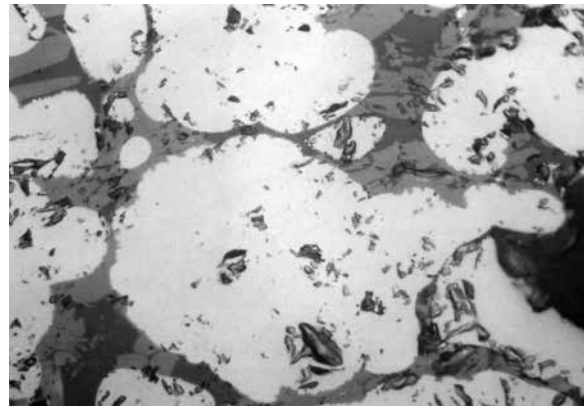
鉄滓頭微鏡組織写真 No.32-1 × 100



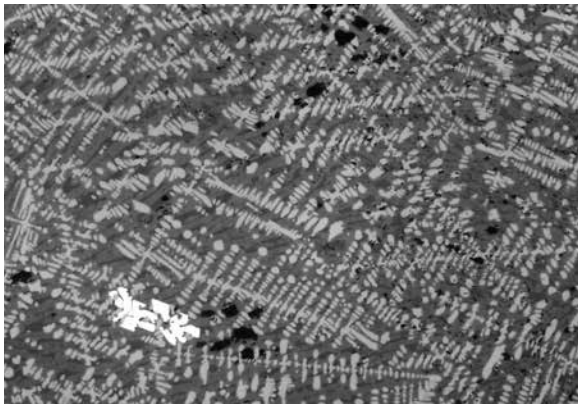
鉄滓頭微鏡組織写真 No.32-1 × 400



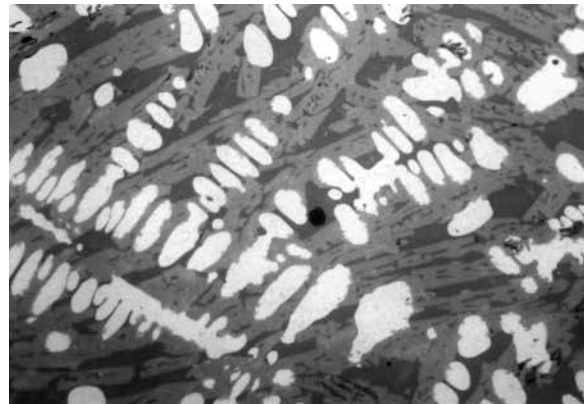
鉄滓頭微鏡組織写真 No.32-2 × 100



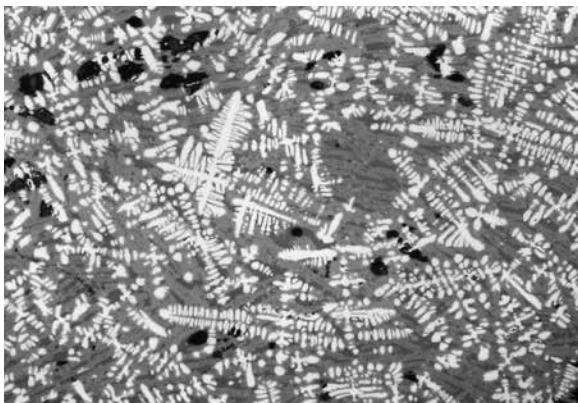
鉄滓頭微鏡組織写真 No.32-2 × 400



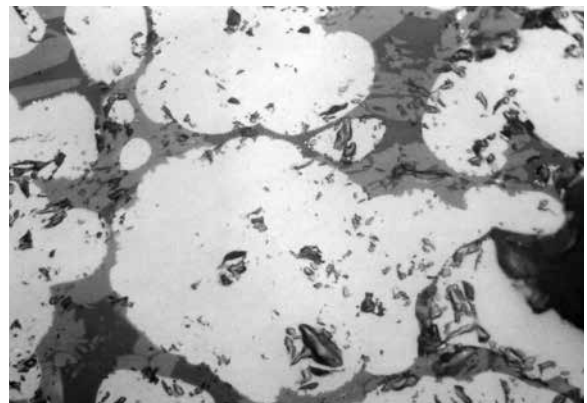
鉄滓頭微鏡組織写真 No.33-1 × 100



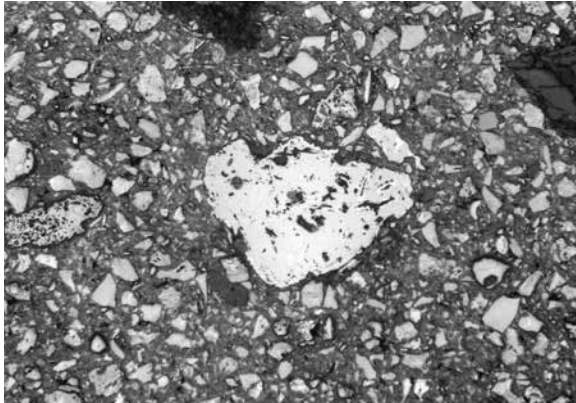
鉄滓頭微鏡組織写真 No.33-1 × 400



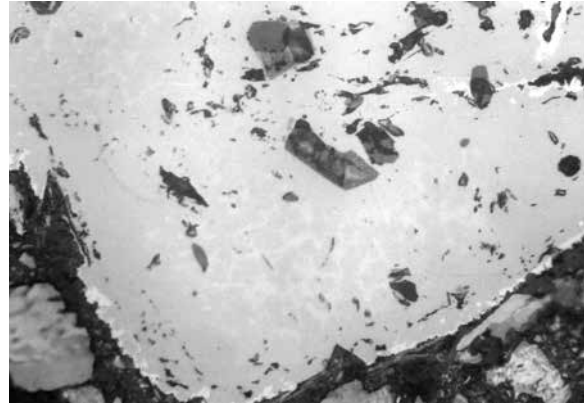
鉄滓頭微鏡組織写真 No.33-2 × 100



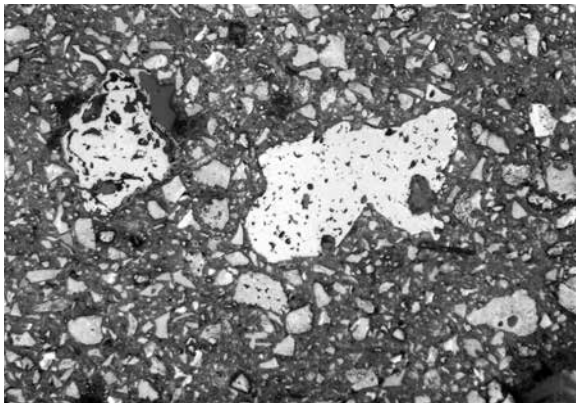
鉄滓頭微鏡組織写真 No.33-2 × 400



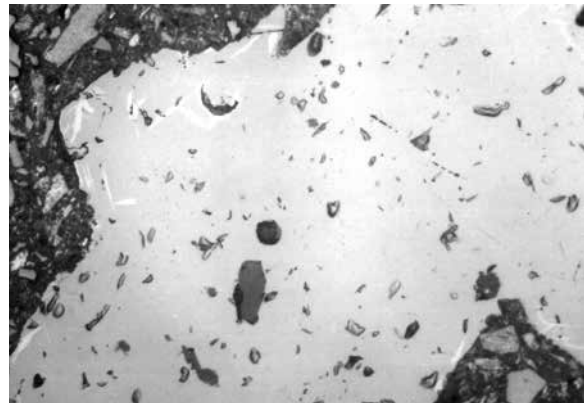
砂鉄頭微鏡組織写真 No.34-1 × 100



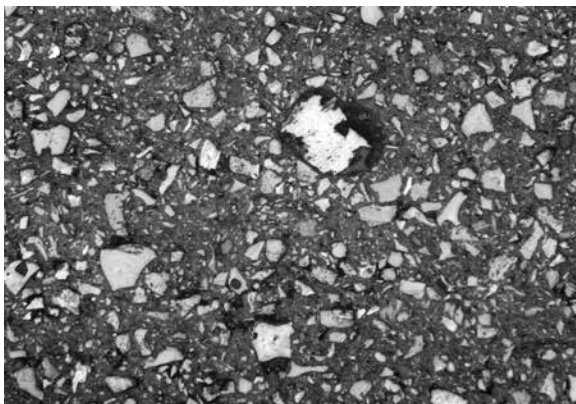
砂鉄頭微鏡組織写真 No.34-1 × 400



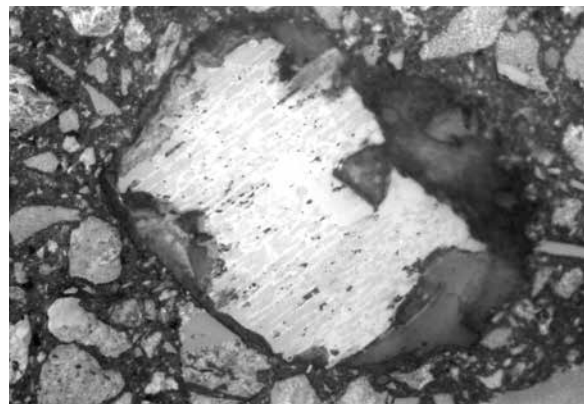
砂鉄頭微鏡組織写真 No.34-2 × 100



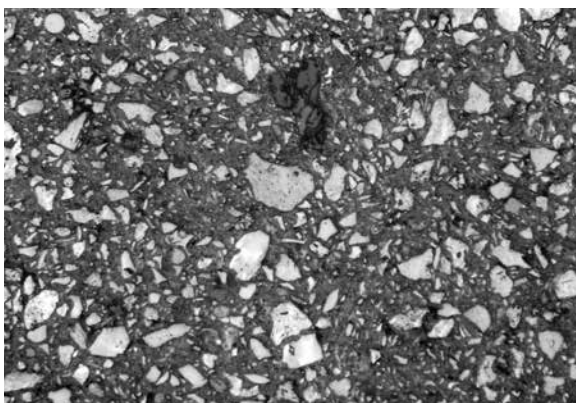
砂鉄頭微鏡組織写真 No.34-2 × 400



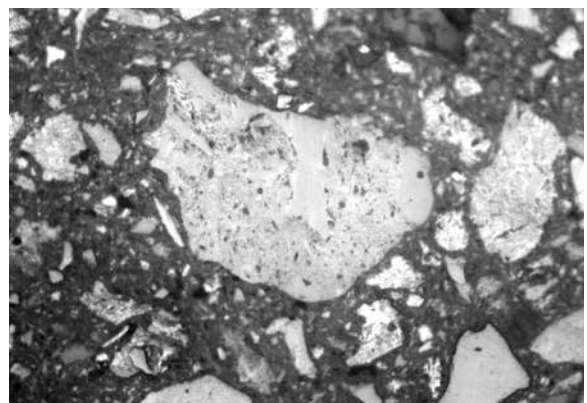
砂鉄頭微鏡組織写真 No.35-1 × 100



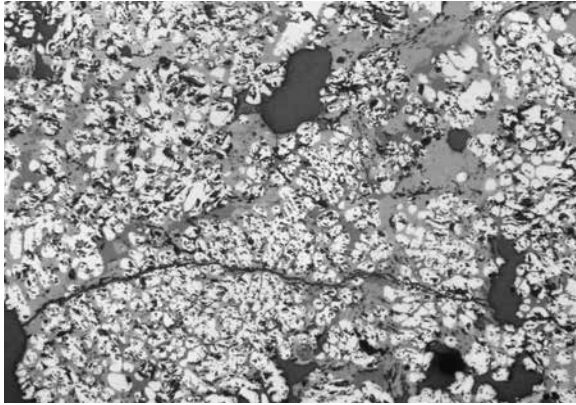
砂鉄頭微鏡組織写真 No.35-1 × 400



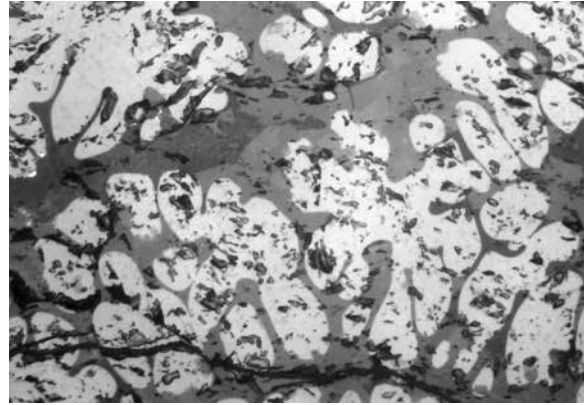
砂鉄頭微鏡組織写真 No.35-2 × 100



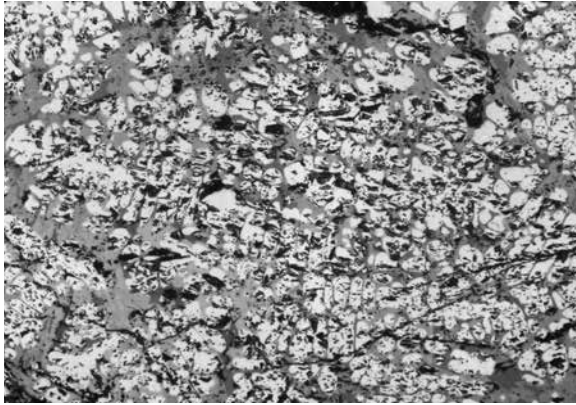
砂鉄頭微鏡組織写真 No.35-2 × 400



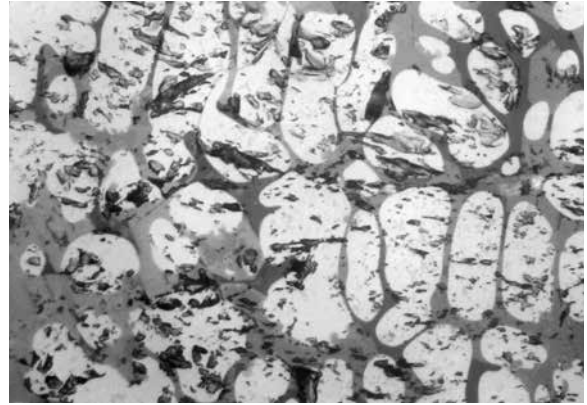
鉄滓顕微鏡組織写真 No.36-1 × 100



鉄滓顕微鏡組織写真 No.36-1 × 400



鉄滓顕微鏡組織写真 No.36-2 × 100



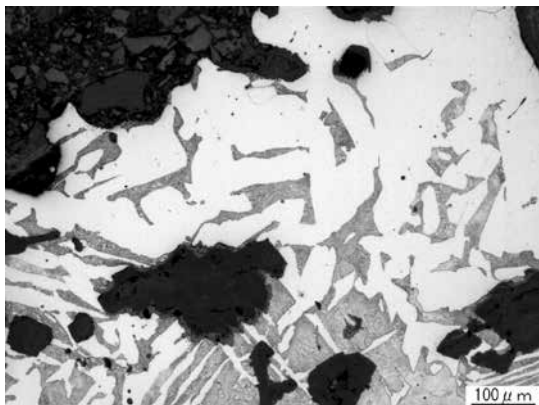
鉄滓顕微鏡組織写真 No.36-2 × 400



金属組織顕微鏡写真 No1-1_100



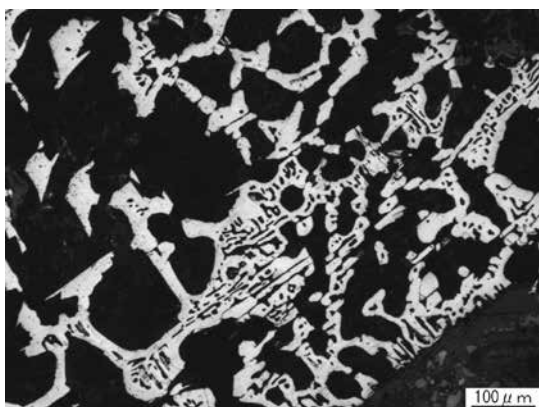
金属組織顕微鏡写真 No1-1_400



金属組織顕微鏡写真 No1-2_100



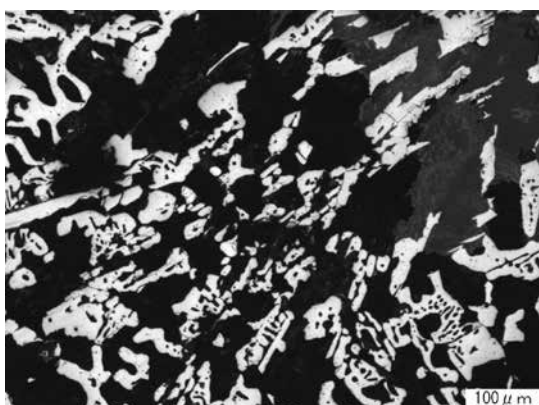
金属組織顕微鏡写真 No1-2_400



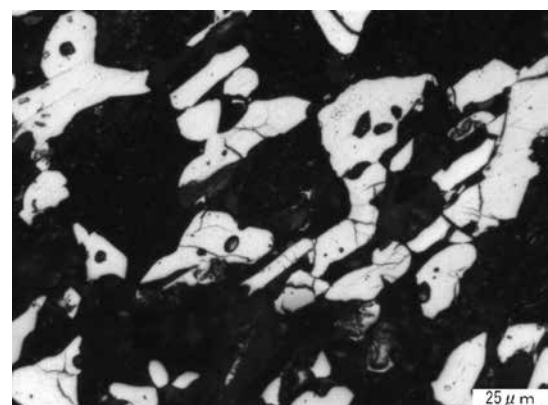
金属組織顕微鏡写真 No10-2-1_100



金属組織顕微鏡写真 No10-2-1_400

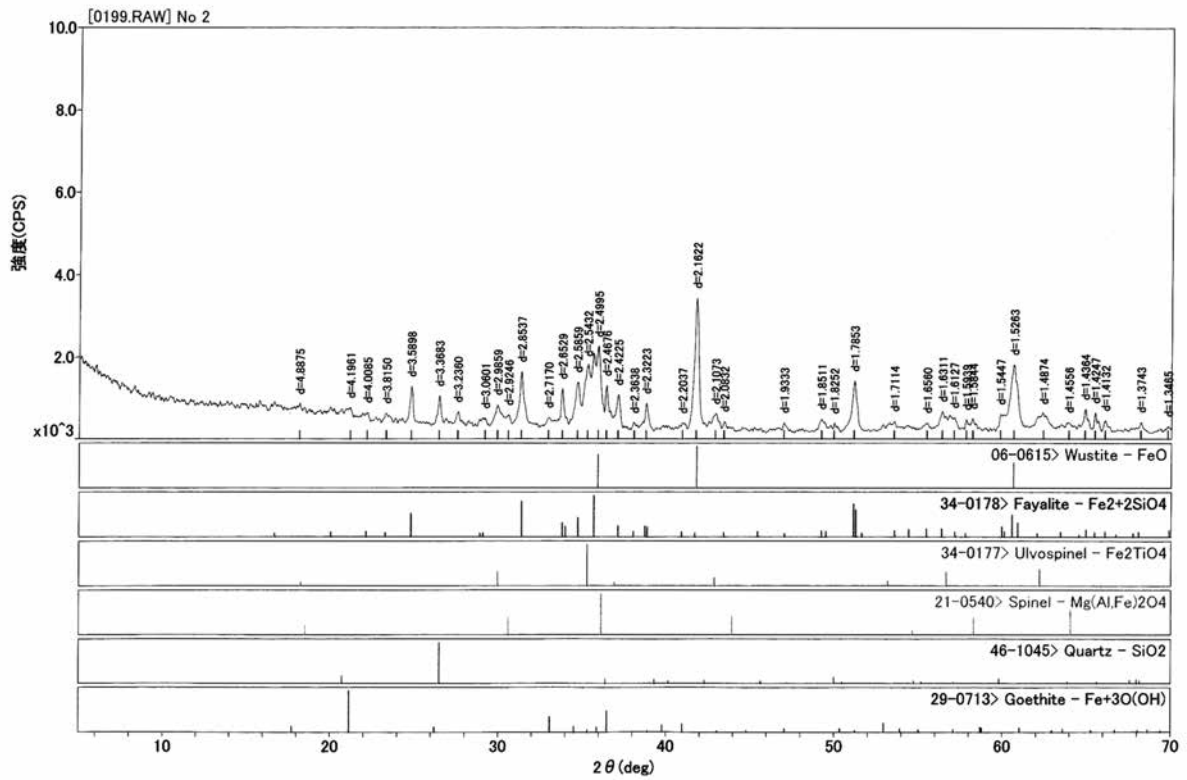


金属組織顕微鏡写真 No10-2-2_100

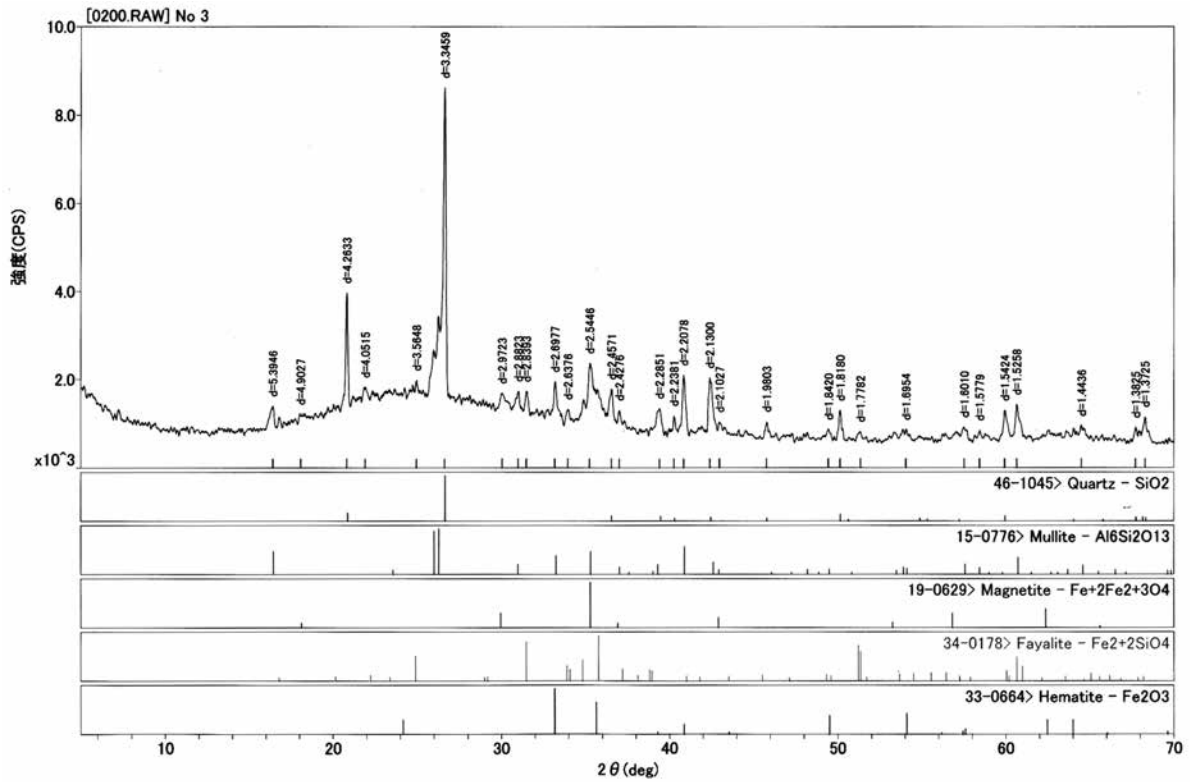


金属組織顕微鏡写真 No10-2-2_400

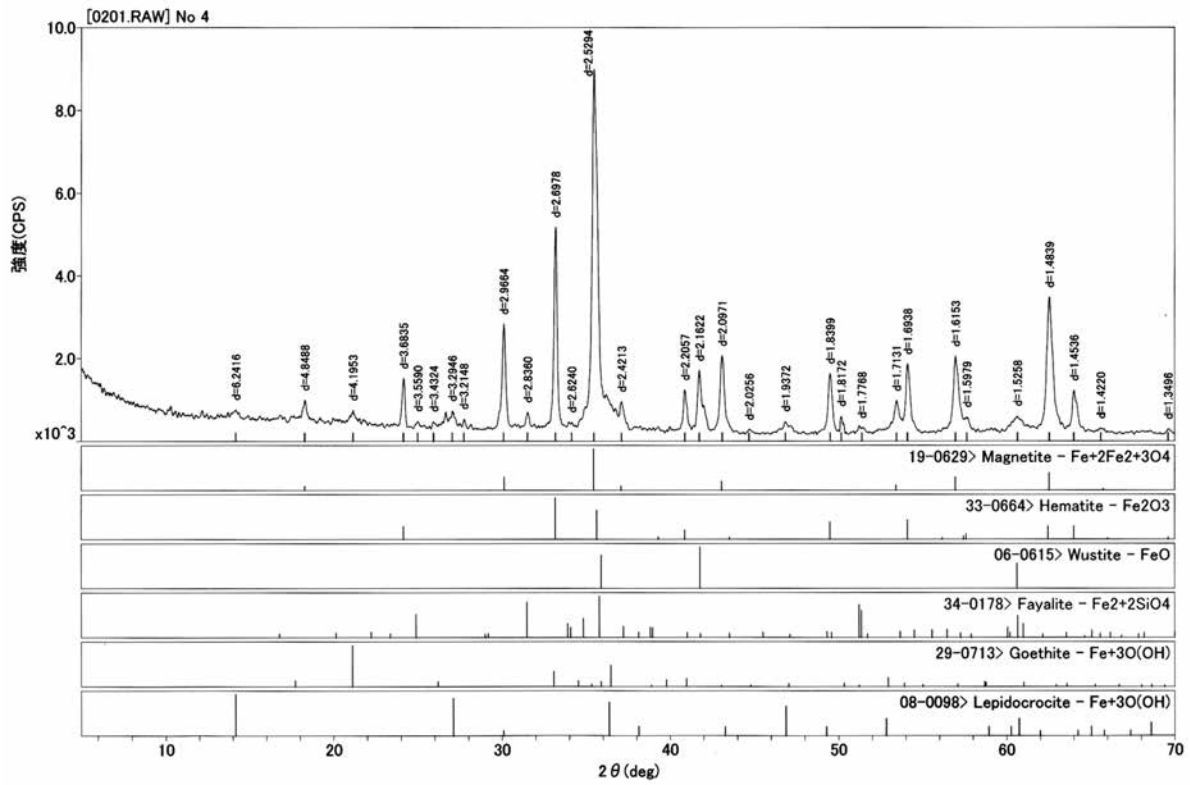
金属顕微鏡組織写真



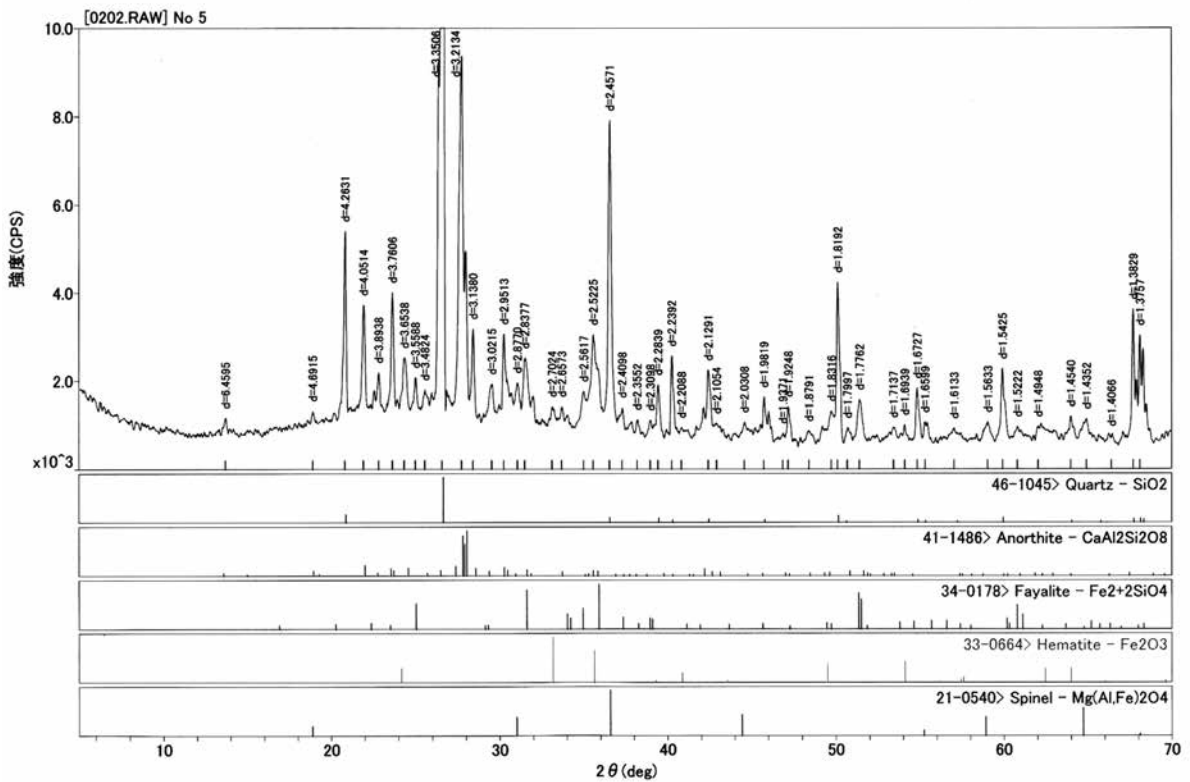
X線回析チャート1



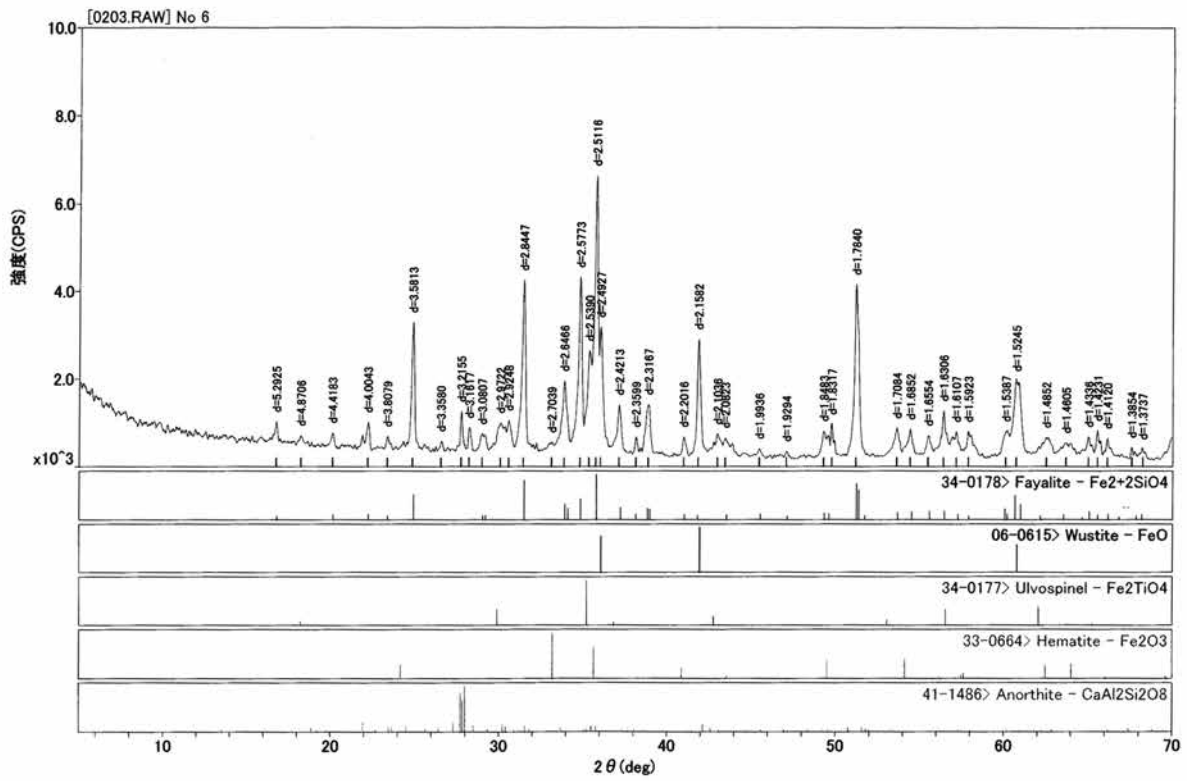
X線回析チャート2



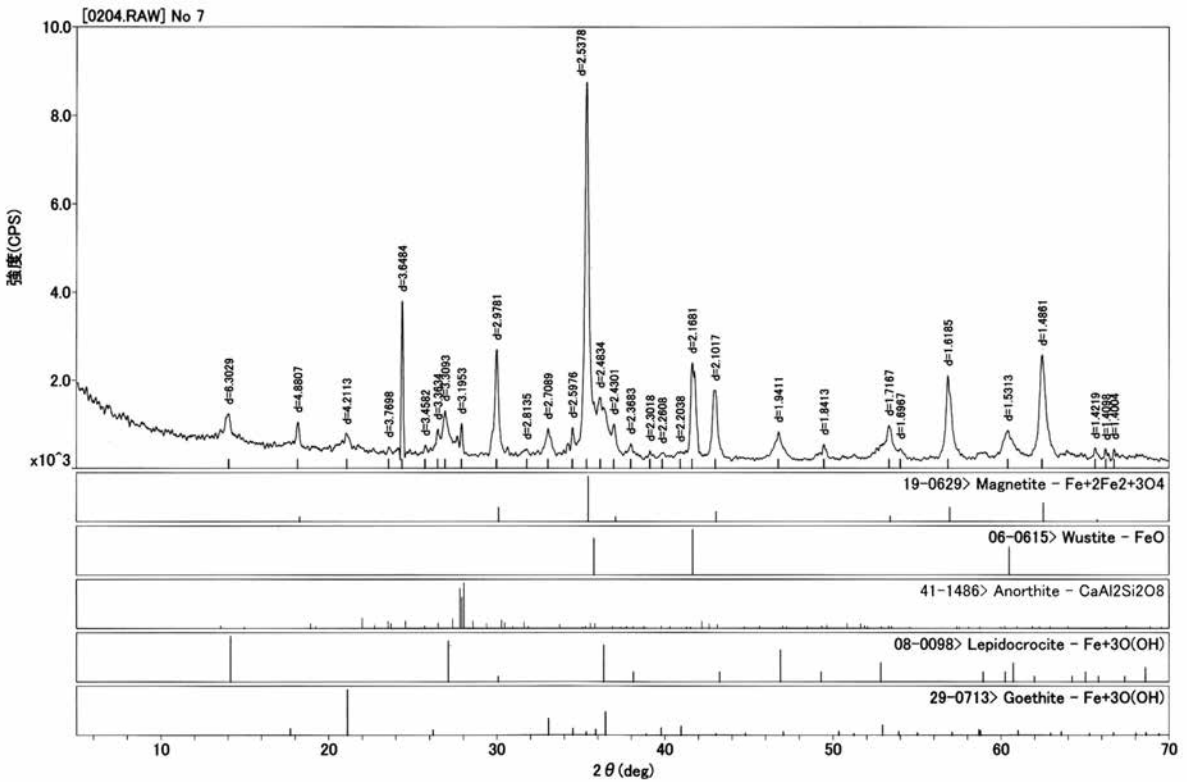
X線回析チャート3



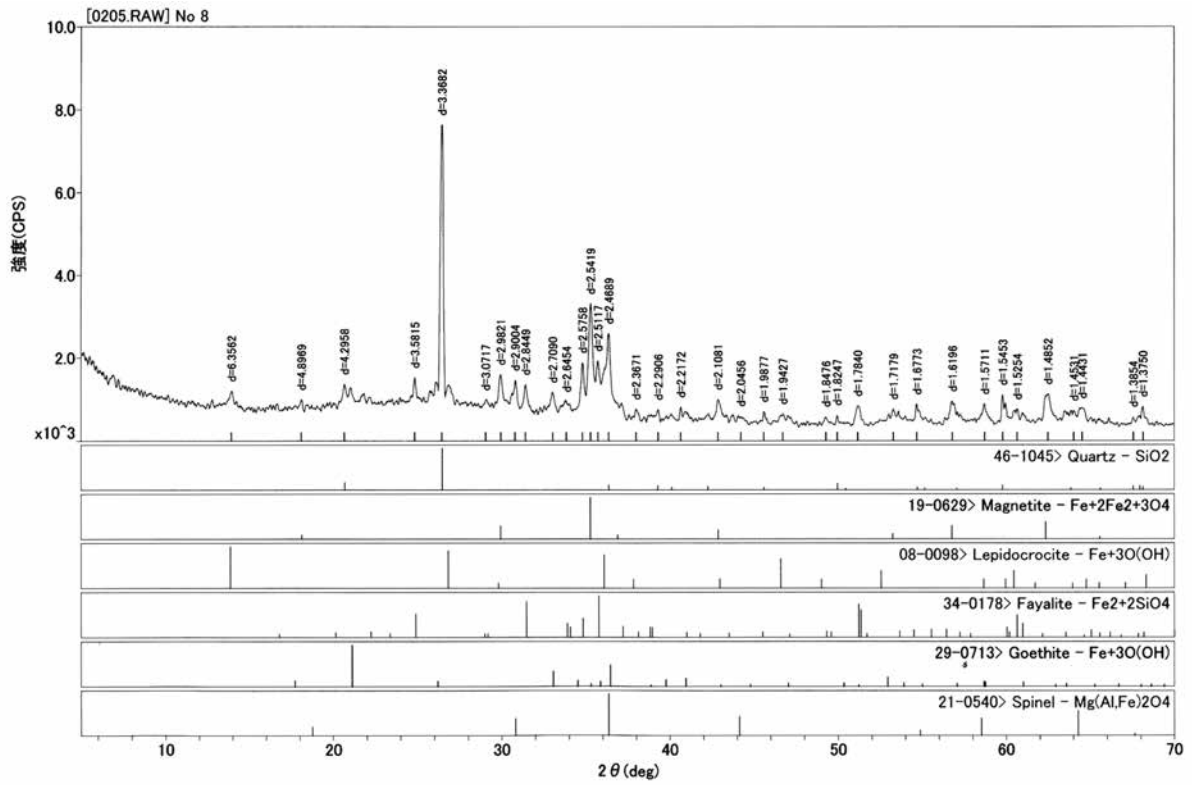
X線回析チャート4



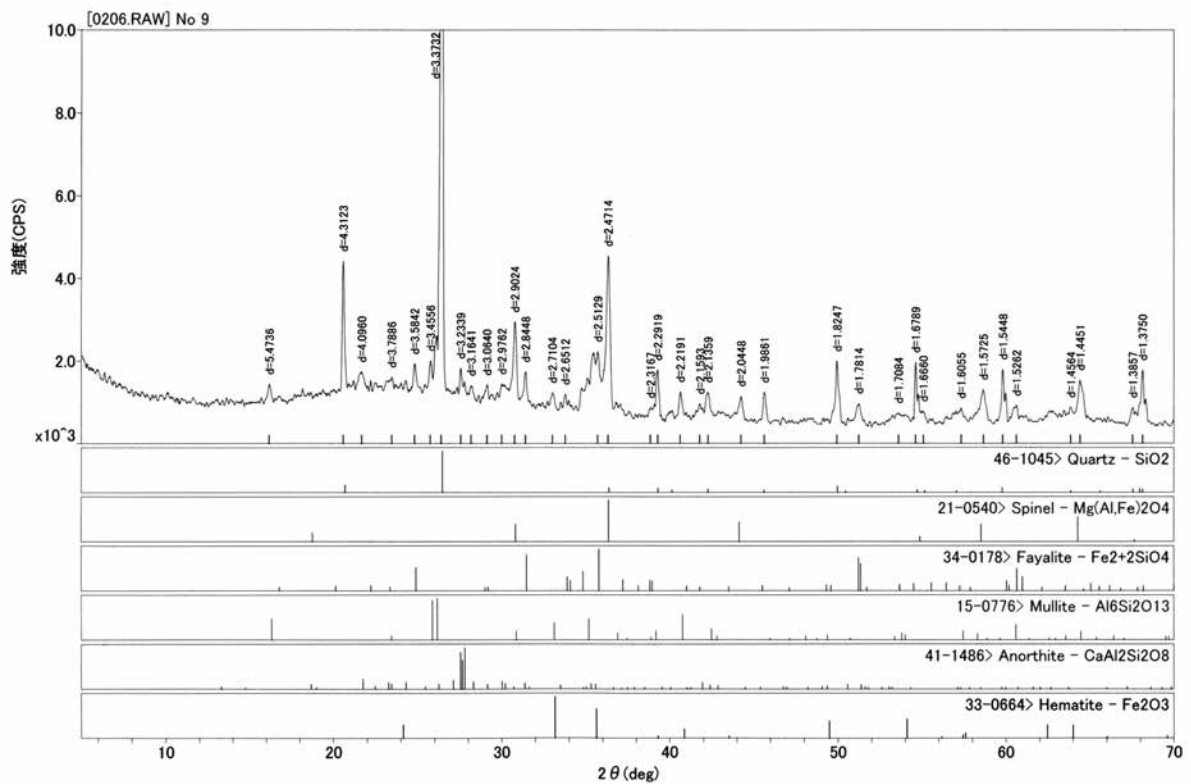
X線回析チャート5



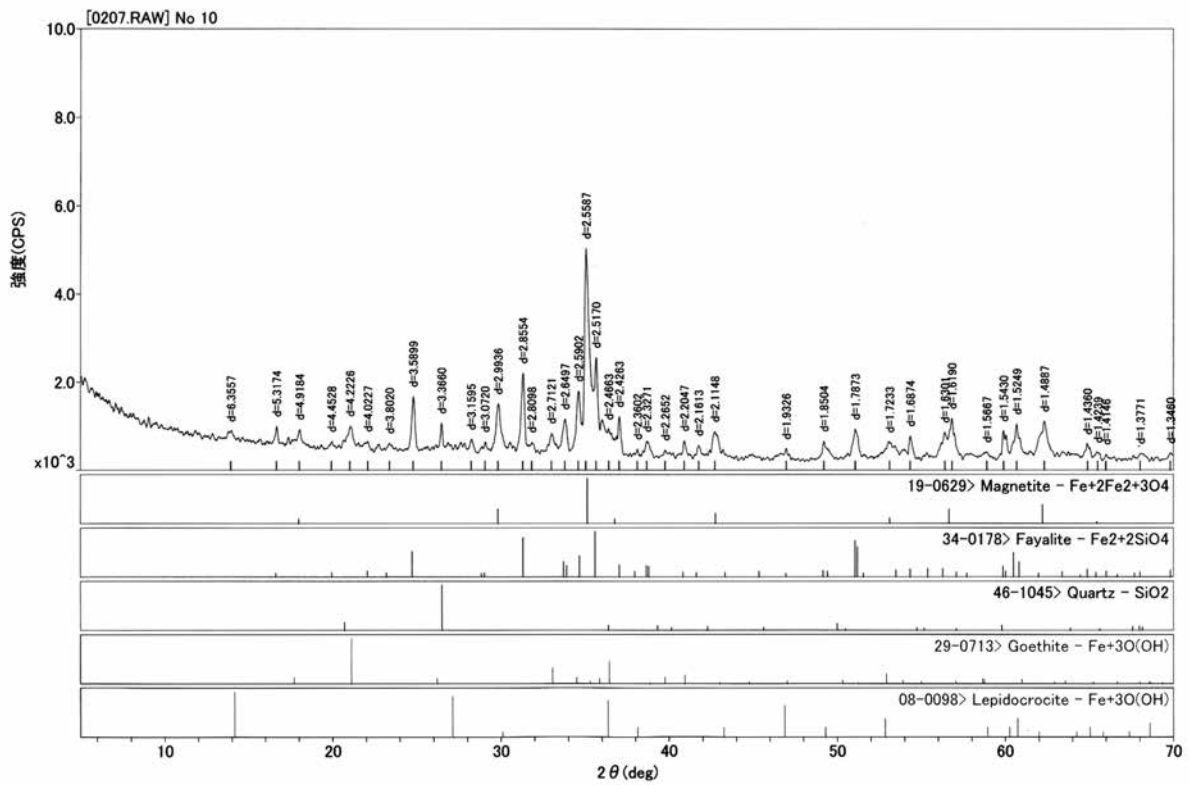
X線回析チャート6



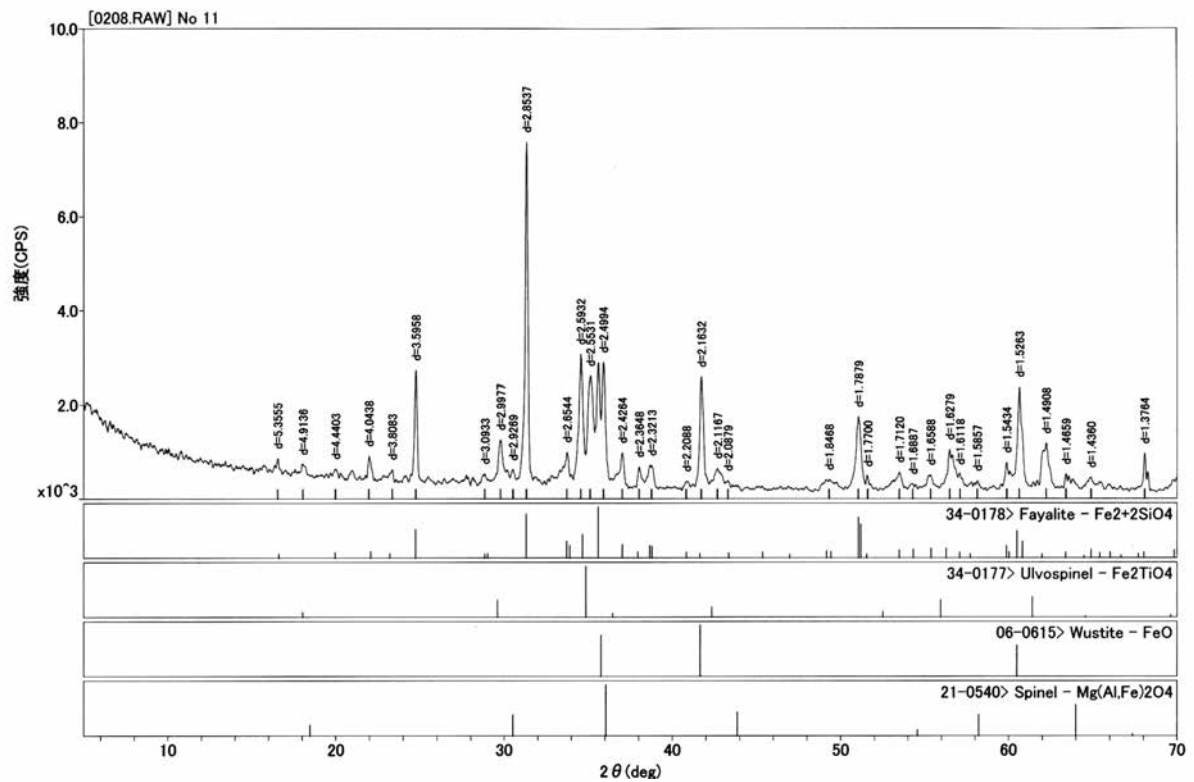
X線回折チャート7



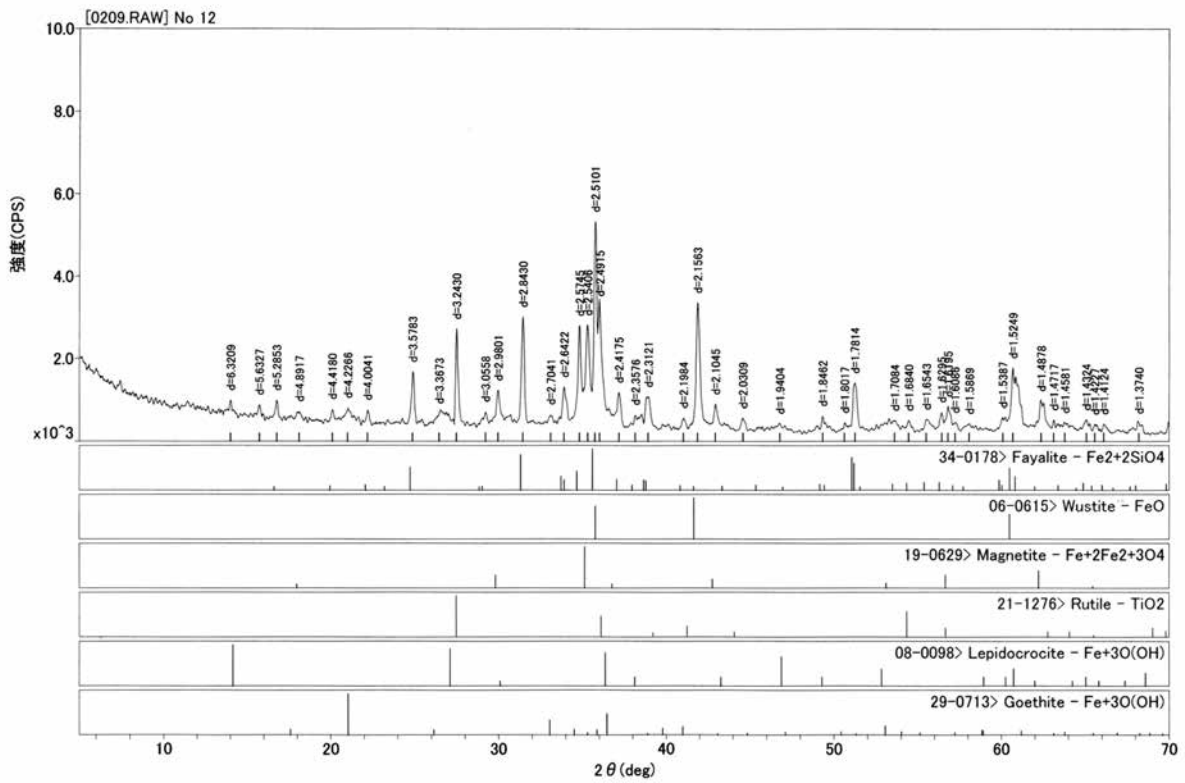
X線回折チャート8



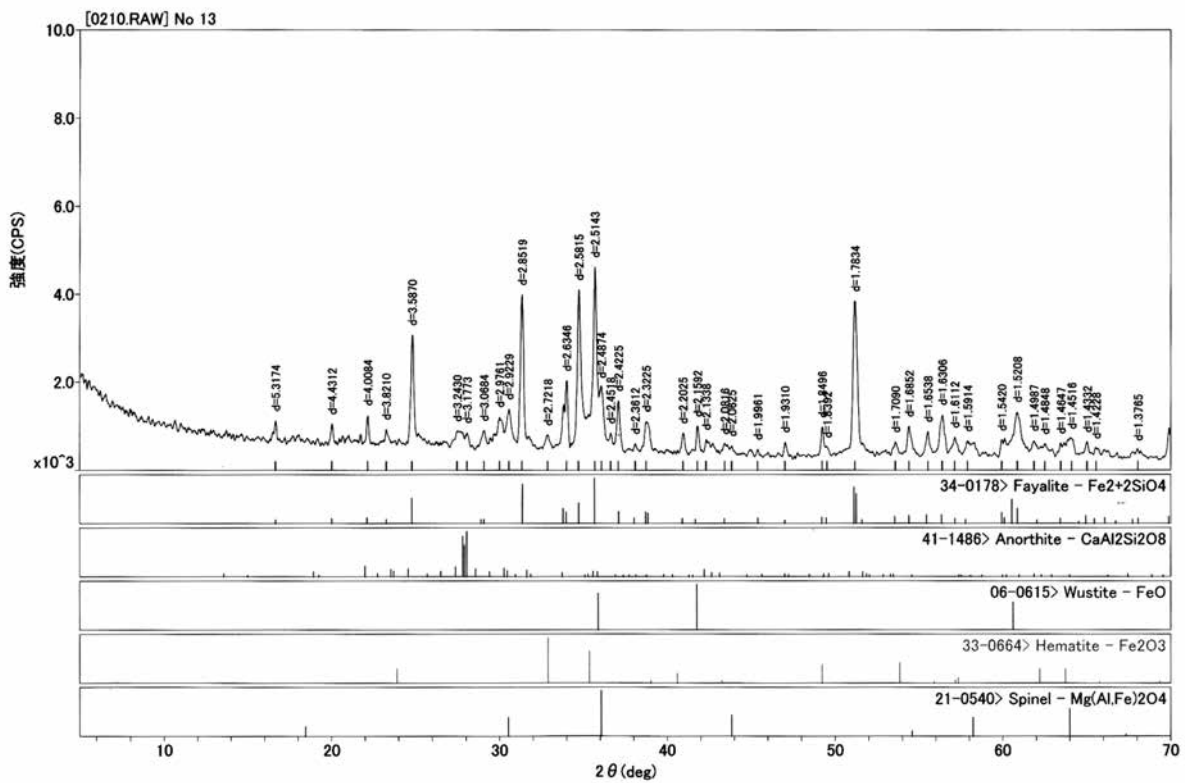
X線回析チャート9



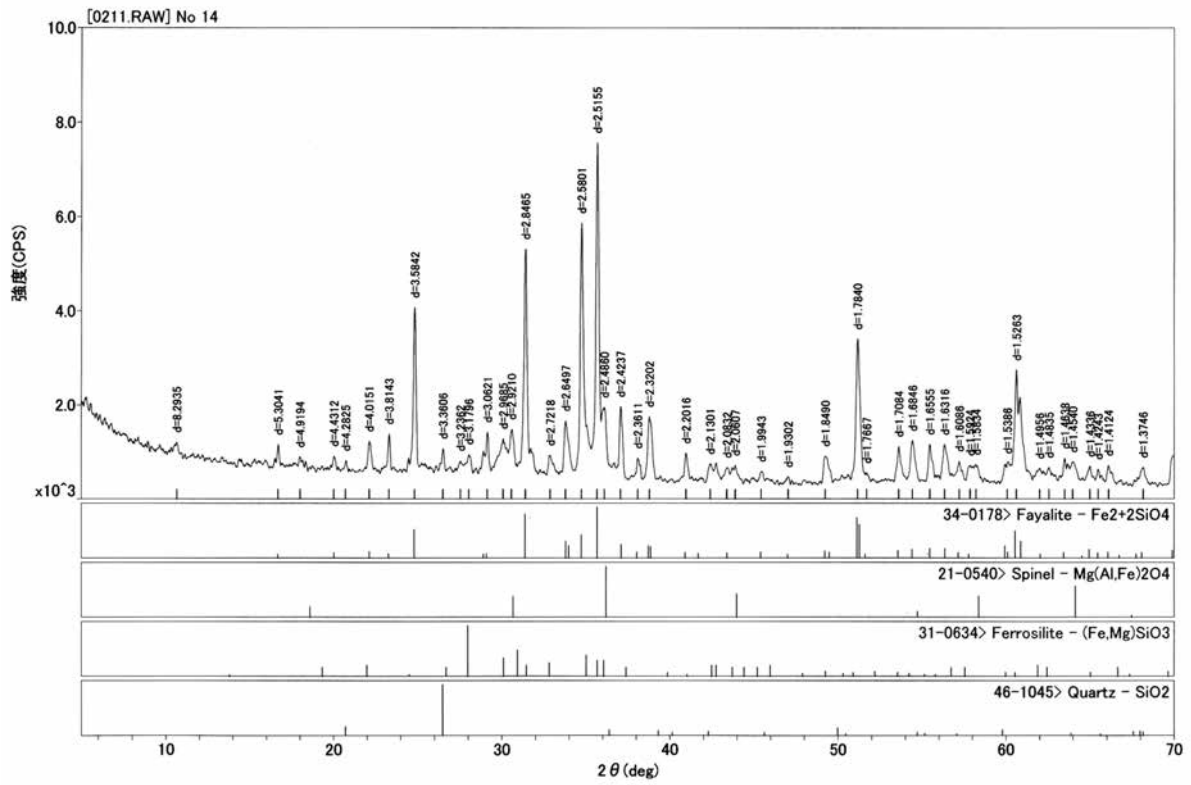
X線回析チャート10



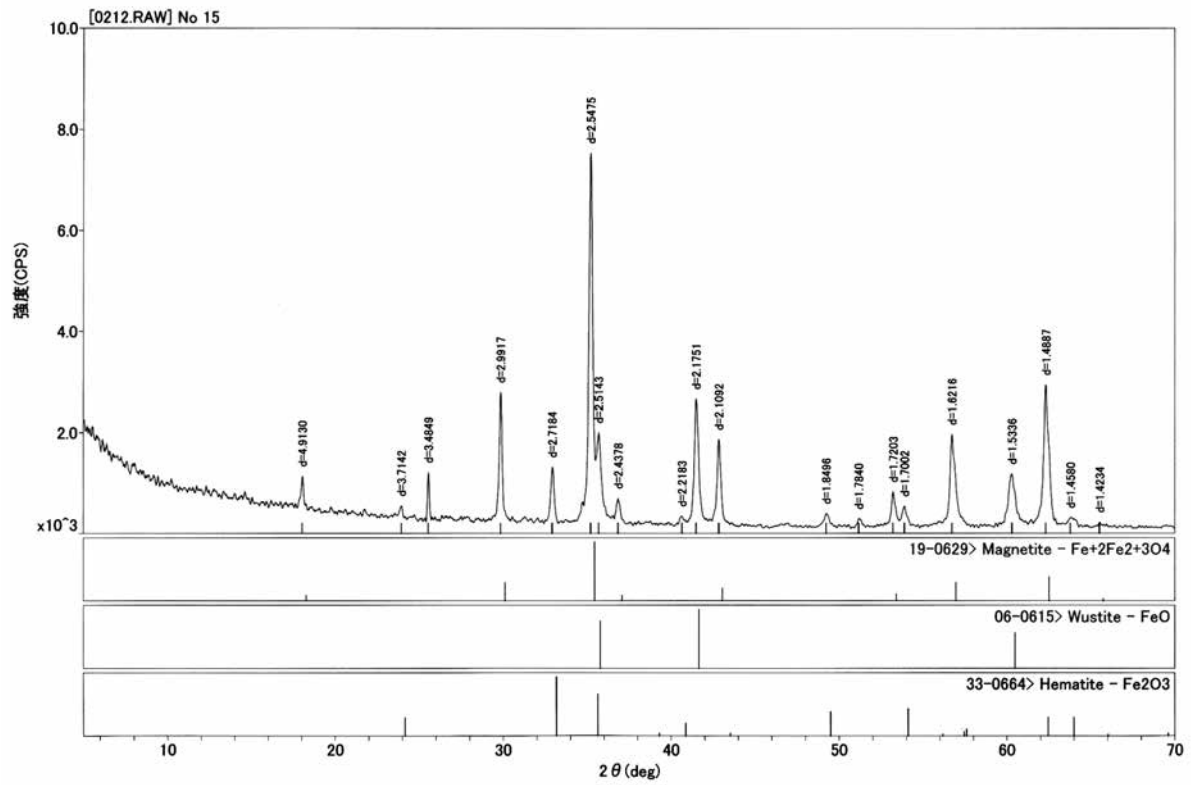
X線回析チャート 11



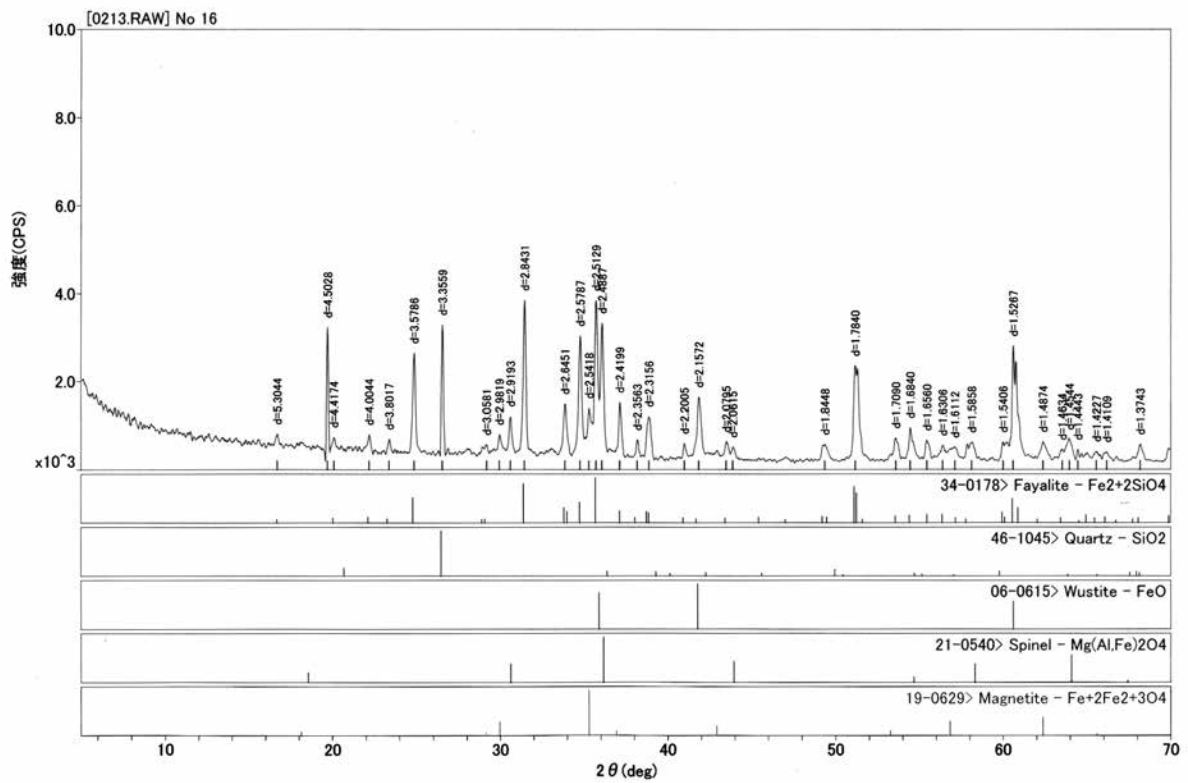
X線回析チャート 12



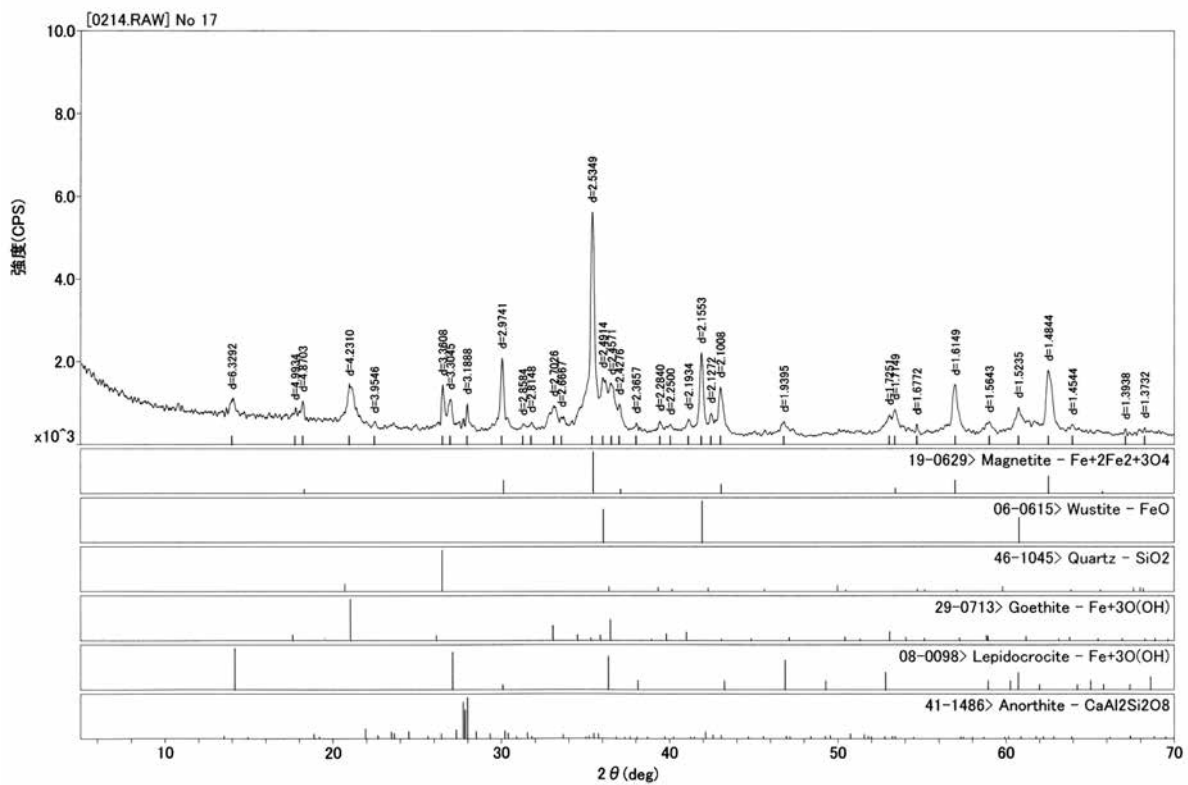
X線回析チャート 13



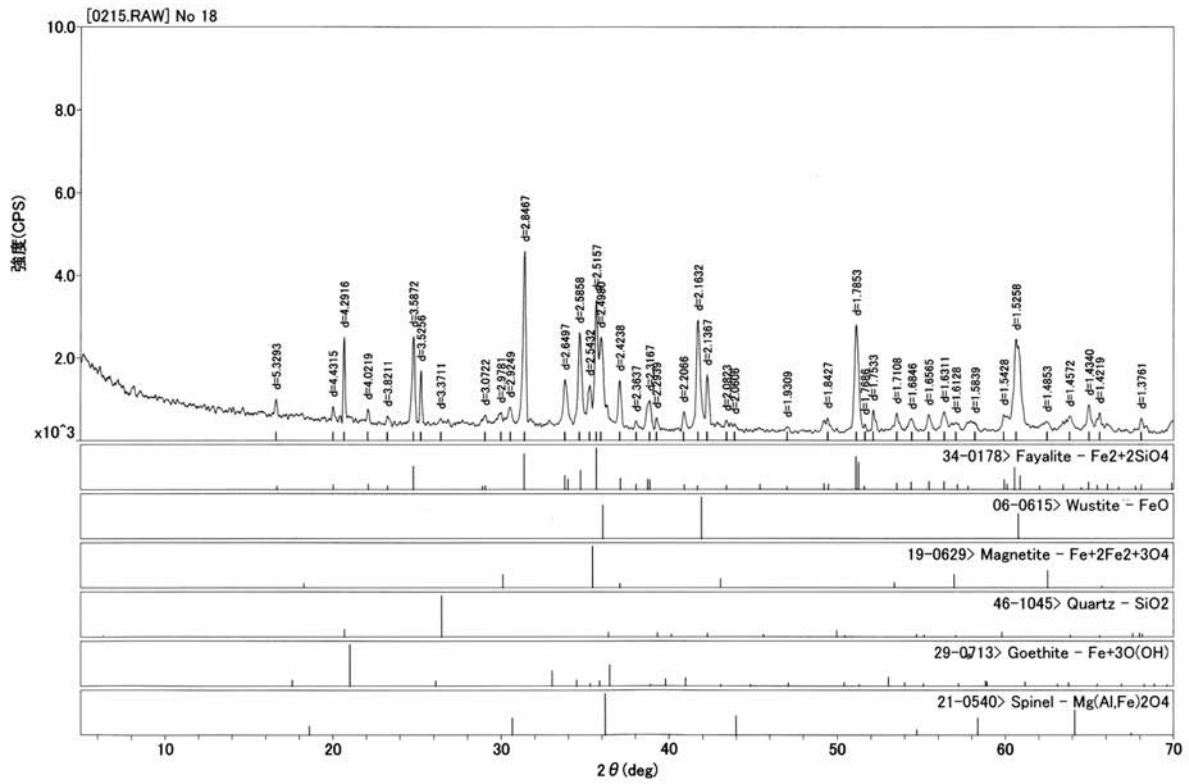
X線回析チャート 14



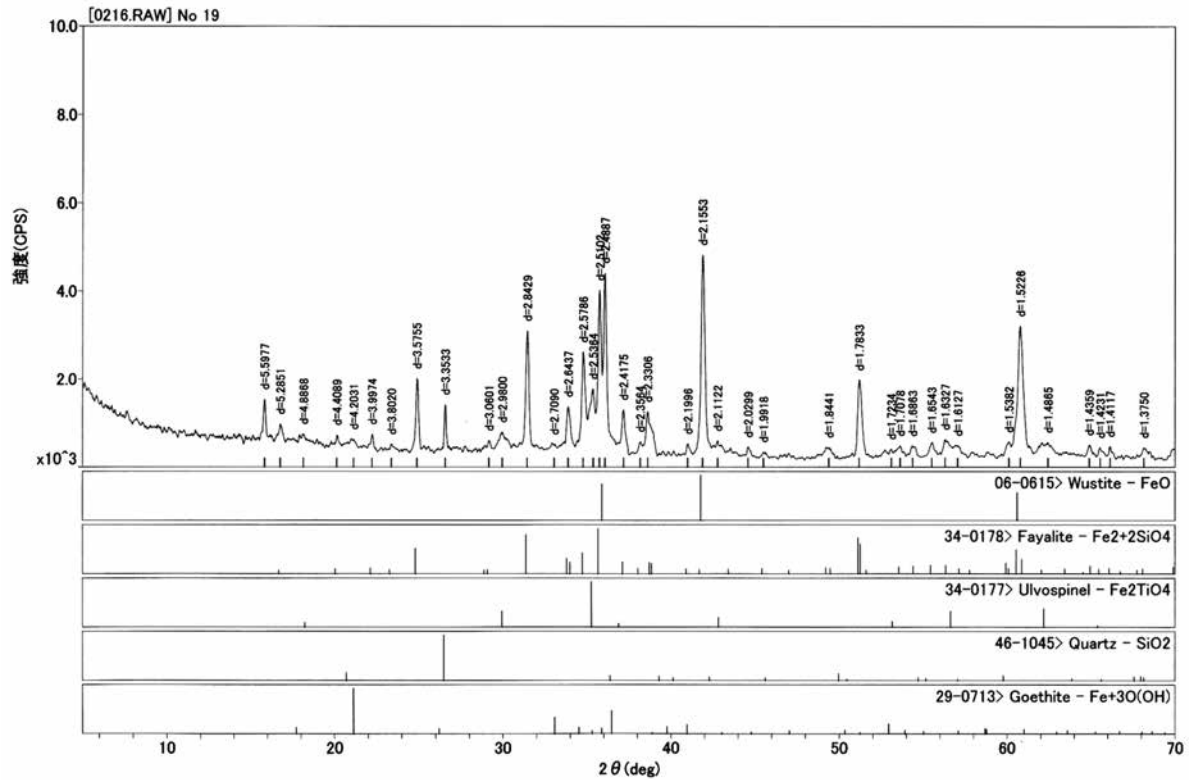
X線回折チャート 15



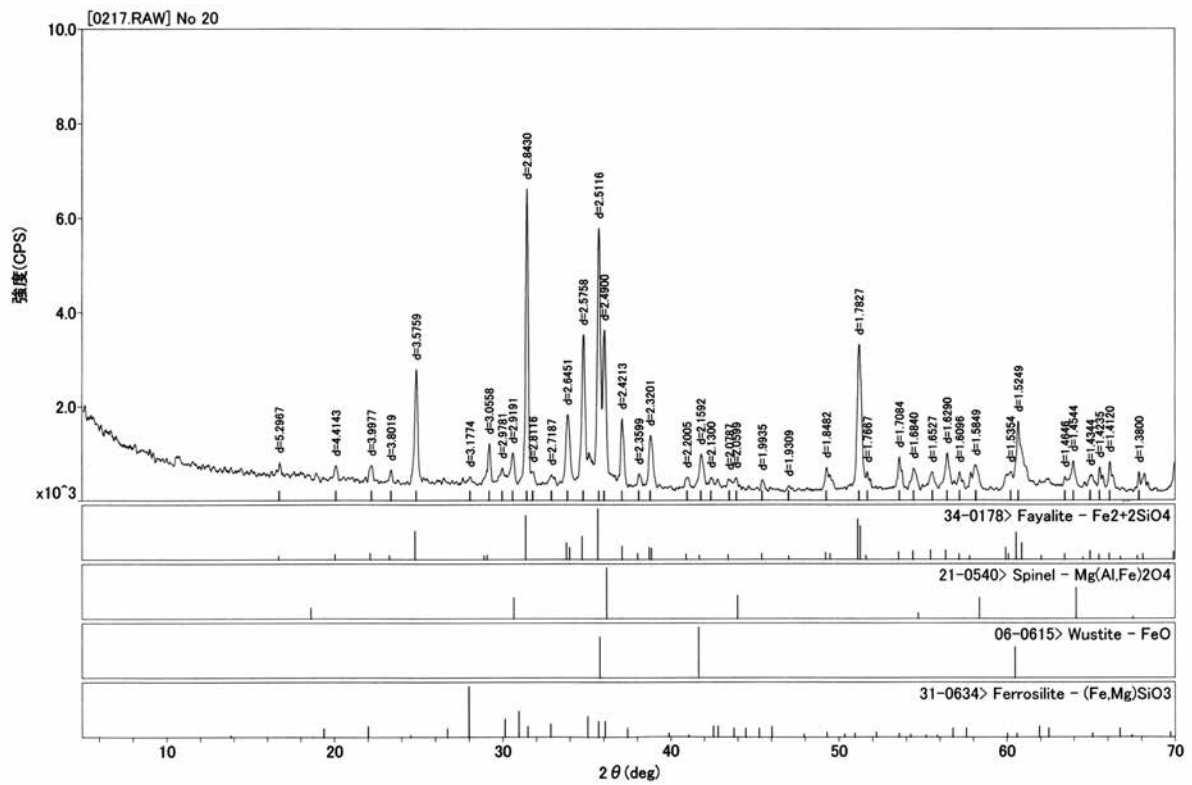
X線回折チャート 16



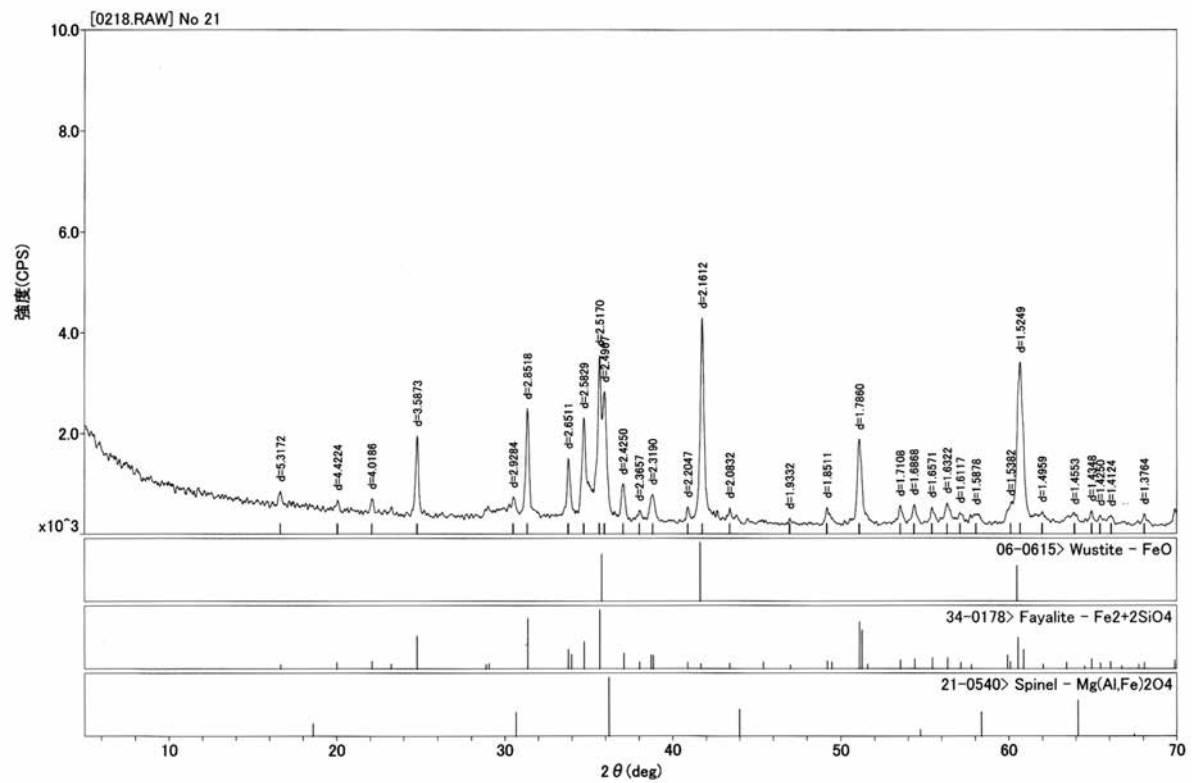
X線回析チャート 17



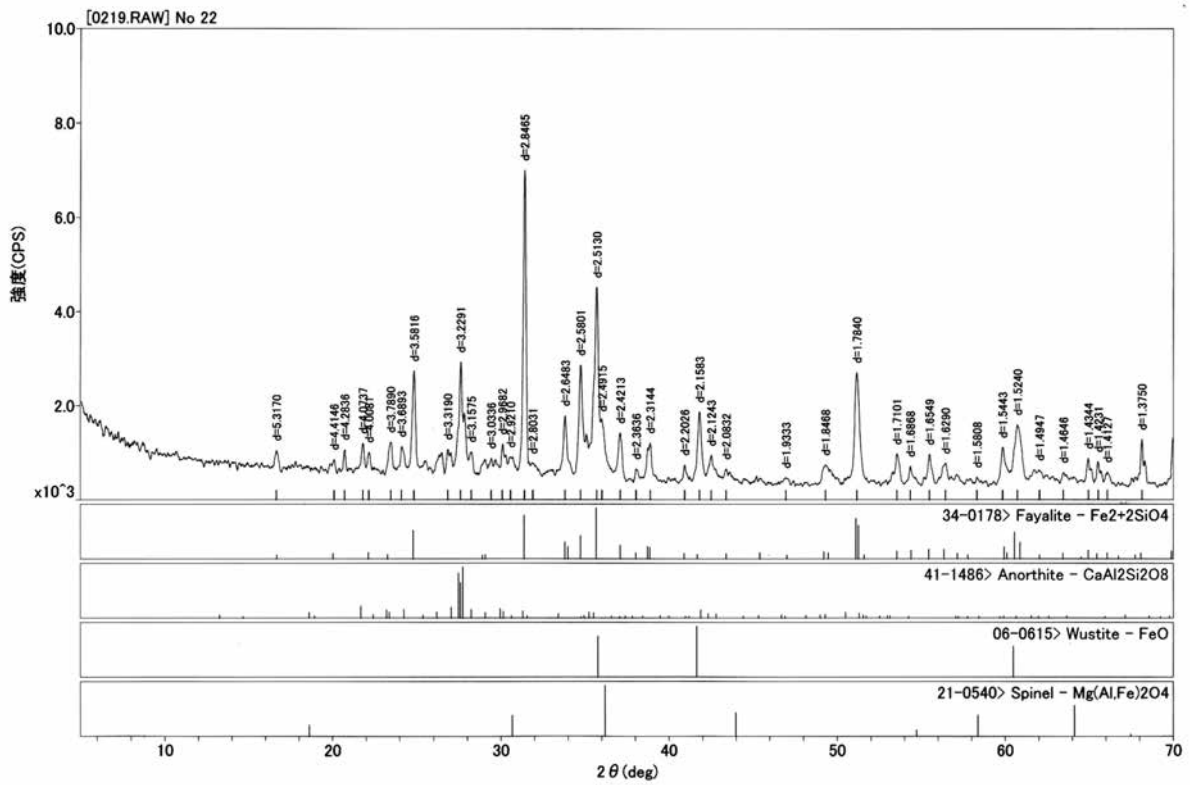
X線回析チャート 18



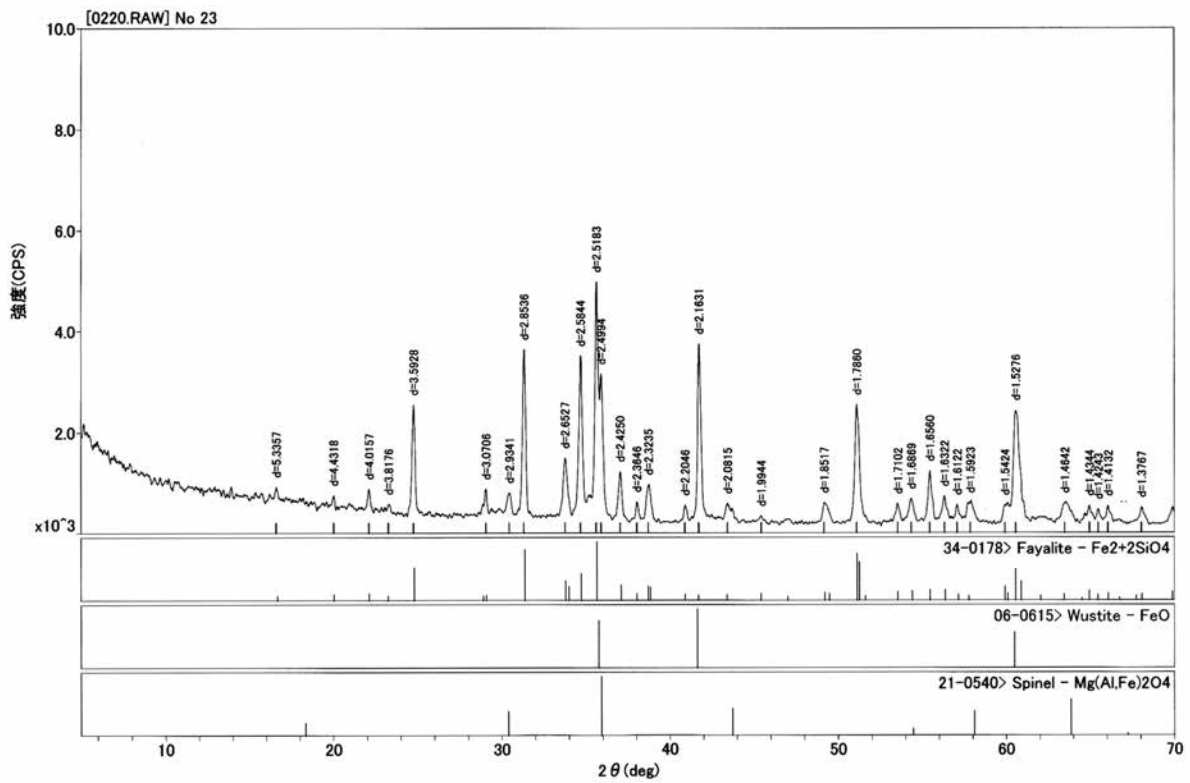
X線回析チャート 19



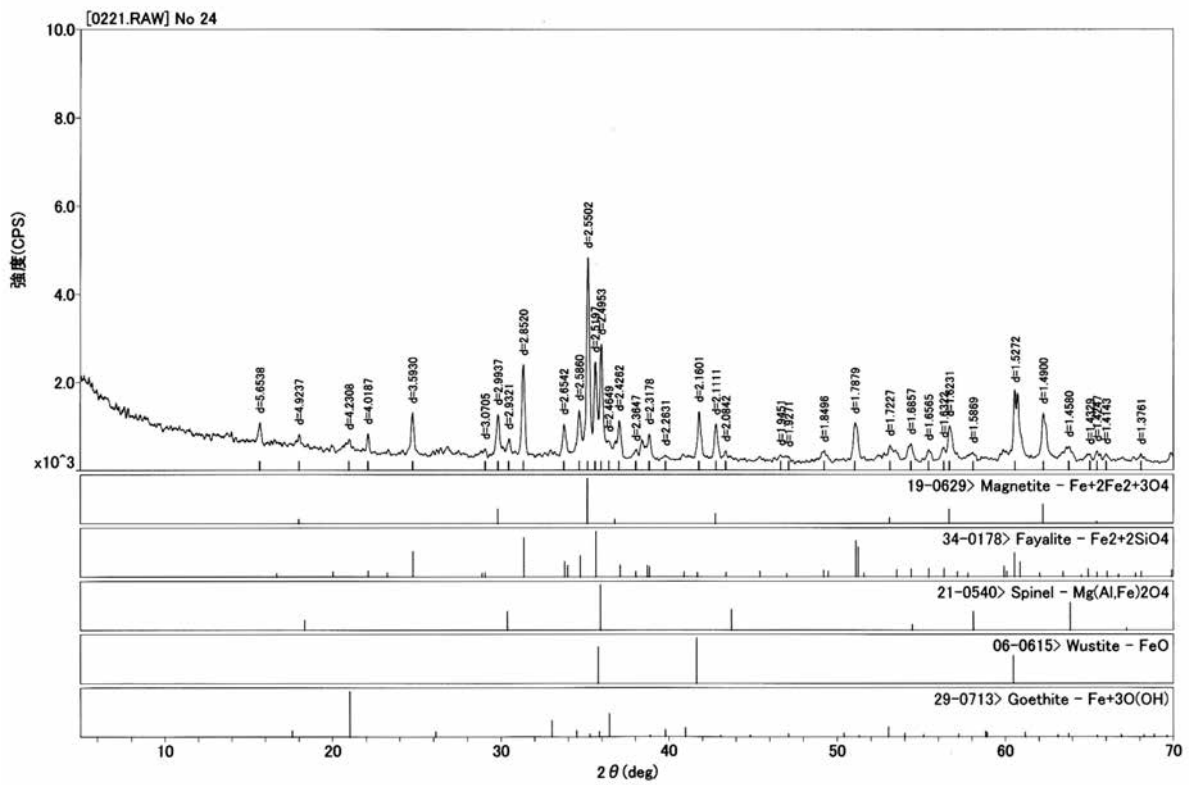
X線回析チャート 20



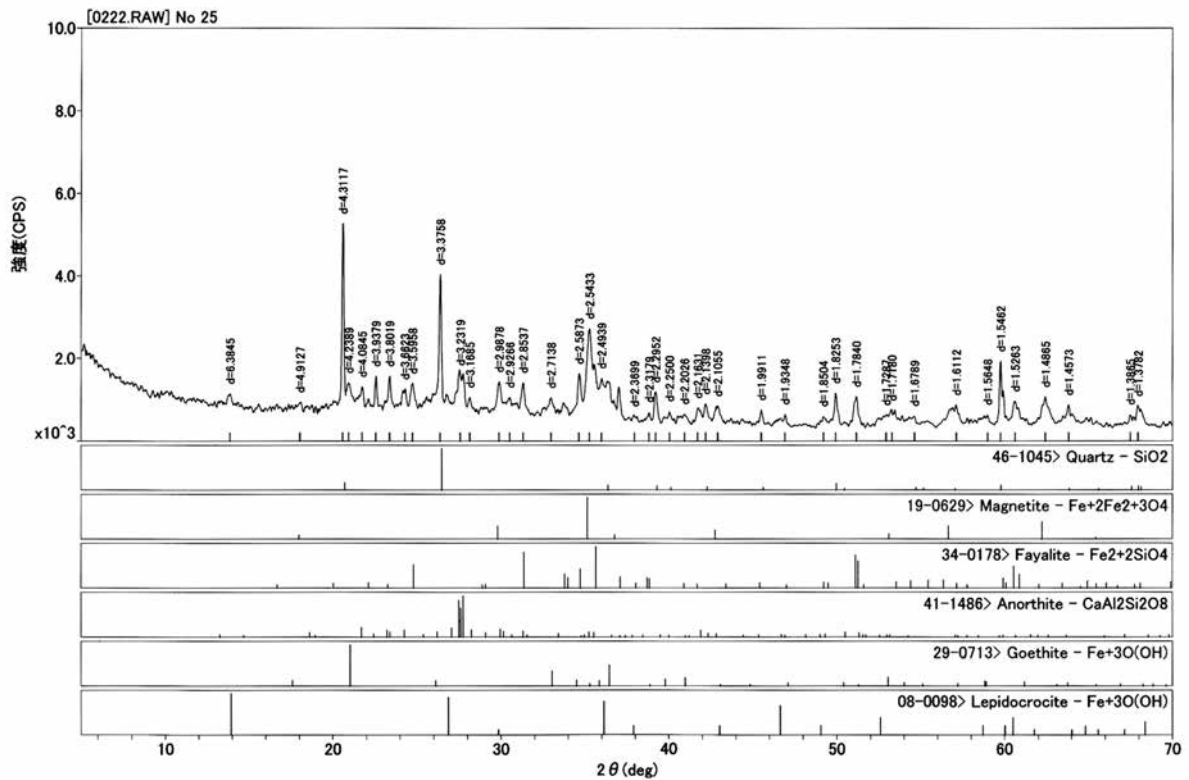
X線回析チャート 21



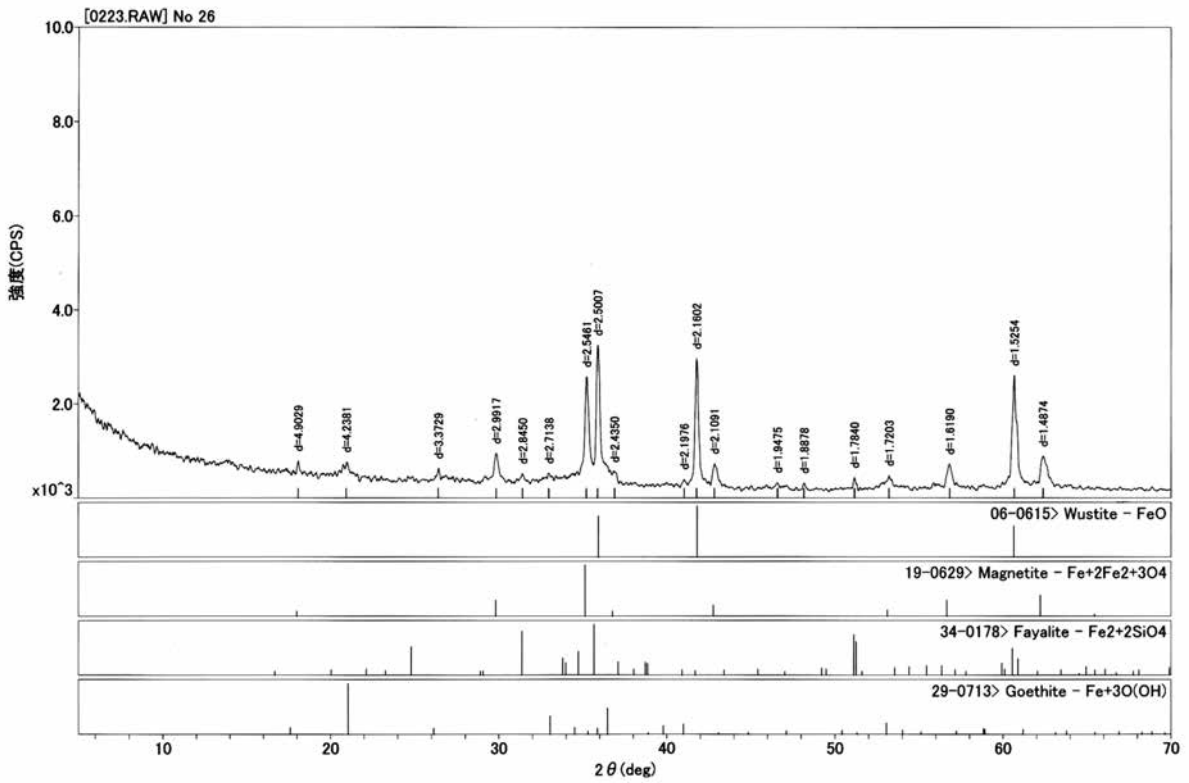
X線回析チャート 22



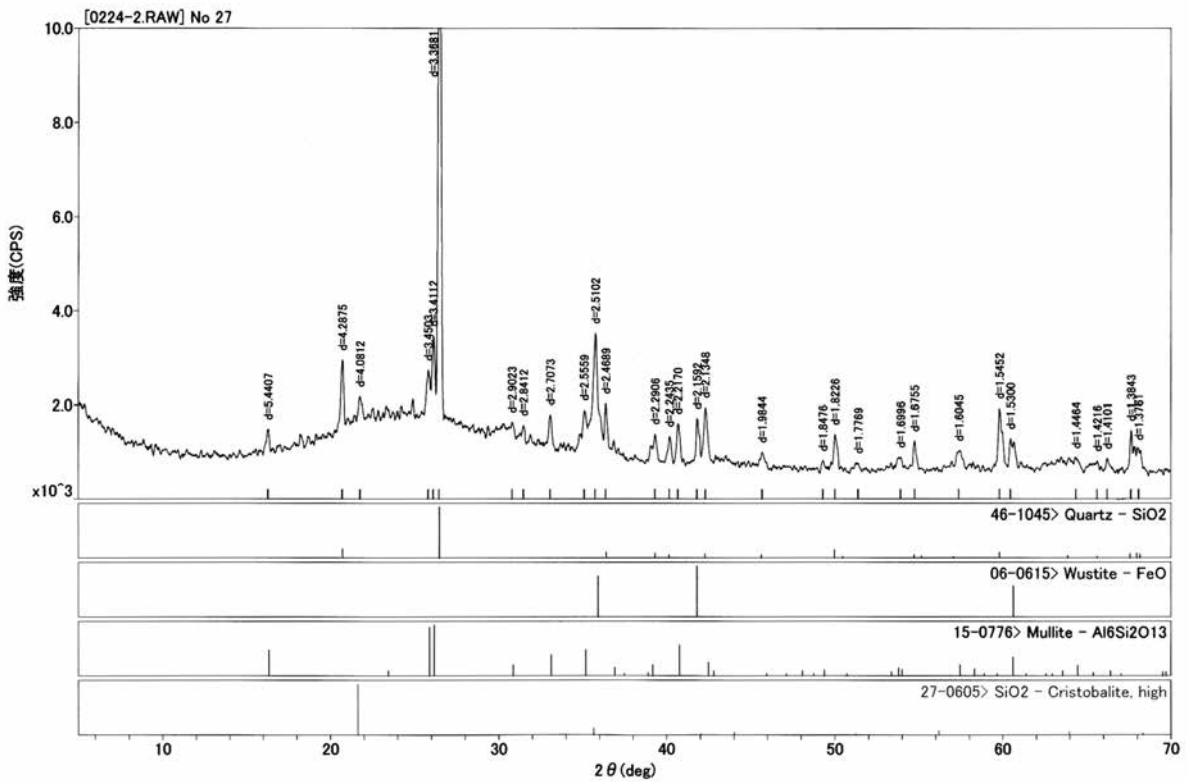
X線回析チャート 23



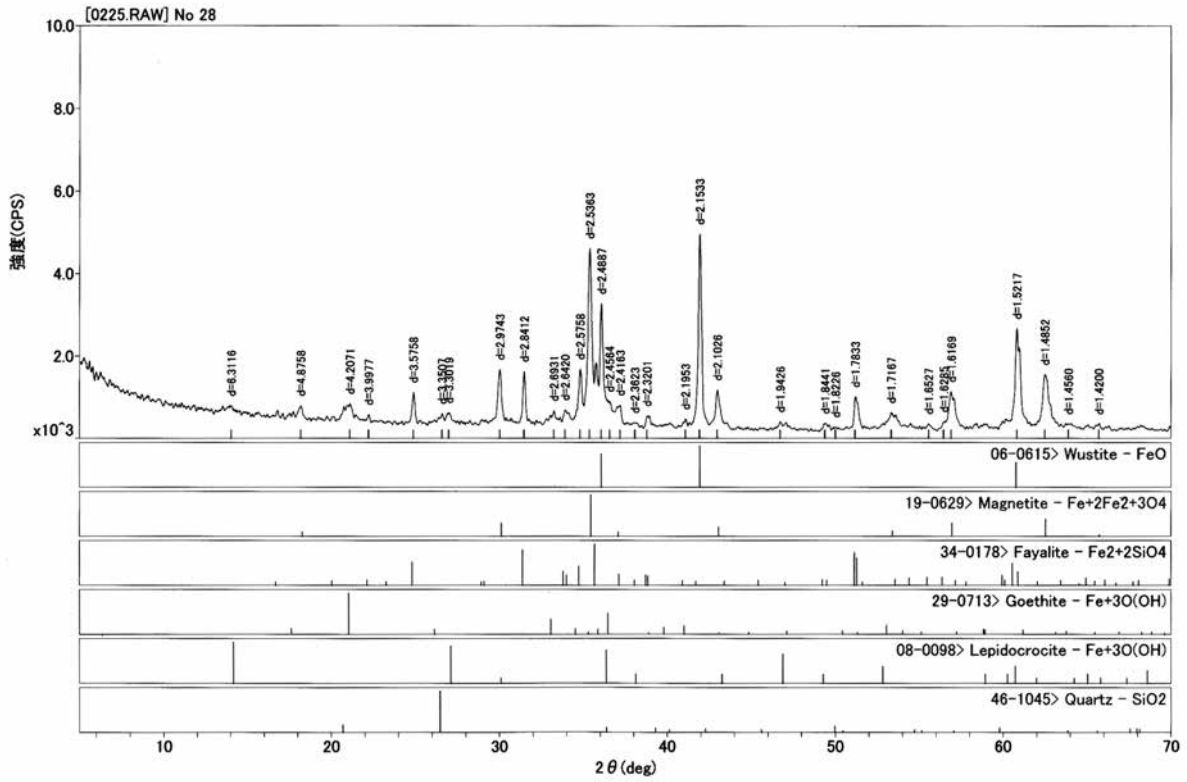
X線回析チャート 24



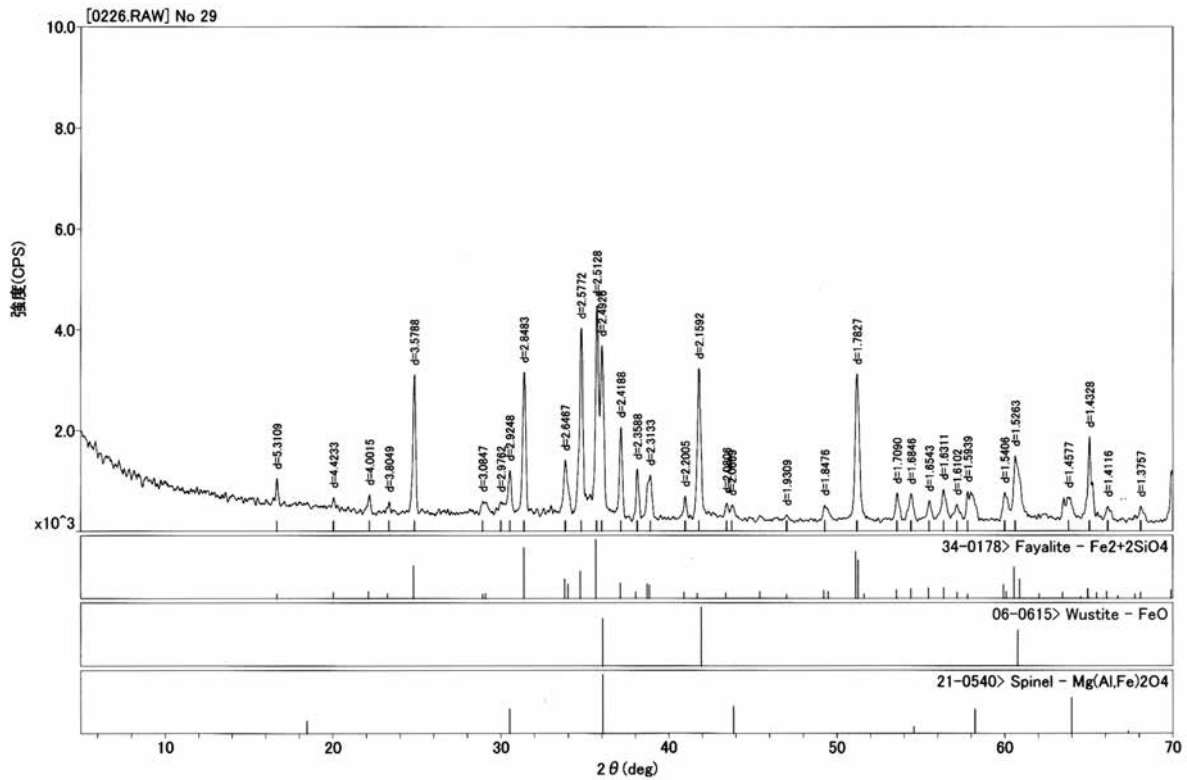
X線回折チャート 25



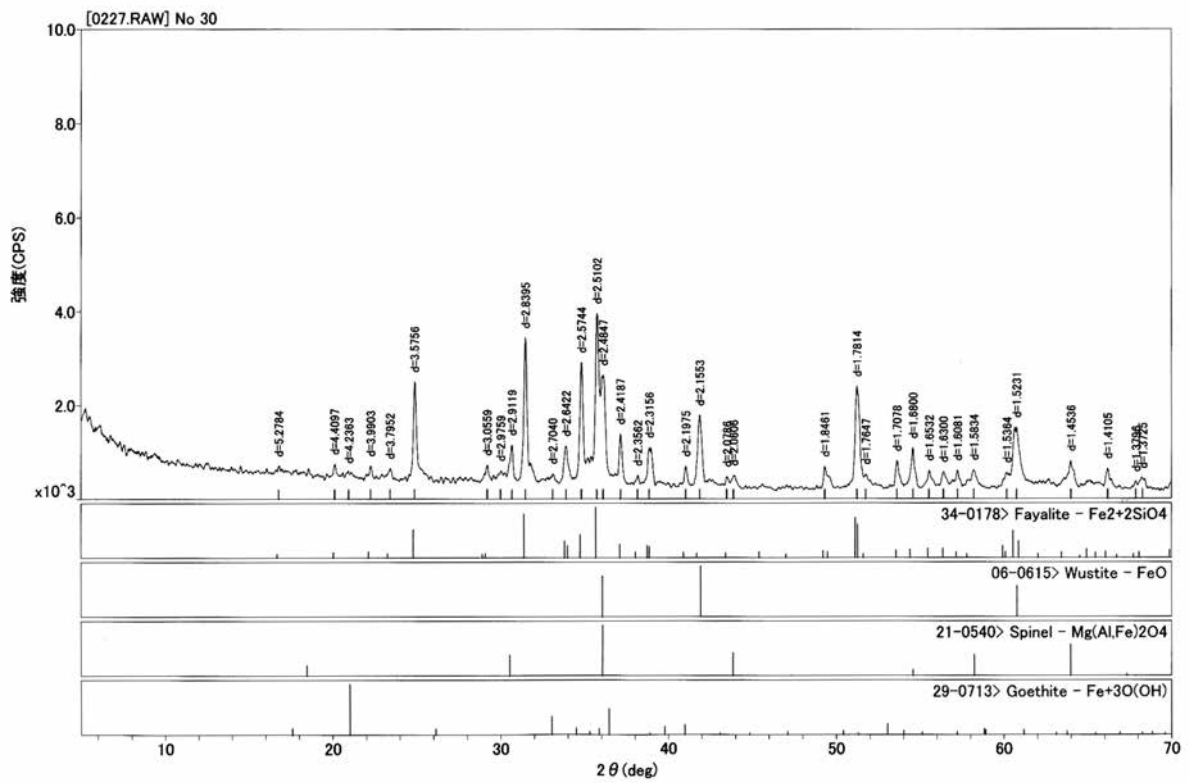
X線回折チャート 26



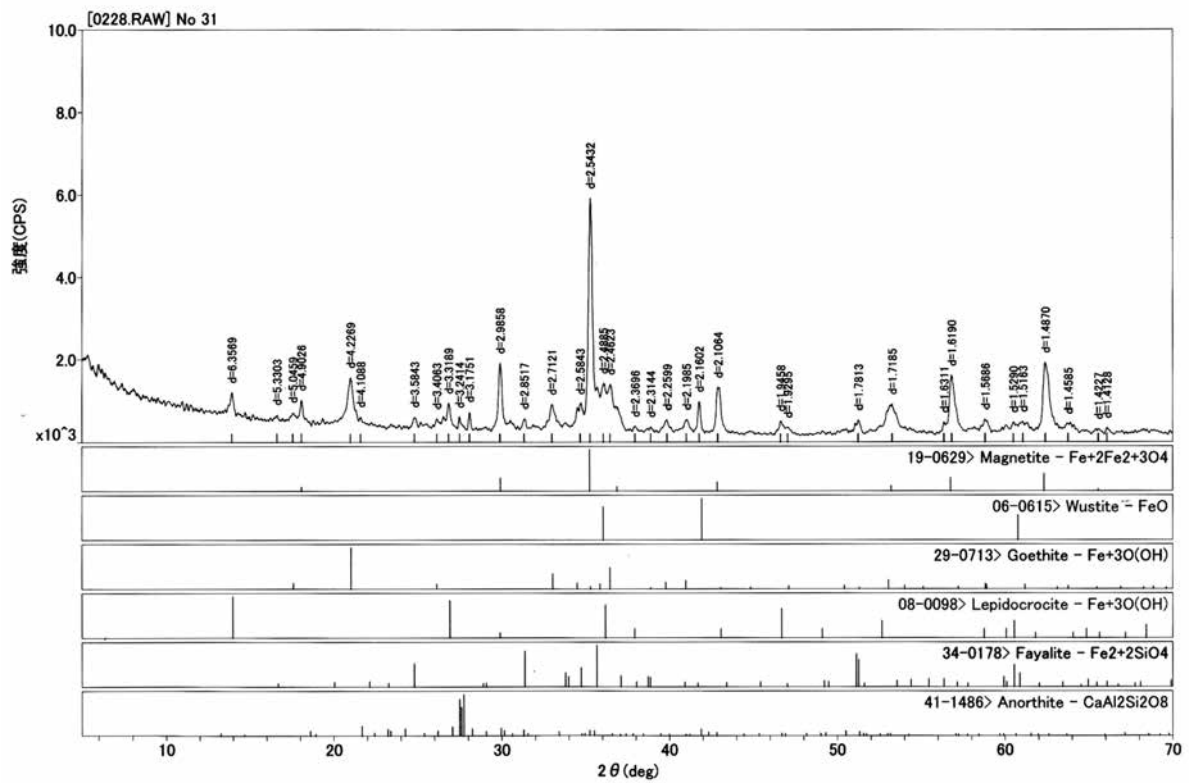
X線回析チャート 27



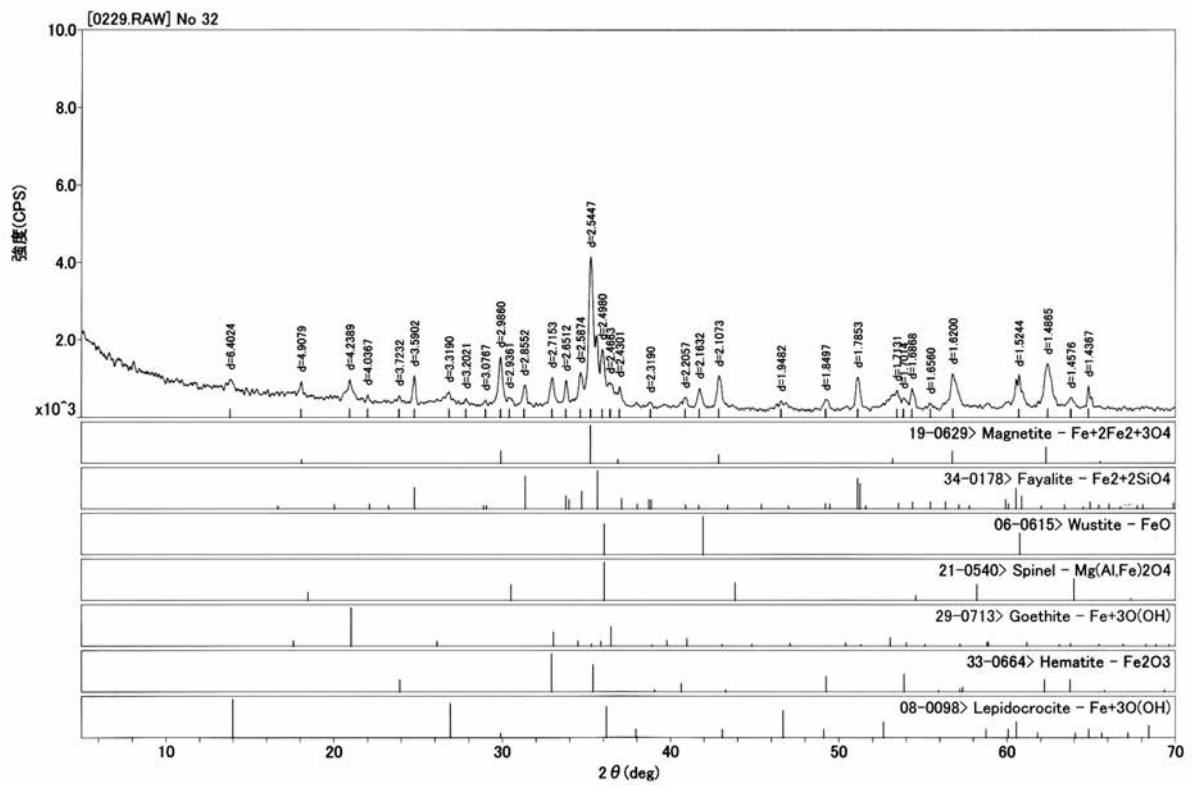
X線回析チャート 28



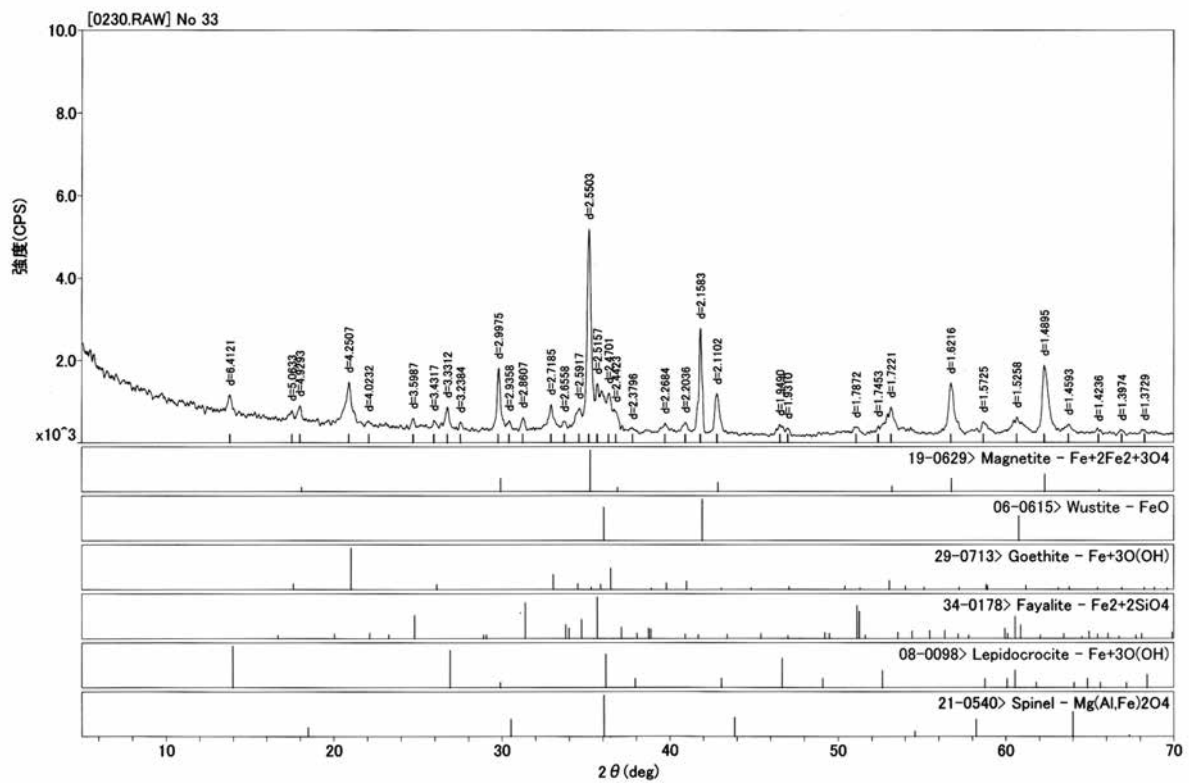
X線回析チャート 29



X線回析チャート 30

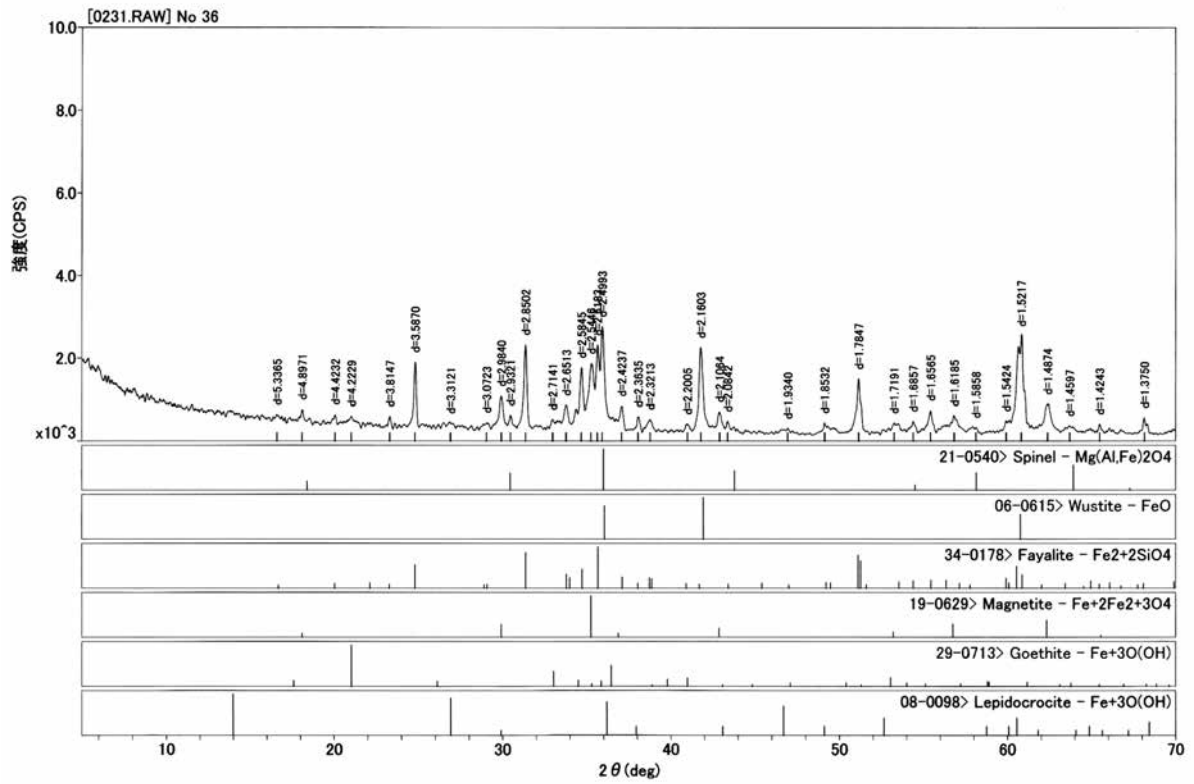


X線回析チャート 31



X線回析チャート 32

3 間木戸Ⅱ・Ⅴ遺跡出土鉄滓類の成分分析



X線回折チャート 33

4 間木戸Ⅱ遺跡出土動物遺存体の同定

— 間木戸Ⅱ遺跡 26号竪穴建物跡から出土した動物遺存体について —

齊藤慶吏（青森県教育庁文化財保護課）

はじめに

山田町間木戸Ⅱ遺跡では、26号竪穴建物跡から出土した7世紀末頃とみられる土師器甕の内部から動物遺存体が検出されている。ここでは、その内容に関する調査結果をまとめ、当遺跡における生業活動を概観する。

1. 資料回収方法

土師器甕の内部に検出された動物遺存体は、土壌ごと回収を行い、自然乾燥させた後に篩がけを実施した。使用した篩の目の開きは4mmで、篩上に分離された動物遺存体については、殻頂および1/2以上残存するもの全てを同定対象とした。一方、篩を通過した資料については、ウニの棘が多数含まれることを確認しているが、今回の分析資料に含めていない。

2. 出土動物遺存体の内容

腹足綱1種、二枚貝綱3種、蔓脚亜綱3種、海胆綱1種が確認された（表1）。河口域の潮間帯に生息する生物で占められ、貝類とウニ・フジツボで構成される。

貝類で最も多く検出されたのは二枚貝綱のイソシジミで、イガイがこれに次ぐ。これらの他にマテガイや巻貝綱のチヂミボラもみられるが、いずれもごく少量混じる程度であった（表2）。イソシジミのサイズは、殻長37.5～45.9mm、殻高28.3～33.8mmで、套線湾入が深く、近縁種のエゾイソシジミとは区別される（表5）。いずれも、山田湾奥部の関口川河口付近の干潟や岩礁で採集された可能性が高い。

ウニは、殻板の碎片、棘、歯、顎骨が出土している（表3）。現在、三陸沿岸ではエゾバフンウニ、バフンウニ、キタムラサキウニの3種がみられるが、種の特定が困難であったため、オオバフンウニ科に留めた。但し、長さ5mm以上の棘が多く、殻板大突起のサイズの特徴がキタムラサキウニに近似するものが多くみられた。

フジツボは、周殻の直径が3cmに満たないチシマフジツボやアカフジツボが多い（表4）。うま味成分を煮出すことの出来る調味食材としても知られるが、本遺跡で出土しているのは小型のサイズが多く、意図的に採集されたことを示す証拠は得られなかった。イガイの殻などに着生していたものが混入した可能性を考慮する必要がある。

おわりに

26号竪穴建物跡出土の土師器甕内部より検出された動物遺存体の内容は、魚骨や鳥獣骨が一切含まれず、貝類とウニ・フジツボを中心とするものであった。これらは、二枚貝の左右殻の数もほぼ同率で、極めて一括性の高い資料と認められるが、廃棄以前の調理・採集時にも、その組成が維持されていたのかどうかについては、より厳密な検討を加える必要がある。山田湾周辺では、沢田Ⅱ遺跡にお

いて、8世紀代の貝層が検出されており、ここでの出土貝類は、砂泥底及び干潟に生息する種が多く、岩礁性の種群がやや少ないという傾向がみられた(佐藤・熊谷1997)。本遺跡においても、イソシジミが最多であることから海岸部の状況は、ほぼ同様であったと予想される。

間木戸Ⅱ遺跡から出土した動物遺存体は、限られた分量ではあるものの、7世紀末の生業復元に資する一括性の高い貴重な資料である。今後も同時代の資料の蓄積を行い、古代三陸沿岸地域の海産物利用に関する議論が深められることを期待したい。

謝辞

本報告をまとめるにあたり、(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの佐藤あゆみ氏、佐藤剛氏、中村隼人氏、宮古市教育委員会の高橋憲太郎氏には、大変お世話になりました。記して、感謝申し上げます。

引用・参考文献

奥谷喬司編 2000 『日本近海産貝類図鑑』 東海大学出版会

佐藤正彦・熊谷賢 1997 「沢田Ⅱ遺跡出土の動物遺存体」『沢田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第268集

日本付着生物学会編 2006 『フジツボ類の最新学』 恒星社厚生閣

表1 間木戸Ⅱ遺跡出土動物遺存体学名表

巻貝綱 GASTROPODA
チヂミボラ <i>Nucella lima</i>
二枚貝綱 BIVALVIA
イガイ <i>Mytilus coruscus</i>
イソシジミ <i>Nuttallia japonica</i>
マテガイ <i>Solen strictus</i>
蔓脚亜綱 CIRRIPIEDIA
アカフジツボ <i>Megabalanus rosa</i>
チシマフジツボ <i>Semibalanus cariosus</i>
イワフジツボ <i>Chthamalus challengeri</i>
海胆綱 ECHINOIDEA
オオバフンウニ科の一種 <i>Strongylocentrotidae</i> gen. et sp. indet.
キタムラサキウニ <i>Strongylocentrotus nudus</i>

表2 巻貝・二枚貝綱出土量表

種	左右	数
チヂミボラ	—	3
イソシジミ	L	33
	R	28
イガイ	L	11
	R	19
イガイ(幼貝)	L	1
	R	1
マテガイ	L	1
	R	1

表3 海胆綱出土量表

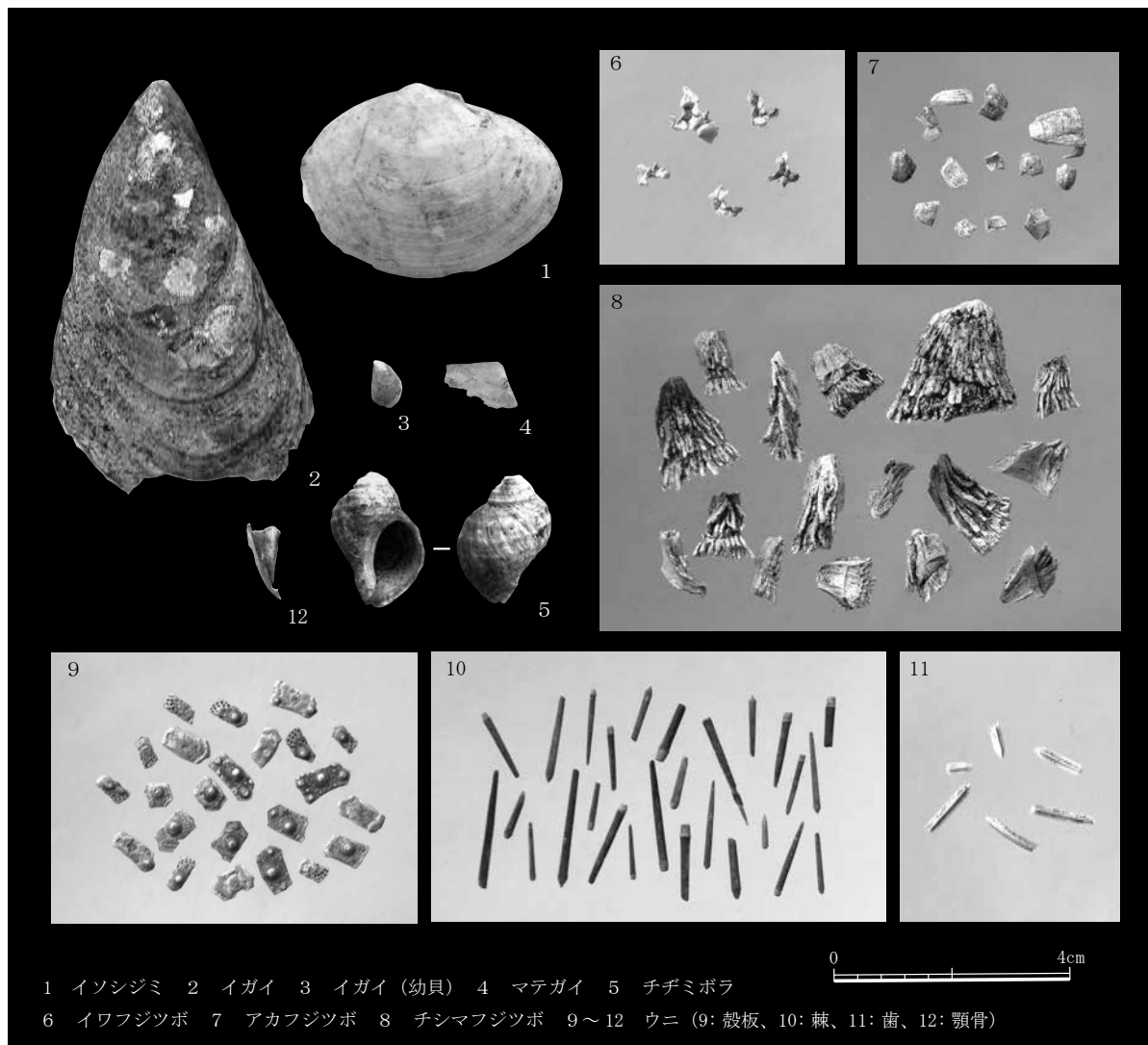
種	部位	数
オオバフンウニ科の一種	殻板	19
オオバフンウニ科の一種 (キタムラサキウニ近似)	殻板	37
オオバフンウニ科の一種	顎骨	14
オオバフンウニ科の一種	歯	6
オオバフンウニ科の一種	棘	125

表4 蔓脚亜綱出土量表

種	部位	数
チシマフジツボ	周殻片	48
アカフジツボ	周殻片	16
イワフジツボ	周殻片	5
蔓脚亜綱の一種 (シロスジフジツボ近似)	周殻片	6
蔓脚亜綱の一種	周殻片	21

表5 イソシジミ計測値(mm)

	0～5	5～10	10～15	15～20	20～25	25～30	30～35	35～40	40～45	45～50	50～55
殻長	0	0	0	0	0	0	0	2	8	1	0
殻高	0	0	0	0	0	2	12	0	0	0	0



Ⅶ 総 括

本書では、間木戸Ⅱ遺跡、間木戸Ⅴ遺跡の調査成果を別記載で報告してきたが、両遺跡の立地状況や遺跡の性格を鑑み、総括をまとめている。調査時は複数の重複関係により、検出遺構を総合的に検討し、その全体像を把握する作業が困難であった。室内整理の中で判明した、遺跡の様相を通観するのに必要な資料の検討を下記に記載する。

1 縄文時代

出土遺物の中でも縄文土器が圧倒的な量を占めている。間木戸Ⅱ遺跡では大コンテナ 54 箱、間木戸Ⅴ遺跡は大コンテナ 1 箱出土した。これまでの周辺における調査成果から、縄文時代中期後半の竪穴建物跡を多数検出しているのに反して、出土遺物数の少ない傾向が指摘されていた(岩文埋 2000「沢田Ⅰ遺跡」)。しかし、今回の調査では、間木戸Ⅱ遺跡で調査区全体を覆う包含層が検出され、これまでの周辺遺跡における調査例の中でも遺物出土状況が濃密であることは確然である。調査区西側では、間木戸川により形成された段丘状の低地部に大量の遺物が出土したことから、一体が捨て場として使われていたことも想定したが、土器の破片資料が多いことや、一部を除き堆積土が調査区の基本層序と類似する点等から捨て場ではなく自然堆積と判断した。

時期は一部早期の土器片も出土しているが、遺構内からの出土は概ね縄文時代中期のもので、その中でも大木 8a～8b 式が中心、次いで 6～7b 式が続く。前期の土器片も大木 1 式から途切れず見受けられるが、全体的に破片資料が多く土器の全体形状がわかる資料が少ない。器種は、深鉢が主で、大木 6 式にみられる球胴形深鉢も散見されるが、浅鉢と明確にわかる資料は間木戸Ⅴ遺跡出土の V P027 (大木 8b 式) のみである。

石器は、遺構内から石鏃と敲磨器類の出土が多い。石核がいずれも北上山地中生代前期の青灰色の頁岩で、同じ石質のものが石鏃等にも使用されている。また、十和田火山に由来する可能性のある軽石や、雫石・折居産の黒曜石は他地域との交流を窺わせる資料である。

石製品は、珧状耳飾り(沢跡 G027、Ⅱ A21v のⅣ層 G030) や、縄文時代中期中葉(大木 8b 式期) に帰属する 6 号竪穴建物跡から石棒(G011) が出土している。また、土製品も同時期の斧状土製品(G004) が中期中葉(大木 8b 式期) に帰属する 7 号竪穴建物跡から出土している。

縄文時代に帰属する遺構は、間木戸Ⅱ遺跡で竪穴建物跡 25 棟、土坑 13 基、焼土遺構 10 基、集石遺構 1 基、間木戸Ⅴ遺跡で竪穴建物跡 2 棟、焼土遺構 1 基、埋設土器 1 基を検出した。出土した縄文土器と遺構の重複関係から推定できる竪穴建物跡の時期は第 21 表の通りである。概ね中期前葉から中葉に帰属される。検出した炉は、地床炉、石囲炉(円形・方形・楕円形)、複式炉、土器埋設炉と様々な形状であった。地床炉は床面中央に設けられているが、石囲炉は壁際に寄るものが多い。間木戸Ⅱ遺跡内で検出した竪穴建物跡には周溝や柱穴の検出が少なく、規則性は認められない。一方、間木戸Ⅴ遺跡内で検出した竪穴建物跡 2 棟については、規則性のある柱穴や一部で周溝が認められる。同時期に存在していた集落の中で違いがあることは、両者の立地条件による可能性がある。つまり、平坦部と斜面部の違いによるものなのかということであるが、間木戸Ⅴ遺跡からの検出数は 2 棟のみであるため今後周辺の調査に期待したい。

土坑は、フラスコ状や、陥し穴状遺構と考えられる土坑を検出した。貯蔵穴域や墓域といった機能

面でのまともは確認できず、調査範囲外に居住域以外の集落構造が検出される可能性が考えられる。

焼土遺構・炉跡は、石囲炉についても単独で遺構名を付したものが2基ある。これは、屋外炉の存在を示すというよりは、これに伴う竪穴の壁が重複する遺構に壊され竪穴建物跡として確認することが出来なかったものという認識である。

(佐藤 あゆみ)

第21表 縄文時代竪穴建物跡一覧表

遺跡	号	帰属時期	炉の種類	炉の位置	備考
II	1号竪穴建物跡	中期中葉以前	不明	－	
	2号竪穴建物跡	中期中葉	地床炉	北西壁に寄る	AMS測定 4,456 ± 29
	3号竪穴建物跡	中期中葉	石囲炉（円形）	南西壁に寄る	古期炉（石囲）
	4号竪穴建物跡	中期中葉～後葉古	複式炉	南西壁際	床面焼土 2
	5号竪穴建物跡	中期中葉	複式炉	中央	床面焼土 1
	6号竪穴建物跡	中期中葉	地床炉	中央	炉は断面のみ確認
	7号竪穴建物跡	中期中葉	石囲炉（方形）	北壁に寄る	
	8号竪穴建物跡	前期後葉～中期前葉	石囲炉（楕円形）	北壁に寄る	
	9号竪穴建物跡	中期中葉	石囲炉（方形）	南西壁に寄る	
	10号竪穴建物跡	中期前葉～中葉	石囲炉（円形）	南壁に寄る	AMS測定 4,440 ± 30
	11号竪穴建物跡	中期中葉	石囲炉（円形）	中央	古期炉（石囲）
	12号竪穴建物跡	中期中葉	石囲炉（円形）	南西壁に寄る	床面焼土 1
	13号竪穴建物跡	前期	地床炉	中央	床面焼土 1
	14号竪穴建物跡	前期中葉～中期前葉	地床炉	中央	床面焼土 2
	15号竪穴建物跡	前期中葉～中期前葉	地床炉	中央	
	16号竪穴建物跡	前期中葉～後葉	地床炉	北に寄るか	
	17号竪穴建物跡	中期中葉	石囲炉（楕円形）	北東壁に寄る	
	18号竪穴建物跡	前期前葉～中葉	不明	－	
	19号竪穴建物跡	中期中葉以前	不明	－	
	20号竪穴建物跡	中期前葉～中葉	不明	－	
	21号竪穴建物跡	中期前葉～中葉	石囲炉（円形）	北東壁に寄る	
	22号竪穴建物跡	前期後葉～中期前葉	不明	－	
	23号竪穴建物跡	中期中葉以前	不明	－	
	24号竪穴建物跡	中期前葉	土器埋設炉	中央	AMS測定 4,561 ± 29
	25号竪穴建物跡	中期中葉以前	不明	－	
V	1号竪穴建物跡	中期	石囲炉（円形）	中央	
	2号竪穴建物跡	中期中葉	不明	－	

2 古 代

(1) 土 師 器 (第 155 図)

間木戸Ⅱ遺跡と間木戸Ⅴ遺跡では古代の遺構として、間木戸Ⅱ遺跡から竪穴建物跡群、間木戸Ⅴ遺跡では竪穴建物跡と製鉄工房、炭置き場という製鉄関連遺構が出土した。これらの遺構のうち、特に製鉄関連遺構については、岩手県沿岸地域の中央部において近年調査例が増加しているものの、詳細な時期を検討できる出土例に恵まれていなかった。今回の調査では所属時期の決定に普遍的に用いられる土器がまとまって出土したことから、これらの遺構群の所属時期を検討できる資料が得られた。

そのため、間木戸Ⅱ遺跡と間木戸Ⅴ遺跡の各遺構とそれに関連する遺物包含層から出土した土器を検討し、各遺構の所属時期を明らかにすることで、古代における人々の時期ごとの遺跡の利用状況を想定する。なお、掲載した資料は細別器種の異なるものについてはすべて、調整の異なるものについては可能な限り抽出した。

・間木戸Ⅱ遺跡

30号竪穴建物跡に伴うものでは、土師器の甕、坏がある。甕は中型の肩の張るものと中型から大型の長胴のものである。肩の張るものはやや肩が張る程度で、外面調整はミガキである。長胴のものは胴部中央に最大径があり、外面調整はミガキである。坏は内面黒色処理の小型から大型の有段のものと小型の段を持たない平底のものである。有段のものは、段は1段で輪積みと一致する。小型のものは平底である。底部は厚く、角にも厚みがあることから、栗罎式の坏の底部を成形する前の状態の平底と考えられる。

26号竪穴建物跡に伴うものでは、土師器の甕、壺、坏、鉢（椀）と須恵器の甕がある。これらは床面及びカマド出土のものと同様に埋土から出土したものであるが、埋土の厚さが10cm程度であることと、遺物のまとまりや磨滅、残存率といった出土状況において著しい違いが見られないことから、すべて遺構に伴うものと判断した。

土師器では、甕は中型から大型の長胴のものと小型の寸胴のものである。長胴のものは胴部中央に最大径があり、外面調整はミガキとハケの両者がある。壺は中型の丸みのある胴部で、口縁はやや直立気味に立ち上がった後に外傾して開く。坏は内面黒色処理の小型から大型の有段のもので、段は1段で輪積みと一致し、内面にも段が見られる。鉢は内面黒色処理で、やや丸みを持ちながら直線的に開くものと口縁部が内湾する丸みのあるものである。須恵器は中型の甕で平底である。

27号竪穴建物跡に伴うものでは土師器の甕があり、小型の寸胴のものである。

29号竪穴建物跡に伴うものでは土師器の坏があり、内面黒色処理の有段のもので、段は1段で輪積みと一致する。

SN07～10に伴うものでは近接して出土した土師器の甕があり、小型のものである。外面調整はハケである。

遺物包含層からは土師器の坏が出土した。小型の有段のもので、段は1段で輪積みと一致する。

・間木戸Ⅴ遺跡

2号工房跡の下の遺物包含層からは土師器の壺の小片が出土した。壺は赤彩壺で、口縁部の内外面に縦線を3本ないし4本単位で施文している。

3号竪穴建物跡に伴うものでは、土師器の甕、壺、坏がある。これらのうち、上段が床面及び埋土最下層出土のもので遺構に伴うもので、下段が埋土から出土したものである。遺構が斜面に構築され

ていることから短期間に埋まった可能性が高く、あまり大きな時間差は想定できない。

甕は中型の長胴のもので、外面調整はミガキとハケの両者がある。頸部の屈曲が緩やかなものである。壺は中型の丸みのある胴部で、口縁はやや直立気味に立ち上がった後に外傾して開くものと頸部からなだらかに外傾して開くものがある。坏は内面黒色処理の中型と大型の有段のものと中型の段のないものである。有段のものうち、大型のものでは段は1段で輪積みと一致する。中型のものでは段は2段で沈線状のものである。中型のものは平底である。底部の外面は丁寧なミガキであり、底部は厚く、角にも厚みがあることから、栗罎式の坏の底部を成形する前の状態の平底と考えられる。段のないものでは底部から口縁まで丸みを持って開くものとかなり平底に近いものがある。

遺物包含層からは甕、壺、坏、鉢（椀）が出土した。これらはすべて製鉄関連遺構よりも上位の層からまとまって出土したものであることから、製鉄関連遺構の時的な下限を示す資料と考えられる。甕は中型の長胴のものと頸部の屈曲が緩やかなものである。外面調整はミガキとハケの両者がある。壺は中型から大型の丸みのあるものと小型のやや下膨らみになるもの、小型の四脚付きのものである。坏は内面黒色処理の中型の有段のものと大型のものである。有段のものでは段は1段で内面にも段のあるものと輪積みと一致するものである。鉢は内面黒色処理で、口縁部が内湾する丸みのあるものである。中型のものでは段は2段で沈線状のものである。

・各遺跡の遺構の構築時期と遺跡の利用状況について

間木戸Ⅱ遺跡と間木戸Ⅴ遺跡から出土した土師器資料は、栗罎式から国分寺下層式に位置付けられる。

間木戸Ⅱ遺跡では、30号堅穴と26号堅穴では、30号堅穴は甕にやや肩の張るものを含み、外面調整がすべてミガキであることから相対的に古い傾向があり、長胴のもののみで構成され、外面調整にミガキとハケの両者が見られる26号堅穴が新しい傾向があると考えられる。

間木戸Ⅴ遺跡では、3号堅穴建物跡と製鉄関連遺構の上位の層からまとまって出土したものでは総体としての特徴は共通することから、大きな時間差は想定できない。その中で、24の坏は有段で内面にも段のあるもので相対的に古い傾向を示すものである。しかし、かなり平底に近い丸底の坏や頸部の屈曲が緩やかな甕という国分寺下層式の特徴のあるものもみられる。ただし、破片資料も含めてロクロ土師器や須恵器の坏類は出土していない。

これらのことから、間木戸Ⅱ遺跡の集落は7世紀末から8世紀の前半には営まれ、それに関連して間木戸Ⅴ遺跡の利用が開始され、製鉄関連遺構は遅くとも8世紀の中葉から後半に操業を始めたものと考えられる。

(佐藤 剛)

(2) 鉄製品

間木戸Ⅱ遺跡では、鉄鏃が4点、刀子が1点、鉄鐸が1点、間木戸Ⅴ遺跡では、鉄鏃が1点、蕨手刀の破片2点出土している。(鉄鏃の形状に関しては、第157図の分類図にある名称を使用する。)鉄族は、間木戸Ⅱ遺跡の26号堅穴建物跡床面からG032～034が出土した。G032は、茎部の下を欠損しているが、ほぼ完形と考えられる。鏃身外形は三角形を呈し平造の断面形をもつ。鏃身関部は、腸袂気味である。頸部は棒状の角関で、断面は方形である。G033は、頸部のみでG032と同じく棒状の頸部に角関をもつが長身である。G034は、茎部下を欠損しているがほぼ完形と考えられる。鏃身外形は、三角形を呈し平造の断面形をもつ。鏃身関部は、段のない角関である。頸部は棒状の角関で、断面は方形である。間木戸Ⅴ遺跡から出土したVG003は、鏃身部が欠損し茎部も下を欠損しているた



第 155 図 土師器

め、頸部の一部のみであるが、円形関が確認できる。断面は長方形である。5点とも、頸部関などの特徴から8世紀前半より古いものであると考えられ、特に間木戸V遺跡出土のVG003は、頸部の関が間木戸II遺跡出土のものより異なり円形関を呈するため、7世紀まで遡る可能性が考えられる。しかしながら、VG003は1号製鉄炉の炉面からの出土であり、素材として持ち込まれた可能性があり、ここでは遺構帰属時期の上限としておきたい。

このように、古代の集落から鉄鏃があとまって確認されたわけであるが、特に1棟の竪穴建物跡から鉄鏃(G032~034)があとまって出土した事例は少ない。近隣の遺跡の中で鉄族があとまって出土している房の沢古墳では、古墳内から埋葬品として数点出土している。山田町内で調査された遺跡の中では大畑II遺跡の10世紀前半に帰属する竪穴建物跡から1点、沢田II遺跡の奈良時代に帰属する竪穴建物跡から1点の出土のみである。

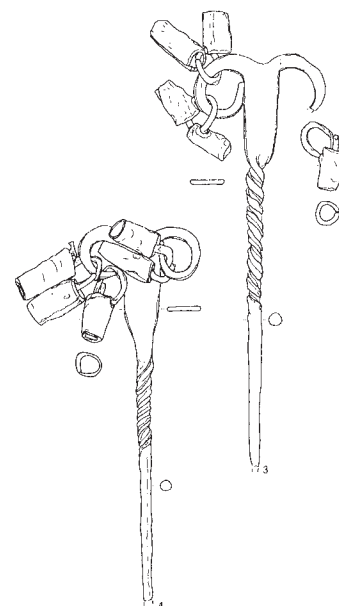
G037は、鉄鐸である。全体の形状は、若干下部が広がるが円錐にはほど遠い。近接する沢田II遺跡から出土した錫杖鉄製品に付属している鉄鐸と規模・形状ともに同様のものと考えられる(第156図)。鉄輪を通した穿孔の有無は、頂部が欠損しているため確認できない。錫杖鉄製品と鉄鐸一式は、沢田II遺跡での出土資料のように「神仏習合の要素もった雑密系の祭祀具」(井上2002)と考えられている。しかし、本資料は遺構外から単独の出土であるため、この場で本来の用途として使われていたか明確ではない。

間木戸V遺跡3号竪穴建物跡から出土したVG006は、蕨手刀の座金部である。座金の表面には、菊座のようなはっきりとした模様は確認できない。VG005は、VG006と同遺構から出土した。刀身の一部と考えられるが、重量感と厚みがあり反りはなく刃部が明確でないことから、蕨手刀の柄部の可能性が考えられる。蕨手刀は、7世紀後半から9世紀前半まで確認され、その分類や編年がなされているが、今回の資料は、刀の全体像がわからないため詳細な時期は不明である。しかしながら、同遺構は、共伴する土師器の特徴から8世紀代の遺構と位置づけており、間木戸V遺跡内で検出された製鉄関連遺構に関連し素材として持ち込まれた可能性を踏まえたとしても7世紀後半から8世紀代の蕨手刀と考えられる。ちなみに、房の沢IV遺跡から出土した蕨手刀(※1)は8世紀前葉から中葉とされている(大道1998「房の沢IV遺跡」)。

これらの鉄製品は、7世紀から8世紀代のものと考えられる。間木戸II遺跡の竪穴から出土した資料は8世紀前半以前、間木戸V遺跡から出土した資料は、鉄生産遺構の存在から素材として持ち込まれた可能性があるが、7世紀~8世紀代に帰属する資料といえる。

※1 1次調査で出土した蕨手刀は、足金具等の一部のものも含め8点。その中から分類基準と比較できる4点について考察されている。

(佐藤 あゆみ)



第156図
沢田II遺跡 RA505 出土錫杖鉄製品

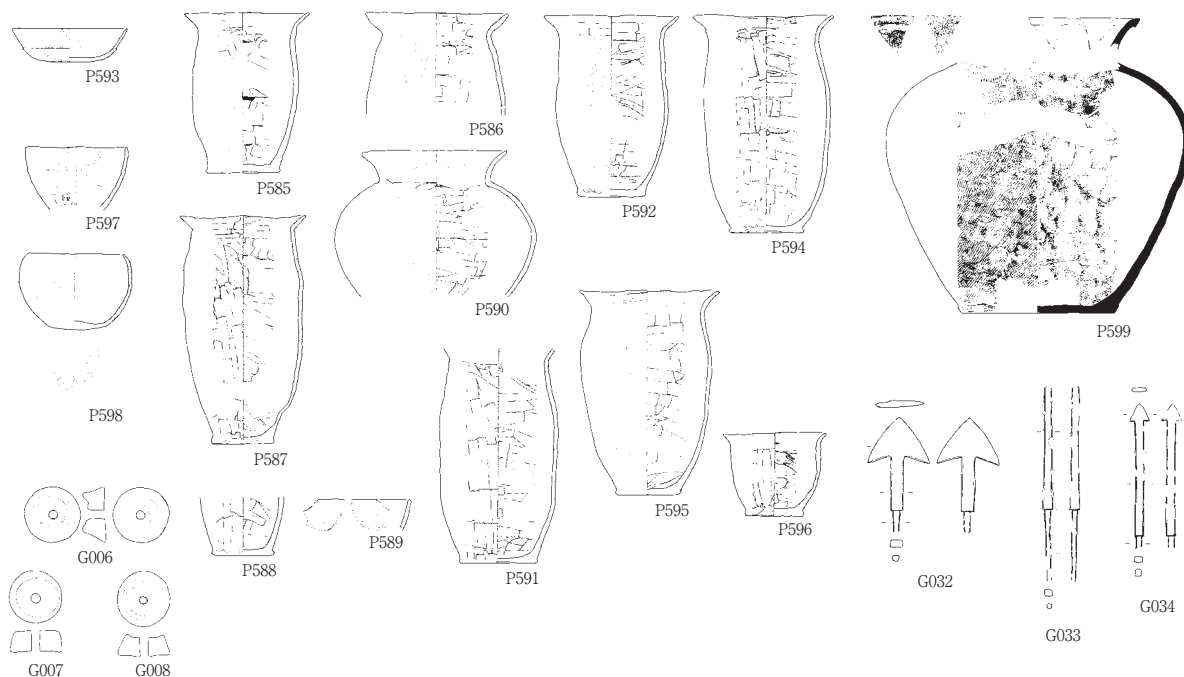
鍬 身 部	鍬身外形	A.柳葉形	B.圭頭形	C.方頭形	D.三角形	E.長三角形	F.片刃形	G.雁股形	その他		
	断面	両鑄造 片鑄造	三角	骨鍬系	両丸造	片丸造	平造	平片刃造	両切刃造	片切刃造	その他
	鍬身開部	角開 a b	ナデ開 a b c			山形開	無開	臑扶 a b		二段臑扶	
頸 部	頸部形	棒状	振り	別造り片臑扶	皿種 頸部 a b c			頸部断面形 a b c d e			
	部	無開	角開 a b	斜め開	台形開 a b	棘状開	円形開	その他	袋部		
茎 部	茎部形	無茎 a b		短茎 a b c			茎部 a b				
	断面	a	b	c	d	e					

第 157 図 鉄鍬基礎分類図

水野2003「古墳時代中期における鉄鍬の分類と編年」より転載

(3) 竪穴建物跡について (26号竪穴建物跡を中心に)

古代の竪穴建物跡は、間木戸Ⅱ遺跡で5棟(26~30号竪穴建物跡)、間木戸Ⅴ遺跡で1棟(3号竪穴建物跡)検出している。規模は、調査区外にかかるものは残存部から推定しているが、一辺3~4mの小型のもと、同じく6~6.5mの大型のもの2通りに分けられる。小型のものは、間木戸Ⅱ27・28・29号竪穴建物跡、大型のものは間木戸Ⅱ25・30号竪穴建物跡、間木戸Ⅴ3号竪穴建物跡である。カマドは、検出できなかった28号竪穴建物跡以外は間木戸Ⅱ25・26・27・29・30号が北~北東、間木



第158図 26号竪穴建物跡出土遺物一覧

戸Ⅴ3号竪穴建物跡が西に設置されていた。間木戸Ⅱ遺跡の竪穴建物跡は7世紀末から8世紀前半、間木戸Ⅴ遺跡の竪穴建物跡は8世紀代に帰属する。カマドの位置の違いは、時期差によるものと斜面地による立地条件の制約といった可能性が考えられる。柱穴は、検出したもので間木戸Ⅱ25号6本、30号4本、間木戸Ⅴ3号4本が主柱穴として配されていた。なお、周溝を検出した竪穴は無かった。

出土遺物について、各竪穴建物跡別に計測した土師器の重量は下記の通りである。

間木戸Ⅱ - 26号竪穴8,825.2g、27号竪穴32.1g、29号竪穴221.1g、30号竪穴3,926.6gg

間木戸Ⅴ - 3号竪穴3,863.5g

26号竪穴建物跡からは、前項まで上述してきた通りまとまった資料が出土している。土師器の他に須恵器4,258g、鉄製品4点、土製紡錘車2点が出土している。出土遺物は、床面までの残存状況（Ⅳ-2竪穴建物跡参照）があまり良くなかったものの床面やカマド付近から多く出土した。北東壁際からは、土師器と須恵器の甕が出土し、土師器の甕内部からイソシジミ、ウニ、フジツボ等が出土している。鉄鏃3点・刀子1点は、いずれも床面からの出土である。同時期と考えられる他の間木戸Ⅱ遺跡内の竪穴建物跡と比較すると、調査区外にかかるものも含め鉄製品が出土した竪穴建物跡は無い。もとより、鉄鏃は、竪穴建物跡からまとまって出土する例が少ない。ここに居住していた人々だけが武具としてもしくは古墳内の埋葬品として複数の鉄鏃を所有し、優越的な立場におかれていたのではないかと考える。

同じく床面からは、ほぼ完形の土製紡錘車2点を確認している。土製紡錘車は26号竪穴建物跡と規模が近似する1辺5.6mの30号竪穴で1個出土しているのみである。

第158図は、26号竪穴から出土した資料を一括で提示したものである。出土遺物の検討に加え、埋土下位から出土した炭化材を放射性炭素年代測定に出し、その結果が665年（±23）であったことから、26号竪穴建物跡は7世紀末～8世紀前半に帰属すると判断した。一辺6.5mの規模をもつ竪穴建物跡は、近接する沢田Ⅰ遺跡で数棟検出されているが、このように資料がまとまって出土していない

ことと、該期の遺構から多種多様な資料が出土したため参考例になるものとして本項でまとめた。26号竪穴建物跡の事例は今後、周辺における古代遺跡の調査成果と共に検討されるものと期待される。

(佐藤あゆみ)

(4) 製鉄関連遺構群について

今回の間木戸V遺跡の発掘調査では、製鉄に関連する遺構として、製鉄炉5基を含む工房跡2棟、炭置き場跡2基、廃滓場1箇所が確認された。これらの遺構は鉄生産に関わる遺構として一連の遺構群として存在していたものである。以下、これらの遺構を概観する。

製鉄関連遺構群が確認された部分は、北東から南西に流れる沢(小川)を挟んで急斜面が対面しており、その沢の北西側に狭い緩斜面が確認できる。斜面の一部では基盤となる花崗岩の巨礫が露出しており、花崗岩が風化して細粒化したいわゆる「マサ土」がいたるところで確認できる。また、沢筋でも容易に原料となる砂鉄の採取が可能である。原料、燃料が容易に獲得でき、水利の便も良く、遺跡周辺では比較的日照条件も良好な南東向きの緩斜面地に遺構群は立地していると言える。

工房跡は2棟あり、古い工房跡は斜面下方に構築されている2号工房跡である。2基の製鉄炉で構成されるが、近接しており、同時に存在していたとは考えにくい。1基ずつ構築され、鉄生産が終了すると、壊され、位置を少し変えて新しい製鉄炉を構築するという行為を行っていたと考えられる。鉄生産の際に大量にできる鉄滓を斜面下方へ廃棄している。1つの工房が機能を果たさなくなると、その工房を利用しつつ、斜面上方に平坦な部分を構築し、新規の工房としている。これが、新しい工房の1号工房跡である。製鉄炉3基で構成される。3基は同時に存在しておらず、1基ずつ構築され、位置を北東へ少しずつ変えながら新しい炉を構築している。また、炉を構築する床面も少しずつ嵩上げをしており、古い炉がレベル的に低く、新しい炉が高くなる。

つまり工房跡と製鉄炉の新旧関係は、

(旧)	(新)
2号工房跡	1号工房跡
4号製鉄炉・5号製鉄炉	→3号製鉄炉→2号製鉄炉→1号製鉄炉

となる。このようなことから、初期段階では、沢筋に近い斜面下方に製鉄炉を含む工房を構築するが、その工房が機能しなくなると、古い工房跡を利用しながら、斜面上方へと新しい工房を構築する特徴が見られる。また、炉についても、機能しなくなった古い炉の上に炉を新しく構築するため、新しい炉ほどレベル的に高くなる傾向が見られる。

製鉄炉の形態は5号製鉄炉を除き、楕円形基調である。残存状態はいずれも良好とは言えないが、最も新しい1号製鉄炉から判断すると、1.5×1.0m前後の掘り方を持ち、1.3×0.8m前後の規模と想定される。古い段階の炉を利用していることも考えられるが、炭化物を充填するような重厚な下部構造は確認できない。1号製鉄炉と2号製鉄炉に対応するように、炉の長軸線上に硬化した範囲が確認され、フイゴが設置された場所と想定される。

工房の他に、長楕円形基調の炭置き場跡を2基確認した。2基とも類似した形状をしており、4.5～5mの規模を呈する。底面や壁面に被熱による赤色変化した部分が認められないため、炭窯とはしなかった。県内では類似する遺構例がほとんどなく、類例の増加を期待したい。

これらの製鉄関連遺構群の年代観であるが、工房や製鉄炉から年代を決定しうる遺物がほとんど出土していないため、出土遺物から直接的に遺構の年代を決定することはできなかったが、遺構群を構成する廃滓場と関連する包含層から出土した土器類の年代観から判断すると、本遺構群は8世紀代後半に帰属する可能性が高い。なお、1号工房跡のPit 1と2号工房跡の5号製鉄炉から採取した炭化物を選び、炭素年代測定（AMS測定法）を行った。詳細な内容は「VI 分析・鑑定」を参照して頂きたいが、1号工房跡の試料は10～12世紀代後半、2号工房跡の試料は8世紀後半の可能性を含みつつ、9～10世紀代後半のものとの結果が出ている。8世紀代後半となると、本遺跡の製鉄関連遺構群は沿岸部における初期段階のものとの可能性がある。

間木戸V遺跡が所在する山田町やその周辺でも古代の製鉄関連遺構が確認されている遺跡があるので、簡単に触れておきたい。主な遺跡を第21表に示した。当然のことと考えられるが、これらの遺跡は、鉄生産の原料となる砂鉄が採取できる花崗岩地帯上に立地している。山田町の大畑Ⅱ遺跡や宮古市の島田Ⅱ遺跡・松山館跡は尾根上の平坦地や斜面地に占地している遺跡もあれば、沢筋や谷間の水利の便が良好な緩斜面に占地している遺跡も見られる。遺跡の周囲には燃料の材料となる樹木もあったと考えられ、鉄生産に向けた場所にあると言えよう。ただ、炉体や羽口などに利用される粘土をどこで採取しているかの問題がある。県内の遺跡の中で、粘土採掘坑のように遺構として確認できる例はなく、採取場所、採取方法など今後の課題である。

表で示した遺跡の大半は平安時代の遺跡で、奈良時代もしくは奈良時代の可能性が高い遺跡は沢田Ⅱ遺跡や上村遺跡など限られており、沿岸部における初期の製鉄がどのようなものであるか、資料数も少なく、現状では明らかになったとは言えないが、間木戸V遺跡の資料は、これらの様相を解明する上で一助となる貴重な資料と言えよう。

(北村 忠昭)

第22表 古代の製鉄関連遺構検出遺跡一覧表

遺跡名	所在地	鉄生産関連検出遺構	参考文献
沢田Ⅰ遺跡	下閉伊郡山田町山田	鍛冶遺構	* 1
沢田Ⅱ遺跡	下閉伊郡山田町山田	製鉄炉、鍛冶炉、廃滓場	* 2
沢田Ⅲ遺跡	下閉伊郡山田町山田	鉄生産に関連する炉跡、炭窯跡	* 3
大畑Ⅱ遺跡	下閉伊郡山田町飯岡	工房跡、鍛冶炉、炭窯	* 4
後山Ⅰ遺跡	下閉伊郡山田町織笠	製鉄工房跡、製鉄炉、鍛冶炉、炭窯跡	* 5
上村遺跡	下閉伊郡山田町織笠	鍛冶場跡、製鉄炉、炭窯跡、竪穴状遺構、土坑	* 6
湾台Ⅲ遺跡	下閉伊郡山田町織笠	鉄生産関連炉、竪穴状遺構	* 7
山ノ内Ⅱ遺跡	下閉伊郡山田町船越	製鉄炉、鍛冶炉、炭窯跡、廃滓場、竪穴状遺構	* 8
山ノ内Ⅲ遺跡	下閉伊郡山田町船越	製鉄炉、炭窯跡、炭置き場	* 9
田の浜館跡	下閉伊郡山田町船越	製鉄炉、廃滓場、炭窯跡	* 3
焼山遺跡	下閉伊郡山田町船越	製鉄炉、鍛冶工房跡、炭窯跡、竪穴住居跡	* 3
払川Ⅲ遺跡	宮古市津軽石	鍛冶工房跡	* 3
松山館跡	宮古市松山	鍛冶工房跡、鍛冶炉	* 10
島田Ⅱ遺跡	宮古市八木沢	工房跡、製鉄炉、鍛冶炉、炭窯	* 11
青猿Ⅰ遺跡	宮古市千徳	竪穴遺構、製鉄炉、廃滓場	* 12
夏本遺跡	上閉伊郡大槌町第24地割	工房跡、鍛冶炉	* 13

* 1 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000 『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第318集

* 2 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997 『沢田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第268集

3 近隣遺跡の中における間木戸Ⅱ・Ⅴ遺跡

- * 3 (公財) 岩手県文化振興事業団 2014 『平成 25 年度発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 630 集
- * 4 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995 『大畑Ⅰ遺跡・大畑Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 218 集
- * 5 山田町教育委員会 2002 『細浦Ⅵ・後山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』山田町教育委員会埋蔵文化財調査報告書第 9 集
- * 6 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1994 『上村遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 202 集
- * 7 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1993 『湾台Ⅱ遺跡・湾台Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 186 集
- * 8 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996 『山ノ内Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 249 集
- * 9 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997 『山ノ内Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 250 集
- * 10 岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター / (公財) 岩手県文化振興事業団 2014 『松山館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 625 集
- * 11 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004 『島田Ⅱ遺跡第 2～4 次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 450 集
- * 12 宮古市教育委員会 1988 『青猿Ⅰ遺跡・下在家Ⅱ遺跡・千徳城遺跡群(堀合館) - 昭和 62 年度発掘調査報告書 -』宮古市埋蔵文化財調査報告書 14
- * 13 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1989 『夏木遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 134 集

3 近隣遺跡の中における間木戸Ⅱ・Ⅴ遺跡

間木戸Ⅱ・Ⅴ両遺跡の近隣には、同様の縄文遺跡や古代遺跡、製鉄関連遺跡が所在する。特に、間木戸遺跡の南西には沢田遺跡・房の沢遺跡が続きこれにあてはまる。これまでの調査によりこれらの遺跡では、縄文時代前期前葉から中期後葉の集落、弥生時代の集落、奈良、平安時代の集落、奈良時代の製鉄関連遺構、7・8世紀の古墳群の存在が明らかになっている。

間木戸Ⅱ・Ⅴ遺跡も縄文時代中期前葉～中葉を中心とした集落、7世紀末～8世紀代の集落・8世紀代の製鉄関連遺跡であることが今回の調査で判明した。縄文時代の時期差によって居住域の変遷は認められないが、縄文時代の集落と古代の集落・製鉄関連遺構では、その占地に違いがある。(第159図)

縄文時代は、出土した土器から早期中葉の集落が付近にあったものと考慮されるが、遺跡内における集落の存在は、早くとも前期以降であると考え。一定量の土器が確認されているのは大木6式～8b式であるため、遺跡内に集落が形成されていた時期は縄文時代前期後葉～中期中葉と考える。遺跡の主体となる時期は、帰属時期の明確な竪穴建物跡が中期中葉のものが多いため、中期前葉から中葉にかけて集落の全盛期を経て大木9式への移行期である4号竪穴建物跡の廃絶で集落の終焉を迎えたものと推察される。居住域は、調査区南側で竪穴建物跡の重複が途切れることがなかった為、西を流れる間木戸川に沿って標高が低くなる南側へまだ続く可能性が高い。間木戸Ⅴ遺跡に関しては、間木戸Ⅱ遺跡と同様の縄文時代中期中葉の竪穴建物跡が検出されていることから、同時期に共存した集落の居住域を地形から検討すると、沢沿いに山奥の北東へ展開している可能性がある。

古代は、7世紀末以降、平坦部のある間木戸Ⅱ遺跡に再び集落が形成され北側にカマドをもつ竪穴建物跡が建てられた。8世紀になり、間木戸Ⅴ遺跡の南向き斜面地では工房が設けられ、製鉄が営まれたと考える。これらの存続時期は、7世紀末から8世紀代と推察される。古代の居住域は、間木戸Ⅱ遺跡調査区東際にかかる竪穴が多いため、山裾に向かって標高が高くなる北東側へ拡がりそうである。間木戸Ⅴ遺跡の鉄生産遺構は、地表面で見られる鉄滓の存在からも、山奥の北東側でまだ検出されるであろう。今回の調査で確認された沿岸部初期に営まれた鉄作りの集落(※1)と、7世紀末から8世紀代に該当するまとまった出土資料は、古代の近隣遺跡の中で中心的である房の沢遺跡から検出された古墳の被葬者や古墳造立に関わった集落について手蔓となる可能性がある。これまで房の沢

古墳築造に関する詳細が不明であった中、沢田Ⅰ遺跡（※2）に関する見解もあったが、間木戸Ⅱ・Ⅴ遺跡も加えて検討されることが期待される。

以上、両遺跡で縄文と古代の人々がどのように生活していたのか若干の考察を行ってきたが「局部的な発掘成果をもとに、集落の規模や形態、集落構造や住居内の住み分けなどを論じてみても、それはあまり意味をなさない」（後藤 1982）ことを念頭において、近隣の遺跡についても触れておきたい。間木戸川を挟んだ対岸には間木戸Ⅰ遺跡が拡がり、その南西には沢田Ⅲ遺跡が存在する。両遺跡は今回の三陸沿岸道路建設事業関連調査が行われており、今後報告書が刊行されるものである。筆者は、両遺跡の調査に関わり、両遺跡に縄文と古代の集落が途切れることなく存在しているのを目の当たりにした。そして、その検出遺構数・出土遺物量は膨大なものであった。それらは、間木戸Ⅱ・Ⅴ遺跡と同時期のものも多く含まれている（※3）。綿々と構築された竪穴建物跡や貯蔵穴群等の存在は、同時期に一定の期間人々が共存していた痕跡である。東北地方における縄文時代の集落規模が中期に最大となる（鈴木 2009）様相が、間木戸遺跡周辺でもあてはまるとすれば、この地域に住んだ当時の人々の人物像や生活環境を様々な視点から見いだすことができると考える。

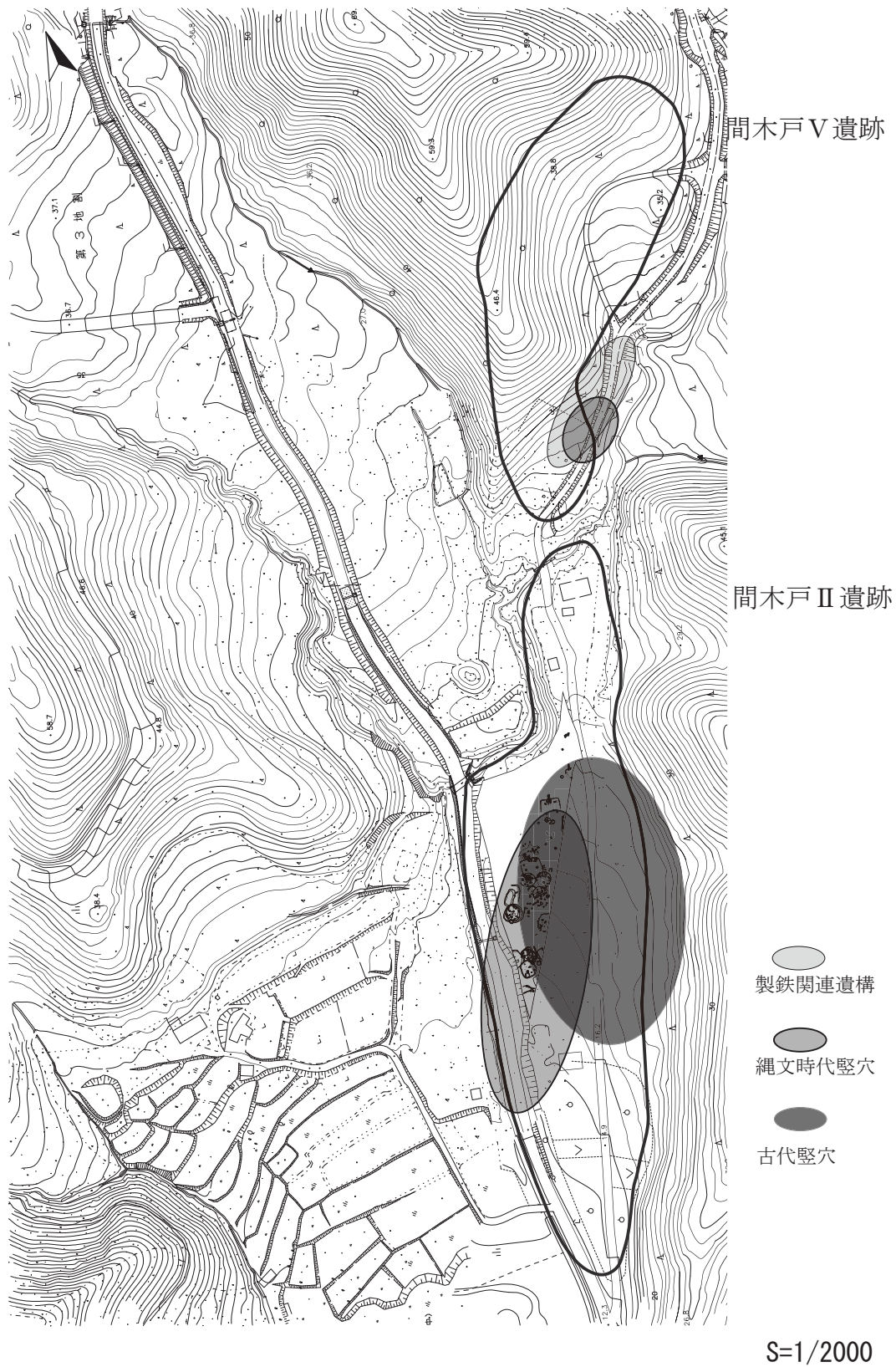
周辺では、前期から中期後葉にかけて発展した大規模な集落が中期末葉で姿を消し、その後弥生時代になるまで集落は確認されていない。本書は、ある一定の期間に、この地に集落を形成した人々の存在を顕示したにすぎない。そのため、これから周辺の遺跡の様相が解明された際、再び比較と検討が必要な遺跡であると考えている。

- ※1 沢田Ⅱ遺跡で検出された鍛冶工房や製鉄炉について、共伴遺物や熱残留磁気による年代測定等から8世紀代と推察している。
- ※2 2000『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』内で、沢田Ⅰ遺跡が「古墳群を築いた集団と何らかの関連のある集落の一つだった」としている。
- ※3 間木戸Ⅰ遺跡、沢田Ⅲ遺跡の調査成果については報告書発刊前のため、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターホームページ上の情報と現地説明会資料等にある内容に留めている。

（佐藤あゆみ）

参考文献

- 井上雅孝2002「錫杖鉄製品の研究-北東北における古代祭祀具の一形態-」『岩手考古学第14号』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 1995『大畑Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第218集
- 1997『沢田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第268集
- 1998『房の沢Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第287集
- 2000『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第318集
- 2010『金浜Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第553集
- 岩手考古学会2014『北三陸の蝦夷・蕨手刀』岩手考古学会第46回研究大会
- 後藤和民1982『縄文文化の研究第8巻』「縄文集落の概念」
- 小林達雄編2008「総覧縄文土器」
- 鈴木克彦2009『集落の変遷と地域性』「東北地方の縄文集落の社会組織と村落」
- 辻 秀人編 2007 『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基礎研究B）研究成果報告書 東北学院大学文学部
- 水野敏典2003「古墳時代中期における鉄鏃の分類と編年」『橿原考古学研究所論集第14』
- 水野敏典2009『古墳時代鉄鏃の変遷にみる儀仗的武装の基礎的研究』
- 八木光則2010『古代蝦夷社会の成立』



第 159 図 遺構の分布範囲

写真図版



遺跡遠景 北から山田湾を俯瞰する



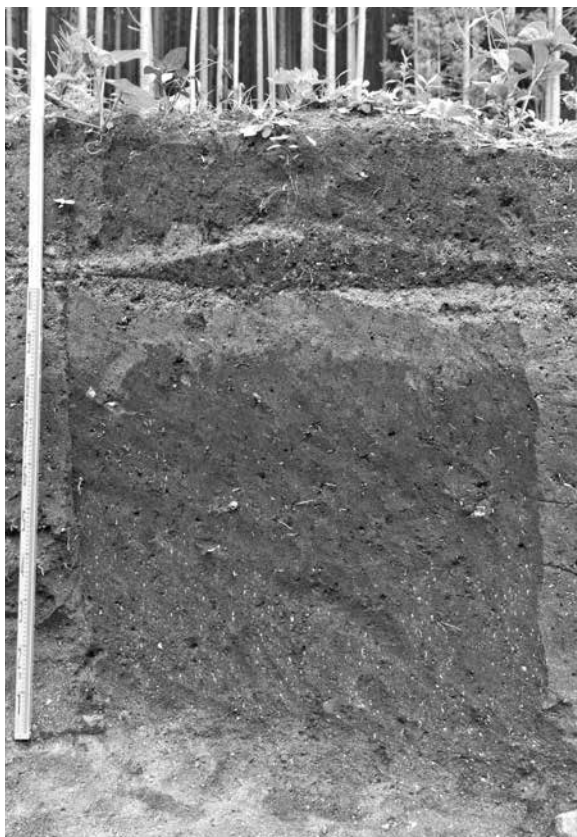
遺跡遠景南から



調査区直上上が間木戸Ⅱ遺跡下が間木戸Ⅴ遺跡



調査前の状況 北から



基本層序 A (調査区中央)



基本層序 B (調査区南側)



全景南西→



断面西→



断面西→



全景南西→



断面南→



炉 全景東→



出土状況東→



全景南西→



断面南→



断面西→



炉1 検出東→



炉2 断面南→



炉1 断面南→



炉2 全景南→



炉1 全景南→



pit1 断面南東→



埋土中土器出土状況→



精査風景南西→



全景南西→



C 断面南東→



A 断面南→



B 断面南東→



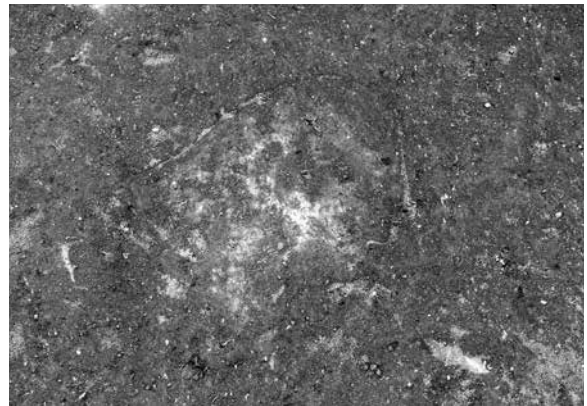
炉全景南東→



周溝全景南東→



炉燃烧部断面南東→



烧土1検出東→



前庭部断面南東→



土器出土状況北→



全景・遺物出土状況南東→



断面北→



複式炉断面南→



炉1 断面南東→



全景南西→



断面南西→



断面南東→



pit2 断面南→



全景南西→



A断面南東→



B断面北→



炉全景東→



全景北東→



断面南→



炉全景西→



周溝南→



全景南→



断面東→



炉断面東→



pit2 断面東→



全景南→



断面南東→



炉全景・断面東→



作業風景南東→



全景東→



断面南→



炉1 全景・断面南東→



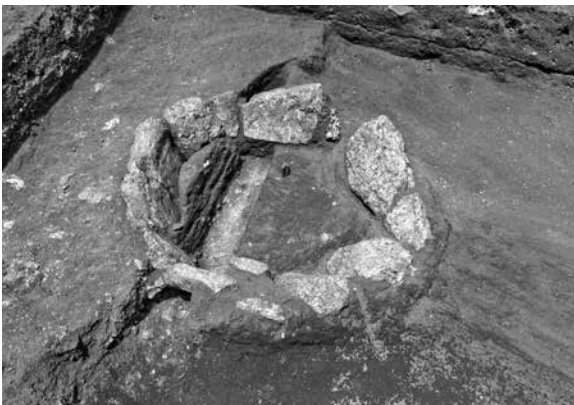
炉2 全景・断面南東→



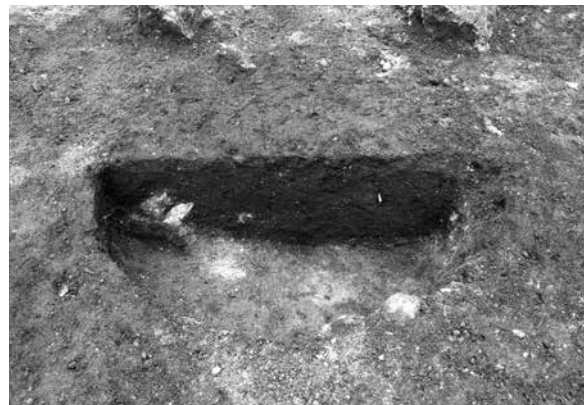
全景東→



断面東→



炉全景・断面南東→



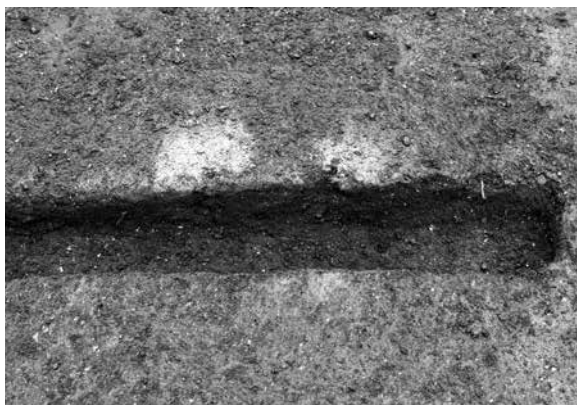
Pit1 断面南→



全景南→



断面西→



炉全景・断面南→



包含層掘下げ途中北西→



全景南東→



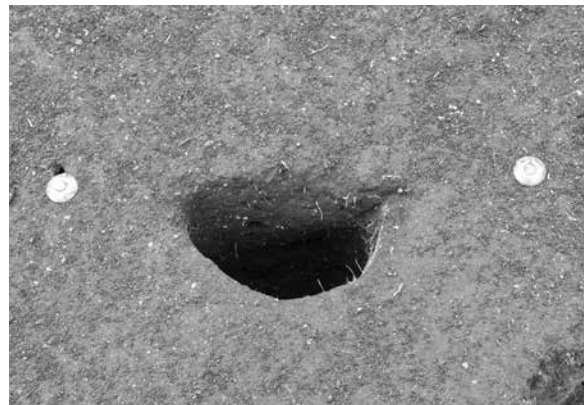
炉1 全景・断面南東→



炉2 全景・断面東→



焼土断面西→



pit3 断面南東→



全景東→



断面南東→



南壁 S 断面南→



炉断面南東→



全景南東→



A 断面南→



B 断面西→



炉断面平面南→



全景北東→



断面南→



炉全景南→



炉断面南→



全景北西→



C断面西→



A断面南→



出土状況南→



全景北東→



断面南東→



表土掘削作業南東→



作業風景



全景南東→



断面西→



出土状況南→



調査区南側重複する遺構南→



全景東→



断面西→



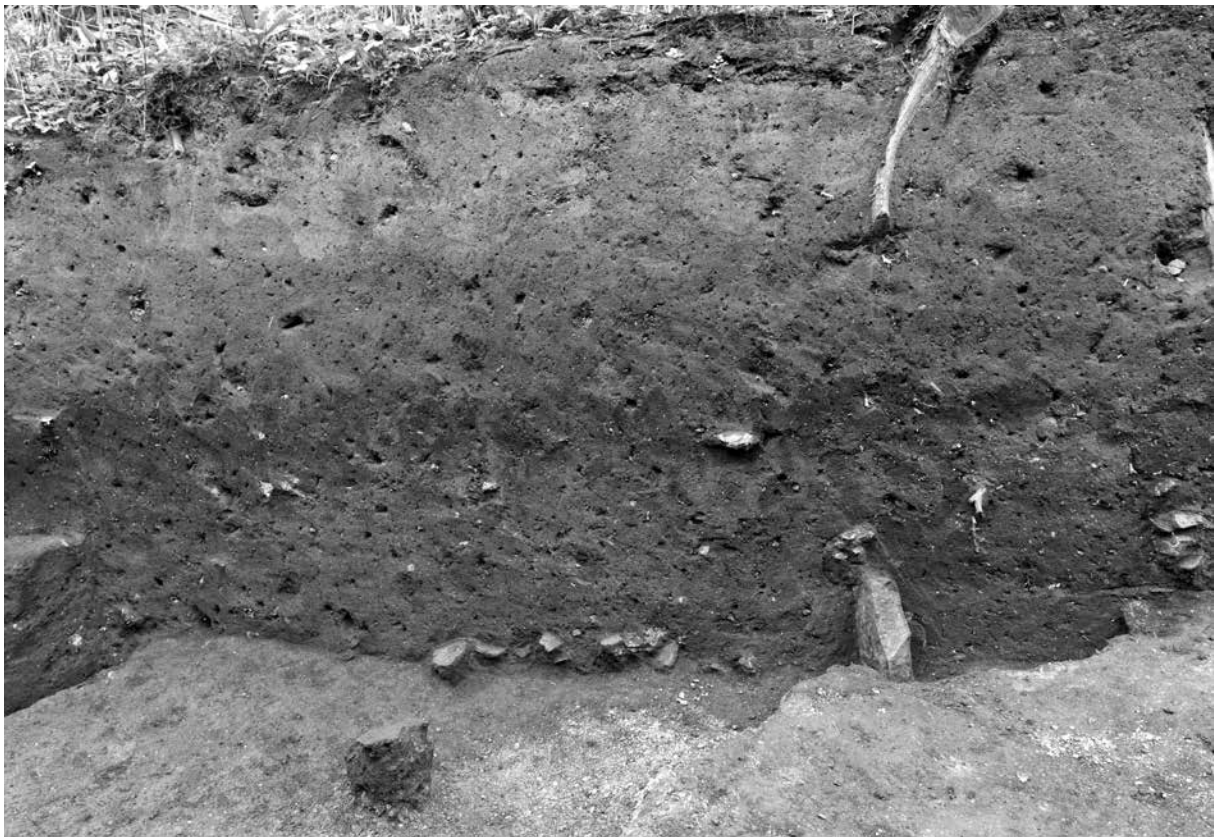
炉断面北西→



炉掘りかた南東→



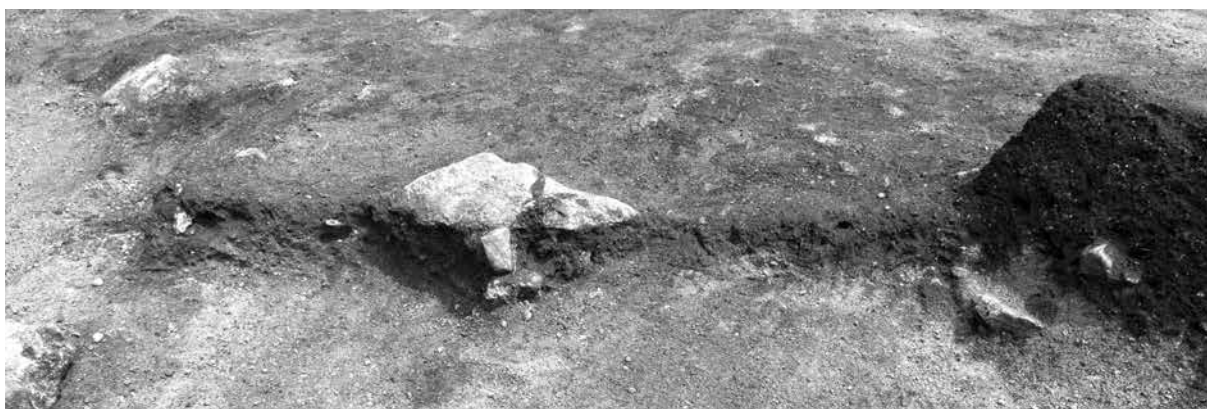
全景南西→



断面東→



全景南東→



断面南→



pit1・2 断面南→



電子平板を使った実測作業



全景南西→



断面南西→



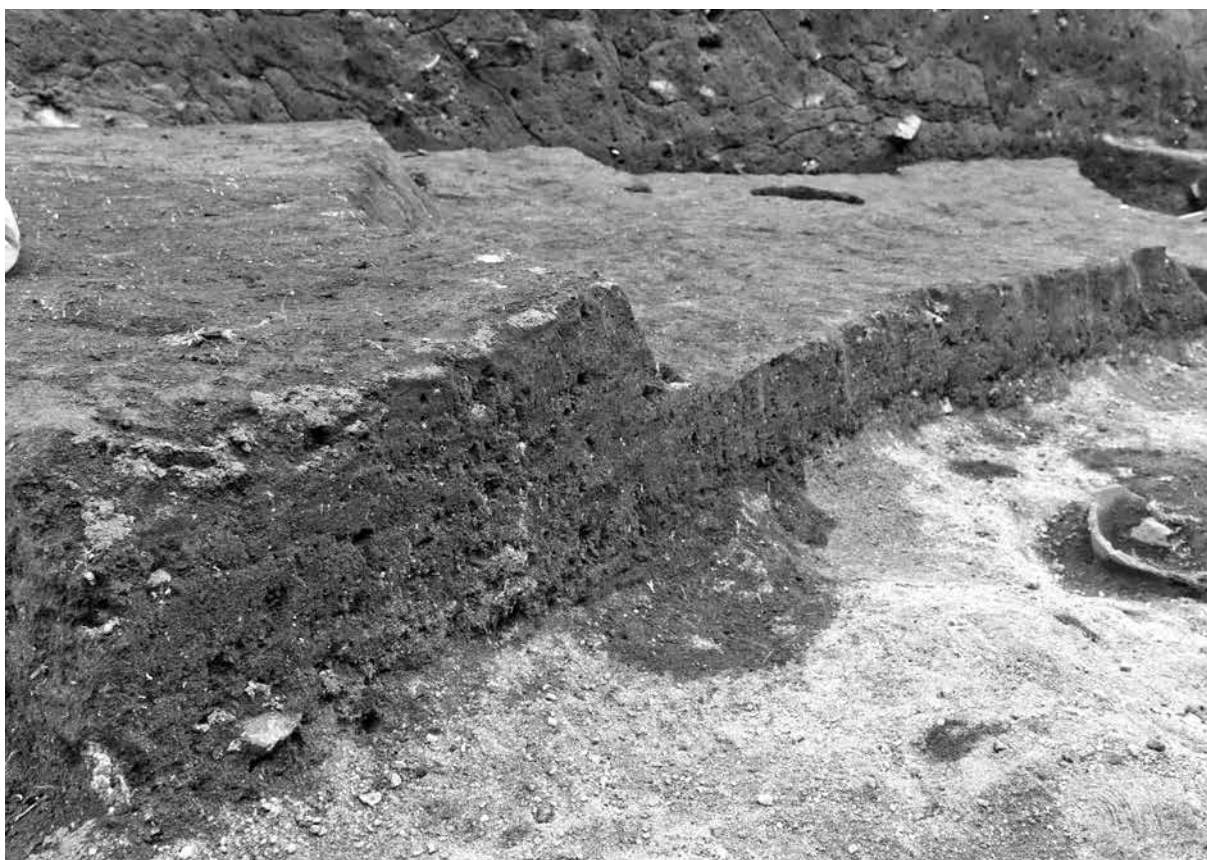
炉使用時東→



炉土器埋設部東→



全景南→



断面北西→



全景南→



断面南西→



北東角出土状況南→



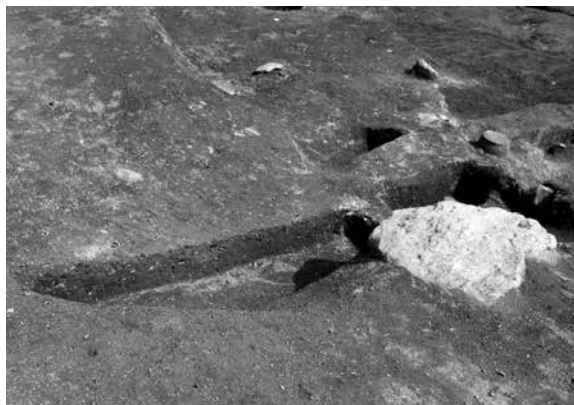
pit1 断面南→



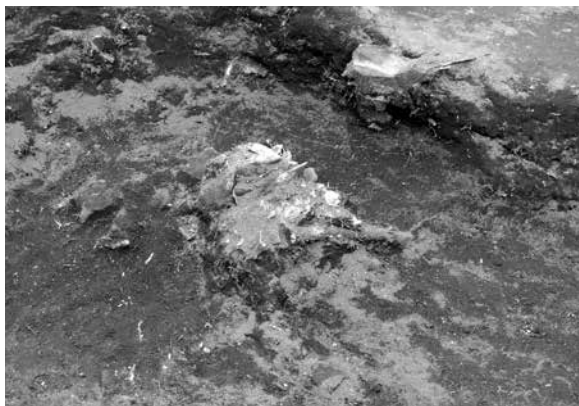
カマド全景南→



カマド袖断面南→



煙道断面北西→



貝殻出土状況西→



紡錘車 G008 出土状況南→



鉄鏃 G032 出土状況南東→



土器出土状況精査風景南→



全景南→



断面西→



断面南→



カマド断面・袖芯材出土状況西→



全景南→



断面西→



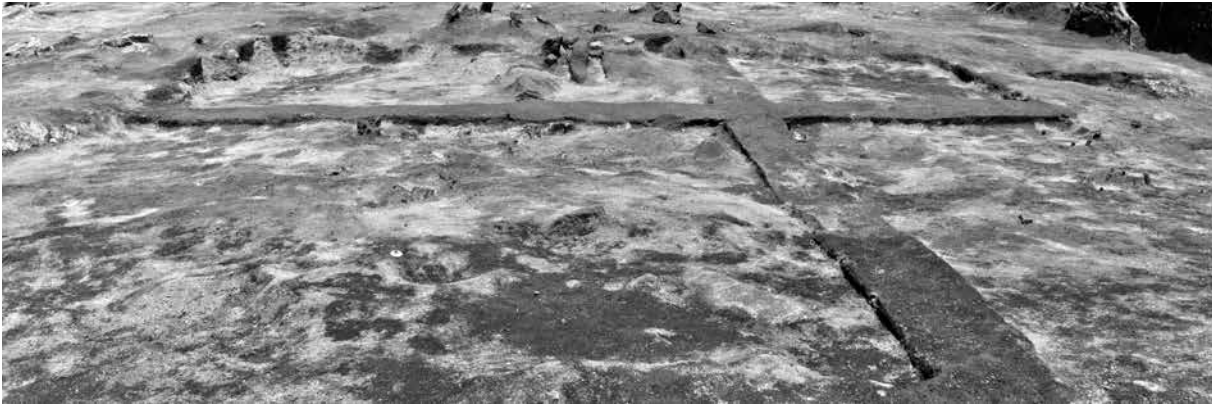
カマド断面南→



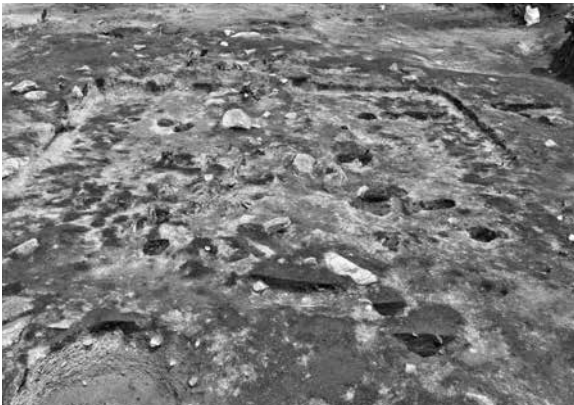
遺物出土状況西→



全景南→



断面南→



カマド全景南→



カマド断面東→



SK01 全景南→



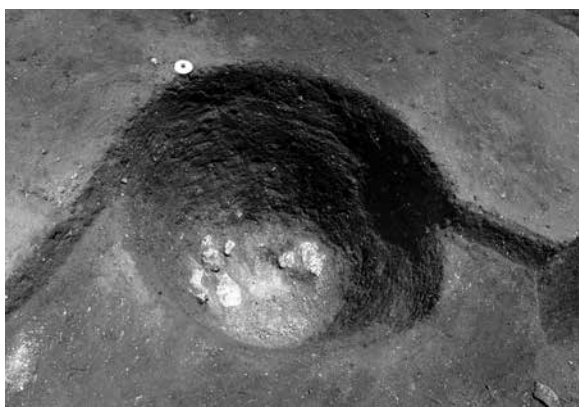
SK01 断面南→



2号土坑全景北→



2号土坑断面南→



3号土坑全景南西→



3号土坑断面西→



4号土坑全景南→



4号土坑断面西→



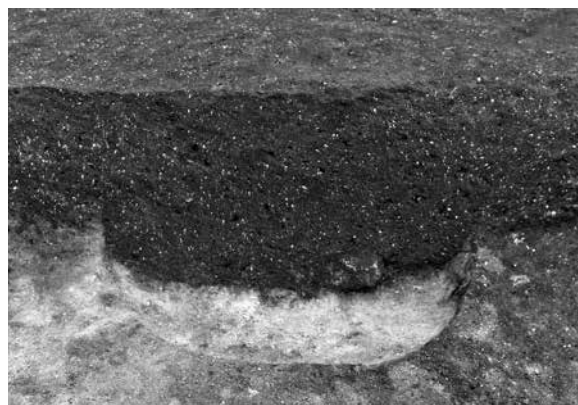
5号土坑全景東→



5号土坑断面南東→



6号土坑全景西→



6号土坑断面西→



7号土坑全景東→



7号土坑断面西→



8号土坑全景東→



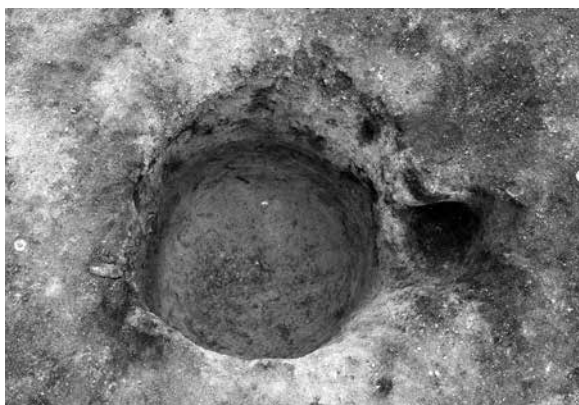
8号土坑断面南→



9号土坑全景南→



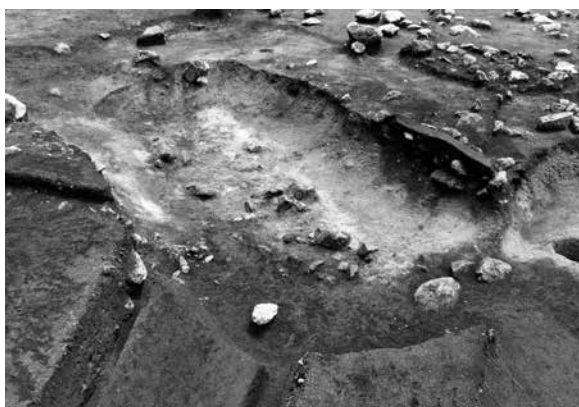
9号土坑断面南→



10号土坑全景南→



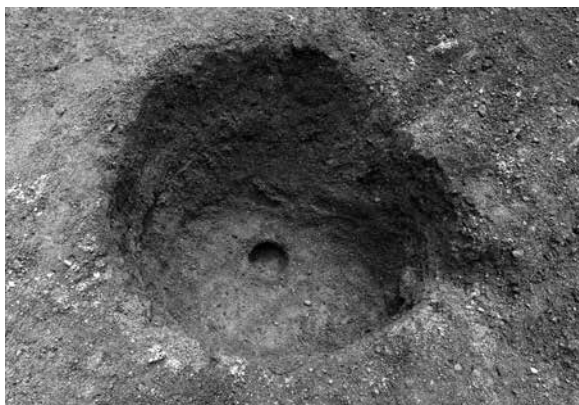
10号土坑断面南→



11号土坑全景南西→



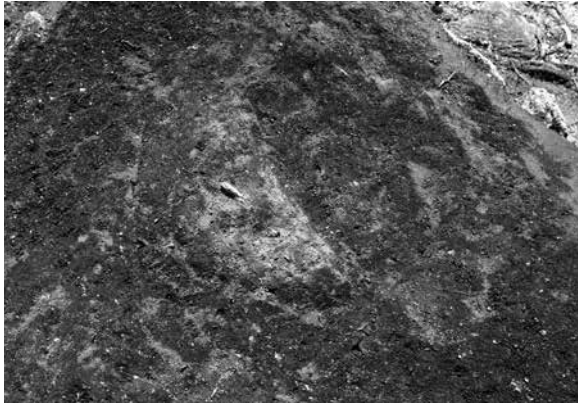
11号土坑断面西→



12号土坑全景西→



12号土坑断面西→



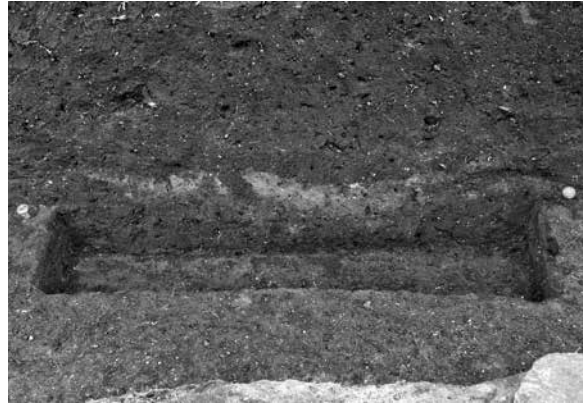
1号焼土遺構全景北→



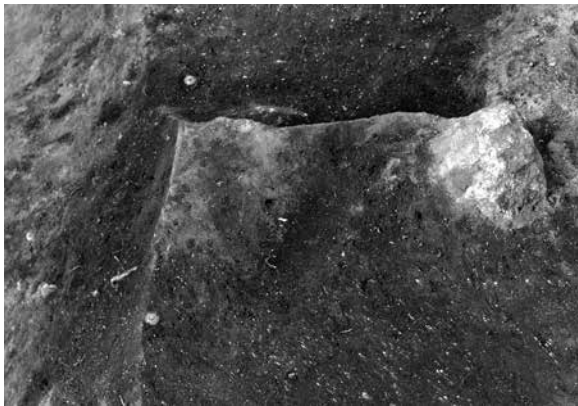
1号焼土遺構断面西→



2号焼土遺構全景西→



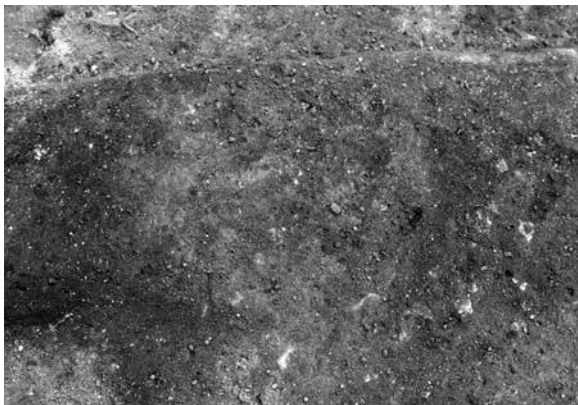
2号焼土遺構断面西→



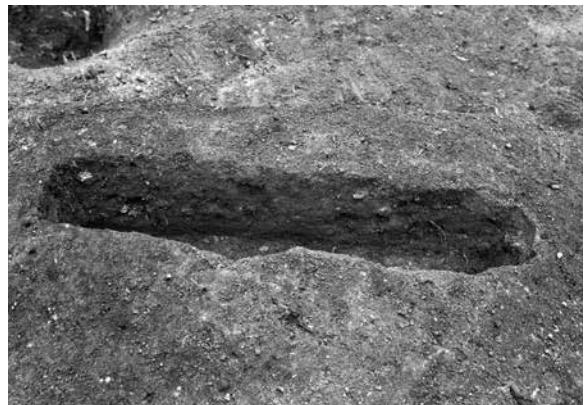
3号焼土遺構全景南→



3号焼土遺構断面西→



4号焼土遺構全景北→



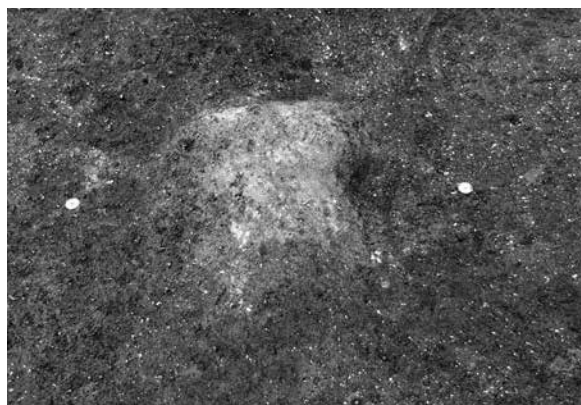
4号焼土遺構断面北→



5号焼土遺構全景西→



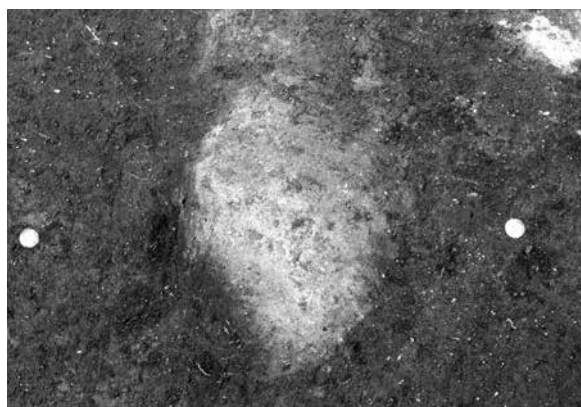
5号焼土遺構断面西→



6号焼土遺構全景南→



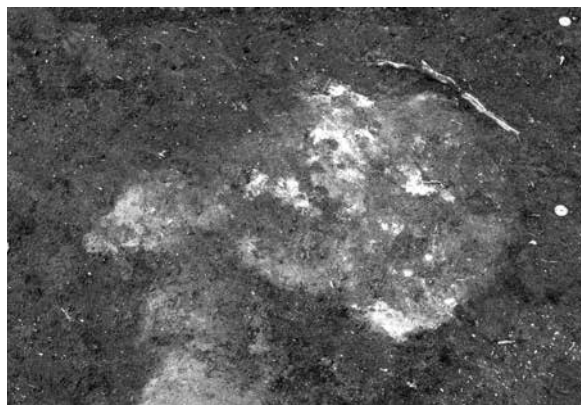
6号焼土遺構断面南→



7号a焼土遺構全景南→



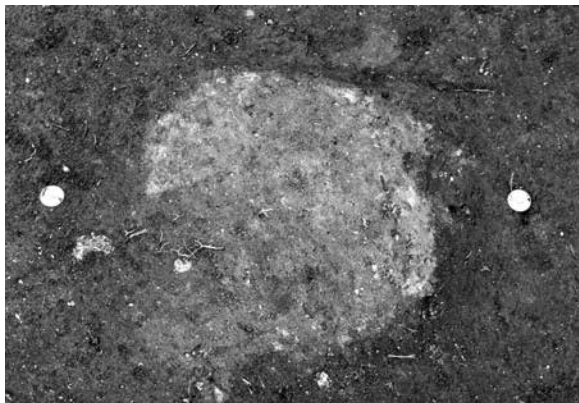
7号a焼土遺構断面南→



7号b焼土遺構全景南→



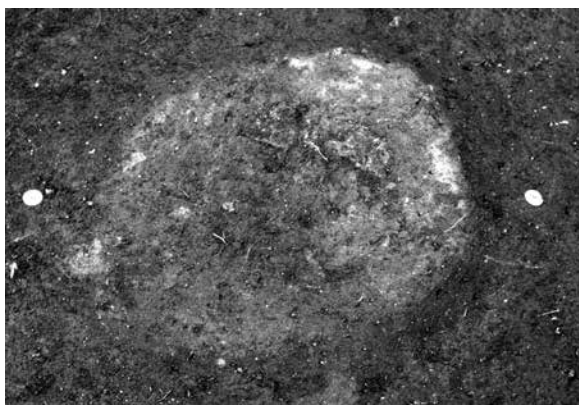
7号b焼土遺構断面南→



7号c 焼土遺構全景南→



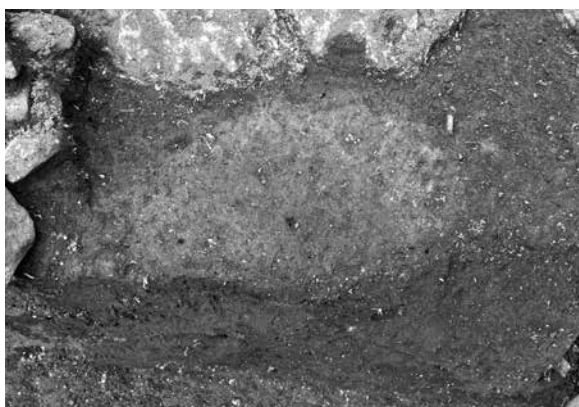
7号c 焼土遺構断面南→



7号d 焼土遺構全景南→



7号d 焼土遺構断面南→



8号焼土遺構全景南→



8号焼土遺構断面西→



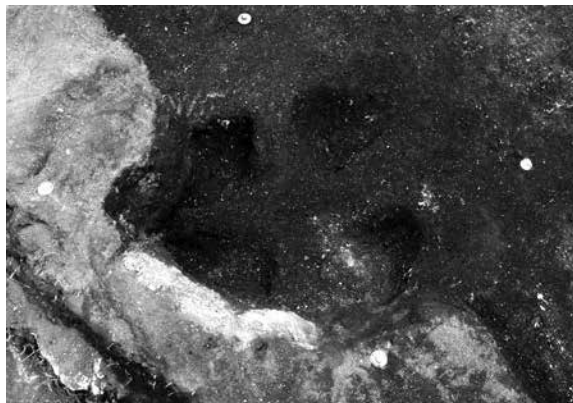
9号焼土遺構全景東→



9号焼土遺構断面北→



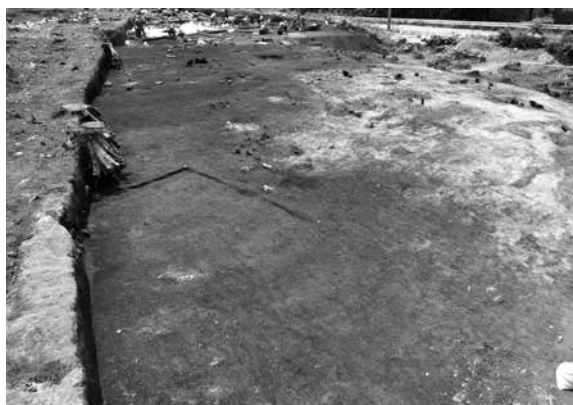
10号焼土遺構断面東→



10号焼土遺構(炉跡)掘りかた南→



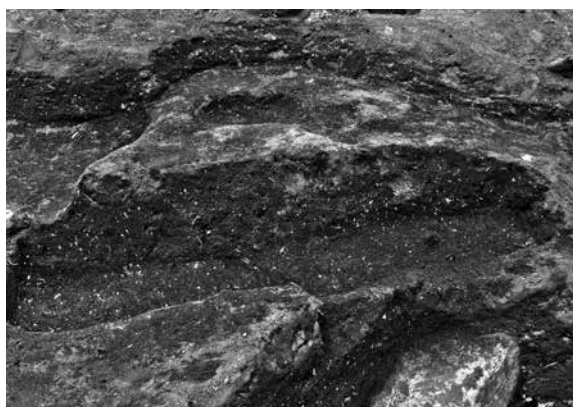
11号焼土遺構全景南西→



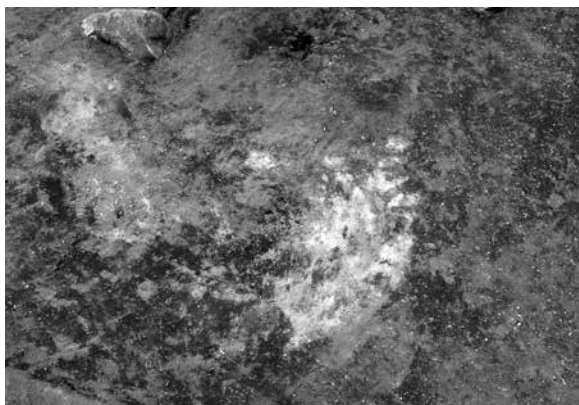
グリッドⅡ B15以北Ⅲ層検出面北→



11号a焼土遺構全景南西→



11号a焼土遺構断面南西→



11号b焼土遺構全景南西→



11号b焼土遺構断面南→



1号集石遺構全景南→



1号集石遺構断面南→



沢跡全景南→



調査区西側遺物包含層（沢跡）断面南西→



調査区全景北→



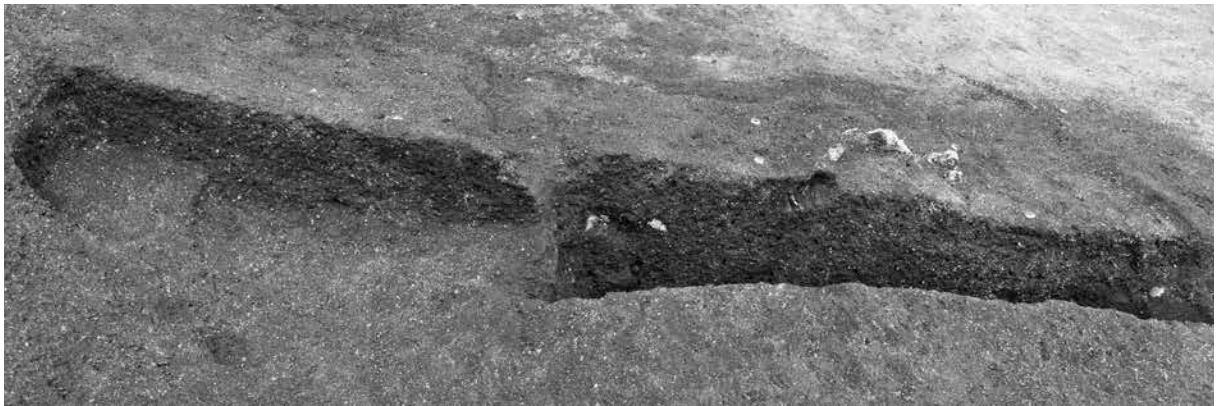
基本層序 A 北→



基本層序 B 東→



全景南→



断面西→



炉全景南→



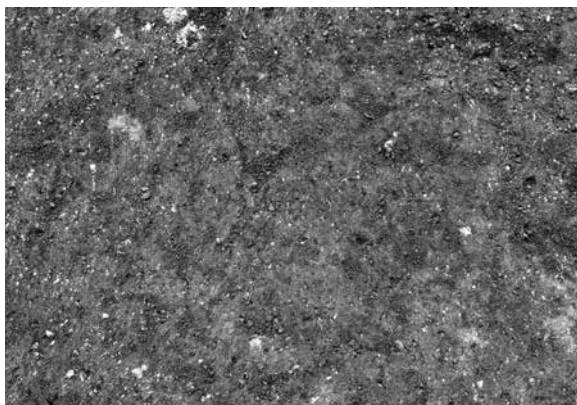
炉断面西→



2号豎穴建物跡全景南→



2号豎穴建物跡断面西→



1号焼土遺構全景南→



1号焼土遺構断面西→



3号豎穴建物跡全景北→



3号豎穴建物跡断面南→



3号豎穴建物跡断面西→



3号竪穴住居跡カマド検出南→



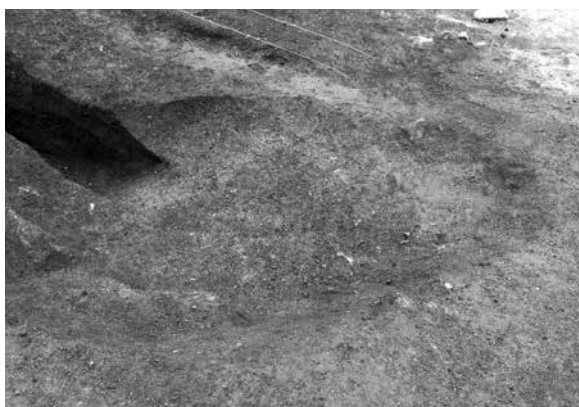
3号竪穴住居跡カマド断面A西→



3号竪穴住居跡カマド断面B西→



3号竪穴住居跡礫出土状況南西→



1号土坑全景北西→



1号土坑断面南→



2号土坑全景南→



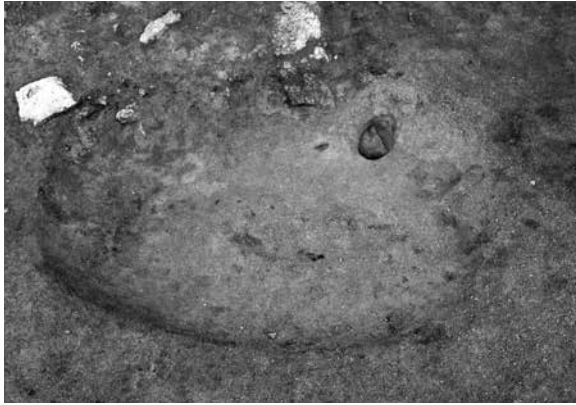
2号土坑断面西→



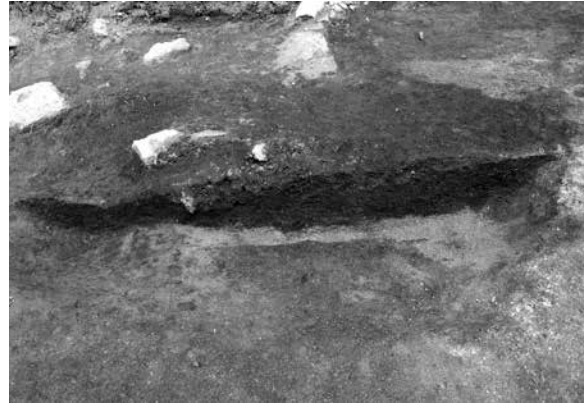
3号土坑全景南→



3号土坑断面西→



4号土坑全景南東→



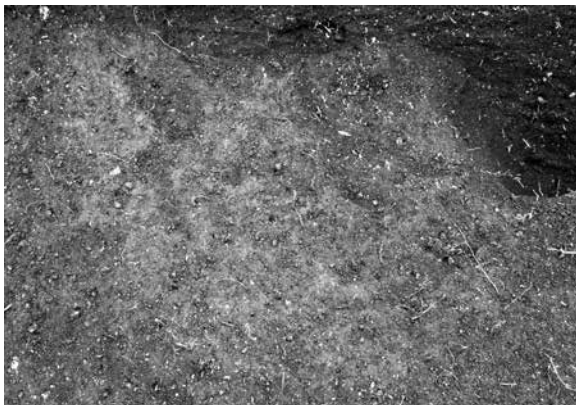
4号土坑断面南東→



5号土坑全景南東→



5号土坑断面東→



2号焼土遺構全景南→



2号焼土遺構断面南→



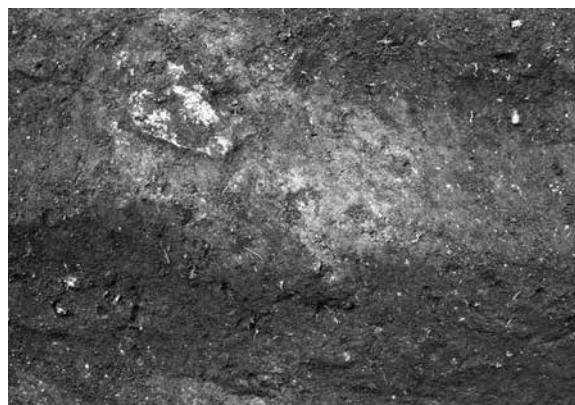
3号焼土遺構全景南→



3号焼土遺構断面西→



4号焼土遺構全景南→



4号焼土遺構断面西→



1号埋設土器全景西→



1号埋設土器断面西→



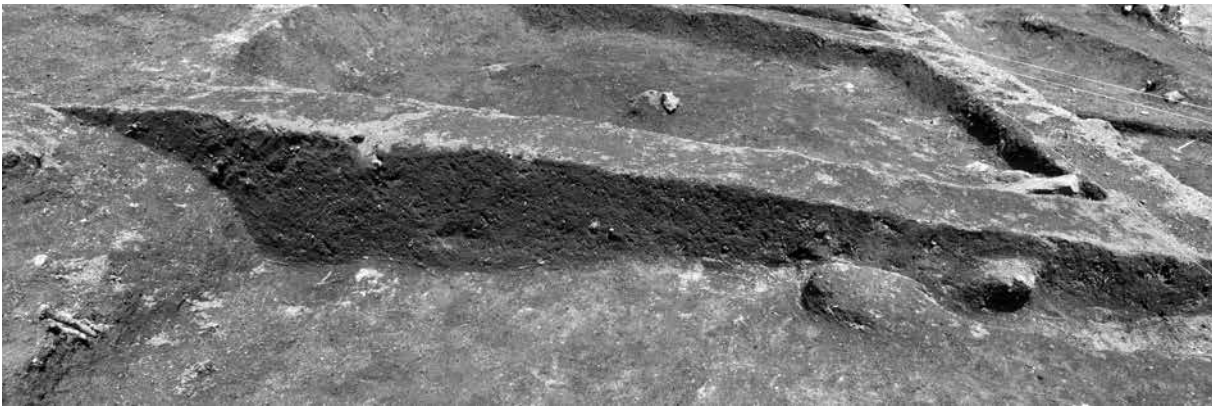
1号廃滓場断面A西→



包含層断面B西→



1号工房跡全景南→



1号工房跡断面西→



1号製鉄炉全景北→



1号製鉄炉掘り方全景北→



1号製鉄炉断面北→



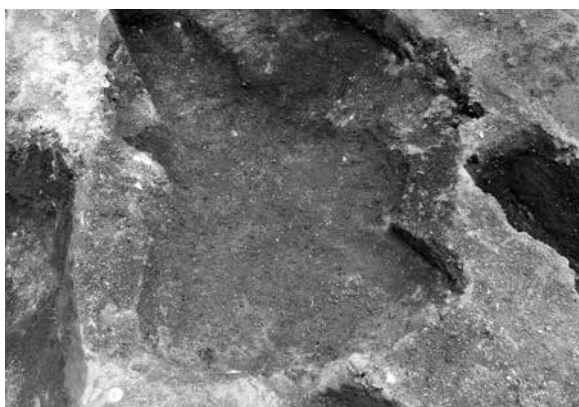
2号製鉄炉全景北西→



2号製鉄炉断面西→



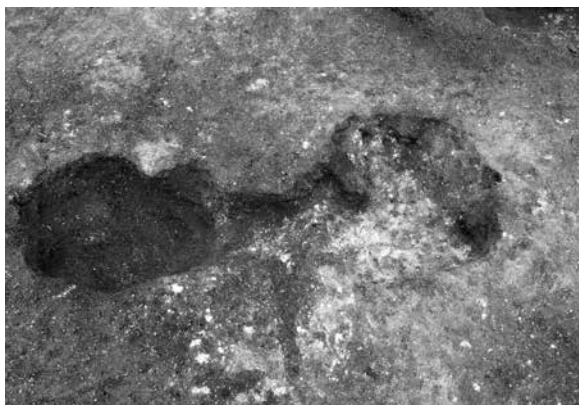
3号製鉄炉全景北→



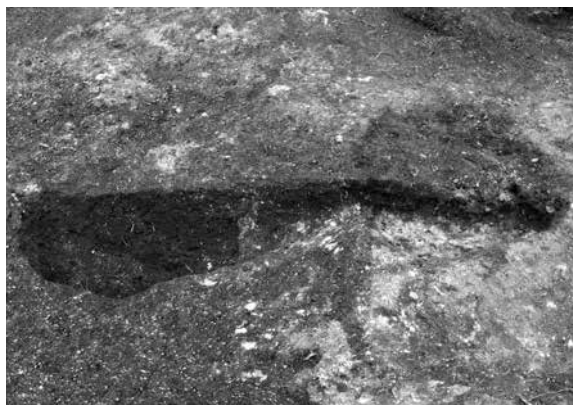
3号製鉄炉掘り方全景北→



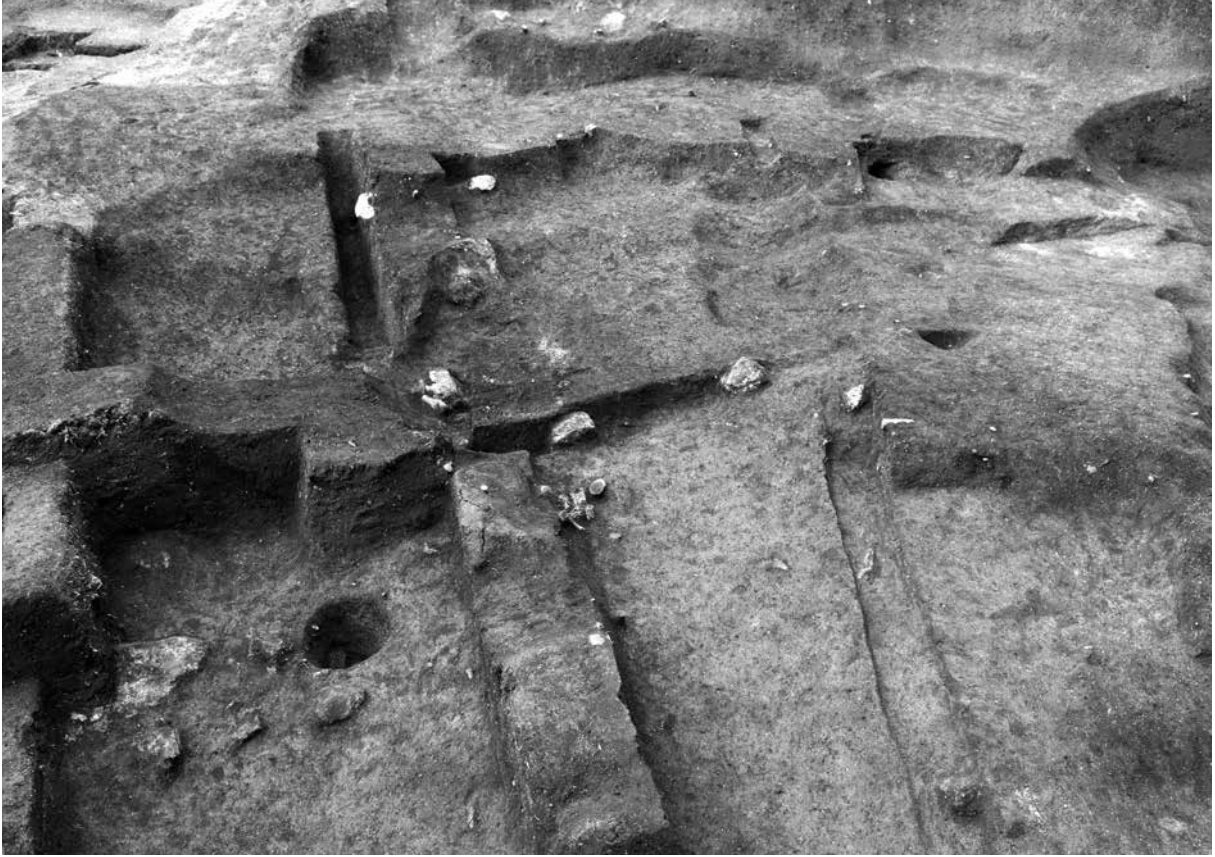
3号製鉄炉断面西→



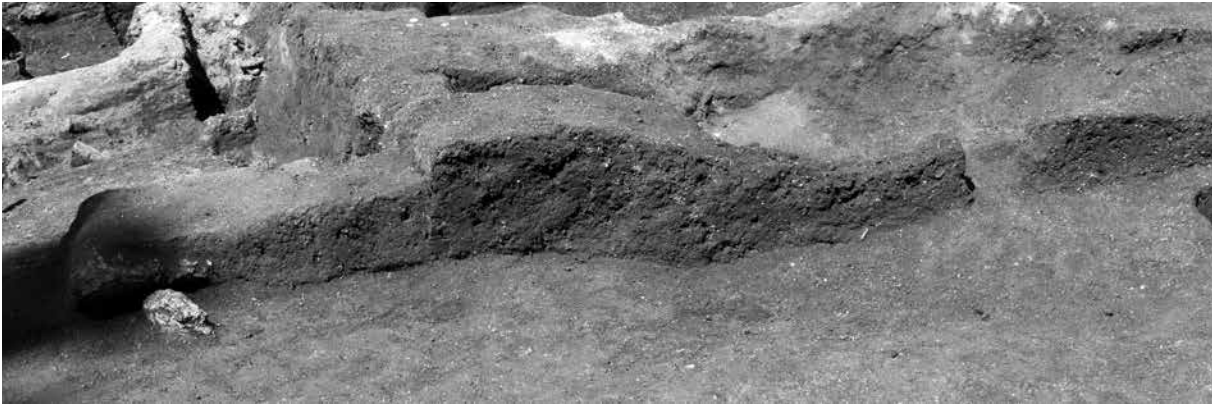
1号工房跡 Pit1 全景西→



1号工房跡 Pit1 断面西→



2号工房跡全景南→



2号工房跡断面東→



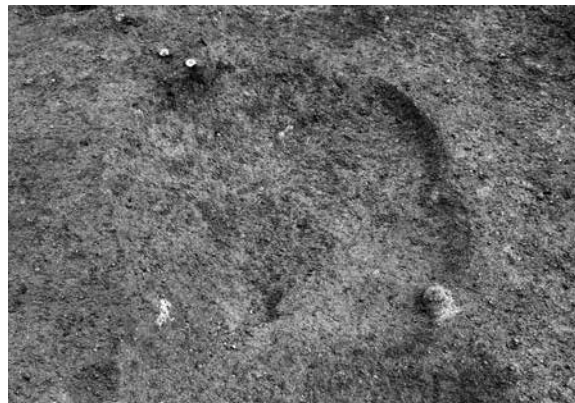
4号製鉄炉全景北→



4号製鉄炉検出北→



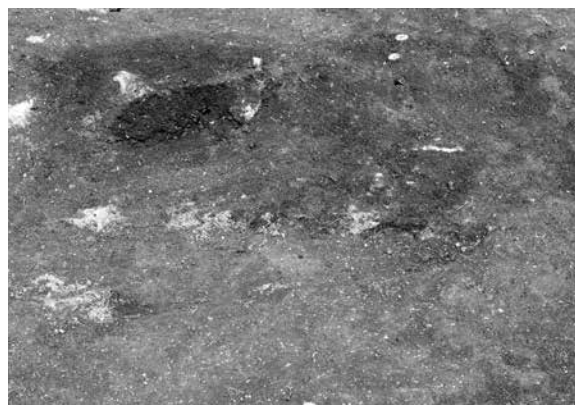
4号製鉄炉断面西→



5号製鉄炉全景北→



5号製鉄炉検出北→



5号製鉄炉断面西→



1号炭置き場跡全景南→



1号炭置き場跡断面 SNベルト南部東→



1号炭置き場跡断面 SNベルト中央東→



1号炭置き場跡断面 SNベルト北部東→



2号炭置き場跡全景南→



2号炭置き場跡断面南→



1号不明遺構全景西→



1号不明遺構礫出土状況西→



1号不明遺構断面 (W→)



現地説明会風景



精査風景



調査前南西→



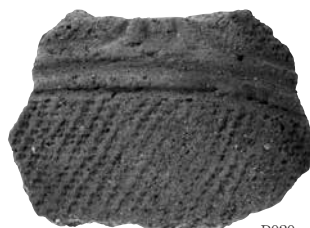
写真図版 55 縄文～弥生土器（1）



P012



P016



P020



P025



P021



P022



P023



P024



P026



P027

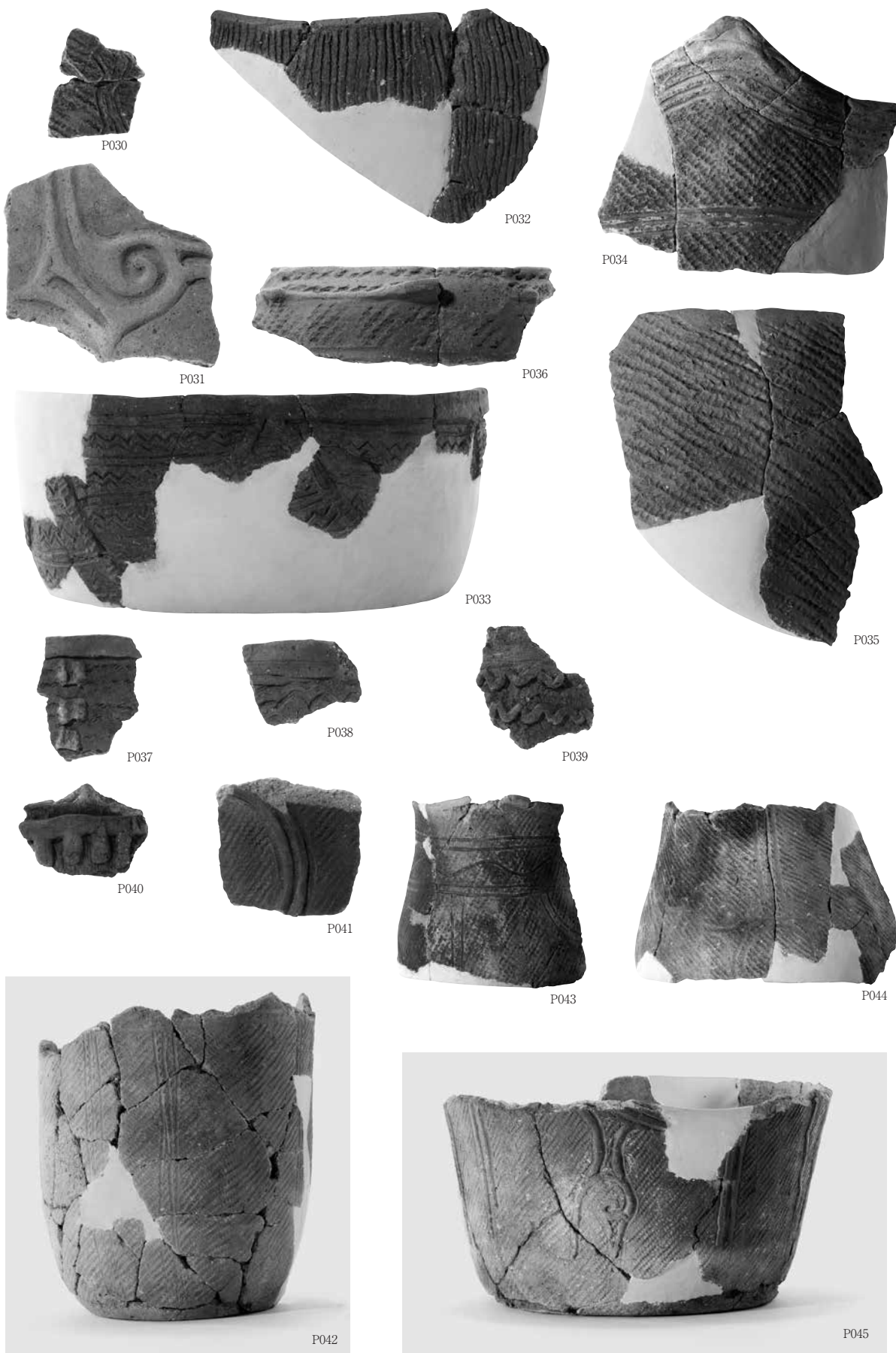


P029



P028

写真図版 56 縄文～弥生土器 (2)



写真図版 57 縄文～弥生土器 (3)



P046



P047



P048



P049



P052



P051

写真図版 58 縄文～弥生土器（4）



P050



P053



P056



P057



P054



P055



P058



P062



P059



P063



P060

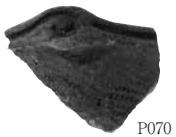
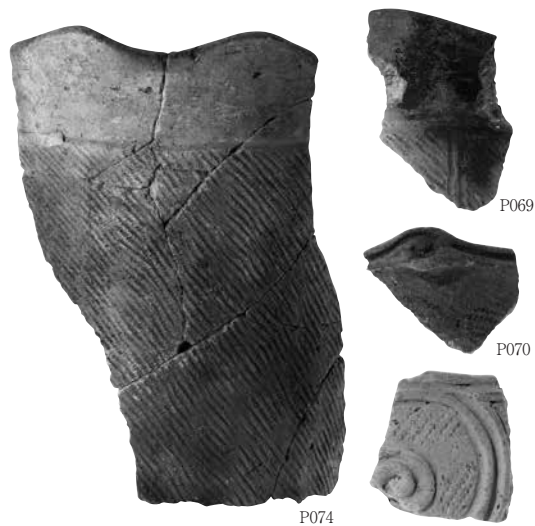
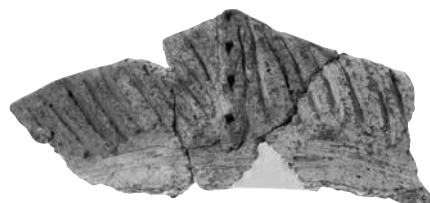


P061



P064

写真図版 60 縄文～弥生土器 (6)



写真図版 61 縄文～弥生土器 (7)



P081



P082



P085



P084



P086



P087



P088



P090



P083



P089



P091



P092



P093

写真図版 62 縄文～弥生土器 (8)



写真図版 63 縄文～弥生土器 (9)



P096



P101



P109

写真図版 64 縄文～弥生土器 (10)



P110



P112



P113



P115

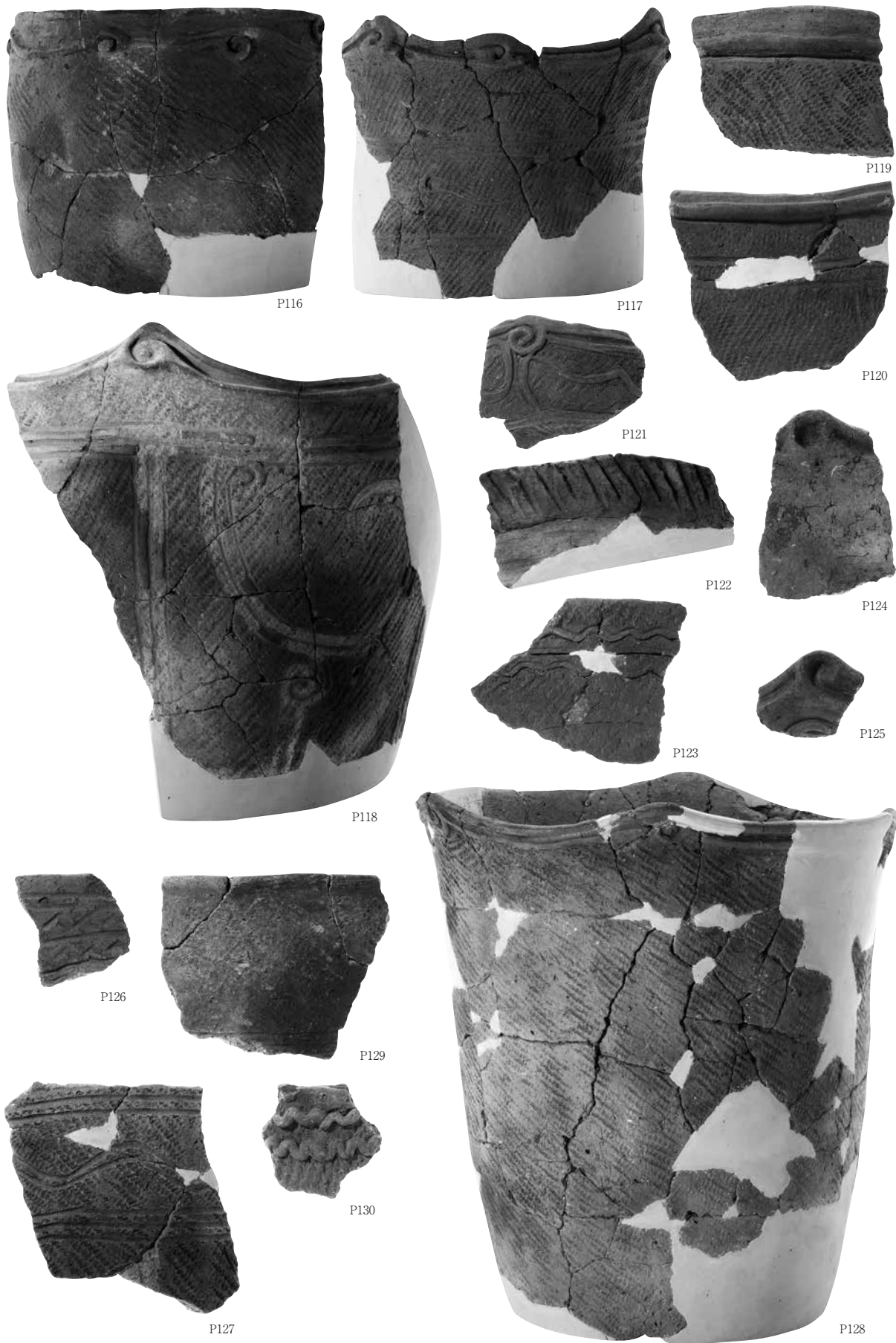


P111



P114

写真図版 65 縄文～弥生土器 (11)



写真図版 66 縄文～弥生土器 (12)



P131



P132



P133



P134



P135



P136

写真図版 67 縄文～弥生土器 (13)



写真図版 68 縄文～弥生土器 (14)



P145



P146



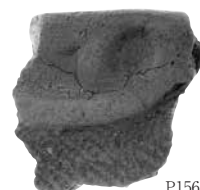
P150



P151



P154



P156



P152



P153



P161



P157



P155



P158



P164



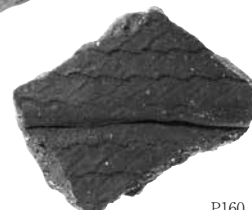
P162



P163

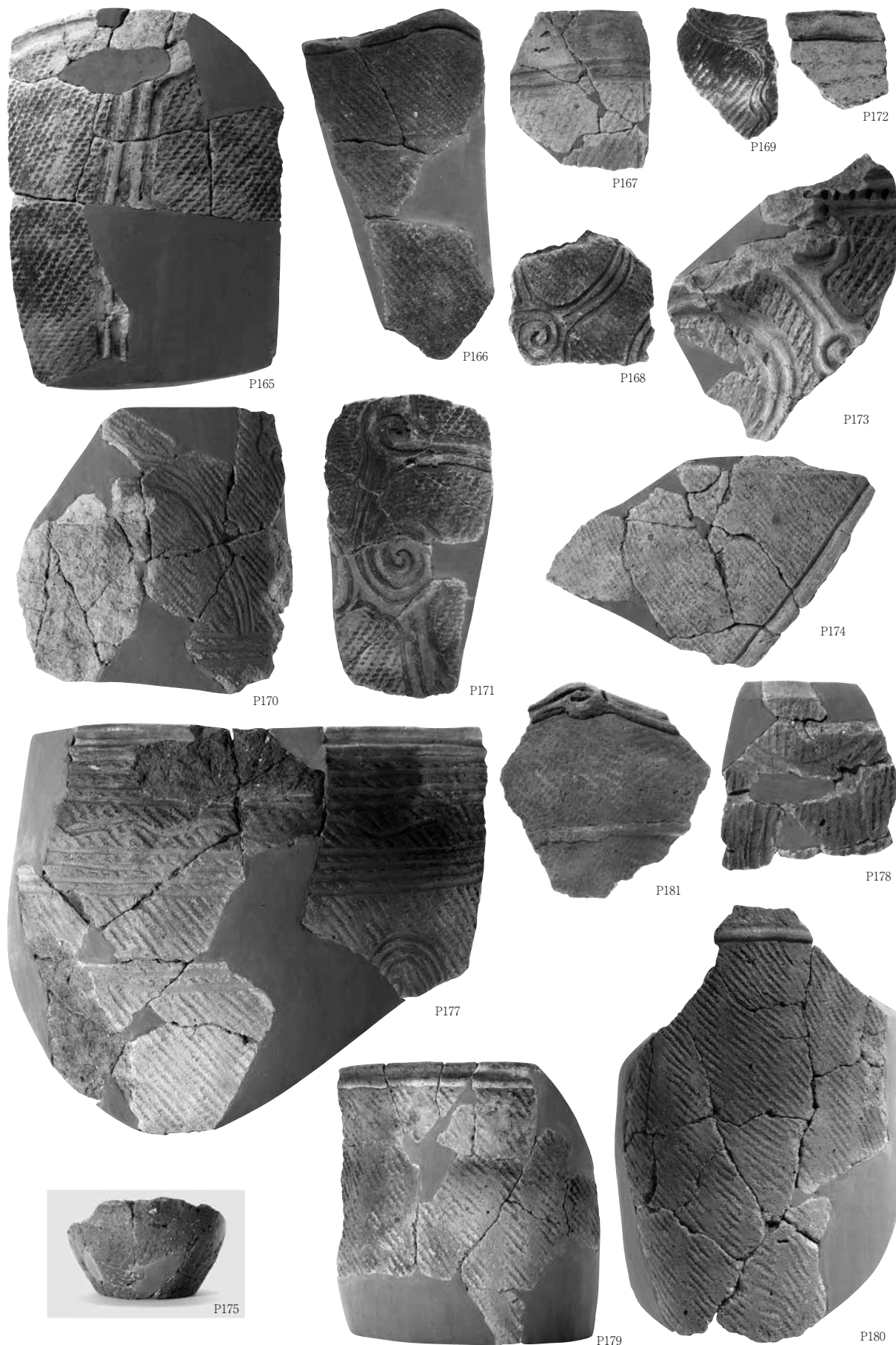


P159

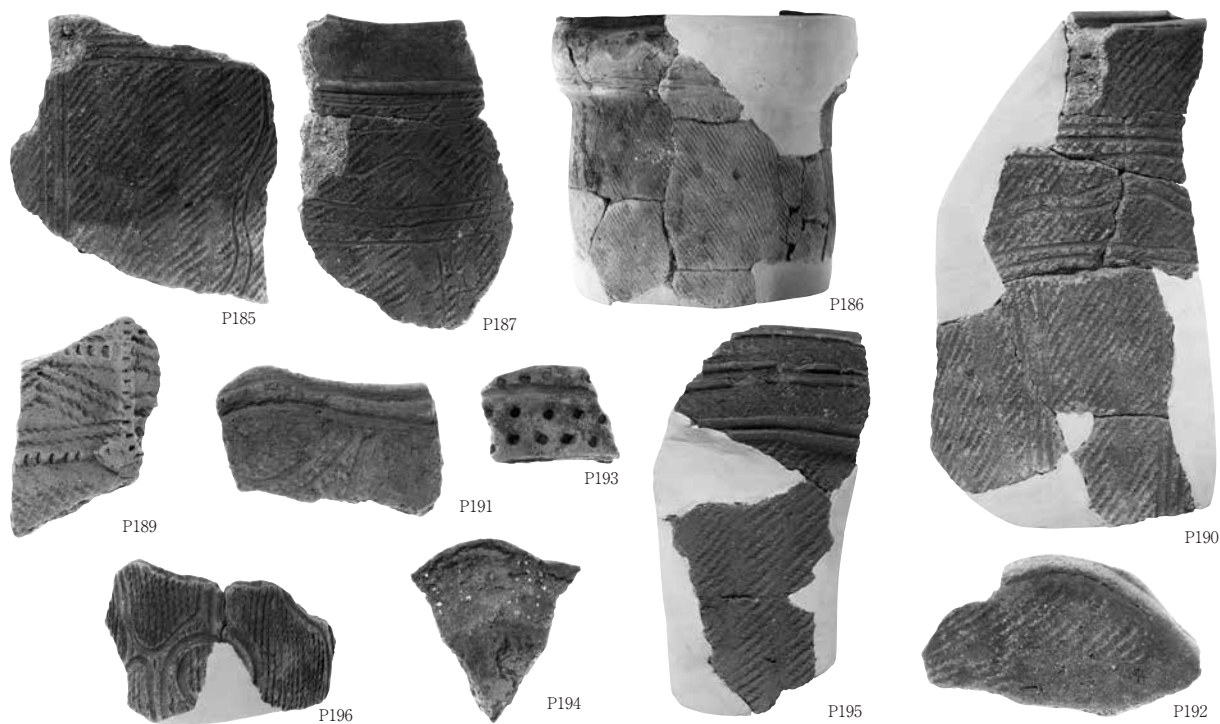


P160

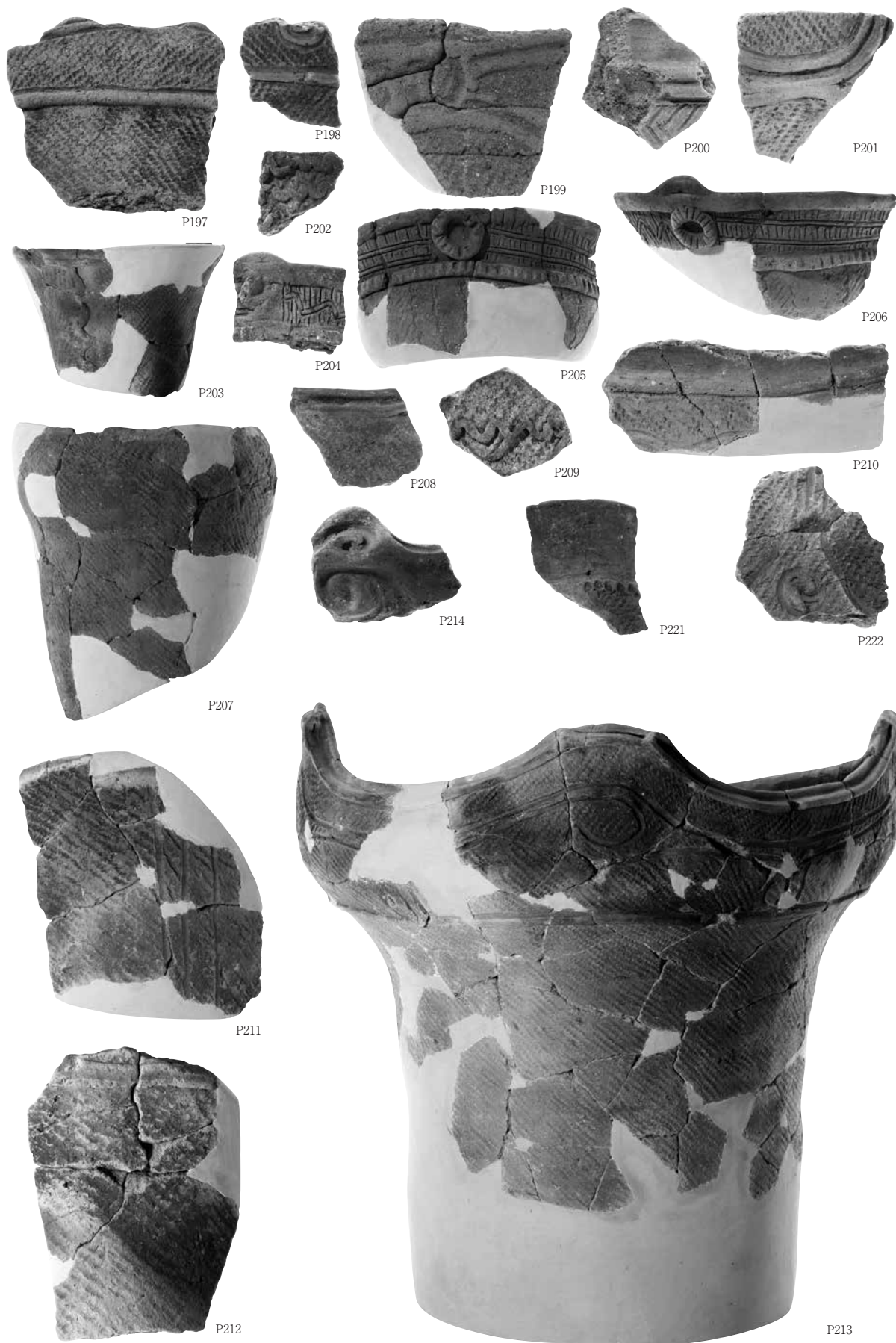
写真図版 69 縄文～弥生土器 (15)



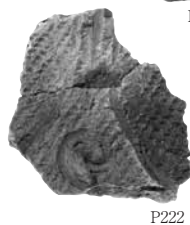
写真図版 70 縄文～弥生土器 (16)



写真図版 71 縄文～弥生土器 (17)



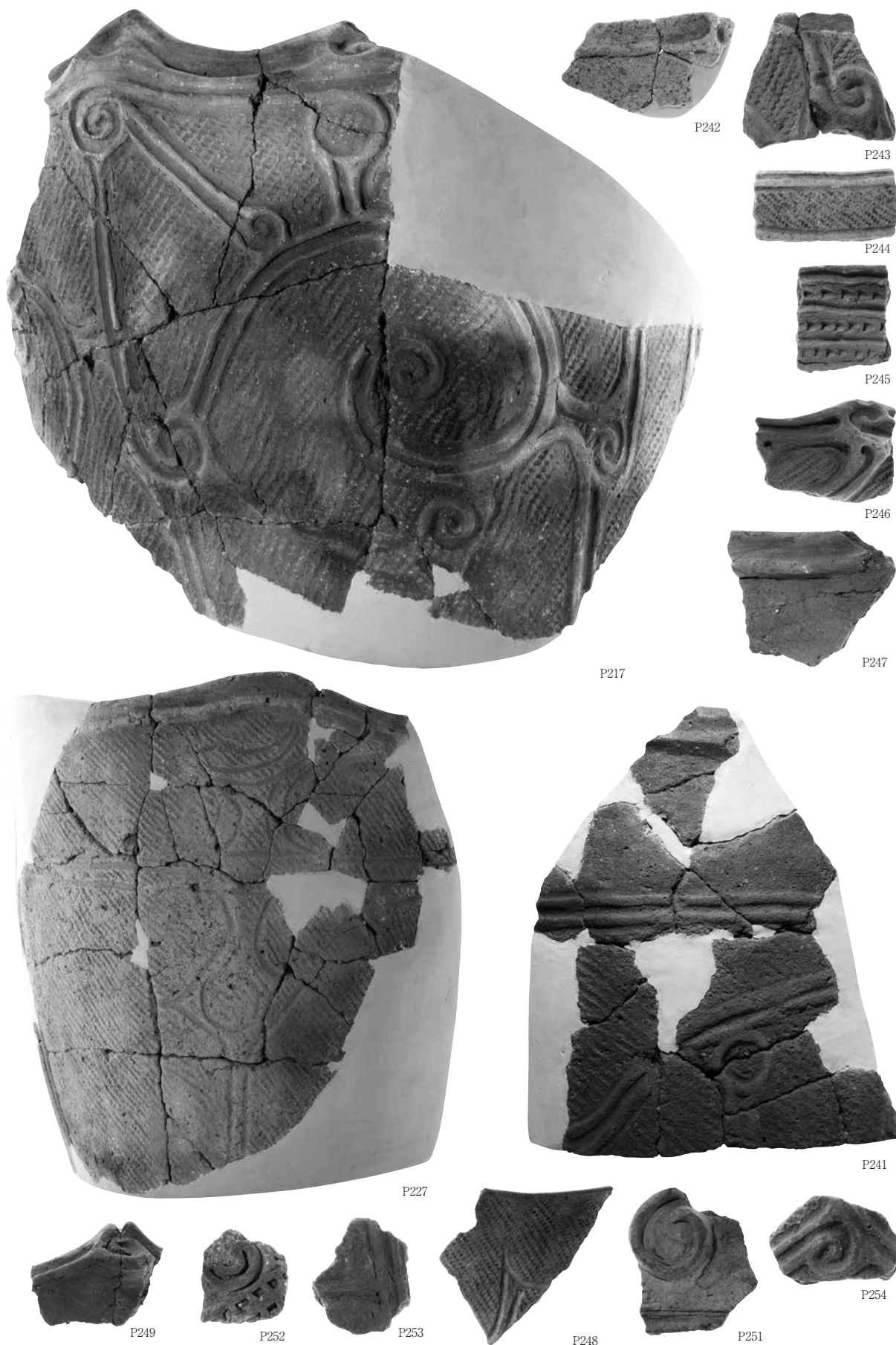
写真図版 72 縄文～弥生土器 (18)



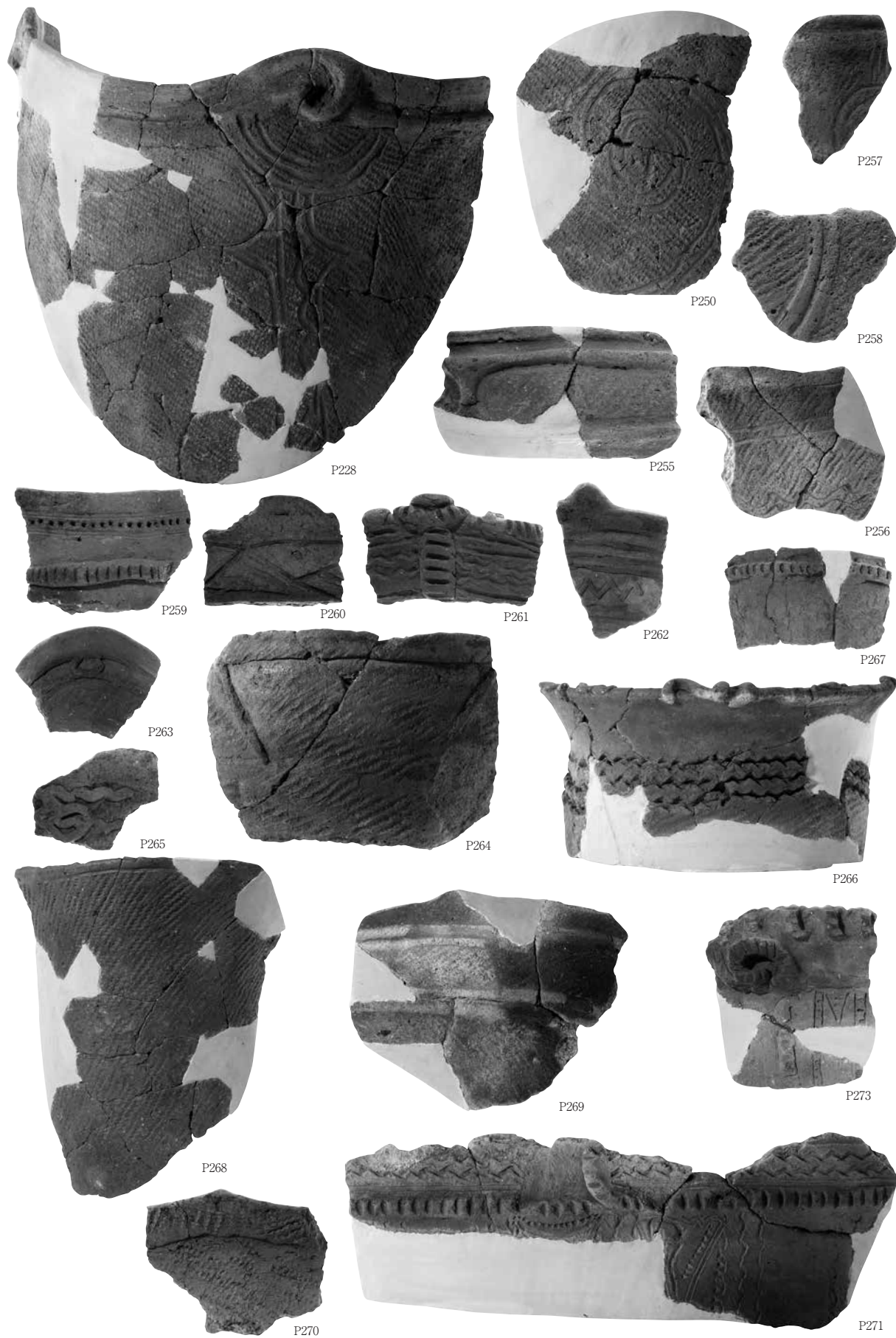
写真図版 73 縄文～弥生土器 (19)



写真図版 74 縄文～弥生土器 (20)



写真図版 75 縄文～弥生土器 (21)



写真図版 76 縄文～弥生土器 (22)



写真図版 77 縄文～弥生土器 (23)



P277



P286



P287



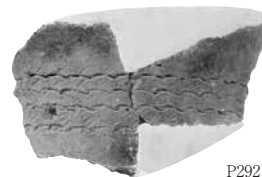
P293



P290



P291



P292



P296



P297



P299



P294



P298



P304



P300

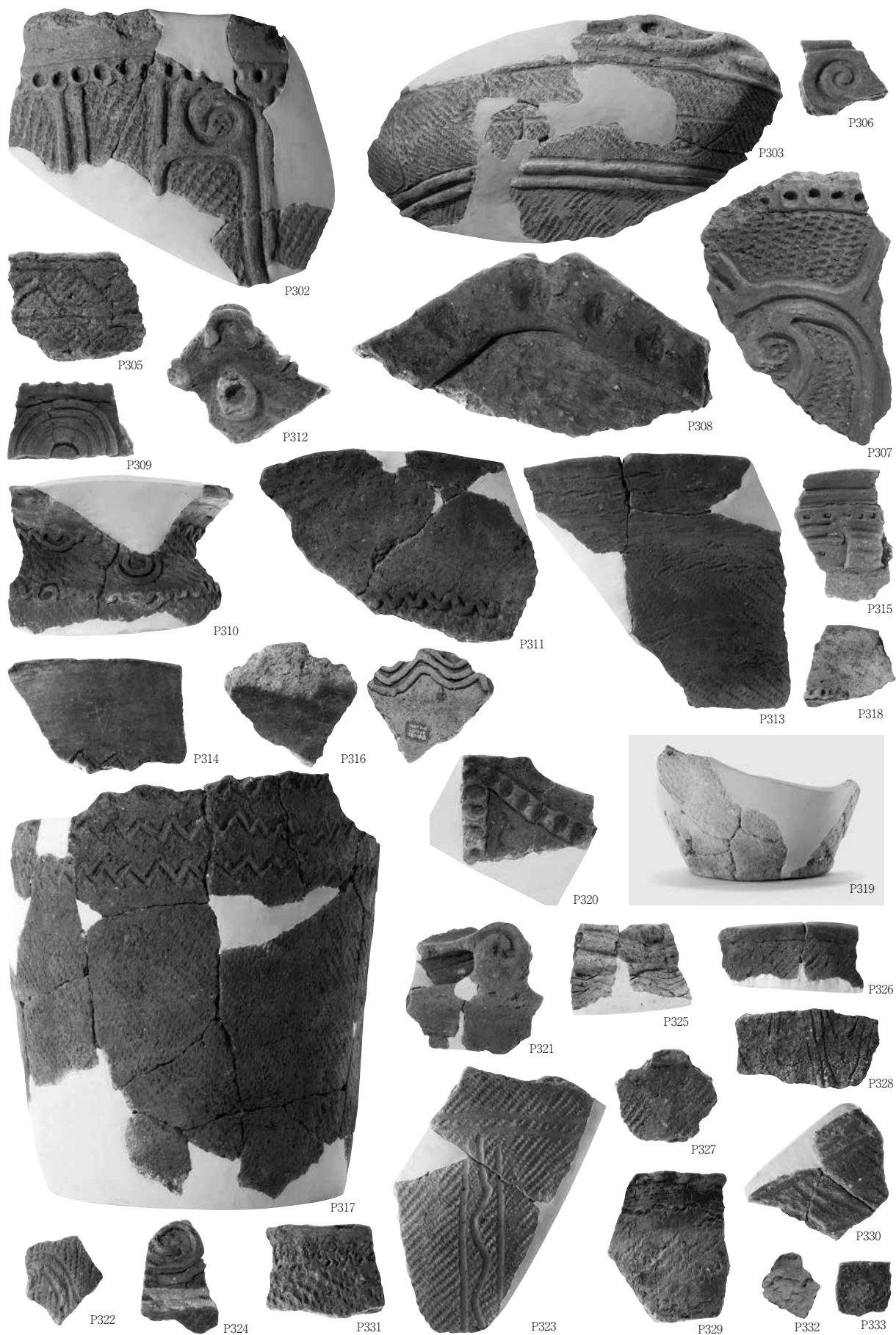


P301



P295

写真図版 78 縄文～弥生土器 (24)



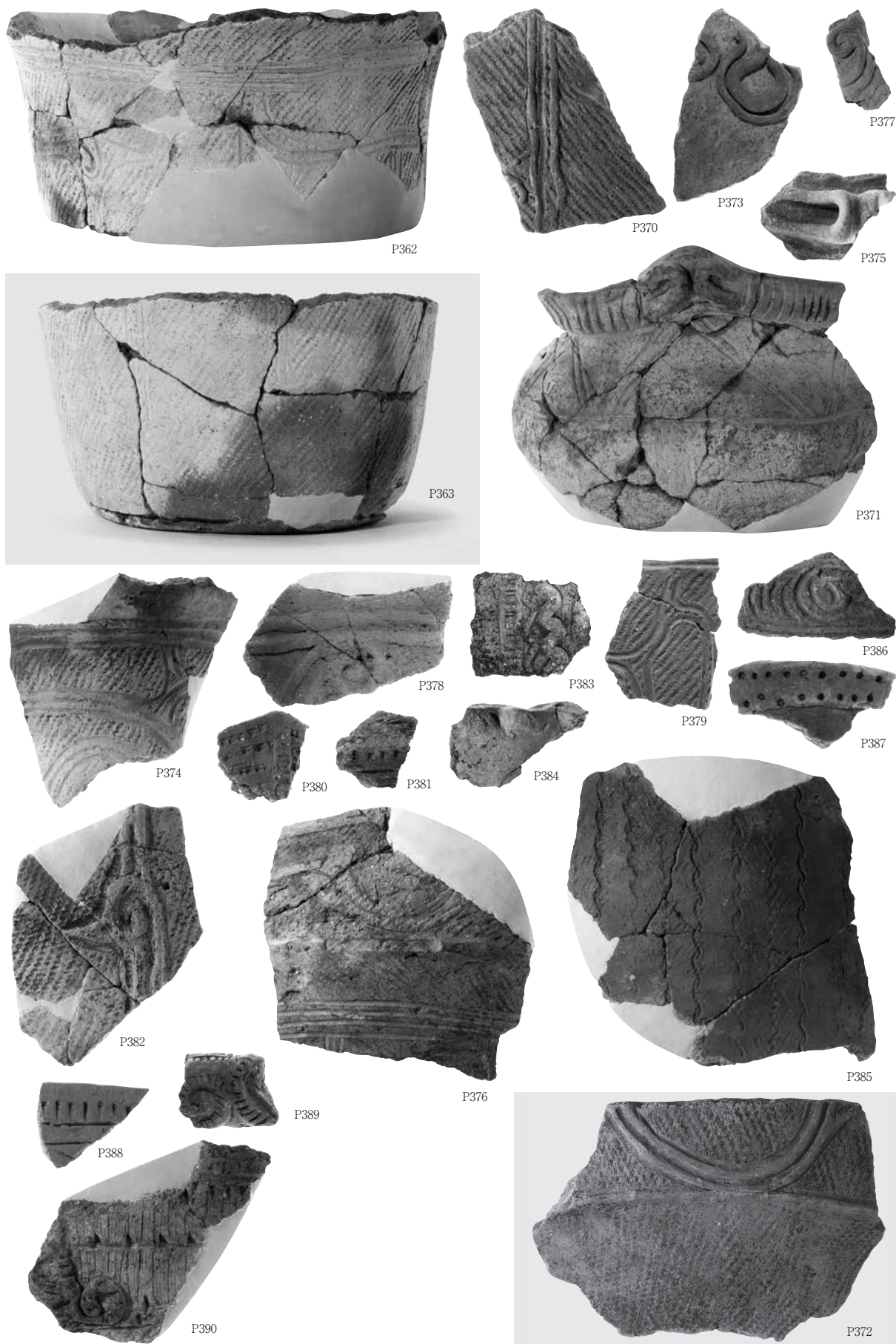
写真図版 79 縄文～弥生土器 (25)



写真図版 80 縄文～弥生土器 (26)



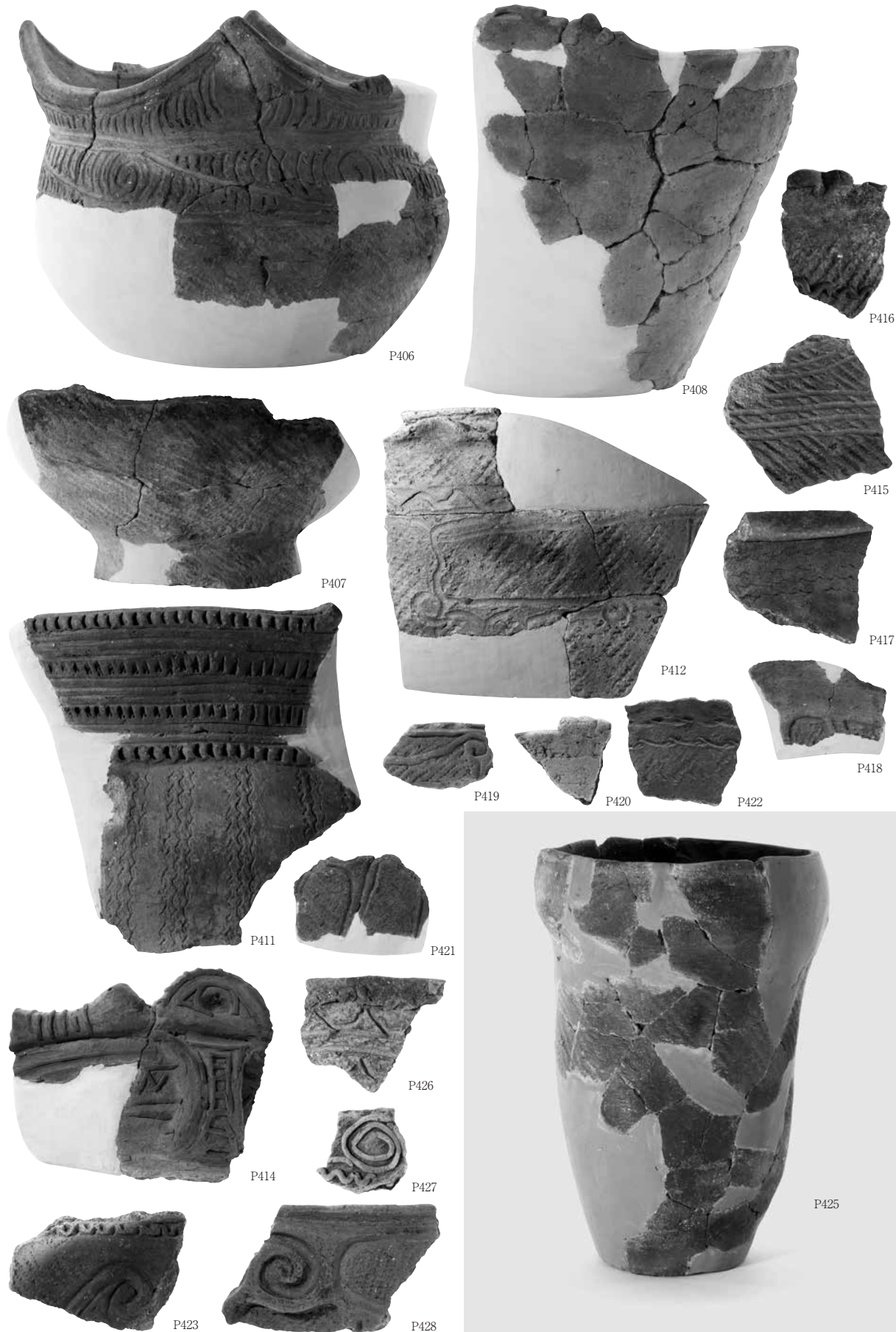
写真図版 81 縄文～弥生土器 (27)



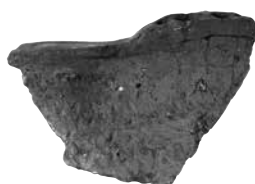
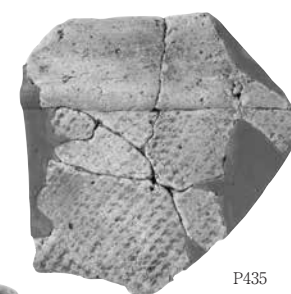
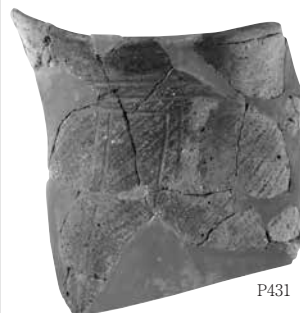
写真図版 82 縄文～弥生土器 (28)



写真図版 83 縄文～弥生土器 (29)



写真図版 84 縄文～弥生土器 (30)



写真図版 85 縄文～弥生土器 (31)



写真図版 86 縄文～弥生土器 (32)



写真図版 87 縄文～弥生土器 (33)



写真図版 88 縄文～弥生土器 (34)



写真図版 89 縄文～弥生土器 (35)



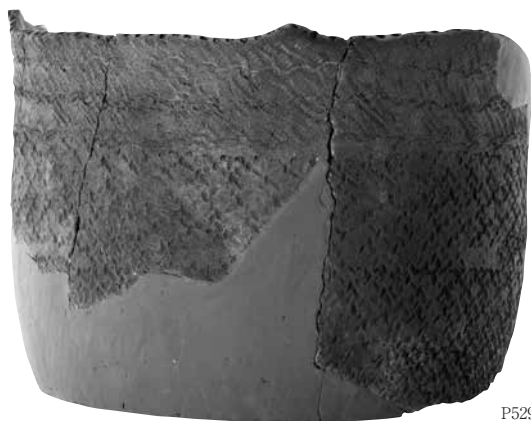
写真図版 90 縄文～弥生土器 (36)



写真図版 91 縄文～弥生土器 (37)



P528



P529



P537



P538



P539



P541



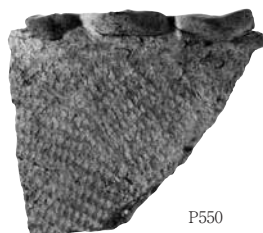
P542



P545



P543



P550



P546



P547

写真図版 92 縄文～弥生土器 (38)



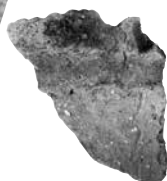
写真図版 93 縄文～弥生土器 (39)



P561



P565



P567



P577



P574



P571



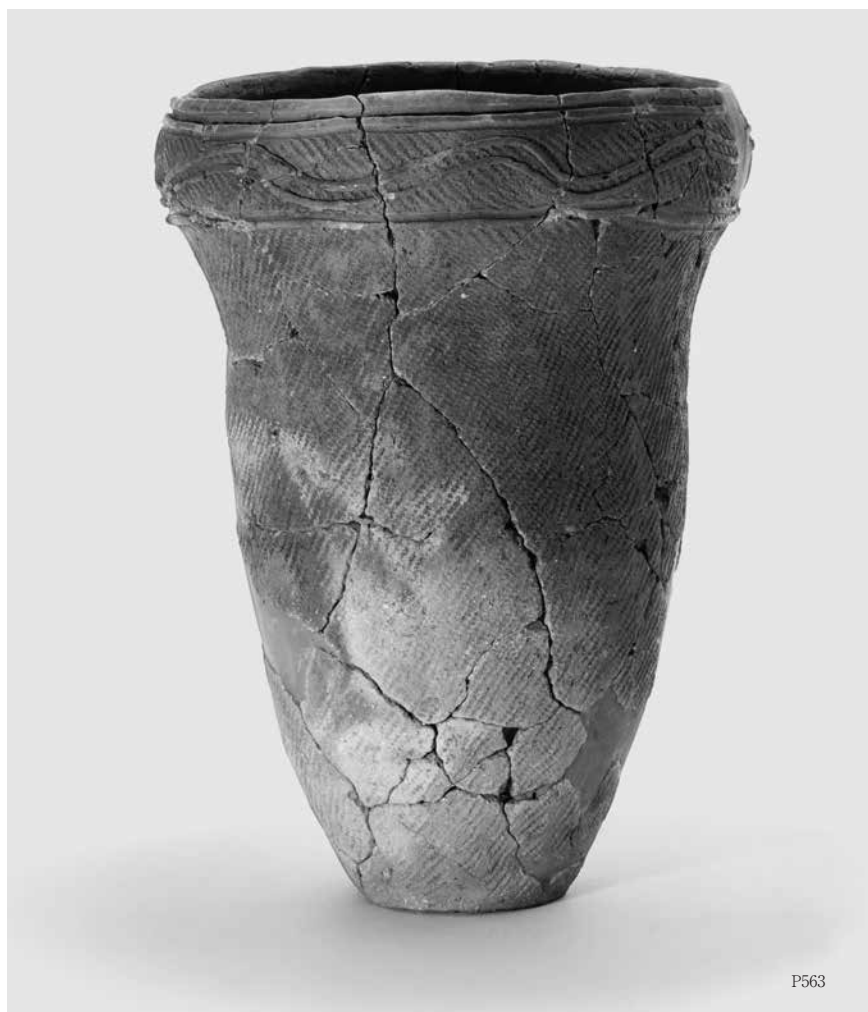
P576



P579

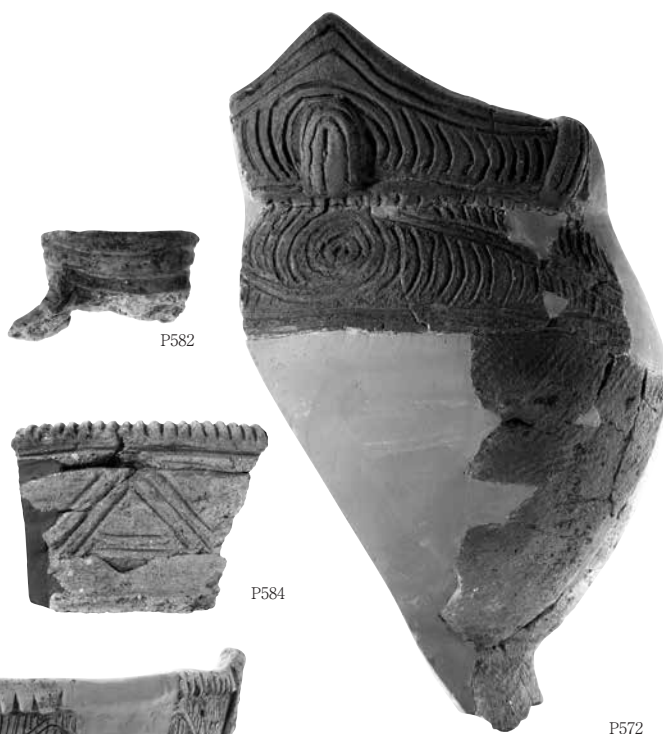


P580

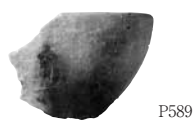


P563

写真図版 94 縄文～弥生土器 (40)



写真図版 95 縄文～弥生土器 (41)



写真図版 96 縄文～弥生土器 (42) 土師器・須恵器 (1)



写真図版 97 土師器・須恵器 (2)

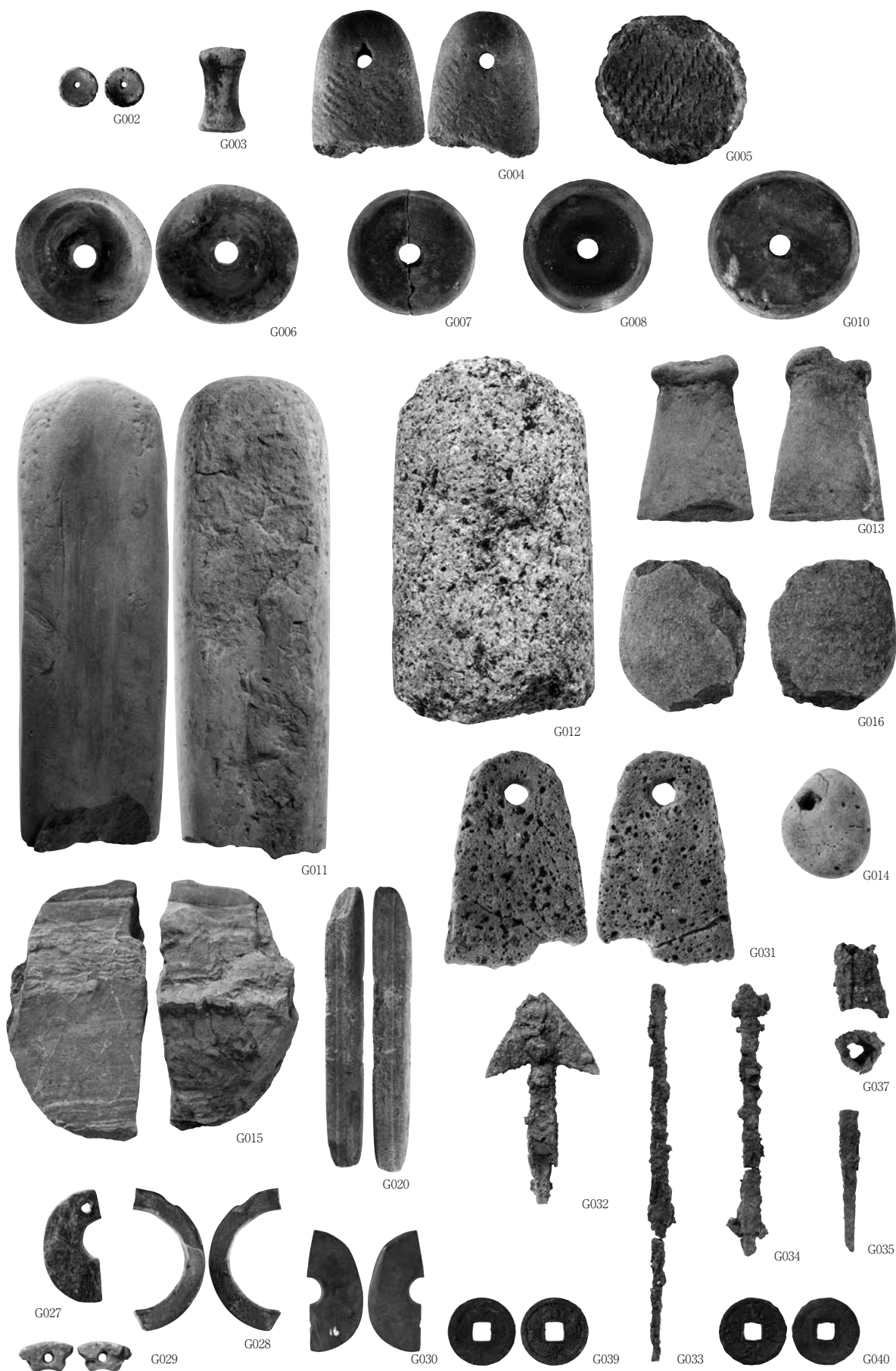


写真図版 98 土師器・須恵器 (3)

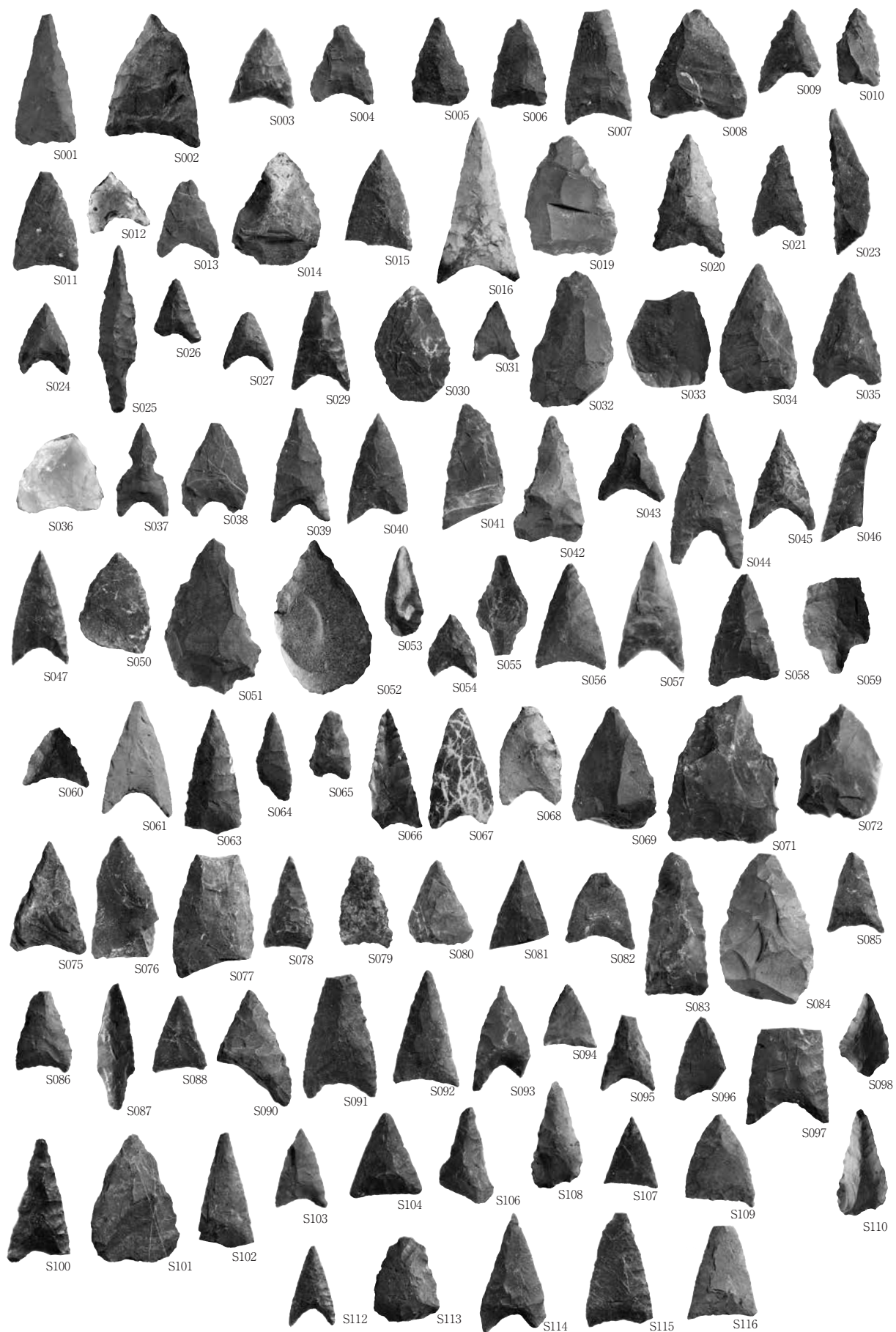




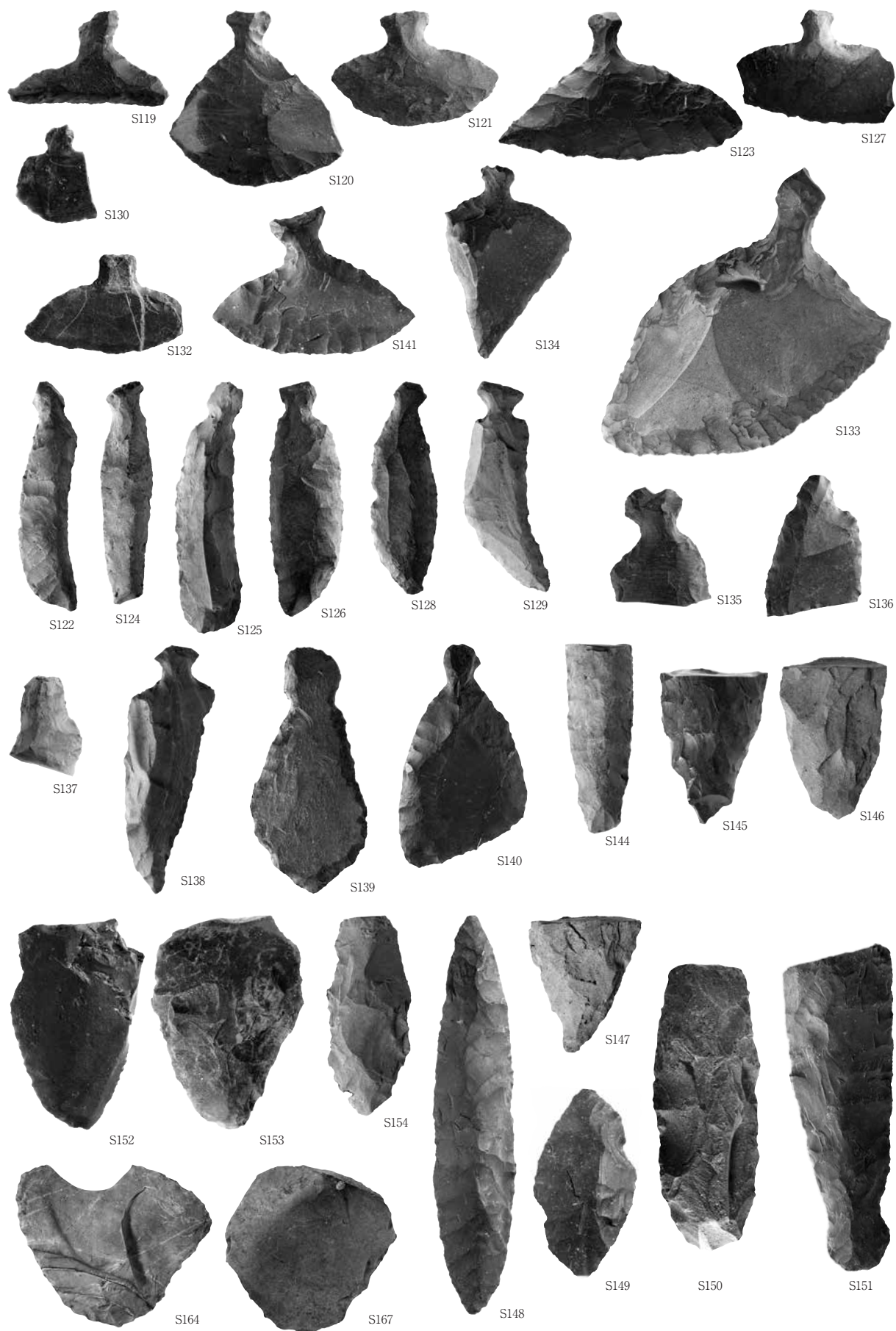
写真図版 100 土師器・須恵器 (5)



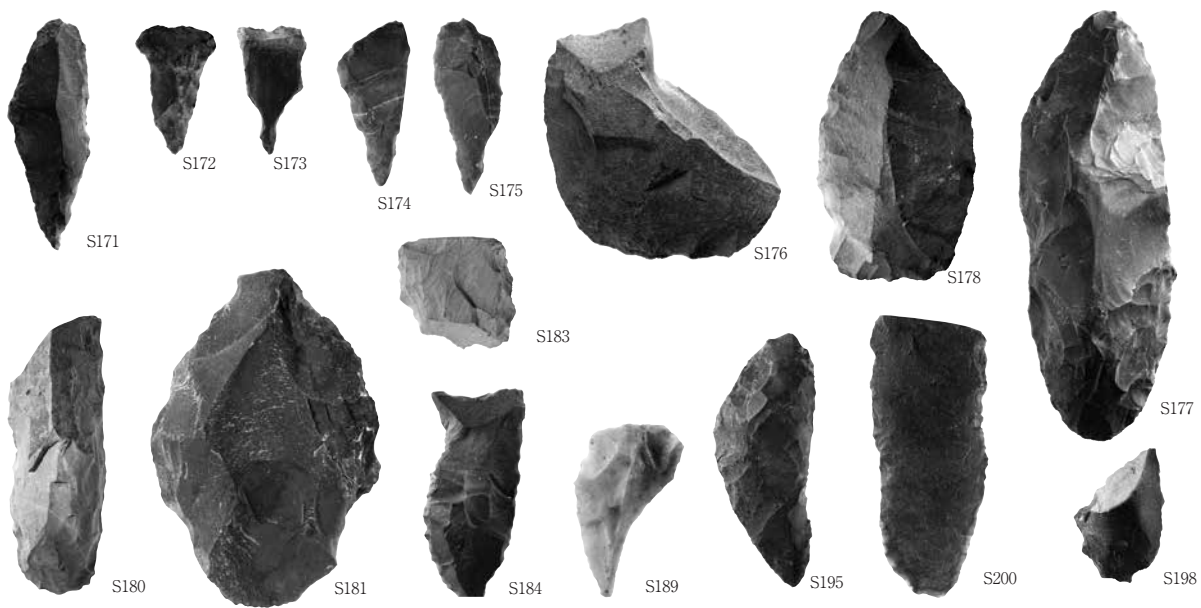
写真図版 101 土製品、石製品、鉄製品、錢貨



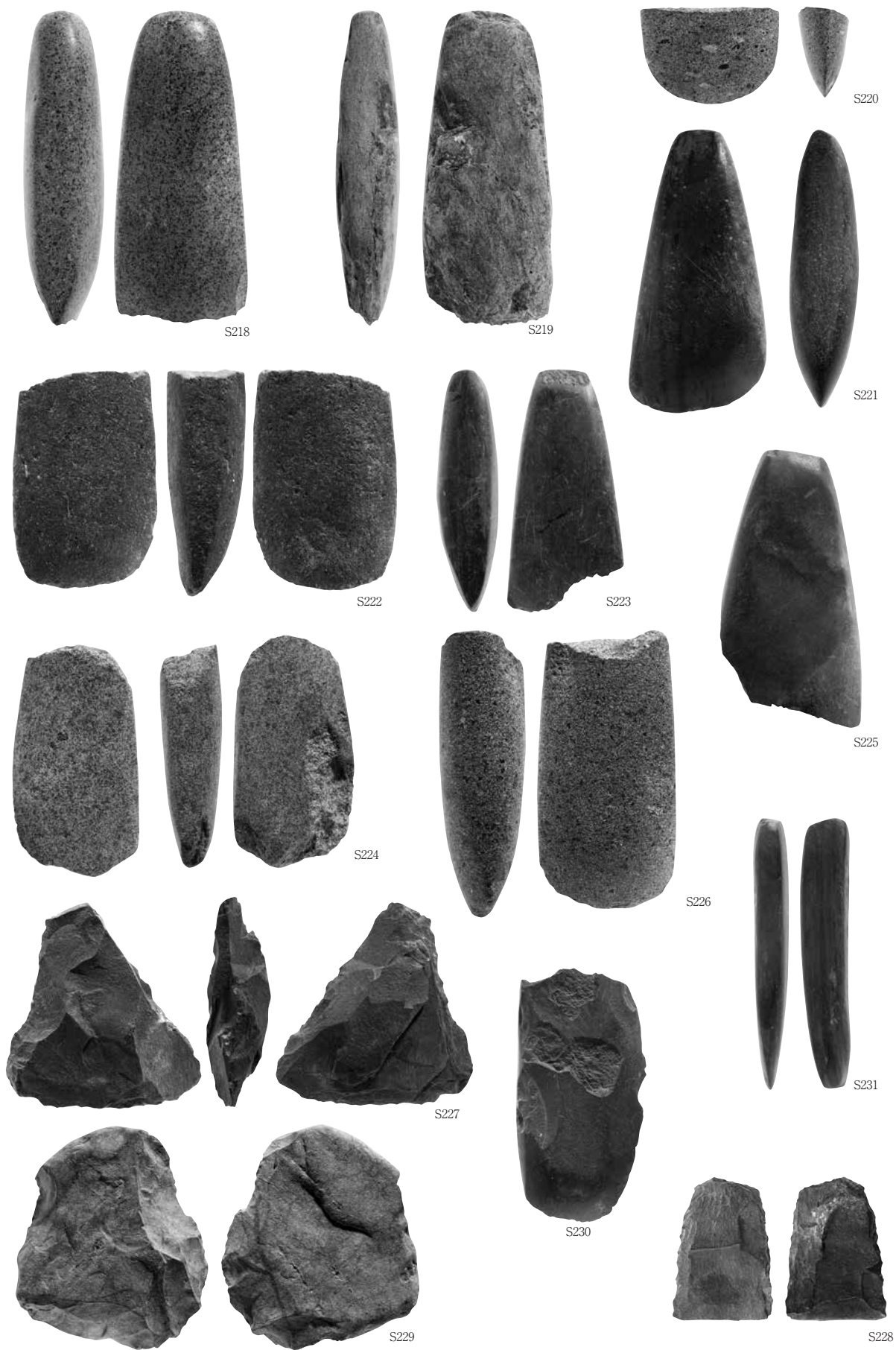
写真図版 102 石器 (1)



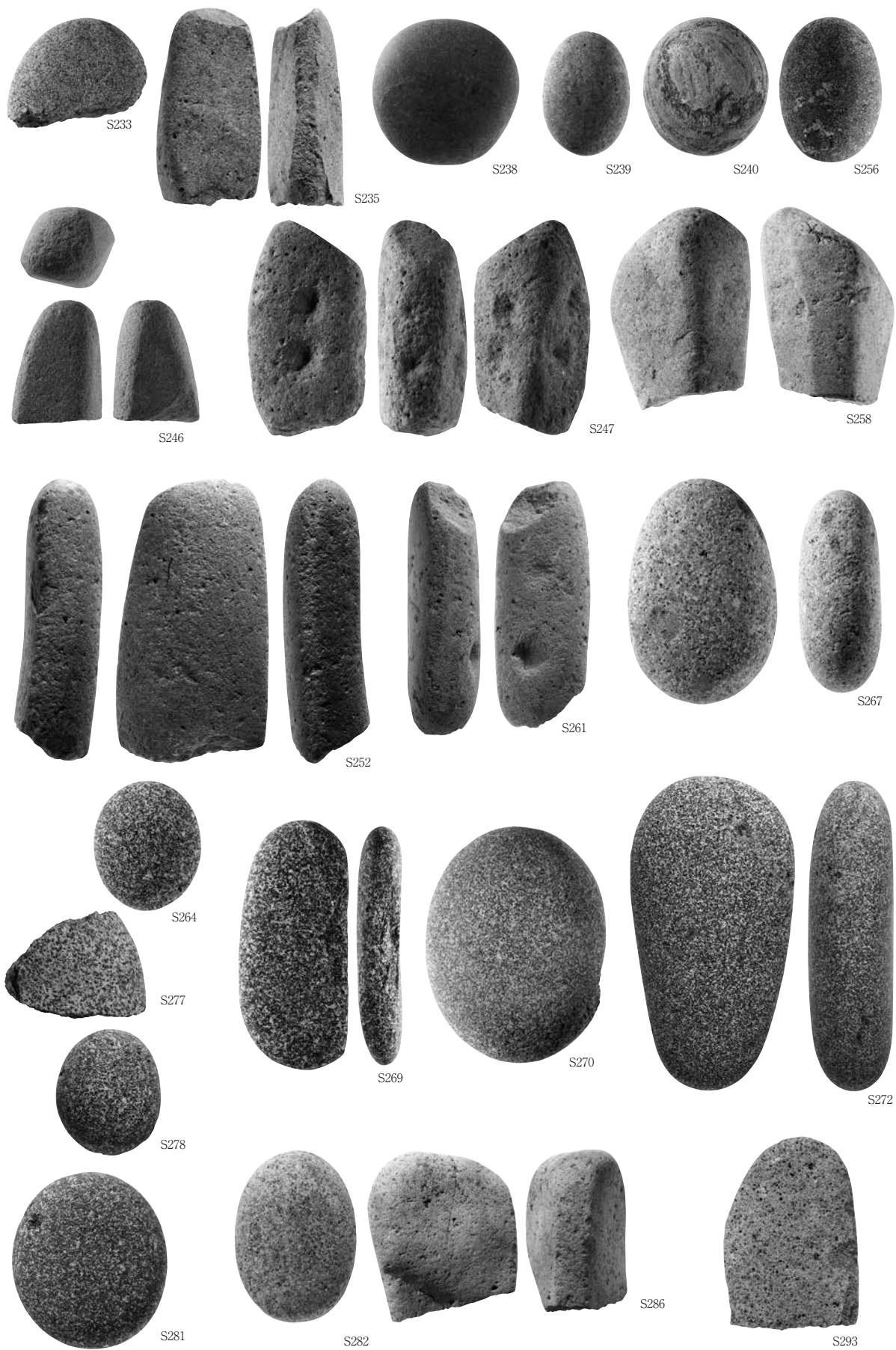
写真図版 103 石器 (2)



写真図版 104 石器 (3)



写真図版 105 石器 (4)



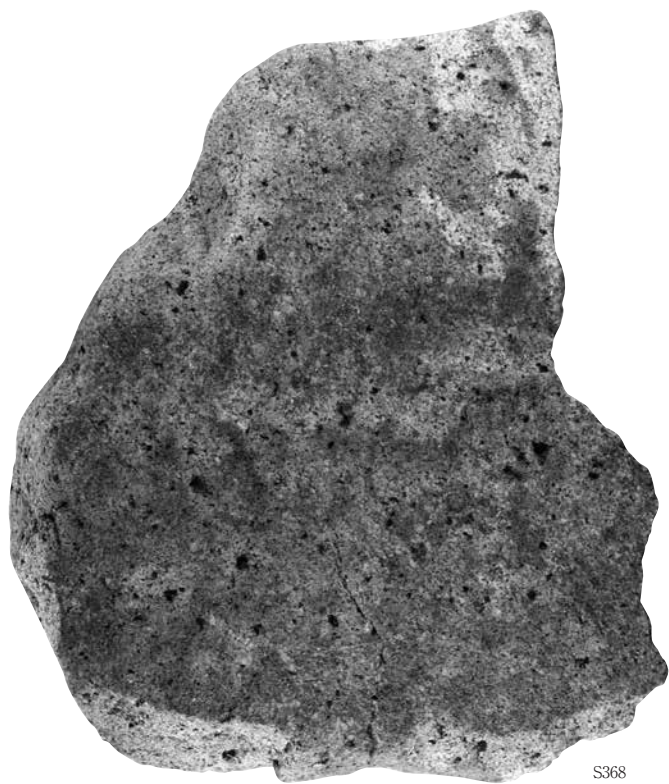
写真図版 106 石器 (5)



写真図版 107 石器 (6)

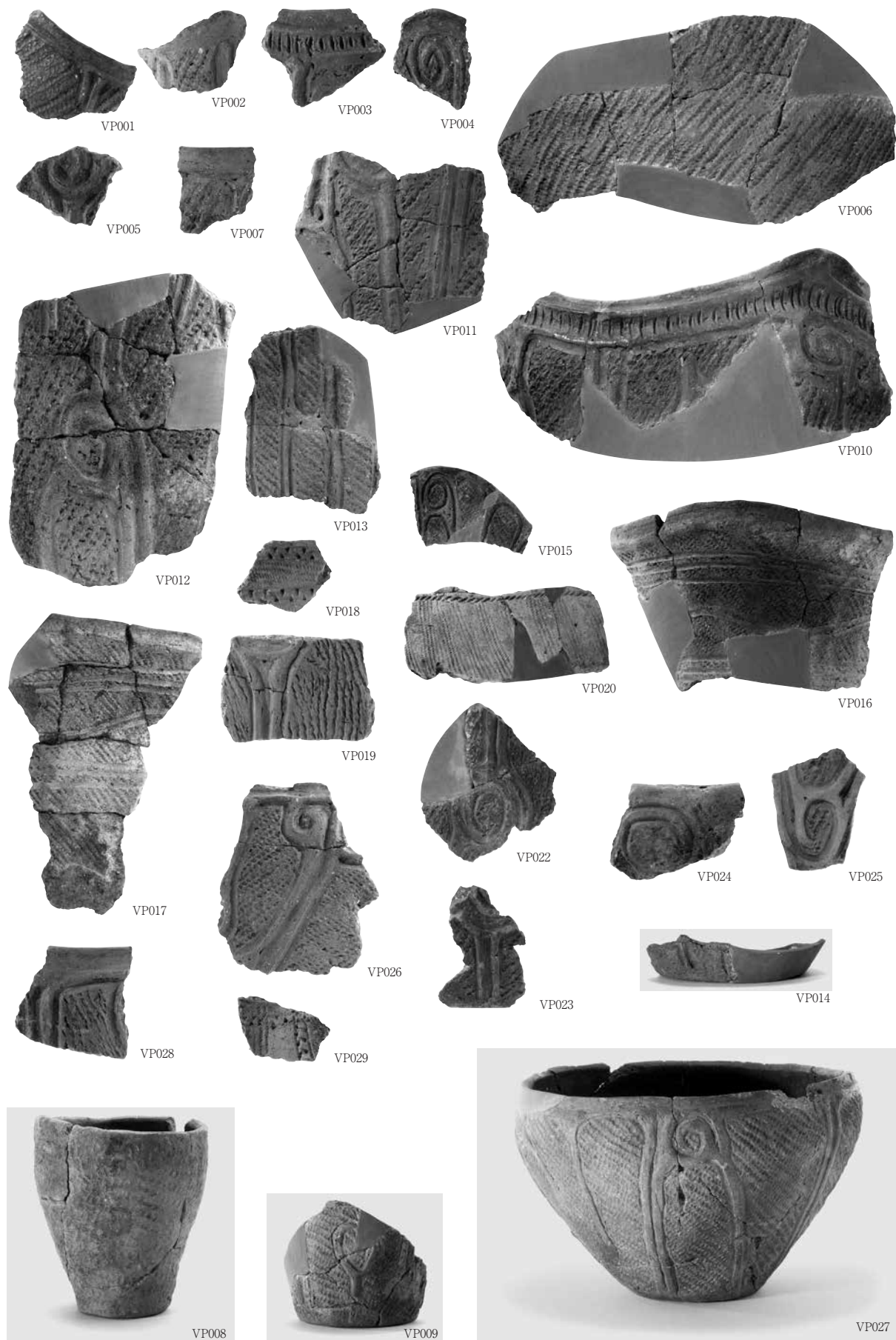


S367

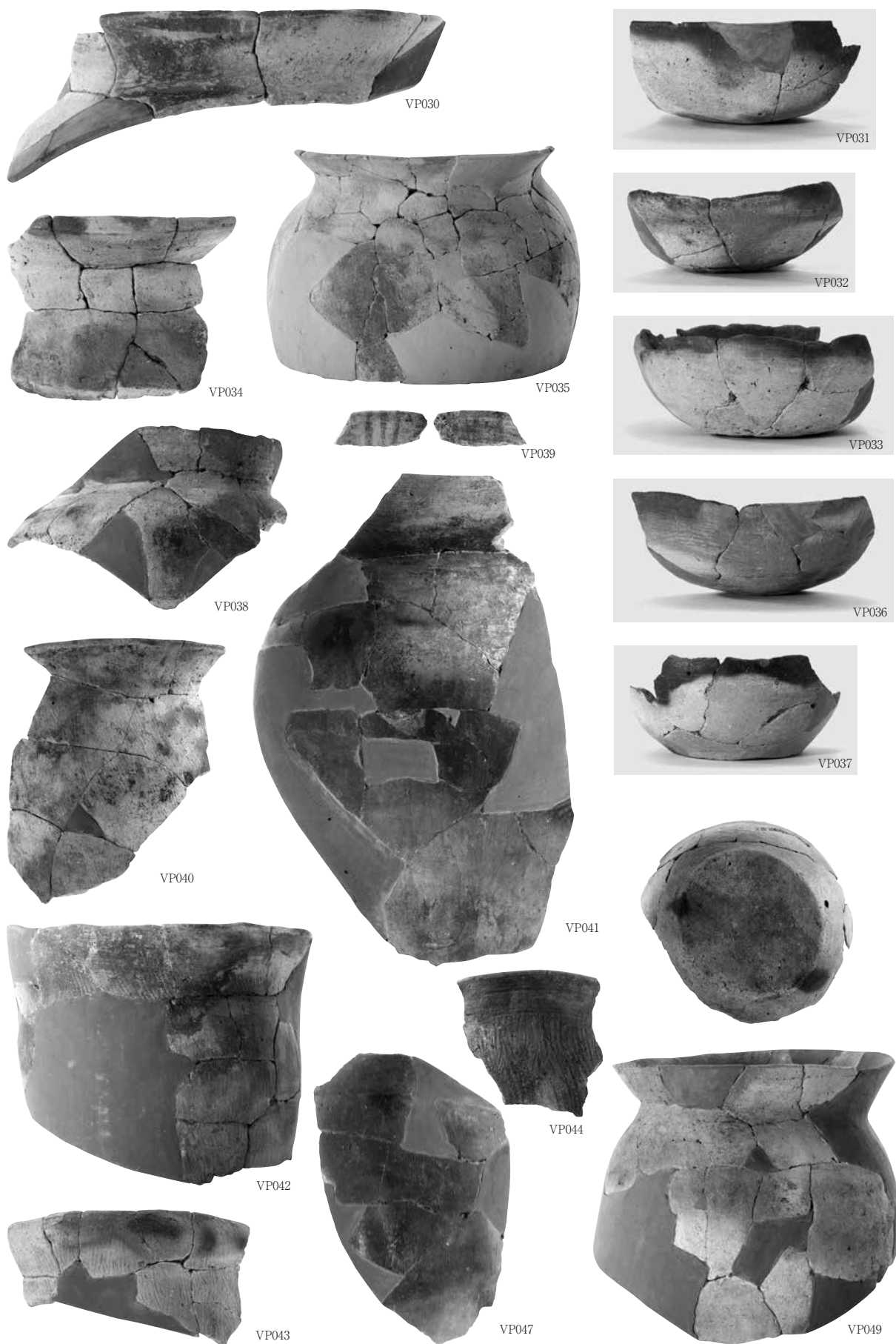


S368

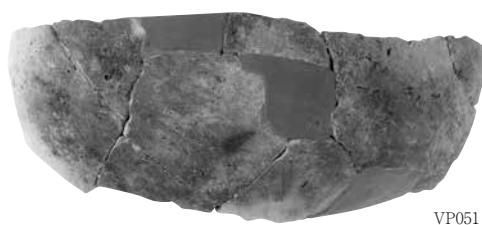
写真図版 108 石器 (7)

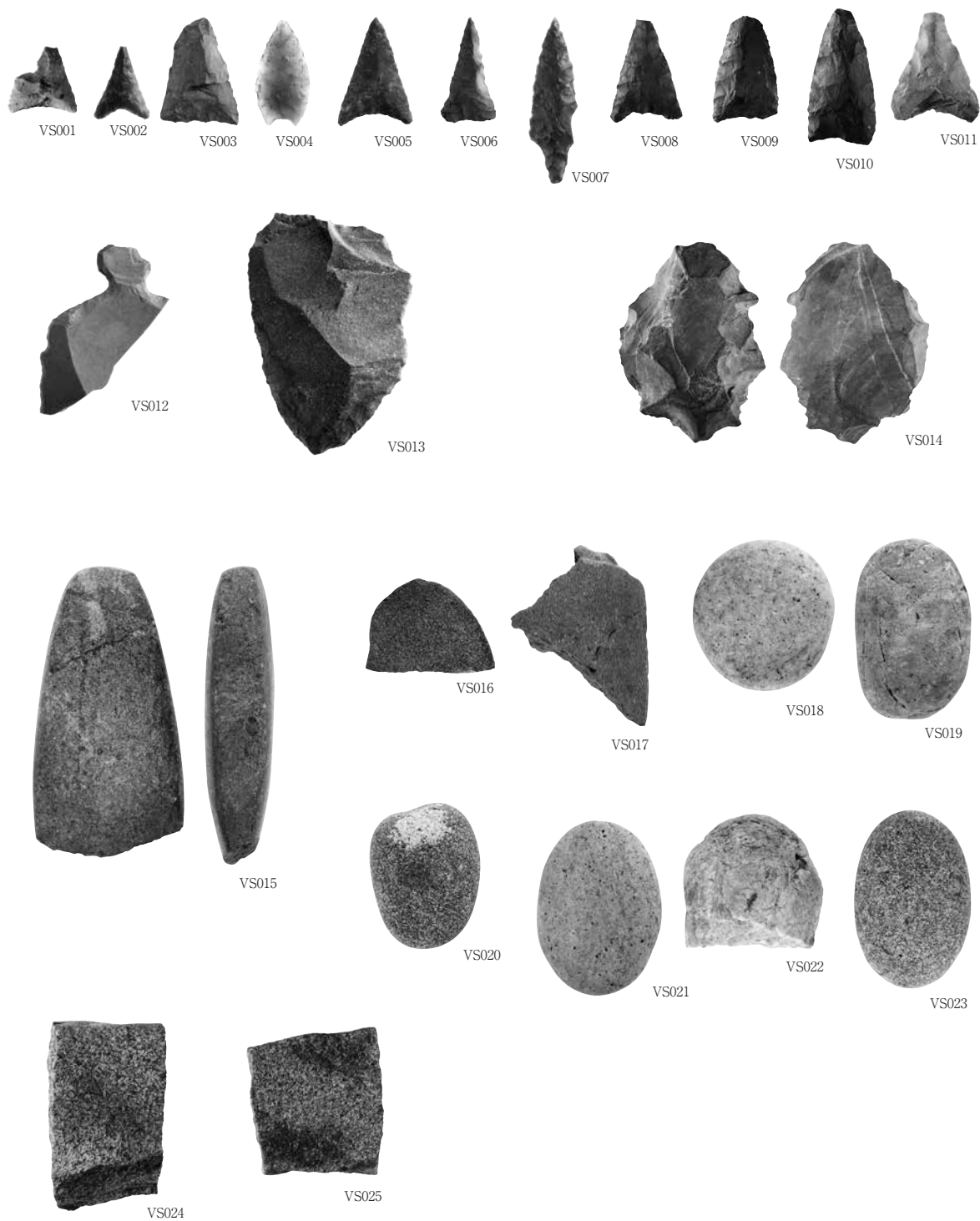


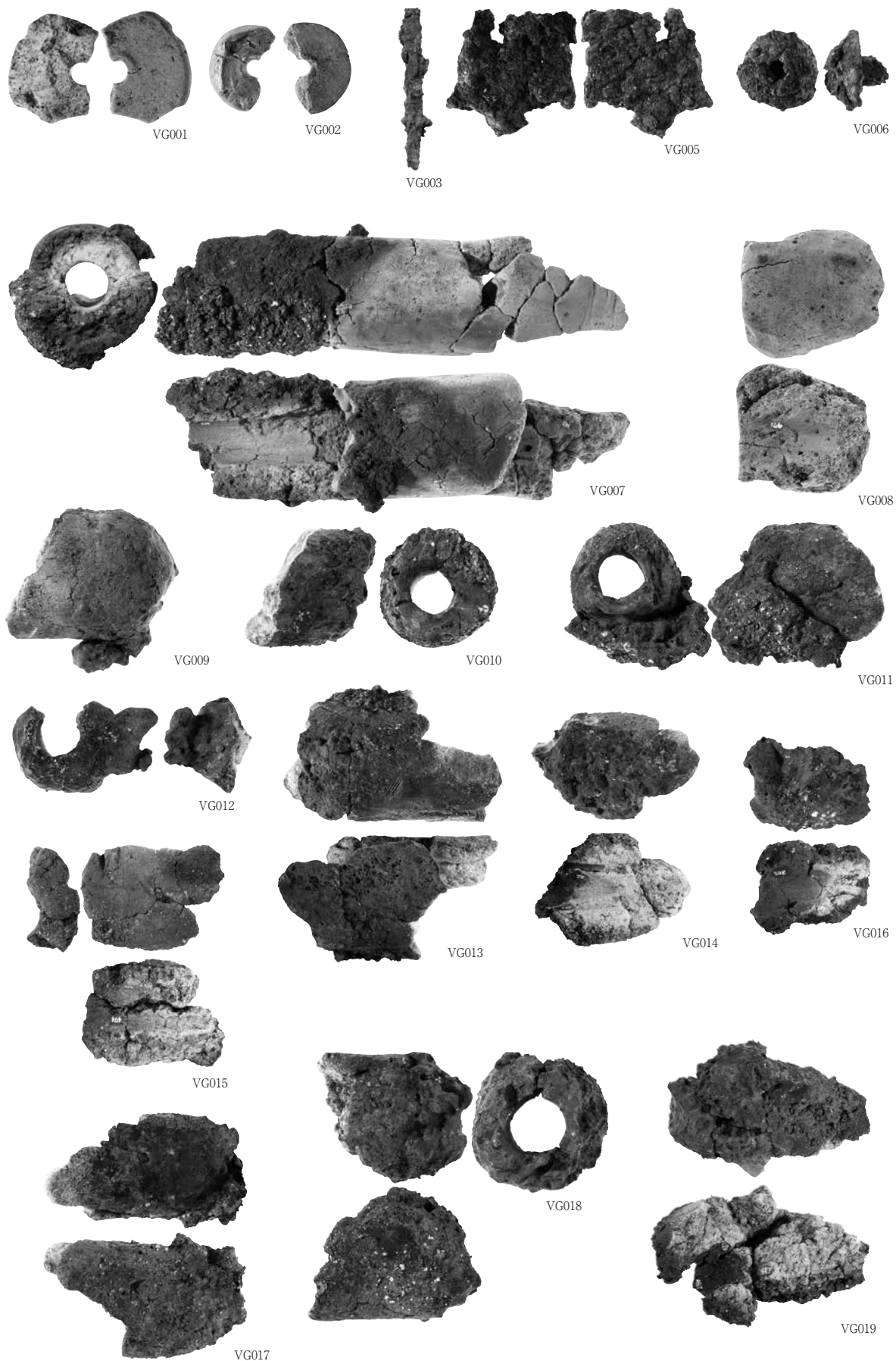
写真図版 109 縄文土器



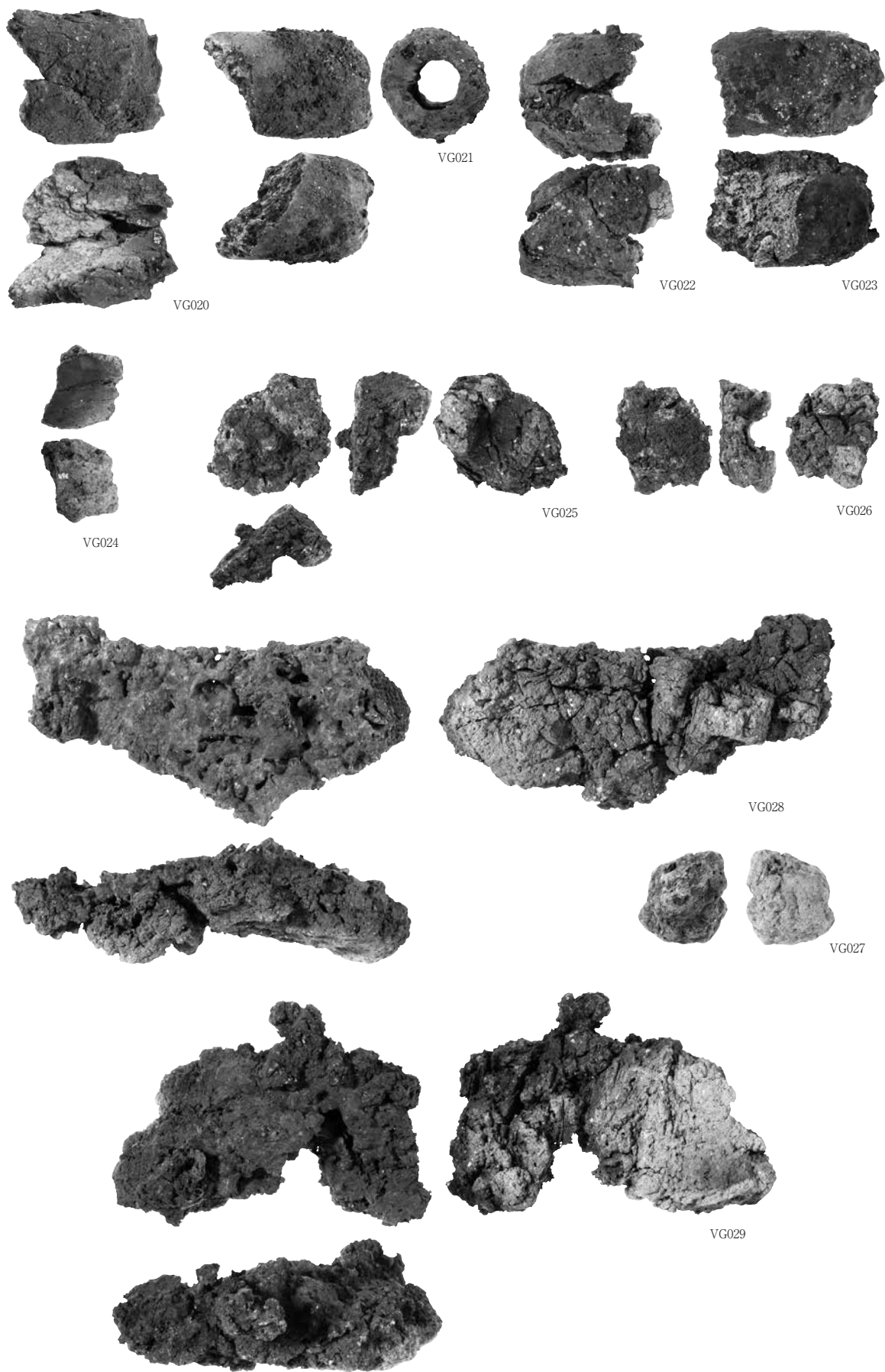
写真図版 110 土師器 (1)







写真図版 113 土製品、鉄製品、羽口 (1)



写真図版 114 羽口(2)、炉壁

報告書抄録

ふりがな	まぎど2いせき・まぎど5いせきはくつちょうさほうこくしよ							
書名	間木戸Ⅱ遺跡・間木戸Ⅴ遺跡発掘調査報告書							
副書名	三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第640集							
編著者名	佐藤あゆみ・北村忠昭・佐藤 剛・金子昭彦・阿部勝則							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2015年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まぎどいせき 間木戸Ⅱ遺跡	いわてけんしもへいぐん 岩手県下閉伊郡 やまだまちだいちわり 山田町第3地割 56-1ほか	03482	LG94-0007	39度 28分 57秒	141度 57分 13秒	2013.04.09 ～ 2013.07.31	1,510㎡	三陸沿岸道路 建設事業
まぎどいせき 間木戸Ⅴ遺跡	いわてけんしもへいぐん 岩手県下閉伊郡 やまだまちだいちわり 山田町第3地割 56-2ほか	03482	LG84-2098	39度 29分 04秒	141度 57分 16秒	2013.04.09 ～ 2013.06.30	1,200㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
間木戸Ⅱ遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴建物跡25棟、 土坑13基、焼土遺 構10基	縄文土器、円盤状土器片、石鎌、尖 頭器、石匙、石篋、石錐、スクレイ パー、石斧、台石、敲磨器、砥石、 石棒、玦状耳飾りほか				
	集落跡	古代	竪穴建物跡5棟、焼 土遺構1基	土師器、須恵器、紡錘車、鉄鏃、鉄 鐸ほか				
間木戸Ⅴ遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴建物跡2棟、焼 土遺構1基、埋設土 器1基	縄文土器、石鎌、石匙、スクレイパー、 石斧、台石ほか				
	集落跡・生産	古代	竪穴建物跡1棟、土 坑3基、焼土遺構3 基、工房跡2棟、製 鉄炉5基、炭置き場 跡2基、柱穴2個、 廃滓場1箇所	土師器、須恵器、紡錘車、鉄鏃、麻 手刀座金、刀片、羽口、炉壁、鉄滓 ほか				
	不明	時代不明	土坑2基、不明遺構 1基、柱穴6個					
要約	遺跡は、山田町の間木戸川に解析された谷部東側に位置する。間木戸Ⅱ遺跡では、縄文時代前期中葉から 中期後葉（中期中葉が中心）の集落遺跡であること、古代7世紀末～8世紀前半の集落であることが確認 された。間木戸Ⅴ遺跡では、縄文時代中期中葉の集落であること、古代8世紀の集落・生産遺跡であるこ とが確認された。縄文時代については、間木戸Ⅱ遺跡では、重複する竪穴建物跡と遺物が多量に出土し、 間木戸Ⅱ遺跡の東側や南側へ集落が続くと考えられる。古代は、鉄滓の散布状況や立地を鑑み鉄生産関連 遺構が間木戸Ⅴ遺跡の北東側へ続く可能性がある。また、それらに関係していた人々の集落は間木戸Ⅱ遺 跡の東側に展開されると考えられる。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 640 集

間木戸Ⅱ遺跡・間木戸Ⅴ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

印 刷 平成 27 年 3 月 17 日

発 行 平成 27 年 3 月 20 日

編 集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地

電話 (019)638-9001

発 行 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

〒 027-0029 岩手県宮古市藤の川 4 番 1 号

電話 (0193) 71-1741

(公財) 岩手県文化振興事業団

〒 020-0023 岩手県盛岡市内丸 13 番 1 号

電話 (019)654-2235

印 刷 株式会社五六堂印刷

〒 020-0021 岩手県盛岡市中央通 3-16-15

電話 (019)654-5610

©(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2015